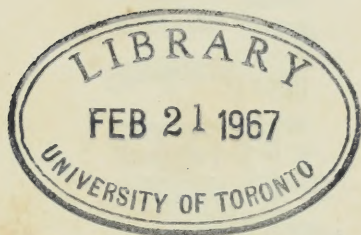
國文註釋全書

文學博士　本居豐穎
文學博士　木村正辭
文學博士　井上頼圀
校訂

國文註釋全書

東京
國學院大學出版部刊行

目錄

緒言

一紫式部日記解　田中大秀翁ノ門人足立稻直ノ著ニシテ五卷ナリ、著者ノ稿本ノマヽ傳ハリタレバ未ダ世ニ流布セザル珍本ニシテ、紫式部日記ノ解釋本中最モ詳カナルモノナリ、本書ハ先年帝國大學ニ於テ著者ノ稿本ヲ借リテ寫サシメラレタルモノヲ底本トセリ、

一土佐日記考證　岸本由豆流ノ著上下二卷ニ分テリ、土佐日記ヲ詳解シ、卷首ニ提要、諸抄論、本傳等ヲ揭ゲ、加フルニ內外諸書ニ徵セル考證ヲ頭書ナセリ、自序ニ父ノ遺稿を文化六年ヨリ校合シテ始メテ成就セル由見エタリ、本書ハ井上賴圀博士所藏ノ刊本ヲ以テ校合セリ、

一蜻蛉日記解環　坂徵ノ著ニシテ三十六卷ナリ、契沖ノ校本ニ基キテ其ノ及バザル所ヲ補删シ、註解ヲ加ヘタルモノ、卷首ヲ上下二卷ニ分チ本書ニ關スル諸事ヲ詳論シ年立等ヲ揭ゲタリ、天明五年乙巳正月ノ出版ニテ刊本ナレトモ

至ツテ尠ク世ニ珍重セラル、本書ハ東京帝國圖書館本ヲ底本トシ、井上博士所藏宣昭書入本ヲ以テ校合セリ、

一長明方丈記抄　加藤盤齋ノ著ニシテ方丈記泗說又盤齋抄トモ云フ、最初ニ題號幷ニ作者ノ事ヲ述べ、文ノ節段ヲ分チテ評論詳解シタルモノ、明暦四年ノ刊本タル所謂泗說トハ異ニシテ寫本ノマ、黑川家ニ傳ハレルモノナリ、本書ハ之ヲ底本トセリ、

一方丈記流水抄　槇島昭武ノ著ニシテ卷首ニ作者ノ系圖、本書ノ由來等ヲ述べ、詳細ナル頭注ヲ施シタルモノニテ享保四年己亥ノ出版ナリ、本書ハ三木五百枝氏所藏ノ刊本ヲ底本トシ本文ヲ省畧セリ、

一方丈記泗說　方丈記ヲ注シテ頭首ニ揭示セリ、明歷四年戊戌ノ刊行ナリ、加藤盤齋ノ著ナリト云ヘド、田邊勝哉氏所藏ノ刊本ニヨルニ著者ノ署名ナシ、按ズルニ山岡元隣著方丈記頭書ト同一ノモノニアラザルカ、編者未ダ方丈記頭書ト云フモノヲ知ラザレバ强チニ云ヒガタシ、識者ノ敎ヲ俟ツ、本書ハ本

文ヲ省キ頭書ノミヲ掲載セリ、

明治四十二年七月

編者識ス

紫式部日記解

全

足立稲直君學藝傳

足立稲直は通稱を孫三郎と云ひ足立忠右衛門の第二子なり兄織右衛門出てゝ大池平八の後を嗣きし父は之を愛して地役八（飛騨土着の吏を斯く唱へしなり）たらしめんとの意に出つる者なりといふ蓋し足立の家はもと金森長近の家臣なりしか金森封を出羽の上山に移さるゝに及ひ辭して此地に留りしに元祿年中幕府命して飛騨地役人となしゝも後故ありて歸農し世々製麹を業とせり忠右衛門に至り其長子織右衛門の才を愛し之をして世に立ち名を成さしめんとの意にて特に地役人大池の家を繼かしめ二子稲直をして己の家業に當らしめたるなり稲直少くして田中大秀翁に從ひて國學歌學を學ひしか資性英敏にして學識衆に擢て筆を執れは千言立ち處に成り短歌の如きは所謂咳唾珠を成すものに似たり其著す所の紫式部日記解五冊は蓋二十歳頃に作りたる者なるへけれと考據精確にして引證其當を得たるは此道に深き老成人をして三舎を避けしむるに足れり後に山崎弘泰此書を閲し附記して云く

稲直いと若かりけるより我師荏野翁の教子となりて古學歌學をいそしみ學ひけるか漸歌もよまるゝはかりのほと師のいはれけるやう物學ふ人は先物の註釋せんの志をおこすへし師（本居鈴屋大人）もしかいはれたりとすゝめられて此日記の解に思ひつけるになむさるは源氏の物語に深く心を入て此業の御許をいたくたふとめる心より此書の解には思ひよりけるなめりかくて病かちになんありけれは書に餘り深く心をよすめるはよからしなといふ人もありけれと本性好めることなれは病なからもよみ又少しおこたりさまなるときは夜をふかしてもつとめて書みるわさはおこたらすなむありけるか此解四たひ書改めて其あくる年文政四辛巳の秋七月十五日の夜齢は二十餘三にてむなしくなりにけるこそ惜く悲しきわさにはありけれかくて弘泰猶よくたゝしいふかしきふし／＼は師にも論ひつゝさためて板にもゑらせはやと思ひ立けれと公私のつとめいとますくなくていたつらに年へにけるほと尾張人清水何かしこの日記の釋といふ書をあらはしつるを見るにいとめてたくさはいへ稲直は年いと若くてものしつれは誤つらんと思ふ事なきにしもあ

らぬか中には又よろしと思ふことゝ又證に引たるか
委しきなと打捨むも惜くてこたひ師翁とこの二書
（解と釋と）をよみくらへそのとき師のいはれしことも書
加へてかくは物しつるになむ

天保六年初冬　　友人　山崎弘泰

此文に據りて此書の價値如何を知るへく又稻直か若
學せる一部の小傳として見るも可なり其歌集を鞅羅（アフラ）
遠陀（ヲタ）集と題し自ら部類を分ちて書き記せるものにて
佐々木弘綱水間大洲これを評定する事頗る詳密なり
二書とも今猶家に珍藏せり其他に隨筆さくる嚢一卷
あり大秀翁殊に稻直を愛して出藍の才となしゝは其
應酬唱和せる歌に徵するも其一斑を見るへきなり

稻直ぬしのもとへ　　大秀

山里は住つきぬれは住うきを
住えさせてよ君かめくみに

返し　　稻直

君か爲炭はおこしつ山里も
あたゝかならは住よかるへし

是かよろこひに

あふきつゝ住こそなれめ山里に
思ひおこせし君かめくみを

又稻直は人となり洒々落々として世俗に羈絆せらる
ゝ所なく自ら脫俗出塵の姿を具へしは大秀翁の書簡
によりて其面目を了すへきなり

貴書忝奉拜見候然者今日俄（茶ヶ狂言の類）に御さしかゝり
の由四番盆と承候間御尤に奉存候隨分面白くはて
に被成候樣奉祈候明夕も盆引續候はゝ御延引可被
下候盆今日限に候はゝ明夕御宅へ向參上可仕奉存
候

ヲドレヤ〳〵　ヲドルガボンヂヤ　マケナヨ〳〵
アスノヨハナイゾ　ヲドレヤ〳〵

八月十五日　　荏翁

足立君御許

尙々今夕御陣屋御物見へ見物に出度候間御俄御
藝つくし拜見仕度奉存樂しみ罷在候頓首

然るに天之に年を假さす僅に二十三歲なる有爲の俊
才を奪ひ去りしは斯道の爲に誠に愛惜すへきなり其
沒後十三年の靈祭を營みしとき大秀翁左の長歌をよ
みて追悼の意を表せられしを見るも師弟の交情如何
に厚かりしかを知るに足れり

慕足立稻直歌　天保四癸巳十三回追悼

春へさく山の櫻も花にほひにほふ眞盛過てこそちるといへさにつらふ木々の黄葉も時雨の雨千入にそめて彌照にてりて後こそちるといへ小山田の畦たちのわく子八束穗の稻直のゐこは世人に似てしもあらす高山の心をたかみ上代のてふりたふとみわたのそこいたりをふかみ古言のこゝろしぬはひいそしみて學ひしからにたらし穗の千頴八百かひ秋の田にしなふかことくまなひにはたらひしかとも齡はしいたくもあらねは春山の櫻の花のいまたさかすふくめる木ぬれ秋山の峰の木葉の染ゐへぬ青葉か枝をあらしま風峰ゆ吹落て枝なから打折ことく甘あまりみつちふとしにはかにも過ていにけりゑかなしゑ綾にかなしゑうましゝ父の命は家閑とさため給ひ學にはおやちう我は學わさ教へ傳へて後世に繼ほとこせとたのみつる心たかへはぬゑこ鳥うらなけをりて新玉の月日經につゝ十年餘三年になれとしましたに忘るゝまなく小山田の足立のわくこ八束穗の稻直の我子をしぬふる我は

補　遺

此傳を草し終りたる後に左の三書を山崎弓雄君より寄せられたれは茲に附記して本傳の補遺となす第一は稻直の父忠右衛門か大秀翁に贈りたる書翰なるへく第二は本傳に擧けたる大秀翁と應酬の歌につきて其前か若くは後に贈りたる書簡なるへく第三は稻直か畫ける竹の軸に大秀翁が裏書せんとて足立忠右衛門清助の父子へ問合せられたる書翰なり三書とも父子師弟の間柄如何に濃に且稻直か死したるを如何に悲しみしかを見るへき者なれは特に之を茲に寫し置きぬ

第一

稻直か植おける萩ことしはことに色よく哀をましむたにちらすも本意なけれは送りまいらす御歌を給へかしとねかふ事にて候かしこ

十七日　　足立

香木園大人

第二

さひしき庭にも此頃は住つきぬるとの給ふはまことかされと湯のまて過させ給はんはいとあはれにおしはかり奉る

これたきて湯も茶も飯もきこしめせ
腹ふくれなは仕よかるへし
あやしく奉る物をよろしといふやうにもあらんか
あなかしこ

孫三郎

千種園大人

御許

第三

足立稲直父は百爾翁字孫三郎實名いなほを印納とかけるは反名とて馬飼を宇合妹子を因高とかける例也童なる頃大秀に從ひて筆葉のふえならひに物しける程に古典のむねをもとひ歌をもよみならひけるにしはしかほとにいとよく學ひ得てつひには藍より出て藍よりも濃かるへき色見へつるを文政元戊寅年の冬おもく惱みておこたるひまもありけれと折々おこりて同年辛巳年の七月十五日夜戌刻はかりつひに息たえをはりぬ法謚淨空といふ書は文化九年の秋に物しける江戸八巨勢健冬（字は槇麿）といふに學ひ竹書は勝久寺相常法師にならへり著書三部

紫式部日記解　五冊
池邊雜錄　貳冊
あら小田集　一冊

齡は漸廿三にて身まかりぬれは世に惜まぬ人なかりけり此一軸はことし七月五日三年の追慕の靈祭すとて舍弟貞恭（清助）ぬしかく物せられしになむ

文政六年十二月　　桂野翁大秀

右裏書に可仕候おもて細書にて見つらよからねと略しかたくて如此可仕奉存候清助樣實名御書付可被下候表文裏文ともにまちかひ候事無之歟と御伺申候御勘考被下違候事あらは被仰遣可被下候いまた清書不仕候間改むるにはゝかりなく候事に御座候よく〳〵御たゝし可被下候明夕にも清書仕度候間明朝迄御覽御返し可被下候

十二月十一日　　大秀

足立御父子君御許

養老美泉辯言釋のはしかき

足立稻直

かつら園の翁去年の夏の頃美濃國石津郡の人のとふらひ來て多藝郡なる養老瀧菊水のさまなと語出ける

を問聞おきていかてこの美泉のこと書あらはさむとて書籍とも引出かつ〳〵考初られける折しも又或人甲より養老瀧を歌によめる事問おこしけるに打あひて養老美泉錄を編みて彼人に見せられけるに彼人は始より菊水を美泉そと思へるにて師翁の意とはいたくたかひたれは秋より冬かけてくた〳〵しく論ひおこせりしを翁此夏瀧見に物せられてなむ此辯はかゝれけるかくて此ころ彼美泉錄の意をももらさすわきまへことのちうさくにをさめて書あらはされけるを見れは文義はつはらにわかりぬれと辯の辭は古言にて物せられつれはぬは玉のやみの夜にしもみよし野の花のさかりに行たらんにゝほひくる香はさすかにそれとしるき物からさもうるはしき色あやの見えわかぬをゆかしうあかぬこゝちのせらるれはかたはしよりこ問きゝけるに其言の心ときさとせる書の卷々かしこゝと導引をしへられけるを探りもとめて分ゆけはやう〳〵にあかり初つゝ靄もはれて朝日かけ峰の梢ににほふか如くいとさやかにわかれつるを辯の條々にあはせて書しるしつこは只うひ山踏の言葉のしをりもたとりしらぬおのかとちのしるへにをとてなむ

文化十二年十一月

雪のことは

やう〳〵ふゝきもやめはたてしとみおしあけたるに高欄のこなたかなたにまて雪のうつたかう吹よせられて風の心のくま〳〵見えたるに庭の梢もさすかにおもからぬほとなり竹垣のあたり今も猶うちゝるとさまに見出せはからすのかう〳〵と鳴てたゝ一つ飛わたるかゝる折に一言をたにと思へと口も氷にとちられたるやうにて

文化十三年田中大人四十の賀

やすみしゝわか大君のみたからとたふせにたちてますらをかいはひまもらふ千町田の田中の大人稻直らは學の親と大船の思ひたのめはあら玉の年は四十にみよはひはたりぬと聞てそこをしもいほきまつらく君かすむ園の柱のゆつかつらしらにさかえむ萬代にいやしけらましとことはにあえていませとことほきまをす

いはへすへわれはしらねとまさきくて
千年いませとことほきまつる

文政元年正月祖父七十父五十賀しけるをりよめる長歌并短歌

玉きはるうつそみの世は久方の月かきふれはあら玉のとしは消ゆき年月のきへのまに〳〵梓弓はるさりくれはむかつをに霞きらひて木ことに花はさけとも此春はことにうらくはしあか父のみよはひとへはあか父は五十とのらしおやの親のみとしをとへはおやの親は七十とのらす五十にしみよはひたらし七十とみとしたりますはしきやしそこらうれしもしき島のやまとの國はいにしへゆことあけせぬ國しかれとも言あけすわは五百とせもまさきくまさねやちとせもさきくいませと天地の神に乞のみ山鳥のをろの初尾のしたりをの永き春日に思ふとちいよりつとゐてことほかひうたひまひつゝ酒みつきあさはふけふをうれしみと心のをろをのはへつるかも

反歌

あか父と父のみおやとみよはひは
　五十七十たらひますけふ

玉の緒のたゆる時なく春花の
　榮えいまさねいやとほなかに

元日

引かへてけふはうつろふ世の中の
　人のこゝろの春のはつ花

花

峯高み雲か花かととはぬまに
　こたへて匂ふ袖のはる風

郭公

ほとゝきす過る垣ねのひと聲に
　うの花月夜影しらむなり

八月十五夜雨ふりけれは

月ゆゑの人のうらみもとりあつめ
　かさなる雲の深きよの空

九月十三夜江名千種園にて

青かりし木々のは月の望よりも
　紅葉てりそふ影そさやけき

神樂

山人の千年つけとてきる杖の
　もと末ったふ聲のさやけさ

山家冬月

花紅葉いろかむなしく冬枯て
　月にとはるゝ木かくれの宿

聞戀

人傳の言の葉末にいかなれは
　涙の雨のかゝり初けむ

寄山戀

夢にたに逢みぬ人をするかなる
　うつの山にも戀わたるかな

茅店殘月

旅衣うら波とほく殘りけり
　あしのまろやの有明の月

源平盛衰記をよむとて

みたからも浮沈みてしわたつみの
　波のさわきはゆゝしかりけり

予自ら材識賤陋を揣らす竊に飛騨國學傳燈と題する一書を撰み田中大秀翁を初として其門下拔群の學者七人の事蹟を蒐輯して之を世に公にせんとす此傳は即其中の一人なれは今之を淨寫して特足立忠三郎君に贈るは永く此人の事業を君か家に傳へしめんとの微意に出つるものなり因て聊其事由を茲に附記す

明治廿九年三月一日　田中登作

紫式部日記解巻一

飛騨國高山民　足立稻直著

凡例

此日記はしもむかし一條院の天皇の天の下しろしめしゝ大御代に中宮と聞え給ひし后（その御名上東門院と申奉る）の寛弘五年第一の皇子（後一條天皇なり傳次に出しつ此皇子も後朱雀天皇も實は第二第三の皇子に、一條院天皇の第一の皇子は式部卿敦康親王なり此親王の傳次にいふへし日本紀略なはしめ榮花物語續世繼等の雜誌にも皆後一條天皇を第二の皇子後朱雀天皇を第三の皇子といそへ奉る例なれとも此日記にはヽ一第二とかそへ奉る是亦此書の例なれは今もかくは書つる也此日記にかきりてのとなへなれは心付おくへし猶下の敦康親王の傳に論へり）うみ奉らせ給ひ又同しき六年第二の皇子（後朱雀天皇なり傳下にいふへし）うませ給ひしをりのことかけるふみにてかの武藏野に名たゝる紫と聞えし式部の御許の水莖の筆すさみになんありける其大御代よりは八百年餘のとしは經にけれと今のうつゝに見きくかことましてかしこき内わたりの御事ともをや

抑かの源氏の物語は日本の寶としてかふか上しもか下にいたるまてもおしなへてよにひろくもてはやしめてあへる限にして世々の物識人の註釋書ともころたきまて多くいとも／＼めてたき書になん有けるさ

るを此日記には言かふる人たにをさ〳〵なかめりしこそあやしけれたま〳〵にとりみる人も大方にのみ見すくすめり此御許の本性のいとめてたく心たてのやはらかくあられし心もちひのめてたきを彼物語にもをり〳〵みゆれと人の上にとりなしてつくられつとは云へれとさとりみしかきおのかとちはそれはそれとも見過してえさとらぬくま〳〵ぞ多かめるを此日記にはおのか心もちひのやうも亦同代の宮つかへせし人々のうへをも論ひて浪速の浦に生しけるてふよしとあしとをつはらかに分しるして誠にいさゝかなるこゝろのくま〳〵まて殘りなくつくされたれは源氏の物かたりよまむと思はん人は先必らす此書をこそよく見るへかりけれ此ふみのおもふきこのおもとの心さまをよくさとりさて後かの物語よまんにも此日記の玉を心の緒に貫つらねとめてかれをも見はこの玉のくすしく妙なる光にてらされてくらかりしふしもかならす明らかにさとりうへき物になん有ける猶此おもとのやまともろこしたくひなく才高き事は代々の註さく書又藤原爲章か紫家七論に委しくあけつくしたれはこゝにはいはす又此おもとの世にたくひなく漢和の物學ひえられつるを少しもさえかりたるさまなくよろつおのつからに心にくゝおはするよし（さる心ばへ見ゆる）は其所々に委しくいふべし

一壺井氏の傍註にいはく此書本非ニ日次之體ニ而呼ニ之日記ト者未レ審姑且依ニ舊題ニ不ニ輙改レ之云々といはれし如くけにこと〳〵く日次にしるせるにはあらすされと又日記といふへき處々もありてこの書は寛弘七年の春先つとしの事ともを里居のつれつれに思ひ出てつゝ書つらねしものにて（此事猶下に論へり）かならす寛弘より同七年の春まてをおこたらしと日次に記したるにはあらすそは一の卷に「かはかりの事のうち思ひ出らるも有其折はをかしき事の過ぬれは忘るもあるはいかなるそ」なとあるにて志るへし日次にしるしたらんには何しにかくはいはるましきそかし猶かゝる事とも多かるを其處々にいふへしさて按に日次おとさすしるさねはとて日記といふましきにはあらす蜻蛉日記和泉式部讃岐典侍辨内侍なとの日記もみな此定めなるをや

一紫家七論に云く其日記（此日記をいふ）昔はさためて數十年の卷有ぬへけれと世に傳らさるは不幸といふへし

今傳はる所の日記は纔にその殘篇と見ゆと安藤爲章のいはれて誰もしか思ふめれと委しからす本數十年の卷有へきに非す寛弘六年の冬に第二の皇子の御産屋の事なきも漏れたるにあらす五年一の皇子の御産の事を委しく書たれは夫に譲てわさと略けるなり同七年の條に（道長公の詞）年頃宮のすさましけにて一所おはしますをさう〲しく見奉りしにかくむつかしきまて左右に見奉るこそうれしけれと大とのこもりたる宮達をひきあけつゝみ奉り給ふ云々又「二宮の御五十日は正月十五日云々なとありて第二の皇子御産の事おのつから明らかに聞へたりかくて此日記もと後のよまてかくひろく詠ふへき爲に書るにはあらて寛弘七年の春里居のころ中宮（上東門院）のよに類なく榮えさせ給ふさまのいとめてたくかつはおのか心もちひ身の上の事なとまてつれ〲なる儘にそこはかとなく書つらねて御前へ見せまゐらせしにて數十年の卷あるへきにあらす

よくせすは卷の終猶後々有へき樣にも思ひまとはれぬへしこは寛弘七年二の宮御五十日の後程なくかき參らせしにてかくかきさしたるも中々實錄の一体なり又下にも引る詞の中にかくよの人ことの上を思ひ〲はてにとちめ侍れは云々とあるにても是より末の巻なき事をしるへし

四の卷に「此次に人の形をかたり聞へさせは物いひさかなくや侍るへき唯今をやさしあたりたる人の事はわつらはしいかにそやなとすこしもかたほなるは云侍らし云々又五の卷に「前世しらるゝことのみ多く侍れはよろつに付てそかなしう侍る御ふみにえ書つゝけ侍らぬことをよきもあしきもよにあること身の上の患にても殘らす聞へさせおかまほしう侍そかしけしからぬ人を思ひきこへさすとてもかゝるへき事やは侍るされとつれ〲におはしますらむ又徒然の心を御覽せよ又おほさむ事のいとかうやくなし言多からすともかゝせ給へ見たまへんゆめにても散侍らはいといみしからん又々も多くそ侍る（中略）ことさらにと御覽してはとう給はらんえよみ侍らぬ所々字おとしそ侍らんそれは何かはこらんしもらさせ給へかしかくよの人ことのうへを思ひ〲はてにとちめ侍れは身を思ひすてぬ心のさも深う侍へきかな何せんとにかはへらん（以上）なと見へて物のついてに書て見せ參らせしにてよの人にみすへきものにあらされは六年の御産の事なとわさと略けることいふもさらなり

又此おもとの出家の望あることをり〳〵見へたれは里居の頃其本意とけむとて御前のとりわき睦しうし給へはかくまて思ふことをも身の上をも書つらねて殘らす聞へおかまほしうとは書たるなるへし

一式部の御許中宮に仕初られし事寛弘五年九月十一日の條に「また見奉るなるゝ程なけれとたくひなくいみしと心ひとつに覺ゆ又同年臨時祭の次の條に「十二月廿九日にまゐる始めてまゐりしも今宵の事そかしと有は去年のこよひの事そかしにて寛弘四年十二月廿九日に初て仕奉れるなり又六年左衛門内侍の事をいへる次の條にをとゝしの夏頃より樂府といふ書二卷をそしとけなく敎へたて聞へさせて侍るもかくし侍云々とあるは寛弘四年の夏なりこれはたゝめし上られたるのみにてひたと仕奉れる事に成ぬるは同十二月廿九日よりの事なるへし其仕奉るさまはあらはに御師めきてはかゝれねとさやうにかゝさるは例の男こに才かりぬるを惜む深き心しらひ有事にて此樂府を敎奉りし事又さきに引る言多からすともかゝせ給へ見給へむなとある文躰にても御師たる事おのつから推はかりしるへし又一の宮御誕生七日の儀式の中にも「物はしたなくてかゝやかしきこゝちすれは晝はをさ〳〵さし出すのとやかにて東の對よりまうのほる人々を見れは云々など見へたるも職なき故にかゝる折も獨り閑暇なり又土御門行幸のをり又御五十日なとの時も唯中宮の御傍ちかく隨ひをるのみにて其身には何の業も無にておもひやるへしさて又「中務の宮わたりの御事を御心にいれてそなたの心よせある人とおほしてかたらはせ給ふ云々 此事そこに委いへりとある なとを考合せて他の女官と同しつらにはあらぬ事をしるへし

一紫家七論に或人の云く榮花物語 浦々のわかれ の長德二年の文に內大臣伊周公のかたちを譽るとて彼光源氏もかくやあらんと見奉ると書たりしかれは源氏物語は長德より前に出來て世にひろこりたれはこそ赤染衛門も伊周公を源氏君に譬ては書けむ如何答云されはこそ爲章かつて榮花物語を赤染か作に非しと申すはかようの所多けれはなり其榮花は赤染や紫より後人の古記を取あつめて其間に詞を加へて

またくなしたるものと見ゆ初花卷はやかて紫日記をとりて仕立たり云々と論はれたるはいとよろしき說なりけに初花卷は此日記にて仕立たる事はやく難波の阿闍梨もこゝろ付れし事にて阿闍梨自筆の書入本の初に榮花物語第八初花寛弘五年を記せるは此日記によれり比較して知へしと朱をもて書入られたり今按に榮花物語はもと鶴林の卷まて三十卷にてとちめしを殿上の花見の卷より末十卷も後人の書そへたるなり其故は鶴林の卷の末に「次々の有さまともまた〳〵あるへし見聞給らんひとも書つけ給へかし云々（後に開り闘ま卷一ハ四十な見れは榮花は赤染衛門の筆とのみいへる傳說なるな或說に此人歿後の事に及ひたれは一筆にあらすと疑ひしはことわりにて年季のみならす鶴の林の卷〈御堂殿薨逝の卷也〉の終りかたに次々の有さまとも又々あるへし見聞給らんへも書付給へかしと見ゆさて殿上花見卷以下卷々の筆〱かひ他人と覺しはた初より處々にも光源氏の物語を引れたるもやゝ後の筆のしるしか云々とみえたり）と有て此卷は萬壽四年十二月四日御堂（道長公也）殿薨給たる事を書るにてこゝに此殿の榮花もとゝまりたる事有の詞にて明けし扨末十卷は御堂殿薨給し後々の榮を書たりとは見ゆれとひたすらにそれをのみむねとしたる書さまにもあらす官位なとの事も前つ年に云たる事を翌年の所に去年さ有しとは書たれと今年の事なりなとやうに年次も鶴林の卷まてはたゝしく見へたるを末十卷はまきらはしく何事も前後亂れかちに正しからさる事時々見へたり又布引瀧の卷（承保二年白川天皇の中宮御產せの條）に後一條院の御うふやに紫式部の云つゝけたる同し事なり云々と云るは此日記をさして云るなりこは末十卷書加へたる人の前の初花の卷は此日記をとりて書る物とたに心つかてふとかくは書るなるへし若し同し人末十卷をも書りといはんに前に初花の卷におのれとりて書直て後に又其本書をさしていふへき事かはもしは初花の卷に書たるに同しけれは略きぬなといふやうにかゝはこそあらめ是等皆後人の書そへたる證なりまた思ふに末十卷は萬壽の末に出來たる成へし又大鏡二の卷に關白次第の下に世繼の名として榮花物語の目錄を出せるにも第三十鶴林卷まて有て末十卷をしるさすされは此大鏡（是も榮花によつて書るかとも思へ一挾榮隱の傳大原の二寂の傳に大鏡二卷を寂念か作るよし見へたり時代末考寂念俗名爲業といへるよし）書る世まては三十卷にて至かりし書なるへし扨此大鏡は後一條天皇萬壽二年はかりの書と見へたれは（一の卷後一條院の條に當代といふ又同卷に今年萬壽二年乙丑とこそは申めれなとあり）榮花の末十卷は其ころより後の人のわ

さとは思はるゝなりされは前三十巻も式部御許の此日記書る寛弘七年より大鏡の出來たる萬壽三年まてはわつか十七年はかりの間なるにはやく此日記をとりて初花の巻は作れるなり此御許も猶いまかりし程の事なるへし（榮化の楚王の夢の巻萬壽二年八月三日後冷泉院御誕生の所に大宮の御方の紫式部云々といふことあれはなり）扨榮花は赤染の衛門か作に非すと紫家七論に委く論はれたれとかれは此末十巻は後人の作なる事をいまたわきまへさりし論なり初め三十巻は赤染が作に非すとも云はなちかたきわさなり後拾遺に夫匡衡（長和元卒）にもおくれてよめる歌なとも見へて此御もとゝ同時なから長元の頃迄も在し人なれはなり（續世繼皇七巻子日條に長元六年十一月鷹司殿七十の御賀に赤染衛門が歌よめる事見へたり）かつ榮花もさるよし有て書にもあるへけれは赤染か作なりといふ事も捨かたきそかしことに初花の巻は上にもいへる如く此記出來て程なく書るなれは詞なとも或は略き或は加へたる所々も多かれと中には今のにきに寫誤れる言をもかれには其まゝたゝしく傳はれりと見ゆるもあれはさる所はとり用てよろし今此日記をとくには一つの據とすへし後に見れは蜻蛉の日記解環といふ書にはやと件の榮華物語の考かつ〳〵見へてその大綱おのか思へりしに至あへりき

一式部のおもとの系圖の事は源氏物語の代々のちうさく書ともにもあまた出又紫家七論に見へたるはことにくはしく宜しけれは今こゝには略きぬ

一凡て古き書ともには題を書ことなきよしわか師荏野の田中翁の竹取物語解に委しくいはれたり此日記も内題はなかりしなるへしされは契本にはなし殊に此書の名紫式部の日記とては己れか名にしもあれは本は書の名もなかりしを後に紫式部の日記とはいへるなりけり今は傍註本に紫式部日記傍註と有るにならひて物しつるなり

一此日記紫家七論に引たるはいとたゝしく宜しき本と見へたり今は其つま〳〵引出られたるをも考合せ（解の中に論本としるすは是なり）世に流布する壺井氏の傍註（傍本としるす是なり）又契沖阿闍梨所持の校合本（契本としるす是なり師翁の大坂にて求められし彼阿闍梨の自筆にて書入有を得させられし本也）又安藝の橋本の稻彦一本を校合せし書入を寫せる本（一本としるす是なりこは師翁の伊勢松坂にて稻彦にあひてうつされし本なり）又群書類從の中なる本（類本としるすこれなり）榮華物語初花の巻（榮化としるすこれなり）等を以て考へたゝしつ

文政二己卯年十一月

紫式部日記解巻一

飛彈國高山町民　足立稻直著

秋の氣はひのたつまゝに土御門殿の有さまいはんかたなくをかし池のわたりの梢ともやり水のほとりの草むらおのかえゝ色つきわたりつゝ大かたの空もえんなるにもてはやされて不斷のみときやうの聲々哀まさりけり

〇中宮彰子道長公御記に寛弘五年御懐妊によりて七月十六日甲戌入夜中宮行啓上東門院又拾芥抄中末云十二門此外有上東門鷹司門北東面號上御門上西門殷富門北西面西土御門也云々又云土御門内裏土御門ノ南烏丸ノ西離宮同室町の東京極殿上御門南京極西南北二町其南一町後入道長ノ家或人入道殿ノ家上東門院是也後一條後朱雀後冷泉三代の帝於ニ此所ニ誕生匡衡ノ宅皇后門入於ニ此所ニ誕生此家紀伊島賀茂明神通給ニ　此大内裏圖に依て可考〇秋のけはひ　こゝは七月末つかたのさまなりけはひは俗に様子といふかこと唯氣といふとはいさゝかけちめあり其事にはへあるやうの意又働うこかすやうの意體を用にもちうる時の詞なり心と心はへ味と味はひとの差別辨知へし〇たつまゝに　月日のたち行まゝにといふ事なり次第々々に秋のやうすに

なりゆくさまをいへり○土御門殿　道長公の御家にて拾芥抄に在二土御門南烏丸西一（十二門のこと）○をかし

此假字の事田中道麿の説に物をめてゝいふおかしはおむかしの略にておかしなりあさけりわらふのをかしはをかしなりといはれしを鈴屋の大人もうへなはれたるを過し頃藤井高尙主の説とて紙のはしに書たるを師の見せられつるまつ其説おむかしのおを略てむかしとは古に云つる事にておの音はかろく音をとゝのみいふたくひにておを略く事は古き例なるを略くへきおを略かすして略くましきむをはふく事例に違へりもとをかしはゑむ意の詞にてゑむにはあさけり笑ふとおもしろかりわらふと二つ有てあさけりわらふ意のをかしをほむる意にも轉し云へき理なりなけく意の哀をほむる意にも云ふと同例なりといふ説なりけり此説古の例にもいとよく叶て覺ゆれは今おのれもしたかひて皆をの假字に書り笑ふとあさけるとのけちめは前後の詞にていとよく聞ゆる也つら〱舟物語春海説かけろふ日記石川隨筆等可考○わたり　邊（アタリ）といふに同し○やり水　杜子美か遊二何將軍山林一の詩に剩水滄江破殘山碕石開とある剩水は即ちやり水にて池の餘り水を流しやるをいふ也○おのかしゝ

おのれ〱かさま〱にといふ意萬葉を始めて何れの書にも多かる詞なるを六帖に「戀はみなさま〱有と聞なへにおのかしゝとそねはなかれけるとあるそよく聞ゆ猶さる物語書等にも常に數多見へたり下にもおのかしゝ家ちといそくも云々なとあり此書の事師か荏野冊子に委しく云れたり又いふ萬葉の十二に各寺師（オンカシ）人死爲良思（ヒトシトスラシ）いもにこひひにけにやせぬひとにしらえす又橋姫の卷に池の水鳥とものはねうちかはしつゝおのかしゝさへつる聲云々をも考へ見るへし○大かたの空もえんなるに　大かたは今俗にいふに同しそらは頃に通ふて聞ゆえんなるは物に感しらるゝやうの所に多く云り字音と聞へたりかやうの字音は後にしかと其字をさしてよく義に當るも有ぬへけれとをさ〱かなはぬ物にて字音なからも倭語と心得へし夕顔の卷（以下唯何卷といへるは皆源氏物語のことなり）に風いと心ほそふ更行夜のけしき蟲の音も雁の啼音も瀧の音もひとつにみたれてえんなる程なれは云々と有感情の深き意の詞な

る事をゑるへし扨此句ともは哀まさりけりと云へつゝけて心得へし七月末つかたのけしきはすへて物の哀も催しやすきに付ては哀に聞へし御讀經の聲も今一きはまさりてこゝろほそく尊しとなり〇もてはやされて御讀經の哀なるこゝろ〳〵を其えむる景色に通ひて助合るやうの義なり手習卷に松風いとよくもてはやす吹あはせたる笛のねに月も通てすめるこゝちすれは云々とあり〇不斷御讀經中宮御産の御祈の爲なり道長公御記に寛弘五年五月廿三日壬午中宮修善明救僧都奉仕又初仁王經不斷御讀經最勝講と見えたり寛元以來御産御禮目錄可考猶不斷經の事下位夜の鐘の條下に委しくいふへし又義經紀三辨慶淸水にて牛若の太刀をこひてあらそふ段「かゝりける所に御さうしの持たまへる御經をおつとりてさつとひらいてあはれ御經や御へんの經か人の經かと申けるされともへんしもゑ給はす御へんもよみ給へわれもよみ候はんといひてよみけり辨慶は西搭に聞へたる持經しや也御さうしは鞍馬のちこにてならひ給ひたれは辨慶かかうのこゑ御さうしのをつの聲入ちかへて二の卷半まきはかりそよまれたり參る人のゑいやつきもはたと志つまり行人のすゝのこゑもとゝめてこれをちやうもむしけり」

やう〳〵すゝしき風のけしきにも例のたへせぬ水のおとなひよもすから聞まかはさる御前にも近くさふらふ人々はかなき物語するをきこしめしつゝ惱ましうおはしますへかめるをさかけなくもてかくさせ給へる御有さまのいとさらなる事なれと

〇やう〳〵　此詞はやゝ〳〵を音便に云るにて俗にたん〳〵次第々々になと云意也〇例の絶せぬ水の音なひよもすから聞まかはさる　彼五月よりの不斷の御讀經の聲に池水の音の響合て聞混ふとなりたへせぬとは水の流の絶ぬと御讀經の絶ぬとを兼又音なひも水の音は經よむ聲を兼たりとよく味へし契本又群本には水の音なんとあれと宜しからす聞まかはさるは二なから打混聞ゆるなりさる淸てよむへしせらの約さにて聞まかはせらるといふことなり〇御前にも云々　日本紀略卷十長保元己亥年十一月一日庚辰是日也左大臣第一息女從三位藤原彰子入裏庭年十二今六日乙酉今日以從三位

彰子爲女御同二年二月十日戊午女御彰子蒙可立后之宣旨仍出御内裏又廿五日酉以女御從三位藤原朝臣彰子爲皇后號之中宮即任宮司以元中宮職爲皇后宮職と即ち中宮の御前なり此中宮彰子は後に上東門院と申奉りて御父は御堂關白道長公御母は左大臣雅信公の御女也永延二年御誕生長保元年十一月一日入内御年十二同二年三月立后御年十三後一條天皇後朱雀天皇の御母におはします今年御年廿一御產の事もちかく成ゆくまゝに御心地も惱しからんを御前近く參りゐて女房達の物語するを聞し食ては何の惱しきさまも見せすおしかくしてあへしらひ居給ふさまなれはいとさらなるそれをこなたより道たへし奉るへき事なれとゝ云意にてことなれとゝは遠慮すへき事なれとゝ云意なり次の條へつゝけてこゝろ得へし旁又群にはもてかくさせ給へりし御有樣なとのいとさらなる事なれとゝあれと論に引れたる本の方よろしけれは隨つ〇いとさらなる事なれと

此詞は次の「うきよのなくさめには云々へ續きたる詞也されは惱ましうはたゝかろく見てすへての御有樣の事をつよく見へし俗にいはゝ此中宮の御有さま不申及事なれとも此御前に居れは世のうき事もなくさむといふ事なり

うき世のなくさめにはかゝる御前をこそ尋ねまゐるへかりけれとうつし心をはひきたかへたとしへなくよろすわするゝにもかつはあやし

〇うき世のなくさめには云々　憂世の物こと心に叶はぬ身も憂事を忘れんには此中宮の御前へこそ尋ねてもまいるへけれとなり御許もかの物語する女房の中に交ゐて思ひつゝけゝる意なり竹取物語に此子見れはくるしき事もやみぬ腹たゝしき事もなくさみけり若紫卷に僧都紫上の母に云詞に光源氏かゝるついてに見奉り給はんやよすてたる法師の心ちにもいみしう世のうれへをわすれ齢のふる人のみありさま也明石に入道源氏君をみ奉りてほのかにみ奉るより老もわすれよはひをのふる心ちしてゑみさかえてとあるにおなし心はへなり〇うつしこゝろ　萬葉十一の卷にますらをの現心(ウツシゴコロ)もわれはなし云々又狹衣にうつし心もなきやうにてそおはしけるなとあり常の心もなしと云るなりこゝのうつし心は現心にて其なきは物狂はしきなり

此もあまりこゝろ行て物狂ほしきさまなるを云なるへし○たとしへなく　唯啻無（タトヘナク）の意にはあらすへは方にてたとへむ方なしなり總てこは物二ツを双て云時の詞にてかたへに双へて見んまてもなく甚たかひあるやうの心はへなり枕草子卷三にたとしへなき物の條に夏と冬と夜ると晝と雨ふると日照るとわかきと老たると云々諸本みなかつはあやしきとありきと結ふへき格にあらされは今は削りつこゝも常は憂事の多かる世と御前にては其物思ひをわすれて樂しきとの相違かたとしへなく甚しといへるなりけり

また夜深きほとの月さしくもり木の下をくらきに御かうし參りなはや女官はいまたさふらはし藏人まゐれなんといひしらふほとに後夜のかね打おとろかし五たんの御修法時はしめつわれも〳〵とうちあけたる伴僧のこゑ〳〵とほくちかく聞わたされたるほとおとろ〳〵しくたふとし

○また夜深きほとの　拾遺集に壬生忠見「何方になきて行らん時鳥よとのわたりのまた夜深きに伊勢物語に「いかてかは鳥のなくらん人しれす思ふ

心はまたよふかきになとあるをおもふに夜のふくるといふは曉の方より云言ふかきとは朝方よりいふ詞にて前をさして深しと云なり○御格子まゐりなばや　枕草子にかもんつかさ（女の掃司なり）參りて御かうしまゐりとのもりの女官（女の殿司）御きよめまゐりはてゝ起させ給へりまた御物忌なれは御蔀もまゐらぬそとて云々とありて夜も御格子上奉らんやとなりまゐるは廣く渡る詞にて格子を下すをもまゐると云へり若菜の卷に見へたり和名抄通俗に云觽子（音觽字亦同作簃俗用格子二字）竹障名也また周禮註云蔀（音部字亦作蔀和名之度美）覆暖障光者也とみゆこゝに格子といへるは格子しとみなり枕草子にかうしとも蔀とも有も同物なり○藏人まゐれ　藏人を呼召にはあらすまゐれは格子上よとの仰あるなり藏人は女藏人なり禁秘抄卷上に清涼殿已下格子藏人奉供之近代女孺等候之臺盤所御格子女官候之云々○後夜のかね　後夜は曉の寅の時に當れり善導往生禮讃後夜无常偈に時光遷流轉忽至五更初云々と有る五更はすなはち寅の時なり性靈集第十に後夜聞佛法僧鳥と題して閑林獨坐草堂曉三法之名聞一鳥云々本朝文粹卷八野美材

七夕代牛女惜曉更詩序に五夜將明頻驚涼風颯々之聲云々松風卷に入道例の後夜より深うおきてとあるも寅時のことなり夕霧卷に律師の詞にけさ後夜にまうのぼりつるにとある曉といひ今朝と云へり禁秘抄卷上恒時事條に丑極以後爲明日分と見へたり今の暦には子の中刻を晝夜の堺として今夜子二刻三刻今曉子五刻六刻と云しかるを遷陰寓談卷一十三丁　一日一夜を史記曆書曰撫二十二節一卒二于丑一正義云撫猶循也自二平明寅一至二雞明丑一凡十二辰辰盡二丑又至二明朝寅一使二一日一夜一故曰二幽明一云々又靈異記に得二雷之喜一令生強力子緣ノ條に鬼半夜許來行二童子而見之退鬼亦後夜時來入云々至二于晨朝時一鬼已頭髮所二引剝一而逃云々是らの序をもおもふへし明石の卷にひるよるの六時のつとめに云々とありそも〳〵晝夜六時は後善導の禮讚によりて日沒は申初夜は戌中夜は子後夜は寅晨朝は辰にあたり日中は午にあたれり諸書に晝夜六時は皆日沒を初にて日中に終れは今も其例によりてかくかけるなりかくて晝夜十二時の一時つゝ隔てたるは法師の息はんためにて不斷とは云へと一時つゝは

絕間有へしとにはあらす江次第卷十一御佛名の條に初夜乃御導師某大法師（自亥二刻至子一刻）午夜御導師某法師（自子二刻至丑一刻）後夜乃御導師某法師（自丑二刻至寅三刻）と見へ（晝の三時も是に准て知るべし）次々導師の入替りて讀經の絕間はいさゝかもなく誠に不斷なるへし夕霧卷に不斷の經よむ時かはりてかねうちならすに立聲もゐかはるこゑもひとつに合ていとたふとく聞ゆ云々とあるにて實に不斷なる事いと明らかに知らるゝ也○五たんの御修法　大日大聖不動明王　降三世明王　軍荼利夜叉明王　大威德明王　金剛夜叉明王の五壇をつきて修する法なるへし七壇御修法二壇御修法なといふことも榮花物語に見へ又元亨釋書卷九覺助傳ノ和解ニ五壇ノ法トハ護摩供ナリ第一火天壇ニハ大日尊ヲ念シ第二曜壇ニハ佛眼明妃ヲ念シ第三宿壇ニハ一字金輪尊ヲ念第四本尊壇ニハ不動尊ヲ念シ第五諸尊壇第六世天壇ナリ今五壇法といふときは本尊壇の外には用不用ありて五壇となるなりともあり○時はしめつ　時は後夜の時をいふ夕顏卷時かはりてと有を孟律にジとよみ枕草子に時の程にもなり侍りぬれはとあるを春曙抄に音によめ

るなとに隨て今も昔によむへし彼二書またこゝに
つかへるさまも皆名目にいへるなれはトキとは必
らすよむへからす今も朝(アサ)ジ夕(ユウ)ジと云にをや○きゝ
わたされたるほとおとろ〳〵しく　讀經の聲の甚
しく響きあふ音なりきゝわたされたるを契本にき
こへわたされたるとあり驚くのおとろも本同語な
るへし新撰字鏡に藪を於止呂と讀り
觀音院僧正ひむかしのたいより廿人の伴僧をひきゐ
て御加持參り給ふ足おとわたとのゝはしのとゝろと
ゝろとふみ鳴さるゝそこと事の氣はひには似ぬ法住
寺の座主はうまはのおとゝへむち寺の僧都はふとの
な(ン)とにうちつれたる淨衣すかたまてそゆゑ〳〵しき
○觀音院僧正　法門次譜上十三丁可考傍に餘慶と
あり○御加持參り給ふ　御加持に參り給ふの意な
るへし○わた殿のはし　唯渡殿のはしといふに同
し猶下に云○とゝろ〳〵　催馬樂歌に淺水のはし
のとゝろ〳〵萬葉集卷十四にいはも箏杼呂樹おつ
る水云々又流もとゝろに山もとゝろになと數多あ
り又古今集催馬樂にも見へたる詞にて新撰字鏡に
𪘂を止々呂久と讀り爰は足音の響き轟くにて俗に
とん〳〵となるといふことなりこと〳〵のけはひ
には似ぬ　こと〳〵は異事なり地の有さまとはや
う替りて不レ似となり○法住寺座主　法門次譜上
にあり○うまはのおとゝ　葵卷に〔源氏竹の車を〕馬場のお
とゝのほとりに立わつらひて云々湖月抄に花鳥に
おとゝはおとゝやと云物なり乙殿屋(オトヾヤ)とて左右の馬
場にあり五月の騎馬の時中少將の着坐する所なり
○へんち寺の僧都　旁に遍照寺契に遍知寺とあり
拾芥〔下本十二丁〕諸寺部に遍照寺〔廣澤僧正造地〕○ふとの　名目抄
に文殿(フトノ)〔御治世の時最置移記錄所儀〕と有は禁中の事なり爰は關白家
の記錄を云道長公御記寛弘四年五月三日戊戌候ニ
大内ニ聞ニ從ニ家中ニ送云文殿下ノ有ニ犬死穢ニ者といふ事
も見へたりさて馬場文殿は此僧たちの休息所なる
へし○うちつれたる　法住寺の座主へんち寺の僧
都のうちつれたる也○淨衣　御修法のときの着衣
なり下の條にいふへし○ゆゑ〳〵しき　かと〳〵
しきと大かた同し心はへなり何にまれ其事に趣意
有るやうの事にてほむる方のことは也下にゆゑあ
る有明云々と有も趣のある意なり諸本に表までゆ
ゑ〳〵しきとあり○までの下そもし必すなけれと

今補つ下のきのむすひに叶はされは也
からはしともを渡つゝ木の間をわけてかへりまいるほともはるかに見やらるゝ心ちして哀なりさいさ阿闍梨も大ゐとくをうやまひて腰をかゝめたり人々參りつれは夜もあけぬ
○からはし　形の異なる故に云なるへし異形なるを何にても唐某とゝのふる事例多し○かへり參るほとも　旁契本ともにかへりいる程もとあれとまの一字漏れたるなるへし（いとゐと誤常に多し）こゝを榮花物語にはそれよりまゐりちかひあつまるほと御前のからはしなとを老たる僧のかほみにくきかわたるほともさすかにめ立らるゝ物から猶たふとし云々とあるに依てまの一字を加へたりかへりまゐるは返る人參る人といふ意なり即ち法住寺の座主と遍知寺の僧都等の事にて觀音院僧正は參る法住寺遍知寺はかへるなり○はるかに見やらるゝ心ちして　此末にも山のさきの道をまふほと遠く成行まゝに笛の音もつゝみの音も松風も木ふかく吹合ていとおもしろしと有如く土御門殿の庭のいと廣大なりしほと思ひやるへし木の間に行かふ人のはるかに見やらるゝといふ意なりこゝちしてと云言からく聞へし○哀なり　上の哀まさりけりと同意にて尊き義也此下に心譽阿闍梨は軍茶利の法なるへし赤衣きたりの一句榮にありてけに軍茶梨は南方に配當して故有けに思はれ又次のさいさあさりものもの字にもよく對する故初は補はんとせしかとも拾芥抄に御修法の條に淨衣の事を大威德六字明王降三世軍茶梨金剛夜叉等は青色不動は鈍色（ニフイロ）とあれは赤衣なとの理はなき事と知られて榮花物語は例の書加へしなるへしと思ひなりぬれはさておきぬ○さいさあさりも　契又旁本に清禪阿闍梨とありもの字は上の觀音院僧正法住寺座主遍知寺僧都なとに對したるもと見へし○こしをかゝめたり唯うやまう形ならんか扨此下に榮花物語には仁和寺僧正は孔雀經の御修法を行ひ給ふの句あり○人々參りつれは　女官はいまたさふらはしとある結也○夜もあけぬ　榮花物語には明はてぬとありこゝにはてといふ事なけれと意は同しく聞ゆされは補にも及はさるへしかみのまた夜深云々の結也
わた殿の戸口の局に見出せはほのうちきりたる朝の露もまたおちぬに殿ありかせ給ひて御隨身めしてや

り水はらはせ給ふ橋の南なる女郎花のいみしう盛なるを一枝をらせ給ひて几丁の上よりさしのぞかせ給へる御さまのいとはつかしけなるにわか朝かほの思ひ知らるれは是おそくてはわろからんとの給はするにことつけてすゝりのもとによりぬ

○わたとのゝ戸口の局　次々見へたるも皆其處にて東の對の渡殿にて式部御許の局なり抑局は玉勝間卷八に榮花物語若枝の卷にはかなく屏風几丁はかりを引つほねてひまもなくゐたりとあり局といふはつほやかにつほねたる所のよしなりとあり今按に花の莟又壺なといふも同意なるへし徂徠の南留別志につほねといふはとのゐするものゝ帶をもとかてつふねにするなりと有はいかゝあらん唐官抄に伺衣局（天子ノ御衣ヲ調進スル女官の詰所也）伺藥局（天下ノ御藥ヲ奉御スル女官ノ詰所也）沙石集（二卷目六丁表）に鎌倉に町のつほねとやらん聞えし德人ありけり云々つほねはつほめる意にて一町々々の總しまりする年寄肝煎の類ひにて女官の局も其かゝり／＼の女官をあつかり司る役所にやあらん

○ほのうちきりたる　此段異時と見むも難なかるへけれと前段のつゝきにて則明ぬとある其時なり

きりたるは霧を活用語にいへるなり萬葉に霧相（キラヒ）キ、ラフといへり霧は空中に雲氣のさへて向ふの見へさるをいふかくて用語なるを體言にしたる名目なり催馬樂紀國歌にみなそこきりて其いろ見へすはゝきゝの卷に目もきりてなとあり朝日もいまた云々との意なりほのはほの／＼ほのかなとのほのに同し不清亮なりうちは詞なりきりたるは　霧の事にて霧も本きらひきらふきらへりと働きてとゝこほりもや／＼とするさまの言を體にいへるなり叆のきりも則ち霧の活言にて萬葉に霧相（キラフ）と有字の如くきらひは則きりあひの約言なり水きるのきるなと同し帚木卷にめもきりてなとも見ゆ朝日もいまた出ぬ前なれは草木の露もまたちらぬ程となり朝早（トキ）さまなり論本にはいまた落ぬにと有○殿　太政大臣道長公にて（備考御記寛弘二年正月廿三日壬申參内被仰云除目必可奉仕者不堪非可行去依恐御本可奉仕申候宿申陳事是今年滿九十年算并大臣後十一年不背身在數年奉仕所申也云々）御父法興院大入道兼家公御母左京大夫藤原仲正卿女也永延二年正月廿九日權中納言（御年二十三）正暦二年九月七日大納言同三年四月廿七日從二位中宮大夫（廿七）長德元年四月廿七日兼左近衛大將同年六月十九日右大臣同二年七

月廿日左大臣寛仁三年三月十八日出家此殿はかの南院にての御弓占(ユウラ)もまさしく御女たちは三所（一條院中宮彰子三條院后研子後一條院后威子）まて后に立給ひ其外後朱雀院の尚侍小一條院女御なとゝうち續き榮えさせ給ひて一條院の御伯父後一條院後朱雀院の御外祖父におはせり○橋の南　前の唐橋なるへし○一枝をらせ給て　女郎花に一枝といふ事いかゝしきやうなれとこは唯梅櫻なとに常に一枝と云ひなれ來つれはうちまかせいへるにて一本(ヒトモト)といふに同しといふ言かろく見るへし後撰集（戀四）平のまれよの朝臣の歌に枝もなく人にをらるゝ女郎花ねをたにのこせうゑしわかため同（秋中）枇杷左大臣をみなへし折けん枝のふしことに過にし君をおもひ出やせし千載集に大納言師頼の歌露しけき朝の原のをみなへし一枝をらん袖はぬるともなと見えたり○さしのそかせ給へる御さまの群契旁ともにのそかせ給へりとあれと論に引れたるにる‖とあるによりつ○はつかしけなるに　道長公の御姿の不足ところなく盛に成調り給を見て御許のわか姿をかへりみてはつかしきと云るにて我身を恥る意の詞なり下にはつかしけの歌よみやとはおもひ侍らすとあるも上手の歌よみには吾身の恥らるゝより云るにて身をかへりみて恥らるゝほとの歌よみにてはなしといへるなり御さまとは道長公の方につけいとはつかしけなるにとは御許の方につけて心得へし盛の御姿をみるにもわか朝顔のみにくからんほとのおしはからるれはいと恥かしけなるにと句を下上にして心得る格なり諸本にのそかせ給へりとあれと論にのそかせ給へる御さまと有方まさりたる○ことつけて彼事をよせ事にして此事をもするやうの意なりつけのつ‖清て讀むへし彼おそくては惡からんとの給ふ御詞をよせ言にして硯のもとによりてはつかしき顔を隱すさまなり思ひしらるれはと書さしたる句にて恥かしき貌をかくすさま聞へたり味ひ見るるまひ物はちしたるさま今見るかことし

をみなへしさかりの色を見るからに露のわきける身こそしらるれ

此歌新古今雜上に出て法成寺入道前太政大臣女郎花を折て歌よむへきよし侍けれはと有一首の意は

おとゝの御姿の盛なるを見奉るにも我身の盛り過て見にくからん程の思ひしらるゝそといへるにてそれを女郎花に准(ナソ)らへいへるなり（御許の年齢の半は下に云ふ）露のわきけるとは六帖に貫之「うすくこく色そ（家集にもとあり）見えける菊の花露やこゝろをわきておくらんとある下句同意にて盛の花もあるにうつろひたる花もあるは露の心と置分けたる所爲と云なり後撰集（六帖中）に前栽にをみなへし侍ける所にて「をみなへしにほふさかりを見る時そわか老らくはくやしかりけると有によりてよまれたるならんかされとこゝのは上手の云まはしなれは中々にかれは是をときたる樣なるはをかしき事にあらすや

白露はわきてもおかし女郎花心からにや色のそむ覽

あなとゝほゝゑみて硯めしいづ

○あな　ア、といふに同しく褒美の詞なり委しくは古事記傳に見へたり又あなは事之甚切皆稱阿那と古語拾遺に見へ萬葉には痛と書りいとゝ云に同しといふ方しからんか○とゝ　上のとは疾(トク)にて下のとは詞なりほゝゑみは少笑形の顔に顯はるゝを云へり○硯めし出かへしせんとて硯を乞ひ給ふ也

○しら露は云々歌　一首の意はかけ歌の下の句を淸てイヤ〳〵露は分て置く物には非すをみなへしの盛なるもあるに又散かたになりぬるも有は其花の心と爲る事にこそはあれと云意にて御許の姿は老て見にくゝはあらぬを心から老つくなりとの給へるなり此殿の御許にけさうし給ふ事末にも見へたれとほとよくのみ云のかれたるさまなり

しめやかなる夕暮に宰相の君とふたり物語して居たるにとのゝうち藤の三位君すたれのつまひきあけてゐ給ひとしの程よりはいとおとなしく心にくきさまして人は猶こゝろはへこそかたき物なめれなんとよの物かたりしめ〳〵としておはするけはひをさなしと人のあなつり聞ゆるこそあしけれとはつかしけに見ゆうちとけぬほとにて多かる野へにとうちすんして立給ひにしさまこそ物語にほめたる男のこゝちし侍りしか

○宰相君　女官也○殿の内藤の三位の君　榮花物語初花卷（寛弘六年條）に殿の三位殿左衛門督にならせ給ひにけりとある同人なり又此記卷二に出たる藤の三位は女官にて別人なりこゝなるはゐ給ふ又立給

ふにしなとあるを二の卷なるは上人ども成ける藤の三位と有詞のけちめにてもしるへし擬こゝのは藤の三位の君とよみ下なるは藤三位(トウサンミ)と讀へしこゝを群にはとのゝ三位君とのみありてとのゝ内といふ詞なしそれもしかるへし旁にはとのゝうち殿の三位の君とあれと一本にとのゝうち藤三位君と有そよろしき猶榮花物語にも殿とあれは旁の方よろしとも云へけれとされはとのゝ内といふ句不用なりこは當時藤原も門多くわかれたれは藤の三位と喚ふ御方もあまたおはしけん故に殿の内とは言わけていへるにて猶ものゝ内藤の三位とある方まされり按に道長公第一の御子賴道公（中宮の御弟にして中宮は御とし廿一なり後に號宇治關白殿童名はたつ君）をいふへし正曆三年御誕生今歲十七歲なり此公を下卷に左衛門督と見えたり○おとなし　おとは大人(オホヒト)といふことの略なるへしなは少彥名なといふ稱言かおとなしくといふしくはめくとも云と同しく其樣を云言なり四談に少將二條殿に移り玉ひてアコキおとなになりわらはに成と有も大人めきても少人めきても働くよしなり古言梯におとなは大人の略かといへりをさなしに對て男ひたるをいふ○心にくき　あまりに用意物ことに勝れたる人は見る人の方より心にうらやまれて其うらやましさのあまりかたへはにくゝさへ思はるゝと云やうの詞なり○しめ〳〵　物云もさわかしからすおほとかなるなり○うちとけぬ　いまた心うちとけてゐ物語し給はぬほとになり○おほかるのへに　古今集秋上にをのゝ良材「をみなへし多かる野へにやとりせはあやなくあたの名をや立なんと云歌なり女はかりの中なれはあたの名や立なんと用意してそこを出給ふなりそは御許また宰相君を女郎花に譬たるなりかく誦して退出し給ふ藤の三位のうちとけぬ用意のいとをなめきたるを人はをさなしと常にあなつりかろしむるはわろしといふ也○物語にほめたる男　たとへは源氏物語には光源氏君なといふやうに是とさせるにはあらて唯廣く物語書にはかゝる所を常に稱美して書るなれはかく云るなり下に物語の女のこゝちもし給へる哉と有も同し○しか　こその結言なり

かはかりの事のうち思ひ出らるゝもあり其折はをかしき事のすぎぬれは忘るゝもあるはいかなるそ

上作の女郎花の戯又藤の三位の日すさみなとをさして云るにて過にし事ともを後に思ひ出るまゝに書つらねたる事故に此書は日次に見聞ことを書るには非ること初めに云るか如し
はりまの守このまけわさしける日あからさまにまかてゝ後にそおんこはんのさまなと見給へしかはけそくなとゆゑ〳〵しくしてすはまのほとりの水に書ませたり
○はりまのかみ　道長公御記に寛弘二年十二月廿一日條に播磨守陳政と見へ又寛弘四年正月十五日播磨守陳政辭國申文來定輔朝臣依病也云々と見へ、たる同人なるへし類本傍注に行成と付たるはいかゝ其時參木磨大辨にて御產後五夜の和歌の序をかゝれし事記略にみゆ○まけわさ　こは何にまれ勝負を競ふわさには其まけたる方にてまけわさとて饗する事の有しなり此わさは土御門にての事か又何々なりけん其序はしらねとこゝの意は按に播磨守の碁の負わさの饗應の日は御許は里に下たるにやしはらくとて外へ行し日にて其日の事は見さりしを返りきて翌日なと御盤のかさりなと見し時洲濱にかなの歌有しよしを中宮へかたり申せしなるへし○あからさま　物語書等に常に多く見へたる詞にてカリソメ又俗にチョットなといふ意なり左傳に咋をアカラサマと訓る註に暫也と又歌題に白地戀をあからさまなるこひと訓り○こはん　旁に碁盤とせり碁の負わさなれは碁盤もさることなれと負業といふ事は必らす其まけたる日に爲るわさとも聞へす翌日なとにも在る事と見ゆれは本御はんとありしを假字こはんと書たるなれは碁盤の事にはあらす故に今は御はんとせり御膳の御臺盤なり碁盤とするときは此句の下に詞足らす華足といふものは御食の御臺盤の類には物に見ゆれと碁盤なとやうの物にはあるへき物とは聞へされはなり扱まけわさの日の饗膳の事にて其饗膳の盤に設けたる華足のことゝ見ゆへし稻直又云ふ旁註に碁盤とせり碁の負態なれは碁盤に風流なる事を造りなして飾る事かとも思はるれと然にはあらし御盤なるへし御膳の御臺盤也下に御產後五日夜條に御ものまゐるとて云々白き御盤もてつゝき參るとある御盤に同し花足といふもの御食の御臺盤の類にあ

る物にて碁盤やうのものには有とも聞へす其負態の日の饗膳の盤に設たる花足のことなり師大秀翁云此段はたゞ彼うたを載むとて書出たれは大に文を略きたるものにてさたかに聞へさるか如し按に御祭といへるか即彼洲濱臺の事にて花足も其あしなるへし山崎弘泰云是は其翌日なと負態の饗膳も何も過きたる跡を見らるゝなるへけれはたゞ其日の風流に造りたる洲濱臺のみ其序に殘りて有へし食器等はみな取入てそこにあるへきにあらされは師の説の如くなるへくおほゆ扨文意はまけわさの客人の其席をチョット退出したる間に御許のそこに行て見られしかは饗膳なとの華足もゆる〳〵しくして有しにそこの洲濱に御許の歌をかゝれしと也されはゆる〳〵しくしてを句にて其下に有しなとやうの字を加へて心得る格なり○すはまのほとりの水に書ませたり　洲濱は今俗に島臺と唱るもの則ち洲濱の形の殘れるにて其古き圖は類聚雜要抄榮花物語拔抄等に見へたり此臺には時によりてさま〳〵の作り物して餝る事にて古今著聞集第五東三條院皇太后宮の撫子合の時も洲濱に沈のいはほ（本にいかほと有は必いはほの誤なるへし）をたてゝくろはうを土にてなてしこをうゑたる云々なとも見へたり爰も其洲濱の作り物の水に此歌をかきませたるにて墨もて書るにはあらすほとりの事按に此時の洲濱の臺には海邊のさまを餝れるにて其餝物の洲濱のほとりの水に歌書たる意ならん○見給へしかは　御許のみつからみたるなり給へといふことはこゝは中宮の御前へかたり申すか如き書さまなれは宮をかしつきて云るなり上の侍りしかと有詞も同し

きのくにのしらゝの濱にひろふてふこの石こそはいはほともなれ

○しらゝの濱　催馬樂にきのくにやしらゝの濱にましらゝの濱にきてゐるかもめはれ其玉もてこ云々玉勝間卷九に白良濱は湯崎鉛山と瀬戸との間にありて里人はしら濱といへり此濱の眞砂遠く見れは雪の如しとあり萬葉卷十二に「たくひれのしらはま波のよりもあへすあらふる妹に戀つゝそをるとあるも同所ならん○はまにひろふ　圍碁のとき敵の石を打とるをはまといへり此事は花野卌子に委しく云へるを見るへし○このいし　此石に碁の

石を兼たりこの字清てよむへし〇一首の意は恭子をよめるに祝の心を結ひたるならん負たるをいつ迄もといふ意にはあらし

あふきとものをかしきを其頭は人々もたり

此一句おのか見たりし本ともには皆あり上條にも下條にも用なしかれ按にもと是も一條なりしを始軸終の漏たるなるへしとまれかくまれ衍て聞ゆるを今略き捨むもさすかになん

又此一句前後のつきなきは勿論なれとも彼洲濱の邊なとに扇のありつるを見て面白き扇なりし事をふと書おけるにて前後漏れたるにも非さるへし此負態の段も甚粗なる記しさまにてたゝ歌を載たるのみなり

又おのれか此一句前後に緣なくはなれたりもしは言なかき一條なりしに始終のもれたるならんかといへりしを師大秀翁の按に彼洲濱のあたりなとに扇のありしか風流の樣なりし事を思ひ出てふと書出したるなるへしされは上下漏たるにもあらし此記すへて過にし事を思ひ出るにまかせて書つるなれは風流なる扇を持事の其頃流行しを思ひ出て書たるなりと考られぬ

八月廿日餘の程よりは上達部殿上人ともさるへきはみなとのゐかちにてはしのうへたいのすのこなとにみなうたゝねをしつゝはかなうあそひあかす琴ふえのねなとにはたと〳〵しきわか人たちのとねあらそひいまやうたともゝ所につけてはをかしかりけり

〇上達部　三位以上宰相以上を云〇殿上人　四位以下又一説に四位以下六位まても昇殿を聽されたる人をいふといへり禁秘抄に上古は百人にをよふと見へたり〇とのゐかちにて　とのゐは殿に居るの義なるよし鈴屋大人の説にしたかふへし一説にはとのいにて殿寢の義とせり夜居僧なとのゐと同くて殿居とする方穩かなるやうなりかちは勝にて里居と殿居と對する詞にて其頃は里居はまれ〳〵にて此語居給へる方の多きをとのゐかちといへるなり〇たいのすのこ　たいは對屋なり卷三土御門行幸條に西對は上達部の御座東對は中宮の御所たるよし見へたり爰も則ち其對屋なりすのこは簀子椽にて階の上に對したる詞なり〇とねあらそひ北山抄江家次第等祈年祭條に刀禰殿と云言見へ又

大節に刀禰召と仰ことは六位の輩をいふと見へたれはこゝとは異言なるへし按に爰を榮花物語にはわかきんたちなとは讀經のあらそひ今樣歌ともこゑをあらそはせなとしつゝろんし給ふもをかしう聞ゆとあれはとねは讀經の誤なるへしど經とありしを經をねと寫誤れるにやされは續經あらそひならん辨内侍日記にかようの月の夜は村上一條院の御時はわか上達部殿上人なといまやううたひと經あらそひなと侍りけるに參りてあらそふ人のなきこそいと口をしけれとあるは此記なとをさすか何れにまれこゝの證となるへし宇治拾遺に小式部内侍中納言定賴卿の經にめてたる事もあり諸本とねあらそひとあれと榮花物語にこゝの事をわかきんたち云々し聞ゆと見えたり偖このわさは音聲の善惡を爭ふ事ならんか宇治拾遺新猿樂記一音二辨の事前に記せる牛若と辨慶との事續古事談堀川右府の事讃岐内侍日記枕草子なと參へ見るへし○いまやう歌　按に今樣歌ははやく此頃よりことふりたる樣にてあまり好ましからぬ物にや云けん手習卷にいまやうはをさ〳〵なへての人の今はこのます

なり行物なれは中々めつらしく哀に聞ゆ云々とも有てこゝに所につけてはをかしかりけりと殊更に云ふ詞心を付へし

宮大夫なりのふ左宰相ノ中將經房兵衛督實成みのゝ少將なりまさなゝとしてあそひ給ふ夜もありわさとのみあそひは殿おほすやうやあらむせさせ給はす年頃さとゐしたる人々のなか(中絶)たへを思ひおこしつゝ參りつとふけはひさわかしうて其ころはしめやかなる事なし

○宮大夫なりのふ　大系卷六恒德公二男大納言中宮大夫民部卿長元八三薨六十九中宮大夫齊信卿姓氏未考枕草子卷十一成信中將は入道兵部卿ノ宮の御子にてかたちいとをかしけに云々と有は異人ならん歟兵部卿宮は致(ムネ)平親王なり○左宰相中將經房枕草子につねふさの中將さうの笛云々春曙抄に經房は西宮左大臣高明公の三男長保三年八月廿五日任左近中將とあり道長公御記寛弘二年三月十日條に頭中將經房又同年六月十九日任參議の事見へたり○兵衛督實成　師輔公の孫公季公の子道長公御記寛弘三年七月三日條に藏人頭同十九日條に左近中將と見へたりさて此日記に人の名を官の下に小

記せるは後人の所爲なるへし爰も本は宮大夫左宰
相兵衛督なと有けんを見る人かりそめにちいさく
註しけんと覺る旁に本行に大書たるはあしかれ今
は次々あまた見へたる例によりてみな小註に改直
しぬ猶此事は下にも云へし此兵衛督の下の實成の
二字諸本になかりしを例によりて今補ひつ○みの
ゝ少將なりまさ　道長公御記寛弘五年十月十七日條
に右近衛權少將源朝臣濟政任別當と有枕草子に道
方弟阿波權守とあり又宇多皇子敦實親王四世濟政
少時讃岐近江播磨守贈位の部に濟政は元從四位下
近江守長久二年卒贈從三位○みあそひ　管絃の遊
をいふ委しきは古事記傳に見えたり○殿おほすや
うやあらん　中宮御産の御惱なとによりて道長公
のわさとのみ遊ひもし給はぬなるへし○としころ
云々　是も御産の事ちかくなる故に女官達のまゐ
りあつまるなり○さわかしうて　契本にさかしう
てとあるはわの字の漏れたるなり○其頃は　傍に
そのいろはと有りいはゐの字の十の落たるにて其
ころの誤ならんと思ひしに打あひて契本にころと
あれはあらためつ○なかたえ　中絶なり

廿六日御たき物あはせはてゝ人々にもくはらせ給ふ
まろかしゐたる人々あまたつとひゐたり

○廿六日　八月なるへし○御たきものあはせはて
ゝ　後成恩寺關白兼良公尺素往來に合香者云々是
號薫物深秘其方軟沈香丁子貝香薫陸白檀麝香以上
六種者毎方擣從和合加詹唐而名梅花加鬱金而名花
橘加甘松而名荷葉加霍香而名菊名加零陵而名侍從
加乳香而名黑方とありて煉香を調合する事なりは
てゝといふ言下のうへよりおるゝ云々と云へつゝ
く意なり○まろかし　圓の活言にて分レ圓なり今
の俗にマロメルと云猶下に目かけをまろめて又く
ゐほうをおしまろかしなといへり

うへよりおるゝ道に辨の宰相君の戸口をさしのそき
たれはひるねしたまへるほとなりけりはきしをんい
ろ〳〵のきぬにこきかうちめ心ことなるをうへにき
てかほはひきいれてすゝりのはこに枕してふしたま
へるひたひつきいとらうたけになまめかし

○うへよりおるゝ道　上のたき物合はてゝよりつ
ゝく意にて御許の中宮の御前より局に下る道にて
なり○辨ノ宰相ノ君　前の宰相ノ君と同人なるへし

○戸口　局の戸口なり局といふ言を略せり一本にさしのそきのさしの二字なし○はき　拾要抄装束拾要抄也下皆しかり　また男女装束抄源氏男女装束抄也下皆同し　に面蘇芳裏青○しをん　紫苑或書に云秋の初の色也河海に表すはう裏もえ黄拾要抄には面薄色裏青○きぬ　名目抄に衣又袷織物以糸縫鯖束帯之時紅打衣之外不用之　と有は袍の下衣歟要領抄装束要領抄なり下皆然り　に衣の事或は袙とも稱す云々また云く袍下衣也と有てこゝとは異ことなり○こきがうちめ　旁に濃擣目とあり拾要抄に平治秘記曰若少人或着打衣云々こきは名目抄に濃色十五未満用ノ染色ハフシカネ染也織物經緯共濃紫　と見えて唯濃薄と而已云るはみな紫色也又同書に薄色經紫緯白とも見へたり契本にはこきかうしめと有さらは濃香染にて香を深く炷染たるといへるならん歟それもさる事なから濃と云色ならねは如何香ならは深くとことはいはめ又染も少し如何しけれと是は炷といふ事を略てかくも云しならんか又濃香染はいろ〳〵の衣の方に愿意かされとおたやかにも聞へす今はしはらく濃が擣目の方に隨へり又枕草子難有物の條にかいねりうたせたるにあなめてたと見へておとすとあり末摘花巻にかいねり好めりとあり河海に打取張取なとありて男女装束ウチノリ本体也板引のりなとは略儀なり又同書十三頭中將齊信直衣下御衣紅のいろうちめなとかゝやくはかりそ見ゆる云々こきは紫色の經緯共に濃染たる其れか打目も心を籠て他にことなる打目のよろしきなり○らうたけ　玉小櫛巻五巻に俗にあいらしきと云意なりと有○なまめかし　生めかしにて物の成調はさるは何もみなよわ〳〵しく美麗しき義なり轉りては色めく事にも云り旁契本ともになよめかしとあれとよはまの誤なる事うつなしかれ今まに改む

ゐに書たる物の姫君のこゝちすれはくちおほひをひき遣て物語の女のこゝ地もし給へる哉といふに見つけて物くるほしの御さまやねたる人を心なくおとろかすものかとてすこしおきあかり給へるかほのうちあかみ給へるなとこまやかにをかしうこそ侍しか大方もよき人のをりからにまたこよなくさゝるわざなりけり

○物の姫君　某姫君某姫君と云をひろく物のと云るなり又初にはもと物語の姫君ト有しを語の一字

漏せるならんかとも思しは中々にて次の物語の女
と有則此物の姫君と同しけれはわさとこゝは物の
とのみ云なりけりさては繪と而已いひて物語繪な
る事もおのつから知るへし○くちおほひ　前に顔
は引入てとある首尾にて則口に覆ひたる衣の事な
るを體に云るのみ口覆ひとて別に物の有にはあら
す○見つけて　地よりいふ詞なり旁又解に見あけ
てと有今は契本に隨へり難ならんと怪しく目覺て
御許なりけりと見つけたるさまは契の方少は增り
たらん○ものくるほし　ものくるひの活言なるへ
し宰相君の詞なり御さまやを一本に御さまなりと
あるはあしゝ○おきあかり給へるかほの　一本又
群に給へるを給つるとあれと今は不レ用○大方も
よき人の　此にて何すへし師云此辨[格別]宰相君常體も
よき人なるか又かゝる折からに付てこよなう見增
するよし也○こよなく　玉小櫛云々此言は必す他
に對てくらふる事の有時につかふ言にてたとへは
かれよりは是はこよなくまされりなとやうに云て
くらへていたくかはる意なりされは俗にかくへつ
にといふにあたれり云々猶本書に委しこゝも常も

上品の人からといふにくらへ云るにて常も上品な
るに競て今又格別なるなりとの意明らかなり
九日菊のわたを兵部のおもとのもて來てこれとの丶
うへのとりわきていとようおいのこひすて給へとの
たまはせつるとあれは
○九日　九月なり○菊のわた　世諺問答[一條冬良公御説]菊
に綿を着する事いつの頃よりとも見へ侍らす只菊
を翫の餘意霜を防かんとの志とおほへ侍る枕草子
に九月九日曉方より雨少し降りて菊の露もこちた
くそほち覆ひたる綿なともいたくぬれうつしの香
ひもゝてはやされたる云々幻卷に九日綿おほひた
る菊を御覽して云々なと見へて此頃や此事の初な
らんと思ひしに後撰集[秋下]に雅正の歌のはし書にと
なりに住侍ける時九月八日伊勢か家の菊に綿きせ
せにつかはしたりけれは云々とあれははやくより
の事也けり幽齋無名抄に云九月九日菊に綿かつけ
たる所「萬代を人のわかゆる菊のうへにまゆをひ
ろけて露を待かな重陽より露霜にあてしとて菊に
綿きせらるまゆはかふこのわたを言也着綿は九月
九日に限る事にて菊を賞翫の心なるへし堀川二郎

百首九月九日といふ題にて兼昌「いくへともいさしら菊をえこそ見ね綿きせなから立る朝は九日の菊の盛ならぬ年は綿にて菊の花のなりを作りて枝につくる事也又近き頃菊半開といふことを通茂公「さく菊はまたむら／＼のまかきをも花につくろふ今朝のきせ綿これらの歌を考へしと有此露霜にあてしとて綿を着ると云る説よろしかるへし綿にても花を作るは後の事とおほし○兵部のおもと　契本にかく有傍には兵衞とあれと此下には二本共に兵部のおもとゝあれはこゝも契本によれりおもとは和名抄に侍従於毛刀比刀萬知岐美これ云々よりの給はせつるまて兵部のおもとの詞也これはその人をいさゝか敬ていふことはにておまへ君なと云へる差別の事消息文例にてしるへし○とのゝうへ　道長公北方上東門院御母宇多天皇御末流雅信公御女母穆子名は倫子と申す○おいのこひすて給へ云々　貫之家集に清和の七皇子のみやす所の八十賀屛風歌の詞書に繪のさまを九月九日老たる女菊しておもてのこひたると有をおもへは當時菊もて面をぬくふわさの有しなるへし

菊の露わくるはかりに袖ぬれて花の主にちよはゆつらん

此歌は新勅撰集賀部に九月九日従一位倫子菊の綿を給ひて老のこひすてよと侍りけれはと詞書に出せり○わくるはかり　群また紫式部家集にわかゆはかりにとあるはあしゝはかりはほとゝ云意にて彼壬生忠岑の「あかつきはかりうき物はなしと云るに同し○袖ぬれて　新勅撰にはふれてとあれと露わくるはかりとあれはぬれての方増り又本歌による時もぬれてといふ方まされり○花の主　こゝは倫子をさしていへり後撰集秋下に雅正「露たにも名たゝるやとの菊なれははなのあるしはいくよなるらんさて一首の意は老のこひ捨よとて綿を給はせし嬉しさに露深き菊をわけし程に袖さへぬらし侍りさて千代の齢はおまへに譲り奉るへしとて却て倫子を祝ひたるなり本歌古今集秋下に素性法師「ぬれてほす山路の菊の露の間にいつか千年を我はへにけん此本歌のは實に露に濡るなるを嬉しさにぬるゝ袖は菊の露を分し程にとゝりなし又われはへにけんといふを花の主にゆつらんと取替た

るなり誠に上手の所爲にて匂ひ深し
とて返し奉らんとする程にあなたにかへりわたらせ
給ひぬとあれはやうなさにとゝめつ
○返し奉らん　倫子より賜ひし綿を返上し奉らん
とするなり歌の千世はゆつらんといへる即このわ
たを返し奉る由なり○あなたにかへり　倫子中宮
の御前に來居給ひて兵部もて菊の綿を賜ひしか其
綿に此うた添て返し奉らんとせし時は此方既に吾
御座所の間に歸り給ひし後なれは殊更に奉らんも
無益の事なれはさて止しとなり○やうなき　益無(ヤクナ)
さになり

其夜さり御まへに參りたれは月をかしき程にてはし
にみすの下よりものすそなとほころひ出る如何(ル字)ほど
〳〵に小少將君大納言君なとさふらひ給御ひとりに
ひと日のたきものとうてゝこゝろみさせ給ふ御前の
有さまのをかしさつたの色のこゝろもとなさなとく
ち〳〵聞えさするに例よりもなやましき御けしきに
おはしませは御かちともゝまゐるかたなりさわかし
きこゝちしていりぬ人のよへはつぼねにおりて玄は
しと思ひしかとねにけり

○はしに　端になり○ほころひ出る　字鏡に綻也
解也保己呂比綻斷綻澗縫また説文に衣縫解也とあ
りて衣の縫糸の解るを本にて含たる花の開くにも
准へり此も衣の解たるを云ふにあらすみすの下よ
り衣の裾のもれ出たるを准云にてみすの方をほこ
ろひと云るなり又もと亂るを云ふ事ならんを轉て
は濫(サミ)たるを云も襤亂るの義にて亂る方の詞なりこ
ゝも裳の裾の亂るゝを云るなり濫れたるにはあら
す出るの。る如何上よりかゝる辭なしたりを誤れる
かこゝはたゝ其夜の氣色を云るのみなり○ほとほ
とに　侍らひ給ふへかゝれり身分の程に隨てなり
○小少將君大納言君　ともに中宮の女官也大納言
君は榮花物語初花の卷に中宮には此頃殿の上の御
はらからにて藏人の辨といひし人のむすめいとあ
また有けるを中の君いとおもはすにて絶にしかは
此頃中宮に參り給へり中略大納言君とつけたり云
々とあるは則此君のことにて藏人辨は敦實親王の
御孫にて雅信公の子時通卿といひし人なりその女
にて時通卿は道長公の御室倫子の兄なればなり藏
人辨時通の女大納言君殿の上倫子の兄なれは上の

姪にて中宮の從弟なり其比夫則理に絕にしかはなり則理は醍醐皇子中務卿代明親王の御子源重光公の子なり掛女官に大納言といふ名は禁秘抄に云不レ謂ニ是非一二三位典侍號ニ上臈一著ニ赤青色一候ニ御陪膳一也不レ補ニ此等職一聽レ色大臣女或大臣孫也猶或不レ聽或聽レ之禁中無ニ小路名一仍雖ニ最上一號ニ大納言ニ云々とあり職原抄に此文を出せる參考に云女房不レ號ニ小路一故上臈第一號ニ大納言一也小路者綾小路錦小路等以爲ニ女官名一類也とあり今按に此註に三位上臈を大納言と云といへるなりこは僻言にて右本文を考るにまつ不レ補ニ此等職一云々と有て内侍にはならすして色を聽され或は不レ聽とも其聽されたる輩と同しく宮仕するを大納言と云るなり上臈第一とは典侍の事なり典侍を大納言と謂意には非す内侍譬へは此御代にては辨内侍左衞門内侍なとの如く某内侍とよへは別に大納言は大納言なり○ひとり　薰爐を云○ひとひのたきもの上の廿六かの條にまろかしたるとある首尾なり○とうてゝ　土中に埋たりしを取出てなり○心もとなき　覺束なく危む意にて暮秋に蔦の色こく散かたになれるをアヤブミアンジルやうの意なり新撰字鏡に忙悄を己々呂毛止奈加留帝木奈にひたふるにこめきてやはらかならん人をとかくひきつくろひてはなとか見さらんこゝろもとなくともなほし所有こゝちすへし云々とありもし此なきはなさを誤れるにや枕草子に梨花の事をさめて見れは花ひらのさきにおかしきにほひの心もとなうつきしあり師云心もとなきは十分ならぬ意にて今少したに色つきてあれかしと思ふ意なり○口々に聞へさするに　蔦の紅葉のまたしき評判するなり○例よりも云々　よく聞へたり○かたなり　例御快くて加持も怠り給ふ方なるを御違例なれは事企て加持參らする方也則ち怠れる方と企催方との方なり○さわかしけれは　加持の事企てさわかしきなり式部のかゝりならねは○いりぬ　一本にまゐりぬとあるは誤なり騒しけれは己か局に引退たるなり○人のよへは　寢覺て後の事を先いへるなり人のよへには目覺て氣の付たるに不思睡眠りたりといへるなり

夜中はかりよりさわきたちてのゝしる十日のまたほ

のゝとするに御衣ゝらひかはる白きみ丁御帳にうつらせ給ふ殿より初め奉りてきんたち四位五位ともたちさわきて御丁のかたひらかけおまし坐ともてちかふほといとさわかしひひと日いところもとなけにおきふしくらさせ給つ御ものゝけともかりうつしかきりなくさわきのゝしる

○十日　九月なり道長公御記九月十日ノ條に子時許リ從ニ宮御方一女房來テ云有ニ惱御氣一去參入有ニ御氣色一仍テ東宮傅大夫遣ニ消息一云參來他人々多參リ終惱晴給とある子時は九日の夜の曉にて爰に夜中はかりと云る是なり今もそれに准へてこの夜中はかりより云々の詞をも十日條に定つ○白きみ丁　源禮委記に自子剋許有中宮御産氣仍テ寅剋宮司等參入撤尋常御裝束立白木御帳御几帳屏風敷白端御坐等垂母屋御簾其中立并白御几帳云々今按に御産の時は都ての御調度を委く白く調る例にと御帳の帷も白きに懸替給ふ也猶下にいはん○たちさわき　契本又群にはおほくさわきとあり○こゝろもとなけに　御産のもよつし有なから御子のうまれ給はぬを待遠なるよしの意なり○くらさせ給つ　十日一日のさまをまづかく云ひとちめ置て扨次々又其事を細かに云り此例常に多し○御ものゝけ　常時物怪とて惱の時は其病人にのり移りて口はしりなとしけるなり物語書等にはあけてかそへかたし○かりうつし　病人の物氣をさるへき人を立おきてそれに祈り轉して其病人の惱を輕からしむるの所爲なりかりうつしのさまは枕草子に見へたり

月頃そこらさふらひつる殿の内の僧をはさらにもいはす山々寺々を尋ねてげむざと云かぎりはのこるなく參りつとひ三世の佛もいかにかきゝ給ふらんとおもひやらるおんやうしとて世にあるかきりめしあつめてやほよろつの神もみゝふりたてぬはあらしと見へきこゆみすきやうのつかひ立さわきくらし其夜も明ぬ

○そこら　若干とも云て數多きなり○殿のうちの僧　此頃法性寺なければ道長公御記寛弘三年十一月四日條に堂五僧といふ事あり是なるへし堂五僧とは同年十月廿五日條に前大僧正觀修寺坐主院源律師慶命兼摠實誓のよし見へ又堂とは法性寺の五大堂なるへし同年七月廿七日建立のよし御記に委

し〇山々寺々　こは唯山々とのみいふ意なるを寺々と再ひ重ねいへるは此事は唯甚しくいへるのみなり中昔は寺をさして山とのみいへるなるへし新儀式巻下賑給幷施米事の條に六月中上卿奉勅差遣校書殿於京邊山々令巡註僧名奏之隨僧數充給料米令分行之とあり此山々も都へて平地の寺をもさしていへるなれは是を以てこゝも唯山々とのみいふ意なる事をさとるへし〇けんさ　驗者にて行ひによく其驗ある僧をいふ〇のこるなく　旁にはのこりなくとあり今は契本又群等に隨へり〇參りつとひ　の下て字脱たるか又は此にて句にてつとふと切へきか下のおもひやらるとあるにつとひと云さしては不應也必すて字落たるへし下の陰陽師の所召集てとあるてに同し〇三世佛　後撰集春下に遍昭「をりつれはたふさにけかるたてなからみよの佛に花たてまつる〇いかにかきゝ給ふらん　群にかくあり其外の本みないかにかきり給ふらんとあり師云いかにかきゝ給ふらんとある方よろし次に神に耳ふり立又はあらしと云も聞給ふ事にてともに通はせたるなるへしいかに限り給ふらんとては何共不聞なり〇おんやうし　職原令に陰陽寮頭一人助一人允一人大屬一人少屬一人陰陽六人陰陽博士一人陰陽生十八〇やほよろつの神　大祓詞に自今日始弖罪止云布罪波不在止高天原爾耳振立聞物止馬牽立氐云々此大祓のは神の耳振立る意にはあらねとこゝにかく云るはたゝきゝ給はぬはあらしとの意なり神の耳振立聞給はん事を云とて其准へに耳振立てきく馬を引立るなりこゝはそれを直に神の耳振立聞給ふよしに云るなり〇御誦經の使　是は召なき寺々へ使をたてゝ御祈の誦經をせさせ給ふ使なり〇其夜もあけぬ　十日の夜も御産なくて空しく明しとなり

御丁のひんかしおもては内の女房參りつとひてさふらふ西には御物のけうつりたる人々御屛風ひとよろひをひきつほねつほねぐちには几丁をたてつゝ驗者あづかり〳〵のゝしりゐたり南にはやむことなき僧正僧都かさなりゐて不動尊のいき給へるかたちをもよびいであらはしつべうたのみゝうらみゝこゑみなかれわたりにたるいといみしうきこゆ

〇御帳の云々　九月十一日の條なり〇内の女房

下巻三に見へたる五人の女房等なるへしさふらふを契本にとふらふと誤れり○ひとよろひ　一双と云ことにて屏風二つを云巻二に御厨子一よろひとあるも御厨子二つをいふ也よろひは粧飾　ことにて太平記平家物語等に甲冑をよろひて或は甲冑をよろはんとき云々又十訓抄の巻に十三位家の前によろへるたくひ數十騎打立て云々かく甲冑なとの詞なくてたゝよろへるとのみも見へたり萬葉の取與呂布天乃香具山云々の與呂布も同意なるへしされは飾の義にて一ッ二ッの數には拘らしかとも云へけれと必此頃にては物二つを云ふ詞なり上若菜巻にらてんの御厨子ふたよろひに御衣筥よつすゑて云々と有は源氏君四十御賀ノ折の事にて何も皆四の數に調へたれは此御厨子も一よろひ二つの事なれは二よろひにて四つなり御衣筥も厨子一つに一つゝ居たるなり又此記巻三に手箱ひとよろひかたつかたには云々と有も必す二つなる事知らるかたつかたは二つの中の一つを云るなり又よろふといふは不徧ことなく足ひ滿る事なり即一具をひとよろひと訓甲冑をよろひといふも

身をよく固めて不足のなき事也數の萬も同意にて數多く足るよしの名なるへし○ひきつほね　旁には御屏風ひとよろひをひきつほね〳〵くちにはとよみたれとわろしひきつほねと諸切て扨つほねくちには云々と下へつゝけて讀へし下につほね〳〵ともあれとそことは異なり此引つほねの詞上のつほねの所と可考合○あつかり〳〵　下の〳〵はての誤にて預りてのゝしりゐたりならんかと思ひしを榮花物語峰月巻に御物のけともかすしらす出來てのゝしりさわくおの〳〵かりうつして僧ともあつかり〳〵に加持しのゝしれと云々とあれは猶本のまゝ也○不動尊　こゝにことに此佛をしもえり出たるは其形外の佛等よりは忿怒の相を現していとおそろしけなれは大音あけて祈るさまのおとろ〳〵しきに相應せしめたる也一本よひいてゝとあれとあしゝ○たのみゝうらみゝ　旁にはたのみうらみと而已あれと契本又群にかく有そよろしき俗に頼たり恨たりと云意なりたのむは其佛の本願なとに依すかる由なりうらむは丹誠に祈れともとく驗なきを恨むるなり扨拾芥抄を按に九月は産婦南

に向ふをよしとすこゝのさまも中宮南向に御座をしつらひたりと見へたり

北のみさうしと御丁とのはさまいとせはき程に四十餘人そ後にかそふれはゐたりけるいさゝかみじろきもせられす氣あかりて物そおほへぬや今里より參る人々は中々ゐこめられすものすそきぬの裾ゆつらん方も知らすさるへきをとなゝとは忍てなきまとふ

○北のみさうし　土御門にて中宮の住せ給ふ所なり曹子は今俗部屋といふ程の事と聞へたり桐壺の巻にもとの淑景舎を御曹司にてと有は源氏君の御曹司なり○中々　例の却ての意にはあらて此は今俗に中々といふに同し○居籠られす　狹き所に四十餘人居て窮約籠られぬなり○ゆつらん方もしらす　契本又群にはゆくらん方もしらすと有れと宜とも聞へす一本に行分かたもしらすと有誤なるへし○さるへきおとな　中宮に元仕へなとして御前近く參らまほしきを人入こみて所もなくさて又御産も輕からぬを思ひて泣惑ふなるへし○なきまとふ　御産の安からぬをなけくなり

十一日のあかつきに北のみさうしふたまはなちてひさしにうつらせ給ふみすなともえかけあへねは御几丁をおしかさねておはします僧正きやうてふそうつほうむそうつなとさふらひて加持まゐり院源僧都きのふかゝせ給し御願書にいみじき言とゝ書くはへてよみあけつゝけたる言の葉の哀にたふとくたのもしけなる事かきりなきに殿のうちそへて佛ねむしきこへ給ほとのたのもしくさりともとは思ひなからいみしうかなしきに人々淚をえほしあへすゆゝしうかうなとかたみにいひなからそえせきあへさりける

○寛弘五年九月十一日後一條天皇御降誕○十一日　前の御丁の東おもては云々より十一日の事なるを又さらにかく書出て再ひ其さまを細かに云る一格なり○二間はなちて　二間を一間に隔の障子を取放たるなり○御几丁おし重ねて　みすの隔かけあへねは几帳にて見かへしをして急にしつらひたるなり○僧都ほうむ　道長公御記寛弘二年十月十四日條に到木幡寺造作漸成山座主法務僧都法成寺僧等到長谷云々又同四年四月四日條にも法務東寺別當狀持來○僧正きやうてふ　未考○そうつ下そうその所に論そうそといふ人とある同人にて

つはその誤かさて僧正きやうてふ僧都法務そうそにてそうそも官は僧都なるへし猶下にいふを考へし〇加持まゐり　旁に加持まゐるとある今は一本又契本によれり〇院源僧都　道長公御記寛弘二年同三年には律師と見へ同四年よりは僧都と見へたり又道長公御惱のときも此僧都をめしてみくしおろさせ給ふ長保四年二月花山慈徳寺にて女院の御法事行給時も講師のよし榮花物語に見えたり〇さりともとは思ひなから　僧達の御加持に道長公まて言そへて祈らせ給へは必御本快あるへしとは思ひなからの意なり〇ゆゝしうかうなと　かやうの目出たききわに涙こほすは忌々しき事なれはかうな泣そとたかひに云あひつゝもえこらへやらすとなりなは勿にて下に泣そといふことを省きたるなり契本一本ともゆゝしうかうなしとあれと聞えす
〇かたみ　たかひなり

人氣おほくこみてはいとゝみこゝちもくるしうおはしますらんとてみなみ東おもてにいたさせ給ひてさるへき限このふたまのもとにはさぶらふ殿の上さぬきと宰相君くらの命婦御几丁のうちに仁和寺僧都君三井寺、内供君もめ　いれたり殿のよろつにのゝしらせ給御こゑに僧もけたれておとせぬやうなり

〇ふた間　前の北御曹子の二間なり〇仁和寺僧都、君　枕草子に文ともをはしめのは僧都の君のぬかをさへつきてとり給ひてき又末に僧都君赤色のうす物の御ころも紫のけさいとうすき色の御そともさしぬきゝ給ひてほさちのやうにゝて女房にましりありき給ふ云々又僧都君の詞にそれはりうえんにとうべと自らをの給ことと見へて隆圓は道隆公の御子母は高内侍なり愛の僧都君も此人にや〇三井寺内供君　賴忠公の孫公任卿子入圓ならん歟〇けたれ　消たれてなり

今一座にゐたる人々大納言君小少將君、宮内侍辨、内侍中務、君たいふの命婦大式部のおもと殿のせんじよいと年へたる人々のかきりにて心をまとはしたるけしきとものいとことわりなるにまた見奉りなるゝ程なけれどたくひなくいみしとこゝろひとつにおほゆ

〇今一座　別座席なり〇大納言君云々　七人は年經て仕奉る女房たちにて御産の安からぬに心をまとはすも斷なり紫のお許は新參にて馴奉る程もな

けれと御産の事を案し奉る事に心のふかくかゝるよしをいへるなり古參と新參と對へていへる也○大式部の御許とのゝせんしよ　按に殿の宣旨よとは註釋の詞なり大式部のおもとゝ殿のせんしと女官二人の如くも聞ゆれと卷二に大式部は陸奥守のめ殿せんしよとあるも註にて一人をさして云る事明かなり○また見奉りなるゝ程云々　此事凡例にも云り猶卷四にいふへし是は此御殿に仕奉る事の程なくてよく馴さる事なり

又此うしろのきはにたてたる几丁の外に內侍のかみの中務のめのと姬君の少納言乳母いとひめ君の小式部のめのとなとおし入來てみ帳ふたつかうしろのほそ道をえ人もとほらす行ちかひ身じろく人々はそのかほなともみわかれす殿のきんたち宰相中將かねたか四位少將まさ通などをはさらにもいはす左宰相中將經房宮大夫なと例はけどほき人々さへ御几丁のかみよりともすれはのそきつゝはれためともを見ゆるもよろづはちわすれたり

○內侍のかみの中務乳母　內侍かみの御乳母中務といふ事をかくいへるなり下二人も同し契本又群には內侍のかみの乳母とのみ有は誤なるべし內侍のかみは道長公御女母は倫子中宮の御妹妍子なり榮花物語初花卷寛弘五年春に京極殿にはかんのとのと聞へさするは中姬君におはします云々御年十四五はかり云々と見へ續世繼藤波條に道長公御子達を云る所に妍子と申は女院と同し御はらからにおはします寛弘元年十一月內侍のかみになり給てやかて正四位下せさせ給十二月に三位にあからせ給七年正月に二位にのほり給て同年二月に三條院東宮と申し女御に參り給位につかせ給て寛弘八年八月に女御のせんしかうふり給長和元年二月十四日中宮に立給ふみかと位さらせ給ひて寛仁二年十月十六日皇后宮にあかり給萬壽四年九月十四日三十四にて御くしおろしてやかて其日かくれさせ給にき云々と有○姬君の少納言乳母　姬君とは道長公の御女威子と申にて母は倫子後に後一條院の中宮におはしますなり榮花物語初花卷寛弘五年春に小姬君は九つとをはかりにていみしううつくしうひゝなのやうにとこなたかなたときされあるかせ給うつくし云々少納言のめのといとうつくしう守り奉る

にもよその人めにあらうらやましと見へたり○いと姫君の小式部乳母　契木には　こしふのめのとゝ有はきの一字脱落せるならんいと姫君は榮花物語初花卷にをと姫きみ二つ三つはかりにておはしませは中略御めのとの小式部君いとわかやかにてかき抱き奉りて參りむかふ有樣なへてにはあらぬかたち也云々と見へたりいと姫君とは道長公御女母は後に院の女御とよひ奉る母は高松上也○身しろく　身を動しよするなりたちろくの假字によればみちろくと書へき歟鈴屋大人の玉小櫛にたちろくとかゝれたりさらはみちろくかと云へり師云く和字正鑑にたしろくと云て未考トあるを春海翁の説に萬葉に萬志呂久といふ詞あり是を例として志のカナと定め志呂久は動くの義にて萬志呂久は目の動く事をいふ也と○かねたか　兼隆卿は道兼公の二男母は大藏卿遠重女也　○雅通　敦實親王の孫雅信公子道長公御記寛弘二年正月十日條に任藏人同五年十月十七日條に右近衛少將源朝臣雅通別叙當と見へたり○經房　契木種房とあり卷二にいふへし○はれたる日ともを　中宮の御椅御産安からぬを思て注师したる日なり○みゆるも　所見なりたゝ此方より見るにはあらす古今集に深養父「雲にもかよふ心のおくれねはわかると人に見ゆはかりなり是は此方より彼方に所見也○恥忘れたり御産の事に深く心をかけ惑て萬他事を忘れて恥をも不思なり

いたゝきにはうちまきを雪のやうにふりかゝりおししぼみたるきぬのいかに見くるしかりけんと後にぞをかしき御いたゝきのみぐしおろし奉り御いむことうけさせ奉り給ほとくれまどひたるこゝちにこはいかなることゝあさましうかなしきにたひらかにせさせ給てのちのことまだしきほとさはかりひろきもやの南のひさし高欄の程までたちこみたる僧も俗もいまひとよりとよみてぬかをつく

○うちまき　延喜式卷八大殿祭祝詞にいはく屋船豊宇氣姫命是稲靈也今世産屋以辟木束稲置於戸邊乃以米散屋中之類也御名乎奉稱氐云々祝詞考に散米は下の却祟神祭道饗祭なとによるにこゝは新宮に枉津日神の入來むを饗和て退らするなり産屋も其屋の守に木と稲を置米を散はかの悪神を饗し退らしむるよしなりとありて此産屋

に米を散も枉津日神の枉を追退らしめん爲なるへし公事根源献御粥條に粥をまく事見へ宇治拾遺巻一虚（ソラ）入水の僧ノ條に道に立なみたる見物の者ともうちまきをあられの降樣になか道まてらす師云な聖はいかにかくめはなにいるたへかたし云々又縣居雜錄に梅宮社記を引て産屋に梅宮の砂を散す事等見へたり○うちまきを雪の樣に降かゝり　此てにをは耳遠き心ちすれは按に後撰集雜三に「瀧つ瀬に誰しら玉をみたりけんひろふとせしに袖はひちにきと有て此歌も白玉をみたらしけんの意なり（らしの約りなり）さてこゝもうちまきを雪のやうにふりかゝせと云意なり群にうちまきのとあるは中々に後人のさかしらとおほし拾遺集春大伴家持「春の野にあさるきゝすの妻こひにおのかありかを人にしれつゝ○みくしおろし奉り　此頃かく云るは實に御髮をそり給には非す花鳥餘情に昔の尼はたれあまといふて額髮を喝食なとやうにはさむなり云々と有如く額の餝りを下していさゝか髮をそく程の事なるへし下に此中宮の御事をこちたきみくしはゆひてまさらせ給わさ也けりと有をも考合すへし枕草子にあ

まにそきたるちこのめに髮の覆ひたるを云々薄雲巻に此春よりおふすみくしあまそきの程にて又類聚雜要抄に尼櫛（アマクシ）法性寺教圓座主の關白左府に尋られける御答に尼櫛ニ是昔尼所ノレ指之櫛名也云々又考に是は昔の常の尼そきまてもなく頭の髮を少々そきて所謂三歸戒なとを奉授て佛弟子になり給ふ趣のみの事成へし○御いむこと云々　受戒の事は來世（コンヨ）の爲のみにあらす御命たすかり給はん爲の御祈に當時はせしわさにて夕顏巻にも乳母尼君の詞にいむことの印によみかへりてなん云々と云言見へたり狹衣巻に女二宮尼にならんと少將の內侍にの給ふ所に日頃はよろしくもやと待つるにけふなとはとまるへき心ちもせぬを佛のしるしもやと心みまほしくなん云々○のちのこと　御胞衣の事にて今俗にものちざんと云り神代巻に及レ至二産時一先以二淡路州一爲レ胞○もやの南のひさし　名目抄に清涼殿の條に母屋庇孫庇（或又庇巳上於二個事者不限此殿雖何殿可有其稱但南殿無孫庇歟）玉小櫛巻六にもはや身屋（ムヤ）なり身を古へはむと云る例多しさてむともとは殊にちかく通音にてもやと云なせるを母字をかりて母屋とも書るそは母を

おもと云故に借て書るのみなりおもやの義なりと云説はわろしさて身屋とは屋の中の眞中にありて主とある所なるよしの名なり俗言にも物の眞中を身といふに同し又云おもやは契沖の説なり契本群ともにもやのゝの文字なし○ぬかをつく　ぬかは姓名鑑額田部湯坐連條に允恭天皇御世被レ遣二薩摩國一平二隼人一復奏之日獻二御馬一疋一額有二町形廻毛一天皇喜之賜二姓額田部一也和名鈔には額をひた比とあり扱つくは額を地に衝當るの義又地に着くの意に古くより說來て古事記傳巻六にも師縣居翁云く迦豆久は拜を額衝と云如く水に頭を衝入てふ意の誤なりと云れたる如くおのれ（直稻）も初めはさ思ひ居たるを今按に此つくは宇奈都久の都久と同しく傚々頭を上下する形の名にて今の俗に餅つく米なとをつくと云も同く地に衝當るにはあらで杵を上下する形の號なり（譬ば撞くといふも撞木の動く形を云に同し）扱又額は地に衝當もすへき物なれとうなつくは頂つくの略言なるへければ頂は（和名鈔に顖後なりとあり）地に衝當へき物にあらす又額つくなとのやうに平伏し拜むわさにもあらす（祝詞にうなねつきぬきと有は頂つくの詞を以てかの額つくのやうになれかゝむをいふなれはぬきといふ詞を添たるなりぬきは衝拔といふ意にてはあらて唯つくといふ詞を强くいはんための言なるへければなり）唯立なからも居なからも頭をのみ打ふるわざなれは其打振方に付る名目なる事知るへし枕草子にぬかつき虫又哀なりさる心に道心おこしてつきありくらん云々と有るつきも打振形を云るなりもし又地の着なとの意ならは是等の詞もつけありくらんといはではかなはす故に袖を被く（此かつくは或は上に着の意歟又頭につくの意歟）　海士の潜く（或衝入の義可然歟）なとのつくとは詞は同しくて義は異なる歟且は海士の潜くも水に入時頭を動かす方をいふ袖を被くも其意にて云もてゆかは同意にも落めり後又按に和字正濫抄にかうふる下に後頼の「後の世にみたの利生をかぶらすはあなあさましの月の鼠やと云歌を引て鼠の咬に蒙らすはと縁言にいへり咬をかぶると云は頭振歟堅き物をは頭を斜に振て咬故なり云々あるによりて按に被（ハ音便）も本かぶるとき頭振るか故に云名にて縋も其意なり又今俗水を頭よりいかくるをかぶるといひ顔に衣を引着るをもかぶるといふ皆もとは言意同く其時頭振の義なるを今は唯衣を頭に着水を頭よりかくる方の號の如くなれり是をもて海士のかつく袖をかつく

のつくも本打振方の名なる事明かなり被字にかつくとかぶると二唱ありて義は同しき事彌おもひ合すへし

ひんかしおもてなる人々は殿上人にましりたるやうにて小中將の君の左頭中將に見あはせてあきれたりしさまを後にそ人々いひ出てわらふけさうなとのたゆみなくなまめかしき人にてあかつきにかほつくりしたりけるをなきはれ涙に所々ぬれそこなはれて淺ましう其人となん見へさりし宰相君のかほがはりし給へるさまなとこそいとめつらかに侍しかましていかなりけんされと其きはに見し人の有さまのかたみにおぼへさりしなんかしこかりし

○東おもてなる人々は殿上人にましりたるやうにて　此人々は女房たちをさしたる意なり殿上人の居る所に近けれは入交りたる如しとなり故に小中將君と左頭中將と見合たるなり○左頭中將　賴定卿なり一品式部卿爲平親王一男母は高明公女道長公御記寛弘五年十月十七日條に左近中將源朝臣賴定爲別當と見へたり○あきれたりしさま　御產の安からぬを思ひまとひたりしかからうして御產いてきて安心して互に顏見合せて息衝きたるさまを云なるへし○けさうなとのたゆみなく　けさうは假粧なり小中將君のさまをいふ○宰相君　上十八丁に繪に書たる物の姫君のこゝちすれはなとありしを思ふへし○めつらかに　常珍らしといふとは大に異にて思ひもよらす例に違たるやうの事を云言也俗にトンタコトなといふ意也こゝは宰相君のみならす小中將君にもかゝれりそは云々なとこそと上にあるにてしるへし叉思ふにさま〳〵のよろこひの卷冷泉院の御事を中段十五丁この三四の宮たまさかにも參らせ給ふれはいみしうそめつらかにうつくみ奉らせ給ひけるとあり○ましていかなりけん　とは我ことにて御許例の自らをかへり見たる詞なり○みし人の　旁に此下に心の一字あれと群叉契本に無そよろしかるへし○かしこかりし　幸ひによかりしと云程の意と聞ゆ

いまとせさせ給はと御もののけのねたみのゝしる聲なとのむくつけきよげむの藏人には心譽あざり兵衛のくら人にはそうそといふ人右近藏人には法住寺律師宮の内侍の局にはちそう阿闍梨をあづけたればも

のゝけにひきたふされていと〳〵ほしかりければね
んがくあざりをめしくはへてそのゝしる阿闍梨のげ
んのうすきにあらす御物のけのいみじうこはきなり
けり宰相君のおき人にゑいかうをそへたるに夜一よ
のゝしり明して聲もかれにけり御ものゝけうつれと
めし出たる人々もみなうつりてさわがれけり
〇いまとせさせ給ほと　後産せさせ給ふにて即ち
滯たりし胞衣の下る時をさしていへるなり〇けん
の藏人　以下兵衛藏人右近くら人宮内侍等みな物
のけを假うつしたる女官なり〇心譽阿闍梨　時平
公の末流重輔卿の一男なり〇そうそといふ人　法
住寺律師爲光公男尋覺法住寺僧都と新系十二丁に見
ゆ旁に僧都と註せるは如何僧都をそうそとよむへ
くもあらす又こゝは心譽阿闍梨法住寺律師ちそう
阿闍梨ねんかく阿闍梨なと云るつらにたゝ僧都と
のみ云へくもおほへす扨上のそうつと有も必こゝ
と同僧ならんとおほしいつれにまれたかひに傳寫
の誤あるへしよき本を得て糺さまほしき事ともな
り一本にえうそと有て永祚の傍註あり今按元亨釋
書卷十二に永助といふ法師傳あり甲斐國の人なる

よし時代に知らねともし其僧ならん歟試にいふ
のみ又の一本には兵衛藏人には法住寺の律師と見
たるよし〇法住寺律師　上の法住寺座主と同し僧
歟〇たふされて　仆されてなり〇いとほし　俗に
いとしといふと同言にて深くむつましむ意なり〇
ねんかく　契本にねんくと有はかの一字漏れたる
か念覺は大和物語に比叡山に住て俊子の兄なるよ
し見へたる同人歟〇こはき　强きといふに同し〇
宰相君のおき人に　一本せき人とあるは誤なるへ
しおき人とは宰相君をあつかれる人をいひて置人
の意かこゝは誰としるへからす〇ゑいかう　元亨
釋書卷十二に叡効又同卷の十一に叡山叡好の傳等
出たりもし是等の人ならんか時代未考しからは假
字えいに改むへし〇聲もかれにけり　契本群とも
にかれにたりとあり〇みなうつりて　旁又群には
うつらでと有契本にうつゝてと有てともに穩かな
らす按にうつりてなるへし御物の氣の數多くてめ
し出たる人々毎にみなのりうつりてさわきのゝし
ると云意なるへしそはうつらてにても聞へぬには
あらねとこゝの文勢を考るに必すうつりてとあら

まほし咲見へし

午の時に空はれて朝日さし出たる心ちすたいらかにおはしますうれしさのたぐひもなきにをとこにさへおはしましけるよろこひいかゞはなのめならん

○午時に空晴て　後の物まてつゝかなくせさせ給ひしなり道長公御記十一日午時平安男子産云々此皇子後に位に即給て御諱後一條天皇と申奉る傳はしめに見えたり○午時に　平かに云々へかゝる詞なり○空晴て　御産いてきて皆人安心し心爽かなる心ちを准へいへるなり○朝日　太子の意○なのめ　斜にて傾きたる意なりいかゝの詞にてうら上になれは不斜にて悦ふ心の片よらす十分滿足の由なり

昨日しをれくらし今朝の程朝ぎりにおほゝれつる女房なとみなたちあかれつゝやすむ御まへにはうちねびたる人々のかゝるをりふしつき〳〵しきさぶらふ殿もうへもあなたにわたらせ給ふて月頃みず法ときやうにさぶらひ昨日今日めしにてまゐりつどひつる僧の布施たまひくすしおんやうしなどみち〳〵のしるしあらはれたるろく給はせ内には御湯殿のぎしきなどかねてまうけさせ給べし

○しをれくらし　泣惑ひたるをいふ○朝霧に　此御事のいふせく心にかゝれるを准へいへるなりかくて上に空晴て朝日の出たる心ちすと云る文の句ひいとめてたし○おほゝれ　旁におほられと有契本又群にかく有に依ぬ此朝霧の句は上の午の時に初はれて云々と有筆のつゝきにてにほひふかし意は上に見へたる如く泣まとゐさわきあひてしつ心もなかりし事を云るなり○たちあかれつゝやすむ　此言は退出するを云て帚木卷にいみしうみそれふる夜これかれまかりあかるゝ所にて思ひめくらせは云々空蟬卷に人々あかるゝけはひなともすなり云々谷川氏和訓栞に曰日本紀に散亡をあかれにぐとよめり中略源氏物語に明石の御あかれのみつと車をかそへ云り流の義なりといへり田舎にさなへをうゑをはりたるをあかりと云手習ふ子ともの字客のもとをさるをあがるといふ皆あかれの義なり遠江人の死して三日のあかりすと云も同し以上と有加文字濁るへし○御まへには打ねひたる人々　御まへは中宮の御前なり打ねひは年老ふけ

たる人をいふ○殿もうへも　殿は道長公うへは倫子なり○月頃み修法ときやうにさらひ昨日今日めしにてまゐりつる　上に月頃そくらさふらひつる殿のうちの僧をはさらにもいはす山々寺々を尋ねて云々とありしを見合へし道長公御記に候僧陰陽師等賜絲各有差とあり○月頃御修法云々　不斷經等に侍りし僧たちにて七月以來の功を以て布施を賜ふなり○昨日今日召にて　上に山々寺々を尋ねて云々とある十日に被召たる僧に布施を賜ふなり又絲賜はせのせ字はすの誤なるへしこゝにて切て決定するなりさて内には云々と内裡の御事を推察するなり

紫式部日記解巻二

飛彈國高山民　足立稻直著

人のつぼね〳〵にはおほきやかなるふくろつゝみどもてちがひからきぬぬひものゝ裳ひきむすびらてんぬひものけしからぬまでしてひきかくし扇もてこぬ哉などいひかはしつゝけさうしつくろふ」例のわた殿より見やれは妻戸のまへに宮大夫春宮大夫なとさらぬ上達部もさぶらひ給ふ殿出させ給ひて日頃うつもれつるやり水つくろはせ給ひ人々のみけしきどもこゝろよげなり心の中に思ふ事あらん人も唯今はまぎれぬべき世のけはひなるうちにも宮大夫ことさらにもゑみほこり給はねと人よりまさるうれしさのおのつから色に出るぞことわりなる右宰相中將は權中納言とたはむれして對のすのこにゐ給へり

○ふくろつゝみ　こは袋と包と物二つを云る歟さらはつゝみのつ文字清て讀へしされと枕草子巻三春曙十五丁につゝみふくろにきぬともつゝみて云々といへる事見えたれは此ふくろつゝみも物一つをいへるにも有へし○からきぬ　職源抄參考に云以下

生絹ニ染ニ萌黄ニ祝ニ衣上ニ長漸達レ腰袖長同ニ小袖ニ今世是曰ニ大單ニ云々枕草子巻八にそのわらはのきるやうになそからきぬはみしかきぬとこそいはめ和名抄に辨色立成云背子和名加岐沼形如半臂無レ腰襴之袷衣也楊氏漢語抄云背子婦人表衣以レ錦爲レ之云々○ぬひものゝもひきむすひ　裳に引腰小腰カケ帶なと云物あれはそれを引結なとする也唐衣にも紐ある事は要領抄に云雅亮裝束抄にからきぬには紐と云物ありからくみの色なるにて上巻になほ結て六筋も八筋もして唐衣のおほくひのかみうらうへに付たり云々契本又群本にはからきぬのぬひものもひきむすひとあり上ノのは衍　縫物ののを脫せるなり　○らてんぬひ物　螺鈿縫物和名抄に繡息又反訓沼比毛乃以ニ五色絲ニ刺ニ萬物形狀ニ也とあり螺鈿は今の青貝ずりなりこゝに甚つきなく聞ゆ誤字にはあらすや師翁は羅文にはあらぬかと按にらてんのぬひもんにてさゝいなとのもやうを縫にしたるか下に松のみのもんとあるによりて然おもふなり初花巻には此詞ともを下の心はへある本文打かき云々の條也轉してすこしわかき人々はぬいもの螺鈿なと袖くちにおきくちをしろかねの左右の糸してふせくみしようつにし云々と書りされは後の説可然○ひきかくし　若は引かへしの誤にて調へ仕立るをいふにや○東宮大夫　旁本に懐平と有懐平卿は齊敏卿の三男母は播磨守尹文の女なり○ひころうつもれつる遣水　巻一の朝霧におほれつる云々の文體に同し○中宮大夫　齊信公にて九條右大臣師輔公の九男道長公の從弟なり○右宰相中將　巻一十五丁に宰相中將と有同人にて高明公三男經房なり○權中納言　俊賢卿なり高明公の子母は師輔公の御女なり榮花には一男經房三男俊賢とあり枕草子巻六にとしかたの中將といへり

内よりみはかしもてまゐれり頭中將よりさだけふ伊勢のみてくら使かへる程のほるましけれは立なからそたひらかにおはします御有さま奏せさせ給ろくなとも給ひけん其ことはみす御ほそのをは殿のうへ御ちつけは橘三位つなこ御めのともとよりさふらひむつまじう心よいかたとて大さゐものおもとつかうまつる備中守むねときの朝臣の女くら人の辨の女

○内よりみはかしもてまゐれり　みはかしは御守

刀也○頭中將よりさだ　卷一にいへり○伊勢のみてくら使　禁秘抄に九月十一日例幣前後齋北山抄には嚴務とあり公事根源に云九月十一日例幣一日よりけふに至る迄僧尼重服の人參內せす是は大神事なる故也下略猶北山抄等に其式委しく見へたり○かへる程のほるましけれは　御幣使の返らぬほとは禁中かたき御物忌なれは賴定御太刀の御使に參られつれと上御門の產穢を觸しとて立なから御祝詞を申さるゝ也北山抄に康保元年例幣に犬の死したる穢に依て出御停し例等見へ又當時は常にいさゝかの穢に觸るをもいみしくゆゝしき事にせり道長公御記寬弘二年十二月八日の條に宰相中將犬產の穢によりて伊勢使を左大辨に讓給ふ事又犬產犬死の觸穢によりて參內なき事なと擧て數ふへからす況御例幣の大神事なるをやこゝを榮花物語初花卷にはまことに內よりみはかしすなはちもてまゐりたり御使にはよりさたの中將なりろくなと心ことなりつらんをさるは伊勢のみてくら使もまたかへらさりつれはうちのみつかひえひたゝけてまゐらすと書り○ろくなとも給けん　旁契ともにけるとあれと必けんと有へき處なれは改つ道長公御記に從レ內賜ニ御劔ニ右近中將賴定賜レ祿依觸穢人也云々恐らくは依は不の字の誤寫ならん○御ほそのをは殿のうへ　道長公御記には御乳附切ニ臍緒一と有こゝと相違如何按に榮花物語初花卷にはかくて御ほそのをは殿の上是はつみうる事とかねてはおほしめしゝかとたゝ今のうれしさに何事もみな思しめし忘れさせ給へりとありされは御記に御乳付の臍緒は切たるよし書れたるも故ある事なるへし此下に切給ふと云言を略きたり殿の上は產婦の御母也しかるを道長公御記に御乳付切臍緒とあるはたかへりと師云彼御記は略して盡々と其人を不差乳を付臍緒を切と書給ふなるへしと云給き猶按に初花卷にはかくて……とあり此罪得る事と有によりて乳付の橘三位か切たる由に記錄し給ふなるへし○橘三位　見はてぬ夢の卷には安を御乳付には有國宰相の妻御門の御乳母の橘三位參り給へりとかけり○藏人の辨のめのと　異本には藏人の辨のめと而已有此異本の如くにては大左衛門御許は備中守むねとき朝臣の女にて藏人の辨の妻と云意にな

る也此時の藏人辨は道方朝臣をいふへし傍注にあり又本のまゝにては藏人の辨といふ唱名と聞へたりいつれよけん又大左衛門の御許仕まつる備中守むねときの朝臣のむすめ藏人の辨の女此下なりといふ事を入て聞へし大左衛門といふ人は備中守の女といふ注釋にてむねときの女藏人辨の妻と云事なり此時藏人辨は源道方卿なり傍本の藏人の辨のめのと。と有のとの二字衍なるへし

御ゆとのは酉の時とか火ともして宮の下部みとりのきぬの上に白きたうしき着て御湯まゐる其桶すゑたる臺なとみなしろきおほひしたり尾張の守ちかみつ宮のさふらひの長なるなかのふ來てみすのもとに參る御厨子ふたつきよいこの命婦はりまとりつぎてうめつゝ女房二人おほもて馬くみわたして御ほとき十六にあまれはわるうす物のうはぎかとりのもからきぬさいしさして白きもとゆひしたりかしらつきはへてをかしく見ゆ御ゆとのは宰相君御むかへ湯大納言君源廉子ゆまきすかたともの例ならすさまことにをかしけなり

○御ゆとの　御沐浴の御殿なり禁秘抄卷の上恒例毎日次第條に云早旦供御湯主殿官人奉行近代多兒ニ五位一也釜殿運レ湯須麻志女官二人取傳藏人爲ニ鳴絃一候ニ戸外一内侍申ニ其由一御船一桶二内侍候ニ御垢一典侍或上臈女房進ニ御湯帷一云々

是は毎朝天皇の御湯殿の儀式なりこゝは生給へる皇子の御產湯なれとも准てさとるへし扨徒然草卷二に雉松茸なとは御湯殿の上にかゝりたるもくるしからす其外は心うき事なり中宮の御ゆとのゝ黑み棚に雁の見へつるを云々とある御ゆとのは御厨の事と聞ゆ中古の書に御湯殿といふはみな御浴室の事なり○とりの時とか　道長公御記に造ニ御湯殿具一初酉時○みとりのきぬ　婢女の姿なり○たうしき　當色なり御產の時は皆白くすれは白衣をきるを當色といへり漢精月令に生氣方正子十二月亥二丑顓輪こゝは九月生氣方ノ當色申に配當すれは白きなり○をはりのかみちかみつ　をはりのかみはおりへのかみの誤なるへし道長公御ノ寛弘五年十月十七日の條に織部守藤原親光同人歟○宮の侍のをさなるなかのふ　未考此二人は鳴絃に候也○御厨子二　此御厨子は源禮委記御湯殿條に其東西

立床子各一脚〔一脚は御湯殿...〕とあるを思へは金文次に御湯槽ともあるは[illegible]なるへし○うめつゝ　異本
にうめつくとあるは誤りなるへし熱湯に冷水を填
て能き程にするなり
○おほもくうま　二人の名なり大奉右馬か女の呼
名なるへし末に小奎といふ人もあり此二人は上に
引る禁秘抄の須庭志の女官なるへし扨須庭志は洗
清の義なるへし揮を須庭之毛能とよむも揮は穢る
ゝ物ゆゑ洗清の號ならむ　○みほとき　推古記二
十五年六月出雲國言於神戸郡有瓜大如缶新撰字
鏡に瓶瓰瓫甕㼚瓮盆甖等をよみ延喜式祟料にも
此器あまた見へたり又軍陀兵士の私の備物の中に
鍋盆有こゝは土器なるへし○十六にあまれはわる
按に此盆は御藥を入る器なるへし禁秘抄に早旦
供御湯條に内侍候御所典侍或上臈女房進御
湯惟本河藥次典侍取河藥器拋板于時藏人鳴
弦云々源禮委記御湯殿事條に監官六人昇御湯具
參進各着白單束帶...宮司等...傳取立於寢殿南庇先
敷布地敷其次文...新立御槽...其東西立
床子各一脚...

瓫十六口各八口...置瓫六口...大二口小四口之中在瓫六...
等云々又異本群本にはあまれはいると有いゑは
他所に納なるへし　○うすものゝうはき　うす物
は羅なり賦役令義解に羅者綺之属織有文者也○か
和名抄に唐韻云羅...亦羅也
とりのも　男女裝束抄にかとりとはうすきすゝし
といへり衣服令義解に謂縑無文繒也和名抄に
毛詩注云繒...縑也釋名云縑其絲細緻數
兼於絹也漢書云...○さ
いしさして白きもとゆひしたり　枕草子一卷十に御
ひたひあけさせ給へるさいしに御わけめのみくし
のいさゝかよりて窓るく見へさせ給云々とあるを
春曙抄にさいしは際次也御額のきわを云なるへし
と有は誤れりさいしは笄子にて和名抄冠帽具簪の
下着類扁云簪笄也釋名云笄...係也所以
拘冠使不墜也と有を按に笄子は女官垂髪を上
るに其髪根を簪にて結其末は巻上て此笄子にて止
たるへし故に物語書ともに多見へたるみなさいし
もとゆひとのみ記て陪膳のをり又髪の如く髪上る
時ならては見えぬ事なりされは今俗にカウカイと

いふ物是なるへし玉篇に笄古奚切簪也婦人ー冠とあり〇かしらつきはえて　是迄は大杢と馬との姿をいふ　〇宰相君大納言君　巻の一に見へたり此二人は湯卷を着たる女房達なり　〇ゆまき　禁秘抄に凡禁中着ニ湯卷一上﨟一人典侍一人也是候ニ御湯殿ニ故也云々 湯巻は今俗にもゆもしと云て女房の褌を云以上のこと按に御湯殿と云か即須麻志かスマシは御體の御垢を洗清の義にて湯を運ふ女大杢右馬も裝束したるに此二人は裝束なく裸にゆもしのみなるは必御垢を洗ふ人なるへし

宮は殿いたき奉り給ひてみはかし小少將君虎のかしら宮の内侍とりて御さきに參るからきぬは松のみのもんもはかいふをおりて大海のすりめにかたとれりこしはうすものからくさをぬひたり少將君は秋の草むら蝶鳥なとをしろかねにしてつくりかゝやかしたりおり物はかきり有て人の心にしくべいやうなければ腰はかりを例にたかへるなめり殿のきんたちふたところ源中將經房なとうちまきをなけのゝしりわれ高う打ならさんとあらそひさはぐへんちしの僧都ごしんにさふらひ給ふかしらにも目にもあたるべけれは扇をさゝけて若き人にわらはる

〇宮　生れ給へる若宮を云御湯殿儀はてゝ殿の抱き給ふ也〇とらのかしら　源禮記御浴殿條に二條殿奉抱皇子御匣殿持ニ犀角虎頭一云々とあり是も惡魔を退らしむるの謂なるへし和訓栞十八ノ廿九丁本草に虎頭骨作レ枕辟ニ惡夢魔一置ニ戸上一辟レ鬼初生小兒煎湯浴之辟ニ惡氣一去ニ瘡疥驚癇鬼疰一長大無レ病と酉陽雜俎に云く時俗于ニ門上一畫ニ虎頭一書ニ聻字ヲ一謂ニ陰府鬼神之名一可ニ以消ニ瘧癘一康熙字典聻字の下に五音集韻人死作鬼人見懼之鬼死作聻鬼見怕之若篆書此字貼於門上一切鬼祟遠離千里正字通俗謂之辟邪符門聻爲鬼名酉陽雜俎曰時俗于門上畫虎頭書聻字謂陰府鬼神之名可以消瘧癘又張續宣室志曰裴漸隱居伊上有道士李君曰當今除鬼無過漸耳時朝士皆書聻于門上又漢書舊史儺立桃人葦索滄耳虎頭等滄耳聻也〇かいふ　男女裝束抄に海賦は大海に海松や貝なとをおりたる文也〇大海のすりめにかたとれり　すりめのすりは地すり色すりのすりに同しく摺の意なるへしめは卷一にこきかうちめと有しめに同しく織めの意なるへし今俗にアミメ

などゝもいへりされは織物を摺目の文のやうにしたれはかたとれりとはいへるなり○こしはうすものからくさをぬひたり　こしとは裳の大腰引腰也是迄は宮内侍の裝束をいふ○少將君　小少將君の略なり卷一にみへたる人なり○おりものは限有て
　和名抄に蔣魴切韻云綺（音綺〻俗云岐一云於利毛能又訓加無波太）似錦而薄者也釋名云綺𣟽也謂方文如𣟽也
織物は上臈小上臈の輩には聽て中臈下臈不聽也此小少將君は公卿の女なとにや織物を聽されたる事はもとよりにて御はかしを持て宮内侍と同つらに見へたれは中臈以下の輩には非る事知るへし又卷一にも大納言君と同つらに見へたる可考合又按に少將君は織物は未聽人なるへし依て限有てとは上臈中臈の可聽限有て此少將君は未聽故織物にはあらぬ絹地に白銀して飾れるなるへし○人の心にしくへいやうなけれは　しくへい（へいはへきの音便）は及へきと云義の詞なり爰にては人の心にまかすへき事ならねはと云程に聞ゆ織物は我儕には着ましき物故小少將分際に不及事なれは裳の腰を例に違へて異やうに飾れるなめりといふよしなるへし○こしはかりを例にたかへるなめり　宮内侍も少將君も裳は海賦のおり物にて同き色目なるを宮内侍の大腰には唐草を縫少將君の大腰には秋の叢に蝶鳥を銀にて作飾れるを云るにて少將君のにはこしとはなけれとも此前後の詞にて知るへしたかへるは令違る也○殿の公達ふたところ　道長公の子たちにて雅道教道の兩人なり
○源中將經房　旁異ともに源少將雅通と有雅道は卷一にも見へたる如く殿公達二人の中の一人なれはこゝにかの公達二人と云て又さらに源少將雅道と云へき理なし今按に源少將は源中將を寫し誤れるなるへし源中將は卷一に左宰相中將經房と有人なり經房卿は西宮左大臣の御子にて道長公御記寛弘二年三月十日條に頭中將と見え又枕草子（卷四）に源中將（同し卷等）につねふさの中將なと有て源中將とよふへき事知られたり扨卷一にも殿公達に次て此つねふさを出せれはこゝもさあるへく思はるゝ也また雅通とある分註は本に源中將とのみ有しを源少將と寫ひかめたる又後さかしらに雅通とは書加へたるなるへし此實名書加へたる事は卷一にも云る如

く同時代の人なれは四位少將雅通或は宰相中將兼隆なと書へくはあらすたゝ四位少將宰相中將とのみこそ有らめ殊に此日記は既にも云る如く後の世までかくもてはやされむ爲に書るにもあらす中宮へ密々に奉りし物なれは返々も此實名の注有へき物に非しかしなから近頃の人の所爲とも見えねは今ことくく刪不改此源中將の事は必定誤と見へたる故に少を中に雅通を經房とは今おのれ改つるなり○われ高う打ならさん　打ならすとはむらなくこゝへもかしこへも平均に蒔散す由なり
○こしん　護身法を行ふなり中宮の御身を守護の義加持の僧をいふ○扇をさゝけ[illegible]を差上る也
文よむはかせ藏人辨廣業高欄のもとに立て史記の一の卷をよむつる打廿人五位十八六位十八ふたなみに立わたれりよさりの御湯殿とてもさまばかりしきりて參る又[illegible]儀式おなし御ふみの博士はかりやかはりけん伊勢のかみむねときのはかせとか例の孝經なるへしまた擧周は史記の文帝の卷をそよむなるへし七日のほとかはるくよろつの物のくもりなくしろき御前に人のやうたい色あひなときへけちえんにあらはれたるを見わたすによきすみゑにかみともをおふしたるやうに見ゆいとゝ物はしたなくてかゝやかしきこゝちすれは晝はをさくさし出ず

○藏人辨廣業　有國卿の一男なり道長公御記のこゝの條又寛弘二年十二月廿一日條にも右少辨廣業と見へたり○史記の一の卷　道長公御記には右少辨廣業讀書孝經朝夕同と有何方を定ともさためかたし旁本に史記の一卷とある注に五帝本紀黃帝の所と云りされは一卷といふ事穩かならさるやうなり又十二日の條に例の孝經とあるを思へは上に孝經訓し誤脫たるか如し○つるうち　道長公御記に御湯鳴弦五位十八六位十八云々主上每朝の御湯殿にも藏人鳴弦の事前に引る禁秘抄の文に見へたり是も邪氣を遠らしむる所爲なるへし御湯殿は酉刻なり酉上刻は七つ半時なるを追續き又御湯殿の事有なるへし故に頻て參るといへりとてものも字衍歟○さまはかりしきりて參る　御子の御湯殿なれは儀式のみにて實にあぶせてまへる事には非るへししきりてにても聞へぬにはあらねともしはしときと下上になれるにてぎしりて參るにてはあらし

か○儀式おなし　此句の上に落字あるへし試にいはゝ又の日もとか十二日とか必あるへき也しかなくては以下も十一日の事と聞ゆ爰の十二日なるよしは道長公御記に十二日己巳御湯殿讀書明經致時夕擧周とあれはなり儘に脱字と見ゆれは補つ○御ふみの博士はかりやかはりけん　契本にははかりの三字なし○致時　旁注に中原致時○例の孝經なるへし　道長公御記には明經と見へたり此御湯殿の時孝經天子章史記黃帝文帝の條をよむ故は其皇子御生長の後大御親に孝養おはしまし又他國の例なから帝王のめてたきためしをしめし奉る意はへなるへし○擧周　大江匡衡卿の子母は赤染衛門道長公御記寬弘三年三月四日條に擧周補藏人又同五年十月七日條に筑前權守別當宣下の事なとみへたり○七日のほと云々　[illegible]やうに七日の程の大綱を先かく云て下に其一々の事を又こまかにことわれる例既に一の卷にも二處まて見へたるか如し○よろつの物のくもりなく云々　七日の間は御調度又さるへき人々は裝束なとにいたるまて　こと〳〵く白く調る例にて次々に見へたるにて知らるくもりなくとは白きを云なり　○ようたいは　容躰也○けちえん　あさやかにいちしるくはへ〳〵しきやうの意なり

○よきすみゑにかみともをおふしたるやうに見ゆ
此墨繪といへる物は今俗に云墨繪とは異にて是は帚木卷にすみかきと云と同事にて玉小櫛にすみかきは彩色をする事に對へてたゝ繪をかく事にいへる名目なり古へは繪を書て彩色をはへちに他人にせさすること有し故に二つに分て墨書つくり繪といへりつくり繪とは彩色するを云なり云々と有て爰もいまた彩色せさるを墨繪といへるなりされは皆白き裝束にて種々の染色のなきをたとへて云へりなほさりにな見過しそ○いとゝ物はしたなくて　いとゝはくもりなくけちえんにあらはなる御前なれは常よりもいとゝの意なりはしたなくは竹取物語に宮はたつもはしたゐるもはしたにてゐ給へりとありなくは詞なり無の意にはあらす古今に木にもあらす草にもあらぬ竹のよのはしにわか身はなりぬへら也と有はしも同しくとちらへもつかぬやうの意也又こゝはいさゝかつかひさま轉て聞

ゆ枕草子にはしたなきもの丶條に人をよふにわれかとてさし出たるものまして物とらするをりはいとゝ有なとは爰のつかひさまに同大かた是等を味て知らるへし猶師の竹取物語解に委しけれはこゝにはいはす○かゝやかしき　暐燁の御活言也下のかもし濁へしまはゆき心なり譬は明らかなる火にさしむかふやうの意にてきはやかにあらはなるこゝちすれはと云るにてよろつのものゝくもりなく白き御前と云句をてらし見るへし○をさ〳〵此詞は俗にアンマリと云ふによくあたれりと鈴屋大人はいはれきとなん源氏帚木巻にしめやかなるよひの雨に殿上もをさ〳〵人すくなに云々大和物語に時々おはしまして後此宮をさ〳〵とひ給はさりけりなと多かり

のとやかにて東の對のつほねよりまうのほる人々を見れはいろゆるされたるはおりものゝから衣おなしうちきともなれは中々うるはしくて心々も見へずゆるされぬ人もすこしおとなひたるはかたはらいたかるべきことはせてたゝえならぬ三へ五重のうちきにうはきはおりものむもんのからきぬすくよかにしてかさねには綾うすものをしたる人も有扇なと見るにはおどろ〳〵しくかゝやかさでよしなからぬさまにしたり

○東の對の局　まうのほる人々を御許の住か東の局より見ればなり人々とは女官をいふ此御許は職なき故にひとりのとやかなる也○色ゆるされたるは　職源抄に聽レ色大臣女或大臣孫也とあり參考に云聽色者赤色青色織物也云々男女裝束抄にゆるし色とは紅にも紫にもうすきをいふ云々と見へたりされど爰にては織物を着るを云るのみにて色はなく唯白きを着たる也猶三卷にいへること有○おなしうちき　同しおりものゝうちきといへる也和名抄に袿婦人袿衣也釋名云圭（音圭漢語抄作袿云宇知岐）婦人上衣也後の書には單の上に着る物にて表衣の下の衣のやうに見へたり○をとなひ　もと男（ヲトナ）ふるの義にて女にまれ男にまれ年のよろしき程になるを云にて若々しからぬ也○かたはらいたかるへき事はせて　傍より見るにも餘りはてやかにて氣のとくに思はるゝ程の事はせてと云程の意也○えならぬ　え

んならぬにてあまりに趣向をまうけてはてやかには非るなりえんなゑ詞　事既に一の巻に云り〇三へ五への袿　重袿といへる物にて後に五つ衣とよふものなるべし〇うはきはおり物　禁秘抄に陪膳につかへさる女房達も唯何となく禁色をゆるといふ事見え又要領抄にも色ゆりぬもさもある女房は織物からきぬうはきゆりて着るつねのことなりと有〇かさぬ　上の重袿に同し〇あやうすもの　綾又は羅の義なり和名抄に綾（音陵和名阿夜綾有熟線綾長連綾二是綾花文綾平綾等名）似綺而細者也云々うすものゝ事前に見へたり〇扇なと　惣て扇には色々の好ありてかさり調る事と見へたるをこゝは物みな白く仕立るなれははてやかなる色とり餝のなきはもとよりにて格別に白かねしててりかゝやかしもせられすと也猶下扇の事を云る所双見るべし〇よしなからぬ　此詞上の装束の事ともにわたりて拗言意はよしめくのうらにてはてやかならぬなり又一向によしなきにはあらすといふ意なり

こゝろはへある本文うちかきなとしていひあはせたるやうなるもこゝろ〳〵と思ひしかともよはひのほとおなしまちのはをかしとみかはしたり人のこゝろの思ひおくれぬけしきぞあらはに見へけるもから衣の縫ものをはさる事にて袖口におき口をし裳のぬひめにしろかねのいとをふせてくみのやうにしはくをかさりてあやのもんにするゑ扇とものさまなとはたゝ雪深き山を月のあかきに見わたしたるこゝちしつゝきら〳〵とそこはかと見わたされすかゝみをかけたるやうなり

〇本文　古文古詩なとなるへし新につくれるにはあらし同齢の程の女官たちのは云ひ合せたるやうに趣意の同しかりしとなり〇おなしまち　帚木巻頭中将源君の許に女の贈りし文見給ふ處にやんことなくせちにかくし給へきなとはかやうにおほそうなるみつしなとにうちおきちらし給へくもあらす深くとりかくし給へかめれはこれは二のまちの心安きなるへしと有二町も同く惣て町とは一段二段と隔のある事にて二の町は其第一段にはあらて次なるをいふなりこゝも同齢のほとにて格別に年の隔のなきを同し町とは云るなり寄生巻にもかみのまちも上ろうとて御口つきともはことなるこ

と見へさめれと云々〇人のこゝろの思ひおくれぬ云々　かく中宮御前に撰出されたる程の女房達なれは才のけちめもみなひとしくしておとりまさりはなしとなるへし〇さる事にて　裳や唐衣やのぬひ物の餝を銀して調るは云ふにも及ばぬ事にてと云義なり上にも装束の事をいゝたれとかしこは女官達の中にもをとなひたる人々の姿をいへるなれはこゝのは若き人達のさまを云るなり殊更に若き人とはことわらねとおのつからさは聞えたり
〇袖口におきくちをし　狭衣巻三にこまもろこしの錦をつくしるりをのへひかねこかねのおきくちをしまきゐらてん云々落窪物語巻二におき口の経営といふ言も見えたり袖口に又別の袖口を添るをいふ歟〇くみのやうにし　禁秘抄巻上に神璽中略以ニ青色組（クミヒモ）ニ裹（ツヽム）レ之以ニ紫絲ニ結レ之如レ組また衣服令義解條帶の下に謂條帶者雑色なり和名抄に禮記注云綬音受和名久美所ニ以貫ニ珮玉ニ相受承ト也又用ニ組字ニ音祖江次第巻一卯杖條結ニ付書御帳ニ料に結レ組料七両二分糸と見へ延喜式を考るに組は今俗にいふ組紐なり新羅組綾組大丸組等の品あり又唯紐とのみ云は今云くけ紐にて必紐には料絹見へたり〇はくをかさりて綾の文にするは　はくは銀箔なり上に白銀のといへれはこゝにはことわらさるなり箔を綾の紋に餝り扇の意なるへし〇扇とものさまなとは云々　前のをとなひたる人々のはおとろ〳〵しくかゝやかさてとあるにこゝのははてやかにかゝやかしたる是等にてもこゝのは若き女房達を云る事明らかなりさて此扇も銀箔をおけるなるへしきら〳〵といへるにて然おもはるゝなり〇たゝ雪ふかき山を云々白衣を着て並居さまを形容したるなるへし〇きら〳〵　靈異記に端正岐頁岐頁之　此詞鏡をかけたるやうなりへかゝれり〇そこはかと見わたされす　其所ともかきりのはかりしられぬ意にて皆一やうにきら〳〵と光あふか月の明らかなる夜雪の山を見渡したるやうなりとなり白衣と銀扇ときら〳〵としてまはゆくて見難きさま〇鏡を掛たるやうなり銀箔押たる扇にて女房たちの顔を複ひたるさまなるへし以上七日の中のあらましをすべいへるなり
三日にならせ給夜は宮つかさの大夫よりはじめて御うぶやしなひつかうまつる右衛門のかみは御まへの

ものちんのかけばんしろかねの御さらなどくはしくは見す源中納言藤宰相は御ぞ御むつき衣はこのをりたていれかたひらつゝみおほひしたつくゑ〳〵とおなし事のおなししろきなれともしさま人のこゝろ〳〵見へつゝしつくしたりあふみのかみたかまさは大かたのことゝもやつかうまつらんひむかしの對の西のひさしは上達部の座北をかみにて二行に南のひさしに殿上人の座は西をかみなりしろきあやの御屏風ともをもやのみすにそへてとざまにたてわたしたり

○九月十三日夜　道長公御記十三日庚午藤宮奉仕御産養大夫御前物從懸盤六脚　筒馬頭盤白餘器皆銀は沈流の字の誤なる事（）宮つかさの大夫　齊信卿なり右衛門のかみ又同人なり（）御まへのもの　中宮御前御養饗方也旁には御前のことゝあれと栄におまへの物とあるによりてあらたむ又彼道長公御記にも大夫御前物とあれは物と有方可然りちんのかけはんちんは和名抄香藥部に本草云沈香沈香皆飾堅而沈水者也兼名苑云一名堅黒と見ゆ懸盤は古實考に江次第攝政關白家子書始云居侍公卿朱漆高坏攝政料四本大臣料三本一本不足三本古實後納言以下二本殿上人懸盤鉸將之これ后宮に進むるを見れは貴く殿上人にこと別て居うるに依れは卑器に似たり后宮も儀式の御膳に懸盤なれは是は内々の畢なるへし其形如かたし但後世所謂懸盤は方一尺七八寸許にて足は鷺形なり中略今按るに延喜木工式案の中に懸盤一尺八寸五寸廣一尺八寸高一尺五寸左右着物長各一尺加切板二枚各長一尺八寸廣一尺厚六分是れ膳具とは不見とも脚を作て蓋板を別に懸加る故の名なるへし然らは懸盤も古へは板を別に加る故の名なるへし凡の物に懸子箱あり懸硯箱あり其に別に懸加ふる故の名なり今時は直に足を付るは總へての物便利に移ふてさこそなりたれ中略後に按に先關白の草々作て其に盤を懸加ふる故に懸盤の名は有也けり以下略なと有此事おのれもいさゝか思ふ事あれとそはへつにいふへし契本にちんをいんと誤へるなり○しろかねの御さら　しろかねは爾雅云白金謂之銀音吟其美者謂之鐐力彫反和名之路加禰さらは同書唐韻云盤音盤器名也とみへ古器に凡盤盤疊盤不盤盃盤土盤丸盤あり且直に盛し食をも器を居るをも共に訓佐良中略箐坏と稱せるは深さ一寸五分もありて只盤と稱せるは最低きと可知也云々難稱

々の書ともに引出て華盤なとの事をも委く論はれたり右に引る和名抄には瓦器の部に入たれとこゝは銀盤にて又此外の器もこと〳〵く銀なりしよし上に引る道長公御記にてしるへし○源中納言　俊賢卿也とは既に云り○藤宰相　行成卿なり下に侍従宰相又侍従中納言なと見へたり父は義孝卿母は保光卿の女榮花物語鶴林巻に云一條攝政の御すゑあやしういのちみしかくおはするに此殿行成卿は五十にあまり給へりかしさいと此殿は御心のかきりなくめてたくおはしつれはにや今まておはしましつ位も正二位つかさも大納言はかりにてはちなき程也と云り一條攝政とは謙德公にて行成卿の祖父也○御むつき　御産部類記に上略一合ニ納ニ綾襁褓二帖ニ平絹御襁褓　帖各一巾長五尺有入帷云々和名抄に孫愐曰襁褓強保音和名無ニ皮小兒被也六帖巻一に藤原言直「鶯の冬こもりしてうめる子は春のむつきの中にこそなけ○衣はこのをりたて　御産部類記に御衣筥塗ニ銀泥一其上付ニ銀洲濱同鶴鉛小松一折立ハ用ニ之甲白織物ニ云々延喜内匠式年料に衣筥六合雁鼻各長一尺五寸十分廣一尺二寸深さ二寸五分とあり折立は則此雁鼻と云物に同しからん

か○入かたびら　類聚雜要抄巻三鏡二面具の中に帷二帖各長四尺六寸弘一巾上二乃ツ中折天半を合て上に天蓋目中にす左右の端一寸目也料唐綾一丈尺二寸各一丈六尺六寸なりと有て又末に臺に鏡を懸たる圖ありて其圖の羅紲の後に左右へ垂たる布は則ち此入帷とおほし何れにまれ筥の入帷は其入る物の下に敷料の布をいふとおほし○つゝみおほひ　是は包と覆と物二つを云るにて包覆と云一つの物にはあらす包の事は御産所類記に筥一合納ニ織物御衣一襲ニ云々一合納ニ綾御衣一襲ニ云々一合納ニ綾襁褓一帖ニ云々一合色目以上各裹ニ白織物裹ニ有伏組とあり覆は道長公御記寛弘　年十二月廿八日條に定ニ興福寺ニ僧衆數幷經四十巻筥下机覆等具使僧一職掌五人云々なとも見へて机に筥を居其上に覆ふ布を云へし打敷と混へからす○した机　御産部類記に下机花足面押ニ総甲ニ織物ニ以ニ銀泥ニ塗レ之付ニ其小鳥ニ鷺足ノ案ニ脚同以ニ銀泥塗之皆有ニ白銅金物ニ付ニ白組總ニ云々また案ニ脚置二合なと見へて筥を居る下机なり○おなし白きなれとも　此前後にも見へ又此あたり引る書ともにもみへたる如く器具なとこと〳〵く白く仕立るを御産の時の例なるさるを契本にはおなし

くろさなれともとあるはあまりにめつらしき傳寫の誤なり世の讀にも物の大に違へるを白黑の違ひとこそ云へれ○しざま人のこゝろ〳〵見へつゝ彼源中納言と藤宰相と互に心をつくして調へられたれは皆同し白き色めなれとも深く心をつくされたるけちめはみへ別るとなり○しつくしたり　旁に善つくしたりとあれ、藥又契本等にし盡したりとあれは善はしの字を誤れるなるへしさてつくしたりといふ詞心をとめて見るへし○あふみのかみたかまさ　道長公御記寬弘四年十一月廿二日の條に臨時祭使高雅又同年五月三日條また十月十七日祭等に中宮亮兼近江守源朝臣高雅とあり○大かたの事もやつかうまつらん　此てにをは如何つかうまつらんは是にては古今集の織女にかしつるいとのうちはへて年のを長く戀やわたらん。と同例やの結のんにてらんの結に非らす此結は自の上の事を今より末かけて云てにをはにてこゝはつかうまつらんにてはとゝのはす近江守の上を地よりおしはかり云處なれは必らん　結になるへく誤らんの結は皆體の言よりつゝく格　眞やとゝくらん紫やちるらん雪やふらん　との如くとくちるふるみな體言なり　なればこゝはつかうまつるらんといふへき例なり叔意〻齊信卿は中宮御前の物侍實卿と行成卿は皇子の方の御まかなひなれは此高雅は其外の大抵の事ともやつかうまつるらんといふ意と聞へたり是も御許の委は見聞せられぬよしなり○南のひさしに　殿上人の坐は南の庇に西を上なりと旬を次第して心得へし○とさま　外さまなり

五日の夜は殿の御產養十五日の月くもりなくおもしろきに池のみぎはちかうかゞり火ともを木の下にとほしつゝとしきどもたてわたすあやしきしつのをのさへつりありく氣色どもまでいろふしに立がほなりとのもりが立わたれるけはひもおこたらすひるのやうなるにこゝかしこの岩がくれ木のもとごとにうちむれてをる上達部の隨身なとやうのものともさへおのがじゝかたらふへかめる事はかゝる世の中の光の出おはしましたる事をかげにいつしかと思ひしも及がほにこそそゞろにうちゑみこゝ地よけなるやましてて殿のうちの人はなにばかりの數にしもあらぬ五位どもなと、もそこはかとなくこしも打かゝめて行ちがひいそかしけなるさまして時にあひがほなりおもの

まゐるとて女房八人ひとつ色にさうぞきて髪あげ白きもとゆひして白き御ばんもてつゝきまゐる

○九月十五夜　記略寛弘五年九月十五日壬申皇子降誕之後五夜也公卿以下詠和歌命参議左中弁行成書之卿作序云々○かゝり火　和名抄に漢書陳勝傳云夜篝火（[illegible]）○としき　拾芥上巻に西東にとんしき八十具ろくのからひつ四十つゝけてたてたり云々又處々の饗なとも穀倉院よりつかうまつらせ給へりとなんしきなと大やけさまにて云々柏木巻なとにも見へて屯食なり屯食はつゝみ飯なりとも又下人に給はる握めしの類また色とりたる飯又つゝみ飯にて今の鳥の子と同しなと説々いと多し古器考に或人云包たる飯也と是は大膳式松尾祭雜給料の中に云干柏三十俵（[illegible]）又大炊式にも同祭に云裹飯百廿口料米五斗云々これ一口の料一升二合餘に當り且是を柏もて屯食せる物歟と思ひつるを後に或春日詣の記を見るに屯食と裹飯を並へ擧たれは必すしもの義にはあらす又江次第東宮御元服條云庭中立（[illegible]）屯食百具（[illegible]）[illegible]永安門運入支之分東西云々東五十具（[illegible]）西方五十具之（[illegible]）又源氏物語抄（[illegible]）云穀倉院屯食（五十具[illegible]）[illegible]要抄屯食十五具（[illegible]）[illegible]と云ひ且右の條に前に立使に立なと云さて先に御重ノ御考の次てにかしこの[illegible]に注さしめて下賜れる後世華足ノ云ふやうの物に盛りたる古齋の圖是にやと仰られし實にしかこそ有ことならんと此月に至て思ひ奉れり猶此事は識者てそ申し奉らん又荒と云は俗に散し飯と云ふ如き眞盛とは諸記に云ふ高盛大盛なとにて堅く盛りたるを云ふ歟是亦定説を待難しと有又頭書にいはく三代實録答曰備尼等何料之叢二萬九千六百七十四人淳和大后の齋會に助修則ふ料物に米六百斛[illegible]三十五斛鹽三十二斛[illegible]子一千五百枚樞飯四十合筥飯五百合裹飯一萬六千九百六十枚海藻三萬三千三百三十斤新錢一十二萬五千文と注りこの筥飯を後に屯食と云歟とも見えて未詳屯ははむ（和名日本紀）ともよみて滿盈の意なるへし空物語藏開上巻にとしき十具にて百貫なんありける云々といへるも多く盛たる言と聞ゆ何れにもあれ此饗は皇宮の饗とおほし新儀式奉賀天皇御算條に庭中東西相分立屯物酒食に注延喜十六年有此屯食諸大夫着座

次に左右近衛府等間以樂永安西門以官吏々生各二人率左右外衛舍人參入自西門運出庭中積食於中衛分給所々又閉南門云々とありまた天皇奉賀上皇御算條にも諸衛舍人持屯物進出（注）屯物來御之前立流東庭也召使院司頒給之云々とありまた進士公御記寛弘二年十一月廿七日辛未於戌時行幸女方可然所々賜飩食西有女方陣云々仝廿八日廿九日に賜上女方官女方賜飩物といふ事見へたりされは屯物飩物ともに屯食賞俵調菜十八ノ廿三唐玄宗紀に頓食云々通雅に頓は是食也略食之所曰頓といへり略下○あやしき いやしきに通て聞ゆ○とのもり 令に主殿寮頭一人掌供御輿輦蓋笠繖扇帷帳湯沐灑掃鋪設及燈燭松柴炭燎等事助一人允一人大属一人少属一人殿部四十人使部二十人直丁二人駈使丁八十人禁秘抄に主殿司官女二人内侍神鏡之體云々○おこたらす今御の明らかなるに主殿かゝる折は夜もおこたらす御座あたりにさふらふさまなと晝のやうなるにといふ意たりおこたらすは立わたれるの上にある意なり
○光の出おはしましたる云々 皇子の御誕生を云

○そゝろに打ゑみ そゝろはすゝろとも通ふ詞なりおのれおのれ思ひたる事をいはん抑そゝろといふ事は其聞物見る物につけて心の進み催し立やうの詞にて付居る物をゆすりあけ引立さわかすやうの詞なり物をそゝるといふわさもそゝりあくる事にて神樂早歌にゆすりあけよそゝりあけそゝりあけよゆすりあけとあるもてわきまふへしさて水に物をそゝきすゝくといふも水をさわかしたてゝ其物に打かくるにてそゝの意同し（清浄にする方の名には すみたしさわかして打かくる又神もス、キ、ス、ケ、ソ、ケ 水の方にいづくる名目なり）と活て其意同しされは撫子ハすゝきになりたりと云すゝきも別の釈をまたす又或書にそゝろ寒きと云注にゾツゾツと寒きなりと云るはよくあたれりゾツゾツと云言もこのそゝをつゝめていへるにて其詞に時をつけて強く云なすのみ俗にあちら物をあったらもの先からといふをさっきからなといふ例猶舉てかそへかたし又すゝめ催し立るをそゝのかすと云又進むのすゝ和名抄羽族に唐韻云雛 音 又音雛鳥子生而能自食已上吐毛旬丸也とある も同しさてろはとゝろおとろのろの如く其云やうの心はへ

にて唯添へたることはなり是等皆下にきくけ等の言をまうけてはたらくなり明石巻に何とも聞わくましきこのもかのものしばふる人とも〻す〻ろはしく濱風をひきありてと有も源氏君の琴の音に心の進み催さる〻にて此言の本の意によく叶へり又東屋巻にこなたにも心のとかにゐられたらすそ〻めきありくにとあるも同し且延喜式大殿祭祝詞に引結幣帛葛目能緩比取薜計留草乃噪岐（古語曰蘓々岐）無久云々と有噪はさわくともよめる字にても其意の同し事おしはかりしるへし狹衣巻下狹衣中納言今姫君の方に參り玉ひたるに人々驚き立さわく處に木丁ともおくよりとり出てかは〳〵そよ〳〵とたてわたし裾打ひろけ紐とものよろはれたるをとひきかくひき廿人はかり立さまよひつくろひさわくきぬのおと几丁なとの音に耆も聞へすあはた〻しく見つかぬ心ちし玉へと今やそ〻きやむと物いはてつく〳〵とゐ玉へは云々とあり愛も隨身ともの勝れてよろこふさまをいへるにて心に進み立て打笑さまを御許の見たる方より云るにてそ〻ろはしけにわらふと云意なり帚木巻に内わたりの旅ねもすさましかるへくけしきはめるあたりはそ〻ろさむくやと思ひたまへられしかは云々とあるを玉小櫛に云今宵の寒きに氣色はみ風流ならんあたりは打とけかたくそ〻ろはしく寒からんとなり以上と有り法のそ〻ろの意いかなる意ともえ聞わかさりしを今按に內わたりはさひしくて不興におもしろからしされと風流めきたるあたりも又あまりこ〻ろのそ〻りたつやうにて中々〳〵にこれもおもしろからしと思ふ給へられしかはと云意なりけり扨さむくやと云詞は前にも云如く寒き時はゾッヅッとそ〻りたつやうなる物なれは其心の進みてそ〻りたつかたに折ふしの寒さの事を云添へたる詞のあやのみにて寒き方にはようなしすさましかるへきに對て云るにてそ〻ろの方こそ本體なるそれを玉小櫛の說も寒き方を本體として解れたりと聞ゆるは如何若菜巻にす〻ろなる人とあるも風流めきて心のそ〻り立方の人といふ意なり又轉ては明石巻に衣かへの御さうそく御帳のかたひらなとよしあるさまにしいつよろつにつかうまつりいとなむをいとほしうす〻ろなりとおほせと云々と有は先勝

れてよき物勝れておもしろき事ならては必す心のそゝりたつものにはあらされは愛も明石の入道の分に過たる御裝束を調へ進るをいとほしうおほさるゝにて其いとほしとおほす心か則そゝり立なり猶いはゝ思ひかけぬと云やうの意なり彼伊勢物語のすゝろなる女を見る事と思ふにと云そゝろの思ひかけぬ事といふやうの意にて其用へるさま此すゝろに同し大かたかやうの詞も轉てはいさゝかつゝのけちめはあれとも詞の本意を失はて見る時は心得安かるへし猶次々此詞の下に云へし又因にいふ槿卷に御門もる寒けなるけはひうすゝぎ出來て云々を玉小櫛に古事記中卷に立はしりいすすきとあると同詞にていそきはしりくるさまなり云々と有もさる事なから今按するに此すゝきも源氏君の御出に驚きていそきはしるにはあらてよろこひ心のそゝりたつさまにて出きたりといふ意なるへしそれにかの帚木卷のそゝろ寒きの如くゾッゾッとしたるさまをいひそへたるのみにて是もすゝきの方そ本體なる拗うはいに通ひて沃なるよし小櫛に委しくいはれたり沃は玉篇に說文に溉灌也とも有て然らは此うすゝきのうもそゝろの意に同しかるへし拗はうすゝきいすゝきは同意の詞を重たるか如し又そゝろすゝろといふことは驚さわくやうの意も有へし神武紀に大物主神にぬり矢になりて勢夜隨多良比美のかはやに入玉へる時突其美人之竇冬衝其美人驚而立走伊須々岐伎と有るはいすゝき槿卷のうすゝきも同しくて記傳廿の十九丁此そゝろすゝろに思ひて聞へ又文選蕪城賦に驚砂坐飛とある坐をスヽロと訓加茂翁スヽロは漢文に坐字を不覺と注せしに當れりといはれきこれらの意も通へり竹取物語にすゝろなる死をスカンメリと有も漢文の坐字と同しく不意不慮の意なり文選李善注に无レ故自指曰ニ坐指ーとあり○こしも打かゝめて唯よろこふ形にて今のよにも物を深うよろこふ時こし打かゝめてはしりありく形あり又かゝめでにて不の意歟さらは御前を敬て腰をかゝめて通行すへきを心おこりといそかしきとにてかしこまりもおかぬさま也榮にはこゝを五位なとも腰うちかゝめよにあひかほに云々と書り○いそかしけ此いそかしの詞のいもいすゝきのいに同しくそか

しはそかしの略にて本いそかしと云意なるへし○ときにあひかほ也　時にあふとは身の榮ゆる時に逢を云伊勢物語に三代の帝につかうまつりて時にあひけれと催馬樂にいつきいはひしるくときにあへるかもや時にあへるかもや○女房八人ひとつ色にさうぞきて　此八人は次の條に見へたりひとつ色は同色といはんか如く白き裝束をいふなり猶いろとあれは白きは如何と思ふ人も有へけれと上に白き御前に人のやうたひ色あひなとさへ云々と有し色あひも顏の色あひのみの事にはあらて其姿つきを惣て云るとこそ聞ゆれ又槿の巻に月はくまなくさし出てひとつ色に見へわたされたるにとあるも雪と月との事にて白きをいろといへる例なり○白きもとゆひして　女房も古しへは定てむらさきなとの本結なりけん故に殊更に白きといへるなり○御はん　御盤にて臺なり此詞巻一御はんの處と考合へし

今宵の御まかなひは宮内侍いともの〳〵しくあさやかなるやうだいにもとゆひはえにしたるかみのさかりはつねよりもあらまほしきさましで扇にはづれたるかたはらめなといときよらかに侍しかな髮上たる女ばうは源式部（かゝの守景好かむすめ）小左衛門（こびちうのかみ道ときか女）小兵衛左京大夫（あきまさか女）大輔（伊勢祭主すけちかか女）大うま（左衛門大夫よりのぶか女）小馬（左衛門すけ道のぶか女）小兵部（藏人なりちかか女）小李（李の丞平ののふよしといひけん人の女なり）かたちなゝとをかしきわか人のかぎりにてさしむかひつゝゐわたりたりしはいと見るかひこそ侍りしか例はおもの參るとてかみあくる事をぞするをかゝるをりとてさりぬへき人々をえらせ給へりしを心うしいみじとうれへなきなゝどゆゝしきまでぞ見侍し御帳のひんかしおもて二間はかりに廿餘人ゐなみたりしひと〳〵のけはひこそ見物なりしか

○御まかなひ　御陪膳方にはあらて食物の鹽梅を調へまかなふを云靈異記には鹽醬の字をしかよめり○髮のさかりは　髮の盛と云意ともおもへともしさがりばにや狹衣二の上に女二宮の御髮の事をいへる處にすちのをかしさつやさかりはなとはたくひあらしかし云々と有はなりされは御まかなひは髮あくる事はせさるなるへし此あたり文のつゝき又髮の上たる女房はと殊更にいへるにて御まかなひは猶垂髮か猶按するにもとゆひはへにしたる

とあれは盛の方しかるへし○髮上たる女房は　かたちなとをかしきわか人のかきりにてさしむかひつゝゐわたりたりしはいとみるかひこそ侍りしか例のおもの參るとて髮上る事をそするをかゝるをりとてさりぬへき人々をえらせ給へりしを心うしいみしとうれへなきなとゆゝしきまてそ見侍りしと有を按にこゝは後一條天皇誕生の五日め殿のうふやしなにの條にてことさらに人をえりて陪膳せさせ給ふ也よりて常は髮をたれて仕る人なるか常の陪膳には此八人よ下さまの人のつかふるにて陪膳には髮上る例なるも常は髮上ぬ人の髮上るをはちてうれへなくなるへしされは打まかせて髮上るをはれなりとはいふへからす○源式部　以下八人の女官の分注上にも云へる如く後人の所爲なるへし扨此八人は御陪膳をつとむる人々なり○例はおもの參るとて髮上ることをそするを　禁秘抄に朝餉女房皆上髮云々髮上るははれなり下たるは內々義のよし萬葉考別記に論はれたり○うれへなき患或は泣なりかくえらひにあひたる女官達の耻かしくまはゆく思ひて患或は泣なとするとなり

次のおものはうねめとも參る戶口の方に御湯殿のへたての御屛風にかさねて亦みなみむきにたてゝ白き御厨子一よろひに參りすゑたり夜ふくるまゝに月のくまなきに釆女もひとりみぐしあげとも主殿かんもりの女官かほもしらぬをりみかとつかさなゝとやうのものにやあらんおろそかにさうそきけさうしつゝおとろのかんさしおほやけ〳〵しきさまして寢殿ひんかしの廊わたとのゝ戶くちまてひまもなくおしこみてゐたれは人もえとほりかよはすおもの參りはてゝ女ばうみすのもとに出ゐたり火かけにきら〳〵と見へわたる中にも大式部のおもとのもからきぬ小鹽山の小松原をぬひたるさまいとをかし大式部は陸奥の守のめとのゝせんじよたいふの命婦はからきぬは手もふれす裳をしろかねの泥していとあさやかに大海にすりたるこそけちえんならぬ物からめやすけれ

○うねめ　後宮職員令水司に釆女六人膳司に六十人禁秘抄に陪膳釆女なとあり○もひとり　後宮職員令に水司尙水一人掌進漿水雜粥之事典水二人掌同尙水云々○みくしあけ　按御髮上は藏司のつとむる歟同書藏司尙藏一人掌神璽關契供御衣服巾櫛

服翫及珍寳綵帛賞賜之事典藏二人掌同尙藏掌藏四人掌出納綵帛賞賜之事女孺十人枕冊子六の四おものゝ折になりてみくしあけまいりて藏人ともまかなひの髮上てまいらするほとに云々○主殿　同書に殿司尙殿一人掌供奉輿繖膏沐燈油火燭薪炭之事典殿二人掌同尙殿女孺六人○かんもり　同書に掃司尙掃一人掌供奉牀席灑掃鋪設之事典掃二人掌同尙掃女孺十人○みかとつかさ　同書に闈司尙闈一人掌宮閤管鑰及出納之事典闈四人掌同尙闈女孺十人○おとろのかんさし　かんさしは玉小櫛卷六にいふ髮つさしさまといふ言にて木の枝のさしたるさまを枝さしといひ目の物をさして見るさまをまなこさしなといふたくひなりされはこれは額の際より頂の方へ髮の生のほりさせる處のさまを云なり髮のさすといふも枝のさすと同し心はへなり此詞卷々に多し皆しかなり稻直云此皆しかなりと云ことといかゝ皆しかにはあらす其事次にいふを考見るへし然るを人みなたゝ笄と心得られたるからそのかみの女の髮に笄させる事はなきに考わつらひてくさ〳〵しひたる注あるなり爰も然にて笄の事としてはおとろといふ事不穩おとろはみたれたるさまをいへるなり猶このさしといふ事は元亨釋書の和解に色さし撰集抄に姿さしなともいへり皆同言にて其さまを云言なり又按に後世の笄にもあらす又髮のさすといふにもあらて物の名目にかんさしといふものありそは櫛のことゝ聞へたり繪合卷にくるしくおほしなからむかしの御かんさしのはしをいさゝかをりてといふ事ありて秋好中宮のさまなれは昔の齋宮の御時のわかれの御櫛の事と云說尤よろし又上ノ若菜卷に同中宮の御方より御くし上の具にそへて「さしなからむかしを今につたふれは玉のをくしそ神さひにける」院こらんしつけて哀におほし出らるゝ事とも有けりあえものけしうはあらしとゆつり聞へ給へる程けにおもたゝしきかんさしなれは御かへりもむかしの哀をはさしおきて「さしつけに見る物にもかよろつよをつけのをくしのかみさふるまて云々なとあるかんさしにて櫛を云る事うつなし

類聚雜要中二丁九丁メに五節雜事理髮具に簪、釵子彫櫛とみえ又三十七丁左可儲本所物の條に彫櫛六百枚差櫛上十二枚

下十二枚蒔櫛釵子十五枚八枚女房四枚下仕料三枚舞姫料とあるも櫛の事と聞ゆ併又同書三ツ懸子ノ手筥條に釵子一兩六疋五升とある頭書に釵子はかうかいの先にさす先五にわかると有て如此圖をのせたり圖の形審かならねとおのか按に符合て櫛の一つの名なる事思ひ定めぬかゝれは玉小櫛に此詞卷々に多し皆しかなりといはれしはあらすと云なり今俗に普く用る笄は貞享年間御厨子所預故備前守始て工人に造らしめられしよし好古實錄に見へたるは定て據ある事なるへし○おほやけ〳〵しき　おほとかにおふやうなる儀か○渡殿　或説に今云書院なりといへり○廊わたとの　和名抄に唐韻云廊音郎和名保曽止乃殿下外屋なりとあれは契本又群に廊の字なきは可然歟ともおもへと猶ある方よろしかるへしほそとのは延喜掃部寮式に夾舍をよみて西側には女房の局ありて其間を通行する處を云へし又わたとのも其夾舍よりつゝきたる處なからも兩側の局とはなく唯わたり殿にて橋をいふへしされはわた殿のはしと云もたゝわたとのとのみいふも同語なり處女卷にあかくちはのうす物のかさみいといたうなれてらうわたとのゝそりはしをわたりて參る云々と有も廊やわた殿のそりはしやと云意にて爰と文勢同し○人もえとほり云々　是よりはてゝまて契本になきは漏せるなるへし○大式部　一卷にも見へたり則源式部のことと聞ゆ○から衣は手もふれす　唐衣はたゝ白き地の儘にて別に飾を儲けさるを云○大海　大海の波の形を銀泥にて摺るをいふなるへし○けちえんならぬ物から　上にもありてらし見て味ふへし爰も白きに銀泥を摺るなれははへ〳〵しくはあらぬけれとも云々の意也○めやすけれ　いま俗の詞もていはゝ見るに重からす安々しき意のやうにも聞ゆめれとさにはあらてほむる方の詞なりこともなきといふ詞は末の物にはあなつりかろしむるやうの意なるをうつほ物語のはほむる方の詞と聞へたるか如し

辨の内侍の裳に白金のすはま鶴を立たるも、さまめづらしぬひ物も松かへのよはひをあらそはせたる心はへかと〳〵し少將の御許のこれらにはおとりなる、しろかねのはくを人々つきしろふ少將の御許といふは信濃守すけみつが妹殿のふる人なり其夜の御前の有

さまのいと人に見せまほしけれは夜居の僧のさふらふ御屏風をおしあけて此よにはかうめてたき事またえ見給はしといひ侍りしかはあなかしこ〳〵と本ぞんをばおきて手をおしすりてそよろこひ侍りし上達部ざを立てみはしの上に參り給ふ殿をはじめ奉りてもたみうち給ふ紙のあらそひいとまなし歌どもあり

○裳　銀泥にて摺たる事明らけし前の大夫の命婦は裳を白かねの泥していとあさやかに大海にすりたることそ云々といへれはこゝは銀泥なることといふもさらなることなり○すはま鶴を立たるしさまめつらし　此句契本になし例のもらせるならん○よはひをあらそはせたる　秀句のみ別意あるにあらす○かと〳〵し　自を卑下して丸といふに對て美治の詞なり○しろかねのはくを　一本にしろかねのはくさいをとあるはいかゝあらんはくさいといふ詞例あることかしらす扨此をの字の下に言のたらぬはかきさしたる一の格なり○人々つきしろふ　夕顔卷につきしろひめくはす又增鏡草枕の卷に人々めをくはせつゝ忍てつきしろふと有如く詞には云出す膝なと衝(ツキ)合めくはすさまにて爰も辨內侍は殿の古人なれは餝の今樣めかすふるめきおとりたるを女房達のほのかにそしり笑意なり○信濃守すけみつ　御記寬弘二年正月九日條に信濃守佐光朝臣申下向任國由直衣指貫馬一疋給○夜居僧のさふらふ御屏風　名目抄に二間（有觀音夜居僧加持所也）禁秘抄に二間敷疊二帖北間向妻戸敷阿闍梨坐半疊一南間巡御講之時懸本尊云々とある二間は禁中のこと爰は土御門にての夜居の僧なれはかりそめに屏風にてしつらひたるなり上に護身にさふらひ給とあれは此夜居僧は則へんちしの僧都なるへし○此世には云々　僧に對したる詞なれは此世といふ事おもしろし心をつくへし極樂の莊嚴は來世のことなれはさておき先此世はの意也○あなかしこ〳〵　此ことはは本恐惶の意なるをこゝは歎ひ忝なかる詞なり○本尊をはおきて　おきてはさしおきてなり此世には云々のことはこゝへ句へり○座を立て　かの源礀委記（攤打の處に見ゆ）によれは座を立て階の上に行事も攤打の作法か○もみうち給ふ紙のあらそひ　契本又榮にもたとあるは攤の音なり他干反なれはタンなるをタといふは直音にいひなせるなりこは

いかなるわさとも今は知かたし和名抄雑藝部に後漢書注云意錢世間ニ云世錢字知今之攤錢也桂苑珠叢抄云以レ手有レ所レ撻謂ニ之攤一唐韻云攤音諸何反撻攤也字亦作攤世間云駄撻音七何反手攤レ錢也訓ニ毛無一と見へたるは則此わさとおほし兼好法師の徒然草に樂器をとれは音をたてんと思ひ盃をとれは酒を思ひさいをとれは攤うたん事を思ふ云々諸抄大成に大鏡師輔公の傳にたうたせ給ふ陪直か見し本にはこうたせ玉ふと有とありて重六の沙汰あれは双六の事なり大鏡四師輔公の傳に冷泉院胎內におはしますを庚申の夜双六にて占合給ふ段に九條殿云々こうたせたまふついてに云々こよひ双六仕奉らんと仰らるゝまゝに此孕まれ玉へる御子男とおはすへくはてう六以てこと打たせ給ひけるに唯一度に出くるもの云々たうたんは數五六の事なり攤うつとは賽を筒に入ふりひらくの名なり攤は攤なりだうつともだうするとも云なり云々とあれとだうとるなとの事すへて穩かならさる説とおほし又同注に云杜子美夔州歌に長年三老長歌ノ裏ニ白日書攤錢高浪中箋ノ注ニ曰云 攤錢蜀人賭レ錢之名也源禮委記に曰く元永二年五月三十日三夜

云々立切燈臺於座上置菅圓坐一枚大進高隆置筒寒於圓坐上次殿上侍臣兩三人參進置紙自下臈置之上達部同置之次有擲攤之興事又第五夜條には居菓物次五獻次置碁手之紙關白大臣用四位陪膳納言以下五位役之次撤關白大臣前物立切燈臺於坐上置菅圓坐一枚次權大進顯賴置筒寒次殿上人上達部各自ニ下臈一置レ紙次擲レ寒了云々又全書三夜儀事條に次朗詠次置碁手紙上達部高坏殿上人料折敷次撤座上饗前其所敷圓坐立切燈臺諸大夫持參之大臣取筒寒置圓坐從六位至公卿次第置集攤紙各一帖次有擲寒之戲事云々猶此御産部類記にこのわさ此外に數所見へたれと事のさま同しけれは一二を引出せるのみ新儀式御庚申事條に內藏寮辨備酒饌賜之侍臣又進碁手先獻御料物分男女房中略終夜之間有打攤之事云々と見へ又道長公御記寛弘二年二月十日條にも其後與上達部五六獻後召紙打レ攤又うつほ物語藏開上卷にかくて御ゑるもの御みきたひ／＼まゐりぬ中納言君かみもかなとの給へはきはみたるゑきし一卷ゑんきゑきし一くわん硯のふたにいれて出されたり中略かくてきはみたる一かさねにこかねのせに一つゝとつゝみし

ろきゑきしをは外にうるはしくいたさせ給ひきはみたるをはをとなしく御せんとりにまゐり給つこすくろくはまゐりたりあるしのおとゝさいをとりこゝにはさらになしとの玉へはみすの内へさし入給ひつかくてうちとたうち給て御かはらけたひ〳〵になりてあふらよきほとにさし給つあつまたなとわらわをとなうつたこ（彈棊歟）のことはいふそうおほくうちとりたりけるかうし一つゝけにようはうたちはたまはりける中納言の君宮たちはみなうちいれつゝかゝるほとによいたくふけぬ云々と見へたるは攤打のさまをくわしく云るか如くおほしけれと文の誤漏多き故かいかなる事とも聞わかすされと此わさは何れにまれ酒宴の坐興とは聞へたりおのれえわきまへぬ事なから後考の助にもやとかく種々の文ともは引出たるのみ後の博士考定めたまへ〇まさなし　枕草子巻一に猫のはしつかたに出たるを命婦か呼詞にあなまさなや入給へとよふに云々とあるに同しく見る心にいそきあんしらるるやうの意なり

女房さかつきなとあるをりいかゝはいふべきなゝとくち〳〵思ひこゝろ見る

めつらしき光さしそふさかつきはもちなからこそ千代もめぐらめ」四條大納言にさし出んほと歌をはさる物にてこわづかひよくいひのへしなとさゝめきあらそふ程にこと多くて夜いたう更ぬれはにやとりわきてもさゝでまかで給ふろくとも上達めには女のさうそくに御そ御むつきやそひたらん殿上の四位はあはせ一かさね六位ははかま一具とぞ見へし

〇めつらしき云々歌　此歌後拾遺集賀部に出て後一條院うまれさせ給て七夜に人々參りあひて女房盃いだせと侍けれはと有續世繼皇上巻望月條に後一條院うみ奉らせ給へりし七夜のみあそひにみすの中よりいたされ侍けるさかつきにそへられ侍りし歌は昔の御局のよみ給へりし云々此歌有下句千代はめくらめとあり初めの二句は御誕生ありし皇子の事にて今宵の望月の欠けたる處なきことく何事もたらひまして千代もましまさめと祝たるにてさしそふ望なからめくるなとみな盃の緣言なり此歌後拾遺の詞書又續世繼等に七夜とあるはたかへり五夜の宴なる事この記を證とすへし〇四條大納

言公任卿なり父三條太政大臣頼忠公母三品中務代明親王女○さし出んほと　當時は盃のめくる毎に歌よみてそ次々へはさしたるなり○こわつかひこわは聲なりこゝを榮には四條大納言みすのもとにゐ給へれはうたよりも云出んほとのこわつかひはつかしさをそおもふへかめるとあり今は爰の解言になれりこゝの詞契本は混亂せり○こと多くて　言は多くて也○とりわきてもさゝて　旁に手もさゝてと注せしはいたくひかことなりこは惣て中昔の物語書又紀錄書等にも常に見へたる事にて當時はすんなかるとも云て坐順に盃をめくらす事なるを時により又闌なる折なとは其格にはつれて今俗の盃の取遣の如きも有しなるへしそれをとりわきてとはいへるなり○一具とそ見へし　諸本一具そ見へしとあれとその字の上にとの一字なくてはとゝのはす故にいま補へり

又の夜月いとおもしろく頃さへをかしきにわかき人は船にのりてあそぶいろ〳〵なるをりよりもおなしさまにさうぞきたるやうだい髮のほとくもりなく見ゆ小大夫源式部宮木侍從五せちの辨右近小兵衛小右衛門うまやすらひ伊勢人なとはしちかくゐたるを左宰相中將殿中將君いさなひ出給て右宰相中將かねたかにさをさゝせて舟にのせ給ふかたへはすべりとゞまりてさすがにうらやましくやあらんと見出しゐたりいと白き庭に月のひかりあひける樣だいかたちもをかしきやうなり北の陣にくるまあまたありといふはうへ人ともなりける藤三位をはしめにて侍從の命婦藤少將命婦うまの命婦左近命婦筑前命婦近江命婦なとそ聞へ侍しくはしく見しらぬ人々なれはひかことも侍らんかし舟の人々もまとひ入ぬ殿いてゐ給ておほすことなき御けしきにもてはやしたはふれ給ふおくりものしな〳〵にたまふ

○九月十六夜○左宰相中將　經房なり卷の一にいへり○殿中將君　大二條關白教通公にて父は道長公母は倫子なり此中宮の御兄君におはします○と見出し　見出しゐたるさまはうらやましくやあらんと見ゆと云意にて見出しの見に御許の方より見ゆの見をいひかけたるか如く聞ゆされとかやうの云かけは歌には常なれと文にはをさ〳〵見あらぬ心地す又思ふに外見出しにてもあらんかそは常

夏の巻に姫君を少しといて給へとて云々とあるといても外出の事といへはつかひさま似たり○いと白き庭に　既にも委しく云る如く女房の裝束の白きを云それに月の光り合たるなり○北のちん　拾芥抄に朔平門を云といへり○うへ人　天皇の御方に仕奉る女官達をしかいふ○藤三位　とうさむみとよむへし其故は巻一の藤ノ三位に混さらしめんか爲かつかようによむそ女官の名の例也一條院の御乳母にて枕草紙巻七又後拾遺哀傷部の歌の詞書に見へたり○左近命婦云々　以下三人は契本になし○まとひ入ぬ　上人ともの參りしに依てあはてふためきて殿中へ入となり○もてはやし　かの上人ともを道長公のとりはやしあへしらひ給をいふ○しな〳〵に給ふ　上人の御供の人等まて上下それ〳〵に給ふの意なるへし扨新古今集賀部に後一條院うまれさせ給へりける九月つきくまもなかりける夜大二條關白中將に侍ける時わかき人々さそひ出て池の舟にのせてなか嶋の松かけさしまはすほとをかしく見へ侍けれは「曇りなく千年にすめる水のおもに宿れる月の影ものとけしと此御許のよまれつるは此夜の事なり

七日の夜はおほやけの御うふやしなひ藏人少將(道雅)を御つかひにて物のかす〳〵書たる文やないはこにいれてまゐれりやかて返したまふ勸學院の衆ともあゆみして參れるけさんのふみともまた啓す返し給ふろくとも給ふへし今夜ひぎしきはことにまさりておどろ〳〵しくのゝしる

○九月十七夜　契本に七日の夜云々より下やしなひ以上十七字なし例の寫し漏せるなるへし必すなくてかなはぬ詞ともなり

○藏人少將(道雅)　父伊周公母重光女御記寛弘四年正月十三日條に未時參內被補藏人右兵衛佐｜｜唯若年故故關白鍾愛孫也仍被補云々　記略寛弘五年九月十七日甲戌同(同ト八皇子降誕之後トアルヲ指セリ)七夜なり抑所司調進饗祿公卿以下献和歌令權大夫俊賢卿作序○物のかす〳〵書たる文　今云目錄にて其書樣等源禮委記に委し○やない箱　柳筥は冠卷物硯筆なとをも入るよし延喜內匠式に年料柳筥一百六十八合(一尺六寸以上一尺以下深サ四寸)又主計式五畿內輸雜物に柳筥一合(長二尺二寸廣二尺)如斯大きなるもあるなり徒然草卷四に柳筥に

すうる物はたてさまよこさま物によるへきにや巻
物なとはたてさまに猶て木のあはひより紙ひねり
を返してゆひつく硯もたてさまに置たる筆ころは
すよしと三條右大臣殿仰られき勘解由小路の家の
能書の人々はかりにもたてさまにおかるゝことな
し必すよこさまにすゑられ侍りきと云り〇やかて
返し給 やかては直に其まゝなり此下にぐし給ひ
つる出納小舍人にいたるまてろくとも給はせてか
へし給けると紫には見えたり
〇勸學院衆 旁に勸學院者是淳和天皇天長二年冬
嗣大臣被申立之七辨之內一人補別當是謂南曹辨云
々又外師記五夜條にいはく今夜勸學院學生等參中
宮奉賀皇子降誕由所謂步是也また源禮委記にいは
く參賀事（撰吉日依仰參上多川三五七夜等）とある 次下に勸學院條に辨
別當奉氏秀才以下參入大進取見參覽大夫次令啓仰
聞食由ォ辨別當以下院司以上列立南庭再拜退出次
賜祿有差云々 あゆみして 江次第卷二十勸學院
前條に學生參入立ニ東宿砌ニ付ニ家司ニ奉ニ見參ニ次入ニ
中門ニ再拜雜色舉レ炬ニ次學生被レ仰ニ可レ着座ニ之由ー學
生着（中間北廊北上對レ座）一獻（諸大夫）二獻（殿上人）三獻（公卿）學生獻ニ朗詠ー

次給レ祿經ニ別當ー公卿取盃之時ハ學生等下レ坐之と
見へて執柄家の禮式と見へたり〇けさんのふみ
同書試樂條ノ頭書に云見參蟬冕抄云三人以上參着
之後所衆書之付藏人云々令レ見ニ之坐上人ニ一巡見レ
之舞人上﨟度陪從上﨟一巡見下之返ー與所衆ニ所衆
付ニ藏人ニ奏時使ニ小舍人ニ隨ニ人々參來ニ重又進レ之
一夜兩三度或又令レ之許書只依ニ﨟次ニ書レ之不レ分ニ
別歌人舞人ニ云々隨ニ見參ニ到來候ニ御前ニ藏人挿ニ文
刺ニ奏覽了返給 又けいす 又とは前に物の數々
出たる文を啓して後又勸學院の見參文を啓すると
なり

（附箋云） 此試樂は何ノ試樂カ若シ水カモ臨時祭
試樂ニ蟬冕抄ヲ引タルコナシイカ、 後諸書を
按に都て此見參に預ることは祿を給はんか爲の
ワサと聞へたり

御帳のうちをのそきまゐりたれはかく國のおやとも
てさわがれ給ひうるはしきみけしきにも見へさせ給
はすすこしうちなやみおもやせておほとのごもれる
御有さまつねよりもあえかにわかくうつくしけなり
ちいさきとうろを御帳のうちにかけたれはくまもな

きにいと〻しき御いろあひのそこひもしらすきよらなるにこちたきみぐしはゆひてまいらせ給ふわさなりけりと思ふかけまくもいとさらなれはえぞ書つ〻け侍らぬ

○御帳　和名抄釋名云帳（権高反此間音長）張也施二張於床上一也云々○國のおや　名目抄に國母天皇にそなはり給へき皇子うみ奉らせ給たる故に國母とは申奉るなり○あえか　旁にひはつによはき體なりと云るはようし○とうろ　禁秘抄夜御殿の條に御帳ノ四角有二燈樓一とあるは主上の夜御殿の御事なり中宮はいふもさらなり當時はさるへき女房たちの曹司にも寢屋にとうろ懸ることもありしなるへし常夏卷に（玉かつらの御方ないふところに）月なき頃なれはとうろにおほとなふらまゐれる云々と有を思へはなり作物語なからもかやうの筋の事は當時有しま〻を云へけれはなり○いと〻しき　この詞こ〻にいさ〻か似つかぬこ〻ちすもしはいと〻しろきのろを落せるにてはあらさるかこは試にいふのみ○そこひもしらず　萬葉集卷十五あめつちの曽許比のうらに云々又卷六筑紫にいたり山の曽伎野之衣寸見よと云々又卷四あまくもの遠隔乃極云々なとあまた見へてそこひは竪横をいはす其限りをいふ詞なりされは御色あひの白くうつくしさのかきりもなしといふなるへし面やせたまへる産後の御かたちけにかくこそおはしけめ○こちたきみくしは　こちたきはもと言痛と云詞と聞えたるをかやうに用る時はた〻甚多きやうの意にて枕草子卷一に菊の露もこちたくそほち云々なともありてこ〻も御髮のふさやかに多きをいふ榮花物語初花卷（寛弘五年春の條に）に此中宮の御髮の事をたけに二尺はかりあまらせ給へりと云へり○ゆひてまさらせ　そき尼にて亂し居給へはなり上のみくしおろさせ給ふの處に云る事見合すへし○かけまくもかしこくとのみつ〻き云るを中昔になりてはかやうにつ〻け云る事折々見へたりこはかけまくもかしこき事は云もさらなれはと云言を略きたる詞なり

大かたのこと〻もは一日のおなし事上達部の祿はみすの中より女のさうぞく宮の御ぞなどそへて出す殿上人頭二人をはしめてよりつ〻とるおほやけのろく

は大うちきふすまこしざしなゝと例のおほやけさま
なるへし御乳つけつかうまつりし橘ノ三位のおくり
物例の女のさうぞくにおり物のほそなかそへてしろ
かねの衣ばこつゝみなどもやかて白きにや又つゝみ
たる物そへてなゞどぞきゝ侍りしくはしくは見侍ら
す

○一日のおなし事　御産養の事は六日夜の殿の御
儀式に同しといへるなり公任卿の秋の月影のとか
にも見ゆるかなこやなかきよのためしなるらんと
よまれたるは今宵のことなり玉葉集賀部に出たり
○上達部のろく　是は中宮の御方より上達部に給
はる祿なり○女のさうぞく　もと女さうぞくとあ
りしを例によりての゜字補へり○頭　藏人頭なり
扨殿上人一人と頭一人と二人と云には非す二人は
藏人頭二人にて殿上人なる藏人頭二人の意なるへ
しさて此二人は左中辨通方卿と左中將賴定卿を云
へし通方卿は六條右大臣重信卿の男也道長公御記
寛弘五年正月廿八日條に以左中辨通方朝臣補藏人
頭云々とあり賴定卿は既に出つ○大やけのろく
是は天皇御方より給る祿なり○大うちき　袿の事

は既にも云る如く衣の事にて大袿と云は男の裝束
小うちきは女にかきると見へたり○こしさし　旁
に卷絹也と云るよろしかるへし花鳥に疋絹を腰さ
しといふは腰にさしはさむものなれはなりとあり
○大やけさま　朝廷さまなり朝廷をおほやけと云
も上のおほやけ〳〵しきの同意なるへし○ほそな
か　要領抄に細長は身の長四尺四五寸袖の長一尺
六七寸なり幼童の皇太子及殿上わらは童女の着る
物なり云々○又つゝみたる物　金の事なるへし
八日人々いろ〳〵にさうぞきかへたり
○九月十八日　○さうぞきかへたり　昨日まて七
日の中はこと〳〵く白き裝束なりしを今日は色あ
るに改めたるなり
九日夜は春宮權大夫つかうまつり給ふ白き御厨子ひ
とよろひにまゐりすゑたりぎしきいとさまことにい
まめかし白かねの御衣筥かいふを打いてゝ蓬萊なと
例の事なれといまめかしうこまかにをかしきをとり
はなちてはまねびつくすべきにもあらぬこそわろけ
れこよひはおもてくち木がたの几帳例のさまにて人
々はこきうちものをうへにきたりめつらしく心にく

くなまめいて見ゆすきたるから衣どもにつや〳〵とおしわたして見えたるを又ひとのすがたもさやかにそみへなされけるこまのおもとゝいふ人のはちみ侍し夜なり

○九月十九日　○東宮權大夫　賴通卿なり父道長公母倫子○白き御厨子　七日の後も猶かやうの調度は白きを用給ふ例と見へたり○打いてゝ　今俗に打出(ウチダシ)と云るにて文の浮出たるを云へし○蓬萊　御産部類記に御衣筥塗ニ銀泥一其上付ニ銀洲濱同鶴龜小松一とあるは則蓬萊の餝と聞へたり○此詞は有しことを其儘たかへすいひ語をいふ物語文に多く見へたる皆さやうの意と聞ゆ○くち木かたのきてう　朽木の形を摸樣に摺る帷をかけたるなるへし○こきうちもの　紫色の濃をいふ○めつらしく　昨日迄は白かりし几帳も朽木形に改り人々の裝束も常の如く色あるにかへたるを云○つや〳〵　物の明らかにくもりなき義なり舊事記に不便をつや〳〵もあらすとよめるも此意にて不便は俗にふしやう〳〵といふ意なり○おしわたして　並居る人々を見わたすにておしは詞なり女官達の濃紫の上着の上に羅の唐衣をきて並ゐたれはすきて明らかに見わたさるゝなり○又人の姿もさやかにそ云々　人の姿も又さやかにの意なり唐衣に紫の色のすきたるもつや〳〵と明かなるに人の姿やうたいも又つや〳〵と明らかにそ見へなさるゝと云事にてつや〳〵もさやかも同意なる事知るへし又の詞つよく聞へし○こまのおもと云々　此事は外に傳へなけれは何事とも知られす一本にうまのおもとゝ有又はちみを契本にははらみと有又一本にははちらひとも見へたり此日記後世に殘しおかんとならはいかてかゝる髣髴たる事をかくへきそ是等にてもよく〳〵思ふへし

十月十餘日まても御帳出させ給はす西のそはなるおましによるもひるもさぶらふ殿の夜中にもあかつきにもまゐり給ひつゝ御乳母のふところを引さかさせ給にうちとけてねたる時なとはなに心もなくおほゝれておとろくもいと〳〵をかしく見ゆ心もとなき御程をわか心をやりてさゝけうつくしみ給ふもことわりにめてたしある時はわりなきわざしかけ奉り給へるを御ひもひきときて御几帳のうしろにてあふら

せ給ふあはれ此宮の御しとにぬるゝはうれしきわざかなこれぬれたるあふるこそ思ふやうなることゝちすれとようこはせ給ふ
○西のそはなる　中宮の御座の側近く御許の夜も晝もさふらふなり○ふところを引さかさせ給ふ　乳母の懷におほとのこもれる皇子を愛し給さまなり○おほゝれ　愕然と云はんかことし○わか心をやりて　皇子の幼き御程に公の御心を添させ給て大切にまもり給ふとなり○わりなきわさ　尿(ユバリ)のことなるへし下のしとも同し○御ひもときて　公の自の御裝束の紐を解てなり
中務の宮わたりの御事をみこゝろにいれてそなたの心よせある人とおぼしてかたらはせ給ふもまことに心のうちは思ひゐたる事おほかり
○中務の宮　中務卿具平親王なり村上天皇皇子御母代明親王女莊子也又紀略卷十一に寛弘六年七月廿八日辛巳云々今日丑刻二品行中務卿具平親王薨年三十六
○具平親王北方中姫君
高松の上　北方の母―北方中ヒメ―賴成

雅夕丶―┬―爲時――紫
　　　　└―爲賴――伊祐――賴成

より成の實の祖母は高松上の妹より成の養父は紫のいとこなる緣なり
○御心にいれて　道長公の御心にいれてなり○そなたの心よせある人　此人は御許の自の事なり扨御許の伯父爲賴の孫伊祐の子の賴成は實は具平親王の御子と系圖ともに見へたれは中務宮に御許の心よせあるよしは此由緒なり又道長公と中務宮との事は道長公御室高松上は西宮左大臣高明公女にて此高松上の御腹に男君四所女君二所おはします其女君の内一所は具平親王の御子師房公の北方たりしよし大鏡に見へ又此事榮花物語初花卷寛弘六年の條に殿の左衞門督をさへき人々いみしうけしきたち聞へ給處々あれともまたとかうもおほしめしさためぬ程に六條の中務宮具平親王と聞へさするは故村上先帝の御七宮におはします麗景殿代明親王女莊子の女御の御腹の宮なり北方はやかて村上の四宮ためひらの式部卿の宮の御中姫君な

り中姫君の母上は故源帥高明公のおとゝの御女高松上の妹なりかゝる御中より出給へる女宮三處男宮二所そおはします其姫宮えならすかしつき聞えさせ給いさゝかかたほなる事もなく物きよき御なからひなり其宮此左衛門督殿をこゝろさし聞へ給へは大殿きこしめしていとかたしけなき事なりとかしこまり聞へさせ給てそのこはめからなりいとやむことなきあたりに參りぬへきなめりと聞へ給程にうち〳〵おほしまうけたりけれはけふあすになりぬ云々とも有て此道長公御子左衛門督は中務宮の御聟君なれはたかひに其ゆゑある事を知るべし心よせとは桐壺巻に一のみ子は右大臣の女御の御腹にてよせおもく云々とあるも同しく爰は御許の爲には內戚方の縁あるを云へり此御許の紫てふ名のゆゑよしにつきて種々の說あり其諸說諸書に見へたれは略す此御許の鷹司殿に仕へしてふ事を玉小櫛に物に見へたるやおほつかなしと云へり其事は續世繼皇上巻に見へたり袋草子の一說に一條院御乳母の子なりしかうして上東門院に奉らしむとてわかゆかりの者なり哀とおほしめせと申さしめ給故に此名あり武藏のゝ義なりと有を玉小櫛にはとり用ひられたりけに故有けに思はるゝことなりされど今又稲直つら〳〵按に此ゆかりの說は本こゝの條より出し事にてそれを後に傳へ誤りしならんかとおもはる先此說の中一には此御許の母常陸介爲信女の一條院の御乳母なりし事物に慥に見へたりいとおほつかなし二には后宮の召仕給へき女を天皇よりしか詔ひ口入奉らせ給事もいかゝなり其上此記中に見へたる知く餘の女官とは異にて中宮の御師範に參りなれたるさまなれはかれこれ似つかはしからす故今こゝの具平親王の方につきて道長公の方にもゆかりあるよしを思へば中宮へ參初られし時道長公の御詞に我ゆかりの物なりとの給ふか又中宮はもとより縁あることも知らせ給へきにも有ぬへければ天皇へ物のついてに奏し給し詞にも有へし扨こそ天皇も源氏物語（此物語を天皇のめて給ひしこと下に見へたり）のすくれたるをも愛給て其ゆかりの語につきて紫の御名は給しにも有へしかく道長公よりゆかりあるよしをも奏しなとし給ふそ誠に御許を御心にいれてもてなし聞へ給にもよく叶ておほゆ

されとかゝる事はかくと定へきわさにはゆめ〳〵あらねといさゝか此條を據として試にいふのみ
○心のうちは　御許の心の中になり道長公の何事にも中務宮の御方によせあらん人とおほして御心にとゝめて懸に語らせ給にも御許の心の中には思ふことのおきとなり其世事とは彼頼成も實は中務宮の御子なれとも表は伊祐の子なるを其内々の事をもよく知ろしめしての御あしらへなれはそれを此御許の例のおもひやり深き心にはいろ〳〵に心配せらるゝなるへし

行幸ちかくなりぬとて殿のうちをいよ〳〵つくりみがゝせたまふ世におもしろき菊のねを尋つゝほりて參る色々移ひたるもきなるか見ところあるもさまさまにうゑたてたる朝霧のたえまに見わたしたるはげにおいもしそきぬへきこゝちするになぞやまして思ふ事のすこしもなのめなる身ならましかはすき〳〵しくもてなしわかやぎてつねなき世をもすくしてましめて度ことおもしろきことを見きくにつけても唯思ひかけたりし心のひくかたのみつよくて物うく思はずになげかしきことのまさるぞいとくるしき

○行幸もちかくなりぬとて　道長公御記九月廿五日條に壬午參二大內一聞三可レ參レ宮給日一奏云十一月十七日御云可二參入一日遠可レ有二行幸一者又同廿六日條に癸未左中辨來云行幸事昨日御可レ然日令レ問二陰陽師一可レ申云廿八日乙酉召二光榮吉平等一問行幸日一申二來月十三十六十七日等吉日由一以二左中辨一奏二此由一十三日可レ有二行幸一一定又召二所陰陽師等一者定間雜事初季御讀經また十月四日條に辛卯召二右大臣一令レ申文次官奏一了此度中宮書三枚可レ有二來。十六日行幸一召レ仰中宮權大夫承之召二匡衡朝臣一令レ勘二着宮御名字一給とあるを按に此土御門の行幸は九月廿五日初て思立有し事にて十月十三日と一定有しを又十月四日に至て十六日とは決定せるなりけり○いよ〳〵　彼九月廿五日初て思召立ありしより其御用意ありしを此頃となりてはましていよいよの意也○つくり　此三字槻本また論にも見へすされと旁にあるもあしからし○うゑたてたる　此下にもの一字あれと上のつゝきのうつろひたるも又みところあるもと有に重りていと聞くるしくかくもの字を二つならへ云る處なれはこゝにも

後にふと混加はりつるにて必こゝのもの字はあるましき處なり故今略つ○朝霧　以下おいも以上契本になきはわろしなくてはしそきぬへきの詞聞へす○けにおいもしそきぬへき　けにとは世の言にも歌にも常に菊の花は齢長く老せぬためしに云よむをうけて諾(ケニ)とは云るなりしそきは退の略なり○おもふことの　かやうの述懐の詞是より下をり〳〵見へたるは出家の望あれと二人の女にほたされて心のまゝならさりしなるへし「姉の賢子は後一條院御乳母後には大宰大貳高階に嫁して大貳三位とよひ姉は辨の局とて後冷泉院御乳母なりしよし系圖に又榮花物語楚王夢の巻にも見へたり」一秀穎云ふ此一段は二人の女とある下に注するそよろしかるへし○なそや　何そやにて御許の自ら物思ひの絶ぬるを咎めたる詞なり○なのめなる　惣て此詞かやうに云るは俗に一とほり又大抵なといふ意と聞えたり○すき〳〵しく　此詞源氏物語に數多見へたるを按にみな好色めきて物すきにあた〳〵しきを云○つねなきよをも　こは俗に無常と云とは異にて唯物思ひなき世をも過してましの意なり○思ひかけたりし心　是則出家の望をいへり○物うく思はすに　自の出家の望の方はふしよう〳〵に大儀ともおもはすいよ〳〵催さるゝにつきては世のなけかしき事のみ増りて中々に宮つかへの方は心の外なるやうに思はれでふしよう〳〵なるとなり猶下の條につゝけて心得へし

いかて今は猶物わすれしなん思ひがひもなしつみもふかゝりなんと明たてばうちなかめて水鳥とものもふ事なげにあそひあへるを見る

水鳥を水の上とやよそに見むわれもうきたる世をすぐしつゝ　かれもさこそこゝろを遊ふと見ゆれと身はいとくるしかゞなりと思ひよそへらる

○いかて今は云々　深く思入たる事をおしかくし強て思ひなくさむさまにて御許のたへひとすちの心ならす直く物毎深くねんして堪忍つよき本性を見へし○つみもふかゝりなん　旁にふかゝりなとゝあるはなゞとの詞と心得誤られたれはなるへし又論になんとゝよまれたるもわろしと｜の字は受て下へつゝくてにをはにて清てよむへしふかゝるへしと云々の意なり○明たては　たゝ明れは

と云詞なり古今集明たてはせみのをりはへ鳴くらしよるは螢のもへこそわたれ○あそひあへる　催馬楽席田のいつぬき川に住鶴の千年をかねてそあそひあへる萬代かねてそあそひあへる○水鳥を云々歌　此歌千載集冬部に題不知と入たり一首の意はかのあそひあへる水鳥をも我身よりよそ外のものとやは見るへき我身もかの水に浮たる鳥の如くうきたるよをふれはとなり浮たる世とは身の落つきもさたまらす後いかゝなるへきそと身の上を楽る意なるへし○かれもさこそ云々　強ておもひ念しゐてもかの思には忍ふる事もまけにけると云る如く又立かへり身によそへられて物思へるさまなり

小少將君のふみおこせたるかへりごとかくに時雨のさとかきくらせばつかひもいそく又空のけしきも打さわき出なんとてこしをれたる事やかきませたりけんくらうなりにたるにたちかへりいたうかすめたるこせんしに

雲まなくながむる空もかきくらしいかにしのぶるしぐれなるらんがきつらんこともおほえす

ことわりのしぐれの空は雲間あれとながむる袖そかはくまもなき

○さと　今俗にもサットフルなといへり○こしをれ　歌の病に云も同しく卷四にこしはなれぬはかりをれかゝりたる歌云々とも有て則腰折の義なり古今著聞集卷十六に奈良法師等の風流棚の六首歌を一首にてかへしつかうまつれと仰られたる時よめる秦覺の歌に「なら坂のさかしき道をいかにしてこしをれとものこへてきつらんと有も歌の病を云るなり又箒木卷にこしをれふみといふことあり則こゝも其意なり○立かへり　蜻蛉日記解環に其儘じきに使の立もとりてといふ意に解たるはかなへりされと此詞は嘗は人の許よりの歌にまれかへしをいひやりたるに又其人の許より其返につきて再度いひおこす時用る詞にて唯返しには直に云やるをも立かへりとはいはぬ例なり小少將君のもとより文の來りたる返書を使をまたことおきていそき書てやりたるに又小少將君のもとより直に歌よみておこせたる也さて又返しの歌よみてやれるなり○いたうかすめたるこせんし　唯かすめたり

といふ時はうす墨色をいへはこゝは色の黒き程なるを云へしこせんしは濃染紙なるへし此色時雨ゑ空のいろにあはせたるなり當時かやうの事に心を用たる事外にも見へたり○雲まなく……歌小少將君の歌にて新勅撰冬の部に里に出て時雨しける日紫式部に遣しけると有扨なかむる空も雲間なくの意にて一首の意は過こし事をつく／＼と思ひつらねてなかむ袖も涙の降やまぬに眺空も雲まなくしくるゝは此上にまたいかに物思へとての事そと時雨に對して云るなりいかにしのふるはいかに令(スヘ)レ忍(シノバ)にて物思はするといはんかことく忍は昔を忍ふなとの忍に同し○ことわりの……歌御許の歌にて同集に出たり一首の意は陰たる處なしことわりのとは十月十日あまりの頃なれはなり此まもなきを新勅撰にはよもなきと有よはまの誤歟

紫式部日記解巻三

飛驒國高山民　足立稻直著

その日はあたらしくつくられたる舟どもさしよせさせてごらんず龍頭鷁首のいけるかたち思ひやられてあざやかにうるはし行幸は辰の時とまだあかつきより人々けさうし心づかひす上達部の御座は西の對なればこなたは例のやうにさわがしうもあらず内侍のかんのとのゝ御かたに中々人々のさうぞくなゝどもいみじうとゝのへ給ときこゆあかつきに少將君まゐり給へりもろともにかしらけづりなゝどす例のさいふとも日たけなんとたゆきこゝろどもはたゆたひてあふぎのいとなほ／＼しきをまた人にいひたるもて來(コ)なゝど待ゐたるにつゞみの音をきゝつけていそぎ參るぞさまあしき

○十月十六日　紀略に云十六日癸卯天皇駕鳳輦行幸中宮御所上東門第依第二皇子誕生也有音樂即以皇子爲親王御名敦成左大臣以下於南庭拜舞宴遊之行給祿有差又左大臣室源倫子叙從三位宮司等叙位子剋還御（其中左大臣ノ息二人家司二人叙位）○龍頭鷁首　淮南子云龍舟

鷁首註に高誘云鷁水鳥也畫二其形一以禦二水忠一とあることく龍も鷁も水風の難をさくるの義にて船舟の餝とはするなるべし是今日の行幸に樂人の乘べき料に作られたる右左二艘の船なり其よし下に見ゆ○上達部の座は西の對　道長公御記に公卿着二西對南廂座殿上人同着卯西廊座云々○こなたは御許の局は東の對なる事卷二にも見えたり○ヨ侍のかんのとの　尙侍は卷一にも云る如く道長公御女此中宮の御妹嬉子なり）中々　中宮は東の對に住給ふなるべし（此くに御許も東對に局してすめるなり）故に此度の行幸は若宮御對面の爲なれは此中宮の御方にてこそよろつのかさりもとゝのへさわくべき事なるに東對は例のやうにてさわがしうもあらてかへつて尙侍の御方などにては裝束などいみしうとゝのへさわくど云るにて中には此かへつてと云意なり扨尙侍は西の對に住せ給へはなり○少將の君參り給へり里より參給ふなり○さいふとも　俗にさうはいふども云さいふともは行幸辰の時といふとも遲くなりて日もたけての事なるべしとゆだんしたる事なり爰は西の對のやうにさわかしくのゝしらず落ゐる物から左樣(サウ)いふとも鬢けつりなとするほとには終に日高く成なんと緩々し心もなくなりて聞かはしくなりたるとなり○また人に云たるもてこ　此句は人に云つけ遣たる扇をまたもてこぬはやくもて來といふ意略せるなり○つゝみのおとを聞つけて　延喜中務式大儀日條に鉦鼓各二面寅一尅擊裝束鼓二三尅列陣鼓卯一尅進鼓丞二人分二率內舍人一供二奉駕前一天皇御二大極後殿一云々又花山抄卷一御齋會初條に圖書頭寮依レ仰打レ鐘供二御輿一丁御大極殿云々など見えたる如く擊物するは其時刻を令レ知のわざ也（横ノ車古事記卷三十一卷四十七丁）扨つゝみとは何にまれ打鳴す物を總て云名なりこゝは行幸の日は兼てより土御門殿乃門戶を閉て出入の人をも堅防禁せらるゝわざにて扨其御輿近く時刻には開門の令知に打ならす鼓を云なるへし諸門閉開ことに鼓を擊事宮衛令に委し又同令に若行レ所レ幸皆先防二禁門巷一云々二丁又車駕行幸聞二諸門一隨レ聖開二御門一其留守人者各自二理門一出入並燃遣使至乃開丁とも見えたれはなり○いそき參るそさまあしき　ぞの字諸本に漏せり故今補〉

御こしむかへ奉る舟樂いとおもしろしよするを見ればかよちやうのさる身のほとながらはしよりのぼりていとくるしげにうつふしふせりなにのこと〳〵なる高きまじらひもみの程かぎりあるにいとやすげなしかしと見る御帳の面おもてにおましをしつらひて南のひさしの東の間に御倚子を立たるそれより一間へだてゝ東にあたれるきはに北南のつまにみすを懸へだてゝ女房のゐたるみなみのはしらもとよりすたれをすこし引あげて内侍ふたりいづ其日のかみあげうるはしきすがたからゑをかしげにかきたるやうなり

○むかへ奉る　道長公御記此間船樂從南山間數廻御前公卿座定後返入云々迎へ奉るは令迎奉る也雜樂要錄下二十丁法勝寺御塔供養永保三年十月一日行幸入御鳥向樂船樂また法金剛院御塔供養右同と有體源抄十二末に鳥向樂は弘仁御時南池院行幸船樂に作之鷁首に向故名鳥向云々又溢河鳥と云樂も池ある處にはすへきよし雜秘別錄に見え又右の要錄供養なとの行幸にも此二曲ならで慶雲樂賀王恩をしたる例もあり

雜秘別錄音樂生孝道作　もろ〳〵の大法會行道に鳥向樂溢河鳥をすめり右舞人上﨟一をうつ御前御さしきのまへなとをすくる時兩三拍子うちて通る秘藏の手ある中に鴨の胸そりといふ手あるとかやそれに河にしふく鳥と書たる故鳥向樂もやかて此意なり行幸池有所は船は舞人參向ふにけきといふ鳥のかたを舟に作たりまゐれは鳥向といふ故とかや是らによりて今は行道には大やう是二つこするなりとあり　今俗に迎をむかひと云はひか事なり○よするを見れは　こは舟をよするに非御輿を駕輿丁等の舁よするなり舟にて行幸あるには非○かよちやう　駕輿丁は御輿を舁奉る卑き者なり丁はヨホロと訓て鈴屋大人說に足の膕ヨホロボネによれる名にて仕はれて足して走ありくより云といはれき今人足といふ類なり○さる身の程なから　數にもあらぬ下卑の身なからも主上の御輿を舁奉るか故に階へも上るといへるなるへし○いとくるしけに　是は御輿の重きを苦しむにはあらて卑賤の身の階上にのぼれるをくるしけにかしこまりうつふしたるなるへ

し○なにのこと〳〵なる云々　何の異事の変らひにも人の程々につけて高きましらひと雖其交合の限りは有けなれとも是等誠にいと安々しく卑き限なりと云るならんかやすけなきのなしは詞にて無の意ににあらし又こは高きましらひの内にて何々と高下の身程かきりあるにまして卑身の階に上たるなれはやすけのなきといへるなるへし此なしははしたなくいはけなしのなしとは異なるへし安き方といはんにはりをしに誤たる歟と云へしなしといはんにいとゝ云事少しいかゝなるやうなれとも上にくるしけにと云へは又くるしと云ては文あしけれはいとゝ安けなしといへるなるへし猶よくよく可考○御屏ふ定は中宮の御座に立たる御帳ならんさらは中宮行幸前に西對に御座しつらひて出る給ふなるへし○御倚子　名目抄に依てゴイシと訓へし主上の御座なり○あたれる諸本あれたるとたれの二字を下上に誤れり榮語によりて改○内侍ふたり　左衛門内侍と辨内侍とにて此二人は典侍なり○其日のかみ上　内侍の姿なり○から繪　唐繪かもしはからはかみの誤にて紙繪ならんか紙繪と

云事繪に巻に見えたり

左衛門内侍御はかしとる青色のむもんのから衣すそごのもひれくんたいはふせんれうをはじたんに染たり表ぎは蘇の五重かいねりはくれなゐ姿つきもてなしいさゝかはづれて見ゆるかたはらめはなやかにきよげなり辨内侍はしるしの御筥紅にゑびぞめのおり物のうちき裳から衣はさきの同じこといとさゝやかにをかしげなる人のつゝましげにすこしつゝみたるぞこゝろぐるしう見えける扇よりはじめてこのみましたりと見ゆひれはあふちだんゆめのやうにもこよひのたつほどよそほひむかしあまくだりけんをとめ子の姿もかくや有けんとまでおぼゆ

○すそこのも　傍に末濃の裳○ひれ　延喜縫殿寮式に中宮春季露に領巾四條料紗三丈六尺九尺古事記傳　卷に比禮てふ物は如何なる物ぞと云にまつ比禮とは振下の約たる名にて何にまれ打振物を云されは魚の鰭も水中を行とて振物服の領巾も本は振む料にて故皆本は一つ意につけたる物ぞと有和名抄に領巾婦人頂上飾なり○くんたい

北山鈔巻三着裳服次第女裳服無裲襠に袖三尺五寸無領巾其裙帯紫緣平合如帳紐兩端形纈形不用簪用簪是位驗也云々枕草紙巻十一に靑すそこのもくたいひれなとの風にふきやられたるいとをかし和名鈔釋名云上曰裙唐韻云音與群同字亦作裠下曰裳音常和名毛白氏文集云靑羅裙帯裙帯同云如何ふせんれう　浮線綾名目抄に臥蝶冬直衣皮と有一書に臥蝶ともありは異事なるへし○はしたん　一本にははしたつとありはしたんは名目抄に襠綾平緒なと見えたる同かるへし○菊の五重　要領抄に女ハ餝抄ハ抜萃に十月より五節迄の衣の中に菊の御衣うへ五すはう匂ひとへしろし云々○かいねり　玉鬘巻にも見えて一／＼の衣の名の如く聞ゆ考へし○はつれて見ゆる　差揚たる扇よりはづれて見ゆる也○辨内侍は云々　以下紅に迄の十二字契本になきはわろし扨此二人の内侍青色と紅色とを着るは禁秘抄に典侍條に儀式時着ニ禁色ー青色赤色と有に叶て聞ゆ○しるしの御筥　璽御筥也璽と御劒との大御寶はかりそめの行幸の折も御身をはなたせ給はぬ例なり玉鉾百首に久方の天つ日つきの御寶と御もとはなたぬやさかまか玉○心くるしう　つゝましけなる姿の見ゆる方より氣の毒に思はるゝなり○扇よりはしめて好ましたりと見ゆ

○おふちたん　名目抄に樗綾平緒見えたり和名鈔四聲字苑綾吐敢反俗音奴含反靑而黄也○ゆめのやうに　誤脱あるか未得解○もこよひのたつ　古事記豊玉姫條に化八尋和邇而匍匐委蛇云々文選第十二郭璞江賦に神蜧蝹蜦云々注に神蜧蛇也蝹蜦也とありとそ蝹蜦もこよふ義にてそはぬら／＼と行さまを云也領巾の動く樣の委蛇龍に似たるをいふ葵巻にかゝるよはひの末にわかくさかりの子におくれ奉てもこよふことゝはち泣給ふ云々○むかし天下りけんをとめこ　都良香富士山記に貞觀十七年十一月五日吏民仍舊致祭日加午天甚美晴仰觀山峰有白衣美女二人雙舞山巓上去巓一尺餘土人共見云々江次第裏書云本朝月令に五節舞者淨御原天皇之所制也相傳云天皇御吉野宮日暮彈琴有興俄爾之間前岫之下雲氣忽起疑如高唐神女髣髴應レ曲而舞獨入ニ天瞻ニ他人無レ見擧袖五變故謂之五節云々此事は唯流言にて五節の起と云はひかことなから當にはやく世に人の傳へかたりけんされはこゝに昔と云も此

事をさして云るなるへし
後補此事は正說にはあらぬなからも延喜十四年三善清行奉れる意見封事請レ減ニ五節舞妓員一文中に接ニ舊記ニ昔者神女來舞未ニ必有ニ定數一と有とそ是古き傳說なりし證なり（詞花解評可考）
近衞づかさいとつき〴〵しき姿して御輿のことゞもおこなふいときら〳〵し頭ノ中將御はかしなゞどとりて內侍につたふみすの中を見わたせば色ゆるされたる人々は例の青色赤色のからきぬに地ずりのも表着はおしわたしてすはうのおりものなり唯うまの中將ぞゑびぞめをきて侍しうち物どもはこきうすき紅葉をこきませたるやうにて中なるきぬども例のくちなしのこきうすきしをん色うら青き菊をもしは三重など心々なりあやゆるされぬは例のをとな〳〵しきはむもんの青色もしはすはうなどみないつへにてかさねどもはみなあやなり大腰のすり裳に水のいろはなやかにあさ〳〵として腰どもはかたもんをぞおほくはしたる掛は菊の三へ五重にて織ものはせずわかき人は菊の五重のから衣を心々にしたり上はしろく青きがうへをにすはう一重はあをきも有うへ薄すはう次にこきすはう中に白きまぜたるもすべてしざまをかしきのみぞかど〳〵しく見ゆるいひしらずめづらしくおどろ〳〵しき扇ども見ゆ

○近衞つかさ 百寮訓要抄に近衞府と云は君をちかくまほり奉る武勇の職なり左右衞門左右兵衞をは外衞といふ是は宮城の外を警固する職なり近衞は門內を警固すへし○頭中將 頼定卿にて左近衞中將なり○內侍につたふ 下條に見えたる右衞門內侍なりそこに御はかしとるとありしは先其一わたりを云るにて頼定卿よりとり傳へてさて內侍の持て供奉するなり○みすの中 上にいへる北廂の妻に懸たるみすなり○青色蘇方の表着の上に青色の唐衣は裝束抄ともに見えたる中重手紅葉なり○赤色 是も表着蘇芳の上に赤色いから衣きたるにて裝束抄に云紅ヲ重なり
○ゑびぞめ 衣服令義解に云蒲萄者紫色之最淺者也枕草子に一の人のみありき春日まうでゑひそめのおり物すへて紫なるは何も〳〵めでたしと有爰は中將はかり紫の表着をきたる也男女裝束抄に蒲萄染のうはぎ（はし紅葉の衣の時用之）と有し打もの 或書に紅を

云といへり
○こきうすき　此詞紅葉と云詞へ屬て心得へし○
中なるきぬ　打物の下着を云歟未審○くちなし
支子色に表紅の打物を重たるは裝束抄ともに見え
たる櫨紅葉也○しをん色　卷一に云り○裏青き菊
　表黄裏青は裝束抄ともに黄菊と見えたり○あ
やゆるされぬは　一卷色ゆるされ又ゆるされぬは
は云々處と考合るに色ゆるも綾ゆるも同し事かと
おほしこゝは色ゆるされたるに對てあや聽されぬ
は云々といへればなりまた爰のかさねともはみな
あやなりとあるをもて思へはゆるされぬ人も禁色
の綾ならねはくるしからぬなるへしされは禁色と
いふも綾に染たる色のことなるへし其色の事は既
に卷一にいへり○かたもん　旁に同文と註す下に
かたきのもんとあるもしは同き歟○うへは白く青
きか上をはすはう　これより以下菊の五重三重を
註したるなり男女裝束抄附錄六に菊の御衣（うへはすはう匂ひ）
し下白　白菊（おもて白裏すはう）黄菊（おもて黄うら青）移ひ菊（表中紫うら青）なと見えた
るを按に爰には青きか上に蘇芳又其上は白きにて
衣に見えたる巾の白菊也是一人の裝束なり○一重
は青きも有　是又一人の裝束にて青か上に蘇芳又
單は青きを着たる也單は五衣の下に着るよし見
えたり是は黄菊なるへし以上の二品は三重かさね
の法なり○うへはうすゝはうにこき蘇芳中に白きま
せたる　是又一人の裝束にて五重かさねの法なり
是も右の菊の御衣のかさねやうをかへたるのみ○

おとろ〳〵しき扇

うちとけたる折こそまはならぬかたはもうちましり
て見えわかれけれ心をつくしてつくろひけさうしお
とらじとしたてたるをんな繪のをかしきにいとよう
似て年のほどのをとなびいとわかきけちめ髮のすこ
しおとろへたるけしきまたさかりのこちたきがわが
まへばかり見わたさるさては扇よりかみのひたひつ
きぞあやしく人のかたちをしな〳〵しくもくたりて
もてなす處なめるかゝる中にすくれたるとみゆる
こそかぎりなきならめ

○まほ　片ほに對たる詞にてまほならぬとは形の
ふくなるといはんがことし○としのほと　此詞は
をとなひとわかきとの二つにわたる意なり○けち
め　稲田東滿主の説の如く別目の略とする時はち

文字請へし○鬓のすこしおとろへ云々　此詞は年の程のをとなひは首尾又さかりのこちたきはいとわかきの首尾なりこちたきは鬓のふさやかに多きを云事既に見えたり○ひたひつきそ云々　差揚たる扇の上より見ゆる也此御許は常に人の額つきを評せられたる事多し容蟬卷にそゝろかなる人のかしらつきひたひつき物あさかやに云々夕顔卷にをかしきひたひつきのすきかけあまた見えてのそく云々なと猶多かるへし心をつくへし○くたりてもことわりをもていふ時はくたしてもと有へき言なりされと諸本皆かくの如くなれは輙（タヤスク）え改めす○すぐれたると　すくれたりとといはてたると丶受たるはすくれたる人と云意にて一格なり

かねてより上の女房宮にかけてさふらふ五人は參りつとひてさふらふ內侍二人命婦二人御まかなひの人ひとりおものまゐるとて筑前左京のおもとのかみあげて內侍の出いるすみのはしらもとより出これはよろしき天女なり左京は青色に柳のむもんの唐衣筑前は菊の五重のから衣裳はれのすりもなり御まかなひ橘三位青色の唐衣から綾の黃なる菊のうちおそうは

ぎなめる「一もとあけたり（ヒトモトアゲタリ）」はしらがくれにてまほにも見えず

○かねてより　此句參りつとひてへつゝく○宮にかけて　かけては天皇の御方と中宮との二方に仕へて今俗にかけもちにすると云に同し○內侍二人云々　內侍二人は上に出たる左衛門內侍辨內侍也命婦二人は左京と筑前御まかなひ一人は即橘三位の事也○是はよろしき天女なり　上に昔あま下りけんをとめこもかくやあらんとまておはゆと云たるをうけて爰にては天女なりと決定して云たるおもしろし○青色に柳の云々　男女裝束抄に青柳衣うら長く こき青い 裳は云々　左京も筑前も同し摺裳をきたる也○橘三位　卷一に見えて御乳付つかうまつりし人なり道長公御記に其後着公卿座盃酌數獻此間脫御裝束給如朝予傅奉供御膳二位轄子候宿上女方等供御繕云々○一もとあけたり　此句不得解旁にも此上に漏字ある歟とうたかへり今按て思に一もとは本ひともとを草字に書るにてそは初めひかこの三字をひとの二字に誤又もとはともをを下上に誤りたると謂ゐる類上にあたれるなあれり扨あけたりはあるへしを寫しひか

めたるにてもとはひかことおあるへしならん賊なんめるといひまはにも見えすなとあるによくかなひ又卷二にくはしく見しらぬ人々なれはひかことも侍らんかしゝ有し例をも思へはなり猶可考

殿わか宮いだき奉り給て御前に出奉り給うへいだきうつし奉らせ給ほどいさゝかなかせ給ふ御こゑいとわかし辨宰相君御はかしとりて參り給へりもやの中戸より西に殿の上おはする方にぞ若宮はおはしまさせ給ふうへとに出させ給てぞ宰相君はこなたにかへりていとけさうにはしたなきこゝちしつるとげにおもて打あかみて居給へるかほこまかにをかしげなり衣の色も人よりけにきはやし給へり

○いだき奉り給て　道長公御記に參二御前一奉レ見二若宮一給レ余奉二抱上一又奉レ抱給云々○とのゝうへ倫子なり○うへとに出させ給云々　上外に出させ給なり此上は天皇を申奉る○人よりけに　けの字清へし勝にの意なり

暮行まゝに樂ともいとおもしろし上達部おまへにさぶらひたまふ萬歳樂太平樂賀殿なゝどいふ舞ども長慶子をまかで音聲にあそびて山のさきの道をまふほどとほしくなりゆくまゝに笛の音もつゞみのおとも松風も木ぶかく吹あはせていとおもしろしとよくはらはれたるやり水のこゝちゆきたるけしきして池の小波たちさわぎそゞろさむきに上の御あこめたゞふたつ奉り給へりたり左京の命婦のおのがさむかんめるまゝにいとほしがりきこえさするを人々はしのびてわらふ

○なといふ舞とも　此あたり何とかや詞つゝかす聞ゆ必す誤漏あるへし道長公御記に　船樂參二入池北頭一松樹下留レ船奏レ樂各二曲　其後又二雙龍頭一鷁首一舞臺一召人候屋北一是樂屋船也中略　船樂還出後召二樂所者階下一數曲後內大臣供御夾頭花諸卿同長慶子間余舞給云々とあるは船樂は還り入て後又別に樂人をめしよせて諸卿と同聲に長慶子を吹たてたるに道長公の舞給ひたる事歟此文も全しとはおほえす○まかて音聲にあそびて　すへて音聲といふは吹物はかりにて舞のなきを云と聞えたり江次第卷一元日宴會條に入レ自二長樂永安門一先吹二調子一謂二之參音聲一多用二春庭樂一　治部雅樂立二庭中一各奏二一曲一立二承明門前一舞畢退音聲萬歳樂地久賀殿延喜樂

云々又巻二大臣家大饗條に次雅樂寮參入（先參音聲）寮頭幷伶人一人自二幔門一入庭中樂人立蹲踞打一鼓次舞左右二曲（左萬歳樂右地久延喜樂）舞人各服插頭隨舞畢退出給祿（有音聲）又九條年中行事十一月辰日賜宴事條に大歌於承明門外發二音聲一（是問末字了支申）云々とあり是は口にて云るなり　なと有を考合へし皆舞畢て後また舞初さる前なとにのみいへり猶末の巻ともにも見えたれとみな同しさまなれはわつらはしさにこと〳〵くはひき出す又標源鈔巻一に參音聲には舞人懸二一鼓一也と有も舞なき故なる事知へし然るをこゝのさまはしからず何れにもこゝは何の脱落あるへし扨此音聲はネゴヱとよむへき歟（參音聲はまゐりのこゑ出音聲はまかでのこゑ）又字音にはもとよりよみかたかるへし（音聲の事玉かつま十一ノ十）たいしつおんせいまゐりおんせいと著聞十三にあたりにはよめりさらは音によむへし○つゝみのおとも　此つゝみは二鼓をいふへし○吹あはせて　笛の音ともに松風の響き合を秀句に云るなり○そゝろさむきに　そゝろの事先に云るか如くこゝも樂の音風の音に清わたるにきそはれて心のそゝりたつにてそれに折節寒さのブツ〳〵と身にしむをとり合せたるなり先に引る帚木巻又明石巻等の詞見合せ味はふへし扨池の水波立さわきも樂の響に水もそゝりたつ心ちするにて實に波の立さわくには非たゝそゝろはしきさまをあつめ云るのみ○あこめ　名目抄に衵（襲物束帶ノ時ニ用之若付色ニ一襲ニ付ル）装束圖式に天子打衵御神事之御時白前着御給云々又宇治大納言物語巻上堀川女御の事を云る條に白き御衣六七はかりたてまつりて御こしのほとに御ふすま引かけておはします云々和名鈔に二婦人近身衣なりとあれと婦人に限らぬ事殳をもて知へし

筑前ノ命婦は古院のおはしましゝ時此殿の行幸はいとたび〳〵ありし事なり其をりかのをりなど思ひ出ていふをゆゝしきこともありぬべかゝめればわづらはしとてことにあへしらはず几帳へだてゝあるなめり哀いかなりけんなどだにいふ人あらばうちこぼしつべかゝめり御前のみ御あそびはじまりていとおもしろきに若宮の御こゑうつくしう聞え給ふ右のおとゞ萬歳樂御聲にあひてなんきこゆるともてにやしきこえ給ふ左衛門ハかみなどは萬歳らく千秋樂と諸聲にずして末のおほい殿あはれさま〳〵の行幸を

などてめいぼくありと思ひ給へけんかゝりける事も侍りける物をとゑひなきし給ふさらなることなりとみゝづからもおぼしゝるこそいとめでたけれ

○古院のおはしましゝ時云々　旁に古院を圓融院と注りそれもさる事なから猶按に此古院は圓融院の后宮にて道長公御妹詮子也此后は後に女院と申奉りて（崩給ひし所にも榮花物語とりへのゝ巻に天下涼闇になりぬとあるも院號の故なり）榮花物語とりへのゝ巻にたゝ院とのみ數ヶ所にいへる皆此后宮の御事なり御記寛弘三年十二月廿二日庚寅參慈徳寺故院御願手袈裟此度縫了由令申佛寺了退出云々とあり此故院も詮子の御事と聞えたり扨一條院の大御母に座まして長保三年十月此后宮四十御賀に一條天皇土御門へ行幸有し事榮花物語同巻十六丁右に見えたり猶爰に度々有し事なりとあれは其外も行幸ありし事おしはかり知るへしされは古院は后宮詮子の御事行幸は一條天皇の行幸の事なり扨圓融院の此土御門へ行幸の事はいまた不見當據ありや可考扨又此女院は長保三年閏十二月廿二日に薨し給師說に古院は圓融院なるへし東三條院はいまた存命なり故院とは云へからす古院のをりの事ちくせんか云出て今の行幸の事を云さましやせんと皆心つかひしたるなり今も老人にさる事あることなり喚を聞をわつらはしといふのみにあらす忌しき事いひ出んをきくかわつらはしなり○ゆゝしき　忌々しきなり○几帳へたてゝあるなめりを此頃かやうの處になめりとおしはかりたるてにをはゝともすれは見えたりこは人の上をおしはかり云のみにはあらていさゝかけちめ有とおほし先こゝを以ていはゝ外の女房達も几帳をへたてゝ有はことにわつらはしとてなんめりとやうに何をへたてゝわつらはしの詞よりつゝく意なり几帳をへたてゝ有は今眼前の事なれはなんめりなとはいふへからさる理なり○うちこほしつへかめり　筑前命婦のいと語らまほしくするをもしあへしらひとりはやす人たにあらはよろこひてうちあけ語出んと也今俗にもうちあけはなしと云に同しく心につゝみ殘す事なく語をいふ師說にもオケはよいにとおもふ事をうちもらして聞ともなく上に對してもよろしからぬ事いはねはよいとおもふなりさてあはれ先々の行幸とのたまへる事書出たるもこゝの答

にもあらなかへ御前のみあそひ　御前にて上達部殿上人達の樂し給ふにて樂人のつかうまつるにはあらす○右のおと丶　顯光公也父堀川太政大臣兼通公○御こゑにあひてなん　若宮の泣給ふ御聲の萬歳樂の調子にあふとのたまふなり○左衛門督既に卷二にも見えたる公任卿なり○萬歳樂千秋樂ともろこゑにすしてこは御祝言に皆人々聲を揃へて誦したまふにて神樂歌のせんさいせんさいせんさいや云々かとも思へと然にはあらす江次第卷十七御元服後宴條に上壽者下就二本列一親王以下共舞踏三唱二萬歳一と有是なり又當時年中行事正月五日條に千秋萬歳并猿舞於二清涼殿庭上一有レ之と見えたるもこの類なり○主のおほい殿　道長公なり○ゑひなき　萬葉卷三に「かしこしと物いふよりは酒のみてゑひなきするしまさりたるらし　「よの中のあそひの道にさふしくはゑひなきするにありぬへからし「もたしゐてさかしらするは酒のみてゑひなきするになほしかすけり猶物語書には常見えてみな吞醉ては同言をくり返し〳〵聞つらく云をいひて今俗にいふとは異なり○さらなることなり　さらはさやうの意なるへし扨諸本ことなれどとあれと榮にことなりとあるそよろしきとは受たるてにをはなれは清て稱へし

師說に　左衛門のかみ云々　萬歳をとなふとは別なるへしたゝ打誦し給ふなるへし○千秋萬歳は田樂猿樂やうのもてにて今も正月萬歳といふもの其遺風也とそ踏歌即萬歳といふ事もあり考ふへし

殿はあなたに出させ給ひうへはいらせ給ふ右のおとゝを御前にめして筆とりて書たまふ宮つかさ殿の家司のさるべきかぎり加階す頭辨してあないは奏せさせ給ふめりあたらしき宮の御よろこびにうちの上達部ひきつれて物し奉り給ふ藤原なからかどわかれたるは列にも立給はざりけり次に別當になりたる右衛門督大宮の大夫よ宮のすけかゝゐしたる侍從宰相つぎ〳〵の人舞踏す宮の御方にいらせ給て程もなきに夜いたう更ぬ御輿よすとのゝしれは出させ給ぬ

○殿は云々　御樂の席より天皇は内に入せ給ひ道長公は外に退給てなり○右のおとゝを御前にめして　こゝにはかく右大臣のみ見えたれと此時左右大臣御前に候せらるゝ事道長公御記に左右大臣

候二御前一書二叙位一と有にて知らるもしまこゝも右の字の上に左の一字漏たる歟。（評釈 御記の左右大臣云々左は右字なり此頃道長公左大臣なれはなほ考ふへし）○筆とりて書給ふ　此まゝにては天皇の御自書給ふ事と聞ゆ（令書）上に引る道長公御記による時は左右の大臣にかゝせ給ふなれは相違ありされと愛も誤脱ありけにも見えす先かき給ふはかゝせ給ふの誤かとも思へと然らは筆とりの言葉不穏又御前にめしては御前にめされてを誤れるかとも思へと又然らはそのおとゝをのをの字不叶故に今は轉本のまゝにして左右の大臣に其品々御かたらひ合せられて天皇御自筆とりて書給ふ事と聞てあるへし此時道長公は外に出させ給て御前にはおはしまさされは此御許の見奉りたる儘の方を助けて彼御記には暫そむきぬ

師説に　筆とりてかゝせ給ふなるへし即大臣の筆とらせ書しめ給ふなるを佃する詞を一つはぶく例あるへし又按に御書の時硯を向へむくるをおもへはもしは筆は君とり給ひて其筆を給はりて書しものにもあらんか

○宮つかさ　中宮御方の官人達を云（）殿の家司十御門殿の家司なり家司は下る司なとに對いふ時は家令の長（今の諸大夫の如し）をいへれとこゝはたゝ土御門殿の家令の人達をすへてひろくさして云るなり扨狭衣巻一に御いのりの事なと家つかさしきしともあつめて云々榮花鶴林巻に關白とのゝかみの家つかさいなはの前司ちかたゝをはよりあきらかゝはりの美濃になさせ給ふしもの家つかさた衛門のかみ云々なとあるによれは家司はいへつかさとよむならひなりされは音によまんは非と知へし

○頭辨して云々　道方卿也道長公御記に以二道方一被レ仰云（宮脱か）可レ賜二一階一如何奏聞云宮位　其高仕レ公間非レ無二春恐一不レ賜爲レ慶又仰云可レ然家司一人賜レ賞可レ奏二其人一者以二季隆一奏也叙位了右府着座止（經字）二位藤原朝臣齊信從二位源朝臣俊賢藤原朝臣。賴（あるへし）從四位下敎通從四位下季隆中略源倫子從一位慶賀人々奏聞其由余弁内府同奏是依子慶也云々（藤原上の位階は同位なれは省けるか從四下の二つなからあれは脱たる敎通は從上か）とあり○うちの上達部

氏は藤原氏なり御記寛弘三年正月一日條に云家人拜禮如レ常立加二上卿六所一四位以下五百人云々同し門の人達如此多し○藤原なから門わかれたる

は云々　藤原氏ははしめ鎌足公よりはしまりて其御子不比等のみ子達四人より四家にわかれたり其四家は太郎武智丸公を南家と號二郎房前卿をは北家と號三郎宇合卿をは式家と號四郎麻呂卿をは京家となつく此土御門殿は北家の流にてもとは同氏なからもかく別れたる外々の三家は此度の拜賀の、列には入給はさると也○右衛門督　齊信卿○大宮大夫　公任卿也大宮の亭下に見えたり○宮のすけ　經頼卿にて時中卿の子也○侍従宰相　實成にて公季公の子なり右四人のうち齊信卿公任卿の二人は藤氏なから別の人達なり經頼卿は源氏なりこれ先の拜賀に列し給はさりし別氏の人々の次に舞踏し給ふなるを此實成卿は師輔公の孫にて同北家の氏なからかく別氏の人達のつらに出たるは如何といふに其故ある事也道長公御記に云く以ニ道方一奏曰實成朝臣上達部亮彼給ニ一階ニ如何御云書落也早可レ入者右大臣承也書ニ加従三位實成ニ云々と有て先の氏の上達部の拜賀のすみて後に此奏はありける故に今別氏の人達と共に舞踏はし給ふなりけり師のおこの説非なるべし○宮の御方　中宮の御方へ天皇のいらせたまひてなり○いてさせ給ぬ　道長公御記に其還御如常

又の朝に内のみつかひ朝霧もはれぬにまゐれりうちやすみすぐして見ずなりにけり今日ぞ若宮のみぐしはじめてそい奉らせ給ことさらに行幸の後とてあるなりけりわか宮の家司別當おもと人なんど職事さだまりけりかねてもきかでねたきこともおほかりひごろの御しつらひ例ならずやつれたりしをあらたまりて御前の有さまいとあらまほし年頃心もとなく見奉り給ひける御ことのうちあひてあけたてば殿の上もまゐり給つゝもてかしづき聞えたまふにほひいとこゝろことなり

十月十七日○やすみすくして　朝寝したるなり○わか宮のみぐし　此七字諸本みなともになきを此詞なくては何をそい奉る事とも聞えすかならすありしものなれは考によりて今補つ　そいはそぎの音便なり○あるなりけり　此何も諸本になし必落たるへし是又考によりて補つ又の日と三字あれとこれまた混入たるなり此家司別當なと職事の定まりたるは十七日の事なるよし道長

公御記にてしらる故に此三字は今削りてつ○わか
宮の家司　此わかの字も樂によりて補つ其故は道
長公御記十七日の條に慶賀人々來戌時若宮定ニ所
々藏司ー先啓ニ中宮ー次以ニ賴定朝臣ー奏ニ聞内ー下給
後下ニ右衞門督ー右衞門督書別家司賜ニ賴定ー藏人所
賜ニ道方朝臣ー作人等申慶とあり○別當おもと人な
と云々　同曰左近中將源朝臣賴定中宮亮兼近江守
源朝臣高雅右近權少將源朝臣濟政右近衞少將源朝
臣雅通内藏權頭藤原朝臣能通散位藤原朝臣惟風甲
斐守藤原朝臣惟憲散位藤原朝臣濟家東宮大進藤原
朝臣知光美作守藤原泰通筑後權守大江朝臣擧周右
作々人々可レ爲ニ別當ー雅樂、源頼平右衞門督申織部正藤
親光右作人々可レ爲ニ御作ー詩力宮内卿兼左中辨源朝臣
道方右近衞權中將藤原朝臣教通左近衞少將藤原兼
絕右作等人可レ爲ニ藏人所別當ー主殿亮藤原定輔玄
蕃助源爲善少内記藤原隆佐中宮大人中左兵衞少尉藤原邦
恒東宮屬大人中右作等人々可レ爲ニ侍者ー文章生源賴國文章
生藤原章信陰子橘象通陰孫源行任橘憲か右作等人可レ爲ニ
藏人ーと見えたりへ　職事　名目抄によりてシキシ
とよむへし後宮職員令に内侍司より縫司迄の十二

司を擧て右諸司掌以上皆爲ニ職事ー自餘爲ニ散事ー云
々又公式令に凡内外諸司有ニ執掌ー者爲ニ職事官ー無ニ
執掌ー者爲ニ散官ー云々職事とは其執掌ある人々をひ
ろくさして云名なるへし落窪物語卷二に衞門の督
殿の家司なる但馬守下野守政ナシ別當なる衞門佐雜
色なとのさう〳〵しきを召て云々人々おとろきて
いつこの人そととへは衞門のかんのとの丶家司職
事とも也と答へたるも別當雜色をさして職事と云
りこゝもおもと人別當なとをさしていへる事知る
へし○かねてもきかて云々　御許は女の大貳三位
此後一條院の御乳母なりしより系圖とに見えたるはなおいや此記中にはさる事見えすに　なとの身の上
につけて望事有しか又自らの望のありしにても
有へし玉葉集春部に上東門院中宮と申侍ける時里
より梅を折て參らすとて　埋木の下にやつるゝ梅
花かをたにちらせ雪の上まてと此御許のよめる事
見えたれは也（）やつれたりしを　日來も中宮の御
方のおとろへたまふいふには非御惱によりて御前
の儀式めく事もなく何事も略かち也しを云○うち
あひて御前の人達も官位まさりたる事又日頃心も
となくおほしめし丶御座もつゝがなく出來たる事

との二つか倫子の御こゝろそのまゝにうちあひかなひたるなり

くれて月いとおもしろきに宮のすけ女房にあひてとりわきたるよろこびも啓せさせんとにやあらん妻戸のあたりも御湯殿のけはひにぬれ人の音もせざりければ此わたどのゝ東のつまなる宮の内侍のつぼねに立よりてこゝにやとあなひし給ふ宰相は中のまによりてまださゝぬ格子のかみおしあげて おはすやなゝどあれど出ぬに大夫のこゝにやとのたまふにさへきゝしのばんもこと〳〵しきやうなればはかなきいらへなゝどすいと思ふことなげなる御けしきどもなりわが御いらへはせず大夫をこゝろことにもてなしきこゆことわりながらわろしかゝる處に上﨟のけちめいたうはわく物かとあはめ給けふの たふとさなゝど聲をかしううたふ夜ふるまゝに月いとあかし格子のもとゝりさけよとせめ給へどいとくだりて上達部のゐ給はんも處といひながらかたはらいたしわかやかなる人こそものゝ程しらぬやうにあざへたるもつみゆるさるれなにかあざれがましと思へばはなたず

○宮のすけ 經賴さきにいへり○啓せさせとにや

女官にあひて格別の御祝言を中宮へとり次申ゝせんとにやあらんと云意也○けはひにぬれ ぬれは俗にしめるといふに同し心はへにて人の音もせすしめ〳〵と静なるを云る也それは御湯殿の緣言もてぬれとはいへり○此わた殿 東の渡殿なり○宰相 左宰相中將經房卿卷一に見えたり○中のま すべて細殿渡殿には三ツの口有て其第二の口を中ノ口又中の間とも云なるべし是御許 の局にて中の間の戸口の局なり卷 に細殿の三の口といふ事見え又花宴卷に弘徽殿のほそとのに立より給へれは三の口あきたりと云々枕草子卷八にもほそとのゝ一のくちといふ事見えたり○またさゝぬ○勞契本ともまたさらぬと有は誤にてさゝぬなりさゝぬをしては翌朝の方よりいふ言になるなりこゝは夕暮の方よりいへれはさゝぬなり扨さゝぬは半蔀の上もおろしなから機をはまたさゝぬなりおしあげてとあるをもて知るへし○大夫 宮大夫齊信卿なり○はかなきいらへ 俗にふキトモセヌ答をすといふ意なり○わか御いらへはせす 是よりわか物かといふ迄經房の詞也○あはめ給ふ 帚木卷にあ

はめにくみて云々河海に淡とあるよろしかるへしはの字清てよむへし○けふのたふとさ　催馬樂にあなたふとけふのたふとさやいにしへもはれいにしへもかくや有けんけふのたふとさやあはれそこよしやけふのたふとさ○をかしうゞたゝ　大夫宰相なとの御事なれはうたひ給ふと云へきやうなれと此例下にも見えたり○とりさけよ　さけは退なり旁に取下と注したるは如何下とする時は格子を下せよといふ言になるなり爰は月のおもしろきにつけて半蔀の下をも取退よとの給ふにて旁注いたく違へり○處といひなから　なからといふ言審ならす中宮の御座ちかけれはかやうの上達部參り給ふとも誰とかめもすへきにはあらねとゝ云意歟同しくはなからの三字なくてあらまほし○あさへたる　或説ともに貯また叉の字等をよみて雜へ支ふる意なりといへるはいかゝあらんもしはさも字清てよみて淺への義歟そは始終のおもひはかりのふかき用意もなく淺々しき心はへなり○あされかまし　あさけるも本同語よりうつりたる歟されは今の俗にシャレルなといふ意にや○はなたす　半蔀の下を猶とりさけぬなり旁のことゝにては此詞聞えず

御五十日はしも月ついたちのひ例の人々のしたてゝのぼりつどひたるおまへのありさま繪にかきたる物あはせ處にぞいとようにて侍し御帳の東　御座のきはにみ几帳をおくのみざうしよりひさしの柱までひまもあらせずたてきりてみなみおもてに御前の物はまゐりすゑたり西によりて大宮のおもの例のちんのをしきなにくれのだいなりけんかしそなたの事は見ず御まかなひ宰相ノ君さぬきとりつぐ女房もさいしもとゆひなゞどしたり若宮の御まかなひは大納言ノ君ひんがしによりて餘りすゑたりちいさき御だい御さらども御はしのだいすはまなゞどもひゝなあそびのぐとみゆそれより東のまのひさしのみすこしあげて辨ノ内侍中務　命婦小少將ノ君なゞとさべいかぎりぞとりつぎつゝ參るおくにゐてくはしうは見侍らず

十一月朔日　道長公御記十一月一日戊午御五十日云々○つとひたる　旁にはたりとあれと今は契本に隨へり○物あはせ　物とはひろくさしたる言にて繪合歌合花合なとゝ擧てかそふへからす叉榮花物

語に物語合と云こととも見えたり○たてきりて　此
きりは限の意にて江次第巻十二に八省東廊大祓條
に上卿座北引ニ切斑幔一史座南引ニ切大幔一とある引
切に同じ○御前のもの　中宮御前の御膳なり○大
宮　皇太后宮妍子也御父法興院大入道兼家公御母
伊豆守仲正女也道長公御妹にて一條天皇大御母に
おはします（佐野翁の日八年前長保三辛丑年閏十二月崩）○若宮の御まかなひ
大納言君　道長公御記に若宮御前物新宰相弁殿上
四位取之授女房大納言陪膳云々○小少將　旁又群
に小中將とあり○さへいかきり　さへいはさるべ
きの略と音便なり
こよひ小輔のめのと色ゆるさるこゝしきさまうちし
たりみやいだき奉れり御帳のうちにて殿のうへいだ
きうつし奉り給ていざり出させ給へりほかげの御さ
まけはひことにめでたしあか色のからのおんぞちず
りの御もうるはしくさうぞき給へるもかたじけなく
も哀に見ゆ大宮はゑびぞめの五への御ぞすはうの御
こうちき奉れり殿もちひは參り給ふ上達部の座は例
の東の對の西おもてなりいまふたところの大臣もま
ゐり給へりはしの上に參りてまたゑひみだれてのゝ
しり給ふをりひつ物こものなど殿の御かたよりま
うち君達とりつゞきて參れる高欄につゞけてすゑわ
たしたりたちあかしの光の心もとなければ四位ノ少
將などをよびよせてしそくさゝせて人々は見る内
の臺盤所にもてまゐるべきにあすよりは御物いみと
てこよひみないそぎてとりはらひつゝ
○小輔のめのと　榮にはこゝをさぬきのかみ大江
のきよみつがむすめ左衞門ノ佐源爲善かむすめひ
ころまゐりたりつるこよひぞ色ゆるされけると書
かへたり此二人の内何か此めのとの事ならん○こ
ゝしき　旁に巨々と注したるはいかゞあらん源氏
物語にもいと多く見えたる詞にて皆はこゝやうの
意と聞ゆ○からの御ぞ　唐綾の御衣意歟○ふたと
ころの大臣も　旁に大臣はと有契本如此道長公御
記に大臣二人引出馬右府内府云々とあれは旁に右
大臣顯光内大臣公季と注したるかなへり公季公は
閑院太政大臣仁義公にて師輔公御子也○またゑひ
みだれて　跡より見え給ふ二處の大臣達も又醉み
だれての意か○をり櫃物こもの　道長公御記に就
座數献後籠物五十捧折櫃五十合本御前云々○まう

ちきみたち　卿をよみてまへつきみの音便なり〇たちあかし　和名抄に字書云炬其呂反上聲之重爾與燈同俗云太〻阿加之束薪灼之とあるによれはたてあかしといふそ本語なるべし契本たきあかしに誤れり扨此たてと云事は和名抄の與燈同とある如くトモス燄事をいへり立には非今俗に蠟燭をたて燈心をたてるといふも皆トモス燃方の謂なるへしうつほ物語祭使の巻に夜にいりてところまごとにかけどうろまなくたてついまつどほしわたして云々と有たては燈事にてかけどうろなれは立るに非事知るへし又ほぐしたてと云言もあるやうに覺ゆたての意皆おなし〇心もとなけれはかすかに明かならさるを云〇四位少將　雅通也既に出〇しそく　脂燭紙束指燭紙燭なと書る中に紙束の字は何に見えたるにや脂燭は江家次第に見え指燭は禁秘抄に見え紙燭は和名抄に見ゆ同書云雑題有紙燭詩紙燭俗音之曾玖いかなる物にか慥にはしらねと燈て持ありく物にて今の蠟燭やうの物と見えて江次第　一人若君元服條に次脂燭二人侯二理髪左右一各具土器情燼續脂燭同置土器なと見えたり按に和名抄に見えたる紙燭そ本字にて其外は皆當字なるへき類聚雑要抄に布紙燭といふ事見えたれはしか思はるゝなりもと紙にて爲る物故にことさらに布とはいへるなるへし〇内の臺盤所　或書にいはく女房の局なりといへり　禁秘抄に臺盤所三間北間方朝餉敷二黄端疊一東倚子其南女房簡入袋云々　拾芥抄に中殿の次下に出たれは中殿の中にある事知るへし中殿は常の寢居にて則清涼殿を云扨此句の上に明日なとの文字落たる歟さなくてはこよひみなとりはらひ云々とことさらにこよひといへるに對する上の詞なく又唯臺盤所にもてまゐるへきにといへる言葉もゆくりなきやうなり〇御物忌　何にまれ愼み給ふ事ありて籠居し給ふを云こは土御門殿の御物忌をいふへし其故は道長公御記に二日より九日までの事見えぬは此御物忌に籠居給ひしか故なるへけれはなり〇とりはらひつゝ　この下にもてまゐるといふ言を略ける格なり

宮の大夫みすのもとに參りて上達部おまへにめさんとけいしたまふきこしめしつとあれは殿よりはじめ奉りてみなまゐり給ふはしらのひんがしのつまどのまへまでゐ給へり女房ふたへみへづゝゐわたされた

りみすどもを其まにあたりてゐ給へる人々よりつゝ巻あげ給ふ大納言君宰相の君小少將の君みやの内侍・ゐ給へり右のおとゞよりて御几帳のほころびひきたちみだれ給ふさだすぎたりとつきじろふもしらず扇をとりたはふれごとのはしたなきも多かり大夫かはらけとりてそなたにいでたまへりみの山うたひて御あそびさまかはりたれどいとおもしろし

○啓し給ふ　御前にめさんやと啓し給ふの意にて齊信卿中宮の御簾の本に參りて上達部を御前にめすべきやいかゞと啓問し給ふなり○きこしめしつ　中宮よりゆるしたまふ御答なり○みな參り給

道長公御記に召二公卿御前女方一近二女方簾下一數獻云々○御几帳のほころびほころびは几帳の帷の開たるを云にて綻たるを云には非事巻一にもいへるかことし江次第巻一供御藥條に盛二御酒盞一白二御几帳桂一付二於藥興一藥興備二陪膳一云々とある綻も御几帳の帷の開たるを云事うつなし○ひきたちてみだれ給ふ　ひきは引にてのそかんとし給ふを云たちは詞なり○さたすきたりとつきしろふ　さたすきは年齢の半過たるを云納巻四に見えたりつきしろふのこと巻二にもいへることくこゝもそしりわらふさま也○扇をとりて　女房の扇をとりなとして戲給ふなり○みの山うたひて　催馬樂にみの山にしんしに生たる玉かしはとよのあかりにあふかたのしさやあふかたのしさや一本にはみわの山もとゝあれと隨はす○さまかはりたれと　今夜はみなうちとけ給て彼行幸の折の御前・御遊なとゝは其樣のかはりたる意なり勞梨本ともいさまはかりなれとゝあれと道長公御記にも數巡傚上人御遊數也とあれはさまはかりとはいひかたし今は一本の方にしたかへり

其つぎのまの東の柱もとに右大將よりて衣のつま袖ぐちかぞへたまへるけしき人よりことなりゑひのまぎれをあなづり開え（又イ）まだたれひと（カイ）はなっとゝひ（思イ）侍てはかなきこともいふにいみじくされいまめく人よりもけにこそおはすべかめりしかさかづきのずんのくるを大將はおぢ給へと例のことならひのちとせよろづよにてすぎぬ

○右大將　小野宮大臣實資公也父齊敏卿○きぬの

許ひこしろひてたはふれことをのたまふにこそは
あれ
おそろしかるべき夜のけはひなゝめりと見てことは
つるまゝに宰相ノ君にいひあはせてかくれなんとす
るに東おもてに殿のきんだち宰相中將なゝどいりて
さわがしければ二人御帳のうしろにゐかくれたるを
とりはらはせ給てふたりながらとらへすゑさせ給へ
りうたひとつづゝつかうまつれさらばゆるさんとの
給はすいとわびしうおそろしければきこゆ
いかにいかゞかぞへやるべきやちとせのあまりひさ
しき君がみよをば
○けはひ　旁群契本ともに御ゐひとあり今は榮又
一本によれり○宰相中將なといりて　兼隆卿なり
道長公御記に右府内府留有和歌事○うた　旁にわ
かと有榮又一本に如此されとわかといはんもあし
きにはあらす○の給はす　道長公のの給ふ也次へ
のつゝきにてしか聞えたり○いとわひしう　契又
一本にはいとはしう旁にはいとはちてとあれと今
は榮によれり○いかにいかゝ……歌　此歌續古今
賀部に出ておもとのうた也いかに五十日をかねた
るのみにて一首意かくれたる處なし此記刪後に見
えたる歌ともにくらべてはわろきにはあらねとい
と淺々しくかのことならひのやちとせのみにてた
ゝ歌なりこはおそろしき儘に唯口にまかせていひ
出られたるなれは其折のさま思ひやられて中々に
をかし宰相君は讀さりしか
あはれつかうまつれる哉とふたゝびばかりずんせさ
せたまひていととうのたまはせたる
あしたづのよはひしあらば君がよのちとせのかずも
かぞへとりてむ
○あはれつかうまつれる哉　道長公御詞なり○あ
したつの……歌　此歌續拾遺賀部にいれりあし
たつは蘆の花の如く白き鶴をわけて云てふ説も
あれとあし鶴また蘆盤なといふ類にて唯蘆の生た
るあたりには常住故にいふ目とみる方おたやかな
り一首の意是もかくれたる處なし二句のあらは
を旁契本にはあれはとあれと今は續拾遺によりて
改又三ノ句君かよのを榮には君かよはにつくれり
されとそれはよろしともきこえす
さばかりゑひ給へるみこゝちにもおばしけることの

さまなればいと哀にことわりなりげにかくもてはやし聞え給ふにこそはよろづのかざりもまさらせ給ふめれ千代もあえましく御ゆくすゑのかずならぬこゝちにだに思ひつゞけらる
○おほしけることの云々　上の道長公のあしたつの云々のうたをさしていへり○ちよもあえましく
是も上のうたをさしてげにかやうにもてはやしたまふにこそは蘆田鶴の千代のよはひにも此皇子のあやかりたまふへけれとなりあえは肖なり後撰に逢ことは七夕つめにおなしくてたちぬふわさはあえすそ有ける
宮のおまへきこしめすやつかうまつれりどわれはめ！給てみやの御てゝにてまろわろからずまろがむすめにて宮わろくおはしまさずはゝも又さいはひありと思ひてわらひ給めりよいをとこはもたりかしと思ひたんめりとたはふれ聞え給ふもこよなき御ゑひのまぎれなりと見ゆさることもなければさわがしきこゝちはしながらめでたくのみきゝゐさせたまふ殿の上きゝにくしとおぼすにやわたらせたまひぬるけしきなればおくりせずとてはたうらみ給はん物ぞとていそぎて御帳のうちをとほらせたまふ宮なめしとおぼすらんおやのあればこそ子もかしこけれとうちつぶやきたまふを人々わらひきこゆ

○宮の御まへ云々　つかうまつれり迄道長公御詞
○われほめ　上のあしたつの歌の自讃なり○宮の御てゝにてまろわろからす　是より以下道長公醉中のたはふれ言なり御てゝは御父なりまろはかどある人と云に對して本自らを卑下したる詞なれとこゝは唯われはとの給ふ程の意なり○まろか女にて宮わろくおはしまさす　かく同し事を打かへしの給ふはたはふれなれはなり此二つのわろからすといふ言は今いふ不相應ならずてふ意也○はゝも又云々　殿のうへ倫子也愛に道長公の御詞にはゝとの給ふは御女の中宮の方に属ての給ふ處なれはなり此格常にあり○こよなき御ゑひ　こよなきの言既にもいへることくこゝも上の權中納言又其外の人々もみな醉みたれ給へる中にも道長公はこよなき御ゑひと見奉るといふ意なり○さることもなけれは　此句の下にさう〳〵しからんをなといふ句落たらんと思ひしを二度思ふにさてはさわかし

きの句に重なりて中々文つたなしさわかしき心ちはしなからの句此句へよくひゝきてわさとさやうの詞を略ける物なりけり然れとも意は此句の下にさう〳〵しからんをといふ心はへを加へて心得る義なりかく味ひ見れは此戯言いと妙にして文のつゝきいとめてたし初め落句ならんと思ひし罪今われなからおそろしうさへ拙さることとは則道長公の御戯言をさしていふ　おくりせずとて　是又道長公の再度たはふれのたまふ詞なり○はたゝ　旁又群にははゝに作れり今は契本によれり○御帳のうち中宮の御帳の中なる道長公の通らせ給ふとて又宮にたはふれたまふなり

いらせ給べきこともちかうなりぬれと人々はうちつぎつゝ心のとかならぬに御前には御さうしつくりいとなませ給とてあけたてばまづむかひさぶらひて色々の紙えりとゝのへてものがたりの本どもそへつゝ處々にふみかきくばるかつはとぢあつめしたゝむるをやくにてあかしくらすなにのこもちかつへたきにかゝるわざはさせ給ふと聞え給ふ物からよきうすやうども筆すみなどもて參りたまひつゝ御硯をさへもて參り給へればとらせ給へるををしみのゝしりてものゝくまにむかひさふらひてかゝるわざしいづとさいなむなれとかくべきすみふでなどたまはせたり

此段より次々は十一月二日より十六日までの中のことゝもなり○いらせ給へき事も云々　中宮入内十一月十七日なり下にみゆ○物語の本ともそへつゝ處々にふみかきくはる　是は作り給ふ御草紙に人々に物語をかゝせ給ふ事をいへるにて某には其物語某には此物語と御許の御物語の本ともに文かきそへて配りあてたまふことなり○なにのこもちかつへたきに　此以下文字の誤脱あるべし此句も旁にはなにのこゝちかとあれと契本にこもちとある方然るへしすへて子もてる親をこもちと云事源氏狹衣等の物語にも見えたり六帖巻六に夏の夜のこもちからすのさかそかし夜ふかく鳴て君をやりつる催馬樂逢路の歌にも有又一つをかしき證あり古今著聞巻十六に坊門院に年頃めしつかふ蒔絵師有けり仰らるべき事ありて急度（此頃急度と云詞は唯々直になといふ意なり）參れと仰られたりけれはあさましき大假名にて御

子持合交

返事を申ける文詞唯今これちをまきかけてさふら
へはまきはてさふらひて参りさふらふへしと書た
りけり此文の詞はあしさまによまれたり何事の申
やうそとて薬處のさたしける女房は文見さしてな
けたりける是に依て蒔絵師か許へかさねていかに
かやうなる猥籍の詞をは申そ唯今の程に慥に参れ
と仰られけれは蒔絵師あはてふためきまゐりたり
けるに此御返事のやういかなる事なるとて見せら
れけれはすへて申すこしたる事候はす唯今御物を
まきかけてさふらへは蒔はて持て参り候へしとこ
そ書て候へと申けれはげにもさにて有けり假字は
よみなしと云事誠にをかしきこと也と見えたりつ
へたきは今俗にもいふことく寒くひやゝかなるを
云へし狹衣巻三にふところに引入奉りたるもいと
つへたき御身なり云々蜻蛉日記につへたましと思
ふ〳〵見れは云々又柏木巻にまふしつへたましく
とある詞も本同語歟扨此以下文意おたやかならさ
れとも推てこゝろみにいはゝまつ聞えたまふもの
からは道長公の中宮へ聞え給にて爰に道長公とは
なけれと前條の御戯のつゝきなれはしか聞えたり

此あたり契本にはさへもて参り給へれはとらせ給
へるをといふ迄の句漏せり○もて参り給つゝは道
長公の此つへたきにいかてかゝるわざはせさせ給
ふと制しなからも薄樣筆墨なとを中宮へ持参りて
奉らせ給にて○とらせ給へるは其道長公の持参り
たまひたるを中宮の令取給へるなり○をしみの
ゝしりて　是も前段の如き御戯にて道長公の持参
りて奉りなからも中宮のとらせたまへれはわさと
をしみ聞え給ふか則戯なりのゝしりてのの一字
契本に漏たり○物のくまに　物の隈にて陰の方を
いふへしこゝも契本には物のくにてと誤れり○さ
いなむなれどは道長公の御いなみ給ふ物からとい
ふ意と聞ゆさてはいとなめしくいかゝしき詞つき
なれとかゝる云さまもなきにしもあらす浮舟巻に
めのとか詞に物きこしめさぬいとあやし御ゆつけ
なとよろつにいふをさかしがるめれどいと見にく
ゝおいなりて我なくはいつくにかあらんと思ひや
り給もいと哀なり云々とあるさかしかるめれとも
乳母より浮舟君をさしていへるなれはさかしかり
たまふめれとゝあるへき處なるをかくいひ又上

にけふのたふとさなと聲をかしううたふと有も宰相大夫なとの御事なれはうたひ給ふといふへきをさはかさるも是等の類とすへし○かくへき墨筆なと給はせたり　爰に又再ひかやうに云るは前のをしみのゝしりて云々は戯わさにて畢にはたまはせたりの意ならんか猶可考

局に物語の本どもとりにやらでかくしおきたるを御前にある程にやをらおはしましてあさらせ給てみな内侍のかんのとのに奉り給てけりよろしう書かへたりしはみなひきうしなひて心もとなき名をぞとり侍けんかし

○やをらおはしまして　是も爰に何人とはいはねと上段のつゝきにて道長公の御事なる事しるへしやをらは俗にソツトなといふ意にかなへり○あさらせ　俗にアサリサガスといふに同語にて漁をいふも同意也○内侍のかんのとの　既にいへり○よろしう　此詞今俗にいふとはいさゝかけちめ有て一通りに大抵になといふ意也榮花物語うら／＼の別の巻にあはれにかなしなとはよろしき事也落窪物語巻一にかゝるまゝにあいきやうなの雨やとはらたては中略　猶よろしうふれかしをゝにくゝもおほえ侍る哉といへはふりそまされるとしのひやかにいはれてそいかに思ふらんとはつかしうてそひふし給へり云々○心もとなき　既にもいへる如く案じらるゝ意也扨こゝの儀を按に御許のかゝれし物語とも數多有けんを今世には源氏と此記のみならてはつたはらさるへしあはれ不幸といふへし

わか宮は御物がたりなゝどせさせたまふ内にこゝろもとなくおほしめすことわりなりかし御前の池に水鳥どものひゞ（ひゝ群）に多くなりゆくを見つゝいらせたまはぬさきに雪ふりなむ此おまへのありさまいかにをかしからんと思ふにあからさまにまかでたるほとふつかばかりありてしも雪はふる物か

○御物かたり　今も小兒のすこし聲を出しそむるをかたるといへり○ひゝに　此三字契本に落せり○雪ふりなん　契本にふらなんとあるもあしからしさてはふれかしとねかふ意になる也可考　紀略に此年九月十四日辛未東西山雪降とあり○あからさま　しはらくの程チョツトなと俗にいふ意なり左傳に咋をあからさまとよめる注に暫なりとあり

とそ宮仕人達の里に下る事は中宮職員令に各毎ニ半月ニ給ニ沐假三日ニと見えて心の儘には下かたきを此御許は他女官とは異にて此事既にいへり其身の掌とれる職もなく唯中宮の御學問かたきに參り居らるゝなれは里下の事も此令の法のことくもあらさりしなるへし○ふるものか　此詞は兼て心にさもやと思ひたる事の思ひしことくなりし折さてはと打あひおとろきたるやうの意なり花宴巻におほろ月夜にしく物そなきとうちすしてこなたさまにくる物か大鏡巻四に此はらまれたまへるみこをとことおはすへくはてう六以てことてうたせたまひけるにたゝいちとに出くる物か同巻五にやをらほそめにあけてみ給へれは雉子のをとりはかゝまりをるものか是等を考て知るへし蜻蛉日記にも此詞數多見えたる皆兼て思ひし事のうちあひたる時又其事を思ひをる時に其事を人の云出たる如き處にのみ用ていつくにも皆物い二つなから出きたる時につかふ詞なり

見どころもなきふるさとの木立をみるにも物むつかしう思ひみだれてとしごろつれ〲にながめあかしくらしつゝ花鳥の色をもねをも春秋にゆきかふ空のけしき月のかげしも雪を見て其時きにけりとばかり思ひわきつゝいかにやいかにとばかり行すゑの心ばそさはやるかたなきものからはかなき物語なとにつけてうちかたらふ人おなじ心なるはあはれに云かはしすこしけどほきたよりどもをたづねてもいひけるをたゞ是をさま〲にあへしらひそぞろごとにつれ〲をばなぐさめつゝよにあるべき人數とは思はすながらさしあたりてはづかしいみじと思ひしるかたばかりのがれたりしをさものこることなくおもひしる身のうさかな

此段は里にての例の述懐也○みところもなき　前の御前のありさまいかにをかしからんと行しをうけたり新古今冬部にふれはかくうさのみまさるよをしらてあれたる庭につもるしら雪とはかゝる折にこそよまれけめ○としころ　以下は過去し年頃の事をいへるにて此詞たつねてもいひけるをといふへかゝる意也○なかめあかしくらし　花鳥の色をもねをもつれ〲になかめあかしくらしつゝと句を下上に次第して心得べし○けとほき　心のあ

はさる人を云○たゝ是をさま〳〵にあへしらひ
是とは同心なるは常に言かはし亦少し心のあはさ
る人にも言かはしなとするてふ言をさして云あへ
しらひは遊仙窟に應答をよめる爰によくかなへり
此句の下にての字を加へて下へつゝけ心得へし○
そゝろことにつれ〳〵をはなくさめつゝ　此そゝ
ろは爰にて轉用して大かたあたけことゝいふ程の
意なり其あたけことゝは若菜巻にあたことにもま
めことにも云々とありあた事に同しく實ならぬを
いふ風流めき實體にしとやかならすあた〳〵しき
は則心のそゝりたつ物なれはそれより轉たるなり
螢巻にこゝらの中にまことはいとすくなからんを
かつしるしるかゝるすゝろことに心をうつしはか
られ給てあつかはしきさみたれかみのみたるゝも
しらて出給ふよとて云々とあるすゝろ事もこゝと
同意にてまことはすくなからんといふに對たるを
もおもへまた下に例のすゝろことゝも出來たるつ
いてになとあるも同しさて此詞は前の文かきかは
したるをさしていへるなりなくさめつゝはやゝか
たなき物からよりつゝく意にてこゝは此つゝにて
句を切て心得へし○さしあたりて云々　中宮の御
前を退のかれたるをいふ○さものこることなく
旁又群にのこせるとあり今は契本によれり

試に物語をとりて見れともみしやうにもおほえすあ
さましく哀なりし人のかたらひしあたりも我をいか
におもなく心あさきものとおもひおとすらんとおし
はかるにそれさへいとはづかしくてえおとづれやら
ずこゝろにくからんとおもひたるひとはおほぞうに
てはふみやちらすらんなどうたがはるべかめれば
いかでかはわがこゝろのうちあるさまをも深うおし
はからんとことわりにていとあいなければ中たゆと
なけれどおのづからかきたゆるもありまたすみさだ
まらずなりにたりともおもひやりつゝおとなびくる
人もかだうなどしつゝすべてはかなきことにふれ
てもあらぬよにきたることちぞこゝにてしもうちま
さり物あはれなりける

○試に物語をとりてみれとも　すへて物語てふ物
は世の中のよきもあしきもとりあつめて書る物な
れは見るには先心のなくさむへき物にて心に物の
かなはぬ事をも其物語の中の人のうへになぞらへ

なとして思ひあきらむ事もせらるゝを爰ももしなくさむやとてこゝろみにあけて見れとものおもひのいとふかき故に心にもとまらすと也○人のかたらひしあたりも　むかしかたらひし人のあたりもの意也○おもなく　此詞ものかたり書に常に多く見えたりもし貴人をおもたゝしといふに對て重無（オモナク）にて卑しく輕きこゝろはへにや○心にくからんと思ひたる人は　御許をはいかはかりかうるはきし能文にて心にくきほとの文かきならんと思ひをる人は也○おほそうにてはふみやちらすらん　おほそうを旁におほそらと誤れり今は契本によりぬ扨或説におほそうは大かたといふに同ともいへり帚木巻にやんことなくせちにかくし給ふへきなとはかやうにおほそうなるみつしにうちおきちらし給へくもあらす云々闕屋巻におほし出ること多かめれとおほそうにてかひなし云々薄雲巻に心やすく立いてゝおほそうのすまひはせし云々處女巻にすこし人かすにおほしぬへからましかはおほそうの宮つかへよりは云々なと有を味へ渡して知るへしふみは旁に文と注したる然るへし踏にはあらし

紫式部家集といふ物に上臈文ちらしけりときゝてありし文ともとりあつめておこせすは返事かゝしと詞にてのみいひやりけれは云々なといふ言も見えたり○うたかはるへかめれは　御許の方より文かきやりても後にかくうたかはるへかめれはの意なり○いかてかは　いかてかは書やらんぞと云る、なり下にこゝろうましき人にはいひてやくなかるへしといへるこゝろはへ也○いとあいなけれはあいなきは何の詮もなき又はりあひのないなと云意也○書たゆるもあまた　契本如此旁にはあまたかきたゆるもとあり何れも下に言たらす聞ゆ今契本によりて按にあまたのあの下にりの一字を落せるにて有又（アリマタ）ならんかとおほしけれは今傍にりの字を補へり○すみさたまらすなりにたりとも　宣孝卒て後御許寡（ヤモメ）婦住にて或は中宮へ參り居なとするをすみさたまらすなりにたりといへるなるへしさらは御許か寡になりたるを哀とおもひおこしつゝたまく〱おとなひくる人をも又御許の方より勘當してうけひかすとなりおもひやりつゝは御許の方を思ひおこすなれとおとなひくる人の方に屬て

いへれはおもひやるなり○こゝにてしも　かのはつかしいみしと思ふ中宮の御前はのかれて此里ゐの程にてしもかへつてもの思ひのまさるとなり此しものてにをはは彼青柳のいとよりかくるはるしもそ云々のしもそと同意に聞えたり下にその字をそへすして此意に用るめつらしきやうなり
たゞえさらずうちかたらひすこしもこゝろとめておもふこまやかに物をいひかよふさしあたりておのづからむつびかたらふ人ばかりすこしなつかしく思ふぞものはかなきや大納言ノ君のよる〳〵は御前にいとちかうふしたまひつゝものがたりしたまひしけはひのこひしきも猶よにしたがひぬるこゝろか
「うきねせし水の上のみ戀しくて鴨のうはげにさえぞおとらぬ
返し
「うちはらふもとなきころのねざめにはつがひしをしぞ夜はにこひしき
かきざまなゞどさへいとをかしきをまほにもおはする人かなと見る
○人はかり　此人は前の三品をひとつにすへ云るにて心とめて思ふ人物をいひかよふ人むつひかたらふ人といふ意なり○猶よにしたかひぬる心か　上段のことくすへて文なともかきたえ又おとなひくる人さへも勘當なとしつゝ有なから此三品の人や大納言君なとのこひしきは猶よに隨ひぬるこゝろにやとなり○うきねせし云々歌　此歌新勅撰雜部に出て冬の比里に出て大納言三位につかはしけるとあり水のうへのみはたゝ上（ウヘ）のみといふ意にて水は鴨のうきねのつらさのみ上とは則中宮の御前を云一首の意かくれたる處なし○うちはらふ……歌　うちはらふは鴛（ヲシ）によれる意なから則涙を打はらふ意なりつかひしは御許と二人有し事をいへるのみこれも一首の意あきらかなり按新勅撰に此返歌に從三位廉子とあれは　卷一に見えたる大納言君とは別人か可考
雪をごらんじてをりしもまかでたる事をなんいみじくにくませたまふと人々ものたまへり殿のうへの御せうそこにはまろがとゞめしたびなればことさらにいそぎまかでゝとくまゐらんとありしもそらごとにてほどふるなゞめりとのたまはせたればたは　ふれに

てもさきこえさせたまはせしことなればかたじけなくてまゐりぬ

○まろかとゝめし　以下なめりといふまては倫子よりの御消息の詞なり○たひなれは　旅なれはなり度にはあらず枕草子卷十一に紙なとのなめけならぬもとりわすれたるたひにて云々帚木卷にうちわたりのたひねもすさましかるへく云々蜻蛉日記卷一にかくてあるやう有てしはしたひなる處にあらぬ物して云々猶あけてかそへかたしかりそめに出るをも旅といふこのころの常なり師ノ曰旅は我住家をいてゝ他に夜をあかすをいへりこゝは御許か里にいてゝ御許のためには旅ならねと上の御こゝろはたひとのたまへるなり○たはふれ　此詞たはふれときくへししかく戯に仰られても恐おほしとなり

いらせたまふは十七日なりいぬの時なッど聞つれどやう〳〵夜更ぬみな髮あげつゝゐたる人三十餘人そのほかにも見えわかず母屋の東おもてひがしのひさしに內の女房も十餘人南のひさしの妻戶へだてゝゐたり御こしには宮のせんじのるいとげのみくるまに殿のうへ少輔のめのと若宮いだき奉りてのる大納言宰相君こがねづくりにつぎのくるまに小少將宮ノ內侍つぎに馬ノ中將とのりたるをわろき人とのりたりとおもひたりしこそあなこと〳〵しといとゞかゝるありさまむつかしうおもひ侍しか

十一月十七日　記略十七日甲戌中宮入御內裏木宮設饗饌長食　道長公御記に十七日甲戌中宮參大內給云々○三十餘人　卷二に二間はかりに三十餘人ゐなみたりし云々とありしに同し人等なるへし○御こしには　中宮の御輿に宮宣旨のそひのりたる也○いとけの御くるま　好古日錄に絲毛の車は絲を以て屋を葺故に絲葺といふ近世職達の人の庇差絲葺の車の圖もありて故實を心かくる人うつして秘藏すしかるに是無稽の事也絲葺といへはとて絲にて葺たる物にあらず糸を以て屋を覆ふ理あらんや云々又或說にいとけは雨をさくる事ありかさり車の事なりともいへり竹取物語に糸を屋にふけることありひらうけの車可考○こかねつくりに　金作には大納言宰相君の意也○つきに馬中將とのりたるを云々　馬中將と御許とのりたる也この中將

はかのこゝろあはさる人にやありけん
主殿の侍從君辨内侍つきに左衛門内侍殿のせんじ式部とまでは次第しりてつぎ〳〵は例のこゝろ〳〵にそのりける月のくまなきにいみじのわざやとおもひつゝあしを空なり馬中將君をさきにたてたればゆくへもしらずたど〳〵しきさまこそわがうしろを見る人はづかしくもおもひしらるれ
○あしをそらなり　今世の心もてみれは足もそらなりとあるへきやうなれとをといふそこのころのことばつかひの樣なる夕顏卷に殿の中の人あしをそらにおもひまとふ云々葵卷にほともなくたゝ入たまひぬあしをそらにたれも誰もまかてたまひぬれは云々さか木卷にあしをそらにおもひまとふ人多かり云々なとみなをといふ例なりさてこゝは車を下りてのちのことなるへし同車なりし馬中將君をさきにたちたる車下ての事なりつきのくまなきによりしもくるまおりて後と聞へし○はつかしくも思ひしらるれ　馬中將のうしろてをみるにつけて我後を見られんことのはつかしくおもひ知らるゝとなりかくきりてはおもひしらるれのことは不叶味へし

ほそどのゝ三の口に入てふしたれば小少將ノ君もおはしてなほかゝるありさまのうきことをかたらひつゝすくみたる衣どもおしやりあつごえたるきかさねてひとりに火をかきいれて身もひえにけるはしたなさをいふに侍從ノ宰相左の宰相ノ中將きんのぶの中將などつぎ〳〵によりきつゝとぶらふもいとなかなかなりこよひはなきものとおもはれてやみなばやとおもふを人にとひきゝたまへるなるべしいとあしたにまゐりはべらんこよひはたへがたく身もすくみてはへりなどことなしひつゝこなたの陣のかたよりいづおのがじゝ家ぢといそぐもなにばかりのさと人ぞはとおもひおくらるわが身によせては侍らず
○三の口　さんのくちとよむへし第三番めの口といふ事なり○なほかゝるありさまの　猶の詞いとかろく聞ゆかゝるありさまとは車に馬中將とのりたる事をかたりあふなり○おしやり　押のべといはんか如し○はしたなき　契旁ともに此句の上にものゝといふ三字あれと今は一本にしたがへり俗にテモチフサタの意なり○侍從宰相　實成卿○左

の將相中將　經房卿○きんのふの中將　公信卿は
爲光公の子にて九條師輔公の孫也○いと中々也
とふらひ給ふはうれしけれと却て困ると也⊙いと
あしたに　あくる朝にはいとゝく參らんの意なり
○ことなしひつゝ　古今にむらとりのたちにしわ
か名いまさらにことなしふともしるしあらめやこ
のことなしふはことなしふりの約ことなしひはこ
となじふるの約言なり旁にはことなくいひつゝと
ありそれも意は大かたおなし○なにはかりのさと
人そは　このそははは古今にいのちやは何そは露の
あたものをあふにしかへはをしからなくに」とあ
るにおなしく問かくるぞなりはには意なし里人は
本歌ある詞か叉さと人はおの〳〵の御本妻にもあ
らんか考ふへし○我身によせては侍らず　かの家
路といそく人たちも何はかりの品たかき際には非
と思ひやらるゝもわか身になそらへてにはあらす
と云るにて御許の品たかからぬ身を卑下のことは
なりされと御許はいやしききはにはあらず上段の
くるまの次第にてもその品おしはかり知るへし
大かたのよのありさま小少將ノ君のい　とあて　にをか
しげににて世をうしとおもひしみてゐたまへるを見
侍るなり父君よりことはじまりて人のほどよりはさ
いはひのこよなくおくれ給へるなゞめりかし
○大かたのよのありさま云々　下に見侍るなりと
ゝちめたるをおもへは大方の世の中の人のありさ
まを見及にこの小少將君は身分よりも上臈しくあ
てに氣たかくすくれたるかきりと見侍るなりとい
ふ意なり味ひて知るへし此小少將君の父祖いまた
かむかへす○こよなくこゝもその人からとさいは
ひとをくらへいへることとはなり既に卷一　にいへ
り
よべの御おくりものけさぞこまかにこらんずるみぐ
しのはこのなかのぐどもいひつくしみやらんかたも
なし手筥ひとよろひかたつかたには白きしきしつく
りたる御さうしども古今後撰拾遺そのぶどもは五帖
につくりつゝ侍從ノ中納言と延幹とおの〳〵さうし
ひとつに四卷をあてつゝかゝせたまへりへうしは羅
ひもおなじからのくみ懸子のうへにいれたりしたに
はよしのぶ元輔やうのいにしへの歌よみどもの家々
の集かきたり延幹とちかすみの君と書たるはさるも

のにてこれはたゞけぢかうもてつかはせたまふべきみしらぬものどもにしなさせたまへるいまめかしうさまことゝなり

十一月十八日前條にいはれし如く御許の今朝はとくまゐられたりと見えたり○よへの御おくり物　よへは或說にようへと訓へしよんへはいやしく聞ゆれはなりといへれと字のまゝによへとよまん方よろしおくり物は前にいふへきをわすれたりすへておくりものとは客人のかへるにつけておくりやるものをいひて今俗にいふ贈り物にはあらすと玉小櫛にくはしくいはれたり爰も前夜中宮の大内にかへりたまふに附て土御門よりの御送り物なり○みくしのはこ手筥　道長公御記十七日條に欲レ參給間奉御櫛筥一雙手筥一雙各入レ物供奉諸司諸衛賜長持例等如常と見えたり　○かたつ方には白き色紙　かたつかたは手筥一雙（一双は手筥二つをいふ事すてに論り）の一方にはといへるなり○つくりたる御さうし　こは上に御さうしつくりいとなませたまふ云々とありし首尾なり○古今後撰拾遺　旁契本ともに古今後撰集拾遺抄とあれと今は榮によりて集抄の二字を略りもしまた二本のまゝならは古今も古今集とあるへきことなり○其部ともは五帖につくりつゝ　古今五帖後撰五帖拾遺五帖とすへて十五帖につくれるなり○侍從中納言契また旁にも行成卿と注し榮にもこゝを侍從中納言行成と書てあるはさる事なからもしこゝは近澄をいふかともおほし其故は次下に延幹と近澄の君とかきたるは云々といへるは則この十五帖をさせるなれはなりちかすみは清原ノ近澄と旁に注せり官位未考○延幹　契本に系圖を書入たり陽成院の御末上總介兼房の子息たるよし○四卷をあてつゝ　古今二十卷後撰二十卷拾遺二十卷なりそれを一帖に四卷つゝ書て十五帖なり○おなしからのくみ　和名鈔唐韻云緂（薄革反與縫同今按加良久美）織レ絲爲レ帶也おなしとは羅をいふ○したには懸子の下はさる事なから前にかたつかたにはといへるは手筥二つの中の一つをいへるなれは今一つの事もかならす云々とあるへき事なれはもし是はひとつにはを寫誤れるにや猶可考○よしのふ　大中臣能宣朝臣也賴基の子○元輔　清原顯忠の子清少納言の父也○いにしへ　此下に契旁ともにいまの

二字あれと榮によりて略けり能宣元輔は時代大かた同ていにしへいまと書わくへき人達にはあらす○さるものにて　延轉と近澄との書る三代集をいふ○これはた丶　能宣元輔の家集をいふ○もてつかはせたまふへき　此下に料にてといふ言を加へてこ丶ろうへき格なり

紫式部日記解卷四

飛騨國高山民　足立稻直著

ごせちは廿日に參る侍從ノ宰相に舞姫のさうぞくなどつかはす右宰相ノ中將のごせちにかつらまうされたるつかはすついでにはこひとよろひにたきものいれてこ丶ろば梅の枝をしていどみきこえたりにはかにいとなむつねのとしよりもいどみましたるきこえあれば

○十一月廿日丁丑此年此日下ノ丑にあたれり此夜を帳臺ノ試と云て常寧殿の儀なり○ごせち　五節の事かの淨御原ノ天皇の吉野にての事は唯流言の誤にて續日本紀卷十五に天平十五年五月癸卯宴ニ群臣ヲ於內裏ニ皇太子親ラ舞ニ五節ヲ詔に其おこり見えたり其文中にいはく上下ヲ齊ヘ和ゲ氣ヲ無ク動久靜加爾令有ムルニハ禮等樂等二種並ニ志乎久長久可有ト隨神母所思坐ヲ此乃舞ヲ始賜比造賜比伎等聞食ヨト云々とある則此もとのおこり也此皇太子は孝謙天皇にて御親舞給ひしぞ五節のはしめなりける猶くはしくは縣居翁の百人一首の初學また本居大人の詔詞解等

に論はれたれはこゝにはいはす○廿日にまゐる
雲圖抄に丑日帳臺試事五節所常寧殿儀舞姫參集云々裏書に
云舞人等參入云々とあり○侍從宰相　實成卿なり
旁に行成卿と註したる誤なる事次に論○右宰相中
將　兼隆卿也　○かつらまうされたる
○こゝろは梅の枝〳〵こゝろはの事別にいふへし
○いとみましたる　旁に最見ましたるの義に註し
たれとまた見ぬ前に見ましたるといふへきことわ
りなくわろし今はとの字濁りて挑の意に聞へし○
あれは此句の下に御許の御前へ物見に出たる言を
略たるなり

東のおまへのむかひなるたてじとみにひまもなくう
ちわたしつゝとほしたる火のひかりひるよりもはし
たなげなるにあゆみまゐるさまどもあさましうつれ
なのわざやとのみ思へど人のうへとのみおぼえずた
ゞかう殿上人のひたおもてにさしむかひしそくさゝ
ぬばかりぞかし屏幔ひきおひやるとすれど大かたの
けしきはおなじことぞ見るらんとおもひ出るもまづ
むねふたがる

○東の御前のむかひなるたてしとみに云々雲圖抄
を按に此夜は先常寧殿にての儀式にて同殿中の北
の方に師壺寮はありて南向なり其東に馬道は南北
に通りてありそこに云馬道東西柱打灯階燃灯云々とありこれ御
前よりは東の方の向ひにあたれはそれをいへるに
て御前の東の向ひなる云々の意なり○はした　あ
かるくて何方にも隱忍はん據なき意なり○あゆみ
まゐる　諸本にあゆみいるとあるはまの一字漏た
るなるへしゐないに誤はつれなり榮によりて補江次第、時剋五
節舞姫參ニ入於玄輝門一云々建武年中行事に丑日五
節の舞妓まゐる四人の中一兩人まゐりの儀式あり
云々公事根源にもまゐりの儀式ありなともみえた
れはなり

○つれなのわさやとのみ思へと　このつれなは常
にいふとはいさゝか變りて俗に頰厚きふるまひな
と云意なり

○人のうへとのみおほえす　是よりは又例の御許
のみつからを省たることはにてすへての意は舞姫
等の燈火の明らかなるあたりにさしあゆみ參るを
頰厚のわさやと思へとそれも又人のことかは我身
もかく殿上人の紙燭にひたすら面を對へぬはかり

にこそはあれこなたより見やるやうに舞姫の方よりも同しさまに見おこすらんと先むねふたかるといふ意なり○しそく　江次第に主上出御經ニ假長橋幷承香殿南簀子同馬道后町廊常寧殿馬道等ニ入ニ御於師ノ壺殿ニ殿上侍臣指ニ脂燭ニ設候云々○へいまんひきおひやる　屛幔は和名鈔屛障具帳の下に小帳曰レ斗（俗云斗帳一云屛幔）形如覆斗也云々　榮花物語御賀卷に處々のあけはりへいまんなどの色けざやかにつなのいろおどろ〳〵しきまであかくみえたるほどいとけだかうめでたし云々なとあるをもて思へは幕の類にて綱附テ引張る物と見えたりひきおひやるは御許の面の方に引覆て其中にかくるゝさまとは聞えたれとおひやるの詞いさゝか穩かならさるやう也山崎弘泰云やると云詞は物を手してすることにかろくそへて云詞と聞えたり　源語浮舟卷五十ウにこの人々もはかなき事なと えしやる ましくさはくなと侍れは云々とありて俗にもいへれとそはいさゝかあかめたることにそへいへり

なりとほの朝臣のかしづきにしきのからきぬやみのよにも物にまぎれずめづらしう見ゆ衣がちにみじろきもたをやかならずぞみゆる殿上人こゝろことにもてかしづくこなたにうへもわたらせ給てごらんず殿もしのびてやり戸より北（外イ）におはしませば心にまかせたゝずうるさしながきよのはたけどもひとしくとゝのひいとみやびかに心にくきけはひ人におどらずとさだめらる右宰相中將のあるべき限りはみなしたりひすましのふとりとゝのひたるさまぞさとびたると人ほゝえみたりしはてに藤宰相の思ひなしにいまめかしく心ことなりかしづき十人あり又廂のみすおろしてこぼれ出たるきぬのつまどもしたりがほに思へるさまどもよりはみどころまさりてほかけに見えわたさる

此段は其次第々々に歩まゐる舞姫ともを見ていへることゝもなり○なか とほの 朝臣　枕草子卷十二になかとほの朝臣の從者をよくいひをしへおきしと云事有同人なるへし春曙抄に（類從六十三ノ四十丁系圖）高階業遠業緒より七代孫敏忠の子なりと見えたり此時丹波守なり○かしつき　舞姫のつけ人の名なり○やみの夜にも物にまきれす　前に火のひかりひるよりもはしたなきなといひたるに爰にまたやみの

夜としもことさらいへるはかの物のはへなくかひなきことを夜の錦といふ諺のあるに當りて書るのみなり新古今に見る人もなくて散ぬるおく山の紅葉はよるのにしきなりけりとあるも此諺によりてよまれたるなり○きぬかちにみしろきも　かちは勝に今俗にもいふか如し旁にみしろきもせでとあれと群叉契本にせての二字なきぞよろしき○殿上人心ことにもてかしつく　江次第に殿上人付ニ童女ニ傅等如例云々　もての二字契本叉群になし旁に有もあしからし○こなたにうへも云々　同書に入ニ御於師寢ニ云々雲圖抄裏書に（頭以下前行秉脂燭公卿在御後）入ニ大師局ニ云々（殿下同入給他ノ公卿徘ニ徊馬道邊ニ隨ニ所々ノ便宜ニ或上臈ニ兩參入云々）と見えたり大師局の事は江次第に北廂塗籠內爲ニ大師宿所ニ（按に師とは舞の師なるへし）とありこゝは此大師局に天皇の御はし坐處に中宮も入御ありといへるなり○やりとより北に旁外にと有いつれよけん群叉契本は北にとありやり戸は雲圖抄を按にやり戸とは師局の東に北の角にある戸を云歟もし然らはそれより北の方に居ては舞臺の見ゆへくはあらす外とある本可然歟外は馬道を云へけれは同書に師局に殿下同入給他公卿徘徊馬道邊云々とあれは此時は殿下師局には入給はて公卿と共に馬道の邊に居たまひしにもあるへしされは天皇の御前にまゐられねはしのひてとはいへるなるへし○心にまかせたらすうるさし　御許は中宮に隨ひ居れは天皇の御そばへちかく叉殿も遣戸の外にそばちかくおはしませば諸事心つかひのせられ遠慮せらるゝと云意なり叉さためらるの註にいへる事考合すへし○なかきよのは　按になかきよは人ノ名なりのは　はなか　きよの舞姫ともはの意なり姓氏不知もし此人此時尾張守なりしかとおほし（次に論へし）　扨旁には人の名叉官位なとの傍には必眞字にて注し叉童の名なりなととある例なるに此なかきよにはさる事もみえねはいかに心得られたるにかいふかし江次第に殿內四角各ト二五節所ニ云々　頭書に五節所受領分二所公卿分二所以上四人なりとありてこゝも此なかきよぞくはへて四人（業遠 兼隆 實成）なかきよ　となるなり○さためらるゝ遣戸より外におはします殿公卿なと色々に舞人ともの善惡の評し給ふその事をきゝて御許例の自ラの用意のせらるれは心にまかせたらぬうるさしとはいへる

なり○みなしたり　皆ゐたり○ひすまし　樋洗は
舞姫のつかふ傅の類なり○ほゝゑみたりし　旁ま
た群にほゝゑむなりしとあるは不穏葉又一本によ
れり○藤宰相のは　侍從宰相に同旁また契群とも
にはの字なし今は一本によれり○おもひなしに
さほとなきことも此方よりよろしくおもひなさる
ゝにてこゝも是は實成卿の方のと思ひなさるゝ故
にやの意なり此にの字の下にやの一字必あるへく
おもはるかやうにしかとさためて云へき詞つきな
らねは
○又廂　又は詞なり旁群ともにかくあるによれり
契本に孫廂とあれど孫廂は清涼殿にあるよし諸書
にみえたれはこゝに不用雲圖抄に東砌南北行木工
寮構假庇大藏引紺幕掃部二行敷座穀倉院備饗爲大
歌座とあり其所に出衣のこと有歟可考
とらのひのあした殿上人まゐる常のごとくなれど月
頃にさとびけるにやわかうどたちのめづらしと思
へるけしきなりさるは摺る衣もみえずかし其夜さり
春宮のすけめしてたき物給ふおほきやかなる箱一つ
にたかういれさせ給へり尾張へはとのゝうへぞつか
はしける其夜はおまへの試とかうへにわたらせ給て
ごらんず若宮おはしませばうちまきしのゝしる常に
ことなるこゝちす物うければしばしやすらひありさ
まにしたがひまねくらんとおもひゐたるに小兵衛小
兵衛などもすびつにゐていとせばければはか〳〵
しう物も見え侍らずなどいふ程に殿おはしまして
などかうてすぐしてはゐたるいざもろともにとせめ
たてさせ給てこゝろにもあらずまうのぼりたり
十一月廿一日戊寅此夜を御前試といひて清涼殿の
儀なり○あした殿上人まゐる　雲圖抄裏書云兩貫
主已下殿上四位六四皆參元是日事也近代及曉讀尤非也云々建武年中行
事に寅日殿上の淵醉あり云々とありそれにまゐる
なるへし○月頃にさとひにけるにや　中宮七月よ
り土御門におはしましけれは月頃とはいへるなり
○すれる衣もみえすかし　云六帖に山高みさはに生
たるやまあゐもてすれる衣のめつらしなきみ○春
宮のすけ　旁に東宮亮とは藤原宣孝の男隆任なり
是紫式部のために繼子なりとあり此隆任よりも舞
姫を出すなるへし五節所にはあらす此薫物を給ふ

ことは御許の方に御心よせにての事なり○尾張へは一本にへはのうへにのかみの三字漏たる歟とあれとよろしからす此下に尾張のかみのそ云々又以下にをはりは云々とあるを思へは三所のうち中らふをはりのかみと書たれは初め終の二所はわさと略けるものなり扨此尾張の守は前に出たるなかきよをいふか旁に藤原近光と註したるもさることゝなからさらは五節處五人となりていかゝなりまた一つには前のながきよはちかみつを寫しあやまれるにや何にまれ此尾張守となかきよは同人なるへき事なり猶可考○うへにわたらせゐてこらんす　江次第に垂ニ清涼殿東廂御簾一其内南第三間逼ニ御簾一鋪ニ毯代一立ニ御倚子一立ニ廻御屛風一其南北邊鋪レ帖爲ニ女房候所一若皇后参者可レ鋪レ南　若皇后参上者同第四間設ニ御座一云々○物うけれは　是より御許のさまなり物の見まほしくなけれはなり○おもひてゐたるに　ての字諸本なし群によりて補○すひつにゐて　御許の方の炭櫃に居集てなりいとせはけれはのかたに附ては斯(カク)得へからす○かうてすくしてはゐたる　いかて如此にては過しゐたるとなり

舞姫どものいかにくるしからんとみゆるに尾はりの守のぞこゝちあしかりていぬる夢のやうにみゆる物かなことはてゝおりさせ給ひぬ此頃のきんだちはたゞごせち處のをかしきことをかたるすだれのはし帽額さへこゝろ〳〵かはりていでゐたるかしらつきもてなしけはひなどさへさらにかよはずさま〳〵になんあるときゝにくゝかたる

○こゝちあしかりて　諸本如此舞姫の心ちをわつらひてと云意歟今按にこゝちあしかりてなるへしらとちと形よく似たりこゝらは萬葉に幾許と書る意にて多くといはんかことし此詞物語書にも折々見えたり意は尾張の守の舞姫ともは一人ならす多くの人とも皆さまあしくてといへるなりさらはあしかりての清へしあしくありての約言なり○いぬる夢のやうに　巻三にゆめのやうにもこよひのたつほと云々とありしにいひさまひとし○こせち處　既にいふごとく四所を云○すたれのはし帽額さへ　○さらにかよはす　かよふとは似と云程の同意にて爰に似合しからぬ不相應なといふ心はへなり

かゝらぬ年だにごらんのひのわらはのこゝちどもはおろかならざるものをましていかならんなゝど心もとなくゆかしきにあゆみならびつゝ出きたるはあいなくむねつぶれていとほしくこそあれさるはとりわきてふかう心よすべきあたりもなしかしわれも〳〵とさばかりの人の思ひてさし出したる事なればにやめうづりつゝおとりまさりけさやかにも見えわかずいまめかしき人のめにこそふとものゝけちめもみとるべかゞめれたゞかく〳〵もりなきひる中に扇もはか〴〵しくもたせずそこらのきんだちのたちまじりたるにさても有ぬへき身のほどこゝろもちひといひながら人におとらじとあらそふこゝちもいかにおくすらんとあいなくかたはらいたきぞかたくなしきや

十一月廿二日己卯今日を童女御覽といふ清凉殿の儀なり

○かゝらぬ年たに　常よりも撰ましたる聞えあり又五節處の評議さま〳〵なる年なれはなり○あゆみならひつゝ　雲圖抄に吳竹臺ノ圖下にいくは下仕參上之道也從ニ承香殿西橋ニ降ニ立庭中ニ南行但到ニ竹臺下ニ下仕從ニ竹臺西ニ頭令レ歩云々

○人のおもひて　此人は童女下仕等をさす○そこらの公達のまじりたるに　同書裏書に童女參ニ御前ニ雲客副之　○さても有ぬへき身のほと心もちひといひながら　さてもありぬへきは左樣に御覽の童女に出立も相應の人から心たてとはいひながらの意なり○おくすらん　此おくは字音にて臆病の臆なるへし

たはのかみのわらはの青いしらつるばみのかざみをかしと思ひたるに藤宰相のわらはゝあか色をきせてしもづかへのから衣にあを色をおしかへしきせたるわたげなりわらはのかたちもひとりはいとまほにはみえず宰相ノ中將のは　わらははいとそびやかにかみどもをかしみなこきあこめにうはぎは心々なりかざみは五重なる中にをはりはたゞゑびぞめを三重にてぞきせたる

○たはのかみ　丹波守業遠○青いしらつるはみ　衣服令義解に云く謂橡櫟木實也以レ橡染レ紺俗云ニ縿ノ橡衣ニ也男女裝束抄に青色或曰ニ麴塵ニ或稱ニ青色橡ニ云々○かざみ　汗衫女官餝抄にうはきのうへにきるなり童女の着るものなり枕草子卷七になそかさ

みはしり長といへかし○藤宰相　旁に行成卿と註したるは誤にて此五節所の藤宰相は則侍從宰相實成卿なり其故はまつ上に侍從宰相に舞姫のさうそく云々とある處を槃には侍從宰相とあるは內大臣のなさぬなり宰相なるへし舞姫のさうそく云々とありなさねといふ事いかなる事とも心得かたけれと侍從宰相實成卿は內大臣公季公の一男なれはそれをいへる事と聞えたりまた上にはてに藤宰相のは云々の處を前にはうちのおとゝの藤宰相のは云々とあるなとみな實成卿なる據なり又後拾遺集雜五におなし人の五節のわらはのかさみかしつき云々（此全文おしかへしの註の下にひけり見合すへし）とあるも此時の事にておなし人とは實成卿を云又下　日かけの歌の處に引る同集に中納言實成卿宰相にて五節奉りけるに云々とあるもこゝの事也又下に　侍從宰相の五節局にと女御の御方の左京といふ女房の入ましりたるといふことも此女御は弘徽殿の女御にて實成卿の御妹なれは由緣あることなりかく據多きことにて行成卿にあらさることいちしるし○あかいろ　汗衫をいふ○しもつかへ　傅樋洗なとのおなしつらなり

○おしかへしきせたる　青色の唐衣の上に又同し青色の汗衫をいくへも（下にかさみは五重なる云々また三重なといふことあり）重ねたるをおしかへしと云るなり後拾遺集雜五におなし人（實成卿）の五せちのわらはのかさみかしつきのからきぬに青摺をして赤紐なとつけたりけり人々見侍るに青き紙のはしに書て結ひ付させ侍ける選子內親王神よゝりすれる衣といひなから又かさねてもめづらしきかなとあるは此の時の事にて又かさねてもとあるは則おしかへしといふに同きせたるは諸本きたるとあれと槃によりてせの一字補へり○ねたけなる　こは青色をおしかへしきせたるを稱美たるにてこゝにては恨む意にあらす○ひとりは旁に獨と註せり　按に江次第に藏人頭進ニ向長橋ノ東禁ニ陪從等闌入ニ免レ入之者理髮一人童女二人（薰爐筥等也）陪從一人（近代不見）持几帳下仕二人（近代一人）云々とある童女二人の中一人は薰爐持一人は筥持にて其薰爐を持童女を比度利とはいへるなるへし和名鈔に薰爐は比度利とあり○宰相中將のは　兼隆卿なり○のゝ一字今補へり上に右宰相中將の云々藤宰相のは云々なとある例なれはなりさきにもいへること

く変も宰相中將のわらはゝの略語にて理も必然あるへき言なり本の儘にては宰相中將は童のいとそひやかなる人にて髮ともをかしといふ意になるなり○三重にてそきせたる　諸本此句なくゑひそめをきせたりとあれと榮に依て今は補へり其故は上の五重なる中にと云に對たる意なれは必ス何（イクヘ）重とこそ云へき處なれたゝゑひそめの色をのみ云ては五重なる中にと云詞いかにとも解へきやうなしみしらん人はよく味ひてよ

中々ゆゑ〳〵しく心ある　さまして　物の色あひ　つやなゞどいとすくれたり扇とるとて六位ノ藏人どもよるにこゝろをなけやるこそやさしき物から女にはあらぬかとみゆれわれらをかれがやうにていでゐよとあらば又さてもさまよひありくばかりぞかしかうまで立出んとは思ひかけきやはされどめに見ずあさましき物は人の心なりければ今より後のおもなさはたゞなれになれすぎひたおもてにならんも事やすしかしと身のありさまの夢のやうに思ひつゞけられてあるまじき事にさへ思ひかゝりてゆゝしくおぼゆればめとまることも例のなかりけり

○中々ゆゑ〳〵しく　五重かさねの汗衫の中にゑひそめの三重の汗衫は却てめつらしくゆゑ〳〵しきとなり○つやなといとすくれたり　旁にはつやなと下仕のいとかほすくれたるとありそれにては下仕のいと顔すくれたる人の扇をとるとて六位藏人ともよるにと下へつゞく意になるなりされはつやなとの下に詞不足して文とゝのはす今は群又契本にかくあるによりぬそれもまたいとすくれたるとあれと今るの一字をりと改て上よりつゝきてこゝにて句を切りたり○扇とるとて六位藏人ともよるに　雲圖抄に云下仕從二竹臺西頭一令レ歩藏人自二東頭一行合故實也近代不レ知二案内一云々裏書に云く童女參二御前一（雲客副レ之或召二扇雲客持參一）次下仕參（藏人副之云々）○心をなけやるこそ　此詞聞えす群には心となけやるとあれと猶不可解今按に心をなけにやるこそのにの一字落たるならんか猶可考○われらを云々これより下また例の自らに引當たる言なり○かうまで立出んとは思ひかけきやは　童女のものはちせす歩みいてたるをいふ○されと　さまよひありくはかりそかしよりつゝく意なり○こゝろなりけれは　群に

は心なりされとに作れりされと改んにもおよはさるへし○おもなさは　なきはとある本はわろしおもなさは面目なさはといふほとの心はへにてひたおもては則おもなき意なり○たゝなれになれすき　唯馴と云意をつよくいへるなりたゝ位になくたゝいれにいれよなと云類の語勢なりたゝ(ヒタスラ)は一向の意なり

侍從宰相のごせちのつぼね宮のおまへのたゞみわたすばかりなり立蔀のかみよりおとにきくすだれのはしも見ゆ人のものいふ聲もほのきこゆかの女御の御かたに左京といふ人なんいとなれてまじりたると宰相ノ中將むかしみしりてかたり給ふをひとよかのかひつくろひにてゐたりし東なりしなん左京とげん少(中)將もみしりたりしを物のよすがありてつたへ聞たる人々をかしうもありけるかなといひつゝ

○侍從宰相　實成卿を云事前にいへるかことし

○こせちのつほね　旁に五せちのつほねとあれとそは五節局と眞字にてかゝは片假字のゝをも加ふへけれとかなにて書時は必ゝ本行にあるへきのの字なれは今は本行になしぬ

○たゝみわたすはかりなり　中宮の御かたと程遠からぬをいふ○おとにきくすたれ　前に此頃の公達はたゝ五節處のをかしきことをかたるすたれのはし帽かうさへ云々とありしをさして音にきくとはいへるなり○かの女御の御方に　弘徽殿女御義子にて師輔公の孫公季公の女なり○左京うま　こは二人の女房の號と聞えたりもしうまの二字は後に加はりたるにやこれより次々にもうまはさらに用なし左京は枕草子卷八にこきてんとは閑院太政大臣の女御とそ聞ゆる其御かたにうちふしといふものゝ女左京といひてさふらひけるを云々と有同人なりされと諸本にあれはえ消(ケチ)もさらす○むかしみしりて　もとは兼隆卿の懸想人なりといふにや

○一夜かのかひつくろひにてゐたりし　一夜とは前の廿日の夜をさすへしそこに藤宰相のは思ひなしにいまめかしく心ことなりかしつき十人あり云々とみえたれはなり後拾遺(全文下に引)にもかしつきとみえたるをこゝにはかひつくろひとあるは按にかしつきもかひつくろひも同し號なるへしそはもと舞姫をかひつくろひかしつくの名なるへけれはなり

○ひんかしなりしなん　廿日夜の處にかしつき十人とあれはその十人並居たる東のはしなりしそ左京とみしりたるとなり○源少將　源少將雅通は殿の公達なれはみしりたりしをとはいさゝか無禮くきこえていかゝなり按に枕草子卷八にかの左京に源中將といふ人のかよひし事みえたりもしこゝも卷二にも誤れることく源中將をうつしひかめたるか源中將とせん方此左京とのさまを思ふにもなんとやらんよせあるやうに思はるさて春曙抄にそこに宣方と註したれと彼草子卷四（七丁つねふさの中將とあり）なとにも見えたる源中將は經房なれは八卷のもかならす同人なるへし○物のようすかありて　かの左京は實成卿の五節のかしつきに出たる事を物のついてありて聞たる人々はなり扮裝のさまを按に此左京といふ人はむかしは内に仕へてされとゝきめく名の立かりし人とみえたり

いざしらすかほにはあらじむかしこゝろにく立て見ならしけん内わたりをかゝるさまにてやは出立へきしのぶと思らんをあらはさんの心にて御前に扇ともあまたさふらふ中に蓬萊つくりたるをしもえりたる心ばへあるべし見しりけんやは宮のふたにひろげてひかげをまろめてとらひたるくしどもしろき物いみじくつま〳〵をゆひそへたりすこしさだすぎ給ひにたるわたりにてくしのそりざまなんなほ〳〵しきと公だちの給へばいまやうのさまあしきまでつまもあはせたるそらしざましてくろばうをおしまろかしてふつゝかにしりさきゝりてしろき紙一かさねにたてぶにしたりたいふのおもとしてかきつけさす

おほかりしとよの宮人さしわけてしるきひかげをあはれとぞみし

○いさ　いさは催し立る意にしてうたよみやらんことを催なり○かゝるさまにてやは　かゝるさまとはかしつきをいふ次に引後拾遺にみならしけんもゝしきをかしつきにてみるらんほとも哀とおもふらんといひて云々とあるに同し○心はへあるへしみしりけんやは　此戯はわさと中納言殿の方より（此事次にみえたり）と知らせんとて構ることなれはみしりけんやはとは左京のもちたる扇を見しり置けんやはなり前に六位藏人のとりたる扇の中にてなり○日

蔭　旁の説あやまれり今俗猿をがせといふものなり○とらひたるくしとも　一本にかくありそのほかの本ともにはそらひたるとありとらひたるはとりたるを延たる語にて舞姫傳なとの櫛を御前試夜とることあるか公事根源にけふ御前のこゝろみあり御殿の廂にて亂舞ありくしなとをおかる云々といふ意も見えたれはなり催馬樂にさし櫛はとうはりなつありしかとたけくのせうのあしたにとり夕さりとりとりともしかはさしくしもなしやしやきんたちやこは櫛をとるてふ言の證なり○しろき物いみしく　契本にしろきものいみしてとあり又一本の旁註に物忌の二字を註たれとひかことなり桀にはこゝをしろいものなとさへいさまにいれなして云々とありて白粉なり和名鈔に文選好色賦云著レ粉則太白 和名之路岐毛能 とみえたりいみしくは詞なり○つま〳〵をゆひそへたり　次に引る後拾遺の詞書にさしくしにひかけのかつらをむすひつけてとみえたれは櫛又粉の包たるなと日蔭もてゆひたるなるへしさらは前のまろめても日蔭を筥の蓋にまからしおくをいふへし○さたすきたまひにたる

云々　左京の年齢をいふ○くしのそりさまなんなほ〳〵しき　なほ〳〵しきは直なるにて櫛のそりの甚しからぬを云へるなりさてこゝをもて按に當時としわかき女房はいたく曲(ソリ)たる櫛をさし中年以後は曲(ソリ)のなほ〳〵しきを用られしならはしにや○つまもあはせたるそらしさまして　此句契本になきもよろしからんか諸本に有之此詞は今新に櫛をつくり調るやうにも聞ゆるにや扨又按に當時は櫛をあまたあつめてそれをひとつに結雙へて髮にはさしけるにやとおほし其故は枕草子卷十にさしくしむすはせてをかしけなるもまたうれしと有も其事と聞え又類聚雜要抄櫛筥條にも四十枚つゝ入て甲乙一雙の筥には八十枚の櫛なりかく數多入らるゝも其用ある故歟又此つま〳〵をゆひそへたりと有なとを考合てしか思はるゝ也これは前のくしのそりさまとあるも櫛一枚の事にはあらで何(イクツ)も結雙へたる形に曲(ソリ)の甚しきと直々しきとはあることなるへし此ことといまたひろくも證をえされはもしひかことにもあらんか見ん人よき證ともを見出てよしとも又はあしともさためたまひてはいかてう

れしからきし○くろはう　薫名なり拾芥抄又類聚雜要抄等に其方委しく見えたり烏方坎方黑方崑崙方なとかきて皆一名なり又或書に此香と侍從との二つは仁明天皇の不傳男とて御制禁なるよし見えたり○おしまろかし　こはおしといふ詞あれはたゞ分レ圓とは其さま少し異にていはゞ圓く長き形なり立文の中にまき込なれはその形おのつからしるへし○ふつゝかにしりさききりて　契冲の源氏物語ノ拾遺抄に萬葉十七に太馬をフツマとよみたれはふつゝかは人のふとり過たるかいやしけなれはそれよりおこりてよろつのことしなゝくてしたゝか過たるをふつゝかといふか云々とある如く此黑方もまろかしたる端を細めすに太き處より切たるなりさきゝりてとあるは刀にて際やかに切にはあらて手して引切なと云さまなるへし物見に出たる女房達なれは折ふし刀なとも用意なきさまもあるへし

○たてふみ　乙女卷にも見えて上の方を結ひなともせす卷たる儘なるを云へし黑方を其中にいれてまきたるなり○おほかりし云々うた　此歌は後拾遺集雜五に出て中納言實成宰相にて五節奉りけるにいもうとの弘徽殿女御の御もとに侍ける人かしつきに出たりけるを中宮の御方人々ほのかに聞てみならしけんもゝしきを傅にて見るらんほとも哀と思ふらんと云て箱の蓋にしろかねの扇に蓬萊の山つくりなとしてさし櫛にひかけのかつらを結付てたき物をたて文にこめてかの女御の御方に侍りける人のもとよりとおほしくて左京の君のもとにいはせてはてのひさしおかせけるよみ人不知とありて四句さしわけてとありとよの宮人は豐明節會の女官を云今は辰の日をのみいふとやうに心得たれと五節の舞姫をもすへて豐のみや人といふと見えたり三句日蔭のかつらの縁言なり此一首の意は多くの舞姫女房達の中にてもわけて左京としるかりし日蔭のかつらはあはれにみしとなりあはれは心に感しられし聲なり

おまへにはおなじくはおかしきさまにしなして扇などもあまたこそとの給はすれどおどろ〳〵しからんもことのさまにあはざるべしわざとつかはすにてはしのびやかにけしきばませ給べきにも侍らすこ

れはかゝるわたくしごとにこそと聞えさせてかほしるまじきつほねの人してこれ中納言の御使御とのより左京の君に奉らんとたかやかにさしおきつひきとゞめられたらんこそ見ぐるしけれと思ふにはしりきたり女のこゑにていづこよりいりきつるとゝふなりつるは女御殿のとうたかひなくおもふなるべし
○おなしくは　今俗にとてものことならはと云意なり○ことのさまにあはさるべし　これは中納言の方よりしのひてつかはすさまにしなしたるなればおどろ〳〵しく表たちたるやうにせんも不相應なるべければと也○わさとつかはすにては　中納言方よりかやうの戯ことをわさとつかはす時は唯しのひやかにして表立けしきはゝせ給ふべき事にもあらざればといふ意にて忍ひやかにといふにて句をきりてこゝろうへし○わたくしこと　是も表たゝぬ事也○これ中納言の御使御殿より左京の君に奉らん　此これといふより奉らんまては使人の左京の方に行ていふ詞也一本に中納言の君にとあるはわろし又契本にも御使已下左京のより以上なきもよろしからすこの二本ともにことの意違へり
○たかやかにさしおきつ　たかやかはこれ中納言の御使云々の言を使の聲たかくいひたるなり○女のこゑにて云々ととふなりつるは　御許の直に聞たるなり使の返言にはあらずなりつると治定して扱はと受て下の詞へつゝく格なり狹衣巻一に戸を忍ひやかにたゝけは人出來てとふなりけりさていかゝいふへきとゝひ給へは云々とあるも詞のさま似たり○女御殿のと　按に本御殿のと有しを後に女の一字加はりたるなるへし御との前は中納言の御文御とのよりとあるに同しく則中納言の殿よりといへる事にて中宮の御方の女房達の構へたることく左京も中納言の御殿よりとおもへるなるへしといへるにこそはあれ女御としてはことの意たかへり（萑野翁のいふ説誤れり）
なにばかりのみゝとゞむることもなかりつるひごろなれど五節過ぬとおもふ内わたりのけはひうちつけにさう〳〵しきをみのひの夜の調樂はげにをかしかりけりわかやかなる殿上人なゞどいかになごりつれ〳〵ならん高松の小公達さへこたひいらせ給し夜よりは女房ゆるされてまもなくとほりありき給へば

いとはしたなげなりやさだ過ぬるをこうてぞかくろふる五せちこひしなどもことに思ひたらずやすらひこ兵衛などやそのものすそかざみにまつはれてぞ小鳥のやうにさへづりざれおはれすめる

卯日新嘗會の事辰日豊明節會の事等書出さるは容易ならさる公事なれば心ある事と見えたり又中寅日鎮魂祭の事北山抄に若有二寅下寅行之有例云々然而新嘗會前可行之由見式とある事も前におなしく書出さりけん○さう〱しきを旁にさう〱しきと句を切てをの字を下へ讀つゝけたるは誤なり上にそのや何のかゝりのてにをはなけれはしきと結ふへき例にもあらす今はをの字を上につけてよむへしそのよし次にいへり扨さう〱しきはさひ〱しの音便なりと契沖のいはれたるけにさおもはる隨ふへし○みのひのよの調樂は　調樂は賀茂臨時祭の試樂なり公事根源同條に先兼日に試樂調樂なといふ事あり云々又同書に三月石清水臨時祭條に試樂は調樂ともいへり先音樂をとゝのへこゝろむる心なりと有て其試樂の式は江次第等に委しくみえたれとこゝにはさまてはあつからぬ事なる

さへけれは略ぬ（小野宮年中行事賀茂臨時祭條には前三日試樂・あれと前三日には可不限）さるを旁にをの字を下へつゝけて小忌の日の夜の調樂とせられたるはいかゝ辰ノ日の新嘗會に大忌ノ親王小忌ノ親王なといふ事は江次第等にも見えたれと其日を小忌ノ日といへる事は物にみえす若又さいふ事の有とも五節はてゝ後辰ノ日の夜なとに調樂はあるへきにあらす調樂は則試樂なれはかねて物の音を調へこゝろみおく事にこそはあれ思ふへし小忌とせられたるの誤なる事を故今をの字を上の句に附て巳の日の夜と直せり扨巳ノ日は廿五日にあたれり○なこりつれ〱ならん　五節も試樂も過て名ごりつれ〱ならんといへるなりなごりといふ意はもと昨日いたく荒たる海に今日も猶さわきし波の殘りてあるかなごりといふものなるをのちにはやう〱轉て唯其ことの跡といふ意に用來れりこゝも轉たるかたなり○高松の小公達　道長公御子の中にも顯信能信長家なとの母は高松上なれは此人達をいふへし高松上は西宮左大臣の御女也又續世繼藤浪ノ上巻藤並條に（道長公御子達ないへる處に）男公達太郎はうちの大おとゝ（頼通公）つきは二條殿（教通）又おなし御

はらからなる堀川のおとゝ頼宗公閑院東宮大夫能信無動寺むまのかみ顕信三條の民部卿長宗此よところは高松の御はらの公達なり云々小公達とは攝家の子息なれは也小は物語文ともに初冠せぬほとを小君といふにおなしかるへし○こたひいらせ給し夜よりは　中宮入内ありしよりはなり入内の事は巻三に見えたる如く十七日の夜なりしこたひは今度なりひをみのことくよむはびの音便なり○女房ゆるされて　古は許なくては女房の局なとへ入ことならさりしなり十訓抄に成通卿事有てめしかへされて内裡に参られたりけるに昔は女房の入立なりし人の今はさもあらさりけれは云々伊勢物語に男女かたゆるされたりけれは女のある處にきてむかひをりけれは云々なほ證とも多かるへし○さたすきたるとこうにてそかくろふる　さたすきたるは年齢を中分過たるなり萬葉巻十一におきつなみへなみのきよるさたのうらのかくさたすきてのちこひんかも　こうにては功にてなりかくろふるはかくるゝを延たるにてかくすをかくそふと云におなし扨御許の齢の積りたるを功にして陰るゝと

いへるなりされと御許は夫宣孝卒て後の事なからも年齢いたく老積りたる人にも非へし初にもいへる如く今年より十七年後の萬壽二年まて存命にてあられしさまなれはなりいま何年とおしはからんによりところはなけれと榮花物語天上花見巻に中宮威子三十一にならせ給ふをもさたすき給ふと書たるをもてその大かたはおもひやるへし○五節こひしなともことに思たゝす　是も御許の自らおもはぬにてさたすきたるさまをいへるなり○やすらひ小兵衛　女官等のよひ號なり榮花物語初花巻はしめ寛弘五年春の條にいにしへの后は童つかはせ給はさりけれと今のよは御このみにてさま〳〵つかはせ給ふやとりきやすらひなといふかちいさくはあらぬか髪長うやうたいをかしけにてかさみはかりをそきせさせ給へる表の袴はきす其姿ありさまゑに書たるやうにて云々○まつはれ　なれまとふ事にて此詞源氏物語にいと多き中十か八ッ九ッまては稚人の方に附云る言なりされとこゝは小公達のまつはれ給ふには非やといへる詞にて其人達の自らまつはれされありくなる事きこえたりな思ひまかひ

そ
臨時祭のつかひは殿の權中將の君なりそのひは御物いみなれは殿御とのゐせさせ給へり上達部もまひ人の公達もこもりて夜ひとよほそ殿わたりいと物さわかしきけはひしたり

十一月廿七日明日賀茂臨時祭なり〇祭の使は殿の權中將君　教道公なり父道長公母高松上此公今年四月十八日にも賀茂祭の舞人たりし由道長公御記にみえたり〇そのひは　明日はといはんかことし

つとめて内のおほい殿の御隨身この殿のみずいじんにさしとらせていにけり有し筥のふたにしろかねのさうし筥をするたりかゞみおしいれてぢんのくし白かねのかうがいなどつかひの君のびんかゝせ給べきけしきをしたりはこのふたにあしでにうちいでたるは日陰の返事なゝめりもじふたつおちてあやうしことのこゝろたがひてもあるかなとみえしはかのおとゞの宮よりとこゝろえ給てかうことごとしくしなし給へるなりけりとぞきゝ侍しはかなかりしたはふれわざをいとほしうこと／＼しうこそ

十一月廿八日乙酉江次第賀茂臨時祭條に頭書用二新嘗會後酉一と有今日乙酉にあたれり〇うちのおほい殿　内大臣公季公なり〇つかひの君のびんかゝせたまふへきけしきをしたり　こは前の戯わさを此權中將君よりと心得てけふにもかくおとろおとろしく返事はせるなり〇あしでにうちいでたるは　此あしてといふ事うたによめる天德歌合に霜かれの野へのあしての墨かきを色とりそむる春のわか草續世繼御子達卷はら／＼の御子條に三井寺の大僧正行慶の事云る處に天王寺へ詣給ひけるになにはを過給ふとて夕くれになにはわたりを見わたせはたゝうすゝみのあしてなりけりとなん聞えしことゝころの夕への望よりも難波のあしてとよみけんけにと聞え侍りかへる鴈のうすゝみ夕くれのあしてになりたるもやさしく聞えけり壬二集寄海雜あはし島なにはをかけて見わたせは波のいろはのあしてなりけり和泉式部歌に不傳もちひゆがみて物のかゝれぬは是やなにはのあしてなるらん是は憑手によせてよめりとぞ又五月雨記に香包は必あして書にすへしと有とか又桐枝卷に此物好み

するわかき人々心みんとて宰相中將式部卿宮の兵衛督内のおほとのゝ頭中將なとにあしてうたゑを思ひ〳〵にかけとの給へは云々なとあり扨諸說まち〳〵にて分明ならさる中にも花鳥に水石なとの形にも書なすなり中岑和尚の笹の葉書といふ文字の體篠の葉に似たるかことさなりと有そよろしからんと思はる其故は梅枝卷に源氏君と兵部卿宮と物語し給ふ處にあしてのさうしともそはかなうをかしき宰相中將のは水のいきほひゆたかにかきなしそゝけたるあしの生さまなと難波ノ浦にかよひてこなたかなた行ましりていたうすみたる處あり又いといかめしうひきかへて文字やう石なとのたゝすまひこのみ書給へるひらも有めもおよはす是はいとまいりぬへき物かなと興しめて給ふ云々とあるは則あしての書さまをいへるなれは花鳥の御說よくかなへりされは書體の號也此外にも歌繪書又著聞集にかみおろし卷十四みつてかき卷五なといふこと共皆書體の事と聞ゆ爰にあしてにうちいてたるとあるは書體にはあらて其歌書る紙のおきさまの如く聞ゆれと按に猶しからすうちいてたるとは既に卷二卅三にも云る如く今俗に打出し模樣といふ如く此歌をあしてに打出しの模樣に書るなりけり重之家集に御手本いるへき筥にあしてをぬひ物にすへしとせめられけるとて歌二首見え又伊勢物語に青き苔をきさみてまきゑのかたに歌をかきつけたるなと有に心はへにたる事にて戲の興にせし事なり榮にはこゝをはこのうちにていにてあしてを書たるはと見え後拾遺にもこゝの詞書に鏡の上にあしてにて書て侍けるとあるなとを思ひ合てしかることをさとるへし扨爰は筥の蓋の模樣に書つけたる事と聞えたるを後拾遺に鏡に書たる事にしたるは此返歌の詞に付て書改て入られたりと見えたり○もし二つおちてあやうし　此句の上に榮には返歌を出せるに此紀に見えぬは後に寫し脫せるかともおもへと猶思ふにもしこゝにいたさは其一首のうちを二文字はふきて書へき理なりされとさやうの事はあるへき事ともおほえすわさと本より此歌はのせさるなるへし扨其返歌は後拾遺にいてゝいはゝかくて臨時の祭になりて二條前太政大臣中將に侍りて祭の使し侍けるにありし筥のふたに

ちんのくし白かねのかうかいこかねのはこに鏡なといれて使は中宮のはらからなれはにやひかけとおほしくて鏡の上にあしてにて書て侍ける藤原長能ひかけ草かゝやくかけやまかひけんますみのかゝみくもらぬものをと有業には二句かゝやくほとやとあり日蔭くさは空の日影になぞらへてかゝやくかけといへるなりかく表はひかけに鏡のかゝやく縁言にてしたてたる裏の意はかけ歌にさしわけて左京としるかりしといへるはむかし實成卿の懸想ありし事をほのめかしたるなるを此歌には其意をも受すして唯多くの宮人の日蔭草の鬘を同しやうに餝立たる中とはいひなからいかでみまかへ給ひけんといへるなり下句のくもらぬ物をはみな同しやうのかつらなからもくもりなき晝中にてそれ〳〵の人の姿はかくれさりし物をといへるなりかくかけ歌の意に返歌のそむきたるか故に事の心たかひたるといへるなりかの方にても此方のたくみのことく心得たらは必其昔の懸想の事の返しはほのめかすへき事なれはなり扨又此一首の中何所(イツコ)の二字を書もらせしにやもしは二句のほとゝかけと

紫と後拾遺とたかひにたかへるを思へはこれらの文字なりけん又後拾遺に長能のよめるよしみえたるは左京の代咏したるなるへし○かのおとゝの宮よりとこゝろえ給て　一本に宮は元(もと)のあやまり歟とありけに許(もと)ともあらまほしき所也扨此戯わさはもとは前に見えたることく中納言實成卿のむかしみしり給ひたる人なれはわさと中納言よりと左京に思はせんたくみに中宮の女房達の構たる事なるを左京はさはおもはて權中將賴通よりと心得たりとなりはかなかりしたはふれわさをいとほしうといへるもおもひしにたかひたるか故なり

殿のうへもまうのぼりて物ごらんずつかひの君の藤かざしていとものものしくをとなび給へるをくらの命婦は舞人にはめも見やらずうちまもり〳〵ぞ泣ける御物忌なればみやしろよりうしの時にぞかへり參ればみかくらなどもさまばかりなりかねときぞまではいとつき〳〵しげなりしをこよなくおとろへたるふるまひぞ見しるまじき人のうれへるなれど哀におもひよそへらるゝ事おほく侍る

○物ごらんず　江次第に云く次使歌人等參進於竹

臺邊ニ發ニ歌笛一所ノ雜色若衆ヘ昇ニ御琴一或此間ニ被レ仰ニ一舞一云々北山抄出御王卿依レ召參上使牽ニ舞人陪從等一奏ニ歌舞一云々○使の君の藤かさして　江次第に歌人發ニ物聲一次立ニ挿頭華一結レ藁爲レ臺差之藏人取レ之立ニ長橋馬道西妻一云々次賜ニ挿頭華一六位藏人賦レ之公卿幷侍臣取之來ニ座前一賜レ之云々○くらの命婦は云々　此命婦いかなる故ありて泣にか知かたけれと爰の前後文を按にかねときか去年までは云々と御許も思ひよそへらるゝ事多く侍るとあれは此人はかねときに緣あるものなるへしかねときもいかなる人にや姓氏しらすもし去年の此使人にやと思へと去年は高雄なりし事道長公御記にみえたれはしからす同記今年十月十七日條に左近衞少將藤原兼絕といふ人藏人所の別當に任らるゝ事みえたるはもし同人にや此臨時祭の日藏人頭また所衆なと舞人歌人等の取レ杪事あれはそれをおとろへたるふるまひそと思てくらの命婦か泣故に御許もおもひよそへらるゝ事ありとならんか可考

○御物忌なれは　雲圖抄に還立御神樂賀茂儀也翌日有ニ御物忌一之時或止之と見えたり況やこゝは當日の御物忌なるをや○うれへるなれと　旁契共にうへなれと、あるもさる事なから今は一本の方によれりうへなれとゝいふときはかねときか事うれへるなれとゝいふ時はくらの命婦の事にていさゝか差別あり扨意は御許か身にはかゝはらぬくらの命婦のうれへる事なれとその悲泣をみるにつけてはかねときか去年まではつき／＼しかりしを今はいたくもおとろへける事かなと夫に付てはまたいろ／＼よそへらるゝ事ともゝ有といふ意なり又御記に寬弘四年二月八日乙亥從レ內退出至ニ東三條一還來敎通能信舞始以ニ兼時一爲レ師云々かゝれは大くらの命婦も御許もその兼ときのいみしかりしことをおもへるなるへし

十二月の二十九日にまゐるはじめてまゐりしもこよひのことぞかしいみじくも夢ぢにまとはれしかなと思ひ出ればこよなく立なれにけるもうとましの身のほどやとおぼゆ夜いたう更にけり御物いみにおはしましければおまへにも參らす心ぼそくてうちふしたるに前なる人々のうちわたりは猶いとけはひことなりけり里にては今はねなましものをさもいさとき沓

のしげさかなといろめかしくいひゐたるをきゝて
年くれてわかよふけゆく風のおとにこゝろのうちの
すさましきかな
とぞひとりごたれし
紀略十二月廿日丙午新誕親王產生百日也公卿以下
獻和歌前太宰權帥作序云々本朝文粹卷十一二十九丁一
條院御宇中宮御產百日和歌序儀同三司第二皇子百
日云々
道長公御記十一月一日戊午五十日云々同記十二月
廿日丙午若御百日○十二月廿九日　此月廿日御百
日のことゝ道長公御記にあることとし臨時祭の後里に
おりて今日のほれり百日の事は里に有けるほとの
事にて略たるなるへし○廿九日にまゐる　まゐる
の三字傍になし契本また論によりて補へり御許の
里より中宮へ參るなり○はしめてまゐりしこよひ
のことそかし　去年の今夜初て參しといふ事なる
へし○こよなく　こゝも初て參りしと立なれしと
の相違あれはなり○うとまし
○いさとき　さの字淸へし寢聰(イサトキ)はもと目の覺やす
き言なるをこゝは末摘花卷に人けのすこしあるな
とになくさめたれとすこううたていさとき心ちす
る夜のさまなりとあるに同しく俗に寢付(ネツキ)にくきと
いふ意なりさてはくつのしけさかなといへり○年
くれて云々歌　此歌は玉葉集に里に侍りけるか
十二月つこもりに內に參りて御物忌なりけれは局
にうちふしたるに人のいそかしけに行かふ音をき
ゝて思ひつゝけゝると出たりわかよふけ行は我身
のさかり過行事に夜の更行と風のふくとの三つを
かねたり下句は新撰萬葉に無レ朋無レ酒意猶(ナホ)冷また
放二眼雲端一心尙冷なとある冷におなしくさひしく
こゝろすごき事なり

つごもりの夜つゐなはいとゝはてぬればはぐろめ
つけなゞとはかなきつくろひどもすとてうちとけゐ
たるに辨內侍きて物語してふし給へりたくみの藏人
はなげしのしもにゐてあてきがぬふものゝかさねひ
ねりをしへなゞとつく〴〵としゐたるにおまへのか
たにいみじくのゝしる內侍おこせどとみにもおきず
人のなきさわぐおとのきこゆるにいとゆゝしく物も
おぼえず火かと思へどさにはあらずたくみの君いざ
〳〵とさきにおしたてゝともかうも宮しもにおはし

ますまつ參りて見たてまつらんと內侍をあらゝかにつきおどろかして三人ふるう〳〵是もそらにて參りたればはだかなる人ぞ二人ゐたるゆげひ小兵部なりけりかくなりけりとみるにいよ〳〵むくつけし御厨子所の人もみないで宮の侍も瀧口もなやらひはてけるまゝにみなまかでゝげり手をたゝきのゝしれどいらへする人もなし

十二月三十日○つゐな　追儺の夜桃枝弓葦矢を射ル等の義有江次第北山抄延喜式陰陽寮式等に見えたり今引に不及○あてき　童女名なり葵巻にちいさきわらはのおやともゝなしいと心ほそけに思へることわりに見給てあてきは今はわれこそ思ふへき人なめれとの給へは云々とあるは此童のあてきをそのまゝとり用ゐて書る歟かやうの事は其御代にあるまゝをも書へき事なり爰にたくみの藏人の縫物をしふるをわれは此實のあてきも親のなくなりたる童女ならんかこゝにはつゆ用なき事なからふと思ひよれるまゝにいふのみ扨童女を何きとよふきは君の意か竹川巻になれきといふあり手習巻にこもき榮花物語見はてぬ夢巻にほめきすいきなといふ童女號あり又あては貴の意なりうつほにあてきみといふあり同意なるへし○ひねりをしへ　ひねりは則縫わざをいへり手習巻に物をいとうつくしくひねらせ給へはとてこうちきひとへ奉るを云々猶外のものにも折々みえたり○宮しもにおはします　しもとは天皇の御方ならぬを云ともかうもは此句の下にある意なり○ゆけひ小兵衛靭負は衛門官人なり此二人盜人にあへるにて今いふ追剝なとの如し○むくつけし　竹取物語に……　……此詞はおそろしき意なり

おものやとりの刀自をよびいでたるに殿上に兵部丞といふ藏人よべ〳〵とはぢもわすれてくちづからいひたればたづねけれどまかでにけりつらきことかぎりなし式部ノ丞すけなりぞまいりて處々のさしあぶらどもたゞひとりさしいれられてありく人々物おぼえすむかひたるもありうへよりみつかひなどありいみじうおそろしうこそ侍りしかをさめ殿にある御ぞをとり出させて此人々にたまふついたちのさうぞくはとらざりければさりげもなくてあれどはだかすがたはわすられずおそろしきものからをかしうともい

はす
○おものやとりの刀自　御膳宿の刀自なり刀自は戸主の略語にて一戸の主たる女をいふと縣居翁の說なりこは戸主の意をもとにてうつりてはさた過たるほとの女の稱となれるものなり御膳宿は江次第卷一元日宴會條に御障子ハ云々置二於南殿西ノ御膳宿二云々又拾芥抄南殿條の下に御膳宿在西庇なとあるにて南殿の西に有事しるへし
○殿上に　殿上に行て兵部藏人よひて參れと御許の刀自に云負する也殿上とは清涼殿をいふ○兵部丞といふ藏人　契本群等にいふの二字なしさる時は二人の事となるへし御記寛弘五年正月十一日條に女敍位幷被定藏人式部丞資業文章生國經等也云々○處々のさしあふらくも　延喜主殿寮式に十二月晦夜供二奉內裏幷大極殿豐樂殿武德殿一雜料等雜物幔椒油七斗六升六合胡麻油四斗油瓶二十六口燈盞一口云々又曰く十二月晦夜官人當日晚頭ニ率二史生殿部今良等ヲ大內前庭ニ東西相分立二燈臺一各相去八尺隨卽燃レ燈云々江次第に南殿庭殿上小庭朝餉壺幷打ニ燈臺云々公事根源にもこよひ御前に灯を多くともす東庭朝餉臺盤所のまへのみきりに灯臺を隙なくたてゝともす也なとみえたり○さしいれられて　さしいれてといふへき所なりいかゝ按に東屋卷にいとやはらかにおほときすき給へる君にておしいてられてゐ給へりと有もおしいたされてといふへき所なりかゝるたくひにてこれも當時のひとつの詞つかひならんか○うへよりみつかひ　天皇より中宮の御方への御使なり○をさめとのにある御そを　納殿は何にても納おかるゝ所にて宜陽殿にありといへり拾芥抄に納殿累代御物納之在二宜陽殿一恒例御物納二藏人所綾綺殿紙ノ御屏風一在二仁壽殿一頭藏人雜色爲レ預以二藏人雜色出納小舍人一爲二預人一進二月奏一をの一字は契本によりて加へつ○ついたちのさうそくはとらさりければ　正月朔日の料の裝束は盜人のとらさりければなりそは局なとに入て盜めるにあらす卅日夜着ても居ねはとらぬは勿論なりもしとられさりければとありしを。れの一字寫脫せるにもやあらん○さりけもなくて　彼二人は朔日の晴の裝束を取れたるには非されはそれほとに衰へる體にもあらされとゝいふ意なり○を

かしうともいはす　おそろしくいみしかりし事なれはをかしかりし事かなと云に出てかたりもせすとなりそは年のをはりなとには言忌すへけれはなり扨此をかしは嗚乎か　めつらしと云意なり今俗にも如此いふをかし常にありしかるを旁に此詞の下にことゞみもしあへすの一句あるはよろしとも聞えす上にをかしうともいはすといひて又ことといみもしあへすと云てはうらうへに意混せり今は契本によりて略ぬ

正月朔日かんにちなりければわか宮の御いたゞきもちひのこととゞまりぬ

寛弘六年正月一日○かんにち　拾芥抄巻下末に坎日自節中計之辰正月　丑二月　戌三月　未四月　卯五月　子六月　酉七月　午八月　寅九月　亥十月　申十一月　巳十二月　禁秘抄巻下に凶會九坎忌不忌如此事在時儀也また宇治拾遺巻五に僧にかな暦かきてたへといひければ云々かん日くゑ日なと書たりけるか云々と云事見えたり古の暦には有けるならんを今のにはなし何の改暦の時に略かれたるにか○いたゞきもちひ　江次第供御薬條に自二御厨子所一供二御歯固具一又供二御薬酒等一以二高坏六本一献レ之有二餅鏡一用近江火切○とゝまりぬ　旁如此契本とまりぬ

三日ぞまうのぼらせ給ふ今年の御まかなひは大納言君御さうぞく一日のひはくれなゐゑびそめからきぬは赤色地ずりのもふつかこをばいのおりものかいねりにこき青色のからきぬいろずりのも三日はからあやの櫻がさねからきぬはすはうのおり物かいねりはこきをきる日はくれなゐはなかに紅をきる日はこきを中になどと例のことなりもえぎすはう山吹のこきうすきこをばいうす色など常のいろいろをひとたびに六ばかりとうはぎとぞいとさまよきほどにさぶらふ

正月三日○まうのほらせ給　若宮の御いたたき餅に主上の御前ゝゝ殿へ参上給ふなり○ことしの御まかなひ　江次第供御薬條に舊年十一月廿日以前陰陽寮進二勘文一通一一通御忌勘文一通薬童子勘文被レ定二仰陪膳女房一如二御乳母君若典侍一上臈之人也往年更衣奉仕云々○さくらかさね　男女装束抄に胡曹抄に櫻表白裏蒲萄又一説裏又赤花○こきをきるひは　こきとは紫色の濃也○山吹のこきうすき　要領抄に山

吹にほひ（山吹の衣に黄なる衣を重）花山吹（表うす朽葉うら黄色）裏山吹（おもて黄いろうらくれなゐ）○うすいろ　旁に薄色とは紫のうすきを云とあるよろし

さいしやうの君のみはかしとりて殿のいだき奉らせ給へるにつゞきてまうのぼり給ふ紅の三へ五重とませつゝおなじ色のうちたる七重にひとへをぬひかさねく\ませつゝうへにおなじ色のかたもんの五重うちきゑびぞめのうきもんのかたきのもんをおりたるぬひざまさへかど〱しく三重がさねのもあか色の唐衣ひとへのもんをおりてしざまもいとからめいたりいとをかしげに髮なゞども常よりつくろひましてやうだいもてなしらう〱しくをかしたけだちよきほどにふくらかなる人のかほいとこまかににほひをかしげなり大納言の君はいとさゝやかにちいさしといふべきかたなる人のしろううつくしげにつぶ〱ととこえたるがうはべはいとそびやかにかみたけに三寸ばかりあまりたるすそつきかんざしなゞぞすべてにるものなくこまやかにうつくしきかほもいとらう〱しくもてなしなゞどらうたげになよびがなり宣旨君はさゝやけ人のいとほそやかにそびえてかみ

のすぢこまやかにきよらにておひさがりのすそより一尺ばかりあまり給へりいと心はづかしげにきはもなくあてなるさましたまへり物よりさしあゆみていておはしたるもわづらはしうこゝろづかひせらるゝこゝちすあてなる人はかうこそあらめとこゝろざまものうちの給へるもおぼゆ

○らう〱しく　本居翁の說に物の功者なる意なりといはれき○らうたげ　俗にあいらしきと云意なりと是も同翁の說なり○すゑより一尺はかりするはすそを誤れるにや扨この三人の姿をかく書ならへたるは下の條々の發端なり

此つぎに人のかたちをかたり聞えさせば物いひさがなくや侍るべきたゞいまをやさしあたりたる人のことはわづらはしいかにぞやなゞどすこしもかたほなるはいひはへらじ

○さかなく　此詞は不良不祥惡等の字をよみてそはよからずといふほとの語意にてあしきといふとはいさゝかけちめあり爰も人事を評せんは物いひのよからぬにや侍るへきことに今眼前の人の事なればといふ意なり○すこしもかたほなるはいひ侍

らし　妾のかたはなるをいはすといへるにて行ひ心もちの善悪はつはらかに論へる是より下の條々よく〳〵心をとゝめて見へし誠に女のをしへにには天下これにまされる書はあらしあなめてたの御許の心もちひやそのさまは梯巻に源氏君紫上にの給ふものかたりのさまにいとよく似たり返々もなほさりにな見過しそ

宰相ノ君は北の三位のよふくらかにいとやうだいこまめかしうかど〳〵しきかたちしたる人のうちゐたるよりも見もてゆくにこよなくうちまさりらうらうしくてくちつきにはづかしげさもにほひやかなる事もそひたりもてなしなゞといとびゞしくはなやかにぞみえ給へる心ざまもいとめやすくこゝろうつくしき物から又いどはづかしきところそひたり

〇宰相君　こゝに北の三位のよとことわりたるは當時宰相と喚女官の一人ならねはことさらにかくは云る也即此三位ゝゝの女ならん枕草子春曙抄巻六四丁オに北のゝ三位のむすめ宰相君云々とありもしこゝも同人にてのゝ下にのゝ字漏たるか又北野三位にてもあらんか可考

〇こまめかしう　細めかしうにてこゝめかしきといふとはことなり〇かど〳〵しき　妾にも一かとあるといへるにて美稱なり〇うちゐたる　ゐたるはみたるの誤にや〇もてなしなど　などの二字一本になし

小少將君はそこはかとなくあてになまめかしうきさらぎばかりのしだり柳のさましたりやうだいいとうつくしげにもてなしこゝろにくゝ心ばへなゞどもわが心とはおもひとるかたもなきやうに物づゝみをしいとよをはぢらひあまりみぐるしきまでこめい給へりはらぎたなき人あしざまにもてなしいひつくる人あらばやがてそれに思ひいりて身をもうしなひつべくあゑかにわりなき處つい給へるぞあまりうしろめたげなる

〇小少將君　此君は御許とはとりわき心をかはしてましらひ給ひけるさままた御もとよりははやくみまかられし事新古今集に見えたりくはしくは下巻五にいふべし〇わか心とは　わかは御許の自らのわかなり〇はらきたなき人　心底の悪をいふはら黒きといふにおなし〇いひつくる　云着るなり

○わりなき處　此詞は物を強て爲るやうの意にて心底のよからさる人此君に難つけ惡き名をも云着なとせは其儘深く思ひしつみてさまてなき事にもいひ消なともえせすしひて心を其方におもひ入て身をもうしなひつへきさまそといへるにてその物ことに人のいふまゝに逆らふ事なくなよ〳〵としたゐ本性を二月のしたり柳のさまには譬へたるなり是らの心もちひそ大かた御許の心にはかなひしならむさてこそむつましきましらひにはありけめ

宮内侍ぞまたいときよけなる人たけたちいとよきほとなるがゐたるさま姿つきいともの〳〵しくいまめいたるやうだいにてこまかにとりたてゝをかしげなゝどもあらぬ物からいと物きよげにそび〳〵しくなか高きかほして色のあはひ白きなゝど人にすぐれたりかしらつきかむざしひたひつきなゝどぞあな物きよげとみえてはなやかにあいぎやうづきたる唯ありにもてなして心ざまなゝどもめやすくつゆばかりいづかたざまにもうしろめだいかたなくすべてさこそあらめと人のためしにしつべき人がらなりえんがりよしめく方はなし

○をかしけなとも　一本になの字なし一本によれり○そひ〳〵しく　そひはそばと同し第六行のはたらきなりそはと云ことの意は卷五にいへることくこゝも中高なる顏の形をそは〳〵しといへるなり一本又群にはうひ〳〵しくと有そひうひ誤字ならんか可考○唯ありに　とりたてゝつくろひかさる事もなき本性を云○えんかりよしめく　風流めきあためく意なり

式部のおもとはおとうとなりいとふくらけさすぎてこえたる人の色いとしろくにほひてかほぞいとこまかによしばめる髮もいみじくうるはしくてながくはあらざるべしつくろひたるわざして宮にはまゐるふとりたるやうだいのといとおかしげにも侍しかなまみひたひつきなゞどまことにきよげなりうちゑみたるあいぎやうもおほかり

○おとうと　和名鈔に爾雅云男子後生爲レ弟(和名於止宇止)とあれともと乙人の意なれは男女にかゝはらす通はせいふへき理なり○つくろひたるわさして　和名鈔に釋名云髮(音被和名加都良)髮少者所ニ以被ニ助其髮一

也云々今かもしといふものして長くせしなるへし
○まみは　まは目なり見は見るにてまみは物をみる目つきを云めは所レ見といふことを約たる名目なり

わかうどのなかにかたちよしと思へるは小大夫源式部などいふはさゝやかなる人のやうだいいといまめかしきさましてかみうるはしくもとはいとこちたくてたけに一尺あまりあまりたりけるをおちほそりて侍りかほもかど〳〵しうあなをかしの人やとぞみえて侍るかたちはなほすべき處なしげん式部はたけよきほどにそびやかなるほどにてかほこまやかに見るまゝにいとをかしくらうたげなるけはひ物きよくかはらかに人のむすめとおぼゆるさましたり

○さゝやかなる人　空蟬君
○もとはいとこちたくて　もとは前かたといはんかことし　こちたくは髮のふさやかに多かりしことなり○かはらかに　契本か　はらにとあれと帶木卷にもとのねさしいやしからぬかやすらかに身をもてなしふるまひたるいとかはらかなりやとあるによりて今は旁に隨へり詞意は湖月抄にさはやかなる心なりと見え旁には乾の字を當たるいつれよけん未考

こ兵衛ノ丞なッどもいときよげに侍りそれらは殿上人の見のこすすくなかりたれもとりはづしてはかくれなけれどひとくまをもよういするにかくれてぞ侍るかし

○こ兵衛丞　丞は君の誤歟女の名には耳なれぬやうなり扨是も若人の中なるへし○それらは　前の小大夫源式部等までをさす○見のこすすくなかり　殿上人達のみな目とゝむる若人達ぞと也みのこすは好色方か○たれもとりはつしては云々　それらの外の誰々も一人つゝとりはなちてみるときは殿上人達に目つけられぬ人もなけれと人目に隨分と見られぬやう用意する故にかくれたりとなり○ひとくま　人隈なり

宮等の侍從こそいとこまかにをかしげなりし人いとちいさくほそく猶わらはにてあらせまほしきさまを心とおいづぎやつしてやみ侍にし髮のうちきにすこしあまりてすゑをいとはなやかにそぎて參り侍しぞはてのたびなりけるかほもいとよかりき

○をかしけなりし人　是も若人にて近き比身まかりし人なるへし此詞過去なり○心とおいつき　姿はいとわかやかなりしを心から老めかしてなり○やみ侍にし　病なり

五せちのべんといふ人侍り平中納言のむすめにしてかしづくと聞えしが繪にかいたる顏してひたひいたうはれたる人のまじりいたうひきくかほもこゝはと見ゆる處なくいとしろう手つきかひなつきいとをかしげに髮は見はじめ侍しはてはたけに一尺ばかりあまりてこちたくおほかりげなりしがあさましうわけたるやうにおちてすそもさすがにほそらずながさはすこしあまりて侍るめり

○平中納言　傍に親信卿とあり未考○かしつくと聞えしか繪にかいたる顏して　この句契本になし○まじりいたうひきく　契本ひきてと誤れり和名鈔廣雅云眦在詣反又方賜反和名萬奈之利目裂也云々○こゝはと見ゆる處なく　顏のさまのこゝはよろしといふへき所もなくみなみくるしきといへるなり○あさましう　今俗にけしからぬ又以の外と云意もありて何にてもおとろくさまのある詞なり○なかさはすこしあまり　長さは裾よりすこしあまりての意なりさて上のさすかといふ詞を此句の上に置て心得る格にてすへての意は髮も以の外におち細りて末もふとくみにくきなれともしかしなから長さは裾よりすこし餘てめてたしといへるなり

こまといふ人かみいとながく侍りし昔はよきわかうど今はことちにかはさすやうにてこそさとゐして侍るなれ

○ことちにかはさすやうにて　楊子にいはく膠レ柱調レ瑟云々又三代實錄卷二十八に在原朝臣行平起二請一事一條に苟謂レ利レ公豈期二膠柱一云々など有て箏柱の用は動はたらくを主とするものなるをそれに膠して瑟を調るか如しといへるにて人のもてなし行も箏柱の動かごとく其時代の移轉るにつけつゝ用ゐ隨ふへきわざなるをそれをかたくなに昔おのか立たる筋を一向に改めす時代の移轉るにも隨はすもてなしふるまひをるか其動はたらくへき箏柱に膠さして瑟を調るか如しと云譬にて時代の移轉る調子をえしらぬを云り俊成大夫女の歌にも折ふしのうつれはかへつよの中の人のこゝろのは

はなそめの袖とこそはあれ

かういひ〳〵て心ばせぞかたう侍るかしそれもとり〳〵にいとわろきもなし又すぐれてをかしうこころおもくかどゆゑもよしもうしろやすさもみなぐすることはかたしさま〳〵いづれをかとるべきとおぼゆるぞおほく侍るさもけしからずもはへることゞもかな

これより以下は人々の心もちのさたにてさかしらにふるまふをいといたくにくめり○すぐれてをかしう　此詞は以下の五品をすへてまついへるなり○みなくすることはかたし　此五品にすぐれたる品をわけてまつ云ならへたる文のつゝきもいとめてたし帚木巻品定條廿七丁左　に馬頭の評の詞に此さま〳〵のよき限りをとりぐしなんすへきくさはひまぜぬ人はいつこにかはあらん吉祥天女を思ひかけんとすれはほうけつきくすしからんこそ又わひしかりぬへけれとてみなわらひ給ぬ云々とある同さまなり○さもけしからすも侍る事ともかな　此句は次の齋院中將へかゝりて則それを書以傳舞とする發語なり

齋院に中將ノ君といふ人侍るなりきゝ侍るたより有て人のもとに書かはしたる文をみそかに人とりて見せ侍しいとこそえんにわれのみよには物のゆゑしり心ふかきたぐひはあらじすべてよの人は心もきもゝなきやうに思て侍るべかめり見侍りしにすゞろにこゝろやましうおほやけばらとかよからぬ人のいふやうにくにゝこそ思ひ給られしかふみかきにもあれ歌などのをかしからんはわか院よりほかにたれかみしり給ふ人のあらんよにをかしき人のおひいでばわが院こそごらんじしるべけれなどぞ侍るげにことわりなれど我方ざまの事をさしもいはゞ齋院より出きたる歌のすぐれてよしと見ゆるもことに侍らずたゞいとをかしうよし〳〵しうはおはすべかめる處のやうなり

○齋院　榮花物語上花見巻九丁オ　に云齋院は村上の十宮ゐさせ給て年久くならせ給ひぬるかおりさせ給ひぬれは云々この宮の事有又いはく齋院おりゐさせ給て御せうとの入道兵部卿の宮にたいめんせさせ給て聞えさせ給けるけふそ思ふ君にあはてややみなまし八十あまりのとしなかりせはいみしう

こよなきほとの年月なりかしいとわかくて院にならせ給ふ云々と有て此下させ給しは萬壽五年の事なれは此寛弘六年はそれより廿年前の事なれとかの御うたのさまにも八十年（非なり）齋院にゐ給ふと見ゆれはこゝも同し齋院なる事うなし扨此齋院は村上天皇御女選子なり御母安子かく久しく齋院にてゐたまふ事前後類なき故よに大齋院とも申奉りしなり　按に兵部卿致平親王は村上第三宮御母在衛公女長久二年辛亥三月廿日甍九十一（紹運録）とあれは天暦五辛亥年誕生にて萬壽五年戊辰（長元改元）は七十八歳なり大齋院選子内親王は村上女十宮御母中宮安子師輔公女號大齋院歴五代紀略長元八六月廿二日甍年七十三とあり
しかれは應和三癸亥年誕生にて萬壽五は六十六歳なりしかれは何れも八十餘の御齢にあらぬを八十あまりとはいかゝ○聞侍るたよりありて　聞侍るとは中將はけしからぬ文かきておこせしと聞侍るなりたよりは手寄にて何にてもその事に手筋のあるを云て其文をみるへき手寄の有てといへるなり○われのみ　此のみはほどの意にてわれほど心ふ

かき類は非といふ意なり○心もきもゝなきやうにおもひて侍へかめり大和物語巻下にこゝろもきもゝなくかなしき事ものに似す云々蜻蛉日記巻一に心たましひもあるにもあらて云々なとある如くこゝも餘の人を魄もなき物と思ふらんと云事で強く甚しくいひなしたる重語なり扨へかめり諸本めるとあれと必ズ。りなるへけれは改つ○すゝろに、そも心のたつ事なり既にいへるに考合てさとるへし○おほやけはらとかよからぬ人のいふやうに　枕草子巻十あさましうおほやけはらたちて云々帚木巻にもしはあやなきおほやけはらたゝしく云々なと有ておのか身にはあつからぬことをはらたつをいふ今俗法界りんきといふによく當れりと本居翁はいはれきよからぬ人とは下卑（イヤシキ）人をいふ貴人をよき人といふに對り○ふみかきにも云々　以下こらんしるへけれ以上中將の文の詞なり○よし〱しうはおはすへかめる處のやうなり　此齋院の御母は道長公の御をはにおはしませは此記は中宮へ見せ奉らすへきなれは此詞の心つかひ尤おもしろし

さふらふ人をくらべていどまんには此見給ふるわたりの人にかならずしもかれはまさらじを常に入たちて見る人もなしをかしき夕月夜ゆゑある有明花のたより郭公のたづね處に參りたれば院はいと御心のゆゑおはして所のさまはいとよはなれかんさびたり

○さふらふ人々を…………

○いとまんに　記傳…………

○此見給ふるわたり　中宮の御かたをいふ○つねに入立て　齋院のかたへはなり○所のさま　旁にそのさまとせられたるは所の字をその假字と思ひ誤られたるなるへし契本に所とあるはところとよむへし　○かんさひ　萬葉卷一耳成之青菅山者云々神佐備立また卷十四にカムサフル伊駒高根云々なとかんさひは本神ふるなるを轉てはこゝもたゝ世はなれ物さひしきやうの意なりそれを齋院なれはかんさひとはいへるなり

又まぎるゝこともなしうへにまうのぼらせ給ふもしは殿なん參り給ひ御とのゐなるなッど物さわがしきをりもまじらずもてつけおのつからしりこのむ處となりぬればえんなることゞもをつくさん中になにのあふなきいひすぐしをかはし侍らんかういとうもれ木を折いれたる心はせにてかの院にまじらひ侍らばそこにてしらぬ男に出あひ物いふとも人のあふなき名をいひおほすべきならずなッどこゝろゆるかしておのづからなまめきならひ侍りなんをやましてわかき人のかたちにつけて年のよはひにつゝましき事なきがおのが心にいりてけさうだち物をもいはんとこのみ立たらんはこよなう人におとるも侍らまし

○又まきるゝ事もなし　齋院の御方をいふ

○もてつけ　末摘花卷にたほやきたるけしきもてつけ給へり云々とあるを思に身に馴附せるといふやうの意にて爰も齋院あたりは高貴の人の入立もなく何事も心やすきを身にすきこのみておのつから馴付てはといふ意なり○なにのあふなきいひすくしをか立侍らん　あふなきは深き思ひやりもなくふとしたる言なり奥なきならはおうの假字なり狹衣卷一にひるねしたる人々のさわくにおとろきてあふなくおきあかりたるにいとよく見あはせて云々なとあるもふとおき上りたるなりこゝも意はかやうの貴人の出入もなく心安き齋院あたりにて

はたとひえんに風流めきたる事ともをもてなすにもなにのすこしのふとしたいひ過しもし出へき事かはさやうの云すこしをすへき事には非といへるにてかの人の出入もなけれは貴人に對して物いふこともなく何事もうしろやすけれはなり○かういとうもれ木をゝりいれたる心はせにて　中將をさしてかやうにと云るなりうもれ木をゝりいれたるはかの餘所外のみくらへもなく唯我方さまを最上にいひなし外々の人は心きもゝなきやうにいひもし心得をるか埋木をゝり入たる心となり其をゝりいれたるとはをれ物又をれ〱しくなと言詞に同しく繪合卷二十丁に深きらうなく見ゆるをれ物もさるへきにて云々契沖の拾遺抄に云をれ物とは物の字のなかは折たるやうに何もたらぬはしたなる心歟とあるを玉小櫛にいはく拾遺の說いかゝおれは則おろかのおろと同意なりとあれとをとめ卷におのつからをれたる事こそいてくべかめれ云々初音卷にもとよりをれ〱しくたゆき心のおこたりに云々夕霧卷にをれて年ふる人は云々又をれまとひたれは云々なと有と愛のをりいれたるとを考合するに契沖の說たやすくすてかたし○人のあふなき名を云々　思ひやりもなくふと人にうき名を云負すへきにはあらすと心をゆるかしとなり　ゆるかしは緩（ユルヤガ）のゆるに同しくかしはうこかしはたらかしのかしに同○おのつからなまめきならひなんをやなまめきは風流めき色めくやうの意也扨こゝのすへての意はかやうに埋木を折いれたるやうによその見合もなき中將なとやうのをれ心にてかの院に入をらはもししらぬ男なとの懸想言いひかけんにも云はなたはふと男のうき名もや立んと心をゆるめてうけひきなとすれはいつとなく自然に風流めきあた〱しき方になりなんといふ意なり○心にいりて　旁にいれてとあれと契本にかくあるそまされる

されど內わたりにて明くれみならしきしろひ給ふ女御きさいおはせず其御かたかのほそ殿といひならぶる御あたりもなく男も女もいどましき事もなきに打とけ宮のやうとして色めかしきをばいとあは〱しとおぼしめいたればすこしよろしからんとおもふ人はおぼろげにて出ゐ侍らず心やすく物はぢせずとあ

らんかゝらんの名をもをしまぬ人はた殊なるこゝろばせのぶるもなくやはたゞさやうの人のやすきまゝに立よりてうちかたらへば中宮の人うもれたりもしはよういなしなどともいひ侍るなるべし上臈中臈のほどぞあまり引いりざうずめきてのみ侍るめるさのみして宮の御ため物のかざりにはあらず見ぐるしとも見侍り

○されと　前段のわかき人の云々おのが心にいかてけさうたちのあたりを受たり○きしめきにきはゝしきやうの意なり○女御后　女御は親王或大臣女なとなり給て更衣の上なり后とは謂ゆる大后にて中宮を申奉る又ひろくは女御更衣へもわたる惣號なり○その御かたかのほそとの　是も同し後の内なからも更衣なとのつらをかくいへるなり御かたはもと尊ていふ言なり落窪物語巻一に（おちくほの君のことを）君たちともいはす御かたとはましていはせ給ふへくもあらす云々とあるを安濃か詞には御かたとのみいへるを思ふへしされとこゝはたゝ后達といふに同し桐壺巻に御局は桐壺なりあまたの御かた〴〵を過させ給つゝひまなき御前わたりに云々と有こゝの同しさまなりほそ殿も其住せ給ふ所を喚にて意は御かたといはんも同しきを齋院にはさやうにきしめき給ふ御かた〴〵もさらになき事をいはんとて雖かく重ねいへるのみ○うちとけ　打解にてけの字清むへし旁に濁れるは非なり扨此詞はこゝのあまたの句を隔てたゝさやうの人のやすきまゝに云々へつゝく意なり○宮のやうとして　是より中宮御方のさまなりやうは様なりあは〳〵しは淡々にて前に見えたるあはめに同し○すこしよろしからんと思へはおほろけにて出ゐ侍らす大祇に物の心をもえてあまりに色めかすよろしき程の人も一通りにては此中宮の御前へはかたくなしきやうに思てえ出をらすといふ意なり爰にかたくなしきやうに思ひてととけるに當る詞はなけれとおのつからその意こもりてきこえたり○心はせのふるもなくやは　又物ことにとあるへき歟かくあるへきかとの思案もなくはちをも耻と思はぬ人はた思ひのまゝなる心はせをもみあらはさすといへるにてすへてはすこし物の心えありて物耻する人は心つかひの多き御前にてえ出をらす又物はちせ

す何のわいためもなき人はたえ出をらすといふ意なり人はたの詞心をつくへし○たゝさやうの人のやすき儘に　是又斎院のことなりさやうの人とはすこしよろしき人ととあらんかゝらんの名をもをしまぬ人をいふやすきまゝには上のうちとけよりつゝく意なり扨又こゝのすへての意をいはゝ此中宮の御前を物むつかしくかたくなしく思ひてえ出給ぬ二品（すこしよろしきことゝあらんかゝらんの名をもをしまぬ人となり）の人たちも貴人の出入もなき斎院あたりは何事も心安きまゝに立より男も女もいとみきしめく事もなくつれ〳〵なれはさやうの類の人打よりては此中宮の色めかしくあた〳〵しき事をあはめきらひ給ふをかたくなしなとも語りまた用意なきあたりなりなとも語あふめれは其故に中宮の御方の人々は埋たるやうによの人おもひなすと也○上臈中臈のほとそ云々

こは御許の自ら中宮の御方の事をいへるなり此御方にても上臈下臈の程は物ことあまりうちはに引入何事も上手めきてもてなし給ふはあまりよろしからすさやうにもてなし給ても中宮の御ために物の錺にもあらすいとよろしき事にもあらすみくるしとなりさうすを旁にさうそと有て僧都と註たるはひかことなり一本にさうすとあるそよろしきさうすは上手なり又物のかさりにはあらすを旁に物のかきりにはあらすとあるもわろし是又契一本によりて改

これらをかくえりて侍るやうなれど人はみなとりとりにてこよなうおとりまさる事も侍らすそのことよけれはかのことおくれなゞどぞ侍るめるかしされどわかうどだにおもりかならんとまめたち侍るめる世に見ぐるしうざれ侍らんもいとかたはならんたゞ大かたをいとかくなさけなからずもがなと見侍る

○その事よければ　群にそのことゝ。けれはとあるもあしからし扨この一條は御許の地より評したるにて隠たる處なし

されば宮のみこゝろあかぬ處なくらう〳〵しく心にくゝおはします物をあまり物づゝみせさせ給へる御心に何ともいひ出じいひ出たらんもうしろやすくはぢなきひとは世にかたきものとおぼしならひたりげに物のをりなゞどなか〳〵なる事しいでたるおくれたるにはおとりたるわざなりかしことに深きようい

なき人の處につけてわれはがほなるがなまひが〳〵しきことも物のをりにいひ出したりけるをまだいとをさなきほどにおはしましてよになうかたはなりときこしめしおぼししみにければたゞことなるとがなくてすぐすをたゞめやすき事におぼしたるみけしきにうちこめいたる人のむすめどもはみないとようかなひきこえさせたるほどにかくならひにけるとぞ心えて侍る

○よにかたきものと　諸本ともに世にかたはものあれとかたはといふ言爰にかなはすそは次のかたはの詞に混亂せしにて必かたき物とありしを誤れるなるへし今きと改つ○中々なることし出たるおくれたるにはおとりたるわさなりかし　けにといふより御許の詞なり論語に子曰過猶不及○よになうかたはなりと　諸本かたはなりとあれとこゝは必かたはとあるへき處なりかれ改つ帚木巻にその折につきなくめにもとまらぬなとをおしはからすよみ出たる中々心おくれて見ゆ云々とあるに心はへおなし○うちこめいたる　いはゐの誤にて籠居たるかとも思へと猶子めきたるなるへし源氏物語にもいと多き詞なり○かくならひにけるとぞ心得て侍る　御許も中宮のかやうの御心もちひを見習てやう〳〵にかやうに心えしとなり實にはさはあらさる事なれともわさとかく卑下して云なせる例の事なり

いまはやう〳〵をとなびさせ給まゝに世にあべきさま人の心のよきもあしきもすぎたるもおくれたるもみなごらんじしりて此宮わたりの事を殿上人もなにもめなれてことにをかしき事なしと思ひいふべかゝめりとみなしろしめいたりさりとて心にくゝもありはてずとりはづせばいとあはつけいことも出くるものから情なくひきいれたるかうしてもあらなんやとおぼしの給はすれど其ならひなほりがたく又いまやうのきんだちといふものたふるゝかたにてあるかぎりみなまめ人なり

○をとなひさせ給ふ　中宮か○此宮わたりのことを以下いふへかめりといふまては中宮の御詞なり○をかしき事なし　取分てめつらしきことなしといふ意なり○なにも　雜々もといはんがごとし○みなしろしめいたり　地のことはなり○いとあ

はつけい事も　是もあはめあは〳〵しに同し語にてしとやかならぬ意なり常夏巻に近江君の古疾事をとのあはつけさといへるも物いひのしとやかならぬ意なり○あらなんや　此やの字諸本なけれと必もれたるならんとおほしけれは補つあらなんとのみにては願意になりていたく云の意たかへり扨惣ての意はさりとてかやうに心にくゝ引入てのみも世にはありはてしされと又とりはつしては風流めきあた〳〵しくさはかしきこととも出こん物からかやうに情なきやうに引籠てのみはあらなんやかうのみはあるへきにあらすとはの給はすれと猶其癖なほりかたくと也○たふるゝかたにてこは倒にて一向(ヒタスラ)なる意かとも思ひしかと猶あらんとかにかくに考て今思ひえたるは先此たふるゝ方といふ詞は本たふるゝに立山といふ古き諺の有しか云馴もて行て省略てはたふるゝ方と云て其ことゝ聞えたる物なるへしそは蜻蛉日記巻三にかくいひつゝきたらすくれとも心のとくる夜なきにあれまさりつゝきてはけしきあしけれはたふるゝに立山と立歸る時もあり云々と有や物にみえたる初な

らん扨此諺の意は片方にて倒るゝにまた片方にては又立といへるやうの事にて今俗にころす神あれはたすくる神ありといふ諺其意によく叶へりされは此たふるゝに立山と立歸る時も有とは道綱母のよかれを恨みてあへしらひのよからねは兼家公少し腹立しさまにてよしこゝにはかくあしくのみもてなすとも又我をねもころにあしらふ女もありといふ意にて其諺を云すて給ひ立かへり給ひし時もありとなり（兼家公偏女に通ひ給ふを恨てもてなしの悪事かの書中折々見ゆ）此外にはかくつゝきたる詞なし次々の巻には皆たふるゝかたにとのみいへりそれは此言を略たる言なるか故に先其本語をかく巻の初に云たる物とおほし扨其次々のは唯たふるゝかたとのみ云てたふるゝに立山といふ意になり行しものにて（たふるゝかたのかたは則其本語なさしていふかたなり今俗にも常の諺に如此いふかたの詞例あり）世の諺と云物は末々には其略語にて本語の意のきこえてある事ためしいと多し雅語にすら本歌取れる歌なとは春やむかしのとのみいひて彼中將の歌一首は聞えたるを況や諺をや其たふるゝかたとのみいへるは同巻中の文（兼家公より今こんとおこせし處に）假にかいくもりてあめになりぬたふるゝかたなら

んかしと思ひ出てなかむるに暮行けしきなりいといたくふれはさはらんにもことわりなれと云々とあり此意は前のたふるゝに立山とて立かへられしは他女へゆかれしなれは今又此雨を障にかこつけて又たふるゝに立山の女の方へこそ行給はめと思ひ出てなかむるにとなりなかむるは其事の恨を心にくや〳〵と思ふ意にて暮行けしきに其今こんの言を違てはたして時うつり行日暮にさへなりぬとせちなる詞にて彌々立山の女のかたそと心にくやくや恨のせまるなりされはこそさはらんにもことわりなるほとの大雨なれと云々と述懐の詞はあるなりかく見る時そかの當リ文短かくていとせちに妙なり又巻下に物忌はつる夜しも門のおとすれはかうてなんかたうさしけりと物すれはたふるゝかたに立かへる音すと有も門を弁されはたふるゝに立山といふけしきにて他女の方へ行おとすといへるなり又螢巻に（夕霧君雲ヰ鴈を戀給へとゆるさゝる所に）あなかちになンどかゝつらひまとはゝたふるゝ方にゆるし給もしつへかめれとつらしとおもひしをり〳〵いかて人にもことわらせ奉らんと思ひおきし事わすれかたくて云々とあるも雲井雁の父の心によし夕霧は位も卑しけれどむすめの宿世にまかせてみん一向にあしきのみにも有はてしころす神あれは又たすくる神もあるものをと打まかせてゆるしもし給ふへけれといふ意なり然はこゝも今やうのあたあたしき若公達といふものはたふるゝに立山にて此女かすこしもてなしわろしとては彼女へうつりよし外にも女はあまたある物をといふやうにあた〳〵しきさまなりといふ意なりそのあたあたしきは則今やうの詞に當れりさてこのたふるゝかたてふ詞はかく聞時そこれもかれもつらぬきて其あたりの文意も匂ひあらはれたり蜻蛉日記解環には此句をマモナク立カヘル或ハシハシモトヽマラテ立カヘルなと説れつれと穩かにもあらす扨又因にいはん胡蝶巻に右大將のいとまめやかにこと〳〵しきさましたる人の戀の山にはくしのたふれまねひつへき事も云々とある戀の山にはくしのたふれも此たふるゝかたの諺にひかれて後に云出たる諺とおほしく其意は孔子の如き聖人すらこひの道にはことことしき行の道もくすをれてよし殺す神あれは助く

る神ある世なりと唯うちまかせて其行ひのかたはなほさりにのみなり行といへる意と聞えたり戀山は戀の道といはんも同しく山といふ事孔子のかたにも用なけれはたゝ戀の道にはともいふへき事なゑを山としもいへるは則是も立山の詞にひかれ出たる事と思はる何れにまれたふるゝといふ詞もたゝ倒にては不穩必かくのことき意ある事とおほしきなり　師説に戀の山には孔子のたふれ　胡蝶卷に　右大將(ヒゲクロ)のいとまめやかにこと〱しきさましたる人の戀の山にはくしのたふれまねひつへきけしきにうれへたるもさるかたにをかしとみくらへ給ふとあり按にひけくろの右大將の實方(シチハウ)なるを孔子に准へて孔子も盗跖にあひて恐れおくしてかへられしことく此大將も戀のみちには實方たらすつひに孔子の盗跖にあひしことく戀にはまけたるもをかしと彼大將の玉かつらへ遣しゝ艶書を見たまふなり宇治拾遺十五盗跖と孔子と問答の條に孔子又いふへきことも覺えすして坐をたちていそきいてゝ馬に乗給ふによくおくしけるにや轡をふたゝひとりはつし鐙をしきりにふみはつすこれを世の人孔子のたふれすといふなり(川本今昔物語同意なり)とあり孔子すら盗跖に云ふせられしを孔子のたふれと云てせまりては勝ことあたはさるをたとへてことわさにいひしものなるへしそを今はたふるゝに立山といふことゝ合てこの言を引出て戀の山といひ孔子のたふれといへるなるへし〇まめ人　此ことは帚木卷にあた事にもまめ事にも色々と云ることくまめはあだに對てもとはいさゝかも色めかす定しき實人といふ言なりさるを此詞好色の方にのみいふは其あた〱しく少も實ならぬを殊更にまめ人といへるにて詞と意とは裏表なり今詞にも如此事あり其裏をしもいへるはよのならひとして好色人はその女の前なとにてはことさらにつくろひ色めかす實たつ故にそれより云出たる言にて伊勢物語の天下の色好の同つらの昔男を實人といへる思合へしこゝもたふるゝ方とさへ云て又あるを限り不穩實人なりといひたるかをかしきなり

齋院なとやうの處にて月をも見花をもめつるひたふるのえんなることはおのづからもとめ思ひてもいふらん朝夕たちまじりゆかしげなきわたりにたゞこ

とをも聞よくうちいひもしはをかしきことをもいひかけられていらへはぢなからずすべき人なんよにかたくなりにたるとぞ人々はいひ侍るめるみづからえ見侍らぬ事なればえしらずかしかならず人のたちよりはかなきいらへをせんからににくい事をひきいでんぞあやしきいとようさでもありぬべき事なり是を人の心ありがたしとはいふに侍めりなどかかならずしもおもにくゝひきいりたらんがかしこからん又などてひたゝけてさまよひさし出べきぞよきほとにをりくゝのありさまにしたがひてもちゐんことのいとかたきなるべし

○ひたふるのえんなる事は　ひたふるは書紀に頓得(垂仁御卷)頓絶(履仲御卷)なとの字を讀て今俗一向によそ見もせす片一(カタイツ)そうになと云意なりえんなるは則月花をめつる風流むきの事をいふ○おのつからもとめ思ても云らん　さやうの物さひしき齋院あたりは月花につけてのえんなる事はおのつからも然りまたもとめえり出ても自慢はいふらんとなり○ゆかしけなきわたり　是も齋院の御かたのいとましきこともなきをいふ○たゝこと　好色の方ならぬ尋常の贈答をいふ○きゝよく　本ともにきゝよせとあるを一本のかきいれにせはくの誤歟と有けにさあるへき事とおほしけれは今はしはらくくとあらためたり○みつからえ侍らぬことなれは　例の卑下の詞なり契本にはみつからは見侍らぬ事なればとあり○にくい事を引出んそあやしき　人の返事なとせんにもことくゝしき古事なといひ出るをにくめるなりかの清少納言か行成卿の返事に孟嘗君か古事を引出たるなとやうの事歟に御許の心にはいたくにくめる處なり猶次の卷かの君の條にいふへし○又なとてひたゝけて云々　さやうにものしりかほにさし出口すへき事かは又おもにくゝ引入てあまり言少に打籠すきたらんもなにかかしこからんといへるなり須磨卷に人しけくひたゝけたらんすまひもいとほひなかるへし云々

まづは宮の大夫まゐり給て啓せさせ給へき事ありける折にいとあへかにこめい給ふ上﨟たちは對面し給ふことかたし又あひても何事をかはかくゝしくの給べくもみえず詞のたるまじきにもあらず心のおよぶまじきにも侍らねどつゝましはづかしとおもふにひ

がこともせらるゝをあいなしすべてきかれじとほのかなるけはひをもみえしほかひとはさぞ侍らざゝなるかゝるまじらひになりぬればこよなきあて人もみなよにしたがふなるをたゞ姫君ながらのもてなしにぞみな物し給ふ下﨟の出あふを大納言心よからずと思ひ給たゞなればさるべき人々さとにまかで局なるもわりなきいとまにさはるをり〳〵はたいめんする人なくてまかでたまふ時も侍なり

○まつは　まつ其事をいふはと云ほとの發語なり

此一條は前段のなとか必しもおもにくゝ引入たらんかかしこからんといふ何の末なり○啓せさせたまふへき事云々　中宮へ啓せさせ給ふへき事をとりつく人のさたなり○きかれしと　こゝにて何をきりてこゝろうへし此との下におほすゆゑになりなといふ詞を加へてこゝろうへし○ほのかなるけはひをも見えし外の人は　兼てほのかにも對面ありし外々の人にはさやうのこともあらさるへし大夫齊信卿にこそはいたう見えにくけにしたまふとなりほかの人は世人にはの意に聞へし侍らさなるを旁に侍らさるかとあるもわろからすされと一本また契本もかくのことし○かゝるまじらひ云々　宮大夫のことき上﨟對面のことになりぬれはなり本ともにはましらひなりぬれはとあれと一本のかき入にひの下ににの一字おちたる歟とある識によろし必にの字なくてはきこえす故にこゝも今補へり○よにしたかふなるを　卷三にこの詞あり考合てさとるへし○大納言　是も齊信卿なり旁に道綱卿と註したるはいかゝ齊信卿をいへるところなれはこゝにふと道綱のことをゆくりなく云いつへき事にもあらす中宮大夫は職源抄に華族納言等兼之と見えて納言の兼官なれは齊信卿なること疑なし

其外の上達部宮の御かたに參りなれ物をも啓せさせ給はおの〳〵心よせの人おのづからとり〳〵にほのしりつゝその人ないをりはすさましげにおもひて立出る人々のことにふれつゝ此宮わたりの事うもれたりなどいふべかめるもことわりに侍る齋院わたりの人もこれをおとしめおもふなるべしさりとてわがかたのみところあるほかの人はめも見しらじ物をもきゝとゞめじと思ひあなづらんぞ又わりなきすべて

人をもどく方はやすくわが心をもちゐんかたはかたかべいわざをさはおもはでまづわれさかしに人をなきになしよをそしるほどにこゝろのきはのみこそみえあらはるめれいとごらんぜさせまほしう侍りしふみかきかな人のかくしおきたりけるをぬすみてみそかにみせてとりかへしはへりにしかはねたうこそ

○其外の上達部　爰にかくことわけていへるにても前の大納言は齊信卿なるをしるべし○みところある諸本ありとあれと契本にかくあるそまされる○心よせの人　心よせのこと既にいへり○すへて人をもとくかたは云々此あたりは女の教のみにかきらす惣てにわたるへしよく心をとめて見へし○わか心をもちゐんかたは　諸本もちゐんことはとあり今は新釋惣考にひかれたるによりて改

紫式部日記解巻五

飛騨國高山民　足立稻直著

和泉式部といふ人こそおもしろうかきかはしけれされどいづみはけしからぬかたこそあれうちとけてふみはしりかきたるに其かたのさえある人はかないことはのにほひも見え侍るめり歌はいとをかしきこと物おぼえうたのことわり誠のうたよみざまにこそ侍らざめれくちにまかせたることゞもにかならずをかしき一ふしのめにとまるよみそへ侍りそれだに人のよみたらんうたなんじことわりゐたらんはいでやさまでこゝろはえじ口にいと歌のよまるゝなめりとぞ見えたるすぢに侍かしはづかしげの歌よみやとはおぼえ侍らず

○和泉式部　父大江雅致母越前守保衡女也和泉守橘ノ道貞の妻なりし故に和泉式部と號爰のさまをもておもふにもしとやかに深く思ひかまへて爲事(ナス)よりははしり前の才ある人と見えてかの人の日記なとはことにうた物語にておもしろし續世繼御子達巻ふし柴條に小大進の事を云る處に口とく歌な

とをかしくよみて和泉式部なといひし物のやうにそ侍しとかく後々のためしにさへ引出たり又女の小式部内侍もかくや有けん彼定頼によみかけたる大江山いくのゝ道の口疾さよ抑此條詞にかくれたる處なし

丹波のかみの北のかたをば宮殿などのわたりにはまさひら衛門とぞいひ侍ることにやむごとなきほどならねどまことにゆゑ〳〵しく歌よみとてよろづのことにつけてよみちらさねど聞えたるかぎりははかなきをりふしのこともそれこそはづかしきくちつきに侍れ

〇丹波守の北方　丹波守は大江匡衡にて北方は赤染衛門也さるを旁に丹波守を高階朝臣業遠とし北方を江侍従とせられたるは僻ことなり抑赤染衛門は大隅守赤染時用女にて時用は右衛門尉なりし故にしかよへり或書に鷹司殿の女房なりとあり〇宮殿　宮は中宮職は土御門をいふ抑此一段縣居翁の初學にひかれたるとは文の異同ありかれも一本なるへけれはいまこゝにも引出〇なとのわたりにはをわたりなそにて〇ほとならねとを　ほとならはと〇まことにゆゑ〳〵しく歌よみとてを　まことにゆゑ〳〵しき歌よみにてとあり抑此まことには契旁ともにまこともとあれと今は群にもかく有によりて改たり

やゝもをば腰はなれぬはかりをれかゝりたる歌をよみいでえもいはぬよしばみごとしてもわれかしこげに思ひたる人にくくもいとほしくもおぼえ侍るわざなり

〇腰はなれぬはかり　腰をれの意也〇よみいて　新釋惣考にひかれたるにはよみいてゝとあり〇よしはみこと　さもなき事をよし有けにかまへみするをいふ〇かしこけに　異本にかく有其外の本ともはけの一字なし抑此條は次の清少納言の事を書出へき發語也

清少納言こそしたりがほにいみじう侍ける人さばかりさかしだちまなかきちらして侍るほどもよく見ればまだいとたへぬ事多かりかく人にことならんと思ひこのめる人はかならす見おとりし行すゑうたてのみ侍ればえんになりぬる人はいとすごうすゞろなるをりも物のあはれにすゝみをかしき事も見すぐさぬ

ほどにおのづからさるまじくあだなるさまにもなる
に侍べし其あだになりぬる人のはていかでかはよく
侍らんかくかた〲につけてひとふしの思ひいでと
るべき事なくてすぐし侍ぬる人のことにゆくすゑの
たのみもなきこそなくさめおもふかたたに侍らねど
心すごうもてなす身ぞとたに思ひ侍らじ
○清少納言　清原元輔女榮花物語とりへの丶巻長保二年宮耀殿の時めきたまふにおされて淑景舍（定子の御妹也）内まゐりも絕たる所に云く淑景舍參
り給ふ事かたし內わたりには臨時祭などうちつゝ
きいまめかしければそれにつけても昔忘れぬさへ
き公達など參りつゝ五節の處々の有さまなといひ
かたるにつけても清少納言など出あひてさら〲
わかき人なとにもまさりてをかしうほこりかなる
けはひを猶すてかたくおほえて二三人つゝつれて
そ常に參る云々とあるを見れは定子に仕へし後に
此淑景舍には宮仕したるなるべし枕草子に云るこ
とともを見るに此御許者は同時なから年齡にては
姉也しなるべし○まなかきちらして侍るほとも
此少納言と御許とは心もちゐ裏表の違ありて先御
許は此下にも一といふ文字をたによまぬかほをし

云々又物語このみよしめき歌がちに人を人とも思
はすねたけに見おとさん物となんみな人いひ思ひ
つゝにくみしを見るにはあやしきまておいらかに
こと人かとなんおほゆるとそみないひ侍る云々な
と見えてかく才高くいみしく物からもてなしは唯
老らかにつゆ物しりめかす人に對てもはちらふさ
まにのみ言すくなにめゝすくうちこめ居給ふさま
なるを彼少納言君は何事にもよしめき歌がちには
かなき折ふしのいらへなとにもかの函谷關の如き
古事ともを引出て物知りかほによしめきあたあた
しき方の本性にてかの自らの草子にも自讃のみ多
く人をおとしめわれさかしにふるまひ給ふさまお
のつ見もて行まゝにしるきをやさるを彼草子にく
らへては源氏物語は卷の數も多く又おのかうへ
の事ならぬは眞字のふることなともいと多かるへ
き物をそれもたま〲にのみいさゝか見えて彼草
子にくらへては三つか一にもたらずかしそれは又
文の表にこそさかしらめき云出給はね裏には皆其
心かまへありて書出られし事にて中々に匂ひも深
くまた心には知りたる事をも知らぬ顏をし一とい

ふ文字をたにえよまぬ顔をし給ふ心用ゐ身の高ふらぬもてなしも誠におしはからるゝわさなりけり猶かの物語此日記と彼少納言の君の草子とをくらへ見てこよなきけちめはよくしらるへき事也おのれかく云はとて少納言君をむげにいひそしるにはあらすかれもまことに女にてはいみしきともいみしき人なりかし○またいとたへぬ事　たへは堪にて何にても堪能なる人をたへたる人といふに同し契本には文いとたらぬことゝあれとよろしとも聞えす○行すゑうたてのみ侍れは　うたては物の餘りなるまで重り又本より有し事の愈進やうの意を本にて末には俗に笑止といふ意につかふも右の意を本として轉れるなり爰もかやうに人に異ならんとおもひかまへてしたりかほに風流めく人ははやく見おとりしあかれて畢竟は笑止なるさまになり行となり○えんになりぬる人は風流めき物好になりぬる人はといへるにてこの人凡の人をさす○すゝろなるをりも　既に巻三にいへる如く爰もチョツとしたあたけことのをりふしもといふ意なり○物の哀にすゝみをかしき事も見すくさぬほとに

帚木巻になに心なき空のけしきもたゝ見る人からえんにもすごくも見ゆるなりけり○あたなるさまにもなるに侍へし胡蝶巻にすへて女の物つゝみせす心のまゝに物の哀もしりかほつくりをかしき事をも見しらんなん其つもりあちきなかるへき云々扨こゝの意は風流めき物の哀しりかほにもてなす人はチョツとしたあたけ事の折ふしも哀知りかほに風流めくまゝにいつとなくつひにはあた〳〵しき方になるへしとなり○かくかた〳〵につけて　かた〳〵はあちこちといふ意にて畢竟一方のとりへたになくて過す人のと云意也

その心なほうせぬにや物思ひまさる秋の夜もはしに出ゐてなかめ侍ればいとゞ月やいにしへをめでけんと見えたる有さまをもよほすやうに侍るべし世の人のいむといひ侍るとがをもかならずわたり侍なんとはゞかられてすこしおくにひき入てぞさすがに心の中にはつきせずおもひつゞけられ侍る風のすゞしき夕ぐれきゝよからぬひとりごとをかきならしてはなげきくはゝると聞しる人やあらんとゆゝしくなどおぼえ侍るこそをこにも哀にも侍けれ

○その心なほうせぬにや　前段清少納言のわれさかしの心もちひのよからぬ事を其まヽ又御許の自のうへに受て書なせる也此段はわけておもしろき書さまなり心をつけて見へし○物思ひまさる秋の夜もはしに出ゐてなかめ侍れは　此こゝの句は伊勢物語第四段にて書り先はしに出ゐてなかめ侍れは彼あはらなる板しきに月のかたふくまてふせりてといふ歌をかく書なせるなり扨かれは春の夜の事なれは爰は秋の夜もと書たりもの字心をつくへしもしさやうに聞されはもの字不用にてたゝ秋の夜とのみにて事たる處也侍れの二字諸本に見えねと一本の書入にも此二字落せるならん歟とあり必漏たるなるへけれは補へり○いとゝ月やいにしへをめてけんと見えたる有さまをもよほすやうに侍へし　いとゝは物思ひまさるの詞を受て月を見てはいとゝもの思ひのまさる也月やいにしへをめてけんはかの月やあらぬ春や昔のはるならぬ我身ひとつはもとの身にして（此歌は鈴屋大人の遠鏡に委しく見えて言長ければこゝにははぶきぬ）といふ歌にて此歌は其御代にもみな人の耳にきゝなれて知らぬ人もなかるへけれはわさとかくおほめかしたるやうに書たるにて月やのやの一字にて此歌なる事よく聞えたり此やの字ぞ此歌の大事の言には有けるかれは去年を思ひ出てよみたる歌なるをこゝにては過去（スギコ）し身の上の事を思ひつゝくる事にとりなして月やいにしへをめてけんといひ又かの物語の此歌よみける時の有様を催すやう也といへる也其ありさまとはかのうちなきて去年を思ひ戀せし事なるをそれを爰にてはたゝ往事の物思ひを催す意にとりなせり

○世の人の忌といひ侍るとかをも必わたり侍なん　月を見れは往事を思出て物思ひのます故に忌と云諺の有しなり竹取物語にかくや姫月のおもしろう出たるを見て常よりも物思ひたるさまなりある人の月のかほ見るはいむことゝせいしけれともともすれは人まにも月をみてはいみしくなき給ふ云々小町集に中絶たる男の忍ひてかくれ立て見るに月のいと哀なるを見すてゝねんこそくちをしけれとすのこになかめけれは男いむなる物をといふきかぬさまにて　ひとりねのわひしきまゝにおきゐつゝ月を哀といみそかねつるなと見えて其もとは

白氏文集に莫レ對ニ月明ニ思フ往事ヲ損ニ君顔色ヲ一と有そ事の出處なるへしわたりなれは世の人の忌事をもえのかれすそむきて必定其咎に當らんといふ意也扨前のありさまを催すといへるは往事の物思ひを催すやうにといへるなることこの詞にていよ〳〵明らかに知らるゝなり○風のすゝしき夕暮　前の秋の夜といへるとこの詞とにて寛弘六年の秋のさまをわさとはいはすなにとなくにほはせたるにてたゝ春秋のついてをしらせたる日記書の所作なり○きゝよからぬひとり琴をかきならして是よりは又詞に裏と表との意あり先秋の夕暮つれ〳〵の手すさみに獨居て琴を弾るにいへるを表にて裏には則日記を不レ問かたりの獨言に書つらねたる事を云るなりきゝよからぬと云意も表にはよくもえひかさる琴をと卑下の詞にいひて裏にはかやうに當時の人ことをあしくいひたるは口さかなく聞にくき言をといふ意を聞せたり前の其心なほうせぬにやといふ詞此あたりへひゝけり扨は獨琴に獨言を兼（蜻蛉日記卷六におなじ事なかきならすつまおとはちの音も人にはまさり云々と事に琴をかねたり）撥鳴に書を兼たり或人云前の風のすゝしき又秋の夜云々といふに寛弘六年の秋の事をほのめかしたる也と説てこゝを此文書ることにいへるは然らは此記は寛弘六年の秋書るとせんか如何答しからす此記は既にもいへる如く寛弘七年春書るなるへし爰に秋のさまと説るはたゝ此日記文の時節の次手をうしなはぬ書さまのみをとけるにて其故に表にしかとは書出さる也猶いはゝ唯四季の次第を匂はせたりといふ程の事也猶さやうに疑はしく思ひ給はゝ寛弘六年の秋ならすとも何の年の秋の事になりとも聞なし給へさりとて文の意にかゝはる事には非かしされとおのれは春秋のついてをうしなはぬ文の匂ひはたらきをいへるのみ也

○なけきくははると聞しる人やあらん　古今雜下よし峰のむねさたのうたにならへまかりける時にあれたる家に女の琴ひきけるを聞て讀ていれたりける　侘人の住へき宿と見るなへになけきくははる琴の音そする　も有にて意はよくもえひかさる聞にくき獨琴をも誰かまた侘人の琴のねになけきくははるとまそに聞しる人やあらんとゆゝしく覺ゆといふを表にてうらにはかやうによからぬ聞にく

き言ともを心の儘に書出たるを誰か又同心にもきゝしらんかと云意也此引歌はたゞ聞しる人と云言を示出んのみのことにてなけきくははるの詞は表の琴の方にのみつきて裏の意にはかゝはる事なし○をこにも　をこかましに同語也枕草紙卷七に翁をはいかにをこなりとわらひ給らん云々扨此あたりの文は此記中何くはあれととりわけおもしろくいと〳〵匂ひふかくて何たひ打かへしつゝ見てもあかぬ心ちのみそせらるゝ

さるはあやしうくろみすゝけたる曹司にさうのことわごんしらべながら心にいりて雨のふるひことぢたふせなゞどもいひ侍らぬまゝにちりつもりてよせたてたりし厨子とはしらのはざまにくびさしいれつゝびはもひたりみぎにたて侍り大きなるづしひとよろひにひまもなくつみて侍るものひとつにはふる歌ものがたりのえもいはずむしのすになりにたるむつかしくはひちればあけて見る人も侍らず

○さるは　前段ひとりことをかきならしてといふをうけたり○すゝけたる　古事記に凝烟和名鈔唐韻云炲煤灰集屋也和名須々○さうの琴わこんしらへなから　箏琴と和琴とを一度に調へ合する事には非箏琴や和琴やその意にて箏琴も調へたる時のまゝに柱も倒さす和琴も調へたるまゝにて寄立たりといふ意也論には和琴の二字なしそれもさる事ながら琵琶も左右に立侍りといふに對て見れは和琴の二字ある方まされり扨しらへながらよせたてたりしとつゝく意なり○心にいりて　何にても懇に心にしみてするを云て今俗身にいれてするといふいれても同し後撰雜部に逢しりて侍ける女心にもいれぬさまに侍けれは云々なとも見えたり雨のふるひ箏琴和琴心に入てしらべなからといふ意也雨のふる日のゝ一字論文新釋惣考によりて補○くひさしいれつゝ　紫家七論に此句を引て云く式部が學窓のつしと柱との間にかほさし入て眞字文よみし有さま云々といはれたるはひかこと也くひさしいれは琴の頭をさし入にて御許のかほをさし入たるには非扨琴にくひといへる言未見あたらねと書記神功御卷に置二琴頭尾一而請曰云々又常にも琴の上の方を龍頭といひなからを龍腹下の方を龍尾ともいへは龍頭をたゝくひともなとかいはさらん

○なりにたる　旁になりわたると誤り其外の本ともみな如此○むつかしくはひちれは　和名鈔に本草云衣魚一名白魚蟫音淫一音覃和名之美 爾雅注云一名蛃魚上音柄衣書中自生虫也白氏文集卷十四に紅牋白紙兩二束半是君詩半是書經年不レ展緣二身病一今日開看生二蠹魚一とある似たる事也

かたつかたに書どもわざとおきかさねし人も侍らずなりにし後手ふるゝ人もことになしそれらをつれつれせめてあまりぬる時ひとつふたつひき出て見侍るを女房あつまりておまへはかくおはすれば御さいはひはすくなきなりなでふ女かまんなぶみはよむ昔は經よむをだに人はせいしきとしりうごちいふをきゝ侍るにも物いみける人の行するいのち長かるめるよしとも見えぬためしなりといはまほしく侍れどおもひぐまなきやうなり

○おきかさねし人　夫宣孝をいふ宣孝は長保四年四月四日に卒去○せめて　迫てなり○御前はかくおはすれは御幸はすくなき也　旁にはかくおはすれどゝあるてふと思ふには理もとの方可然思はるれと次に引る蜻蛉日記の文のさま又繪合卷源氏君の物語にいはく院のの給はせしやう才學といふもの世にいとおもくする物なれはにやあらんいたうすゝみぬる人のいのちさいはひとならひぬるはいとかたき物になんしなたかくうまれさらても人におとるましきほとにてあなかちに此道なふかくならひそといさめさせ給て云々と書る御許の心をもおしはかるには○とある方さこれりそは其御代の頃には女房達まで殊に學問に好み進める聞えあれは女にて學問なとにいと深うすゝむ人は幸もをとり又命も短といふ流言の有けるなるべしそれを學問する女は幸もなく命も短きよしにしかと決定してかくおはすれはとことさらにいひたる物也又どゝする時は學問なとすれは命も長く幸も多かるへきをいかなる故にか御前は幸のすくなきはと女房達の多く語ることになりて制することにはならすとまれかくまれ契本又論にひかれたるにも群にもみ○なはとあるぞよろしき○むかしは經よむをたに人はせいしき　蜻蛉日記卷中にたゝかはらけに香うちもりて脇息の上におきてやかておしかゝりて佛を念し奉る其心はへたゝきはめてさいはひなかり

ける身也中略哀今やうは女もすゝひきさけ經ひきさ
けぬなと聞し時あまゝさりかほなさる物ぞやもめ
にはなるてふなともときし心はいつちか行けん云
々○しりうこちいふを　しりうことゝいふに同し
りうことも後動言(シリウゴキコト)にて今俗陰言(カゲゴト)といふに心はへよ
く似たり陰言も言の意は人の噂を其人の聞ぬ物陰
にて云事なから皆惡評(アシキサタ)をすることのみに云て陰な
からも善事(ヨキコト)を云には用ゐぬ詞なるか如し
○物いみける人の行末命長かるめるよしとも見え
ぬためしなり　宇治拾遺に似たる事有卷二に厚行
となりの死人を我家より出す處に厚行か妻子とも
我家の門より隣の死人出す人やある有ましき事な
りといひあへり厚行ひかことないひそたゝ厚行が
せんやうにまかせて見給へ物いみしくすゝくいむ
やつは命もみちかくはか〳〵しき事なし唯ものい
まぬは命も長く子孫も榮ゆいたく物いみくすしき
は人といはす云々○おもひくまなきやう也　此詞
は玉あられに俗に思ひやりのないといふ意なりと
有

ことはたさもありよろづのこと人によりてこと〳〵
なりほこりかにきら〳〵しく心ちよげに見ゆる人あ
りよろづつれ〳〵なる人のまぎるゝ事なきまゝにふ
るき反故(ホンゴ)ひきさがしおこなひがちにくちひゞらかし
ずゝのおとたかきなゞど心づきなく見ゆるわざなり
と思ひ給へて心にまかせつべき事をさへわがつかふ
人のめにはばかりこゝろにつゝむまして人の中にま
じりてはいはまほしきことも侍れどいでやとおもほ
えこゝろうましき人にはいひてやくなかるへし物も
ときうちし我はと思へる人のまへにてはうるさけれ
はものいふ事もものうく侍り
○ことはたさもあり　前のしりうこちいへる言を
さしてそれほとの事はたさやうに有といへるなり
○ほこりかに云々　是より人有といふまて一人の
さま也よろづ云々よりは又一人のさまなり○おこ
なひかちに　此句の上に又といふことを加へて聞
へし是より下又一人のさまなれは也○口ひゝらか
し　帚木卷に馬頭ものさためのはかせになりてく
ちひゝらきゐたり云々玉小櫛にひゝらきは俗にく
ちをたゝきゐたりといふに同しと見えたり○心つ
きなく見ゆるわざ也　常夏卷に内府の雲井の雁に

示たまふ詞に女は身をつねに心つかひしてまもりたらんなんよかるへき心やすくうちすてたるさまにもてなしたるはしななきわさなりさりとていとさかしく身かためて不動のたらによみゐんつくりてゐたらんもにくしうつゝの人にもあまりけとほく物へたてかましきなとけたかきやうとても人にくゝ心うつくしうはあらぬわさ也云々〇いひてやくなかるべし　やくは益なり〇物うく侍り　物いふ事のふしよう〳〵に覚ゆるにて何もいひともなきといふ意也

ことにいとしも物のかた〳〵えたる人はかたしたゞわが心のたてたるすちをとらへて人をばなきになすなゞめりそれ心より外のわがおもかげをはづと見れどえさゝずさしむかひまじりゐたる事だにありしか〳〵さへもとかれしかなとはづかしきにはあらねどむつかしと思ひてぼけしれたる人にいとゞなりはて侍ればかうはおしはからざりきいとえんにはづかしく人に見えにくげにそば〳〵しきさまして物がたりこのみよしめき歌がちに人をひとゝも思はずねたげに見おとさん物となん皆人々いひ思ひつゝにくみしをみるにはあやしきまでおいいかにことゝ人かとなんおぼゆるとぞみないひ侍るにはづかしく人にかうおいそげ物とのみ見おとされにけりとはおもひ侍れどたゞこれぞ我心とならひもてなし侍るありさま宮の御前もいとうちとけては見えじとなん思ひしかどひとよりけにむつましうなりにたることそとの給はするをり〳〵侍り

〇たてたるすちを　旁にたてつると有新釈惣考に如此

〇それ心より外のわかおもかけをはつと見れと　古今集戀四に伊勢夢にたに見ゆとはみえし朝な朝なわかおもかけにはつる身なればと有歌にてこゝは下句の詞をとりて我身の衰へたるを恥たるやうにかきなしたれと意は上ノ句の意にてかやうの物もときうちし我はと思ひさがしかる人には夢にたに見えしとおもへと折にふれてはえさゝす對面する時もありと云意なり〇もとかれしかなと　旁にもとかれかなしとに誤れり論また新釈等にひかれたるにもかなの二字なく異本にもなけれといまは群によりて改〇ほけしれ　諸本ほけられとあれと

一本の書入にもほけしれかと有けにさ有へき事也此詞は槇柱巻にも見えてしれは愚者(シレモノ)のしれに同しかるへし○かうはおしはからさりき云々　是より以下御許に初て對面せし人の詞也○人に見えにくけに　見えは介見也俗にまみゆると云見ゆるに同しく人にこちらより介見にて出逢を云枕草子巻三に行成卿の詞になにかはつる見えなともせよかし云々宇治拾遺巻三に平仲といふ色このみにて宮仕人はさらなり人の娘なとしのひて見ぬはなかりけりと有みぬも逢はぬといはんか如し扨意はとふらふ人にもやすく出逢事もなく高々しく學問自慢にそは〳〵しくもてなさん物といひ思ひしをと云意なり○そは〳〵しきさまして　契沖の拾遺鈔に云くうつほ物語菊宴神歌にうはそくかおこなふ山の椎が本あなそは〳〵しとこにしあらねは柧棱を文選にそは〳〵しとよめり和名鈔唐韻云柧棱二音和名智波之木木名也又四方木也かとかとしけれは物にさわる心也そは〳〵するなと常に云詞也そはの木もそはそはしき木にて名付るか蕎麥をそはむきと云もかと有故也胡瓜をそは瓜と云もふくれ出た物多けれはなるべし側とは暗推の字なから末にては叶意あるべしと有此説にていとよく聞えたり一本にうゐうゐしくと有はよろしともきこえす○物かたりこのみ　こは物語書のことにはあらす口つから語をいへり○みるにはあやしきまて老らかに　今昔物語に云く式部か有さまかゝるめてたき事とも源氏物語ないへり作りいたしたる人ともおほえす裳からきぬきたるすかたやうたいもてなしなといとあやしう心もどなけにてそ侍ける云々とあるはおのつから突にかなへりまたこゝによりて書るにもあるへし○おいそけ物とのみ見おとされにけりとは思ひ侍れとおのかもてなしを自慢らしくは云はてすかやうに立歸り恥たるさまに書なせる用意いと深き事にておもしろしおいそけものを契本にたいらけと誤れりのみの二字論によりて補けりも旁又群にはけるとあれと新釋惣考また契本によれり○宮の御前も　句をへたてゝの給はすと云へつゝく意也○いとうちとけてはみえしと云々玉葉集に御許歌に門の前をとほるとてうちとけたるさまを見んと人の申て侍けれは返事にかきてつかはしけるなほさりの

たよりにとはん一ことに打とけてしも見えしとそ思ふとあり○なりにたるこそ　論にの字なきはわろし前にむしのすになりにたる又下に心もとまらすなりにて侍れはなと有例にてある方まされりくせ〳〵しくやさしだちはぢられ奉る人にもそばめだてられて侍らましさまようすべてひとはおいらかにすこし心おきてのどやかにおちゐぬるをもとゝしてこそゆゑもよしもをかしくうしろやすけれもしは色めかしくあだ〳〵しけれど本性の人がらくせなくかたはらのため見えにくきさませずだになりぬればにくうは侍るまじ我はとくすしくくちもちけしきこと〳〵しくなりぬる人は立居につけてわれよういせらるゝ程に其人にはめとゞまるめおしとゞめつればかならず物をいふ詞の中にもきてゐるふるまひ立ていくうしろでにもかならずくせは見つけらるゝわざに侍り

○はぢられは中宮の御心にも恥かましく氣遣におほしめすほとにおもはせ奉るもてなしの人達にもといふ意也○そはめたてられて侍らまし　そはめも前の契沖の說のそは〳〵しに同く今俗いかる時のわさにめかどを立と云に同詞也拟意は御許の中宮には外々の人より勝に睦しく打とけたる方になり行を又外のやさしたち曲々しく中宮にも恥られ奉る人々にはめかどを立られ慓まれ人と也俗に傍輩いせみといへる心はへなり○くすしくくちもち　くすしくは奇字をよめりくちもちは旁に口持と註せるはいかなる意をいふにか耳遠く聞なれぬ詞也契本にはくひもちと有なとを思ふにたかひに傳寫の誤あるへしもしはくちはこゝろの三字を寫誤り拟ちの下にひの字なとを落せるにてこゝろもちひにもあらんか可考○きてゐるふるまひ　此まゝにても聞えぬにはあらねと按に此句の上にもの一字を落せるにやそは上のことはの中にもの○もの字に重りたるやうに思て後人のさかしらに略けるにてかやうの誤他書にも例多きこと也拟かく見る時は裳着居ふるまひといへるにて立ていくうしろ手と云言にもよくつゝくやう也猶可考○立ていくうしろて　うしろては後さま又うしろつきなとの意也

物いひすこしうちあはすなりぬる人とひとのうへう

ちおとしめつる人とはましてみゝもめもたてらるゝ
わざにこそ侍べけれひとのくせなきかぎりはいかで
はかなきことのはをもきこえじとつゝみなげのなさ
けつくらまほしう侍り人すゝみてにくいことしいで
つるはわろき事をあやまちたらんもいひわらはんに
はゞかりなうおぼえ侍りいと心よからん人は我をに
くむともわれはなほ人を思ひうしろむべけれどいと
さしもえあらずじひ深うおはする佛だに三寶をそし
るつみはあさしとやはとき給なるまいてかばかりに
にごりふかき世の人は猶つらき人はつらかりぬべし
それをわれまさりていはんといみじき言の葉をいひ
つけむかひゐてけしきあしうまもりかはすともさは
あらずもてかくしうはべはなだらかなるとのけちめ
ぞ心の程は見え侍るかし

○きこえしと　きこえましとの誤歟本の儘にては
聞えかたし扨ましとする時はくせなき人々にはい
かてすこしの詞をもいひかはしたくつゝみなさそ
うの情をもかはしたきといふ意なり○しいてつる
は　しいてつるはいひわらはんにはゝかりなう覺
え侍りとつゝく意也○三寶をそしるつみはあさし

とやはとき給なる　三寶は本は佛法僧の三の事な
から代々の詔詞にもたゝ佛と云意にの給へり靈異
記に慈惠僧正の起請文の中に今對二三寶一披二陳此
事一なとも有又末の物にては手習卷に三寶のいと
かしこくほめ給ことなり大鏡卷六に地獄のかなへ
のふたにかしらうちあてゝ三寶の御名思ひ出けん
人のやうなる事なりや云々宇治拾遺卷三にめしか
へさすはなか〳〵三寶に別れ奉らん云々又よの末
なれとも三寶おはしましけり云々又艮の方に向ひ
て我山の三寶たすけ給へと手をすりて云々なとみ
なたゝ佛といふこと也扨意は人の進み出て爲事に
過出來たらん時なとはそれをそしりわらはんに憚
る事はあらし扨又いと心善き人は人の我をにくゝ
そしるとも我は人をうしろみいたはるへけれとそ
れもさやうのみにもあらすかの人をいたはり助ん
の願ありて慈悲深き佛たに自の立たる筋をそしる
罪は淺しとやは說給ふさやうには說給はぬ物をま
して況んや此世の人にては我をにくむ人は我又其
人を必にくゝ思ふへき理そと云意也（此三寶をそしる罪の深き事經文を引に及ざるべし）にごりふかき世とは三寶といふにつきて云

るのみにてたゞ此世の人はと云事也あさしとやはとき給ふなるを契本あさましとやはとい給ふなると誤れり又つらき人はつらかりぬへしを同書につらき人はにくからぬへしと有後撰戀一につらからはおなし心につらからんつれなき人をこひんともせす○まもりかはすとも　是も何を隔てまもりかはすとも心のほとは見え侍かしとつゝく意にて爰の意は心には恨なからさあらぬ躰にもてかくし其人にさしむかひてはけしきあしう見かはすなから詞にのみはさもなき躰にいひつくろふとも其心のほとは見え又詞にもいひつくろはてたゞなたらかに恨なけにつくらふ人も又必其心底はの程は見ゆるといふ意なり

左衛門内侍といふ人侍りあやしうすゞろによからず思ひけるもえしり侍らぬ心うきしりうごとのおほう聞え侍しうちのうへの源氏の物かたり人によませ給つゝきこしめしけるに此人は日本紀をこそよみたる〔給〕べけれまことにざえあるべしとの給はせけるをふとおしはかりにいみじうなん才があると殿上人なゞどにいひちらして日本紀の御局とぞつけたりけるいと

をかしくぞ侍る此ふるさとの女の前にてだにつゝみ侍るものをさる處にてざそさがしいで侍らんよ○すゝろによからす思ひけるもえしり侍らぬ　チヨツとした折ふしのあたけことにつけても御許をよからす思ひけるにや其ことはえ知らねとあやしき後勅書の陰言を聞侍りと云るにて例の自を卑下しはちらひたるやう書つゝ下には源氏物語を稱美せられしことの披露なり○うちのうへ　一條天皇なり○日本紀をこそよみたまへけれ　給といふ言天皇の大御言にはいかゝ先御許の才學は云もさらにて此天皇源氏物語を人によませて聞しめしてはやく日本紀に書る物と知らせ給たる大御心のほと誠にいみしきともいみしきを此事は世々の書ともに爰の文を引る處にもさたせさるはいかなる事かひろく高くほめたゝへ奉るへきことなり○いみしうなんさえかある　此句新釋惣考に引たるにはいみしうこそ才あるとあり又群にかの字なし才とは才學のことなり

○殿上人なとにこれも新釋惣考に引たるには人なとの三字なし○日本紀の御局　藤井高尙主の日本

紀御局考に彼物語の源氏君は嵯峨天皇に准へ桐壺天皇は桓武天皇に朱雀院のみかとは平城天皇に冷泉院のみかとは仁明天皇になすらへ奉り扨日本紀といふは日本後紀續日本後記の事なるを書紀より續日本後紀までの四ふみをむかしはたゝ日本紀といひつらん故にこゝにもおほらかに唯日本紀との給ひしなりと有て猶委き事ともあれと言長ければ略ぬあけて見へし誠にめてたき說なりかし

枕冊子に頭中將(タヽノブ)蘭省花時錦帳下と書て末いかにとて清少納言の許に文給ひしに草のいほりをたれかたつねんと書添て返しけるを譽て此事必語傳へき事なりとなん定しと源中將(ツネフサ)清少納言に云聞せて御名は今は草のいほりとなん付つるとの給ひしは同し心はへにて其比かく興して殿上の人々異名なと付給ひしこと多かりけんかし　扨旁には日本紀局とのみあれと論又新釋惣考に引たるにも群にも契本にも御局とあるそよろしき○このふるさとの女の前にてたに　前のしりうこちいひたる條のことなり○侍らんよ　論には侍るらんよとあり

このかみ式部丞といふ人のわらはにて史記といふ書よみ侍しとき聞ならひつゝかの人はおそうよみとりわするゝ處をもあやしきまてぞさとく侍しかば書に心いれたるおやはくちをしうをのこゞにてもたらぬこそさいはひなかりけれとぞつねになげかれ侍し

○このかみ式部丞　旁契群ともにこの式部丞と有て旁にはこのを兄と注し式部兄惟規(ノブノリ)を云といへりさる事なから兄をこのとのみ云へき理なし論又新釋惣考に引たるにこのかみとあるそよろしき又或人は子之(コノ)と云ことならんかともいへれと他より親に對て子をいふとき（又親より子をさしてもいふべし）にこそさもいはめ御許同腹の兄をさして子之某なといふへくはあらす扨このかみは同腹の中に子之上たるの意なれは子之とのみにては言不足古事記白檮原宮段に故吾雖兄不宜爲上是以汝命爲上治天下云々とあるそ子之上の意なる何れにまれ兄のことを子之とのみいふへき理なし

大系圖卷十に閑院良門長男利基系良門公（贈太政大臣正一位）利基（右中將從四上）兼輔（參木中納言）雅正（從五下刑部大輔豊前周防守）

爲時 越後守 正五位下 ─┬ 惟規 従五下 母攝津守爲信女
├ 惟通 安藝守従五下
├ 定暹 寺阿
└ 女子 上東門院女房紫式部是也源氏物語作者或本云雅正女云々爲時妹也云々歌人 右衛門佐藤原宣孝室 御堂關白道長妾

按に雅正女とある本は誤なるへし然ならは惟規は甥なり爲時の詞に史記よみとりのとくさときに付て男子にて云々といへるも姉ならはさも有ましくおもはる又御堂殿の妾とあるも誤なるへし紫家七論に論たり ○史記といふふみ群又案本に史記といふの五字なし按に有方勝ぬへしその故はまつこのあたりは御許の源氏物語の據あることを顯さんの下心ある事にてかの物語はしかと是を據として其事のみを初より終まて書つゝくる類にはあらて千萬の書ともの中よりいさゝかつゝとり出てしかと其書とさせる書はなき中にも日本紀を大綱として書る事は前條の天皇の大御書にあらはし又其つゝきにかく史記をさとく覺えよみならひしことを書出たるは深き下心有事とおほしくそはかの物語は日本紀を大綱とし次には史記を旨と據に爲し事を知らせんの心ゑらひなるへし明星抄にうるはしく文體を似する處は史記の筆法をうつし巻の次第を立るも史記の面かけを摸すされは此物語のならひ物一つとりつめてにゑるさす寓言は荘子により玄るす處の庸據なき所は司馬遷か史記の筆法をかたとれりと有御説いとよく叶へりされと筆法を摸すのみにはあらし本文の意に據多き事なるへし又は其心ゑらひのみにて書ることも多かるへけれは是は史記の此事と玄かとあて云へき事のほのかなるも多からんされと先かの物語を見んにはかの四書の日本紀と次には史記との大綱を下心にゆひ結置て見るへき事にこそ拐かくいふを書の表になき事までを除りにとりつけいふやうに思ふ人も有ぬへけれと此御許はかゝる處に心しらひいと〳〵深き人にて日本紀御局の事の次手に此史記をさとく覺えし事を云るは必其心有事なるへし前の日本紀の事に源氏物語の據なる事をゑかと表にあらはしていへれは此史記の事はよそ外の事のやうに是も其據なる事はいはすしてたゝ文のつゝきにておのつからに其事とおしはかられ知らるゝやうに書たるいとおもしろく返々も此御許の心には常にかやうのよういい見えたり又或人は

此日記は彼物語のやうに心して書るにはあらすといひつゝかやうの下心の事まてを説なすはいとにつかはしからぬ事なりともいへれと今おのかとちの心にてかやうの心はへの事を書出んと思ひまうくるにこそかたきわさにもあめれ御許は常の朝夕のもてなしにもかやうの深き心つかひ有しさまに見ゆれは是ほとの事はいと安く出來ぬへし紫家七論に源氏物語は今の人の思ひやるよりは思ひの外にやすく出來たるなるへしといはれたる類なりされど見ん人の心々もあらむか○よみ侍し　論に侍の字なし○さとく侍しかは　論又新釋惣考に引たるかくのことし旁にさとしとあるはよろしからす○ふみに心入たるおや　父越前守爲時なりこをのこゝにてもたらぬこそ　新釋惣考にひかれたるにはをのこにて論にはもたぬとあり○とそ常になけかれ侍りし　新釋惣考にはとて常になけかれ侍りと有

それを男だにざえがりぬる人はいかにぞやはなやかならずのみ侍めるよとやう〳〵人のいふもきゝとめてのち一といふ文字をだにかきわたし侍らずいとてづゝにあさましく侍りよみしふみなどいひけんもの目にもとゞめすなりて侍しにいな〳〵かゝる事聞侍しかばいかに人もつたへきゝてにくむらんとはづかしさに御屏風のかみに書たる事をだにえよまぬかほをし侍りしを宮のおまへにて文集の處々よませ給などしてさるさまのことしろしめさまほしげにおぼひたりしかばいと忍びて人のさぶらはぬものゝひま〳〵にをとゝしの夏頃より樂府といふゝみ二巻をぞしどけなくかうをしへたべきこえさせて侍るもかくし侍り宮も忍びさせ給ひしかど殿もうちもけしきをしらせ給て御ふみどもをめでたうかゝせ給ひてぞ殿は奉らせ給ふ

○さえかりぬる人は　さえかるは才めかすなり初音巻にこと〳〵しくさうかちなともさえからすめやすくかきすさひたり○一といふ文字をたに　土佐日記に一ッ文字をたにしらぬ物らか足は十ッもしにふみてあそふ○てつゝ　伊勢物語新釋に百年にひとゝせたらぬつくも髪の歌の注に立入信友てふ人の說とて云くつくも髪はつゝも髪の誤なるへしつゝもは今のはたはらといふ藻にて若狹國の海邊

にてはそれをつゝもと云り　ほたはらは本草綱目に海藻生二海島上一黒色如二亂髮一とも有てなへて人のしれる如く髮をたれ亂したるめなる物なれは老嫗の髮の亂たるに譬つへき物なれはつゝも髮といへるなるへし又つゝとは何にまれ物事の末少く滿足らはさるやうの事をいへる言也手業の足りとゝのはさるを手つゝと云（今昔物語に口つゝと有は口語の足りとゝのはさるを云詞と聞えたり）地名に九ノ字十九ノ字なとをつゝと云言に塡て書ならへる有云々又つゝむつゝしむつゝまやかつゝしるなと云るつゝも物事の滿て足らはせさる義と聞えてにをはのつゝも事を滿て足らはせすして又他の事を云意也云々（こゝには其大綱のみを云猶委しきことはかのふみに見えたり）とありけにめつらしき考にて詞のつゝをかつ〳〵の意なりと鈴屋大人のとかれしにもかなひて聞ゆ故此てつゝも此説に隨ふへし○はつかしさに　契本又新釋惣考に引たる如此旁又群にはきとあり○えよまぬ　えの字旁また群になし論新釋惣考等にあるそよろしき○侍しを　契本侍らさりしをとあるは言意たかへり○文集　白氏文集をいふ○おほいたりしかは　おほいは思しの音便にておほしたりしかはなり○樂府　白氏文集の中の樂府なり旁に樂譜と書るはさる書別にあるなり○しとけなくかうをしへたへ　しとけなくは發にては其事を身の業ともせす折々なくさみのやうにといふ程の意にて例の物の師めかぬやうに書なせりかうの二字新釋惣考にひかれたる又論等になし契本にはかくと有もしはとかうのとの一字漏せるならんかたへはたまへの約たるにて物を乞望むことに俗にたまへともたへとも云るかことし群又契本にはたてとあり論又新釋惣考にはなし○殿もうちゝ　殿は道長公内は一條天皇をいふ○みふみともをめてたうかゝせ給てそ殿は奉らせ給　中宮の漢書を御許に學はせ給事を聞しめして中宮に眞字文をめてたう書せ給ひて道長公の天皇へ奉らせ給ふといへるなり

まことにかうよませ給なンどすることはたかの物いひの內侍はえきかざるべししりたらばいかにそしり侍らん物とすべて世中ことわざしげくうきものに侍りけりいかにいまはことといみし侍らじ人といふともかくいふともたゞあみだ佛にたゆみなく經をならひ侍らん世のいとはしき事はすべてつゆばかり心もと

まらずなりにて侍ればひじりにならんに懈怠すべうも侍らずたゞひたみちにそむきても雲にのぼらぬほどのたゆたうべきやうなん侍へかゞなる それにやすらひ侍るなり

○物いひの内侍　前の左衛門内侍をさしていふ○人といふともかくいふとも　御許の家集と云ものにわりなしや人こそ人といさらめみつから身をや思ひすつへき○經をならひ侍らん　此段にてまた出家の望見えたり唯懈怠なく經をよまんといふことなるを屛風の紙にかきたる事をたにえよまぬかほをしのつゝきなれは佛に習はんといひなしたるものなり○ひたみちにそむきても雲にのほらぬ程のたゆたうへきやうなん侍へかなる　ひたみちはひたすらと云意なりこゝは伊勢物語にそむくとて雲にはのらぬ物なれとよのうき事そよそになるてふと云歌の上句をもて書るにて何の思案もなく一向に思ひ立て尼になるとも雲にのりて此世を行しる物にもあらされは中々なる事も有ぬへけれはそれに心ためらひのせられて出家の本意もえとけすと也其中々なる事とはわれなから後に悔るやうの事にて帚木巻に心深しやなとほめたてられて哀すゝみぬれはやかて尼になりぬかし思ひ立ほとはいと心すめるやうにて世に返り見すへくも思へらすいてあなかなしかくはたおほしなりにけるよなとやうにあひ知れる人來とふらひひたすらにうしとも思ひはなれぬ男聞つけてなみたおとせはつかう人ふるこたちなと君のみこゝろは哀なりける物をあたら御身をなといふにみつからひたひ髮をかきさくりてあへなく心ほそけれはうちひそみぬかししのふれと涙こほれ初ぬれはをり／＼ことにえねんしえすくやしき事も多かめるに佛も中々心きたなしとみたまへつへしにこりにしめるほとよりもなまうかひにてはかへりてあしき道にもたゝよひぬへくそおほゆる云々

年もはたよきほどになりもてまかるいたうこれより老ぼれてはためつらとぞ經よまず心もいとゞたゆさまさり侍らん物をこゝろふかき人まねのやうに侍れど今はたゞかゝる方の事をぞ思ひ給ふるそれつみふかき人は又かならずしもかなひ侍らじさきのよしらるゝ事のみおほうはべればよろづにつけてぞかなし

う侍る御ふみにえかきつゞけ侍らぬ事をよきもあしきも世にあること身の上のうれへにてものこらずきこえさせおかまほしう侍るぞかし

○年もはたよきほとに　御許の年齢のこと前に論へり○老ぼれて　ぼれは靈異記に慌の字をよめり慌は康熙字典に博雅忘也とある其意なり六帖に鳥ならはあたりの木々にかくれゐてほれたるころになかましものを（玉葉集にはわびたるころにと有）○めつらとぞ　（日暗）群にめつらにぞ契本にめつらこそとあり按にめくらとその誤なるへしめくらとめつらとことによく似たり○人まね　旁にまねに眞似の字を當たるは叶へりとも覺えすまにといはんは中々に俗語なるへし學（マヽヒ）のまねにおなしかるへし○かゝる方　前段の讀經の勤と出家の望のことなり○つみ深き人は　罪深とは出家の望に障ある事にて爰は即夫ある女房をいふ意なりかくいふてもし中宮御同心ありてはいかゞの下心あるへし○御ふみにえかきつゞけ侍らぬことを　御ふみとは御許の中宮への消息文の事にて此日記を奉るときかき添たる文に出家の望をとけんと思ふ事を書たるなるへし又一には御ふみとは則此日記をいひて是に書漏せし事は口つから聞えおかまほしといふ意かされと次の條を思ふにも猶前の説然るへし○よきもあしきもよにある事　前に人の品々を評せる事を云

けしからぬ人を思ひきこえさすとてもかゝるべき事やは侍るされどつれ〳〵におはしますらん又つれつれのこゝろをごらんぜよ又おぼさんことのいとかうやくなしこと多からずともかゝせ給へ見給へんゆめにてもちり侍らばいといみじからんまだ〳〵もおほなゞどの屋づくりにこの春し侍りにしのち人のふみくぞ侍る此頃ほんごもみなやりやきうしなひひゝなも侍らず紙にわざとかゝじと思ひ侍るぞいとやつれたることとわろきかたには侍らずことさらによごらんじてはとう給はらんえよみ侍らぬ處々もしおとしぞはべらんそれは何かはごらんじももらさせ給へかしかく世の人ごとのうへをおもひ〳〵はてにとぢめ侍れば身をおもひすてぬこゝろのさも深う侍るべきかな何せんとにか侍らむ

○けしからぬ人を思ひ聞えさすとても云々　けしからぬと云詞はすべてなき事を有と云時つかふ詞

なり和泉式部日記に源少將又兵部卿なとかよひ給ふとうき名立て宮の中たえたまひたゝ處にことねりわらはきたり云々御ふみやあるといへはさもあらす一日おはしましたりしかとみかとに車のありしをこらんしてこせうそこもなきにこそあめれ人おはしましかよふやうにそきこしめしたりけれなといひていぬかくなんいふときゝていといとほしくなにやかやとわさと聞えさせわさとたのみきこえさする事こそなけれと時々もかうおほし出んほとは聞えさせかよはしてあらんとこそ思ひつれ事しもこそあれけしからぬことにつけてもかうおほされぬると思ふもいと心うくて云々と有けしからぬもなきことを有けにいひ立られたるをさしていひ又卷二丁にらてんぬひものけしからぬまて去てひきかくしとあるもらてんぬひ物に例もなき事まてしてといふ意と聞え卷四にさもけしからすも侍る事とも哉とあるも齋院のさもなき事まてを中將かありけにとりつけ云たる事をさしていへり扨爰も其例をもて思ふに前段のよきもあしきもよに有事といふに對てたとひさもなき事を人のうへに思ひ作ていふともかくまて善惡をさたせんやはと云意なるへしされは思ひは心に工夫したくむの思ひなり

○かゝせ給へ　給への二字契本になきはわろし○ほんこも　群にほんこともと有○ことさらによ　是も同書にはよの字なし○えよみ侍らぬ處々もしおとしそ侍らん　えよみのみはめの誤歟又その下にしの一字もあらまほし○思ひ〳〵はてにとちめ侍れは　此詞にても此書の猶末々の卷有へからさる事をさとるへし群には思ひ〳〵てとあり

十一日のあかつき御堂へわたらせ給ふ御車には殿のうへ人々は舟にのりてさしわたりけりそれにはおくれてようさり參る敎化おこなふ處山寺のさほううつして大さんげすしらいたうなッどおほうゑにかいてけうじあそび給上達部おほくはまかで給てすこしぞとまり給へる後夜の御導師敎化ども說相みな心々廿人ながら宮のかくておはしますよしをこちかひきしなことはたえてわらはるゝこともあまたあり

○十一日　寛弘六年九月か十月頃の事なるべし此頃は又三宮御產の事によりて中宮土御門殿に下居

給ふこと榮花初花卷に見えたり○御堂へわたらせ
給ふ　御堂は法性寺（貞信公建立）なるへし法成寺にはあ
らす此殿の法成寺建立は寛仁三年の事にてこゝよ
りはやゝ後なり道長公御記寛弘三年七月廿七日法
性寺五大堂上陳また同年八月七日條に法性寺新堂
本渡丈六五尺尊佛師等賜祿物云々なとあるを思へ
は此頃法性寺の再建なとありしなるへし又同年十
二月堂供養のことなとも見えたり○御車には殿の
うへ　中宮の御車に脩子の乘添給ふなり○しらい
たう　旁に或僧正歸云寶篋印陀羅尼經曰况有ニ衆人
ニ或作ニ塔形ニ或罪障悉滅所レ ム如レ意云々○こちか
いさしなことはたえて　此句解かたし旁にきしの
注に誦字を當たるはいかなる意にか今按にこちか
ひはうちいひの誤きしなことはかなしきことの誤
にそうちいひかなしきことはたえての寫誤にや
先かりにかく改て見る時は廿人の僧達の說相敎化
は心々に說開かする物から中宮のかく皇子も次々
に生ます事のめてたさは皆同しやうによろこひう
ちいひて說相敎化をうけは具に無常の悲しみを催
すへきおきを其悲しきも絶にてゝ笑ひ興せらるゝ
やうのことをは多く書るといふ意になりてよくき
こえたりされと猶可考事ともなり

ことはてゝ殿上人舟にのりてみなこぎつゞきてあそ
ふ御だうの東のつま北むきにおしあけたる戸のまへ
池につくりおろしたるはしの高欄をおさへて宮大夫
はゐ給へり殿あからさまに參らせ給へるほど宰相君
なゞど物がたりしておまへなればうちとけぬようい
内もともをかしきほどなり月おぼろにさし出てわか
やかなる君達いまやう歌うたふも舟にのりおほせた
るをわかうをかしく聞ゆるに

○宰相君　女官なり○おまへなれは　中宮又道長
公の御前なれはなり○月おほろにさし出て　此句
甚いかゝなりもとより筆者の誤にや前に後夜の事
をいひて又爰に月さし出てと云ては十一日夜のさ
まにたかへり又一には暮ぬ前より出たる月なから
曉かたの雲間よりさし出たる事とたすけ聞へけれ
と猶いかゝ也十一日の月は丑の時にこそ入はつめ
れ又後夜の事を先いひて立かへり夜中の事を云る
とも聞へき歟されと事はてゝとあれは後夜のつと
めも終ての事とこそ聞ゆれ又あかつきかたの風の

けはひ云々とあるあたりをも思ふに何れにも誤と聞ゆ是等も後に書たる物なれはこそかゝるふとした誤もいてくれ日次にしるさはいかてかゝる事やあるへきよく〳〵思ふへし

大くら卿のあふな〳〵まじりてさすがに聲うちそへんもつゝましきにやしのびやかにてゐたるうしろでのをかしう見ゆればみすのうちの人もみそかにわらふふねのうちにや老をばかこつらんといひたるを聞つけ給へるにや大夫徐福文成誑誕おほしとうちずし給ふ聲もさまもこよなういまめかしう見ゆ池のうき草とうたひてふえなンど吹あはせたるあかつきがたの風のけはひさへぞこゝろことなるはかないことも處からをりからなりけり

○大くら卿　藤原正光卿紀略巻十二長和三年二月廿九日乙酉參議從二位大藏卿藤原正光薨年五十八とあれはこの年は四十七歳なり○あふな〳〵　此詞は隨分の意にてあふな〳〵思ひはすへしなそへなく高きいやしきくるしかりけりをとめ巻に右大將民部卿なとのあふな〳〵かはらけとり給へるを云々胡蝶巻に宮の大將はあふな〳〵なほさりことをうち出給ふへきにもあらす寄生巻いとほしくかくあふな〳〵思ひこゝろさして竹川巻なにゝかはあふな〳〵聞いれんと思ひて手習巻あふな〳〵なくなくの給へはなとあるを考わたすに念頃なる意にもきこえ（念頃なるは隨分に同し意にていひもてゆけは同し事におつるなり）又物をおほつかなく思ひつゝ爲る事又物をしかとはいはすしておほつかなきなからもその事をいふやうの意にも聞ゆるなりそれは隨分の意とは違へり爰も若公達の處えかほなる舟の中に年老たる大くら卿の一人おほつかなきさまにてましりてといふ意かとも思へと猶不穩もしはまたあふなくの誤ならんかあふなくは既にもいふ如く何の思案もなくふとしたるやうの意なれは爰も若公達の中に老をはつるの思案もなくふとましりたるの意なるへし○舟のうちにや老をはかこつらん　大くら卿のつゝましけなるさまを見てたゝ老をかこち給ふらんと平語のたはふれにいひたるを大夫は白氏文集の童男草女舟中老といふ句にとりなして誦給ふか興ある也扨此老をかこつらんとは御簾の中の人の云たるにて誰にても有へし御許には限るへからす○大夫　はしの

高欄に寄ゐ給ふ宮大夫也○徐福文成誑誕多し　白氏文集巻三戒レ求レ仙詩に海漫々直下無レ底傍無レ邊雲濤煙浪最深處人傳中有二三神山一山上多生二不死藥一服レ之羽化爲二天仙一秦皇漢武信二此語一方士年々采レ藥去蓬萊今古但聞レ名煙水茫々無二覓處一海漫々風浩々眼穿不レ見二蓬萊島一不レ見二蓬萊一不二敢歸一童男草女舟中老徐福文成多二誑誕一上元太一虚祈禱君看驪山頂茂陵頭畢竟悲風吹二蔓草一何況玄元聖祖五十言不レ言レ藥不レ言レ仙不レ言二白日昇二青天一とある詩をうたひ給へるなり○池のうき草　こはいまやうにあることなるへし

源氏の物がたりおまへにあるを殿のごらんじて例のすゞろごとども出きたるついでに梅のえだにしかれたるかみにかゝせ給へる

すき物となにしたてれば見る人のをらですぐるはあらじとぞ思ふ　たまはせたれば

人にまたをられぬものをたれかこのすきものぞとはくちならしけん　めざましうと聞ゆ

○おまへ　中宮の御前なるへし○すゞろことゝも既に云る如くあたけことゝもにて彼物語の好色のことにつきて御許にあたけことをいひかけ給ふといふ意なるへし此公の御許に心をかけたまふさま巻一またこの下にみえたり○梅のえた　旁と新釋惣考にひかれたるとかくのことし一本と論には梅のしたと有されと歌に折といふ言あれは枝と有かた少しはまさらん歟○すきものと……歌　道長公御歌なりすきものは好色の方に進みて物すきなるをいふ伊勢物語にいみしのすきものゝしわざやまた是は色好むと云すきものとすたれの中なる人のいひけるを云々後撰集戀六男のまてきてすき事をのみしけれは人やいかゝみるらんとて云々小世繼（五十五段）に侍從君の事をみめかたちえもいはすけはひ有さま人にすくれたり世のすき物といはれける人なれは是に物いひかけられぬ人はなかりけり云々なと見えたりこゝは古今集に梅の花咲ての後のみなれはやすき物とのみ人のいふらんと有により給たるにて实のすき物も好者に梅實の酢きと云を兼ける也枝の緣言にて物いひかけぬはあらしといふ意なり一首意かくれたる處なし○人にまた云々歌　人にまたをくれぬとは夫宣孝に別れし後人

に又逢事もせぬ物をといふ意にてまたは又なり未
には非まだは畢竟には然あるへき事の末なるを云
にてこゝには不叶くちならすもいひふるゝと云こ
とに梅の實を食する事をかねたり此歌も意は明ら
かなり○めさましう　此詞は俗にめつそうな事と
いふに當れりめつそうも本此詞をつゝめよこなま
れるなるへし

わた殿にねたる夜戸をたゝく人ありときけどおそろ
しさにおともせで明したるつとめて

夜もすがら水鷄よりけふなく〳〵ぞまきの戸ぐちに
たゝきわびつる

かへし

たゞならしとばかりたゝく水鷄ゆゑあけてはいかに
くやしからまし

此歌ともは新勅撰戀五に夜更て妻戸をたゝき侍け
るに明侍らさりけれは朝につかはしけるとありて
道長公御歌なり○よもすから云々歌　同集には五
句わひぬるとありけには勝に也○たゝならし云々
歌　上句の意はたゝならしとはかりは思ひ侍しか
と水鷄は戸をたゝく音をまねふのみにて侍れはと
云意にてたゝならしは道長公の御出そとは思ひし
かどなり下句は水鷄は戸をたゝく音をまねふのみ
にて實に戸をたゝくにあらされはもし明侍らはい
かはかりかひなくくやしからましと云るにて則道
長公は實に心に深くおほしめして戸をたゝき給ひ
しにあらて水鷄の如く人をおとろかし給ふなりと
いふ意なり

ことし正月三日まで宮たちの御いたゞきもちひに日
々にまうのぼらせ給御ともにみな上﨟も參る左衛
門ノ督いだき奉り給て殿もちひはとりつぎてうへに
奉らせ給二間のひんがしのとにむかひてうへのいた
ゞかせ奉らせたまふなりおりのぼらせ給ふ儀式見物
なり大宮はのぼらせ給はず

寛弘七年正月此條の初に契本に寛弘六年拾月四日
一條院燒亡十九日行幸左大臣枇杷亭十一月二十五
日第三皇子誕生十二月廿六日中宮入内といふ事本
行にあれと是は必定後人の書入にて旁に小字にて
注したるよろし
記略云五日丙戌寅刻一條院皇居有火天皇暫御織部
司二代御記爲灰燼左大臣仰外記自今日三箇日廢務

十九日庚子子剋天皇自織部司還幸左大臣枇杷第西剋賢所奉渡之とあり此事は此日記にはあつからぬ事にはあれと二本ともに書入たれはいさゝか論へし〇宮たち　皇子達也こゝにて初て三ノ宮產させ給ひし事をほのめかし出たり

〇御いたゝきもちひ　齒固の御餅鏡の事なるへし〇左衛門督　賴通卿なり〇とりつきて　旁群如此契本にはとりへきてと有〇うへ　天皇を申奉る〇ふたまの東のとにむかひて　江次第供ニ御藥ニ元日條に以ニ南面端帖ニ一枚ニ當ニ第二間北柱南邊ニ東西行敷レ之爲命ニ婦女ニ藏人座云々〇大宮　既に注

ことしのついたちの御まかなひ宰相ノ君例の物の色あひなゝどことにいとをかし藏人はたくみひやうごつかうまつるかみあげたるかたちなゝどこそ御まかなひはいとことに見え給へわりなしやくすりの女官にてふやのはかせさかしだちさいらぎゐたりたうやくばれるれいのことゞもなり

正月朔日〇御まかなひ　江次第に舊年十一月二十日以前陰陽寮進ニ勘文ニ一通ニ一通御忌ノ勘文一通被レ定ニ御陪膳女房ニ如御乳母若典侍上﨟之人也往年更衣奉仕云々奉レ仰之人求ニ童女采女之者ニ年齡符合藏人仰ニ內藏寮ニ令レ給ニ其裝束料ニ云々〇例の物の色あひ　生氣方の色といふ物にて同書に先レ是中十二月旬行事藏人給ニ供奉女房女官ノ當色料謂其仿物又頭著當色謂當年生氣方色之衣也陪膳四疋五疋藥頭四疋三疋女房各三疋藥女房六人各一疋近例采女不レ給ニ仿物ニ事終給レ祿此事不レ可レ然舊例釆女以上皆著ニ當色ニ由見ニ西宮記ニ之故也又いはく平旦天皇御東廂著御生氣方御直衣貝引帶御生氣在北之時著ニ御綠色ニ御生氣在北之時其色黑故用異色近年方之色也また漢籍月令廣義卷之三に生炁ノ方正子二丑三…十二月亥〇藏人はたくみひやうごつかうまつる　藏人は所謂女藏人なりたくみひやうごは女官二人の號なるへし江次第に被レ定命婦女藏人各二人ニと有て女藏人は二人のものと見えたり旁にはたゝにみやうふと有契本群如此〇わりなしやくすりの女官にて　同書に藥女官六人と見えたり〇ふやのはかせさかしだちさいらきゐたり　ふやのはかせは大學寮博士なるへし釋奠次第定家中納言書三道學生の分注に明經稱文屋童明法稱學生筆稱筆乃生とあればふやのはかせは明經道ノ博士を云又官位令に大學頭をふんやのかみ職原抄參考に大學寮をふんやのつかさ同博士をふんや

のはかせと讀り　さいらきは才らきなり扨爰の意は藥ノ女官の ゐたる處にて博士の賢たち才めかしゐたりといふ意歟○たうやくくはれる　嘗藥(タウヤク)は千癠萬病嘗なりと諸書に見ゆ建武年中行事(後醍醐天皇宸作)嘗藥は正月三日嘗藥の事をの給ふ條に今よひ内々女房にあかち給ふなりとあり

二日宮の大饗はとまりて臨時客東おもてとりはらひて例のごとしたり上達部は傅ノ大納言右大將中宮ノ大夫四條ノ大納言 權中納言侍從ノ中納言 左衛門ノ督ありくにの宰相大くら卿 左兵衛ノ督源宰相 むかひむかひゐ給へり源中納言左兵衛督 左右ノ宰相中將はなげしのしもに殿上人の座の上につき給へり

正月二日○宮の大饗　正月二日　二ノ宮ノ大饗とて中宮東宮を拜し奉るのついてに饗を給ふ事にて儀式諸書に見えたり○臨時客　是は攝政關白家に春の初め大臣以下の上達部を招引して遊侍る事なり定れる公務にもあらねは臨時客と申にやと公事根源に見えたり○例のごと定式の如くといへる也○傅ノ大納言は道綱卿父東三條大入道兼家公傅とは皇太子ノ傅(カシヅキ)なり官位令に正四位上階○右大將は實資卿卷三にいへり○中宮大夫は齊信卿○四條大納言は公任卿卷二にいへり○權中納言は俊賢卿卷二に云旁には隆家卿と注それは兼家公孫道隆公子なり○侍從中納言は行成卿卷二にいへり○左衛門督は賴通卿卷二には東宮權大夫と有○ありくにの宰相は輔道子資業ノ父有國なり○大くら卿は正光卿前にも見えなり○左兵衛督は實成卿卷三に侍從宰相と有一本の書入に懷平と有懷平は卷二に東宮大夫と見えたり○源宰相は賴定卿卷一に見えたり○源中納言は前の權中納言同人也○左兵衛督も前のに同○左右宰相中將は左は經房卿にて卷一にも見え右は兼隆卿にて是も卷一に見えたり

わか宮いだき出奉り給て例のことゞもいはせ奉りうつくしみにきこえ給ふうへにいとみやいだき奉らんと殿の給ふをいとねたき事にしたまひてあゝとさいなむをうつくしがり聞え給て申給へば右大將などけうじきこえ給ふ

○わか宮　三宮にて後朱雀院のみかとなり寛弘六年四月十餘日中宮土御門に下させ給て十一月廿五日御誕生のよし榮花物語初花卷に見えたり此日記

にいさゝかもいはずしてこゝにて若宮云々と書出せる事故有事にて前にもいへるかことし猶下にもいふへし扨江談卷二にいはく上東門院爲ニ一條院女御ニ之時帳中産犬子不慮之（本のまゝ）外人ラアリ見付大（本のまゝ）恠ニ恐ラハ被レ申ニ入道殿ニ道ニ入道殿仰ニ匡衡ニ天密々令レ語ニ此事ニ給匡衡申云極御慶賀也ト申入入道殿何故被レ仰匡衡申云皇子可キ令ニ出來ニ給ヒ之徵也大字是點大字ノ下付太子也上付レハ天子也以レ之謂レ之皇子可ニ出來給ニハ立太子次至ニ天子ニ給歟入道殿大令レ感給之間有ニ御懷姙ニ令レ奉ニ産後朱雀院天皇也此事秘事也退ニ席之後匡房强令レ勘件字天（本のまゝ）令レ傳レ家也云々（此おのかみたりし本は傳寫の誤いと多しと見えたりゆゑに旁におろ〳〵疑おほくのみ此入道とは道長公の御事歟此時未入道にはおはしまさずまた上東門院の爲女御ときこと有もいかゝ御産に再度ながら立后の後なり）また十訓抄卷一に誠や此御時一の不思議ありける上東門院の御方の御帳中に犬の子をうみたりける思ひかけす有かたき事なれは大におとろかせ給て江匡衡といふ博士に問れけれは是目出度御吉事なり犬の字は大の字のそはに點をつけりその點を上につけは天なり下につけは太なり其下に子の字を書つゝくれは天子とも太子ともよまるへししかゝれは太子生れさせ給て天子にいたらせ給へしとぞ申ける其後はたして皇子御誕生ありて程なく位に即給後一條天皇是なり云々此御誕生有し皇子の二書異なるは何かまことならん又御帳の中に犬の子産たる事なといとうけられぬ事なから此記とかんにはいはてあるへき事ともおほえねは筆のついてに引出たり○いたき出奉り給て　道長公の抱出奉り給ふ也○例のことゝも　御祝言なるへし○うつくしみにきこえ給ふ　此句の下に詞落たる歟旁には給ると有又群にはうつくしみきこえ給ふと有今又按に此一句は次のうつくしかりきこえ給てといふ句の混入たるにもあるへしなくても文つゝきて聞ゆるなり○うへに　倫子をいふ臨時客に天皇は出御あるへきにあらされはなり○いと宮　一本にい宮○いたき給ふらんと殿の給ふを　此句のまゝにては倫子の抱給ふいと宮を殿の抱奉らんとの給ふをといふ意になりて次の條のうへにまゐり給ての句に違ひていと混らはしきなり按にいたき奉らんとの給ふをと有しをとのの二字後に誤重りたるなるへし此例既

にもありきかく見る時は道長公に倫子のいと宮抱奉らんとの給ふをといふ意になりて次條のうへに參り給てと云詞もよく聞えて此あたりおたやか也○ねたきことにし給ひて　道長公に抱かれゐ給ふいと宮の倫子には抱れしとし給ふさまなり○あゝとさいなむを　一本にあゝをあしと有はよろしとも聞えずあは惣て初發の音にして最初口を開に先發る音なり五十音の最初の音たるも其故にておのつからの理なりされは人生れて初て發る音もあの音とおほしきなり詞の意は源氏物語にもあゝとかたふきてゐたりなとあるさまにて三宮の惡み嫌はせ給ふさまなりさいなむは字鏡に譴をよめる其義なりと和訓栞に云るそよろしかるへき扨此さいなむをといふは皇子の御事なれはさいなみ給ふをなと有へくおもはるれとかやうにいへるも一格なるへき事巻一にもいへるかことし

うへに參り給てうへ殿上に出させ給て御あそび有けり殿例のゑはせ給へりわづらはしと思てかくろへゐたるになどさてこの御まへのみあそびにめしつるにさふらはでいそぎまかでにけるひがみたりなとむつがらせ給るさるは歌ひとつつかうまつれおやのかはりには常の日なりよめよめとせめさせ給ふ

○うへに參り給て　前の倫子に抱かれしと皇子のさいなみ給ひけれと扨畢には倫子に抱かれ給ひたるとなり前に云る如く本の儘に殿の給ふをとしては此句とくへきやうなし可咏○みあそひ有けり公事根源臨時客條にはてつかたには御遊有て催馬樂をうたふ云々○さてこの　一本にかくのことし旁群契本ともに御てゝのとあり○むつからせ給へる　書紀に憤をむつかるとよまれたるよし。るはりの誤か○さるは　旁群ともに如此契本にさるはかりと有はは。とか。と下上になれるにてさるかはりの誤にや○おやのかはりには常のひなりこは道長公御醉のたはふれに御許にの給ふ詞にて父爲時か代詠は常に爲るなれはとの給ふなり金葉集雜部に見えたるかの小式部内侍に定頼中納言のたはふれいひかけたる詞に其さまにたり

うち出むにいとかたはならんこよなからぬ御ゑひなめればいとゞ御いろあひきよげにほかげはなやかに

あらまほしくて年頃宮のすさましげにてひとところおはしますをさうざうしく見奉りしにかくむつかしきまでひだりみぎに見たてまつるこそうれしけれとおほとのごもりたる宮たちをひきあげつゝみ奉り給ふのべに小松のなかりせばとうち誦し給ふあたらしからん事よりもをりふしの人の有さまめでたくおぼえさせ給ふ

○こよなからぬ御ゑひなめれは　契本また群に如此旁にはなめれと丶あり他上達部より格別の御酔にはあらされはといふ意なり御いろあひきよけには御面の赤らみたるを云○むつかしきまて左右に云々　此詞にて三宮生ませる事いよ〱あらはれたり○のへに小松のなかりせは　拾遺集春部に題しらす忠岑子のひする野へに小松のなかりせは千代のためしに何をひかましと有にて小松を宮達に准へて誦し給ふか折ふしにあひてめでたきとなり

又のひ夕つかたいつしかとかすみたる空をつくりつゞけたるのきのひまなきにてたゞわた殿のうへのほどをほのかに見て中づかさのめのとゝよべの御くちすさひをめできこゆ此命婦こそ物のこゝろえてかど〱しくは侍る人なれ

　正月三日○かすみたる空を　次のほのかに見てと云何へ夕をへたてゝつゝく格なり○よへの御くちすさひ　野へに小松のなかりせはとの給ひし事也○此命婦こそ　本ともにそとのみあれとこそとなくては下のけれの格にかなはす故今改たり

あからさまにまかでゝ二宮の御いかは正月十五日其あかつきまゐるに小少將ノ君あけはてゝはしたなくなりたるに參り給へり例のおなじ處にゐたり二人の局をひとつにあはせてかたみに里なるほどもすむひとたびに參りては几丁ばかりをへだてにてあり殿ぞわたらせ給ふかたみにしらぬ人もかたらはるゝなどときゝにくゝされどたれもさるうと〱しき事なければこゝろやすくてなむ

　正月十五日　紀略に十五日乙丑於枇杷殿皇后有第三皇子五ケ日事。按ケハ十の誤か　また十六日の條に以第三皇子敦良爲親王二年とあり○二宮御五十日　はしめ凡例に引る續世繼の如くにては叓は三宮と云へき理なれと此中宮の爲には第二宮に當り給ひ又こゝは御座の事を略して聞ゆるやうに書たる文體なれ

給へる處にたづねゆきて見るうへはひらじきの御座に御ものまゐりすゑたりおまへの物したるさまいひつくさんかたなしすのこに北むきににしをかみにて上達部左右内のおほい殿　春宮ノ大夫　四條ノ中宮ノ大夫大納言それより下はえ見侍らざりきみあそびあり殿上人此たいのたつみにあたりたる廊にさふらふ地下はさだまれり

○もちひ參らせ給こともはてゝ　もちひは五十日の御祝餅なり參らせ給ふ事ともとつゝけてよむへし旁に給ふにて切たるは非なり○東のひさしの下の上臈はといふ事此句の上におきて心得へし○障子はなちて　契本にちを゜に゜と誤れり○ひらしきの御座　禁秘抄にいはく平敷（疊二帖繧繝南上中央茵一枚中唐綾端錺裏打御劔在ニ御座南端ニ鞘東東西面歟）○左右内のおほい殿　左大臣は則道長公なり　右大臣は顯光公内大臣は公季公なり○春宮大夫　懷平卿○中宮大夫　齊信卿此一人諸本になし群によりて補○四條大納言公任卿なり

かげまさの朝臣これかせの朝臣ゆきよしともまさなゝどやうの人々うへに四條ノ大納言はうし　とり頭辨びはことは經孝朝臣左の宰相中將さうのふえとぞ双調のこゑにてあなたふとつぎにむしろ田このとのなゝどうたふこくのものはとりのはきうをあそぶとのざにも調子なゞどをふく歌にはうしうちたがへてとがめらる伊勢のうみにぞありし右のおとゞわごんいとおもしろしなゞどきゝはやし給ひざれ給ふめりしはてうはいみじきあやまちのいとほしきこそ見る人の身さへひえ侍しか御おくりもの笛ふたつ宮にいれてとぞ見え侍し

○かげまさの朝臣　未考○これかせの朝臣　道長公御記寛仁三年八月十五日條に石清水便方理申障替惟風云々同五年にも散位藤原朝臣雅風と見えたり同人なるへし○ゆきよし　同書同五年四月十八日條に行義と云人有それ歟○ともまさ　未考扨此四人は地下ノ輩なり○頭辨　道方○經孝朝臣　是も群によりて補○左の宰相中將經房卿○あなたふと催馬樂ノ呂にあり○むしろ田　同上○此との同上○こくの物　契本又群にかくありて曲ノ物なり旁にかく物はとあれと樂物とはいふへくもあらす誤と聞えたり○とりのはきう双調の鳥破急なり○歌にはうしうちたかへて　すへて物語ともにも

遊の處にいへる拍子は一つの樂器の名也和名鈔音樂部に拍子蘇舫切韻云拍普伯反拍子俗云百師打也拍レ板樂器名也〇伊勢海　催馬樂律にあり〇右のおとゝ　右のおとゝきゝはやし給ふとつゝく意なり旁に右のおとゝわこんとよみ切たるはよろしからす右の大臣の和琴を彈給ふ事にはあらす〇めかし　旁に乙ノ字を當たるはいかゝあらん甲乙には非すへてかるめるの二つは甲乙の位に違へる音なれはなり字いまた不考〇いとほしき　旁に絃惜ノ字を當たるは何の事ともきこえす假字もたかへりいとほしは今俗にいとしと云にてふかく親睦意の詞なり爰にてはそれに絃とまては云かけたるにもありぬへけれと惜の字はひか言なり扨絃物の中にても琴は諸の吹物も終りて後やゝ有て絃を一筋シャンとはぬる音のいとおもしろく耳たちて聞ゆる物也其シャンとはぬる音は殊に終の調子にうまくあはてはえあらぬ物なるを其音のめりたるは聞人の身も冷る心ちせしとなり身も冷るとは俗にブッと身にしむなといふ意にて其ブッとするは彈人を氣の毒に思ひいたはる意にして則いとほしきさまなり扨此

三ノ宮には御五十日の事のみをかゝつはらに書て御誕生の日より七日の中の儀式なともいさゝかも書いてさるはすでにもくはしくいへることく二宮のをりのことにかよはせておのつからに知るへき理なりかくたかひにゆつりあひつゝことすくなにして二宮の源とをたらひみちて中々にこと〳〵く同事を二たひならへかき出んよりもいと匂ひふかくめでたしともめてたき書にはありけりよく〳〵味ひて見へし二ノ宮と三ノ宮との御五十日までの日記にしていさゝかもたらさるところなくいはんや殘篇なとにはゆめ〳〵あらすかし

紫式部日記解　大尾

土佐日記考證

全

土佐日記考證序

余嘗謂著作之家有先鳴者有繼興者先鳴固難而繼興亦不易矣注書家亦然凡古書難解初作注釋下手最難故雖不免紕謬人不能沒其功也至後出則不然苟非考證精確援據博洽深窮原委明析條貫則未能免於異議矣頃者岸本大隅著土佐日記考證一編先是人見氏爲之附注北村氏爲之抄而今此編詳其可詳簡其可簡頗能得其體製矣至於分疏古言解釋名物則何其考證之精援據之博也殆亦後出之遺也歟余結髮立志經業至
皇朝事跡制度略得其梗概而古言之奧微名物之詳細猶未能旁通今依是編讀是記譬之從虞即鹿兼燭照闇不勞探索到處了然々則其嘉惠同學豈曰小補之哉昔家文穆公設五科以敎生徒國學其一也吾門不可少其人也尚矣邇今得大隅可謂遺敎不墜也閑雖有日喜而叙之

文政二年春二月　林皝撰并書

土佐日記考證

提要

そも〳〵この日記は貫之のぬし延長八年（貫之集云延長八年土佐の國にくだりて承平五年京にのぼりて左のおとゞのしら川におはします御ともに歌よませたまひけるもゝくさの花のかげまでうつしつゝおともかはらぬしら川のみづ）土佐守の任にあたりてかの國にくだられしが任はてゝ承平四年十二月廿一日舟出して京にかへりのぼられし旅の日記なりけり今の世の人は日記としいへば旅の日記のみなるやうにおもふめれどすべて日記といふものは日々の事をしるせるをもていへる名なれば旅の日記をのみいへるにはあらず今いふ家々の記錄といふものをふるくは日記とのみいへりされば旅の日記をわけていはんには路次記あるは旅日記などこそいはめさて家々の記錄といへるものはみな男のしるすわざにしてしかも漢字もてしるせれば女のわざならずされば男もすなる日記といふものを女もして見んとてとはことわれるなりそをいま假名もてしるせるはめゝしきわざなればわざと女のかけるさまにいひなしてかゝれつるにこそいまこの土佐日記をはじめてつぎ〳〵紀行といへる

もの更科日記十六夜日記などそのほかいとおほかりこのすがたなるもの漢土にもふるく見えたりそは唐の李翺が來南錄をはじめとかせん貫之のぬしも來南錄などを見てよりこの書をかゝれしかともおもはるれど猶おのづからにすがたの似たる也けりその外漢土にもいとおほかれどこゝにくらぶればみな紀氏より後のものなり（この書のをはり承平五年は五代の後唐の末にあたれり）されどそのあらましをこゝにあげたり宋の歐陽修が于役志陸放翁が入蜀記范成大が驂鸞錄吳船錄周必大が奏事錄汎舟錄呂祖謙が入越記方鳳が金華游錄元の郭天錫が客杭日記などありこのほかにもおほかりぬべけれどしるすにいとまあらず

延長八年より承平四年まで五年なればある人あがたのよとせいつとせはてゝとはいへりさて明年二月十六日に京にいりて前後六年なれば五とせ六とせのうちに千とせやすぎにけんとはかけり

この日記の註釋どもいとおほかるがなかに世にあまねくもてあつかふは季吟の抄のみになん有けるそが本文は京極黄門自筆本によれりもとより京極黄門自筆本は貫之のぬしの自筆の本をうつされしものとぞされはこの書に定家卿本と引ものは抄の本文にたがふ事なし（老人雜話云貫之自筆土佐日記蓮華王院寶物也是を定家卿うつし給へる本連歌師玄的方につたへ後は□家に納むといへり定家卿くはしく自己の筆法を以てうつし末に三枚は貫之の書法をしらせん爲にや文字の大さ字體をもうつしおかれ跋にその趣をしるしおきたまふと云々貫之自筆本は今亡びたりとなり彼定家卿本は□家より□殿へまゐらするとぞ）

いまかく板にゑれるこのふみの本文は寛永廿年といふとし風月宗智が刊行する所の本にしたがへりそはかならずしもみなながらよしとにもあらねど附註あるは抄などの本文にくらぶればはるかにまさりたれば今はこの本文にしたがへりさるは古寫本にはこの本にもまさりたるもあめれど寫本の本文にしたがはばさかしらにみづからなほしもやしたると人のうたがひあらん事をおそれてかならずみなゝがらよしとにはあらねど印本なればこの寛永本にはよれる也（この寛永本を後にあらためて萬治三庚子初春吉祥日秋田屋平左衛門板行とせし本ありたゞ奥書をあらためたるのみにてこの本といさゝかたがふことなし）

この書の原本にとれる寛永年間の本はかみにもいへるがごとく外の本にくらぶればまされることすくなからずもとよりいとよき本なれどふみあき人の手になれりしかば假名のたがひまた文字に假名をつけたるなど誤れるもいとおほく誤字脫文衍字などすくな

からねどまたく誤れりと見ゆるはあるはなほしもしあるは文字をもくはへあるははぶきもせりさればたゞ異本にのみよりてあらたむる事なしあるは附注あるは抄あるは扶桑拾葉あるは群書類從などの印本をさきにたてゝさて校正をばくはへつそはさきにもいへるがごと寫本のみによりてあらためなばみづからさかしらもやくはへたると人のもどきおもはん事を思ひてなり猶誤れりと見ゆる所もあれどおほかたにことのこゝろのすめるかぎりはもとのまゝにておきつたゞいちじるしき誤りをのみ諸の印本によりてなほしたゞせり

原本の文中に眞名にかける所いとおほけれど初學の人のひがめよまん事を思ひて今大かたは假名に直してかけりされど原本の意をうしなはんもまたあたらしければその眞名をば本文の左につけたりすべてこの日記の古寫本おほくは眞名をまじへかきたるものぞかしたゞ定家卿本爲家卿本烏丸資慶卿本この三つもはら假名にはかきたまへり又本文の右につけたる眞名は傍註としるべし

いにしへよりいまにいたるまで文かゝん本にすべきはこの日記にしくはあらじかしこのふみよりさきだちて古今集の序または大井河行幸和歌の序などもあなれど古今集の序はそのまゝにはうけがたきもの也また大井河行幸和歌の序はひたすらもろこしの序文の體にのみならひてかゝれしかばこれにもかれにもかよはして文の本にはしがたかるべしされば文かかん本にはまづこの日記または伊勢物語などをこそすべけれさてこの日記のかきざまはいたづらに見すぐせばさまでにもあらぬことどものふかくあぢはひ見ればこゝろもふでもおよばざるばかりのあぢはひもいでくるぞかしそはこの日記のはじめにをとこもすなる日記といふものを女もして見んとてするなりとあるよりしてことをうらうへにいひてことばのあやをなせるをもてもはら興としてはかゝれぬそはこの下にあげたるを見てもおもふべし

發端　をとこもすなる日記といふものを女もして見んとてするなり

十二月廿二日　ふなぢなれどうまのはなむけす

同日　しほうみのほとりにてあざれあへり

同廿四日 ひともじをだにしらぬものしがあしはともじにふみてぞあそぶ

同廿七日 にしぐになれどかひうたなどいふ

正月七日 あをうまを思へどかひなしたゞ波のしろきぞ見ゆる

同九日 海はあるれど心はすこしなぎぬ

同十六日 霜だにもおかぬかたぞといふなれど波の中にはゆきぞふりける

同廿日 もろこしとこの國とはことことなるものなれど月のかげはおなじことなるべければ

同廿一日 春のうみに秋のこのはしもちれるやうにぞありける

同日 くろ鳥のもとにしろき波をよすとぞいふ

二月朔日 いその波は雪のごとくに白く貝のいろはすはうにて

同四日 女兒のためには親をさなくなりぬべし

これらみなことをうらうへにいひてことばのあやをなせりこをいたづらに見すぐすべきにあらずさてすべてこの日記を見んには紀氏みづからを女になしてかゝれしことをつかのまもわするべからず

この日記のうちに歌もいとおほかれどみづからよめるといふ歌一首もなくみな外の人のよめるになしてかゝれしもひとつの趣意と見えたり

正月九日おなじく廿二日の條に舟歌をのせられたる所ありそを外の歌のなみにかゝんもいかならんとは思へど心ひとつもてあらたむべくもあらねばたゞ原本のまゝにておきつ

この日記ところ〴〵に地名など見えたるをそこに注釋をもくはへたれどみづからゆきて見ざる所なれば猶ひがごとどもおほかりぬべしそがうへ土佐よりかへりのぼられし路次の國々の地理にかゝはりたる書もとぼしければあまねく考へしるす事あたはず

いまこの書に校合せる本は紀氏自筆本を定家卿のみづからうつしたまへる本（こは抄の本文におなじ）爲家卿自筆本烏丸資慶卿自筆本叉外に妙壽院本古寫本三本聞書見聞抄扶桑拾葉本群書類從本附注本などを校合せりそがなかに爲家卿の本はおほかたは附注におなじされどいさゝかたがへる所見ゆるをばみなもらさずかたへに

あげつさてこの日記はいま文化年間につたへ來て八百餘年をへたれば誤字脫文衍字すくなからざるべし中にも妙壽院本外の古寫本などおほくは眞名に直してかけりと見ゆかたのごと中古の人さかしらにもとは假名なりしを眞名になほしそを又よみひがめて假名にうつしまたそのまゝ眞名にあらためなどせしたび〳〵に原本の意をうしなひし事などかはなからんたゞいとふべきは後人のさかしらにこそ

京極黃門本奧書云文曆二年乙未五月十三日巳老病中雖二眼如一レ盲不レ慮之外見二紀氏自筆本一（蓮華王院寶藏本）料紙白紙（不打無堺）高一尺一寸三分許廣一尺七寸二分許紙也（廿六枚無軸）表紙續二白紙一枚一（端聊折返不立竹無レ軸）有二外題土佐日記一（貫之筆）其書樣和歌非二別行一定行書レ之聊有二闕字一歌下無二闕字一而書二後詞一不レ堪二感興一自書二寫之一昨今二日終レ功

桒門明靜

紀氏延長八年任二土佐守一在レ國載二五年六年之由一承平四年（甲午）五年（乙未）歷二三百一年一紙不二朽損一其字又鮮明也不二讀得一所々多只任レ本書也有朱印妙壽院本奧書云土佐日記以二貫之自筆本一（故將軍寶物希世之重寶也今度潛々自二小河御府一借二出之一逐二一覽一）依二或人數寄深切一書レ之古代之假字猶二蝌蚪一未レ憲臨レ寫有二魚魯一乎後見輩察レ之而已明應壬子仲秋候亞槐藤原

諸抄論

土佐日記聞書は著者の名をしらすされどおしはかりに元和寛永のころの人のわざとおぼしこはなべて世に見ゆるものにもあらずき〻もおよばざりしかどちかきころ一本を得て見るにいとまだしき説どもすくなからねどまたすてがたきもあるべしこの書は世にもしられざるものからこの日記の註釋のはじめとこそはいはめ

土佐日記見聞抄は小野山隱士槃桒記とのみありてそのとし月をのせずみな片假名にて註せりこれもまだしき説のみおほかれどさすがに又すてがたきをばみなとれりこの書はたえて見ぬものなれど屋代弘賢のぬしの藏本をかり得て今註釋のたすけとすることを得たり

土佐日記附註は人見卜幽の注釋にして季吟法印の抄にもまさりたる事あれば季吟法印の抄はひそかにこの書をとりたるもの丶やうにいへる人もあれどそはくはしくも見ざるうへのことにてまたくべちのもの

なる事しるしそは下にいふを見てしるべしまたこの書の跋にもひとしく萬治四年とあれどそのころは今のごとこの道もひらけざりし世なりしかばこゝとかしことおなじものゝ一時にいでくるをもかたみにしらざりしこともあるまじくもあらねばうたがふにたらずこの書すべて書法假名などのかきざまいとみだりがはしくもとは假名もてかけりと見ゆるを眞名にあらためあるは眞名を假名になほせりとおぼしくてこゝろえがたくいぶかしきところ〳〵もまじれゝどすべての次第はおほかたは爲家卿の本にたがふところすくなし

土佐日記抄は北村季吟法印の註釋にしてなべて世に土佐日記としいへばまづこの抄を見ることゝはなりぬさて本居宣長云そも〳〵この日記の註はたゞ季吟の抄のみ世にはしりてひろまりて附註といふものあることをばしれる人いと〳〵まれなり今この二つをあはせ見るに季吟の抄にいへることどもから書をひきたることなどその外もはらこの附註とことなる事なきはひそかに附註をとりてかけるものとこそおぼゆれどいはれしはよくも見ざるひがことなりけりそはこゝにあげたる證を見ても思ふべし正月七日の條靑馬の事をいへる所に附註には延喜式をひきたるを抄には公事根源をのみひけり同日はらつゞみをうちてといふ所に附註には莊子をそのまゝひきたるを抄にはおなじ莊子はひきたれどひける所の文いたく本書にたがへるはあらぬ書よりとりてひきたるなるべし同十四日海神の事をいへる條に附註には淮南子文選書紀などをひけるを抄には太平記をのみひけり同廿日日をのぞめば都とほしといふ條に附註には晉書をひきたるを抄には幼童傳とのみひけりまこと季吟法印のひそかに附註をとれりとならば附註よりまされることはありぬべし附註におよばざることはあるべからずさるを上にあげたるごと抄のかたは附註よりも書籍などの引おくれおほかるは季吟法印の附註をとらざる證といふべし

土佐日記首書は著者の名をしらずもはら抄とたがふことなしされどいさゝかたがふ所も見ゆれどしるすまでのことにもあらず

土佐日記註は契沖阿闍梨と縣居翁との説なりそを藤原宇萬伎がしるせるなり縣居の説はいかにもみづか

らきゝてしるせりと見ゆれど契沖阿闍梨の說はものよりとりてのせたりとおぼしいまこの兩說をもこの書の標注にあげたり

又一本縣居翁の說を宇萬伎がしるせる本に上田秋成が序文をくはへみづからの說をもくはへたる本あり秋成が說もよしと思はるゝをばみなあげたり

土佐日記打聞これも縣居翁の說を楫取魚彥がみづからの說をもくはへ抄の說をもよしと思ふ所はくはへてしるせるなり宇萬伎がしるせるとおなじことなれどかたみにたがへる所もありさて按するに魚彥がしるせるは縣居翁のにやくの說宇萬伎がしるせるは後の說なるべしされど宇萬伎がしるせるよりはことくはしこの說をもらさずあげたり

本　傳

貫之のぬしの傳は古今集目錄歌仙傳作者部類和歌色葉集羅山先生文集大日本史等に出たりされどこれにいでたることはかれにもれかれにのせにる事はこれにはぶきなどしていづれをひきてもことたらざればたゞふるきにもとづきて古今集目錄によれり

古今集目錄云紀貫之延喜六年二月任越前權少掾（御書所預）同七年二月廿七日任内膳典膳（興宮道潔興相替）同十年二月任小内記同十三年四月任大内記同十七年正月七日叙從五位下同月任加賀介同十八年二月任美濃介延長元年六月任大監物同七年九月任右京亮同八年正月任土佐守天慶三年三月任玄蕃頭同六年正月七日叙從五位上同八年三月任木工權頭同九年卒

紀氏系圖云孝元帝—彥太忍信命—屋主忍雄命—
—武雄心命・—武内宿禰（景行帝三年於紀伊國誕生　仁德五十五年薨）—木菟宿禰（仁德同日生）—
—眞鳥宿禰—𦿶（茲）寐臣—𥶡咋臣—小足臣—
—鹽手臣（推古舒明仕）—大口臣—大人（大納言　天智十五六三薨）—園益（從五位下）—
—諸人—麻呂（大納言　中務卿）—猿取（從五位上）—船守（正三位大納言式部卿　延暦十一四二薨六十二）—
—梶長（正三位中納言　大同元十二薨五十五）—興道（下野守從四位上）—本道（筑前守）—望之—貫之—
—時文（從五位上　内藏介）
—女子（内侍）

屋主忍雄命武雄心命として二人とせるは誤也こは景行紀を考ふるに屋主忍男武雄心命として一人とせり又古事記には武内宿禰を比古布都押之信命の子とせりこの系圖のごとくにては古事記にもあはず書紀にもかなはずかたがた誤なるべし

大日本史卷二百廿云按古今集序註作文轉子未知孰是云々古今集目錄にも貫之のぬしの父祖をのせず歌仙傳にも先祖未詳とあるによりて思へばふるくより紀氏の父祖はつまびらかならずとおぼしさるを紀氏系圖にことつまびらかにのせたるはよしとかせんあしとかせんさだめがたし

いまかく校正せるこの日記はわがちゝの世にいませしほどに校合したまひしなりけりさるをわがちゝはこのとゝせあまりさきにみまかりたまひぬそのころおのれまだいとわかゝりしかばさまでものゝこゝろもしらざりしかどちゝのつねにのたまへりしはおのれゆづるよひとのごともなりなばわが校合しおきつるふみどもをゆめなちらせそまたわがとしごろあつめたる書どもをもしみといふむしになところ得させそまたものにあそばんとおもはゞわがしをりしたるふみのはやしのあとをもとめてかならずこの道にあそべなどのたまひしをおもひいでゝまたさらに別本などあつめて文化六とせといふとしのはづきばかりより筆をとりて今すでに校正しかきをはりぬされど六とせ七とせをこのふみにのみなづみてすぐしゝにもあらずことふみどもをも見るついでごとにいさゝかおもひよりたるまだしき說をもしるしおけるを伊塲圭清山本明清などゝともに校正しかきつらねたればひとつのふみめきたるものとはなりぬもとよりものゝいとまにのみしつるわざにしあればかならずひきもらせることどもおほかりぬべけれど猶のちにもしるさんとて筆をおきぬるは文化十二年十一月七日

岸本由豆流

世に道の記といふものあまたあれと此むくのかうの殿のをおきては何をかはふるしとし何をかは本とせむされといとふりにたる世の手ふりにしあれは千とせの後のいまよりしてはたはやすくおもひときかたきことならなきにしもあらすかゝれはこれかために心をつくしおもひをこらしてときあらはしゝふみともこれかれあれと皆すゑのなかれをのみくみてそのみなもとはよくもたとらさりけるけにやなか／＼にみをせきみたしつゝ藻くつにこつみにうかひたゝよへるなむおほかりけるさるをこゝに今ひとりのさかし人ありこのぬしとしころ詞の海にあさりて玉にかひにひろひあつむるついてに紀の河のみなもとにしもかつきいりてかのみをせきみたしつゝうかひたゝよひたる藻くつにごつみにこゝらかいなかしやりてすまぬ淵瀬もあらぬまてさへなせりけるはいみしきいさをとやいはむそも／＼此ぬしはしもおのれをさなかりし時おなしあたりにしもうまれあひて竹うまのむかし難波津を手ならふほとよりなにくれにつけてもあそひかたきなりしをまたいくはくのよをたに經すよはひやうやく三十にみてるはかりにしてかゝる才學あるはそのうけえたる本性のさとりふかきのみにもあらす人はたゝいけらむよゝりなからむ後の名をこそねかふへけれと常に父ぬし永膺の老翁のさとしおかれしをしへをさへ心にこめてつかのまもわすれしといたゝきもたれしけうやうのふかさにもよれるなるへしあはれいみしの孝の人やあはれおむかしのしわさやと一度はめてひとたひはさしくみつゝ拙き筆とりて書つくるは文政とあらたまりしとしのしはすついたちの日なりまことやこをいたつきなせしぬしの名よ今のよのさかし人きし本の何某とて世中のはるにさへあひて咲さかえたる椎園のあるしなりこはるゝまゝにことそへて卷のはしをけかせるは世中をあきといひて蔦の垣内にかきこもれるおなし世のおろか人かたをかの寛光

世に道の記といへるもの其數是かれおほかれとむかしよりかみなかしもの人々ことにめてもてあそひしは此土佐日記なりけりされはあるは附注あるは鈔なといひて其ゆゑよしとき敎へたるふみともあまたあなれと河の堀江のあさ〳〵しき瀬をのみあさりてわたつみのそこひもしらぬふかき心をはつや〳〵思ひたとらすなむ有けるそをわが椎園の大人としころあかぬことにおほして歌よみ文つくらせ給ふいとまには何くれのふみともあまたよみあはせ難波江のあしのあしきをかりそけ山崎にをるてふまかりのまかれるをなほしこたひかくあらたにものし給ひつるなりけりいてや此注さくのかくめてたくいてきし事よ世の初學の人たちはわたりに舟をえたるかことはて打てこそよろこふへけれおのれこの大人の門に入たちてよりいまたいくはくならぬに此おく書をしも物せよとのたまふをいとよろこほひうけたまはりとくとおもへとふねならてかさなやめるは水よりもおのか心のあさきなりとそのまゝにしておもひたゆたひ四十日五十日まておこたりおきしをこの頃すてに板にもゑりはてぬときゝてかの口あみももろ持にになひいたせるになむ

文政二年四月

山本明清

土佐日記考證上

をとこもすなる日記といふものを女もして見んとてするなりそれの（のイすといふ定）（こゝろ見んとて定）（承平四年）
としの十二月の廿日あまり一日の日のいぬの時にかどですそのよし（扶ナシ）（群ナシ）（思ひて寫）（出門）
いさゝかものにかきつく（に扶）

をとこもすなる日記といふものを云々すべて日記といふものは旅の日記のみならず日々の事をしるせるをもて日記とはいへり中ごろの家記といへるものゝ如しそはみな漢字もてしるせれば男のわざにして女のわざにあらずそを今假字もてかけるはめゝしきわざなれば紀氏みづからかける事をかくして女のかけるおもむきにてかゝれつるなり是この日記の趣意といふべし女のかたよりいふ故に男もとはかけるなりをとこもすなる云々こは異本にをとこのすなるとあるかたやまさりたらん紀氏以前に篁日記（出二河海抄一）其後平仲日記（出二仁和寺書目錄一）これらみな日記とはいへりそれのとしの十二月の廿日あまり一日の日云々それのとしとは實は承平四年なれどさだかにもさゝでおぼめかしてかける也

ある人あがた（縣）の四とせ五とせはてゝれいのことゞもみなしをへて解由などとりてすむたち（館）よりいでゝ舟にのるべき所へ（に附）わたるかれこれ（これかれ）

王充論衡效力篇云能上二書日記一者文儒也老學庵筆記巻三云黄魯直有二日記一謂二之家乘一至二宜州一猶不レ輟レ書

宇津保物語藏開上云としかげがへりまうできつるまでつくれるきゝもその人の日記などなんそのなかに侍りし

源氏物語繪合云かのたびの御日記のはこをもとりいでさせたまひて云々

辨内侍日記云日記の御双子三帖大内裏のころ中納言のすけ殿にあつけさせたまひしを云

呂保殿歌合詞云日記は女すらもすべきわざならんよ云々

季吟云男文字にてする日記を女文字にてかくとの心なりといふ説あれどひがことなるべし云々

今按にこの説をとこもすなるとあるもの字になづみたる説なり源氏梅が枝に女手とある注釋に宣長云女手とは漢文にむかへて歌物語などをかくをいふ土佐日記のはじめに男もすといふ日記といふものを女もして見んとてといへるこゝろばへなり」

錦織齋云それのとしとはさだかにもさゝでわざとおほめかしていふことばのみなり」

眞淵云ひと日といひてきこゆるを又日とかさねていふは廿一日といひてその日のいぬの時といふ意なり」

宣長云諸國の司人の其任國をさして縣といふも古へ京より國々の御料の縣に官人などのゆきかひしころの名目ののこれりし也

古今集のはしことばに文屋康秀が三河掾になり

てあがたみにはえいでたゝじやといひやれりける土佐日記にある人あがたのよとせいつとせはてゝなどあるも縣とは其任國をさしていへる也しかるに縣をたゞ田舍をいふとのみ心得きつるは非なり

續日本紀卷廿一云天平寶字二年冬十月甲子勅云頃年國司交替皆以四年爲限斯則適足勞民未可以化自今以後宜以六歲爲限

三代實錄卷卅八云元慶四年冬十月七日丁亥制貞觀九年十一月格曰勘解由使起請偁去承和九年八月二十三日下諸國符偁凡國司交替官符到後百廿日内付了歸京若違此停留灼然合解又雖交替訖未得解由選任之人不得居官無職之徒不許直察今諸國所進不與前司解由之狀依理不盡返却而或國寄事辨申經年不進或國僅雖進之理亦不盡因茲前司未免抑屈之愁後司漸終四年之秩云々

類聚三代格卷五云承和二年七月三日太政官謹奏諸國守介四年爲歷事右謹檢選叙令初位已上長上官遷代皆以六考爲限慶雲三年二月十六日改定四年大同二年十月十九日更據令文弘仁六年七月十七日復慶雲格天長元年八月廿日令介以上別處六年之秩夫吏者民之所歸民者吏之所本頃年良吏之風希聞窮民之憂不息臣等以爲善人三年尚可勝殘四凶九載難復致功然則治之能否非年遠近代之濟濁賢將不肯伏望國司之歷因循慶雲一用四云々

菅家文草卷五云一秩四年盡忠節云々

百寮訓要抄云諸國の守などは受領と申なり國司の

しるしらずおくりす（ぬ定群）年ごろよくぐしつる（しらへ附）人々なん（ともイ）わかれ（わかたれ定）がたく思ひて其（扶ナシ）日しきりにとかくしつゝ（して爲）のゝ（みえ扶）しるうちに夜ふけぬ

ある人とはまへにそれのとしなどいへるがごとくわざとみづからをおぼめかしていへるなり　あがたは眞淵の説に班田の意とせられつるはいかゞもとは上田（アガタ）の意なりそは標注にあげたる宣長の説を見ても思ふべしなほくはしくは古事記傳にみえたればたゞあらましを標注にあげたるのみ　四とせ五とせはてゝ云々こは延長八年土佐國にくだりていま承平四年舟出すれば前後五年なればしかいへりこれ任國の間の事をいふ任限の事は世々にたがへれどこのころは四年とさだめられぬされば國にくだりて五年めには京にのぼれるなりその證は標注を見るべし　れいのことども云々こは聞書云例の事どもとは前官の人後任の人へ國務をわたす時官税公事いろ〳〵のことゞもをみななしをへてと也　解由の事は見聞抄云解由はとくるよしとよむ算用結解の事なりこゝにては算勘とゞこほりなしとの證文を後任の人より貰之うけとる也今俗間に手形などいふ類のごとし云々猶標注を見るべし　よくぐしつる人々云々見聞抄云よくぐしつる人々とはしるしらずおくりする中にとしごろ具し使たるはわかれがたくしてはやくかへらぬさゝ也　其日しきりに云々原本に其の字一字を脱して日しきりにとせり今は妙壽

事なり當時の守護人のごとし當任は四年なりよき國司なれば重任とてかされて四年をたぶ又延任とて任をのべらるゝ事もあり

日本紀略云弘仁六年七月甲午諸國司遷替以二四年一爲レ限

續古今離別　紀貫之美濃のすけにてまかりける時わかれをしみてよめる　みつね

「一日だに見ねば戀しき君がいなばとしの四とせをいかゞすぐさん」

續日本紀卷十一云天平五年四月辛丑制諸國司等相代向レ京遷替人未レ到以前上道或雖二交替訖一不レ付二解由一因レ茲去天平三年告二知朝集使等一已訖云々

日本紀竟宴歌　紀朝臣有世

阿禮渡留安比古禮阿比天阿知支奈久四年之間(アレハレヤアヒコニアヒテアチキナクヨトセノアヒダ)解由無之(トクルヨシナシ)なは

解由の事は延喜式太政官式政事要略卷五十六などにくはしくみえたり

眞淵云解由は國司年々の年貢などをうけとりわたせる計帳を勘解由使におくるに勘解由の判官主典勘定して日錄をつくりて勘解由の長官次官に申せば長官次官直に奏聞せしむる事とかやこの勘解由使の解由状をとりてと云事なるべし

新撰字鏡云餞馬乃波奈牟介

古今離別詞云さだときのみこの家にて藤原のきよふるあふみのすけにまかりける時にうまのはなむけしけるよゝめる云々

眞淵云うまのはなむけはものへゆくわかれにうまのはなをかなたへむけてつゝがもなくてよな

院本群書類從本によりておぎなふ

廿二日和泉の國までたひらかにとねがひたつ藤原言實(トキザネ)舟路なれど馬のはなむけ(餞)すかみなかしも(上中下)(かみなかしもながら群)ゑひすぎ(醉過)(あ定爲)ていとあやしくしほうみのほとりにてあざれ(鯘ナカヌ)あへり

たひらかにと云々原本にとたひらかに云々とあれど誤なる事明らかなれば今は爲家卿本附注本などによりてあらたむさて和泉の國は畿內にて都もちかくしかも土佐よりのさしいりなればまづそこまで海路たひらかにと願をたつる也　藤原言實は定家本爲家本などに藤原ときざねと假字にてかけり父祖しるべからず土佐の國人なるべし　うまのはなむけの事は標注を見るべし　ゑひすぎて云々こは醉過て也いたくゑひたるをいへり　しほうみのほとりにてあざれあへり云々こは提要にあげたるがごと例のことをうらうへにいへる也あざれは人のたはふるゝに餒をかねたり事は標注にくはしさて原本あざれあへるとすれど誤なる事しるければ今は妙壽院本爲家卿本扶桑拾葉本群書類從本などによりてあらたむ

廿三日山の(八木定爲)康教といふ人あり(て附)この人國にかならずしもいひつかふも(いてつかはるゝ人に)のにもあらず(もあらざりき衍)(なり定)これぞ(さなり群)(それに)ただしき(たゝかはしき附)(たゝはしき扶桑)やうにて馬のはなむけしたる守がらに

といふをもとにて後にはそのうまのはなむけの料に酒のませなどするをいへりさて馬は陸にあるゆゑにこゝは舟路なれどゝはたはふれいへるなり」

「書紀仁德紀云有二海人一貢二鮮魚之苞苴一献二于菟道宮一也太子令二海人一曰我非二天皇一乃返レ之令レ進二難波一大鷦鷯尊亦返以令レ献二菟道一於レ是海人之苞苴鯘（アサレヌ）二於往還一

和名抄鱗介部云餒野王按餒（和語云阿佐留）魚肉爛也

字鏡集云鯘アザル

源氏花宴云みな人はうへのきぬなるにあざれたるおほきみすがたのなまめきたるにて云々

眞淵云あざれのざれは洒麗の音なりあはあまへるを略していふか源氏にあざれたるおほきみすがたなどいふにて思へ季吟の左禮の字也といふ說は誤れり

春海翁云あざれは肉のあざれたるなどいふと同じことばにて人のうへにていふはみだれたるさまをいふなるべしこゝにしほうみのほとりとことさらにかけるは鹽のあるうみべにても人はあざれあへりとたはふれかける也そは魚の肉は鹽なくはふればあざれぬものなれば也

新撰姓氏錄卷七云山公内臣同レ祖味内宿禰之後也

同書卷十云山公垂仁天皇皇子五十日足彦別命之後也

同書卷十八云山直火御影命十一世孫山代根子之後也

やあらん國人の心のつねとしていまはと（て定）見えざ（ず定）なるを心あるものははぢずき（にイ）なんきける（わたりける爲附）これはものによりてほむるにしもあらず　山の康敦云々山といふ氏は姓氏錄に山公山直山首などみえたりこゝなるはいづれの末ならん父祖もしるべからず定家卿本爲家卿本などに八木とありこれも姓氏錄にみえたり　いひつかふものにもあらず云々こは爲家卿本附注本などにいてつかはるゝひとにもあらざりきとあるをよしとすこの本のごとくにては義つまびらかならずいてはゐての假字のたがへるにて率（サ）てゆくなどいふゐてとおなじ語なり　かみがらにやあらん云々こは紀氏みづから謙退のことば也そは國司のあしきゆゑにやあらん今任限はてゝ京に上る時はなべての人は薄情なれば今はとてうまのはなむけにも見えざるを心ある人はさる薄情なる事をはぢてとふらひきたるよとの意也

　はぢずきなんきける云々こはかならず誤字あるべしこのまゝにては意きこえがたしある說に耻過と見たる說あり又身のいやしきを耻ずと見たる說もあれどいづれもおだやかならず異本にはぢてきなんきけるとあるにてことあきらかなれどたゞ一本によりてあらたむべくもあらねばさておきつ猶考ふべし　國人の心のつねとして云々季吟法印の說に國人はくにたみとよむべし後嵯峨院の御諱を國仁と申せしより儒書にてもくにたみとよみ侍りとあれど文

同書卷二十云山直天穗日命十七世孫日吉首日乃名命之後也
同書卷三十云山首大國十一世孫尾張屋主都久代命之後也
萬葉十六
堦、熊來酒屋爾眞奴良留奴和之誘比立率而來奈麻之乎眞奴良留奴和之
同十九長歌
荒風浪爾安波世受平久率而可敝理麻世毛等能國家爾
釋日本紀卷十六云土俗古語ニ云ヒト爲レ避ニ後嵯峨院御諱一可レ讀ニヒトノ一也
眞淵云御諱をさくる事は今上と太上天皇との二代のみなり續紀にみゆ代々の御諱をさくる事にあらず又他の國のさだめには始祖と五世の先の諱までをさけてその外はさけざる也そのさだめすら皇朝にては用ひられし事なし
續日本紀卷卅八云延暦四年五月丁酉詔曰臣子之禮必避ニ君諱一比者先帝名及朕之諱公私觸犯猶不レ忍レ聞自今以後宜ニ並改避一於レ是改ニ姓白髮部一爲ニ眞髮部一山部爲ニ山一
類聚國史卷廿八云　同年九月乙巳改　伊豫國神野郡一爲ニ新居郡一以レ觸ニ上諱一云々
續日本後紀卷二云天長十年七月癸巳天下諸國人民姓名及郡郷山川等號有レ觸レ諱者一皆令ニ改易一云々
諱を避る事は顧氏家日知錄・陔餘叢考卷卅一なほそのほかあまた見えたれど所せければこゝには略せり」

字のまゝにくにひと〳〵よむべき也尤釋日本紀に後嵯峨院の御諱を
はゞかりて土俗をひと〳〵のみよめるよしあれど釋日本紀の作者卜
部懷賢は後嵯峨院後深草院の御時の人なりしかばはゞかれる也そ
を今の世までの例とはしがたかるべししかもいにしへより御諱を
はゞかりて文字をかへたる事なとは標注に證をあげたるがごとく
なれど文字をそのまゝにて訓をかへたる事をきかず又漢土にもそ
のごとく文字の書をはぶきあるは文字をかへたるなとはあれど文
字の音のみをかへたる事をきかず猶この事標注を見てしるべし
これはものによりてほむるにしもあらず云々こはおくりものゝよ
きによりてその人をさへほむるにはあらずまたく厚情をほむると
の意なり

廿四日講師うまのはなむけしにいでませりありとあるかみしもわら
はまでゑひしれて一文字をだにしらぬものしがあしは十文字にふみ
てぞあそぶ

眞淵云いにしへは國々に國分寺ありて其住職を講師といひて其國
の僧尼の司なりこれは土佐の國分寺の講師也　ゑひしれては醉て
いふかひなくなりてと云意にてしれものなと云しれと同じ詞也說
書云醉しれては醉人はおろかなる物なればかくいふ也杜預が左傳
の註にいふ白癡の字の心なるべし云々かた〳〵標注を見てしるべ

眞淵云すべてものといふはその品の名をさして
いはずひろくいふ時のこゝばなり」
延喜玄蕃式云凡諸國々師擇二年四十五已上讀師
四十已上者一補レ之
又云凡延暦寺三綱一任之後任二諸國講讀師一其上
座寺主任二講師一都維那任二讀師一
政事要略卷五十五云延暦十四年八月十三日符偁
右大臣宣奉勅如聞國師任限六年兼預二他事煩一
以二解由一自今以後宜改二國師一曰二講師一毎國置二
一人一」
源氏をとめ云大將さかづきさしたまへばいたう
ゑひしれてをるかほつきいとやせ／＼なり云々
萬葉九長歌
世間之愚人之吾妹兒爾告而語久云々（ヨノナカノシタルヒトノワギモコニツゲテカタラク）
竹取物語云あれもたゝかはでこゝちたゞしれに
しれて云々
本朝文粹卷一源順歌云不レ足レ言不レ足レ嘲共耻白（シレ）
物（モノ）之入二青雲一
左傳成公十八年云周子有レ兄而無慧不レ能レ辨二菽
麥一故不レ可レ立杜預註云不慧蓋世所レ謂白癡」
宇津保國讓中云さらばましていかにこれしがた
めにうれしくさふらはまほしく侍らん云々
同下云猶しあなづらはしくかろ／＼しくお
ぼし」
和名抄居處部云館唐韻云館官反作舘和名多知
釋日本紀卷十三云高櫃舘私記曰案假名日本紀作二高都斐乃多知一」
書紀神代紀云兼設饌百机以盡主人之禮云々
後撰夏部詞云小將はかれがたにて侍らざりけれ

し　ものしがのし文字はら　誤りにてものらが歟眞淵はついでにも
のらがとして注をばくだされぬされど諸本みなものしがとあれば
今あらたむべくもあらねばさておきつ又いふるにけふしまれけふ
しこそなどいふし文字と同じくて助字にもやあらん助字のし文字
の下はかならずはとうくるやうにいへる説あれどかならずさも
かぎらざるべしそは標注の考證を見てしるべし　一文字をだにし
らぬものしがあしは十文字にふみてぞあそぶ云々こは例のたはふ
れかけるにて酔じれてあしもともさだまらずしどろなるをいふ也
今いふ千鳥あしなどいふにおなじ
廿五日守のたち（舘）よりよびにふみ（文）もてきたれり（きたり定）よばれていたりて（いきて爲）日ひ
と日夜ひと夜とかく（うとからず附）あそぶやうにて明にけり
守のたちは新任の土佐守の舘をいふさてそこより紀氏をよびにお
こせしなり
廿六日なほ守の館にて（にあるに爲　にてあるに定）あるじ（饗イナシ）しのゝしりてをのこ（郎等　までに爲附定）あまたにものかづ
けたりからうたこゑ（詩　に附）あげていひけりやまと歌あるじ（主人）もまらうど（客人）もこ
と人もいひあへりけり（定ナシ）
今日もなほ昨日のごとく今の土佐守の館にありとなり　あるじは

饗にてもてなし饗應するをいふをのこまでにものかづけたりとい
ふにてみづからはもとより從者までといへるなり　詩を声にあげ
て誦し歌をば人々もよみしとなり　からうたは詩を、ひやまと歌
はたゞの歌をいふこはからうたにむかへてたゞの歌をやまと歌と
いへる也　さてあるじは新任の土佐守まらうどは紀氏みづからを
いへり

からうたはこれにはかゝずやまと歌あるじの守のよめりける
都いでゝ君にあはんとこしものをこしかひもなくわかれぬるかなと
なん有ければかへる前の守のよめる（よめりける扶群）
しろたへの浪路をとほくゆきかひてわれににべきはたれならなくに
こと人々のもありけれどさかしきもなかるべしとかくいひて前の守
（群ナシ）も今のももろともにおりて今のあるじも（さきのもいまのも爲附）前のも手とりかはしてゑひ（醉）
（言）ごとに心よげなることとしていでにけり（いりに群）（さりにイ）

都いでゝ云々この歌は新任の土佐守のよめる也こゝろは都をいで
ゝより君にあはんと思ひてこそきつるにかくはる〲とこしかひ
もなくとくすみやかにわかるゝことよとなり　かへる前の守のよ
める云々こは紀氏みづからの事なれどこの日記すべて女に託して
かゝれつればわざとかくよそ人のやうにいへるなり　しろたへの

ばたらやすらひてあるじいたせなどたはふれけ
れば云々
伊勢物語云在中將藤原まさちかといふなんま
らうどざねにてその日はあるじまうけしたりけ
る云々
蜻蛉日記云かへさはしのぶれどこゝかしこある
じしつゝ云々
大和物語云大將にものかづけ忠峯もろくたまは
りなどしけり云々
季吟云纏頭かづけものと拾遺行によめりきぬな
どかづけあたふる事也
眞淵云かづけるは衣裳などもらへばかならずうち
かづきて禮をする故に人にとらすをばかづけ物
とはいへり」
古今序云そも〲歌のさまむつなりからのうた
にもかくぞあるべき」
季吟云あるじをさきにいひてまらうどを次にか
けるは紀氏の自記なればにや又當官をたつとぶ
心ばへにや侍らん」
しろたへの浪とつゞけたる歌萬葉に見えず按す
るにこのころよりの事なるべし
古今春上　　よみ人しらず
わたつ海のかざしにさせるしろたへの浪もてゆ
へるあはぢしま山
新勅撰春上　　よみ人しらず
しろたへのなみぢわけてや春はくるかぜふくま
ゝに花もさきけり」
古事記に佐加志賣（サカシメ）とちかき賢をさかしと訓ぜ
り書紀に賢賢人賢哲賢良明哲君子などをもしか

訓ぜり
古今序云月を思ふとてしるべなきやみにたとれる心々をみたまひてさかしおろかなりとしろしめしけん云々」
和名抄第九云土佐國長岡郡大角（今保部）
眞淵云浦戸は大海ゝ入海とをへだてゝさし出たる所也　津より南へ二里ばかり也古府より三里餘なり今の府よりも三里ばかり也そこをさして（ときまづいひてさて大津よりそのつゞきの鹿子の崎の事ありいでたちいそぎはかどだちの設なりいそぎを見れどゝいふは女のさま也のみそといふはかへるよろこびの中にこの事のかなしみあるをいふなり」
宇治拾遺第十二云いまはむかし貫之が土佐守になりてくだりて有けるほどに任はてゝの年七八ばかりの子のえもいはずをかしげなるをかぎりなくかなしうしけるがとかくわずらひてうせにければなきまどひやまひづくばかり思ひこがるゝほどに月ごろになりぬればかくてあるべきことかはのぼりなんと思ふ　ちごのこゝにてなにとありしはやなどおもひ出られていみじうかな

云々この歌紀氏のうたなり萬葉に往反をいきかひとよめりこゝろはかくのごとく遠き海路をゆきかへりてからきめにあへる人は外にもあらじと思ひしを又われに似て君にもからき波路をへておはしけりとなり　さかしは古事記書紀などに賢の字をよめれどその意にあらずこゝはたゞ歌のよきをいふべし　もろともにおりて云々眞淵云この舘をいづるにあるじも階よりおりておくるさまなり　ゑひごとに云々眞淵云ゑひごとは醉言なりかどでのことほぎなどいひかはすをいふなるべし

廿七日大津より浦戸をさしてこぎいづかくある〔するう定〕うちに京にてうまれたりし〔定ナシ〕女子こゝにして〔くにゝして定附　くにゝて扶〕俄にうせにしかばこのころのいで〔出〕たち〔立〕いそぎを見れどなにごともえいはず〔えいはれずイ　いはず定群〕京へかへるに女子のなきのみぞかなしみこふるある人々もえたへず〔堪〕このあひだにある人のかきていだせるうた

宇治拾遺第十二
みやこへと思ふもの〔に路　を妙〕ゝかなしきはかへらぬ人のあればなりけり

大津浦戸みな土佐國の地名なり　こゝにして俄にうせにしかば云々こは土佐國にてうせたる也こゝの泊にてうせたるにはあらず定家卿本扶桑拾葉本附注本などにくにゝしてとあるところおなじ

しかりければはしらにかきつけける
みやこへと思ふものゝ云々
眞淵云宇治拾遺につらゆきのうたとせるは後にきゝつたへて　きしならん今はみづから歌とせずまたすべてみづからのなしも人のさまにかけるもおほければいづれにてもありなん」

眞淵云あるものと云々この歌萬葉四に「夢之相者苦有家里覺而搔探友手ニ毛不所觸者とあるに似たる意なりいづらはいづこになるぞといふがごとし
源氏桐壺云むなしき御からを見る〳〵猶おはするものと思ふがいとかひなければ云々」

見聞抄にこゝにしてはこの國にてうせたるにて京へのぼりぎはの事にはなかるべしいかなれば京へのぼるによりて京より同道の女子を思ひいづるよしなり懐舊の心ちあはれ也といへるがごとし
いでたちいそぎは旅たちの用意なとするをいふ物語ぶみにいとおほき語なりふぐるにいとまなし大和物語に九月つごもりみないそぎはてゝなどあるもこゝとおなじくてものゝ用意などしはてゝといへるなり　ある人々もえたへず云々こは父母のみならずほかの人までもかなしみにたへざるなり　みやこへと思ふものゝ云々この歌はさきに京へかへるに女子のなきのみぞかなしみこふるとあるをうけてよめるなりいまみやこへかへらんとていでたてばなべてはものゝうれしきを今しものゝかなしきはかへらぬ人のあるゆゑぞとなりこの歌は宇治拾遺にもいでゝ宇治拾遺には紀氏の歌とせりさるをこの日記にある人のうたとすれと宇治拾遺の誤にあらずこの日記のはじめにもある人あかたの四とせ五とせともあればこゝも紀氏みづからの事をある人になしてかゝれつるなり又考ふるにある人のはある人にとありしを誤れる歟いづれにまれこの歌は紀氏の歌なる事しるし

またあるときには　　ら定爲こ君

あるものとわすれつゝなほなき人をいづくととふぞかなしかりけ

眞淵云鹿子崎は大津とならひて有鹿子水門とはことなり」
眞淵云心あるやうにとは歌よむ心あるをいふべしほのめくはそのけしきみえてほこりかなる意也
春海翁云歌よむ心あるをいふにはあらず心さしあるやうにいひなすなり」
和名抄龍魚類云鮑唐韻云鮑辨色立成云仁部一云久智魚名也
物類稱呼云いしもち京江戸ともにいしもちといふ西國四國にてくちといふ
眞淵云くちあみは網にて今の俗語に口おもしといふごとく口にあみをはりたりといふ名なりもろもちにてたがひにたすけあふてやう〳〵してよみ出したるなり諸持といふよりになひ出せるといへり
宣長云金原氏方がいはく今世に海人のしわざに引網といふ有てそれに口網奥網といふ有その口網はひろさ六七尺斗長さは五六十丈もあるを海中へはへおきて魚をとるそを引あぐる時に海人どもこゝらなみたちてになひいだす也これならんといへりさもあるべし歌よむこと口重きをたはふれにかの口網のおもくてこゝらの人のかゝりてになひいだすにたとへいひたりけんといへり云々此說玉勝間に出たり
上田秋成云網には口といひてうちひろごる所をいふ東我が波の浦人の今もしかいふ也されど口網の名によぶ物はきこえず」
眞淵はなしと思ふ云々の歌はわかれ惜と思ふ

るといひけるあひだに鹿兒の崎といふ所に守のはらからまたこと人
これかれ酒なにともておひきて磯におりゐてわかれがたきことをいふ
守のたちの人々の中にこのくる人々ぞ心あるやうにはいはれほのめ
くかくわかれがたくいひてかの人々のくちあみももろもちにてこの
うみべにてになひいだせるうた

をしと思ふ人やとまるとあしがものうちむれてこそわれは來にけれ

といひてありければいといたくめでゝゆく人のよめりける

さをさせどそこひしられぬわだつみのふかき心を君に見るかなとい

ふあひだにかぢとりものゝあはれもしらでおのれし酒をくらひつれ
ばはやくいなんとてしほみちぬ風もふきぬべしとさわげば舟にのり
なんとす

あるものと云々聞書云この歌のこゝろはなき人をなくなりたりと
いふことをさへもなけきのあまりにうちわすれてともすればいづ
くにあるぞとゝひなどすることのあるおもむきなり有無をさへわ
するゝ計なげきにしづみたる事もつともあはれなり　鹿兒の崎は
前後のつゞきもて考ふるに土佐の國のうち　なる事あきらけしさる

を附注に書紀應神紀の鹿子水門とあるをひきたるは甚しき誤なり
又タ所にかこの島かこの濱かこの崎かこの川なとあれどいづれも
當國にあらず　守のはらからは新任の土佐守の兄弟也　人々の口
あみもろもちにて此海べにてになひ出せる歌云々こは例のたは
ふれかけるにて人々の口かろくとくもえいひいです口おもきをく
ちあみのおもきにたとへていへりさてくちあみの事說々有て定め
がたし標注にあげたる諸說を見て心のひかんかたにしたがふべし
予心みに考ふるにくちあみは魚の名の鮸をとる網なるに人々の口
を鮸網によせていへるなるべし鮸は今もふいしもちの類なりそは
くはしく標注にあげたりもろもちにもろともにもちあふをいへり
鮸網を口網によせ網といふより海邊ともいひにになひいだすともい
へり　をしと思ふ人やとまる　あしがもの云々あしがもにうちむ
れてといはん序なり鴨のたくはすへて群とぶものなればなり　ゆ
く人の云々こは原本行人ゝと文字にかき　たびうとゝ訓せりさる
本ありしかわたくしにしかよみゝか今は諸本にゆく人とあるにし
たがへり　さをさせど云々紀氏みづからの歌也そ　ひしられぬは
はてかぎりもしらずといはんが爲と　さてこの歌はふかき心
を今こそ見たれといはんとての句は序におきたる也　の歌序歌と
いふべし

といふ鴛なそへて鴛といふより芦鴨といひて
うちむれて、いへき料也
作海翁云この哥は惜し鴛ないひよせたるにはあ
らず
萬葉十一
葦鴨之多集池水雖溢儲溝方爾吾將越八方
古今戀一　　よみ人しらず
あしかものさわく入江のしらなみのしらずや人
をかくこひんとは」
眞淵、そこひははてかきりといふほどの詞なり
水のそこのみにかきらず萬葉にあめつちのそこ
ひのうら、又野のそき山のそきといへるもみな
はてかきりの事にいへり天地のそこひのうらは
天地のはてかきりのうら也そきはこひの約なれ
はそきそこひ同語なり
古今戀四　　素性法師
そこひなきふちやはさわぐ山川のあさきせにこ
そあたなみはたて
後撰春下　　三條右大臣
かぎりなき名におふ藤の花なればそこひもしら
ぬ色のふかさか
紫式部日記云ちひさきとうろを御帳のうちにか
けたればくまもなきにいとゞしき御いろあひの
そこひもしらずきよらなるに云々
源氏末摘花云人のかたちはおくれたるもなほそこ
ひあるものなとて云々」
李吟云李白　汪倫　あたふる詩に桃花潭水深千
尺不ㇾ及汪倫送ㇾ我　よ　かなへり」
眞淵云李吟說にわたつみは海の字をよめりとあ

ろい…誤也わたゝはまを渡るといふ事より則のたといひて海の名とせり山をこしてゆく國を越の國と云ごとくつは天つそら國つ神などのごとく助辭也みはもちの約にて則海つ持にし海をたもちたま　神なる事古事記に見えて明らか也そを轉じて只海のたにもいふこゝは海の事也」季吟云おのれしといぶしは助字也この詞いせ物語にかぎりなくとほくもきにけるかなとわびあへるに渡守はや舟にのれ日もくれぬといふに似たり」

古今八歌所　甲斐歌

かひがねをさやにも見しかけゝれなくよこほりふせるさやの中山

かひがねをねこし山ごしふくかぜを人にもがもやことつけやらん

季吟云この甲斐歌のはじめの歌はこのかぢとりのいなん事をいそぐをかく別をしきをりに心もなくといはんためにやのちの歌は其おくりきたる人々もと都の人なれば京に思ふ人なきにもあらぬをりふし梶とりの風もふきぬべしといひさわげば其かぜを人にもがなことづていひやらんといふこゝろにうたへるなるべし甲斐は東國なれば西國なれどゝかけり」

和名抄舟部云蓬庫唐韻云蓬庫和名布奈夜加太舟上屋也

蜻蛉日記にさきだちたりし人舟にこもやかたを引てまうけたり云々」

藝文類聚卷四十三引劉向別錄云有麗人歌賦漢興以來善雅歌者魯人虞公發聲淸哀蓋動梁塵」

このをりにある人々をりふしにつけて（つゝイ）から歌とも（の定）時につかはしき（あはしきイ）をいふ又ある人にしぐ（の附）になれどかひうたなどいふかくうたふ（うたふ附）にふな（逢）（捧）やかたのちりもちり（堅）（定シ）そらゆく雲もたゞよひぬとぞいふなるこよひ浦戸にとまる（とゞまるイ）藤原の言實橘の季衡こと人々おひきたり

をりふしにつかはしきを云々こはそのをりに似合しき餞別の時にかなひたる古詩などうたひしなるべしさかひ歌は甲斐歌なり古今に出たり標注を見るべしこゝにしもことさらに甲斐歌をうたふは季吟の説の如しこれも標注を見て知べし　かくうたふにふなやかたのちりもちりそらゆく雲もたゞよひぬとぞいふなる云々こはこの時浦風のふきて塵などのたちしを歌にことよせてある人のいへりしなるべしふなやかたのちりもちりとは漢の虞公が故事なるべしそらゆく雲もたゞよひぬとは列子に出たる秦靑が故事なるべしともに標注にあげたるを見てしるべし　藤原言實は上の廿二日の條に出たる人なり橘季衡これも土佐の國人なるべし父祖しるべからず

廿八日うら戸よりこぎ出て大みなとをおふ（そ附）このあひだにはやくの守（うイ附くに）の子（の守群）山口の千岑酒よきものどももてきて舟にいれたりゆく〳〵のみくふ

大湊は前後のつゞきもて考ふるにいまだ土佐の國の中なる事あきらけし　大みなとをおふ云々こは開書に風も舟をおはする也卅の緣語なればなりといへるがごとし抄におふとは追たづねてゆくこゝろ也とあるは誤なり　はやくの守の子云々こは紀氏より以前の土佐守の子なるべし　山口千岑父祖つまびらかならず山口といふ氏は姓氏錄にみえたり

廿九日大湊にとまれりくすし（醫師）ふりはへて屠蘇白散酒くはへてもてきたり心ざしあるに似たり

廿九日今日は十二月のつごもりなれは醫師の屠蘇白散などもてきたれる也さて日本長暦をもて考ふるにことしは承平四年なれば十二月小の月なり　くすしは土佐國の醫師なるべしふるくより醫師は講師讀師のごとく國ごとに一人をおかれし也そは標注を見てしるべし　屠蘇白散はいづれも正月元日に用ふる藥酒なること今の世もおなじこは標注にくはしく世を出せり標注にあげたる外にも西宮抄北山抄江次第または儀類典などにもくはしくみえたれどあぐるにいとまなし

元日なほおなじとまりなり白散をあるもの夜のまとて舟やかたにさしはさめりければ風にふきならさせて海にいれてえのますなりぬ

列子湯問篇云薛譚學謳於秦青、未窮青之技、自謂盡之、遂辭歸、秦青弗止、餞於郊衢、撫節悲歌、聲振林木、響遏行雲、薛譚乃謝求反、終身不敢言歸」

萬葉六長歌
恐乃坂爾幣奉吾者叙追遠杵土佐道矣（カシコノサカニヌサマツリワレハゾオヘルトホキトサヂヲ）

眞淵云萬葉に吾、叙追とあるも舟路の事をいへるにてこゝもおふといふもおなじ」

新撰姓氏錄卷九云山口朝臣道守朝臣同祖武内宿禰之後也

同卷廿二云山口宿禰坂上大宿禰四世孫都賀直之後也

眞淵云はやうのかみの子は貫之より前の守の子千岑といふ人國のさるべき女のはらなどにうまれてとゞまりゐたるなるべし」

職員令云凡國博士醫師國別各一人云々」

古今集上
春日野のわかなつみにやしろたへのそでふりはへて人のゆくらん　貫之

大和物語云かゝる心ばへにてふりはへきたれどわがむつましきすさもなし云々

宇津保俊蔭云かくふりはへたまへるにいかでかくれんとて出たり云々」

延喜典藥式云白散一劑（白散歲日以酒服五分一家有飲則一里無病）屠蘇一劑（屠蘇治惡氣溫疫）

又云毎年十二月進元日料白散四百十五劑合

醫針生等帖并背云々

荊楚歳時記云正月一日長幼悉正衣冠以次拜賀進椒柏酒飮桃湯進屠蘇酒膠牙餳云々
容齋續筆卷二云今人元日飮屠蘇酒自小者起相傳已云々
歷朝樂事云十二月醫人亦送屠蘇袋同心結及諸品湯劑於常所往來者云々
この外千金方本草等に屠蘇の事みえたれど所せければみなひかず」
尙書云月正元日孔傳云月正正月元日上日也
玉燭寶典卷一云正月爲端月其一日爲元日云々」
延喜大膳式云正月最勝王經齋會供養料芋六合滑海藻二兩二分云々」
西宮記卷一云内膳供御齒固大根瓜串刺押鮎燒鳥付進物所云々
源氏初音云こゝかしこにむれゐつゝはがためのいはひしてもちゐかゞみをさへとりよせて云々
河海抄卷十云齒固事見掌中曆又本爲前云々内膳自青璅門供御鬪具盛青瓷根一坏串差二坏押鮎煮鮎猪宍以雉代之宍一坏鳥一坏代田之云々長和三年正月二日齒鋺御覧是其例也云々」
久安七年正月一日台記云早朝參禪閣御前次參陽院御次固齒如常云々
兵範記云保元三年正月一日右大臣殿召御裝束入御自御齒固女房被供之云々
世諺問答云問同日齒固といひてもちひかゞみにむかふ事はいかなる事ぞや人はなをもてよはひ

芋も海帶（アラメ）もはがため（坂田め 妙附）もなしかうやうの物なきくになりもとめもおか（しも定）ずたゞおしあゆ（押年魚）のくちをのみぞすふこのすふ人々のくちをおしあゆもし思ふやうあらんやけふは京にのみぞ（定ナシ）思ひやらるゝ九重のかどの（こへのかどの定）しりくめの繩（定ナシ）のなよしのかしらひゝら木（杜谷樹）らいかにとぞ（ぞなど附）ひあへる

元日は承平五年正月元日なり元日の事標注を見るへし今日も猶おなじとまりにて大湊にありと也　白散をあした元日にのまんとてある人のしわざに舟やかたの物のあはひなどにさしはさみおきたりしを風にふきなくさせて海にいれてのまずなりぬとなり　ふきならさせては附注本にふきなくさせてとあり又異本にふきながさせてとあり異本のかたまされり此本のごとくならさせてと有ては　ことのこゝろ聞えがたし聞書にはふきならさせては風にふきなびかせてなりとあれと猶こゝろゆかず　いもあらめ皆今も正月元日に用ふるもの也はがためは原本と資慶卿本とに坂田めとあれと定家卿本爲家卿本　本ともにはがためとありて坂田めとあるはこの原本と附注とのみ也そははがためとありしを文字の似たりしまゝにさかためと寫し誤りしを又文字に直してかけりしなるべしされば今は諸本によりてあらたむはがためは齒固にて標注に　はし又考ふるに坂田めの坂田は地名にもやあらん讃岐國香川郡に坂田と

とするがゆゑに齒といふ文字をばよはひとよむなりはがためはよはひをかたむるこゝろなりもちひは近江國の火きりのもちひなもちふべきことなり」
延喜主計式上云火乾年魚押年魚煮乾年魚云々
同書内膳式云土佐國押年魚一千隻云々
江家次第卷一云元日押鮎一坏煮鹽鮎一坏云々
拾遺物名　おしあゆ　すけみ
はしたかのおきゑにせんとかまへたるおしあゆかすなはすみとるべく
賀茂保憲女集云かしらしろきおきなおんなけがためとおぼしき事ないひとゞめてあゆのくちをうつくしみかげのうかばぬもちひのかゞみとして云々
上田秋成云押鮎は今の干鮎の事にやゝ別ニ製あるもの、もあるべしいづれにも喰つきがたきもの故人々の口つきさま／＼むつかしげなるを見るにもその容のあやしげならんを心にかけて物はなすべかめるなど用意のほどおもしろきかきざま也」
楚辭九辯云君之門以九重　補注云天子有九門謂關門遠郊門近郊門城門皐門庫門雉門路門也
駱賓王詩云山河千里國城闕九重門」
古事記上云即布刀玉命以尻久米繩控度其御後方云々
日本紀纂疏云端出之繩註云左繩端出此云其義一又解其訓一也繩之直之神道以直爲本左者陽德取清明之義一端出者絢不整齊其所餘

いふ所名あり延喜式などに讃岐の國より海ノ藻を出せし事みえたれば坂田めは讃岐國香川郡坂田よりいだせし海藻にやあらんさてこの說はたゞこゝろみにいへるのみいづれにまれはがためとあるかたやまさりたらんかうやうの物なきくになりもとめもおかず云々此國はかうやうの物なき國なる上にもとよりさる用意してもとめもおかずと也　おしあゆは原本ほしあゆとあれど諸本皆おしあゆとし下の文にもおしあゆとあれば今は諸本と下の文とによりてあらたむ元日におしあゆを用ふる事標注を見てしるべし　このすふ人々云々こは原本あふ人々とあれど諸本と下の文とによりてあらたむ季吟云口子とかきて遊仙窟にくちすふとよめりこの年魚をくふ事をたはふれてかけるなるべし　九重のかどの云々九重は內裏をいふ宮門のしりくめ繩なよしのかしらひらぎなど思ひやらると也又考ふるに定家卿本にこへのかどのしりくめなはとあるは小家の門の也附注本にこがの門のとあるも小家とありしをよみ誤りて假名に直せる也　しりくめの繩は古事記に出たり今いふしめ繩也そを正月かくる事今世もおなじこの事漢土にもみえたりともに標注を見てしるべし　なよしのかしらひゝら木云々こは今世も節分にはいわしのかしらひゝら木など門にさす事これらのうつりしなるべしされど今はなよしをもちひずいわしとなりてよりことすでに久しそは標注にひける小藝抄四季物語などを見ても思ふべし

之芒端一也是直中而不レ飾之意故以二直清質一爲二神明之三德一一條繩而比二三德一也界者分二染淨之地一即今世注連是也云々
世諺問答云しめ繩といふ物は左繩によりて繩のはしをそろへぬ物也左は清淨なるいはれなり端をそろへぬはすなほなる心也されはあまてるおほん神の天の岩とを出たまひし時しりくめ繩とてひかれたるは今のしめ繩なり云々
眞淵云しりくめ繩は書紀に左繩端出とも端出之繩ともかけり和名抄に注連之利久米奈波日本紀私記云端出之繩續同與注とありこは物をへだつるしるしのみ也正月物いみするとてかくる也
宣長云しりくめなはゝ今いふしめ繩也つゞむればおのづからりくははぶかりてしぬといはるゝなり尻は藁の本をいひくめはこめにてわらのしりをきりすてずしてさながらこめおきたるなはなり
荊楚歳時記云正月帖二畫鷄戸上一懸二葦索於其上一云々」
書紀神代紀一書云口女自レ口出レ鉤以奉焉口女即鯔魚也
和名抄鱗介部云鯔孫愐切韻云鯔魚名也似レ鯉而與之鯔謂奈
本草和名云鯔人頭和名奈與之
字鏡集云鯔ナヨシ
蘆濺抄卷三云開鼻ト云鬼人チ喰ントスルチバ鯡チ炙串ト名付テ家々ノ門ニ指ベシ然ラバ鬼人チ不可取ト云御示現也ト云々
四季物語云つゐなの夜は中略いわしのはさみ物ひ

季吟法印この日記のさま元日節分なりしにやといはれしはいかゞ長暦もて考ふるに節分は去年の十二月廿五日なり

二日なほ大みなとにとまれり講師ものさけおこせたり

講師を異本にこうしと假名にかけるにつきて公事物と見たる説あれど誤なる事論なし　もの酒おこせたり云々こはそのものとさゝで大よそにおぼめかしていへる詞なり

三日おなじところなりもしかぜ波のしばしとをしむ心やあらんこゝろもとなし

見聞抄云うちつゞき日よりのよからぬはもし風や波のわれををしみとゞむるにやと思ひわびていへるなり

四日かぜふけばえいでたゝずまさつら酒よきものたいまつれりこのかうやうの物もてくる人々なほしもえあらでいさゝけわざせさす物もなしにぎはゝしきやうなれどまくるこゝちす

まさつらは父祖しるべからず妙壽院本に昌連と文字にてかきたりなほしもえあらで云々季吟云伊勢物語にたゞなほやはあるべきと侍るに同じく直の字なるべしたゞにしもえあらでとの心也猶標注を見てしるべし　いさゝけわざせさす物もなし云々こは原本いさ

ひらぎのほこはなやらふ家には百數ならでもある事なれどもことに大内はかうもりの司の例としてつかふまつれり云々」
續日本紀廿二云天平寶字二年正月丙午遣宮職獻杜谷樹長八尋俗曰比々良木
新撰字鏡云巴戟天比々良木杜谷樹同上
以呂波字類抄云黄芩ヒヽラキ」
眞淵云まへにも馬のはなむけしたる講師なりもの酒はさまざまの物酒などなり」
大鏡第三云佐理大貳よのてかきの上手にて任はてゝのぼられけるにいよのくにのまへなるとまりにて日いみじうあれうみのおもてあしくて風おそろしうふきなとするをすこしなほりていでんとしたまへばおなじやうにのみなりぬかくのみしつゝ日ごろのすくればいとあやしくおぼしてものとひたまへば神の御たゝりとのみいふにさるべきこともなしいかなることにかとおそれ給ひける夢に見えたまひけるやういみじけだかきさましたるをとこのおはしてこの日のあれて日ごろへたまふはおのづからへたまふ事なりそれはよろづのやしろに額のかゝりたるにおのがもとにしもなきがあしければかけんと思ふになべての手してかゝせんがいとわろく侍ればわれにかゝせ奉らんと思ふによりこのをりならではいつかはとてとゞめ奉りたるなりとのたまふに云々」
伊勢物語云あめのしたのいろごのみの歌にてはなほぞありける

ゝけわさせさせ物もなしとあれど誤なる事明らかなれば扶桑拾葉本群書類從本によりてあらたむこゝの詞の意はこの來たる人々にたゞにはあらでいさゝかなるもてなしをもせんと思ふに船中なればさる物もなければにぎはゝしきやうにはあれどもそのきたる八々にこのかたがまくるこゝちすとなり

五日かぜなみやまねば猶おなじところにあり人々（る貫扶）たえずとふらひに（来く）

おなじところにあり云々こは原本におなじ所にあるとあれど今は諸本によりてあらたむ

六日きのふのごとし

今日もきのふのごとく風波やまねば同じ所にありとなり

七日になりぬおなじみなとにありけふはあをうま（青馬など定）を思へどかひなし（いと定）たゞ波のしろきぞ（のみ定）見ゆるかゝるおひだに（ほどに定）人の家（野イ）のいけと名ある所より（あゆ原本妙閣書）鯉（鮒）はなくてふなよりはじめて川のも海のもこともの（とも定）も（なもイ）長びつにになひつゝけておこせたりわかなこ（若菜籠）にいれてきじ（雉）など花につけたりわかなぞけふを（は定）しらせたる歌有そのうた（に爲）

あさぢふの野べにしあれば水もなきいけにつみつる若菜なりけり

源氏花宴云なほあらじに弘徽殿のほそどのに立よりたまへれば云々
眞淵云なほはたゞといふに同じ萬葉默然をなほにともたゞにともよみ又たゞ人をなほ人ともいへりしもはいひいるゝ詞にしてその言のつよくなるなり必しもなどいふしもにおなじ」
伊勢物語云いさゝかなるわざもえせで云々
眞淵云むくいせればまくることゝちするなり」
萬葉第廿云天平寶字二年正月爲七日侍宴大伴宿禰家持作歌
水鳥乃可毛能伊呂乃青馬乎家布美流比等波可藝利奈之等伊布
水鏡云弘仁二年正月七日はじめて青馬を御覽じき
内裏式云正月七日左右馬寮各牽青馬入レ自二延明門一
延喜式左馬寮云凡青馬二十疋自二十一月一日一至二正月七日一二寮半分飼レ之
河海抄卷五引十節錄云正月七日看青馬青以レ白爲レ本天有二白龍一地有二白馬一是日見二白馬一卽年中邪氣遠去不來也
箕𥫱集
ふるゆきにいろもかはらでひくものをたがあをうまと名づけそめけん
公事根源云禮記に春を東郊にむかへて青馬七疋を用ふるとあり七は少陽の數ㇾ月は少陽の月なり云々
逸周書卷七王會解云周公旦主二東方一所之青馬黑歟謂二之母兒一

いとをかしかしこ（かしこ定）のいけといふは所の名なりよき人の男につきてくだりて住けるなりこの（とり定）長櫃の物は皆人（おしなべてイ）（皆人々に定）わらはまでにくれたればあきみちて舟子どもははらつゞみをうちて海をさへおどろかして波た（つなみ附）てつべしかく（定ナシ）てこのあひだにことおほかり

七日今日も猶大みなとにありとなり季吟云この詞大みなとに久しくありて勞倦の心あらはれ侍り　あをうまの事は標注にくはし

人の家のいけと名あるところより云々いけは土佐國の地名なるべしいけといふところの人の家よりと心得べし人の家の云々とあるを異本に人の野のとあるかたやよろしからんさてこゝの意はいけと云名ある所なれども池にある鯉はなくて川の物海の物なとおこせりと例のたはふれかけるなり　鯉はなくて云々原本に鮎はなくてとあれど正月のはじめに鮎のなきことはもとよりなるうへに諸本みな鯉はなくてとあるによりてあらたむそは鯉と鮎と文字より誤りしものなるべし鮎とあるは原本と聞書とのみなりさてあゆはなくてとあるにもいさゝか意ありそは聞書云あゆはなくては鮎はいはひの物なるにそれをばおくらずしてこと物をのみおくりたりといふなり　川のも海　も云々こは川の魚も海　魚ノ也さてそれ

眞淵云青馬といへど實は白馬なり古言に白きを青といふ例青雲の白肩之津といひ又青旗といへるも々しらはた也萬葉の高市皇子の歌に水鳥の鴨の羽いろのあを馬とよめるも鴨の羽のごとく青き毛いろの馬といふにはあらずあを馬はもとより白き馬をいふなれど青といふ詞にいひかけしのみと見ゆそのたぐひおほくみゆこゝはもとより白馬をいへり」

和名抄卞器類云唐韻云櫃和名比都俗有長櫃折櫃小櫃等之名似廚向上開闔器也

枕草子云萩すゝきなどうゑて見るほどにながびつもたるものすきなとひきさげてたゞほりにほりて云々

撮壤集云長櫃ナガヒツ」

伊勢物語云なりばかりに梅のつくり枝にきじを付てたてまつるとて云々

宇津保物語云あをきゝりのつぼにこがねのたちばないれてあをきふくろにいれ五葉の枝につけたり云々

増鏡卷六云雲雀といふ小鳥を萩の枝につけたり云々

鳥を草木の枝につくる事は河海抄又は武家調味記などにくはしく見えたれど事ながければこゝにひかず調味記には鳥を枝につくる圖をものせたりひらき見てしるべし

太神宮儀式帳云正月七日新菜御羹作奉太神宮幷荒祭宮供奉云々

太神宮儀式解卷廿二引年中行事云正月七日新菜御羹事云々卯杖也云々

にこと物もくはへ一長櫃にいれておこせりと也　わかなこゝいれてきじなど花につけたり云々この文を原本諸本とも　脱せり今に爲定卿本附注本などによりておぎなふすべて物　草木の枝につくる事一つの式なりそは標注にくはし　わかなそけふをばしらせたる云々　こは今日は七日なるに白馬もみねば七日のしるしもなきをわかなばかりぞけふをしらせたるとなりわかなは七日のものなればことさらにかくはいへるなりわか菜の事は標注を見てしるべし　あさぢふの云々眞淵云この歌あさぢふは淺茅生也ふとは其物を生ふる所をいふあはふを粟田まめふを豆田など書たぐひなり上田秋成云水もなき池につみつるとは淺茅生の野べな　池の　せこるにてつみつるといふ也即淺き心に謂じたる物なればわざとらすべき物にもあらぬをと用意したる歌なり　いとをかしか　云々こは歌をいとをかしとほめたる詞なり　はらつゞみをうちて云々こはあくまで物などうちくひてはらつゞみなどうちてたのしみたはふるゝさま也はらつゞみの事標注を見べしなみたてつべしとは故事によりてかくはいへるなりそは標注にひける文選の文を見ても思ふべし

けふ定　破子「きたりその人イ」いまわりごもたせてきたる人その名などぞやいま思ひいでんこの人うたよまんと思ふ心ありてなりけりとかくいひ〳〵て浪のたつなる

菅家文章卷六云予亦嘗聞ニ于故老一曰上陽子日野遊服レ老其事如何其義何倚ニ松樹一以摩レ腰習ニ風霜之難一レ犯也和ニ菜羹一而啜レ口期ニ氣味之克調一也云々

公事根源云供ニ若菜一内藏寮ならびに内膳司より正月上の子日これを奉る也寛平年中より始れることにや云々

荊楚歳時記云正月七日爲ニ人日一以ニ七種菜一爲レ羹

西湖志餘卷廿云立春擧レ酒則裁ニ切樹皮一雜以ニ七種菜一供ニ奉筵閣一蓋古人辛盤之遺意耳

河海云七種の若菜の事とかく定まれる事あるにあらず枕草子になゝくさの事をいひてつめどなほみゝなぐさこそつれなけれあまたし見れば菊もありけりといへり七種の名さだめあらばもゝくはよむまじたゞ春のわか草をいろ〳〵つめるなり」

宇津保物語菊の宴云ふね六にふなこ廿人ばかりかぢとり四人さうぞくえらびかたちとゝのへて云々」

莊子馬蹄篇云夫赫胥氏之時民居不レ知レ所レ爲行不レ知レ所レ之含哺而熙鼓腹而遊民能已レ此矣云々

史記范雎傳云伍子胥橐載而出ニ昭關一夜行晝伏至ニ於陵水一無ニ以餬ニ其口一膝行蒲伏稽首肉袒鼓レ腹吹レ篪乞ニ食於吳市一卒興ニ吳國一云々

陶靖節集卷三云鼓腹無所思朝起暮歸眠

律川地藏記云凡當社年日禮尊者御々供御神樂湯

こととうれへいひてよめるうた

ゆくさきにたつしらなみの聲よりもおくれてなかんわれやまさらんとよめるいと大ごゑなるべしもてくるものよりは歌はいかがあらんこの歌をこれかれあはれがれどもひとりもかへしせずしつべき人もまじはれゝどこれをのみいたがり物をのみくひて夜ふけぬこの歌ぬしまたまからずといひてたちぬ

今又ことゝ人のわりごもたせてきたる人ありしがその人の名は何とかやいひしわすれたりしをいま思ひいだすべしとなりこの人のかくきたるはわかれををしみてとふたゝびきたるのみならずはへある歌などよみてほめられんと思ひてきたれりとなりさてとかくなにやかやといひてよみいでん歌によしあることゞもいひてはてにはかく日ごろなみのたつなることなどうれへいふなりそはよみいでたる歌にはへあらしめんとていへるなり　ゆくさきに云々この歌はこゝろ明らけし大ごゑなるべしとはこの歌に立しらなみの聲よりもおくれてなかんわれやまさらんとよめるが波の聲よりわが聲のまさらんとあるをさぞ大ごゑならんと紀氏のたはふれにあざけりていはれしなり眞淵の説にほこりかなる故に大ごゑなるべしといはれつるは誤れりこのなるべしといへる語に心をつくべしさて

古讀跋只下論時雨撲法雲事歟等也云々
文選木玄虛海賦云於是鼓怒溢浪揚浮更相觸搏飛
沫起濤云々」
和名抄行旅具云檝子萬葉抄云檝子加遲比計今案俗所謂檝子其檝子讀和利古
檝子中有ニ檝之義也云々
蜻蛉日記云わりごなどものして舟にこしながき
すゑていそぎもていけば云々
藻鹽草第十九
われないとふいもが心やこま〳〵とへだてがち
なるわりごなるらん
眞淵云あはれはあゝといふ聲よりいでゝおもし
ろき事にも愁ふる事にも何にもみないへりなけ
きといふも長息にてあゝと息をながくするをい
ふあはれは聲のまゝをいひなげきはことわりを
いひて心はおなじことなり」
源氏あづまや云この君はさすがにたづれおほす
心ばへのありながらうちつけにもいひかけたま
はずつれなしがほなるしもこそいたけれ云々
行宗卿集
もちひこそいたきやつなれみな人のふくだとの
みもなづくとおもへば
眞淵云いたがりては物をほむるやうにてそしる
詞也こゝは歌のわろければかへりてほめてのみ
すぐしてかへしもせぬなり」
閑書にまからずはまからんずとはれてよむべし
よみくせ也」
後撰冬おやの外にまかりておそくかへりければ
つかはしける　　人のむすめのやつなりける
神無月しぐれふるにもくるゝ日もきみまつほど

あざけりたる證には次にもてくる物よりは歌はいかゞあらんとも
いへり季吟云ゆくさきに立しらなみといへる舟路の首途に禁忌な
り　これをのみいたがりと云々こは原本にいたはりてとあれど今は
定家卿本爲家卿本附注本群書類從本などにいたがりとあるにより
てあらたむこの語は季吟の補の字也物をほむる事といはれつるは
いかゞこは標注にあげたる證と眞淵の說とを見てしるべし　また
まからずといひて云々こは標注にあげたる閑書の說の如くまたま
からんずといふ意也今もかた田舍の方言にゆく事をゆかずといひ
くふ事をくはずなどいふがごとしこれらもみなゆかんずくはんず
の意なり外をばおしてしるべし

ある人の子のわらはなるひそかにいふまろこの歌のかへしせんとい
ふおどろきていと（に爲）をかしき事かなよみてんやはよみつべくははやい
へかしといふまからず（いひイ）とて立ぬる人をまちてよまんとてもとめける
を夜ふけぬとにやありけん（あらん爲）やがていにけり「定ナシ」そも〳〵いかゞよみた
るといぶかしがりてとふこのわらはさすがにはぢていはずしひてと
へばいへるうた
ゆく人もとまるも袖のなみだ川みぎはのみこそぬれまさりけれとな
んよめるかくはいふものかうつくしければにやあらんいと思はずな

はながしとぞ思ふ後撰正義云これは貫之の女七歳にてよめりといふ父貫之内裏よりおそくかへりけるをまちわびてよめり家集にはちゝまつほどはとあり云々
大鏡卷八云西の京のそこ／＼の家にいろこくさきたる木のやうだいうつくしきが侍りしをほりとりしかばいへあるじの木にこれゆひたまひ侯てもてまゐれといはせたうびしかばあるやうこそはとてもてまゐりて候ひしをなにぞとて御覽じければ女の手にてかきて侍りける
　勅なればいともかしこしうぐひすのやどはとはゞいかゞこたへんとありけるにあやしくおぼしめされてなにものゝ家ぞとたづねさせたまひければつらゆきのぬしのみむすめのすむ所なりけり」
古事記云宇摩良爾岐許志母知豈勢摩呂賀知云々
伊勢物語
つゝゐつゝゐづゝにかけしまろがたけすぎにけらしないも見ざるまに
宣長云まろとはわれおのれなどいふがごとしさて師の說にみづからまろといふことはかしこきをかごありといふにむかへてかごなくまろなりといふ意にてつたなくおろかなるよしの稱なりといはれたるは古への物言ともきこえずからごゝろめきてこそおぼゆれ云々
續日本紀卷卅六云天應元年三月辛卯詔云々其孝仁者百行之基奈利曾毛曾毛百足之虫乃至死不顚事波輔乎多美止奈毛聞食云々

りわらはことにては何かはせんおんな（定ナシ嫗）おきな（翁）にをしつべしあしくもあれ（まれイ）いかにもあれ（まれイ）たよりあらばやらんとておかれぬめり
ある人の子の云々こは紀氏みづからの子なれど例のおぼめかしてある人のこのとはいへるか又實に或人の子にてもあるべしされど紀氏の子の歌よみし事外の書にもみえたればこゝも紀氏の子としてありぬべしさて紀氏の子の歌よみし事は標注を見てしるべし
まろはみづからをいへるにて卑下せることばなりこの事は標注に引たる宣長の說と證とを見てわきまふべし　よみてんやはよみつべくは云々こはよみてんやはよみはせじされどもしよみつべくははやくいへとなり　歌ぬしのまからんずとて立ぬるをまちてよみたる歌をもいはんとてたづぬれどよのふけぬればにやあらんやがてそのまゝかへりさりぬとなり　そも／＼は語をいひおこすことば也語例標注にひけり　いぶかしは字類抄に訝を訓せり不審なる意なり猶標注を見るべし　ゆく人もとまるも袖の云々この歌こゝろあきらけしなみだ川はたゞ涙をつよくいはんとて川になしていへるのみなるべし又は土佐にさる名所ありてかすべて涙川に三つありそは標注を見てしるべし季吟云さきの歌にゆくさきにといひおくれてなかんといふをうけてゆく人もとまるもとよめりかくはいふものか云々聞書云かやうにもよくよみたる物かなとほむるこ

竹取物語云そも〳〵いかやうなる心ざしあらん人にかあはんとおぼす云々
宇津保物語としかげ云そも〳〵けだものといへどもおほかみならぬはすまざなり云々
眞淵云それとはしなおこしていふ詞をかされてそも〳〵といへりもは助字なりもをそへていふ事古言におほし」
萬葉十二
相見欲爲者從君毛吾曾益而伊布可思美爲也」
今按するになみだ川にみつありひとつは伊勢の國なるなみだ川也それは後撰離別などこの伊勢の國へまかりけるに
よみ人しらず
君がゆくかたにありてふなみだ川まづはそでにぞながるべらなるこれは伊勢の國也いま一つは陸奥也それは
相摸集
みちのくのそでのわたりのなみだ川心のうちにながれてぞふる　これ陸奥也いまひとつはたゞ名所にあらずして涙を川にたとへし也こゝなるも名所にあらず涙を川にたとへてさてみぎはとはいへり」
書紀齊明紀云于都倶之枳阿我倭柯枳古弘飫岐底[illegible]武」
書紀持統紀云四年夏四月[illegible]賜京與畿內耆老耆女五千三十一人稻人二十束

とばなり　うつくしければにやあらん云々うつくしはわが子をうつくしみあはれむをいへり古事記萬葉などに愛をうつくしとよみ以呂波字類抄に慈愛親などをうつくしみと訓せりこゝはわが子を愛する心からにやあらん歌も思にすによきやうに思へばわらはの歌にては何かはせんにつかはしからねば嫗や翁の歌なりといふともまことしくおもはるとなり　おんなおきな云々季吟云をんなおきなとは年よりを翁といへば老女の事にかけるにやといはれつるは誤なりおんなおきなは嫗と翁とふたつ也それは標注にひける證を見ても思ふべしこのくだり原本おんなおきなてをしつべしとあれど誤なる事明らかなれば今は定家卿本爲家卿本扶桑拾葉本群書類從本等によりてあらたむ　たよりあらばやらんとておかれぬめり云々季吟云おかれぬめりとは紀氏のていをかの女のかける也云々この說誤れりこは又たよりもあらばやらんとてまづうちおかれしなり

八日さはる事ありて（あればイ）猶おなじ所なりこよひ月は海にぞいる（のイ）これを見て業平の君の山のはにげていれずもあらなんといふ歌なんおぼゆる（もイ）もし海邊にてよまゝしかば（つきいでたらましかばイ）波立さへていれずもあらなんとよみてましや（イナシ）いまこの歌をおもひいでゝある人のよめりける

後撰羇旅

てる月のながるゝ見れば天の川いづるみなとはうみにざりける

和名抄老幼類云翁老人の和名於岐奈又云嫗和名於無奈老女之稱也
宇津保としかげ云いみじきおんなおきなこどもうまごなどゐて云々
同藏開上云ゆきをいたゞきたるおんなおきなはひにはひきて云々
榮花音楽云おいたるわかきまゐりつどふ七八十のおんなおきなつゑばかりをたのもしきものにていでたちたるさま云々
同楚王夢云又世の中をむかし見たるおんなおきなまだかゝるまうなること見ずなどぞなく／＼申思へる云々これらにみな翁と嫗とにて兩方をいへりされどおきな女といひて老女のことゝのみせる證もありそは　枕草子云あなたにもおものまゐるうらやましくかた／＼のはみなまゐりぬめりとくきこしめしておきな女におろしをだに給へなど云々とあるは老女をのみ云りされどこゝにおきなおんなになしつべしとあるは翁と嫗なる事しるし」
三代實錄卷三十七云元慶四年五月廿八日辛巳從四位上在原朝臣業平卒業平者故四品阿保親王第五之子正三位行中納言行平之弟也阿保親王娶二桓武天皇女伊登内親王一生二業平一中略業平體貌閑麗放縱不レ拘略無二才學一善作二和歌一中略卒年五十六云々」
古今雜上　　なりひら朝臣
あかなくにまだきも月のかくるゝか山のはにげていれずもあらなん
六帖四　　友則

とや
今日も猶同じごとく大湊にありとなり八日なればとく月のいるが海邊なれば海の中にいるやうに見ゆとなりさて月の海の中にいるやうに見ゆるを見て業平朝臣の山のはにげて云々の歌を思ひいづとなりこの歌は標注にひけり　てる月の云々の歌は後撰にも貫之とてのせられたればまへのことばにある人のよめりけるとありても紀氏みづからの歌なる事しるしある人とは例のおぼめかしてかける也天の川いづるみなとは海にざりけるとは博物志の故事を思ひよりてよまれつるかそは標注にひけりざりけるはぞありける也ぞあの反ざなればざ也
九日つ（のイ）とめて大湊より那波のとまりをおはん（せイ）とてこぎ出（に定）けりこれかれたがひに國のさかひのうちはとて見おくりにくる人あまた（る定）がなかに藤原言實橘季衡長谷部行政らなん御館よりいでたまひ（う定）し日よりこゝかしこにおひくる「この人々ぞ心ざしある人なりけるこの人々の」（定ナシ）ふかき心ざしはこの海には（も定）おとらざるべしこれより今はこぎはなれてこぎゆくこれを見おくらんとてぞこの人どもはおひきけるかくてこぎゆくまに／＼海のほとりにとゞまる（とまれる定）人もとほくなりぬ舟（イナシ）の人も見えず

いる月を山のはにげていれずとも人のこゝろを
いかゞたのまん」
後撰羇旅土佐より任はてゝのぼり侍りけるに舟
の中にて月を見て
貫之
てる月のながるゝ見れば云々
金葉秋　　源師俊朝臣
いかにしてしがらみかけんあまのがはながるゝ
月やしばしよどむと」
博物志巻十云舊説云天河與海通近世有人居海渚者年々八月有浮槎去來不失期人有奇志立飛閣於査上多齎糧乗而去十餘日中猶觀星月日辰自後芒々忽々亦不覺晝夜去十餘日奄至一處有城郭状屋舎甚嚴遥望宮中多織婦見一丈夫牽牛渚次飲之牽牛人乃驚問曰何由至此此人具説來意并問此是何處答曰君還至蜀郡訪嚴君平則知之竟不上岸因還如期後至蜀問君平曰某年月日有客星犯牽牛宿計年月正是此人到天河時也」
新撰字鏡云曈曨明同上也又日初出時也明也豆止女天又可志大
枕草子云冬はつとめて雪の降たるはいふべくも
あらず云々
拾遺哀傷　　仙慶法師
ごくらくははるけきほどゝきゝしかどつとめて
いたるところなりけり」
和名抄國郡部云土佐國安藝郡奈半」
新撰姓氏録第十七云長谷部造神饒速日命十二世孫千速見命之後也」
遊仙窟云忽把十娘手子而別行至二三里廻」

なりぬ岸にもいふ事あるべし船にも思ふことあれどかひなしかゝれどこの歌をひとりごとにしてやみぬ

おもひやる心はうみをわたれどもふみしなければしらずやありけ（あら定）ん

つとめては早朝をいへるにて新撰字鏡に日初出時也と注したるがごとし　なはのとまりは和名抄に奈半とあると同所なるべし　藤原言實橘季衡此ふたりはさきにみえたる人也長谷部行政この人ははじめてみえたゝ父祖しるべからず　長谷部行政らなん云々とあるなんの二字を原本脱せり今は爲家卿本扶桑拾葉本群書類従本などによりておぎなふ　御舘より出たまひし日より云々御舘より出たまひしといふはおほやけの舘なれば御の字をばつくるか又この書すべてみづからをばよそ人のやうにかければ紀氏の舘より出しを御舘より出たまひしとも云べし　この人々ぞ云々原本このぞもじを脱す今は爲家卿本拾葉本類従本等によりておぎなふ　今はこぎはなれてゆく云々こゝは大湊をこぎはなれてゆくなり土佐の國をこぎはなるゝにあらず　かくてこぎゆくまに〱云々こはこぎゆくまゝにといへるがごとし　海のほとりにとゞまる人もとほくなりぬ舟の人もみえずなりぬ云々この文標注に引たる遊仙窟大和物語義經記などの文に似たり大和物語もこの書よりとりてかける

頭看數人猶在ニ舊處ニ立余時漸々去遠肇沈影滅願
瞻不レ見惆悵而去テ到ニ山口ニ浮レ舟而過云々
大和物語云車は舟のゆくを見てえゆかず舟にの
りたる人は車を見るとておもてをさしいでゝこ
ぎゆけばとほくなるまゝにかほはいとちひさく
なるまで見おこせければいとかなしかりけり云
々
義經記云たがひにゆきもやらずかへりてはゆき
行てはかへりし給ひけり峯にのぼり谷にくだり
ゆきたまふほどにすがたの見えたまふほどはし
づかはる〴〵と見おくりけりたがひにすがたの
見えぬほどにへだてば山びこのひゞくほどにぞ
をめきける云々」
貫之集
とほくゆく君をおくるとおもひやる心もともに
たびねをぞする」
古今物名　よみ人しらす
花ごとにあかずちらしゝ風なればいくそばくわ
がうしとかは思ふ」
萬葉三
何時間毛神左備祁留鹿香山之鉾椙之本爾薜生
左右二
同十長歌
眞樺繁拔旗荒本葉裳曾世丹云々」
萬葉二
後將見跡君之結有磐代乃子松之宇禮乎又將見香
聞
妹之名者千代爾將流姬島之子松之末爾蘿生萬

歟　舟にも思ふ事あれどもかひなければこの歌をたゞひとりごと
にいひてやみぬとなり　思ひやる云々この歌の意は思ひやる心は
海をもわたれども文をやるべきたよりもなければしらずやありけ
んと也さてこの歌わたれどもといふよりふみしなければといひて
文に踏をかけたりかく見ざればこの歌のあぢはひすくなかるべし
（妙ナシ）かくて宇多の松原をゆきすぐ其松のかずいくそばくいく千年へたり
としらずもとごとに浪うちよせ枝ごとに鶴（ぞ定）とびかふ（かよふ群）おもしろしと見
るにたへずして舟人（の定）のよめるうた
見わたせば松のうれごとにすむつるは千世（ちとせイ）のどち（共）とぞ思ふべらな
るとやこの歌は所を見るにえまさらず
宇多の松原はいまだ土佐國のうちなるべし宇田野宇田氷室宇陀大
野菟田などいふ名所あれどみな當國にあらす　いくそばくはいく
もとゝもなく松のたちなみたるをいふ幾十許の意なるべし　もと
ごとには松の木のもとごとにといへるなり眞淵云もとごとには木
のもとごとに也木といふを本といふは萬葉に鉾椙之本爾又本葉
もそよになど見えたり　鶴とびかふ云々季吟云とびかふは飛ちが
ふ也ふなびとは梶取にあらず船中の人なるべし　見わたせば松の
うれごとに云々季吟云うれは上也云々この説誤れりうれはうらの

代留」
書紀神功紀歌云宇摩比等破于摩譬等苦奴知野伊徒姑播茂伊徒姑奴池云々
萬葉八
黄葉乃過麻久惜美思共遊今夜者不開毛有奴香」
六帖
わがやどの松のこずゑにすむたづは千世のゆかりと思ふべらなり」
宇津保初秋云さるじやうづのてけの手ごもたいちもちにしつぎ給へる人の云々」
又菊宴云御ふごもこきつられてよろづのじやうづふなうたにものいねどもふきあはせて云々
住吉物語云ゆきちがふ舟にのりたるものどものあやしきこゑ〳〵してつまもさだめぬきしの姫松とうたひてこぎゆくもならはぬこゝちしてあはれなり云々
又云おきよりこぎくる舟にはあやしきこゑにてにくさひかけるなどうたふもさすがになかしかりけり云々
文選武帝秋風辭云泛樓船兮濟汾河横中流兮揚素波簫鼓鳴兮發櫂歌 注云櫂歌引櫂而歌
三輔黄圖卷四云昆明池中有龍首船常令宮女泛舟池中張鳳蓋建華旗作櫂歌 櫂歌櫂發歌也又曰櫂歌謳人歌也
小補韻會卷□云歌乃□櫂相應聲云々」
宇津保嵯峨院云かくてふなたまへるほどにまうほる物日にたちばなひとつ云々」

轉じたるにて松のうらごとに也さる證は萬葉に末の字をうらとよみ又宇禮ともかけりうれうら音かよへりどちは書紀に奴知とかき萬葉に共の字をよめり意も共の字のごとしさてこゝの意は鶴と松とはちよの友どちと思ふらんといへる也　この歌は所を見るにえまさらず云々舟人のよめる歌なれば所のけしきよりは歌はおとれりと也

かくあるを見つゝこぎゆくまに〳〵山も海もみなくれ夜ふけて西東も見えずしててけ（ひよりイ 天氣）の事かぢとりの心にまかせつをのこもならはぬ（ねイ）はいとも心ぼそしましして女はふなぞこにかしらをつきあてゝ音をのみぞなくかく思へば（どイ）舟子かぢとりはふなうたうたひてなにともおもへらずそのうたふうた（そ貴附 は群）

春の野にてぞねをばなくわがすゝき（薄 香）にて手をきる〳〵つんだるな（菜）を親やまほるらんしうとめやくふらんかへらや夜部の（よんべのうなゐもがなぜに）うなゐもがなぜにをそらごとをしておぎのりわざをして錢ももてこずおのれだにこず（こん諸本 除）これなみに（ならす定）

おほかれどかゝず（も鶯 し鶯）これらを人のわらふをきゝて海はあるれど心はすこしなぎぬかくゆきくらしてとまり（泊）にいたりておきな人（古老）ひとりたう

和名抄夫妻類云姑爾雅云夫之母曰ㇾ姑和名之云宇止女々」
萬葉四
野干玉能昨夜者令還今夜左倍吾乎還莫路之長手呼
雲州消息下云位記只今所ニ持來一也夜部入眼云々
萬葉十一
朝茅原小野印空事何在云公待
六帖二
道をつけて山にいりにしあらたかのいとたきにくきそらごとなせそ
小大君集
わりなしやそらごとによりちかひてははけふまであらん物とやは思ふ」
新撰字鏡云賒式遮反貰也於支乃利
以呂波字類抄云貰ノル賒貸同已上
尺妻往來云於ニ清貧之身一者闕ニ予市脯一貰ニ予村酒一云々
周禮地官司市云以ニ泉府一同ㇾ貨而斂ㇾ賒註云民無ㇾ貨則賒貰而予ㇾ之」
伊勢物語
おほよそのはまにおふてふ見るからに心はなぎぬかたらはれども」
和名抄老幼類云古老和名於岐奈比止今按云古老又一云老舊一云日本紀云老宿同上
枕草子云其かたはらなるおきな人たちもうちす

（ひとり定）めあるがなかにこゝちあしみして（く群）ものもものし給はで（たばで定　たまはらでイ）ひそまりぬ
山も海もみなくれ云々こは日のくれたれば山も海もかきくらがりてくらきをいふなるべし　てけは天氣なり宇津保物語に天下といへる事をてけとあるにてもしるべしさてかぢとりといふものは天氣などよくみさだむるものなれば天氣の事はかぢとりにまかすと也　おのこもならはぬは云々こはをの子のうちにもかゝる海路の旅になれざる人はいと心ぼそしと也をのこもといふにてまして女の心細さはおしはかりしるべし　かく思へば云々海路の旅になれざる人は男も女もかく心ぼそく思へど舟子かぢとりは何とも思はずふなうたなどうたふと也　ふなうたうたひて云々ふな歌は住吉物語宇津保物語などにも出たり又漢土に櫂歌欵乃歌などいへるもふな歌なりそは標注に引たるを見てしるべし　春の野にてぞねをばなく云々こは春の野にてわがすゝきに手をきるをもいとはず菅になきつゝつみたる菜をといへる也　親やまほるらんしうとめやくふらん云々原本親やまもるらんとあれど誤なる事明らかなれば今は定家卿本拾葉本類從本異本などによりてあらたむさてまぼるはむさぼるのつゞまりたるにて貪らんなりむさの反まなればおのづからまほるとなれり宇津保物語にまうほるとあるも同じ　かへらや云々季吟云かへらやはかへらんやといふこゝろにや又うたのふしなるべし催馬樂にさきんだちやといふにおなじ云々この説の

てつゝとらかくらいはゐな云々」
和名抄老幼類云専日本紀私記云専領女二字訓太宇女乎佐女毛
波専ニ之義也太宇女者毛波長之古語也今呼ニ老
貝
女ヲ爲ニ太宇女ニ故次ニ於貝ニ耳
源氏東屋云心しらひのやうに思はれ侍らんもい
まさらにいがたうめにやつゝましくてなんとき
こゆ云々
新猿樂記云野干坂伊賀専(タウメ)之男祭叩ニ鮑苦(タチ)本ニ舞云
々
宇治拾遺卷四云紙賜はりて是つゝみてまかりて
たうめや子共などにくはせんといひければ云々
宣長云老女をたうめといふは姥(トメ)のうつれるにや
あらんさてそのたうめに専の字を用ふるはいか
なる由にか詳ならずもしくは專と通ふかこの專
の字にも老女の意は見えざれども御國にて字義
に非る意に用ふる例も多ければこの字を用ひて
へんをはぶけるにもやあらんそはかもかくもあ
れたうめといふは老女の稱なり」
眞淵云物をもくはすしてねたるなり
源氏末摘花云心ばへかたちなどふかきかたはえ
しり侍らすかいひそめ人うとうもてなし給へば
云々
以呂波字類抄云顰(ヒソム)
和ト篇云攣(ヒツマル)
玉篇云顰蹙憂愁不レ樂之狀」

ごとくかへらんやにてやはつけていふ歌のふし也この下にわらは
がうたへる歌にもかへらやといふ詞見えたり上田秋成云これは册
歌のはやし詞と見ゆ　夜部の栄を云々この文諸本になくしてよん
べのうなゐもがなせにこはん云々といふ文をのせたりこの文をこ
の原本に脱せしにやと思へどよく〳〵考へ見ればもとより別種の
本と見えたり又諸本にのせたる文もさだかならずこの本のごとく
にては文字の數はすくなけれどかへりて諸本の本文よりもよくき
こえ意も明らかなればこの本のかたまされり尤この本の本文とお
なじき本貧慶卿本と異本のうちに一本見えたり　そらごとをして
おぎのりわざをして云々そらごとはいつはり也おぎのりわざは眞
淵云物をかりて代をやらでおくをいふ云々猶標注を見べし　こ
れなみにおほかれど云々このやうなる歌おほかれどもかゝすと也
おきな人は和名抄に古老を訓せるがごとく老人をいふたうめも
和名抄に呼ニ老女一爲ニ太宇女一とあるごとく老女をいへり猶くはし
くは標注を見てしるべしさて下文に淡路のたうめとあると同人に
や　もののし給はで云々こは食事をだにせぬをいふなるべし
ひそまるは顰の字の意なり事は標注を見てしるべし
十日○那波のとまりにとまりぬ
けふはこの定
きのふ九日の條に那波のとまりをおはんとてとありて今日十日に
なはのとまりにつきてとまれるなり

和名抄國郡部云安藝郡室津〔牟呂〕部」
九條殿遺誡云先起稱ニ屬星名字七遍一〔音微〕次取レ鏡見レ面見レ曆知ニ吉凶一次取ニ楊枝一向レ西洗レ手次誦ニ佛名一及可レ念下尋常所ニ尊重一神社上次記ニ昨日事一事多日日中可レ記 次服レ粥次梳レ頭 三箇日一度可レ梳レ之日日不レ梳 次除ニ手足甲一 丑日除ニ手甲一寅日除ニ足甲一 次擇レ日沐浴 五箇日一度 略 次有ニ可ニ出任一事上即服ニ衣冠一不レ可ニ解緩一云々
禮記内則云凡内外鷄初鳴咸盥漱〔テアラヒクチスヽキ〕衣服斂ニ枕簟一灑ニ掃室堂及庭一布レ席各從ニ其事一云々」
和玉篇云乃〔イマシ〕
平他字類抄云乃〔スナハチ〕
源氏蜻蛉云あしずりといふことをしてなくさまわかきことものやうなり」
和名抄羽族體云 翮 爾雅集注云 羽本曰レ翮〔和名八根〕一云羽根也」

十一日あかつきに舟を出して室津をおふ人みなまだねたれば海のありさまも見えずたゞ月を見てぞにしひんがしをばしりけるかゝるあ〔やう定〕ひだにみな夜あけて手あらひれいの事どもしてひるになりぬいましはねといふ所にきぬわかきわらはこの所の名をきゝてはねといふ所は鳥のはねのやうにやあるといふまだをさなきわらはのことなればば人々わらふに有ける〔ときに群〕女わらはなんこの歌をよめる

まことにて名に〔た爲〕きく所はねならばとぶ〔飛〕がごとくに都へもがな「とぞ〔定ナシ〕いへる」

室津は土佐國安藝郡なりそは標注を見べし　みな夜あけて云々こは夜の殘らずあけはなれしをいへり　れいの事どもして云々眞淵云髮あげ食事などするをいふなるべし　いましはねといふ所にきぬ云々下文二月五日の條にいましかもめむれゐてあそぶ所あり云々とあると同しくていましのしは助字なり又考ふるに和玉篇に乃の字をイマシと訓せり乃の字の義にてもこゝの詞よくきこえたりはねといふ所は前後のつゞきもて考ふるにいまだ土佐の國のうちなる事明らけし　まことにて云々所の名のはねに鳥のはねをかけてさてとぶがごとくにとはいへり

古今羇旅　よみ人しらず
きたへゆくかりぞなくなるつれてこしかずはたらでぞかへるべらなる
左注云この歌はある人男女もろともに人のくにへまかりけるをとこまかりいたりてすなはち身まかりにければ女ひとり京へかへりける道にかへる雁のなきけるをきゝてよめりとなんいふ」
後撰雑一　兼輔朝臣
人のおやの心はやみにあらねども子を思ふ道にまどひぬるかな
同戀一　よみ人しらず
思ふ人おもはぬ人のおもふ人おもはざらなんおもひしるべく
躬恒集
おもへどもあひもおもはず思ふとき思ふ人をやおもはざりけん」
古今灌頂云源のさねがつくしへゆあみんとてまかりける時に云々」
眞淵云舟よりおりて陸にのぼりてゆく也むろ津のあたりの津にて人の家ありてゆあみなどすべき所と見ゆ」
新拾遺秋上　刑部頼輔
わたのはらしほ路はそらとひとつにてくものなみよりいづる月かげ
新後拾遺秋上　よみ人しらず

男も女もいかでとく都へもがな（鴎ナシ）と思ふ心あればこの歌よしとにはあらねどげに（な鴎）と思ひて人々わすれずこのはねといふ所とふわらはのついでにぞ（てイ）またむかしの（つイ）人をおもひいでゝいづれの時にかわするゝけふはましてはゝのかなしむ事は（からるゝ事は定）くだりし時の人のかずたらねばふるき（定ナシ）歌にかずはたらでぞかへるべらなるといふ事をおもひいでゝ人のよめる
世の中に思ひあれども（や定）こをこふるおもひにまさる思ひなきかなといひつゝなん
まことにて云々の歌をさまでよしとにもあらねど舟中の男女ともにいかでとく都へかへらんと思ふをりなればげにと思ひてみな人々わすれずと也　むかしの人は在國のうちうせたりし女子をいへり原本にむかし行人とあれど誤なる事しるければ今は定家卿本拾葉本類従本異本等によりてあらたむ　けふはましてといへるはこの女わらはの歌よみしさまなどを見てわきてすぎにし女子を思ひいだせりと也　世の中に云々すべて思ひといふものは何によらずあるものなれどこを戀ふる思ひにまさる思ひはなしと也思ひと云語をかさねて一首をなせりこの例標注にあげたり　といひつゝな

水やそらそらや水とも見えわかずかよひてすめる秋のよの月」

源氏須磨云海の中のりうわういたうものめですものにて云々

河海抄卷六引作手丸記云大夫於ニ途中一爲ニ龍神一被レ取端正美麗之故也云々

太平記卷十八云是ハ如何樣龍神ノ財寶ニ目ヲ掛ラレタリト覺ルゾ何ヲモ皆海底ヘ入ヨトテ弓矢太刀刀鎧腹卷ノ類ヲ盡ク投入ケレ𪜈渦ノ卷コト尙止ズ扨ハ若色アル衣裳ニヤ目ヲ見入タルランドテ云々

酉陽雜俎卷十四云姤婦津相傳言有ニ婦人渡ニ此津一者皆壞レ衣枉粧然後敢濟不レ爾風波暴發云々

義楚六帖卷十八引ニ西域記一云始黑國有ニ淸海一周千餘里味苦魚龍交集無ニ敢取者一其國行人不レ得ニ赭衣高聲一災禍立至行旅咸知云々

和名抄鬼神部云海神文選海賦云海童即海神也日本紀云海神和名和太豆美乃加美

眞淵云國を立しよりこゝまでは船にのみ在しがこゝにしてはじめて陸におりたちて湯あみせんとて人の家にゆくに衣のあしきを思ひてそれをことわるさまにかけるげに女の心さるべき事になんいひてといふ詞はおりてゆくといふへ立かへりてきく書ざま也」

聞書云何のあしかげにことづけてとはあしかげは惡し氣といふ心也かはやすめ字也ことづけては事を託してといふ心也一說に蘆陰とかくともいへりあしかげとつゞけたるは何のあしかげなる事あらんと云義也よき衣きぬを大事もなき事

ん云々こはすぎにし子を戀かなしめる心をふくめてとゞめたる也

十二日あめふらず文時維茂が舟のおくれたりしならしつ（鳴津）よりむろつ（つ定）（なり妙）にきぬ

あめふらずは雨のふるべきそらのけしきにて雨ふらざるをいふ

季吟云貫之の子に時文とてありしは梨壺の五人のうち也もしこれを文時とかけるにや但諸本かくのごとくなれば今あらためがだく侍り又紀氏の頃に菅三品を文時といひ平維茂など侍りしにやこの人々にてはいかでかあらんたゞ紀氏類船の人々なるべし云々聞書云文時維茂二人ながら貫之の下司なるべし鳴津はすなはち大湊なり

十三日あかつきにいさゝか雨ふる（に定）しばしありてやみぬ男女これかれゆあみ（浴）などせんとてあたりのよろしき所におりてゆく海を見やれば

雲もみな波とぞ見ゆるあまもがないづれかうみとゝひてしるべくとなん歌よめるさて十日あまりなれば月おもしろしふねにのりはじめし（定）日より舟にはくれなゐこくよきゝぬきずそれは海の神におぢて（そめし）（ていでそめしイ）といひて何のあしかげにことづけてほやのつまのいずしすし（くイ）あはびをぞ心にもあらぬはぎにもあけて見せける（定ナシ）

よといへりほやは穂屋也蘆な葺ながらふきたるいやしき家なといふつまは家のつま也則ひさしなどの事をいへりいすじは飯鮨なりすしあはびは鮨にしたる鮑也はぎにもあけて見せけるは脛をかゝげて見する也さて本文の心は湯に入に女どもの上る里はいやしき穂屋なればそのひさしなどには飯鮨鮨鮑やうの鹽魚多くてきたなげなる故に貫之心にもあられど脛をかゝげて女どもに見せてかやうにむさき所にては衣のつまとりあげてありくものぞといへる詞也

季吟云この一段義分明ならず何のあしかげとは蘆蔭と云べきをふと忘れて何のといひたる詞をすぐに書續けたるにやとづけてはかこつけてと云事也ほやのつまのいすしとは穂屋の妻の鰒鮨(ヰス)(シ)鮨也和名の貝類にいはく、[illegible]和名[illegible]似[illegible]而大者也うみべなる蘆の穂にてふける屋のはしつかたにあるものどもをいふなり又一説に保夜交鮨といふもの延喜式にあり是[illegible]といふものをまじへつけたる鮨也と云々師説にはいすしと侍るものを押てほやのつますしと[illegible]ん事いかゞと侍りし然れども學者のこのむ所にしたがふべしてしあはびは鮨鰒也是も延喜式に侍り心にもあらぬとは本意ならぬ事也いせ物語に心にもあらで絶たる人といへる同じ心也はぎにあげてとは脛をあらはにてきあげて[illegible]などにおりたちゆくさま也古今にいつしかとまだく心をはぎにあげて云々此歌はぎにあげては裾のすそなどくりあげしていなりさて此日記の心はかのゆあ

あたりはほとりかたはらなどいふに同じよろしき所は舟よりおりたらんにたよりよろしき所をいふなるべし　其もみな云々この歌心あきらけし原本いづれか海ととふてしるべくとあれど誤なる事明らかなれは爲家卿本拾葉本類従本異本などによりてあらたむ

舟にはくれなゐこくよききぬきずうみの神におぢてといひて云々こは海神といふもの物めでするものゝよしなればくれなゐこくうるはしきよき衣などは海神におぢてきざるなるべしその證標注にひけるがごとしさてこの文原本海の神におぢてもいみてとあれど誤なる事しるければ定家卿本拾葉本類従本異本などによりてあらたむ　何のあしかけにことづけて云々こゝより下すべて誤字脱文ありとおぼしくてこゝろえがたし契沖阿闍梨も古今餘材抄にこの文を引てこの一段すべて心得がたしといはれ季吟眞淵なども同じく心得がたしといはれつるがごとくいかにも心得がたしされど諸家の説をも標注にあけたれば見ん人心のひかんかたにしたがふべしさてこの諸家の説いづれものこる所なく分明なりともいひがたしいま予が説をも下にあげたりこはよしとも思はねどたゞしひてこゝろみにいへるのみなりさて何のあしかげにことづけて云々とある何は河の誤にてあしかげは季吟の説のごとく蘆陰ならんとづけはかこつけてといはんがごとしそも〳〵この日記はじめよりみづからをかくして女のかけるおもむきにてかゝれつればそを心

みしに礒邊にゆきて枯のこりたる蘆のかげなどに逍遥するにかこつけてかの着物など心にもあらずはぎあらはにかきあげおりたちゆきて人々にみせたるとにやさして興なき物なれば心にもあらぬといへるなるべし
眞淵云何のあしかげは或說になにやらのみかげによらんとてといふ意なるを海邊なればあしかげとつゞけたるは君がみかげにますかげはなしなどいふに同じほやは延喜式に參河國保夜一斛とあるにてあきらかなり穗屋とてはなにともきこえずいずしは蝟蛸にはあらず和名抄に貽貝爾雅注ヽ貽貝一名黑貝和名伊加比延喜式主計式貽貝保夜交鮨と有て蝟蛸ならぬ事しるし
谷川士淸云五雜俎に海鼠一名海男子其狀如ニ男子勢一然淡菜之對也と見え余皇日疏に文蛤似ニ女陰一とみゆ文蛤も淡菜なりいがひなどいふまた東海婦人の名あり海錯錄に誰謂ニ之東海婦人一耶當レ謂ニ西施不潔一といへりされば陰陽の形に似たるをもて妻とはたはふれいへるなるべし
宣長云肥前國佐伯の海にほやといふ物あり紫色にて海鼠の如くなる形したるもの也と佐伯の人かたれり然らばほやのいずしとあるはそれを飯鮨にしたるなるべしとある人いへり又云はぎにあげては人に物をかくとあらはし見する事を古の語にはぎにあぐといふ事のありしなるべし」
延喜主計式上云貽貝保夜交鮨云々
同內膳式云參河國保夜一斛云々
同齋宮式鮨鰒二石云々
同主計式上云鮨鰒貽貝富那交鮨各四十六斤云々

にこめて見るべき也こゝをも女の心もて見べしはじめゆあみんとて陸にのぼりゆきてさてかへさに海よりわかれいりたる河の蘆蔭によればすそのかたもあらはにもみえねばそれにかこつけて衣をはぎまでかゝげて水のほとりまでおりたちて舟の中の人にほやのつまのいずしすしあはびなどを見せけるなるべしすそを用意したるさま女の心さもあるべしほやのつまのいずしは眞淵の說のごとく式に貽貝保夜交鮨とあるこれなるべしつまは妻の義にあらず交をいふなるべしすべて物に物をかて交へるをつまにするといへるがごとしいすしは貽貝鮨にて保夜をつまにしたる貽貝鮨なるべしさてこはしひて心みにいへるのみすべて古書にはわきまへがたき事どもおほかるをしひていひとかんとすればひがことゞもいでくるものなればかくいへるもおほくはひがことなるべしくれ／＼もこの一章心得がたし猶ふかく考ふべし又考ふるにこの原本と附注本と異本とのみにははぎにもとありて諸本にははぎにものもの字なしはぎにもとする時はあけてのてもじをにごるべき歟このての字をにごる時は心うらうへにかはりてはぎにあげずに見せけるといふ意になれりしか見る時はまへよりのつゞきがらいとあしゝされ ばもの字は衍字にもやあらんまたはもの字にこゝろなしと見てもありぬべし

十四日あかつきより雨ふればおなじ所にとまれり舟君せちみすさう（節忌 妙 精 み爲）

和名抄魚貝類云老海鼠本語抄云老海鼠保夜俗用此保夜二字

又云貽貝崔雅注云貽貝一名黒貝和名伊加比云々」

古今俳諧　藤原兼輔

いつしかとまたく心をはぎにあげてあまのがはらをけふやわたらん

落久保物語云くゝりをはぎにあげてきつるに云々」

雑令云凡月六齋日公私皆断殺生謂六齋日八日十四日十五日廿三日廿九日三十日

季吟云ことに正月五月九月は年三とて持戒精進して一切の罪を消滅すべきよし佛書に侍り」

多武峯少將物語云こゝかしこよりをかしきさうじ物まゐらせたるはとき〴〵奉りおく云々

源氏若菜上云御あるじのことさうじ物にてうるはしからずなまめかしくせさせたまへり云々」

萬葉十一

息緒吾雖念人目多社吹風有数々應相物（イキノヲニワレハオモヘドヒトメオホミコソフクカゼニアラバシバシバアフベキモノヲ）

古今雜上　よみ人しらず

わたのはらよせくる浪のしば〳〵もみまくのほしき玉つしまかも」

延喜主水司式云正月十五日供御七種粥料米一斗五升粟黍子薭子葟子胡麻子小豆各五升鹽四升云々

拾芥抄引世風記云正月十五日亥時煮小豆粥為天狗祭庭中案上則其粥凝時向東方再拜

進じ物なければうまの時より後にかぢとりのきのふつりたりし鯛に錢なければよね（米）をとりかけておちられぬかゝる事おほ（なほ）くありぬかぢとり又鯛もてきたりよね（米）さけ（酒）しば〳〵（などくる定）くるかぢとりけしきあしからず

舟君は船中の主君といふ心なるべし紀氏みづからを例のよそ人のやうにいへるなり　せちみす云々開書云せちみすとはけふは十四日にて六齋日なれば精進潔齋するをいふ也せちみ齋忌とかく下の二月八日の段にもせちみすれば魚もちひずとあり十四日八日いづれも六齋日のうち也　さうじ物は精進物なり船中なればもの不自由にてさるべき精進物もなければ午の時より後に精進をおちられぬとなりきのふかぢとりのつりし鯛にあたへの錢なければ米をつかはして精進おちせられしとなり　よねさけしば〳〵くる云々しば〳〵は萬葉に數々をしば〳〵とよめるがごとくよねさけなど數々かぢとりにあたふるなりしば〳〵あたへたれば甚けしきよしとなり

十五日けふあづきがゆ（小豆粥）にずくちをしく猶日のあしければ（けふの日の爲）ゐざる（膝行）ほどにぞけふ廿日あまりへぬるいたづらに日をおくれば（ふれは定）人々海をながめつゝぞあるそひ（女諸本）わらはのいへる

たてばたちゐればまたゐるふく風と波とはおもふどちにやあるらん

長跪服レ之終年無ニ變衰一
公事根源粥條云寛平のころより年毎にこれを奉る云々
荊楚歳時記云正月十五日作ニ豆糜一加ニ油膏其上一以祠ニ門戸一先以ニ楊枝一插ニ門隨ニ楊枝所ヲ指仍以ニ酒脯飲食及豆粥一插レ箸而祭レ之
續齊諧記云吳縣張成夜起忽見ニ一婦人立ニ於宅上南角一擧レ手招レ成成就レ之婦人曰此地是君家蠶室我即是此地之神明年正月半宜レ作ニ白粥一泛ニ膏於上一祭レ我也必當レ令ニ君蠶桑百倍一言絶失レ之成如レ言作ニ膏糜一自レ此後大得レ蠶今正月半作ニ白膏粥一自レ此始也一
以呂波字類抄云膝行ヰザル
或人云ゐざるは膝行にて舟の水あさき所にゐてうごかぬをしひてやる意也
和名抄に説文云艘千紅反俗云艘流　船著沙不行也とあるにてしろし下文にふれを引つゝのぼれども川の水なければゐざりにのみぞゐざるとあるに同じ
今按するにこの説誤れり舟の水あさき所にてうごかぬをば和名抄にいへるがごとくゐるとこそいへゐざるといひし事いまだみずこゝは日よりうちつゞきてあしければ舟のゆくをのおそきを膝行するにたとへていへる也さてゐざるほどゝはいへりほどゝいふ心をつくべし
下文二月九日の條に川の水なければゐざりにのみぞゐざるとあるは川の水なくして舟の膝行するとくとくもゆかざる也」
源氏若紫云身ひとつをたのもし人にする入なん侍れどいとまだいふかひなきほどにて云々」

いふかひなきものゝいへるにはいとにつかはし
正月十五日小豆粥の事は標注にくはしさて舟中なれば物ごと不自由にて正月十五日なれども小豆粥をもにぬがくちをしと也くちをしくのく文字に意をふくめてとめたる也くちをしくおもふといふやうに詞をつけてきくべし　猶（貧ナシ）日のあしければゝ日よりのあしくして波風たち雨ふりなどしてほどふるをいへり　ゐざるほどにぞ云々ゐざるは膝行にて舟の水あさき所などにてうごかざるをいへり　けふ廿日あまりへぬるとは去年十二月廿一日にかどでして今日は正月十五日なれば前後廿日あまりとはいへりかくいたづらにのみ日をおくれば人々うみつかれて海のおもてなどをうちながめてゐたるなるべし　風のたちゐるにしたがひて波もたちゐすればふく風と波とはおもふどちならんとはいへりさてこの歌もいたづらに日をおくるにあまりのことにうみつかれてふく風と波とは思ふどちならんとさへいへり

土佐日記考證下

十六日風なみやまねば猶おなじ所にとまれり、たゞ海に波（の定）なくしていつしか（深崎妙）みさきといふ所わたらんとのみなん（定ナシ）おもふ（なゆ）かぜなみとゝ（とに、定扶）にや（みイ）むべくもあらずある人のこの波たつを見てよめるうた（イナシ）

霜だにもおかぬかたぞといふなれど波の中にはゆきぞふりけるさて

舟にのりし日よりけふまでに廿日（はイ）あまり五日になりにけり

　みさきは眞淵の說のごとくいまだ安藝國のうちなるべし海に風波なくしていつしかみさきといふ所をとほりすぎんとまちどほにおもふこゝろ也かくおもへども風波ともにやむべくもあらずと也　霜だにも云々南海には霜だにもおかずとはきけど波の中には雪のふれるやうにみゆとなり波の白きを雪になしていへり　十二月廿一日より正月十六日まで廿五日なり十二月小の月なれば也かく日々に日をかぞへ見るなどすべて風波にさへられていたづらに日をおくるにうみつかれたるさまあらはれたり下文にも日をかぞへたる所見えたり

十七日くもれる雲なくなりて（扶ナシ）あかつきづくよいとおもしろ（も扶）ければ舟をいだしてすぎゆく（こ定扶群）このあひだに雲のうへも海（なみイ）のそこもおなじごと

眞淵云みさきは御崎なり安藝郡室津の崎なり」

拾遺愚草
霜おかぬみなみのうみのはまびさしひさしくなりぬ秋のしらきく

白氏文集卷十六云誰言南國無霜雪盡在愁人鬢髮間」

萬葉十
クレフルイカワヤツクヨヒモトカテコヒシヤキーヲラマシモノヲ
四日鏡書中月夜紐不解戀君跡居益物

公任卿集云あかつきづくよにいしやまより出たまふとて關のあなたにて月のいらぬさきにうたひとつとのたまひければ云々

狹衣物語二下云あかつきづく夜のさやかなるにかみぎぬのいとうすき　まげさといふものをきて云々」

漁隱叢話前集卷二十九引ニ今是堂手錄一云高麗使過レ海有レ詩云水鳥浮還沒山雲斷復連時賈島詐爲ニ梢人一聯ニ下句一云棹穿波底月船壓水中天麗使嘉歎久之自レ此不ニ復言一レ詩云々」

古今秋上

久かたの月のかつらもあきはなほもみぢすればやてりまさるらん　たゞみね

初學記卷一引ニ虞喜安天論一云俗傳月中仙人桂樹今視ニ其初生一見ニ仙人之足漸已成レ形桂樹後生云々

詞林采葉抄引ニ淮名苑一云月中有レ桂長二百五十丈月輪内有之レ有レ何此木秋花開云々

酉陽雜俎卷一云舊言月中有レ桂有ニ蟾蜍一故異書言月桂高五百丈下有ニ一人一常斫レ之樹創隨合人姓吳名剛西河人學レ仙有レ過謫令レ伐レ樹釋氏書言須彌山南面有ニ閻扶樹一月過レ樹影入ニ月中一或言月中蟾桂地影也空處水影也此語近云々」

東坡全集卷卅三赤壁賦云桂棹兮蘭槳擊ニ空明一兮泝ニ流光一」

盧洲云　舟かへるは宣説へふれのかへりしなり」

くになんありけるうへもむかしのをとこはさをはうがつ波のうへの
月をふねにおそふうみのうちのそらをとはいひけんきゝさしにきけ
るなりまたある人のよめる
みなそこの月のうへよりこぐふねのさをにさはるはかつらなるら
んこれを聞てある人のまたよめる
かげ見れば波のそこなるひさかたのそらこぎわたるわれぞわびしき
かくいふあひだに夜やうやくあけゆくにかぢとりらくろきくもには
かにいできぬ風もふきぬべしみふねかへしてんといひてかへるこの
あひだに雨ふりぬいとわびし

あかつきづくよは曉の月夜也　むかしのをのこは云々こは貫之を
させるなるべし例のおぼめかして名をはかゝでむかしのをのこと
はいへり　さをはうがつ波のうへの月をふねはおそふうみのうち
のそらを云々この句を原本文字にて棹穿波上月舟襲海中天とかき
たれと今は諸本によりて假名にあらたむさてこの句は漁隱叢話
に出たれと文字いさゝかかはれりそは標注にひけるを見てしるべ
しきゝさしにきけるなり云々この全文さきざきもいへるごとく
すべて女になりてかゝれしかばかく漢土の故事などいへるはほ

萬葉三
夜光玉跡言十方酒飲而情乎遣爾豈若目八方（ヨルヒカルタマトイフトモサケノミテコヽロヲヤルニアニシカメヤモ）
新撰字鏡云跳增遊意之貞安心之貞喜也心與之又心也留
後撰春上
春の野にこゝろをだにもやらぬみはわかなはつ（みつれ）
までとしをこそつめ
大和物語
かたなかにわらびもえずはたゞれつゝ心やりに
やわかなつまゝし
會昌一品外集卷三方士論云嘗於便殿言及方士謂語既多端不可信也上曰宮中無事以此遣悶耳
李群玉詩集卷二云短歌纔遣悶小釀不供愁
契冲云相模風土記云鎌倉郡見越崎毎有沙涌崩

こりかなる故にわざとほゝりかならむとてこはきゝさしたる也と
ことわれる意也この文原本抄ともにきゝざれにきける也と有てそ
れにつきて季吟眞淵なとの説もあれど誤なる事明らかなれば今は
爲家卿本附注本なとにきゝさしとあるによりてあらたむ　みなそ
この云々こは水にうつれる月のうへよりさをさせば棹に滿なとの
さはりたらんを月中の桂ならんとはいへり月中の桂の事は標注に
あけたり　かげ見れば云々この歌ふあきらけし久かたはそらとい
はん枕詞のみ　くろきくも云々原本きの字を脱してくろくもとの
みあれど今は諸本によりてきの字をおぎなふ　みふねかへしてん
はもとの津へ舟をこぎかへすなり

十八日なほおなじ所にあり海あらければ舟いださずこのとまりとほ
く見れどもちかく見れどもいとおもしろしかゝれどもくるしければ（なにけれは附）
なにごともおぼえず（おもほえず定）男どちは心やりにやあらんからうたなどいふべ
し舟もいださでいたづらなればある人のよめる
いそぶり（磯ふり妙）のよするいそにはとしつきを（も附）（の爲）いつともわかぬ（しらぬイ）雪のみぞふ
るこのうたはつね（つれに定）せぬ人のことなり
なほおなじとまりにていまだ室津にありと也　くるしければ云々
こはいたづらに日をふるがくるしきにや舟醉などしたるがくるし

レ石國人名號ニ伊曾布利ニ謂レ振レ石也云々
窓櫻集
いそぶりのさわぐ濱だにたかければみれのこのはもけふはとまらじ
萬葉廿
於保吉美能美許等可之古美伊蘇爾布理宇乃波良和多流知々波々乎於伎弖
眞淵云なみのいそとつゞけたるは萬葉にしら濱のいそ松がえとつゞけたる例也」

源氏橋姫云としごろよからぬ人の心をつけたりけるか人をはかりごちてにしのうみのはてまでとりもてまかりしかば云々
後拾遺雜二　清少納言
よをこめて鳥のそらねははかるともよにあふさかのせきはゆるさじ
新勅撰春上　曾禰好忠
まきもくのあなしのひばら春くれば花かゆきかと見ゆるゆふして」
日本靈異記中卷云貪フケル

き歟、心やりにやあらん云々眞淵云心やりは思ひをやりうしなふをいふ萬葉に思ひをやるといふこれなり遣悶といふもこれ也　いそぶりの云々眞淵云いそぶりは波のいそにふるゝをもてやがていそぶりといひて波の事とする也云々かくいはれつるごとくいそぶりは波をいへりさて一首の意は磯にふるゝ波のよする磯には時をもわかぬ雪のふれりと也波を雪に見なしてよめりこの歌はつねにうたなどよまぬ人の歌なりと也

またひと（あるひとのイ）のよめる

風による波のいそには（ろイ）うぐひすも春もえしらぬ花のみぞさく

このうたどもをすこしよろしと聞て舟のをさしけるおきな月ごろ（月日ごろイ）のくるしき心やりによめる（とて附）

たつなみをゆきか花かとふくかぜによせ（そ定群）つゝ人をはかるべらなる

このうたどもを人のなにかといふをある人の（定ナシ）またきゝて（定ナシ）ふけり（耽）てよめるその歌よめる文字みそもじあまり（り定扶）なゝもじ人みなえあらでわらふやうなり歌ぬしいとけしきあしくてゑ（えす定）（笑）まずまねべども（かく定扶）えまねばずかけりともえよみあへ（のべイ）（すゑ定）がたかるべしけふだにいひがたしましてのち（そのいち）

以呂波字類抄云耽フケル貪ル貌新古今序云みちにふける思ひふかくして後のあさけりをかへり見ざるなるべし云々尚書無逸云不聞小人之勞惟耽樂之從傳云過樂謂之耽」季吟云此の文字あまりするに簡潔のならひとてうちとなふるにはたまりてあしくきこゆるはきらふ事也文字あまりてもほどひやうしあしからぬやうによみ侍るとかや或林貝村二條院讃岐わだつうみのおきつしほあひにかゞくあまのいさもつきあへず物をこそ思へとよめるは何ごとに一字づゝあまりたれどもほどひやうしよきゆゑに卅一字ありてみゝにたゝずと申侍り又京極黄門の米々記にわすれぬらんうらめしと思ひおもふとてもまつべき。あらずとはんともいはじといふ歌侍りこれも卅六字作るなよからぬ體の中にかきつられ給へるにいはんや卅七字をや」今按するにたつなみを云々の歌はまへの詞に舟のをさしけるおきなとあるを附注本にはさをさしける翁とあるによりて思へばをさしけるとあるはさの字の脱せしにやともおもへどたゞ一本によりて本文をあらたむべくもあらねばさておきつさてはし書にさをさしける翁とあるによればたつなみの云々の歌は紀氏の貫之が心もちになりてよまれつるにもやあらんさるは賈島が棹穿波底月船壓水中天と句の下をつけたりしも高麗使のよくもあらぬ詩などいふがかたはらいたさにそをなじりおごるがしゐんとていつはりて梢人となりてゐて句の下をつけたればかの

にはいかならん　はいゝあらん諸抄
風による云々風の浪をふきよするいそには霰もしらず作もしらぬ花のさくよと也しら浪を花に見なしてよめり　ふねのをさしけるおきな云々こは船中の主君といふ心にて紀氏みづからをいふ歟又たゞ船長をいふ歟いづれならんさだめがたしされど歌がらを見るに紀氏みづからの歌なるべし　たつなみを云々眞淵云はかるはたばかるといふ也人を欺くをいへりはじめの二首のうち一首は浪を雪によせいま一首は浪を花に見なしてよめるを引合はせてこゝにはよめる也云々この說のごとく始の一首をうけて雪か花かとはいへりよせつゝはことよするを浪のよするにかけていへりまたこの歌につきて心みにいへる事あれど頭のふきたるにまかせて標注にしるす　なにかといふを云々こゝに何やかやといふ也　ふけりては眞淵云ふけるといふはふかきよりいでたる詞なり夜のふける樂みにふけるなどいふことゝもその歌どもをほむるをきゝてわれもふかく思ひ入てよめりといふにや云々ふけるは耽の字也事は標注にくはし　みそもじあまりなゝもじ人みなえあらでわらふ云々歌はすべて卅一字あるものにてもじあまりといふとも限りあるものなるを卅七字さへあれば人みなこたへえずしてわらふと也季吟云えあらではえたゞはあらでなりかのうたのあしく文字あまりすぎたる

高麗使そのゝち詩をいはざるよし漁隱叢話にしるせりこれによりて思へば貫島が稍人となりしがごごはじめ　波を雲に見なし花に見なせし歌などをなじらんとてかりにみづからをさをさしけるおきなゝはかゝれつる歟さて歌にも先の歌をなじりたるおもむきあらはれてふく風によせつゝ人をはかるとはいへり又こゝにたゞさをさしける翁　なりて歌をよまんのみにてはたれも賈島が故事とはしるまじければこゝにかゝん料にも又事もそこ。たよりあればさきの日の條にことさらに賈島が事をかゝれつるにてもあるべし

和名抄ニ樂部云手名日比俗云於由比　手皆也
源氏空蟬云およびをかゞめてとほはたみそよそなどかぞ。ろさまいよのゆげたもたゞくしかるまじう見ゆ云々一
續日本紀第三十五云寶龜十年五月丙寅前學生安部朝臣仲麿在唐而亡家口偏乏葬禮有勅賜東絁一百疋白綿三百屯
續日本後紀第五云承和三年五月戊申詔詞曰故留學問生贈從二位安部朝臣仲滿大唐光祿大夫右散騎常侍兼御史中丞北海郡開國公贈潞州大都督朝衡可贈正二品一　渉滄波業成鱗角詞峯聳

をわらへるなるべし云々文字あまりの歌の事は標注にあぐるがごとし　歌ぬしいとけしきあしくてゑまず云々こはおのが歌を人のわらへばはらだゝしくてわらひがほもせぬなりこゝの文原本にけしきあしくてえずとあれと脱々なる事明らかなれば爲家卿本と附注本とにゑまずとあるにしたがひてあらたむ　まねべともえまねばずとはたとへこの歌をまねてよむともよみ得べくもあらずと也たとへ又かきたりとも人にはよみえじと也その歌をきゝたるいまさへいひがたきをもしこゝにしるさば後にはいかならんとてこゝにはしるさずとなり

十九日日あしければふねいださず

日あしければゝ吉日にあらねばといへるにはあらず日よりのあしきをいへり

廿日きのふのやうなれば舟いださず（も爲）みな人々うれへなげくくるしく（う爲）こゝろもとなければたゞ日のへぬるかずをけふいくか廿日卅日とかぞふればおよび（指　イナシ）もそこなはれぬべしいとわびし夜はいもねず（よるはいもねずいとわびし爲）（定ナシ）廿日の夜（定ナシ）の月いでにけり山のはもなくて海の中よりぞいでくるかうやう（一　やう定）なるを見てやむかし安部の仲麿といひける人はもろこしにわたりてかへりきたる（け爲　群）時に舟にのるべき所にてかの（の爲）國人うまのはなむけしわか

破舉海揚濤顯空所昇天蓋已歸如何不悲遠近
歸唯有長天之章長傳孫地之響追贈潞州大都督
既叢於前命重叙業建律行於倫紀云々
古今集目錄云安倍朝臣仲麿中務大輔正五位上
船守男靈龜二年八月廿日遣唐學生留學生
從四位下安部朝臣仲麿入唐光祿大夫常侍兼
御史中丞北海開國公贈潞州大都督時中天寶五年
正月薨時年七十三
舊唐書列傳卷二百四十九上東夷云云開元初又遣
使來朝因請儒士授經詔四門助教趙玄默就
鴻臚寺教之乃遺玄默闊幅布以爲束脩之禮
題云白龜元年調布人亦疑其僞所得錫賚
盡市文籍泛海而還其偏使朝臣仲滿慕中國之
風因留不去改姓名爲朝衡仕歷左補闕儀
王友衡留京師五十年好書籍放歸鄕逗留
不去天寶十二年又遣使貢上元中擢衡爲左散
騎常侍鎭南都護
王維集云送秘書晁監還日本詩云積水不可
極安知滄海東九州何處遠萬里若乘空向國惟
看日歸帆但信風鰲身映天黑魚眼射波紅鄕樹
扶桑外主人孤島中別離方異域音信若爲通
文苑英華卷二百九十六趙驊送朝衡日本國詩云
衡命將辭國非才忝侍臣天中戀明主海外
憶慈親伏奏違金闕騑驂去玉津蓬萊鄕路遠
若木故園鄰西望懷恩日東歸感義辰平生一寶劍
留贈結交人
又包佶送日本國聘賀使晁巨卿東歸詩云上才生
下國東海是西隣九譯蕃君使千年聖主臣野情偏
得禮木性本含仁錦帆乘風轉金裝照地新孤

れをしみてかしこのからうたつくりなどしけるあかずやありけん廿
日の夜の月いづるまでぞありけるその月は海よりぞいでけるこれを
見てなかまろのぬしわがくにゝはかゝる歌なん神代より神もよみた
び今はかみなかしもの人もかうやうにわかれをしみよろこびもあり
かなしみもある時にはよむとてよめりけるうた
あをうなばらふりさけ見ればかすがなるみかさの山にいでし月かも
ぞよめりける
くるしく心もとなければたゞいたづらに日をへぬるがくるしく心も
となき也けふいくか廿日卅日とかぞふれば云々上文十五日の條に
も廿日ばかりへぬといひ十六日の條にも廿日あまり五日になり
にけりと云りかくたび／＼日を數ふるなど舟路に日數をふればう
みつかれたる心尤しかるべしかくあまたの日かずをふればかぞふ
るにおよびもそこなはるべしと也日かずへし事をつよくいはんと
ておよびもそこなはるべしといへり　夜はいもねず云々こは舟路
の旅のくるしさによるさへもねざればいとゞわびしと也　山のはも
なくて云々海上なれば山の端もなくて海の中よりいづるやう
に見ゆと也かゝるけしきを見ても仲麿のぬしもかこしにて歌を

晁開ニ啓潮ニ晴日上東海ニ早識本朝歳途川玉帛寸
李太白集卷二十哭ニ晁卿衡ヲ詩云日本晁卿辭ニ
帝都ヲ征帆一片繞ニ蓬壺ヲ明月不レ歸沈ニ碧海ニ白雲
秋色滿ニ蒼梧ニ
元和郡縣圖志卷二十六云明州開元二十六年採訪
使齊澣奏分ニ越州之鄮縣ヲ置ニ明州ヲ以ニ境内四明
山ヲ爲名
古今序云久かたのあめにしてはしたてるひめに
はじまりあらかねのつちにしてはすさのをのみ
ことよりぞおこりけるちはやふる神代には歌の
もじもさだまらずすなほにしてことの心わきが
たかりけらし人の世となりてすさのをのみこと
よりぞみそもじあまりひともじは讀ける云々」
萬葉七
春日ノ三笠乃山ニ月船出遊士之飲酒杯爾
陰ニ附所見管
同十
春日在三笠乃山爾月母出奴可母佐紀山爾開有
櫻之花乃可見
同十八
都奈見禮婆於奈自久爾奈里夜麻許曾波伎美我安
多里乎敝太弖多里家禮
文選謝希逸月賦云美人邁兮音塵闕隔ニ千里ニ兮
共ニ明月ニ」

よみけんと也　安部仲麿のぬしの傳は標注にひけるがごとし標注
にひける外にもみえたれとうるさければあげず　舟にのるべき所
にて云々こは古今集の左注にめいしうといふ所の海邊にてとあれ
ば明州なるべし明州の事標注にひけるが如し　かしこのからうた
つくり云々こはもろこし人も送別の詩などつくれるをいふなるべ
しもろこし人の仲麿におくれりし詩も標注にいだせり　其の月は
海よりぞいでける云々その時の月もこよひのごとく海上よりいで
にきと也　神代より神もよみたび云々わが國には神代より神も歌
をよみたまへりと也神詠の事は標注にあぐべけれとすさのをの命
のやくもたつの御歌の事したてるひめのあもなるやの歌の事なと
は皆人もしりたる事なればこゝにはしるさず　あをうなばら云々
眞淵云古今にはあまのはらとしてのせられたり天の原青海原ふた
やうにいひつたへしなるべし海上なれば今は靑海原のかたをとら
れしとおぼゆふりさけのふりは辭さけは見さけ開さけなとに同じ
くはるかに見る意也云々猶此歌の事は古今餘材抄續萬葉論なとに
もくはしければ事ながければこゝにのせず本書につきて見るべし
さて此歌をこゝにのするに古歌なれば文中にかきつゞくべき例な
るを諸本みな外の歌のなみにかきたり又前後の書ぶりも文中に古
歌をかき入たる體ならねばもとのまゝにておきつ下文二月九日の
條に業平朝臣の歌をかき入たる所にはすでに文中にかきつゞけた

季吟云をとこもじはかななをんなもじといふに對してまなを男文字といふ也

眞淵云男文字女文字とて古へ別なしこのごろいまゝうのなだらかなる書様のありしを女もじとは俗にいへりと見ゆさて仲麿はこの歌を漢文に書て見せける故によく通じたりといふのみ通事のいる事あらず」

漢書卷十九百官公卿表云典客秦官掌二諸歸義蠻夷一有レ丞景帝中六年更名二大行令一武帝太初元年更名二大鴻臚一臣瓚註云郊廟行禮讃二九賓一鴻聲臚傳レ之也

大唐六典卷十八云鴻臚卿之職掌二賓客及凶儀之事一領二典客司儀二署一以率二其官屬一而供二其職務一少卿爲二之貳一凡四夷君長朝見者辨二其等位一以二賓待一之云々」

後撰羇旅云土佐よりまかりのぼりける舟のうちにて見侍りけるに山のはならで月の浪のなかよりいづるやうに見えければむかし安部のなかまろがもろこしにてふりさけ見ればといへることをおもひやりて　つらゆき
みやこにて云々

後拾遺羇旅云佐の使にてつくしへまかりける道に月をまつといふ心をよみ侍る　橘爲仲朝臣
みやこにて山のはに見し月かげをこよひは浪のうへにこそまて

源氏さわらび
ながむれば山よりいでゝゆく月もよにすみわびて山にこそいれ」

りそは前後の文を古詠を文中にかきいるゝ體なれば也

かの國の人きゝしるまじく（定ナシ）おぼえたれど（う定）ことの心ををとこもじにさまをかきいだしてこゝのことばつたへたる人にいひしらせければこゝろをやきゝえたりけんいとおもひのほかになんめでけるもろこしとこの國とはことことなる（ことばイ）ものなれど（やーたれどイ）月のかげはおなじことなるべければ人の心もおなじことにやあらんさて今そのかみを思ひやり（さてまたイ）てある人のよめる歌

後撰羇旅
都にて山のはに見し月なれど波よりいでゝなみにこそいれ（る妙　かげのイ　うみ歟　うみ歟　いるかな）

こゝのことばつたへたる人に云々こは皇朝にいふ通事なり漢土には鴻臚といへり貞唐書に就二鴻臚寺一教レ之とあるなどこゝの文に引合はせて看ふべし鴻臚の事は標注にひけるがごとし　もろこしとこのくに、は云々漢土とこゝの國とは人の言語なとはちがへど月のかげのおなじきがごとく人の心も同じことなれば思ひのほかにこの歌を感ぜりと也　人の心もとあるもじを原本をとあれど誤なる事しるければ今は諸本によりてあらたむ　そのかみを思ひやりてある人のよめる云々此詞そのかみを思ひやりしとあるにふたつの意あるべし　ひとつには仲麿のぬしのもろこしにて月を見てあそうなばら云々の歌をよみし時の事を思ひいでゝふたつには都

大井河行幸和歌序云秋の水にうかびてはながるゝこの葉とあやまたれ云々

躬恒集

この川にもみぢとうきてさしかへるみはけふよりぞみなれそめつる

夫木廿三　民部卿爲家

ちりやすき一葉のふれのうちながらさすか月日も又わたりつゝ

同　權律師教香

みづもせにもへぢのふれなむやひつゝにしきはにかけて風ぞこきゆく

格致鏡原引世本云古者觀落葉因以爲舟

李商　詩集云〻里風波　葉舟」

萬葉十九長歌

知智乃實乃父能美許等波播蘇葉乃母能美已等於保呂可爾情盡而念良牟

和泉式部日記云いつかはとのたまはせたるはおぼろけに思ふたまへていりしば云々

拾遺戀三　よみ人しらず

あふ事はかたはれ月のくもがくれおぼろけにやは人のこひしき

にて月なと見たりしをりの事なと思ひいでしなるべしさる證には歌にも都にて山のはに見しといへり　都にて山のはに見し云々一首の意は都にありし時山のはよりいで、山のはにいるやうに見えつる月なれともこゝにては浪よりいでゝ浪にいるやうに見ゆと也眞淵云都にて山のはに見しといふ所三笠の山にいでし月かもといふにあたり浪よりいでゝ波にこそいれといふは青海原ふりさけ見ればといふより出たり

廿一日卯の時ばかりにふなゝ〔ふれいだす爲〕すみな人々の舟いづこれを見れば春のうみに秋のこのはしもちれる〔ちるイ〕やうにぞありけるおぼろけのねがひによりてにやあらん風もふかずよき日いできてこぎゆくこのあひだにつかはれんとてつきてくるわらはありそれがうたふうた〔ふなうた爲附〕

猶こそ國のかたは見やらるれわが父母ありとし思へばかへらや〔かへらじはや爲附〕

とうたふぞあはれなる

春の海に秋のこのはしもちれるやうにぞ有ける云々こは人々の舟のきそひ出るを落葉の水にうかびたるがごとしと也さて舟はもとより落葉を見て作りそめたる物なる事思ひ合すべし季吟云この葉しものもは助辭也舟を一葉ともいへり　おぼろけは標註の說のごとくおぼろけならぬ意也〱は標注にあげたるを見てわきまふべ

源氏若菜上云おぼろけにしめたるわが心からあさくも思ひなされず云々
又椎本云おぼろけのよすがならで人のことにうちなびきこのやまさとにあくがれたまふな云々
榮花さまざまの悦云おぼろけにおぼす人にぞいみじうしのびて物などものたまひける云々
眞淵云おぼろけは大かたといふ詞也さればおぼろけならぬねがひにとあるべきをかくいへるはこのごろの俗語におぼろけならぬといふべきをならぬをはぶきていへる俗語をもてかけりと見ゆ源氏物語にもかくさまにいへることあり凡俗語にはいひなれし詞は理なくはぶきてつかふ事多し今もしかりかゝる詞はみやび言にあらずとしりてわきまふべし或說にやはと見よといへどしか見るときはあらんの詞おちぬず
和名抄羽族部云漢書抄云久呂止里黑色水鳥也
十六夜日記云しろき洲ざきにくろきとりのむれゐたるは鵜といふとりなりけり云々」
季吟云ものいふやうにとは秀句など作意ありていふやうなると也
眞淵云ものいふやうにとは語をあやにいふやう成と也」
古事記云天照大御神者登賀米受而告
萬葉四
足引乃山二四居者風流無三吾爲類和射乎害目賜名（アシヒキノヤマニシヲレバミヤビナミワガスルワザヲトガメタマフナ）
伊呂波字類抄云咎トガム尤譴
後拾遺上
よみ人しらず

し季吟の說におぼろけにも大かたに也大かたのねがひにてやはかやうのよき日はあらんとの心にやといへるは誤れり　なほこそ國のかたには云々この歌意明らけしかへらやはさきの舟歌にも見えたり

とうたふぞあはれなる云々このともじを原本に脫せり今は諸本によりてくはへつ

かくうたふをきゝつゝこぎくるにくろとりといふ鳥いはほ〔いはの定〕のうへにあつまりをりそのいはほ〔いはの定〕のもとに浪しろくうちよすかぢとりのいふやうくろ鳥〔くろき定〕のもとにしろき浪をよすとぞいふこのことばなにとには〔はなか〕なけれど〔れど傍附〕もののいふやうにぞきこえ〔きこゆる傍附〕たる人のほどにあはねばとがむるなりかくいひつゝゆくに舟君なる人浪を見てくにより〔はじめて〕かいぞくむくいせんといふなることをおもふうへに海〔なみ傍〕のまた〔と傍〕おそろしければかしらもみなしらけぬなゝそぢやそぢ〔七十八十〕はうみにあるもの也けりわがかみのゆき〔と傍〕といそべのしらなみといづれまされりおきつしまもりかぢとりいへ〔とゝぢとりいへり原本妙誤〕

くろ鳥の事標注にひけるがごとし　しろき浪をよすとぞいふ云々この文原本よするとぞいふとすれどるの字衍なる事明らかなれば今は拾葉本類從本などによりてはぶきつ　物いふやうにぞきこえ

うゑい花よそながら見んわぎもこがとがむばかりのそにもこそしめ
千載卷五　　相模
かり人はとがめもやせん草しげみあやしき鳥のあとの見だれを」
大和物語云御はかしばしかしたまはらんれたきものゝむくいし侍らんといふに云々・
宇津保俊蔭云東國よりみやこにかたきもたる人むくいせんと思ひて四五百人の兵にて云々
源氏賢木云后の御心いちはやくてかたがたおぼしつめたることゞものむくいせんとおぼすべかめり云々」　樹
十訓抄下云顯光左大臣は小一條院の女御あらそひによりて御堂關白を恨奉りて惡靈と成て一夜の内にことごとく白髪になりたまひけんこそいとおそろしけれ云々
漢書第五十四蘇武傳云武留二匈奴一凡十九年始以レ彊壯一出及レ還須髪盡白云々
南齊書第三十六謝超宗傳云武帝收二謝超宗一付二廷尉一一宿髪白云々
世說巧藝篇云韋仲將能レ書魏明帝起レ殿欲レ安レ榜使二仲將登レ梯題一レ之旣下頭鬢皓然因敕二兒孫勿一レ復學レ書
卑雅卷一引養生經云魚勞則尾赤人勞則髪白」
季吟云いづれかまされりとはいづれかまされりけんと含たるてになは也
戀しきも思ひこめつゝあるものを人にしらるゝ泪なになりなどよめるたぐひおほく侍りしまもりはたゞ島を守護するものなりかぢとりいへと

たる云々こはものゝ心しりて興あることをいふやうなりとほめたるなり猶諸說標注にあぐるがごとし　人のほとにおはねばとがむる也云々さるいやしきかぢとりなどの身にしていへることにはにつかはしからねばかくはとがむと也とがむは尤咎の字なとを訓せりこゝは物をあやしめるこゝろ也しかいふ詞は標注にあげたり　舟君なる人云々こは紀氏みづからをいふなるべし　波を見て云々眞淵云波を見ては下に海のまたおそろしければといふへかけて見べし云々といはれつるがごとし季吟のくにによりはじめてとは土佐より舟出して波を見るよりはやこの氣のありしとの心也といはれしはたがへり　かいぞくむくいせんと云々かいぞくは海賊也むくいとはすべてあだを報ずるをいへりそは標注にひける證を見てもしるべしこは紀氏任國のおひだ海賊などからめしことなどのありしが今この海路にてあたを報せんとておひきたるよしなどきゝてそをおそるゝさまにかけるはみづからを女になしてかける故なりこの一章季吟の說いたくたがへりそは紗をひらき見てしるべし　かしらもみなしらけぬなゝそじやそじは海にあるものなりけり云々海賊と海上とのおそろしさにいたく辛勞したればかしらも白髪になれりと也さて七八十年のおいの一時にわが身にきたりしやうに思ふと也さればなゝそじやそじは海にある者也けりとはいへりすべて人いたく勞すれば白髪になるといへりその證は標注にあげた

はかの白髪としら浪との勝劣を島守に問ひかけて又梶取もこのおとりまさりないへといひつゝけにしや
濵淵云萬葉四に八百日ゆく濵のまさごもわが戀にあにまさらめやおきつしまもりこの歌を思ひてよみたるにや

以呂波字類抄云童（ワラハベ）」
河社引圓覺經云雲駛月運舟行岸移云々
晋書陸雲云渡レ水疑二山動一揚レ帆覺二岸行一

古事記云如レ此歌而闘明（アラケマシヌ）各退云々
書紀神武紀云各皆一時離散（アラケタルイクサ）卒云々
字鏡集云散（アラク）
以呂波字類抄云散（アラク）」
古今秋下　文屋康秀
くさも木もいろかはれどもわたつみの波のはなにぞ秋なかりける」

り　わがかみと云々この歌意のきらけしいづれまされりおきつしまもりと島守へとひかくる意なりさてかぢとりもいへとかぢとりへもとひかくる意なりおきつ島守かぢとりいへと歌より文へつゞけて心得べし原本おきつ島守とかぢとりいへりとあれど誤なる事しるければ定家卿本拾葉本異本などによりてあらたむ

廿二日夜べ（よんべ定）のとまりよりことゝまりをおひてゆく（てぞ群）はるかに山見ゆとしこ（よはひイ）ゝのつばかりなるをのわらはとしより（よはひイ　定ナシ）はをさなくぞあるこのわらは舟をこぐまに〳〵（まゝに定為）山もゆくと見ゆるを見てあやしきことうた（イナシ）をぞよめるそのうた（為ナシ）

こぎてゆく舟にし（て定）見ればあしびきの山さへゆくを松はしらずや

とぞいへるをさなきわらはの事（為ナシ）にてはにつかはしけふ海あらけ（あらけにて諸本）磯にゆきふりなみの花さけりある人のよめる

なみとのみひとへ（つイ）にきけどいろ見れば（そイ）ゆきとはなとにまがひぬるかな

ことゝまりは外の泊也昨夜のとまりより外のとまりをおふ也　をのわらはゝ男のわらはと云也きにめのわらはと云しにむかへて云り原本をさなくそのを文字を脱す今諸本によりておぎなふ　舟をこぐ

まに〳〵山もゆくと見ゆるを云々こは舟をこきてゆくまゝに山もゆくやうに見ゆゝ也この事は標注にひけり　あやしきことうたをぞよめる云々眞淵云あやしきとにて何をさるべし漢文の例物語などに多し九歳ばかりなるわらはのそのとしころよりはをさなきうまれのもいが歌をよみたるはあやしき事かなと詞をあやにいへるなり　こぎてゆく云々こぎてゆく舟のうちにて見れば山の行やうに見ゆるを山のうへにたてる松は山の行をばしらざるやと也　海あらけは諸本に海あらげにてとありあらけとのみあるはこの原本と爲家卿本と附注本とのみなれどこの本のごとくあらけとのみあるをよしとすさてあらけは海のあるゝことにあらず古事記に各退とあるをあらけましぬと訓じ書紀に散卒とあるをあらけたるいくさと訓じ字鏡集以呂波字類抄なとに散の字をあらくと訓せるなどをもて思へば波なとの散るをあらけとはいひしならん波の散る故に磯にゆきふりなみの花さけるやうに見ゆると也海あらけのけもじにごるべからず海あらけ磯にゆきふり波の花さけりと詞をかさねてかきたるも一つの文勢なり諸説みな海のあるゝことゝすれど實に海のあるゝにてはいかでかく歌をもよみ波を雪花に見なしてたはふれかける事のあらんこれらを見ても實に海のあるゝにはあらざる事をしるべし　波とのみ云々こは波とのみたゞ一樣にきゝつれど色を見れば雪や花にまがふと也まへに磯に雪ふり波の花さ

古今序云此のよのなかきなかこ〱れはかつは人のみゝにおそりかつは歌の心にはぢおもへど云々
後拾遺一紙
さかへきにさやけきかげの見えぬればちりのおそいはあらじとぞ思ふ」

和名抄微時類云楫師文選呉都賦云櫂工楫師和名加知止利

萬葉三
佐保 而室欒乃手染樹置帳者妹乎日不臨相見
染跡衣
同九
海若之河神乎實所ヽ歓告方毛来方毛船之早浪
和名抄神靈部云道神和名太牟介乃加美一云道神也
□濟云島ぶに船はつるつしまのわたりわた中に

けりとあるもこの歌にかくいはん料なり

廿三日てりてくもりぬこのわたり海賊おそりありといへばかみほとけをいのる

朝のうちしばし日てりてまたくもれるなり　おそりは恐にてりとれをかよはせたるのみこのころおそりとのみいへり

廿四日きのふおなじところなり

昨日のとまりとおなじ泊なるべしきのふの條にしるされねは所の名はしられず

廿五日かぢとりらのきたかぜあしといへば舟いださず海賊おひくといふことたえずきこゆ

おひくは追來る也海賊のおひきたるよしたえずきこゆるなり

廿六日まことにやあらんかいぞくおふといへば夜半ばかりより舟をいだしてこぎくる道にたむけする所ありかぢとりしてぬさたいまつらするにぬさのひんがしへちればかぢとりのまうしたいまつることはこのぬさのちるかたにみふねすみやかにこがしめたまへと申てたいまつる、これをきゝてあるわらはのよめる

ぬさとりむけてはやかへりこれともいへりいづくにてもたむけはする也」

古事記云更貝二國之大奴佐一而（奴佐二字以音）

書紀ニ恭紀云玉田宿禰則畏有レ事以二馬一疋一授二筈鏡一爲二禮幣一云々

日本紀纂疏云幣謂二束帛一也謂二布帛紙類一也

管子國畜篇云以二珠玉一爲二上幣一以二黄金一爲二中幣一以二刀布一爲二下幣一

後撰離別云あひしりて侍りける人のあづまのかたへまかりけるに櫻の花のかたにぬさをしてつかはしける　よみ人しらず

あだ人のたむけにをれるさくらばなあふさかまではちらずもあらなん

貫之集八云つるのかたにぬさいるゝものをしてかける

千とせをばつるにまかせてわかるともあひみんことはあすもとぞ思ふ

中務集云ものへゆく人つるのかたをぬさにして

君がゆく雲路おくれぬあしたづはいのる心のしるべなりけり

宣長云ぬさは神に手向る物をもいひ又祓にいだす物をもいふ名義は禱布佐（子キフサ）にて事をこひねぐとていたすよし也れぎふをつゞむればねとなるなり祓のぬさもその罪穢をのぞき清めたまへと（子）ねぐ意もて出すなれば神に奉りて祈ぐと心ばへ一つ也さて布佐は麻なり古語拾遺に好麻所レ生故謂二之總國一古語麻謂二之總一也今爲二上總下總二國一とあり」

わたつみのちふりのかみにたむけするぬさのおひかぜやまずふかなん（新千載羇旅　ちひろのかみ集六帖　六帖四）とぞよめる

夜半ばかりはよなかばかりとよむべしすでに類從本には夜なかと假名もてかき拾葉本には夜中とかけりさるを原本に夜半とあるをよはと假名を付たるは誤れり　たむけする所あり云々たむけはくがにても舟路にても道の神につゝがなからんやうにといのるをいへり萬葉に祈の字手祭などの字をたむけとよめるがごとしまた眞淵の説もかしらにあげたり　ぬさたいまつらするに云々ぬさは幣をよめり云々眞淵云ぬさは古へはその色々の絹布を尺ながら奉るゆゑに萬葉などには常にも旅にもおゝぬさとよめり後には旅にはこまかに切たるを袋にいれてもたるをさるべき所々にうちちらしたむけてゆく也　わたつみのちぶりの神に云々ぬさのおひかぜは今ちぶりの神に奉るぬさのひんがしへちれば京のかたへかへらんにはおひかせなればかくはいへりちぶりの神は袖中抄眞淵などの説のごとく道觸の神なりなほくはしく標注に見えたりなほまた和訓栞にも出たれどことながければこゝにあげずひらき見てしるべし

このあひだにかせよければかぢとりいたくほこりて舟にほかけなど（ほどに扶イ定　の扶群　爲ナシ　あ爲　よ爲）

袖中抄第十九云
ゆくけふもかへらんときもたまぼこのちぶりの
かみをいのれとぞ思ふ
顯昭云ちぶりの神とはみちふりの神といふにや
海路にもよめり
わたつみの云々
この二首はともに貫之詠之
隱岐國にこそ知夫利島といふ所にわたすのみや
といふ神はむはすなれ舟いだすとてはその神に
奉幣してわたりをいのるとぞ申すそれを本體に
て海をもくがをも道を祈る神をばちぶりの神と
なづけたるにや又その神を思ひてかの所にもつ
けたるにやこれはあまりのことなり
「淵ム一反の御道守の神などありこれは道祖の
神なるべし行道のほとりの神といふ心也こゝは
海路にかりていへるなり
拾遺愚草中
やまびめのぬさのおひかぜふきかさねちびろの
うみに秋のもみぢば
新撰六帖四　光俊朝臣
なみたつるぬさのおひかぜはやければまかぢし
げぬきわたるふな人」
季吟云物をよろこぶときは手鼓などうつことを
船の帆手をうつにそへてよめり
「淵云帆のよこ手に綱をおほくつけて右へ左へ
ひらかんとする綱をほでといへり物をよろこぶ
時は手つゞみなどうつを舟の帆手を風にうたす
るにそへてよめるなり
谷川士淸云ほで船にいふは船手なり荷舗ともい

よろこぶそのおとをきゝてわらはも（おきな 附）女もいつしかとし思へばにやあ
らんいたくよろこぶこの中にあはぢ（淡路）のたうめといふ人のよめるう
た
おひかぜのふきぬる（くる抄）時はゆくふねのほ（ほ定）でうちてこそうれしかりけれ
とてそのことにつけていへる爲（て定 いへるイ）
とぞていけのことにつけつゝいのる

そのおとをきゝて云々帆をあぐる音也こゝにそのおとをきゝてと
あるを後の歌のほでうちてといふへかけて聞べしこゝに音と云よ
りほでうちてとはいへりわらはも女もとある女はもとおんなもと
ありしを心なく女と文字には直してかけるならんこゝはわらはに
むかへていへるなればおんなにて嫗をよめり嫗は老女の事なりさ
てこのおんなは淡路のたうめとあると同人にや　あはぢのたうめ
云々たうめの事は上文正月九日の條にいへり下文淡路の巨子とあ
ると同人なるべし　おひかぜの云々この歌意明らけしほでは諸説
みな船の具に帆手といふものゝあるやうに見ゆれど實にさる具今
もありや物にみえたることなしされば按するにこは物をよろこぶ
とき手などうちてよろこふをほでうつといひしならんさてそれに
船の帆をかけていへるにてゆく舟の帆と帆の字一字にのみかゝり
て手まではかゝらざる詞なるべし枕詞などにたゞ一字にのみかゝ

ふ」

眞淵云天氣のことにつけていへることの多かりしゆゑにかく誤るならんさなくてはこの詞益なし

晉書卷六明帝紀云明帝幼㒀元帝抱置膝前屬長安使來因問以日與長安孰遠對曰長安近不聞人從日邊來居然可知也元帝異之明日宴群僚又問之對曰日近元帝失色曰何乃異昨日之言對曰擧目則見日不見長安由是益奇之」

宇津保藤原君云いちめうちわらひてつまはじきをしてきこゆ云々

蜻蛉日記云いとかしこしとてつまはじきうちしてものもいはで云々

源氏空蟬云かの人の心をつまはじきをしつゝうらみたまふ云々

東鏡卷八云彈指（ツマハジキ）

梁書卷十　褚翔州傳云翔少有孝性爲侍中時母疾篤請沙門祈福中夜忽見戸外有異光又聞空中彈指及曉疾遂愈咸以翔精誠所致焉

維摩經云度百千劫猶如彈指

太平記音義卷十一云小彈（ツマハシキ）」

萬葉十九

宇良宇良爾照流春日爾比婆理安我里情悲毛比登里志於母倍婆（ウラウラニテレルハルヒニヒバリアガリコヽロガナシモヒトリシオモヘバ）

春日遲々鶬正啼悽惆之意非歌難撥耳乃作此歌式展締緒

ゝりて下をいひつゞけたる例多してらし見てしるべし　ていけのことにつけつゝいのる云々ていけは天氣也上にてけとあるに同し歌などよむにつけても天氣のよかれかしといのるとの心也されと眞淵はいへるとある本にしたがはれぬ

廿七日かせふきなみあらげれば舟いださずこれかれかしこくなげく男たちの心なぐさめに（定ナシ）からうたに日をのぞめば都とほしなどいふなる事のさまをきゝてある女のよめるうた（扶ナシ）

日をだにもあまぐもちかく見るものを都へとおもふ道のはるけさ又ある人のよめる

ふくかせのたえぬかぎりしたちくれば波路はいとゞはるけかりけり

日一日風やまずつまはじきをしてねぬ（定ナシ）

かしこくなげく云々かしこくは古事記に恐をよみ書紀萬葉などに可畏懼などをもよみてもとはおそるゝ意なれとこゝにはいたくなどいふ所にもちひたり　日をのぞめば都遠し云々この詩の句は舟中の人の作なるべしされば男たちハ心なぐさめにとは云り　日をだにも云々この歌意明らけし晉の明帝の故事に似たりそは標注にひけるを見てしるべし　ふくかせの云々吹風　たえずふくかぎりは波もたちやまねば都へと思ふ波路はいとゞいつとなくはるけき

やうに思はると也　つまはじきはものをうとましく思ふ時のわざなり漢土に彈指といへるもつまはじきの事也

廿八日よもすがらあめやまず（も定）けさも

終夜あめふりてけさもやまざるなりよもすがらは廿七日の夜をいひけさもは廿八日のあさなり

廿九日ふねいだしてゆくうら〳〵と（に日イ）てりてこぎゆくつめい（の定）とながくなり（なるな定）にたるを見て日をかぞふればけふは子の日なりければ（なれば定）きらずむつきなれば京の子の日のこといひ（なおもひイ）いでゝ小松もがな（定ノシ）といへど海なかなればかたしかしある女の（定ノシ）かきていだせる（したるイ）うた

（六帖一）おぼつかなけふは子の日かあまならばうみまつをだにひかましも（しぞひくべかりける）

（六帖）のをとぞいへる海にて子の日のうたにてはいかゞあらん

うら〳〵とてりては原本に浦と照てとあれどそは借字にて浦々とかきしより誤れるにて甚しきにいたりては假名にてうらことなど書し本もあれど今は定家卿本爲家卿本拾葉本類從本異本などによりてあらたむ　子の日なりければきらず云々すべて爪をきるには日をとりてきるよしふるくよりいへりけふは子の日にて爪をきる日にあらざればきらざる也爪をきる日の事標注にひけるが如し

江談抄卷四云東行西行雲眇々二月三月日遲々天神合レ教曰トサマニユキカクサマニユキクモハル〳〵キサラギヤヨヒヒウラヽト可詠云々

毛詩國風云春日遲々采レ蘩祁々」

簾中抄云つめきる日手の爪丑寅足の爪寅午

日本紀纂疏上云凡陰陽家丑日除ニ手甲一寅日除ニ足甲一爲レ吉又云寅日三尸遊ニ兩手指甲一午日三尸遊ニ兩足一當レ去ニ兩足指甲一云々

道生〇遵守庚申法云甲寅日可レ割ニ指甲一甲午日可レ割ニ脚甲一」

管子〇草卷六云予亦嘗聞ニ子故老一曰上陽子日野遊賦レ之其事如何其式如何倚ニ松樹一以摩レ擾習ニ風霜之難一犯也和ニ柴羹一而啜レ日期ニ氣味之克調一也云々

拾芥抄引十節記云正月子日登レ岳何耶傳云正月子日登レ岳遙ニ望四方一得ニ陰陽靜氣一除ニ煩惱一之術也云々

眞淵云今日まで日〳〵とに雨ふり風ふきてたゞ日よりの事のみ思ひこゝろづかざりしにけふうら〳〵とてれば心ものどやかになりて爪の長くなりたるに心づきし事さもあるべしむ月に子の日に野邊に出て小松引若菜つむと云事は古はなし今の都となりてはじまりしなるべし今の世の説につれの子の日は日をすみてむ月の初子の日はにごるべしと云りしばらく詞をわくるため俗言にはさもあるべし雅言にいはゞ初子の日をにごるべきよしなし子の日といふときはいつれの子の日にても音便にてにごらるゝなり又正月七日

なる子の日とさだめて若菜つみ小松引ことは後のことゝみゆ後撰集正月初子の日に松引同じ日にわかなつむ事みゆ」

和名抄海菜類云海松崔禹錫食經云水松状如ㇾ松而無ㇾ葉和名美流楊氏漢語抄云海松和名同上俗用ㇾ之

續古今貫　　　　　　　　　　　　　　　　　蓮瞻法師

うごきなき岩ほにねざすうみ松のちとせをたれになみのよすらん

夫木廿五　　　　　　　　　　　　　　　　　　よみ人しらず

なだのうらのしほになづさふうみ松をみぎはの涙ぞとしはこえける

同廿六　　　　　　　　　　　　　　　　　　　よみ人しらず

はるかなる子の日がさきにすむあまはうみ松をのみひきやよすらん」

榮花物語殿上の花見卷云子日に山すげをてまさぐりにして

おぼつかなけふは子の日か山すげのひきたがへてもいのりつるかな」

古今春上　　　　　　　　　　　　　　　　　　よみ人しらず

春日野のとぶ日の野もりいでゝ見よいまいくかありてわかなつみてん

金葉集　　　　　　　　　　　　　　　　　大中臣公長朝臣

かすが野の子の日の松はひかでこそかみさびゆかんかげにかくれめ」

季吟云土佐泊は阿波國也鳴門にちかし又云とさといひける所にすみける女云々これは紀氏土佐の任國の事をあらはにいはで紛端にもある人あがたの四とせ五とせと書て土佐といはざりしかばこゝにもかくむかしなどゝおぼめかしてかけ

子の日の事は標注にくはしさて子の日は當月五日初子にて十七日も中子なるを何のさたもなくして今こゝに廿九日おと子にしもはじめて松もわかなもいひしかも歌をさへよまれしはいかなる事にか今考ふるに五日は風もやまず人もおほくとふらひきたりて物にまぎれたるなるべし又十七日はくもれるくもゝなくといひ歌ともゝみえたれと子の日の事はなしさるをこゝにはじめていひ出しは爪のゝびたるにつけて子の日を思ひ出子の日を思ひ出しより今年は初子も中子もわすれゐしとの心にて今日はじめて松も若菜もよまれしなるべし小松もがなとは思へども海上なれば小松を得る事もかたしと也　おぼつかな云々うみ松は海松の子のおもてにつきてよめるなりけふは子の日とはいへど小松もなければいとおぼつかなしせめて海士ならば松といふ名あれば海松をだにひかましもののをと也　海にての子の日のうたにてはいかゞあらん云々伊勢物語の歌の後に筆者の詞をそへてあまれりやたらずやよしやあしやなどいへるはみなほめたる詞也こゝにもいかゞあらんといひてあしからじといひたる詞也

またある人（定）のよめるうた

けふなれど若菜もつまず（に爲）かすが野のわかこぎわたるうらになければかくいひつゝこぎゆくおもしろき所に舟をよせてこゝやいづこと

る也
眞淵云土佐の泊といふは阿波國　ありとある人いへりさてむかし土佐といひける所　住ける女といふは土佐國土佐郡土佐郷に住し女のこの舟に在てよめるなるべし貫之のこの國の守なるなおぼめくやうに書しといふはかなはず」
萬葉七
住吉之奥津白波風吹者來依留濱乎見者淨霜（スミノエノオキツシラナミカゼフケバキヨスルハマヲミレバキヨシモ）

とひければ土佐のとまりとぞいひけるむかしときといひける所にすみける女このふねにまじりけりそれがいひけらくむかししばしありし所の名たぐひにぞあなるあはれといひてよめるうた

としごろをすみし所の名にしおへばきよる波をもあはれとぞ見る

露どそいへる妙傍群

けふなれゞ云々この歌うちつけにきけば春日野に浦のあるやうにきこゆれどさにあらず詞をうちかへしていまわがこぎわたる浦に春日野のなければ今日子の日なれどもわかなもつまずときくべしわかなの事は七日の條にくはしければこゝにはもらしつ　土佐の泊は和名抄に土佐郡土佐といふ所みえたれど上にすでに安藝郡の地名みえたるに土佐郡は安藝郡より西のかたなればそこにはあるべからずこは土佐の國の地圖もて考へたる也土佐の泊とぞとあるその字を原本脫せり今は諸本によりておぎなふ　むかし土佐といひける所にすみける女云々こは紀氏みづからをいふなるべしくはしくは標注にあげたる季吟の說にみえたりなたぐひはむかしすみし所の土佐といへる名のたぐひにてこゝも土佐の泊といふと也としごろを云々この歌意明らけしきよる波はきよする波といふにおなじ名にしおへばとあるを原本名にしおはゞとすれど誤なる事

萬葉十五
牟可之欲里伊比祁流許等乃可良久尓乃可良久毛己許尓和可禮須留可聞
古今雜上
おしてるやなにはのみつにやくしほのからくもわれはおいにけるかな」　よみ人しらず
見聞抄云阿波のみとは阿波の鳴門なり田無川とは和泉なり
季吟云沼島は海中にあり太平記には武島とあり土佐泊より五里云々たな川和泉の田川にや
眞淵云萬葉に淡路の野島がさきよめり
萬葉三
三津埼浪矣恐隱江乃舟公宣奴島爾」　人麿
字鏡集云蚫アハヒ」

明らかなれば今は定家卿本爲家卿本拾葉本新釋本などによりてあらたむ

卅日あめかぜふかず海賊は夜ありきせざなりと聞て夜なかばかりに舟をいだして阿波のみと（水門 みなと爲）をわたる夜なかなればにしひんがしも見えずをとこ女からく神ほとけをいのりてこのみと（水門）をわたりぬとらうの時ばかりに奴島（ヌシマ）といふ所を過て田無川（イナシ）といふ所をわたるからく（かく定）いそぎて和泉の灘といふ所にいたりぬけふ海に波に似たる物なし神佛のめぐみ蒙（かうぶれるに定）に似たりけふ舟にのりし日よりかぞふれば三十（ミソ）日あまり九日になりにけりいまはいづみのくににきぬれば海賊もいならず

海賊は夜あるきはせぬものぞと聞て夜中に舟出してゆく也　阿波のみとは阿波の水門にてみなとゝいふにおなじ是阿波の鳴門をいへるならんそはこの次にいへり　からく神佛をいのりて云々季吟の説に辛勞の心也といはれしはたがへりこは萬葉古今などに例ありそは標注にひけるがごとしからく神ほとけをいのりてこのみとをわたりぬとあるを見て思へば阿波のみとゝ阿波のなるとをいへるにやこのつぎに奴しまとあるはすでに淡路の國のぬしまが崎なれば阿波のみとは阿波のなるとにて道のほどもたよりありて覺ゆ

泉州志云日根郡黑崎在二淡輪村一」
和名抄染色具云蘇枋俗音人用二染色一也
山家集
しほそむるますうのこかひひろふとていろのは
まとはいふにやあるらん」
尚書舎禮云以二五采一彰二施于五色一蔡沈註云五色
青黄赤白黑也」
爲久集
はこのうらにあけくれあそぶあしたづのちとせ
のかげぞともに見ゆらん」
和名抄舟具云牽波（音文）豆奈天挽船繩也」

田無川に季吟云和泉の田川にや　和泉のなだは和泉國和泉郡和泉郷ありそこの灘なるべし　けふ海に波に似たるものなし云々こはのどかなるをつよくいはんとてのかきざま也　恤はあはれふとよむべし原本にうれふると假名をつけたるは誤なり　三十日あまり九日になりにけり云々上文十六日の條廿日の條なとにも下文二日朔日の條にも日をかぞへたる所ありかくたび／＼日をかぞふるさまことに海路に日をへたるにうみつかれたるさまあらはれたり　かいぞくものたらず云々こは和泉ノ國は畿内にてしかも都もちかければ今は海賊ものゝかずにもあらずと土佐今までは海賊をいたくおそれつれど今にはや京もちかければ心づよくなりたるさまことに女の心さもあるべし

二月朔日朝（のあしたの刂定）のまあめふりうまの時（る時）ばかりにやみぬれば和泉の灘とい（たゞは爲）ふ所より出てこぎゆく海の上きのふのごとくに（爲・シ）風波見えず黒崎の松原をへてゆくところの名はくろく松のいろはあをくいその浪は雪のごとくに白（消本ナシ）貝の色にすはう（蘇枋にてんせゆる爲）にて五色に（挟・シ）いまひ（冬支）といろぞたらぬこのあひだにけふはこの浦といふところよりつなでひきてゆくかくゆくあひだにある人のよめるうた（イナシ）
玉くしげはこのうらなみたゝぬ日はうみをかゞみとたれか見ざら

人麿集
あしがらのさがみにゆかんたまくしげはこれの
山のあけんむしたに」

ん

黒崎は和泉國日根郡なり　所の名はくろくとは五色をいはんとて黒崎といへば黒きにかぞへいれたり　雪のごとくに白く云々原本雪のごとくに日とあれど日の字は白を寫し誤れる事明らかなれば拾葉本に引ける異本と又外の異本とに雪のごとくに白くとあるによりてあらたむ　五色は青黄赤白黒なりくろきは所の名の黒崎といふにてもたせ青きは松の色にてもたせ白きは浪にてもたせ赤きは貝の色の蘇枋なるにてもたせたれど五色に黄が一色たらずと也はこの浦も和泉日根郡箱作村なりそは泉州志箱作村の條にこゝの文をひきたるにてもしるべし　つなでは標注にひける和名抄に見ゆるがごとし　玉くしげはこのうら波云々玉くしげはことつゞくる事は萬葉にも見えず標注にひけるがごと人麿集の國々の名をかくし題によめる中にはじめて見えたるのみさてこの人麿集といふものうけひきがたきものにてしかも國々の名をかくし題によめる歌はことに用ふるにたらずされど歌のすがた延喜天暦の後の作者のしわざなるべしと契冲師もいはれぬれば玉くしげはことつゞくる事このころやはじめならんこの歌意あきらけし鏡といふ物は櫛笥にいるゝもの故玉くしけはこの浦波といふより海をかゞみとたれか見ざらんとはいへり海をかゞみと見るなと風波なくのどかなるさま也

萬葉一長歌云眞木乃都麻手乎百不足五十日太爾作云々

紫式部日記云御いかは霜月の朔日の日れいの人々のしたて のぼりつとひたる云々

榮花物語花日云御いかやもゝかなとすきさせたまひていみじうつくしうおはします云々」

楊鶯里集卷二云拈出若視門ニ宇宙ノ本來詩尚只雲ふ」

字鏡集云諷シフル

萬葉三 不聽話禮話禮常詔許 志悲伊波奏強話登言

眞淵云しひへはしひめ也えしひてはいはじとなり」

萬葉七 向峯爾立有桃樹成哉等人曾耳言爲汝情勤

源氏若菜上云あやしくうちにのたまはする御さゝめきごとゞものおのづからひろごりて云々」

またふな君（みふな君爲）のいはくこの月までなりぬることゝてなげきてくるしき
にたへずして人もいふことゝて心やりにいへるうた（定ナシ）

　ゆく（ひく定）ふねのつなでのながき春の日をよそか（四十日五十日）しかまでわれはへにけ
　りきく人の思へるやうなぞたゞことなるとひそかにいふべしふな君（み爲）
のからくひねりいだして（してイ）（拈出）よしと（よしと挟頬定）思へる事を（わらはゝ爲）えしもこそ謂（した、決）（しひへ定）つ（諸本）とてさゝめ（きふへイ）
きてやみぬにはかに風なみたかければとゞまりぬ

ふな君は紀氏みづからをいふべし正月十四日の條にも見えたり
この月までとは去年十二月舟出して正月もすぎ今二月にもなりた
ればかくいへり、この月までなりぬる事とてしもあるるもじ今原本に
脱せり今は諸本によりて補ふ　人もいふ事とて云々こは歌はこと
人もよめば也　ゆくふねの云々この歌序歌なり、ながき春の日とい
はんとて舟にも縁あれば一二の句はしかいひつゞけし也よそかい
かは四十日五十日なり、季吟の説に四十五日也とあるは甚しき誤な
りいかは五日にあらず五十日なり古事記に五十日帶日子王また萬
葉に筏を五十日太とかきたるなとみな五十をいの假名、川ひとり
双子の生れて後をはかもゝかなどいへるも五十日百日ならされば
いかは五十日なる事論なしさてこゝの意は過し日かずをかぞへて

四十日にもあまりて五十日にもおよばんとするをいへりこは今の世にいふ四五十日などいはんがごとし實に十二月廿一日より二月朔日まで四十一日なれとおほよそに四五十日とはいへるなりさるを季吟のおしあてに四十五日也といはれつるは實の日かずにもたがひ語例にもはづれたり　なぞたゞことなる云々たゞことはことばをもかざらずありのまゝにいへるを云この歌をきく人のなどかこのやうにありのまゝなると思はんと也古今の序にたゞこと歌とあるも同じ　ひそかに云べしとあるを原本にひそかにいひしとあれどてにをはもとゝのはず誤なる事明らかなれば諸本によりてあらたむ　ひねりいたしては上文にになひいだすなどいへるがごとくやう〳〵としてよみいだせし心也こは詩に拈出などつかふがごとし誣へとてはしひへとてとよむべししひいへといふをはぶきたるにて強言也這人々(ひとり)はひりといふがごとし眞淵の説標注にあげたれどよしとも思はれず　さゝめきてやみぬ云々こはひそかにさゝやくをいへり萬葉に耳言をよめるがごとしさてこの文諸本つゝめきてやみぬとありてさゝめきてとあるはこの原本と岡背本見聞抄異本とのみなれとさゝやきてとあるかたやまさ・たらん

二日雨風やまず日ひと日終夜(ひとりよすがら錯)かみほとけをいのる

夜もすがら神佛をいのり一あかせしと也

伊勢物語云伊勢をはりのあはひの海づらをゆくに浪のいとしろくたつを見ていとゞしくすぎゆくかたのこひしきにうらやましくもかへる浪かな」

拾遺雜秋　　よみ人しらず

よをうみてわがかすいとはたなばたの涙の玉のをとやなるらん」

萬葉十六云乞匃カタヰ又作保什比止

伊勢物語云そこにありけるかたゐおきないたじきのしたにはひありきて云々

大和物語云あしになりたるをとこのかたゐのやうなるすがたなるこの車のまへよりいきけり云々

和名抄畜盜類云乞兒楊氏漢語抄云乞索兒保佐賀比止今按乞兒師乞也和名加多井

顯昭云かたゐはいせ物語にかたゐおきなといひ大和物語にかたゐのやうなると侍るはともに乞兒の事にて人をいひ下しおとろはのることば也」

萬葉十五

和我袖波多毛等保里豆奴禮奴等毛故非和須禮（ワガソデハタモトトホリテヌレヌトモコヒワスレ）

三日海のうへきのふのやうなればふねいださすかぜのふくことやま（傍ナシ）ねばきしの浪たちかへるこれにつけてよめるうた

緒をよりてかひなきものはおちつもるなみだの玉をぬかぬなりけ

りかくてけふはくれぬすゞろにのみ日をくらす（說傍附）

きしの浪たちかへるこれにつけてよめる云々業平朝臣のうらやましくもかへる浪かなといへるを心に思ひて浪のかへるを見てもわれも都へとくかへりたく思へども風波にさへられて日をおくれば涙のこぼるゝ也さてその涙を歌によめる也緒をよりて云々この歌意明らけし

四日かぢとりけふ風くものけしきはなはだあしといひて船いださず（けふの風のけしきくものさま傍附）なりぬしかれども終日に波風たゝずこのかぢとりは日もえはからぬかたゐなりけりこのとまりのはまにはくさぐさのうるはしき貝いしなとおほかりかゝればたゞむかしの人をのみこひつゝ船なる人のよめる

六帖三

よする波うちもよせなんわがこふる人わすれ貝おりてひろはんと

いへればある人のたへずして舟の心やりによめる

我比等夏受波田可自
六帖三
いせのうみにあまのとろてふわすれ貝わすれに
けらし君もきまさず」
萬葉五戀男子古歌　山上臣憶良
世人之貴慕七種之寶毛我波何為和我
中能産禮出有白玉之吾子古日者云々」

わすれ貝ひろひしもせじしら玉をこふるをだにもかた見とおもは
んとなんいへ（いへりけるイ）
終日に波風たゝずこのかぢとりは日もえはからぬかたゐなりけり
云々こはかぢとりといふものすべてよく天氣など見さだむる物な
るをかくよき天氣なるを風くものけしき甚あしといひてとゞめら
れたる事をはらたゝしく思ひてかぢとりをのゝしりてかたゐとは
いへりさてかたゐの事は標注を見てしるべし　このとまりにはく
さ〳〵のうるはしき貝石などおほかり云々この泊りの濱にはいろ
〳〵の貝石など多しと也すべて貝いしなどはわらはべのもてあそ
びとするものなればそれを見るに付ても土佐にてうせし子を思ひ
出してかなしむと也　よする波云々よする波うちよせなんとは波
の貝をうちよせよといへるなりさてわが戀ふる人をわすれんとい
ふを貝にいひよせたり　ある人のたへずして云々こはかなしみに
たへずして也これもみづからよめるなるべし　わすれ貝云々先の
歌に人わすれ貝おりてひろはんといひしかとそのわすれ貝をもひ
ろはじせめてこふる心をだにもむかしの人のなごり又はかたみと
も思はんと也子を愛するあまり玉にたとへていへる子を玉にたと
へし事標注にひける萬葉の歌にもみえたり
女兒のためには親をさなくなりぬべし玉ならずもありけんをと人い（ものなと為）

景樹云こは女兒のうせたるをなしむあまりにいきてありしうちのゝほさへよかりしやう　思ふ也下うつゝにあろうちはさゝ思はれとしうせにたれはそなたしむあまりにかほさへよかりしと思ふ心人情さもあるべし」
季吟云下句は相泉の國なれば夏の納涼に泉に手をひたしなどするによせてよめり下句は二伏のほどいづみなゝみなどしてくらすことを旅泊にそへてよめる也然れ共此泉は夏のやうに實にくむとはなしに目をふるをなげく心なり
景樹云このいづみは國の名のみなればくむとはなしにといふ也さむさはさいばらにみもひもさむしなどあるにおなじ」

はんやされど（イナシ）もしにし（しい・扶顕）こかほよかりきといふやうもあり猶おなじ所に目をふる事をなげきてある女のよめるうた（イナシ）

手をひてゝさむさもしらぬいづみにぞくむとは（も定）なしにひごろへにける

女兒のためにはおやをさなくなりぬべし云々こは親のならひとして子の爲には何ごともうちわすれてをさなきやうになると也こゝの文原本おやせさなくとあれど誤なる事明らかなれば諸本に寄て改む　玉ならずもありけんをと人いはんや云々親の心としては最負目にて玉にたとふる計おもへどもこと人のめには玉のやうにもあらずといはんと也されどもしにし子はいまいきてある子よりもなきもの故にあやにくにて顔よかりしやうに思ふと云りさてこゝの文を考ふるにこのこゝろのことわざにしにし子かほよか　きなどいひしことありしにやと思はるそはこゝの文をよく〳〵あぢはひてしるべしさて又こゝの文原本諸本ともにしゝかほよかりきとありて妙壽院本には死顔と文字にさへかきてそれに付　季吟の説も見えたれとしゝかほなと雅文にまじへん詞とも思はれねは爲家卿本附注本などによりて今にかくあらたむ　手をひてゝ云々こは國の名のいづみを泉にとりなしたりされどまことの泉ならねば手をひてゝさむさもしらぬいづみとはいへり

五日けふからくしていづみのなだより小津のとまりをおふ松原めもはる〳〵なりかれこれくるしければよめるうた
ゆけどなほゆきやられぬはいもがうむをつの浦なるきしの松原
かくいひつゝくるほどに舟とくこげ日のよきにともよほせばかぢとりふなこどもにいはくみふねよりおほせたぶなりあさぎたのいでこぬさきにつなではやひけといふこのことばの歌のやうなるはかぢとりのおのづからの詞なりかぢとりはうつたへにわれ歌のやうなる事いふとにもあらずきく人のあやしく歌めきてもいへるかなとてかきいだせればげに三十文字あまりなりけり

小津の泊は泉州志和泉郡太津村の條にこゝの小津の泊とある文をひけりしかば大津小津同所歟更級日記におほえとあるをも大津として同じ條にひけばこれも同所歟　めもはる〳〵なり云々　はる〳〵は古く書記萬葉などにみなはろ〳〵とみえたりろとるとかよひたるにてみな遙なる意なりされど今少しふるくよりはる〳〵ともいへり業平朝臣の歌にはる〳〵きぬる旅をしぞ思ふとあるなとを見てもしるべしこれらみな標注にあげたり　くるしければは歸京をいそぐゆゑに松原のはるかなるもくるしと也　ゆけどなほ云

書紀皇極紀云有謠歌三首其一曰
波魯波魯爾渠騰曾枳擧喩屢之麻能野父播羅
萬葉五
波漏波漏爾於忘方由流可母志良久毛能知弊仁邊多天留都久紫能君仁波
古今羇旅　在原業平朝臣
からころもきつゝなれにしつましあればはる〳〵きぬるたびをしぞ思ふ」
萬葉六長歌
續麻成長柄之宮爾眞木柱太高敷而云々
同十三長歌
處女等之麻笥垂有續麻成長門之浦丹云々」
萬葉十一
朝東風爾井提越浪之世蝶似裳不相鬼故瀧毛響動」
萬葉十四
神樹爾毛手者觸云乎打細丹人妻跡云者不觸物可聞
忠見集
はるさめはふりそめにしかうつたへに山をみどりになさんとや見し
濱松中納言物語云うつたへにかうておはすらんと思ひよらんやは云々
季吟云うつたへは八雲御抄云うちたへてなりひとへにといふ心なり又うちつけといふ心とおなじ梶とりは偏にわれ歌のやうにいはんとていふ

にもあらざりしかど閑人の歌に閑なして書出し
となり

々眞淵云妹がうむ麻といひかけたり萬葉にうみをなす長門の浦又
海をなすながらの宮などよめり冠辭いみ也云々さて　首の意はさ
きにもめもはる〳〵也といひて岸の松原のはるかなるに佗たるに
麻を紡をいひかけたり原本ゆゝやられねばとあれとねとぬとを誤
れる事明らかなれば諸本によりてあらたむ　ふなこどもにいはく
云々この文原本舟ごとにいはくとあれどもの字を脱せし事明らか
なれば今は諸本によりておぎなふ　みふねより云々このことばは
かぢとりのたゞの詞なれど歌のやうにきこゆと也あさぎたは朝の
北風也萬葉にあさごちとあるたぐひなり　うつたへに云々　淵云
うつたへはひとへにといふ詞なりされどもいまだ語釋つまびらか
ならず萬葉集さか木にも手はふるとふをうつたへに人づまといへ
ばふれぬものかは又うつたへにまがきの姿みまくほり又うつたへ
に鳥ははまねとなどありいづれもひとへにといふ詞なり　かきい
だせば云々こはそばにて聞ゐたる人のかぢとりの詞の歌めきたる
を書ていだせしなりかきていだせしを見ればまことに歌めきて三
十文字あまりなりとなり

けふなみなたちそと人々ひねもすに（ひれらすにみな人々いのる爲）いのるしるしありて風浪たゝず
いましかもめむれゐてあそぶ所あり京のちかづくよろこびのあまり
にあるわらは（めのわらは爲　定ナシ）のよめる歌

夫木十九　　よみ人しらず

よるべなみかざまをまちし舟よりもふそにこがれこわれぞかなしき」

和名抄羽族部云唐韻云鴎烏侯反和名加毛米水鳥也兼名苑云一名江鷗」

眞淵云あやなくは無文の意にてわかちのなき事なり

鎌倉右大臣集

ものいはぬよものけたものすらだにもあはれなるかなおやの子を思ふ」

和名抄國郡部云和泉國大鳥郡石津以之都　更級日記云くにの人々あつまりきてその夜このうらをいでさせたまひていしつにつかせたまへらましかばやがてこの御なごりなくなりなましなどいふこゝろほそうきこゆ

あるゝうみに風よりさきに舟でしていしつの波ときえなましかば」

古今雜上　　みふのたゞみね

すみよしとあまはつぐともながゐすな人わすれ草おふといふなり

同　　つらゆき

道しらばつみにもゆかんすみのえのきしに生ふてふこひわすれ草

和名抄草類云萱草兼名苑云萱草一名忘憂漢語抄云和須禮久佐云　毛詩云焉得諼草言樹之背　傳云萱草令人忘憂云々

文選嵆叔夜養生論云合歡蠲忿萱草忘憂愚智所共知也云々」

六帖三　貫之

いのりくるかざまと思ふ（もふを定）をあやなく（かもと六帖）にかもめ（も六帖定）さへだに浪と見ゆら（たゞ六帖）んといひてゆくあひだに石津といふ所の松原おもしろくてはまべにとほし（いと爲）又すみよしのわたりをこぎゆくある人のよめる

いま見てぞ身をばしり（も定）ぬる住の江の松よりさきにわれはへにけり

こゝにむかしつ人のはゝひと日かた時もわすれねばよめる

住の江に舟さし（爲ナシ）よせてわすれぐさ（よ爲）しるしありやとつみてゆくべく（かへらん爲）

となんうつたへにわすれなんとにはあらで戀しきこゝちをばしやすめて又（爲ナシ）もこふるちからにせん（も爲）となるべし

いまし云々この詞土文正月十一日の條にもありてくはしいましのしは助字なりかもめむれゐて云々この文原文かもめもむれゐてとあれどもの字衍文なる事明らかなれは諸本によりてはぶきつ　いのりくる云々この歌意明らけしかざまは風のたえ間なりかもめは白きものなれば浪のごと見ゆと也あやなくの事標注にあげたる眞淵の説見るべしさへだにといふ詞あるべしとも思はれず眞淵も誤字なるべしといはれぬこの歌六帖にもいでゝ六帖にはかもめさへただとあり六帖のかたまされりとは思へどこの日記には諸本ともにさへだにとせればたゞ諸本にしたがふのみ又鎌倉右大臣の集にすらだにといふ詞見えたればこゝもさへだにとしてもきこゆべき

にや　石津は和泉國大鳥郡なり　すみよしのわたりを云々眞淵云すみよしといふ事なし住吉とかきてすみのえとよめり故にこの歌にもしかよめり詞をも住吉とかきてすみのえとよみつらんを後に文字のまゝに假字に誤れるものなり日吉ももとはひえなるを後に誤りて日よしといへるなり云々この說さる事ながら紀氏のころはすでにすみよしともすみのえともいへりさる證は忠岑の歌にすみよしとあまはつぐともなどあるを見ても思ふべし　いま見てぞ云々季吟云紀氏ハ歌なるべし住吉の松はとしふる物とかねては思ひつるにいまみればわれはなほふりまさりければわがみのほどを思ひしりぬと也　むかしつ人の母云々こはさきにうせたる子の母也紀氏みつからをいふなるべしひと日かた時もうせにし子の事をわするゝ事なしと也むかしつとあるつもじは助字なり　すみの江に云々わすれ草は住の江におほくよめりされば住の江に舟をよせてわすれ草のしるしありて思ひをわするゝかとつみてゆかんと也わすれ草の事標注にあけたり　うつたへにわすれなんとにはあらで云々うつたへは上文にいへるがごとくひとへに也まへの歌にわすれんとはよめども偏にわすれはてんとにはあらすいたく戀ふればば心もくるしきゆゑにその戀しき心をしばしやすめてこひつかれたるに氣力をもつけてまたもこふるちからにせんと也

眞淵云ながめは長目と書て物思ひありてうちまもりぬる時の事なるゆゑにもの思ひある時ならではいはぬ詞也たゞ見る事とのみ思ふべからず源氏夕顔云いさよふ月にゆくりなくあくがれんことを女はおもひやすらひ云々

以呂波字類抄云卒爾ユクリナシ」

萬葉七

大舟乎荒海爾榜出八船多氣吾見之兒等之目見者知之母（オホブネヲアルミニコギダシヤフネタケワカミシコラノメミハシルシモ）

宣長云やふれたけはあやふき處にていろ〳〵とはたらきて舟をこぐをいひて色々と心をつくして女にあひたるをたとへたるなり

病床漫筆云萬葉七に八船多氣とあるは荒海の波をしのぎて舟をこぎ出すをいふ土佐日記にたげどもしりへしりへしぞきにしぞきてとあるも波をしのぎても〳〵舟の退くなり」

萬葉七

三幣帛取神之祝我鎭齋杉原燎木伐殆之國手斧所取奴（ミヌサトリカミノハフリガイハフスギハラタキヽコリホト〳〵シクニテヲノトラレヌ）

後撰雜三詞書云人のもとよりほと〳〵しくなんありつるといひ侍りければ云々

拾遺戀四　よみ人しらず

なげきこる人いる山のをのゝえのほと〳〵しくもなりにけるかな

季吟云ほと〳〵しくはこと〳〵しく也

眞淵云ほと〳〵しくはほと〳〵しくといふに同じ意也こゝは危殆の字の意にてほとんどといふも同じ萬葉又後にも殆をよみたるよくかなへり

かくいひてながめつゝ（つゝイ—爲）くるあひだにゆくりなく風ふきてたげども（いて爲こげども）〳〵（諸本）〳〵しりへしぞきにしぞきてほと〳〵しくうちはめつべしかぢとりのいはくこのすみよしの明神はれいの神ぞかしほしきものぞおはすらんとはいまめくものかさてぬさをたいまつりたまへといふ（いふ定）にしたがひてぬさたいまつるかくたいまつれども（定ナシ）もはらかぜやまでいやふきにいやたゞにかぜなみのあやふければかぢとりまたいはくぬさには御心のゆかねば（い定）御船もゆかぬなりなほうれしと思ひたまふべき（たぶべき定）もののたいまつりたまへ（たべ定）といふまたいふに（—爲ナシ—）したがひていかゞはせんとて（はかり爲）まなこもこそふたつあれたゞひとつあるかゞみをたいまつるとて海（おもての）にうちはめつればくちをしされば（？）うちつけにうみはかゞみのごとなりぬれば（やうに爲）ある人のよめるうた（爲ナシ）

（袖中抄）ちはやぶる神のこゝろ（の定）をあるゝうみにかゞみをいれてかつ見つるかないたく住の江の（定ナシ）わすれ草きしの姫松などいふ神にはあらずかしめもうつら〳〵かゞみに神の心をこそは見つれかぢとりのこゝろは（ことば、爲）神のみこゝろなりけり

晴は篦也足道
茂文云當笹也一
日本後紀巻廿四云弘仁五年九月戊子奉ニ常明神ニ
報ニ豊饒ニ也
續日本後紀巻十八云承和十五年春三月壬申勅
本充ニ山城國乙訓郡山崎明神御戸代田二町ニ
又云嘉祥元年冬十一月壬申隱岐國伊勢命神預
明神ニ、緣ニ屢有ニ靈驗ニ也
漢書巻二十五郊祀志云使ニ先聖之後能知ニ山川ニ
敬ニ於禮儀明神之事ニ者上以爲ニ祝
梅窓筆記云明神ト云ハ公式令ニ明神御宇日本天
皇詔旨ト有テ現在ノ天皇ヲサシテ申ス事ニテ神
ヲサスニハ名神ト云事ナリシガ名ト明ハ字音ノ
同シキ故ニ通シテ用ヒタリサレド差別ハ有ベシ
續日本後紀承和十年夏四月丁丑山崎神預之名神
トアル事同紀承和十五年春三月壬申勅レ本充ニ山
城國乙訓郡山崎明神御戸代田一町ニトアリ同神
ニテ名神ヲ明神トカケル證明ナ出スノミ仁和三
年三月十四日賀茂明神春日明神トアリ此外ニ又
古記久安三年二月廿二日要春日祭大名神四座ト
モアリ後世ニナリテハ大明神ナド稱授ル事モ
アリシ也
眞淵云明神はあきつ神あらみ神ともよみて顯神
と書になじ今世におはします天皇を申奉る也
神を明神といふ事延喜式のころまではなし貫之
の明神と書まじき事しるべし名神と有しを後に
明神と書誤りしならん又名を假字にめやうと書
しを明の字と思ひて書誤れるにもあるべし式に
名神と有は名ある神の事なり

ながめつゝくるあひだに云々ながめはもの思ふ事のあるをりにいへりこゝは先にうせにし子の事を思ひいだしてうちながめたる也ながめの事標注にあげたる眞淵の說を見てもしるべし　ゆくりなくは今俗に思ひがけなくなどいふにおなじ書紀に不意をよみ字鏡抄に卒爾をよめるみなこゝろおなじ　たげともく\は萬葉七に八船多氣とあるたげと同じくて意は標注にあげたる宣長の說のごとしこゝの文諸本こげどもく\とありてたげどもく\とあるは此原本と異本とのみ也今考ふるに諸本のごとくこげどもく\とあるかたやまさりたらん　しりへしぞきにしぞきて云々こは川をこげどもく\風波にさへられてあとへのみしりぞく也　ほとく\しくは語釋つまびらかならねどこゝはあやふき心なり諸說考證ともに標注にくはし　すみよしの明神は云々標注にあげたる眞淵の說に貫之のころ明神とは云べからず名神の誤ならんといはれしはいみじき誤也いとふるくより明神とも云りそは梅窓筆記の說の如く名神と明神とかよへりとおぼし眞淵は誤りて貫之の頃明神とはいふべからずといはれつれども魚彥は既に心づけりと見えて魚彥の書入には續日本後紀をひけり梅窓筆記にも續日本後紀を引たれど猶ふるく明神といふ文字は皇朝には日本後紀漢土には漢書に見えたりともに標注にあぐるがごとし又名神と書たるは國史にいと多てあぐるにいとまあらねばふるきをのみあげつ住吉明神の事も標注に

見えたり　れいの神ぞかし云々標注にあげたる縣居の說用ふべし季吟の說もあげたれどよしとも思はれずたゞ心みにあぐるのみ　いまめくものか云々眞淵云神もいまの世めきて物ほしみしたまふかと也云々この說のごとくにて物語ぶみなどにいまめくとあるとは心たがへるやうなれどもとは同語と見えたり　いふにしたがひて云々原本このてもじなけれど脫せる事明らかなれば諸本によりておぎなふ　いやふきにいやたちに云々いやは物をつよくいへるにて古事記に最をよみ續日本紀に彌をよめるがごとし　ぬさには御心のゆかねば云々こはぬさを奉れどもそれには御心のゆかずと見えて風波もやまざれば御舟もゆかねば神慮に猶うれしく足れりとおぼしたまふほどの物を奉りたまへとかぢとりの云也さて其云にしたがひてまなこさへふたつあるにたゞひとつだになき鏡を奉れりと也　まなこもこそふたつあれ云々類語はうつぼ物語に見えたり標注にあぐるが如し　うちつけにかゞみのごとなりぬれば云々季吟云うちつけにこゝはさしあたりにと云心也かゞみを海にいるればやがて海もかゞみのおもてのごとく風波なぎてたひらかに成たるとなり　ちはやぶる云々この歌意明らけしかつ見つるは鏡の縁語なり　いたくすみの江わすれ草岸の姫松などいふ神にはあらずかし云々風波しづまりていたく海の面すむといふをすみの江といひかけそのすみと姫松の姫とあらきにはにつかはしからずと

魚彥云明神といふ事嘉祥のころ既にありと見えて續日本後紀卷十八に山崎明神又伊勢命神預明神例などあれば明神とははやくよりいひける也

續日本紀卷十云天平二年冬十月庚戌遣使奉二渤海信物於諸國名神社一」

古事記云其底筒之男命中筒之男命上筒之男命二柱神者墨江之三前大神也」

季吟云れいの神とは靈と例と兩義ありいつもほしきものおはする時はかゝる波風をおこしたまふと也又靈の字の心は靈驗ある神なれば奉幣したまひてしかるべからんと也

眞淵云例の神ぞとはいつもほしきものおはすれば波風をおこしたまふとなり」

續日本紀卷九神龜元年二月甲午詔曰云々四方食國天下乃政乎彌高彌廣爾天日嗣止高御座爾坐而云々」

宇津保としかげ云ちゝはゝまなこだにふたりありと思ふほどに云々

同嵯峨院云かんのおとゞめもこそふたつあれたゞひとゝころをおやぎみとたのみ奉る云々」

大和物語

うちつけにまどふこゝろと聞からになぐさめやすくおもほゆるかな

源氏澪標

うちつけにわかれををしむかごとにておもはんかたにしたひやはせぬ」

萬葉廿

奈弖之故我波奈等里母知弖宇都良宇都良美麻久能富之伎吉美爾母安流加母（ナデシコガハナトリモチテウツラウツラミマクノホシキキミニモアルカモ）

袖中抄第廿云うつら／＼とはつら／＼と云ことば歟うはやすめことばにてそふるなり倩といふにはあらすこと心もなくものを見るをばつら／＼と見るといふ也又あたらあたらといふ歟あたらとはあらたにといふなりあとうとたとつと同音なり」

季吟云かやうにいたくおそれある神なれば和歌などにやさしきさまにてあだなる口すさひにいひあへるやうの神にはあらずとなり」

延喜式雜式云凡難波津頭海中立澪標若有舊標朽折者搜求拔去云々

袖中抄云みをつくしとは川口などに水のふかき所をばみなとゝいふそのみをのしるしにたつる木をいふ也世俗にはみをじるしといふをわかにはみをつくしとよむ也又水脈舟とかきてみをびきの舟とよめり又萬葉云水咫衝石こゝろつくして云々國史には難波津に始立澪標の由あり云々

年山紀聞云袖釋云々澪標とかけと名の意は水脈津蔵にてつは助語也」

拾遺別離書云帥伊周つくしへまかりけるに川尻はなれ侍りけるによみける云々

散木集連歌

川尻に舟のへごもの見ゆるかな　　俊頼

しほのぼるとぞさわぐなるらん　　俊重

なりきてわすれ草はこゝには不用なれど姫松にむかへて對をなせる也こゝの文よく／＼あぢはひ見ざれば文勢いたづらになるべし季吟說のみにてはことたらず　めもうつら／＼は今うつら／＼してねぬなどいふ俗語のうつら／＼に同じ眞淵の說標注にあぐるがごとし　かゞみに神の心をこそ見つれ云々かゞみを奉りて風波しづまりたればかゞみにて神の御心を見しよと也見るは鏡の緣語なればなり　かぢとりの心は神の御心なりけり云々かぢとりのいふにしたがひて鏡を奉りて風波しづまりたればかぢとりの心は神の御心と同じことぞと也

六日みをつくしのもと（ほど定）よりいでゝ難波の津（なにはづにつきてイ　定ナシ）をきて河尻にいるみな人々女（おんなおきな定　眸　定ナシ）をさなき（おきなおんな爲）ものひたひに手をあてゝよろこぶことふたつなしかの舟醉のあはぢの島の戸子（おほいこ　定ナシ）みやこちかくなりぬといふをよろこひてふなぞこよりかしらをもたげさせてかくぞいへる

いつしかといぶせかりつる難波がたあしこぎ（漕）そけ（避）てみふねきにけり

いと思ひのほかなる人のいへ（かくいへれば爲）れは人々あやしがるこれがなかにこゝちなやむ舟君いたくめでゝ（ぞ爲附うイ）舟醉したまひし（したうべりし定）みかほには似ずもあるか（あらずもあるかな）イなといひける

東鏡卷五云元暦二年十一月五日今日豫州至河尻之處攝津國源氏多田藏人大夫行綱豊島冠者等遮前途聊發矢石云々」
源氏玉かづら云ひたひに手をあてゝねんじをり云々」
和名抄病類云苦船辭色立成云苦船布奈夜毛非
西溪叢話云今人不善乘船話之苦船云々」
古事記云兄子者既成人是無悒云々
（アニナルコハステニヒトゝナリツレバコレイフセキコトナキヲ）
萬葉四
久堅之雨之落日乎直獨山邊爾居者鬱有來」
（ヒサカタノアメノフルヒヲタゞヒトリヤマベニヲレバイフセカリケリ）
萬葉十四
安可見夜麻久左禰可利曾氣安波須賀倍安良蘇布伊毛之安夜爾可奈之毛
（アカミヤマクサネカリソケアハスカヘアラソフイモシアヤニカナシモ）
同十六
枳棘原苅除曾氣倉將立屎遠麻禮櫛造刀自」
（カラタチノワハラウバラカリソケクラタテムクソトホクマレクシツクルトジ）
榮花初花云としごとにはよの中こゝちおこりて人もなくなりあはれなることどもおほかり云々」

みをつくしのもとよりいでゝ云々眞淵云みをつくしは萬葉又續日本紀にも出たり延喜式に見ゆるは尺寸をしるしたる木を立置て水の深淺をしる物なれば水脈津籤の意なるべし萬葉には遠津淡海引佐細江にもよみたれど難波津は太宰府かけて往來つねにしげゝればいづこにはあれどこゝに名高し　川尻は攝津國西成郡なり　ひたひに手をあてゝよろこぶ云々眞淵云ひたひに手をあつるはいたく物をよろこぶ時なすわざ也もろこしの書に額手するなどいふに同じ　舟醉は和名抄に苦船をふなやもひとよめると同じくて舟に醉たる也　あはぢの島の巨子云々季吟云あはぢの島の巨子は前にあはぢのたうめといひし人の名にや又たうめひとりこゝちあしみしてと前にありし故にかの舟醉とはかくなるべし云々巨子はおほい子と讀べしそは源巨城をもおほきとよめば也さて女の名の子の字のうへ何々い子といの字をつくる例あり古今に典侍あまねい子後撰に内侍たいらけい子典侍あきらけいこ命婦きよい子などあり巨子もこのたぐひの名なるべし　みやこちかくなりぬと云を云々原本なりぬるといふをとあれどるの字衍なる事明らかなれば定家卿本爲家卿本拾葉本類從本などによりてはぶきつ　いつしかと云々いぶせかりつるは心もとなかりしを云り古事記に悒をよみ萬葉に鬱をよめり共に心もとなき意なり猶くはしくは古事記の傳に見えたればひらき見てしるべしあしこぎそけてはあしこぎさけて也

萬葉十四に久左彌可利曾氣とあるもこゝのあしこぎそけと同じくてくさねかりさけ也さて一首の意は土佐國を舟出せしよりいつしか難波あたりにきたらんと心もとなかりしを今は難波江のあしねをもこぎさけて御舟のこゝまできたりしよ也　いと思ひの外なる人のいへれば人々あやしがる云々こは淡路の島の巨子の舟酔にてふしたるが思ひの外にかゝる歌をもよめば人々あやしがるよ也こゝちなやむ舟君云々こゝちは病也榮花によの中ごゝちおこりてなどあるにおなじ舟君は例の紀氏みづからをいふなるべし舟酔したまひし御かほには似ずもあるかなと云々こは今までは舟酔したりし人も川尻にいりたるうれしさにとみに心よくなりて思ひの外に歌をもよみ又かほつきなども舟酔したりしやうにはあらずと也

源氏朝がほ云こゑふつゝかにこちく\しくおぼえ給へるもさるかたなり云々
契沖云これは歌などよむ事しらぬをいへり
古事記云歌曰阿佐士怒波良許斯那豆牟蘇良波由賀受阿斯用由久那又入其海鹽而那豆美行時云々
書紀仁德紀云那珥波譬苔須儒赴泥苔羅齊許辭那豆瀰曾能赴泥苔羅齊於朋瀰赴泥苔禮
萬葉七
白栲爾丹保布信土之山川爾吾馬難家戀良下
同四
如此爲而哉猶八將退不近道之間乎煩參來而

七日けふは川尻（定ナシ）に舟いりたちてこぎのぼるに川の水ひてなやみわづらふ舟ののぼることいとかたしかゝるあひだに舟君の病者（ひと傍）もとよりこちく\しき人にてかうやうのことさらにしらざりけりかゝれども淡路のたうめ（定ナシ）の歌にめでゝみやこぼこりにもやあらんからくしておやしき歌ひねりいだせりそのうたは（は傍イ）

（よとにては傍）
きときては川のほり江（路イ）（地挟イ）の水をあさみ舟もわが身もなづむけふかなこ

れはやまひをすればよめるなるべしひとうたにことのあかねば今ひ

源氏若葉
いわけなきたづのひとこゑきゝしよりあしまになづむ舟ぞえならぬ
同ようこ箇云まことにこの君なづみてなきむづかりあかしたまひつ云々
蜻蛉日記云水まかせなどせさせしかといろづける葉のなづみてたてるを見ればいとかなしくて云々」
古今戀三　　よみ人しらす
よしの川水のこゝろはやくともたきのおとにはたてじとぞ思ふ」
本朝文粹第一菅贈大相國慰小男女詩云徒跣彈レ琴者聞巷稱二辨御一注云俗謂二貴女一爲レ御蓋取二貴人之女一御レ之義也云々」

とつ
とくと思ふ舟なやますはわがために水の心のあさきなりけり（なるべし定）このうたはみやこちかく（のイ）なりぬ（うイ）るよろこびにたへずしていへるなるべし淡路のごの歌におとれりねたき（くイ）いはざらましものをとくやしがるうちにいりてねにけり（よるになりてねにけり定爲）
川の水ひてなやみわづらふ云々こは川の水ひたれば舟のゆきなやみわづらふ也　舟君の病者は昨日の條にこゝちなやむ舟君ともありて紀氏みづからをいへるなるべし　こち〴〵しき人にて云々こち〴〵しは季吟の說のごとく骨々しき也無骨にて歌もよみえぬをいへりかうやうの事さらにしらざりけりとは昨日の條の淡路の巨子の歌をうけてさやうの事はふつにしらずといへり　みやこぼこりは季吟云みやこぼこりは京へちかづきしをよろこびほこる心也
きときては云々川のぼり江季吟は川の堀江と見正淵は川のぼる江と心得べしといはれぬ何れをかよしとせん心得難し拾葉本に川のぼり地と有は川のぼり路と音同じことなれば川のぼり路とあるやまさりたらんなづむは古事記に那豆美とかき萬葉に難义は煩をもよめりこゝは川の水ひて舟の滯り煩ふをいひわが身は病にてなづみわづらふを兩方かけて舟もわがみもなづむとはいへりさてつゞきの文にこれはやまひをすればよめるなるべしともいへり　と

くと思ふ云々いかでとく京へかへらんと思ふにその舟をかく滯り
なやますはわが爲に水の心の淺きぞと也　心の淺きを水の淺きに
かけたり　あはぢのごの云々すべて女を稱して御といへりそは大
和物語に伊勢のご若狹のごすけのご出羽のご五條のご伊豫のごひ
がきのごうつぼあて宮にゐ將のご續世繼にちくぜんのごなどあり
この外あげてかぞへがたしみな女の稱なり　あはぢのごの歌にお
とれりねたきいはざらましものをと云々この文おだやかならずも
し誤字脱文などある歟しひて考ふるにおとれるぞねたきとありし
を誤れる歟かく直せばこゝの文よくきこえたり異本におとれりね
たくいはざらましものをとあるにてもよしとは思はるれど猶いさ
ゝかおだやかならず

八日なほ川のほとり（のぼりにイ群）になづみてとりかひ（鳥養）の御牧といふほとりに（ところ定）とゞ（とまる）
イ
まるこよひ舟君れいのやまひおこりていたくなやむある人いさゝか（あざらかな）
るもの諸本
なるもゐてきたりよね（米）してかへりごとすをとこどもひそかにいふ
なりいひぼ（飯粒）してもてる（つろイ）とやかうやうのことところ（こイ）どころにありけふせ（せ）
ちみ（ちいみ爲）すれば魚もちひず（不用爲つゝる定爲）

とりかひの御牧は攝津國島下郡なりさるを八雲御抄に山城國との
たまひしは誤なり延喜式に攝津國島養牧とあるを見てもしるべし

延喜左馬寮式云凡諸國及行幸應レ用國飼御馬者
附諸須數一本闘乃下ニ官符一令ム唯牧牧飼馬者
寮移二當國一國即令二牧子牽送一但攝津國鳥養豐島牧不レ移二當國
寮ニ放繫
大和物語云亭子のみかど鳥かひの院におはしま
しにけり云々大江の玉ぶちむすめ
あさみどりかひある春にあひぬればかすみなら
ねどたちのぼりけり
狹衣一下云人眠ごのはいまとりかひといふ所わ
たりまでおはしましぬらん云々
古事記云當四月之上旬衛坐其河中之礎拔取（ウツキノヘシメノコロナリシカハツノカハナカノイツニテ）

御裳之糸以飯粒爲餌釣其河之年魚云々
書紀安閑紀云大伴大連金村從焉天皇使大伴大連問良田於縣主飯粒縣主飯粒慶悅無限云々
和名抄瘡類云肬目病源論云肬目今案即疣字也和名以比保又以比女手足浸忽生如豆或強於肉也云々
新撰字鏡云疣献默三形同有流反
世說德行篇云殷仲堪既爲荊州值水儉食常五盌盤外無餘肴飯粒脫落盤席間輙拾以噉之云々
季吟云飯ほしてもつゝるとは持つる也かのあざらかなるといふに破籠などもありしなるべしその返報に米をとりてかへるを口さがなき男どもはじめ持參せし飯を乾して米にして持つるとざれいひたるとにやとやのやはやすめ字なるべし
眞淵云飯穗して也米をもて魚をつると也いその代に米をやりたる故米にて魚をつりたるはとひそかにいふをきゝてたはふれにかけるなり
契沖云心もとなきにあけぬから舟を引つゝのぼれどもとよむべしまたあけぬよりにて夜をこめて舟をひきのぼるなり貫之集に藤の花咲ぬる

いさゝかなるものもて來りよねしてかへりごとす云々定家卿本爲家卿本拾葉本類從本などにあざらかなるものとあるをよしとすそは下文にけふせちみすれば魚もちひずともあれば也そのあざらかなるものゝかはりに米をやりたりと也　いひぼしてもてるとや云々異本にいひぼしてもつるとやとあるをよしとすいひぼしてを季吟は飯乾してと見られつれど誤なりいひほは飯粒にて今いふめしつぶ也さる證は古事記に飯粒をいひほとよみ書記安閑紀の人名に飯粒とあるをもいひぼとよめり播磨國の郡名に揖保とあるも飯粒の意なるべし腫物の肬目を和名抄新撰字鏡などにいひぼと訓せるも飯粒に似たる故の名なるべしさてこゝの意はあざらけき魚をもてこしに米をやりたれば飯粒して魚をつりたるやうなりとをとこどものひそかにたはふれいふ也かの神功皇后の飯粒して年魚をつりたまひし事などを思ひてかくはかけるなるべし　かうやうのことところ／＼にあり云々かうやうの事ところ／＼にあれど略してかゝずと也正月十四日の條にきのふつりたりし鯛に錢なければよねをとりかけておちられぬとあるを見ても思ふべし　けふせちみすれば魚もちひず云々正月十四日の條に見えたり精進なれば魚をくはずとなり

九日こゝろもとなさにあけぬから舟をひきつゝのぼれども（のぼろイ）（のぼるとすれど爲）川の水な

なを見てほとゝぎすまだなかぬからまたるべうなる

入江昌憙云から舟は虚舟也、人のらぬ事也と注せられしは誤なりこれまさしく貫之をはじめその外の人々ものれる舟也次の詞にかくてふねひきのぼるになぎさのゐんといふ所を見つゝゆくと有にて人有舟なる事しるべし是句讀の誤なりこゝろもとなさにあけぬから舟をひきつゝとよむべしあけぬからのぬはふのぬなり辨内侍日記云いまだよはあけぬものから云々このあけぬものからのものを略したる詞と心得べし」

萬葉六
濱清浦愛見神世自千船湊大和太乃濱（ハマキヨクウラナツカシミカミヨヽリチフネノトマルオホワダノハマ）

夫木廿五　　　左近中將具氏卿
おほわだのうらわにこよひふねとめてきよきはまべの月ないざ見ん

季吟云あかれの所とは道ゆく人のゆきわかるゝちまたなるべし一本灘の所とはあがれあがな假名の似たるを見まがひて文字をかけるにや米魚などあきなふ所といふにてきこゆ

眞淵云退散をまかであがるなどいへばゆきわかるゝ所なるべし

上田秋成云われ津國に生れたればこのあたりの地理大かたはあきらめたれどこの鳥養より東北のかたに今はさるべき所なしこゝに和田の泊とあれば海船の泊する所なるべしこの川筋いにしへのまゝならればあがれの所は別の所也」

河内志云交野郡渚院渚村」

ければゐざりにのみぞゐざるこのあひだに和田のとまりのあがれの（灘の所イ）ところ（為附ナシ）といふ所（妙ナシ「に為」）あり米魚などこへばおくりつ（おこなひつ定為）かくて舟ひきのぼるになきさの院といふ所を（「為附ナシ」）見つゝゆくその院むかしを（こ附）思ひやりて見ればおもしろかりけるところなりしり（けり為）へなる岡には松の木どもありなかの（まへ為）庭にはうめの花さけりこゝに人々のいはくこれむかし名たか（は為）くきこえたる所なり故惟高のみこの（為ナシ）御ともに故在原業平の（為ナシ）中將の

世の中にたえて櫻のさかざらば（なかりせば古今伊勢為）春の心はのどけからまし（古今春上　伊勢物語）

といふ歌よめる所なりけりいまきようある人所に似たる（心附）歌よめり

千世へたる松にはあれどいにしへのこゑ（かぜに為附）のさむさはかはらざりけり

りまたあるひとのよめる

きみこひて世をふるやどの梅の花むかしの香にぞなほにほひける（續後撰雜上　よみ人しらず）

といひつゝ（てイ）ぞみやこのちかづくをよろこびつゝ（てイ）のぼる

心もとなきにあけぬから舟をひきつゝのぼれども云々季吟の説にからふねは虚舟也人ものらぬふね也といはれしは甚しき誤りなりこは標注にあげたる契沖入江昌憙などの説のごとくあけぬから舟をひきつゝと句をきりてよみて心得べき也心もとなきによりて

古今集目錄云惟喬親王文德天皇第一皇子母從四位上紀靜子正四位下名虎女四位宮內卿天安二年正月廿三日任二太宰權帥一同十一月任レ帥貞觀十四年七月出家十五年二月廿日薨號二小野宮一云々大日本史云寛平九年二月薨時年五十四按二紹運錄及氏系圖一共曰貞觀十五年二月薨二十六歲然據二三代實錄一十六年奪レ封則二書誤今姑從二伊勢物語聞疑抄一云々」

古今春上なぎさの院にてさくらを見てよめる　在原業平朝臣

世の中に云々

伊勢物語云むかし惟高のみこと申みこおはしましけり山ざきのあなたにみなせといふ所に宮ありけりとしごとの櫻の花ざかりにはその宮になんおはしましけるその時右のうまのかみなりける人をつれにゐておはしましけり時世へて久しくなりにければその人の名わすれにけりかりはねんごろにもせでさけをのみのみつゝやまと歌にかゝれりいまかりするかたのゝなぎさの家そのゐんのさくらことにおもしろしその木のもとにおりゐて枝ををりてかざしにさしてかみなかしもみなよみけりうまのかみなりける人のよめる世の中に云々

となんよみたりける又人のうた

ちればこそいとゞさくらはめでたけれうきよになにかひさしかるべき

萬葉六

一松幾代可歷流吹風乃聲之清者年深香聞（ヒトツマツイクヨカヘヌルフクカゼノコヱノスメルハトシフカキカモ）

李白詩集卷廿二云岸映二松色一寒石分二浪花一碎」

まだ夜もあけぬより舟をひきてのぼると也　ゐざりにのみぞゐさる云々ゐざるといふ詞の事は正月十五日の條にいへり　和田の泊は攝津國西成郡なり今大和田といへりすでに萬葉にも大和太とよめり同所也又おなじ攝津國のうちにわだの海和田の入江わたの御崎わたの松原和田神祠和田三石和田笠松などあれどみな八部郡なるよしなれば和田の泊と同所にあらず　あがれのところといふ所にて云々この詞心得がたし聞書には村の名なりといへり季吟の説眞淵の説上田秋成の説など標注にあぐるがごとしあがれは眞淵の説のごとく退散する意なれば道ゆく人のゆきわかるゝ所なるべし今も旅路などの外の道にわかるゝ所を追分といへる所ところ〱にありこゝなるあがれの所も今いふ追分などの事なるべしこは心みにいへるのみすべて〱心得がたし　なぎさの院は河内國交野郡なり猶標注に見ゆるがごとし　惟高親王の事は標注にあげたり業平朝臣の事は正月八日の條に見えたればこゝにはのせず　世の中に云々この歌古今伊勢物語などに出たりさて一首の意はさかぬほどは咲をまちさくときはちるををしみさかりなるほども雨をいとひ風をおそれなど愛するあまりに心のいとまなきよりなべて世に櫻といふものゝたえてなくば春の心はなか〱のどかならんと也　いま興ある人所に似たる歌よめり云々興ある人とは舟中の人々の中にすぐれて興せる人をいへり例の紀氏みづからをいへるな

歐陽公集巻六云龍吟虎嘯松風寒」
續後撰雜上貫之土佐の任はてゝのぼりける道にてなぎさの院の梅花を見てよみ侍りける　よみ人しらず
君こひて云々」

古今羇旅　よみ人しらず
きたへゆくかりぞなくなるつれてこしかずはたらでぞかへるべらなる」
古今序云やまとうたは人の心をたねとしてよろづのことのはとぞなれりけるよのなかにある人ことわざしげきものなればこゝろに思ふ事を見るものきくものにつけていひいだせるなり云々
毛詩序云詩者志之所レ之在レ心爲レ志發レ言爲レ詩情動二於中一而形二於言一言レ之不レ足故嗟二嘆之一嗟嘆之不レ足故詠二歌之一云々」
太平記巻十七云眞木葛葉禁野片野宇殿（ウトノ）賀島神崎天王寺三日ノ原ノ者共馳集テ三千餘騎大渡ノ橋ヨリ西ニ陣ヲ取テ云々
攝津志云島上郡鵜殿云々
上田秋成云宇土野ハ川の西に一、攝津國也」

るべし　千世へたる云々この歌しりへなる岡には松の木どもあり
といへるその松をよめり千世はたゞおしあてにふりたる心也むか
しと今とは物ごとにかはりはてたれども松風のこゑのみかはらず
と也こゑのさむさとはさびしくすごき意にてふりにし所のさまを
いへり淸の院のあれはてたるさま思ひやるべし　きみこひて云々
この歌も中の庭には梅の花さけりとある梅をよめり君こひては惟
高のみこをさせり世をふるやどゝは淸の院をいへりさて淸の院も
あれはてたれど梅の花ばかりはむかしの香にかはらずなほにほへ
りと也

かくのぼる人々の中に京よりくだりし時にみな人子ども（爲ナシ）なかりきい
たれりし國にてぞ子（定ナシ）うめ（ま附イ）るものどもありあへるみな（ひとみな爲）人舟のとまる所
に子をいだきつゝおりのぼり（爲ナシ）すこれを見てむかしのこのはゝかなし
きにたへずして
なかりしもありつゝかへる人の子をありしもなくてくるがかなし
さといひてぞなきけるちゝもこれをきゝていかゞあら（ら爲）んかうやうの
ことうた（ことしうたも定）このむとてあるにしもあらざるべしもろこしもこゝもおも（とも歌も群）
ふことにたへぬ時のわざとかこよひ宇土野といふ所にとまる（とゞまれり爲附）
いたれりし國とは土佐國をいへり土佐國にくだりし時まではみな

人子などもなかりしをそれすら今は子どもなどもいできて舟のとまる所にては子をいだきて舟におりのりするを見てかの國にてうせにし子の事を思ひいだせし也　なかりしも云々みな人子のなかりしもかの國にていできなどしたるにわれはありし子もなくてかへるがかなしと也　かうやうのとうたこのむとてあるにしもあらざるべし云々眞淵云歌このむとてかやうによむにもあらず思ひに堪ぬ時のわざ也となり　もろこしもこゝもおもふことにたへぬときのわざとか云々和漢ともに詩歌なと詠ずるは思ふ事に堪ざる時のわざぞと也　宇土野は今鵜殿といへり攝津國島上郡也

十日さはることありてのぼらず

十一日雨いさゝか（すこし爲に定）ふりてやみぬかくてさしのぼるに東のかたに山のよこをれるを見て人にとへば八幡の宮といふこれをきゝてよろこび「て人々を（定ナシ）」がみ（拜）たてまつる山崎のはし（橋）見ゆうれしきことかぎりなしこゝに相應寺のほとりにしばし舟をとめて（とゞめて定）とかくさだむる事ありこの寺の岸のほとりに柳おほく（かり爲イ）ありある人（イナシ）この柳の川のそこ（かげの定）にうつれるを見てよめる歌（イナシ）

古今大歌所　かひうた
かひがねをさやにも見しかけゝれなくよこほりふせるさやのなか山

新拾遺羇旅　中納言家持
旅人のよこほりふせる山こえて月にもいくよわかれしつらん」

朝野群載巻十六石清水八幡宮略記云右行敎恒時欲レ奉レ拜二大菩薩一爰以去貞觀元年恭二拜豐前國宇佐宮一一夏九旬已畢欲レ歸二本都一之間以二七月十五日夜一行敎示仰宣吾深感應汝修善須二近都移坐鎭二護國家一（中略）同廿日上京八月廿三日到山崎離宮邊一同廿五日夜示宣可二移坐一之處石清水男山之峯也（中略）錄二上件由一參二上公家一令二奏聞一矣同九月十五日下二勅使一令實檢點定一次宣二下木工權允良基一令レ造二六字寶殿一已了貞觀五年正月十一日建立大安寺傳燈大法師位行

云々この外石清水八幡宮の事は三代實錄に事周
史萬件あまた見えたれどこゝに引かず
續日本紀卷三十八云延曆三年七月癸酉勅阿波
讃岐伊豫三國令造山崎橋料材
水鏡云聖武天皇御代天平三年行基菩薩山崎の橋をつ
くりてそのうへに法會をまうけて供養し給ひし
云々この事作者部類にも見えたり
三代實錄卷十三云貞觀八年十月廿日太政官符山城
國乙訓郡相應寺者元是道昌北屋之地也往年僧都傳
燈大法師位道昌大觀行橋頭遭天暑熱上岸休涼
有一老嫗云合歡之地宜建伽藍其中柳仆壞
法師之飯乎地中得一佛像因結相應寺道場願現太
政大臣藤原朝臣寄附建立道場即賞土夫匀備
篤道定寺名曰寫相應宜附四履永爲寺
堺東至楊道南至河岸西至作山北至大路
云々」
萬葉三
小浪磯越道有能登湍河音之清左多藝通瀬毎
同十七長歌
佐伎爾波阿之賀毛佐和伎佐射禮奈美多知底毛
爲底母云々
和名抄水部云淪唐韻云淪漪小水波也文選師說左左良奈三
後撰集上
水のおもにあやふきみだるはる風やいけのこほ　きのとものり
りをけふはとくらん
曾丹集
さゝら浪たちてさすつゝみのあやは更いては

さゞれなみよするあやをばあをやぎのかげのいとしておるかとぞ
見る
さしのぼるは舟に棹さしのぼる也　山のよこをれるを見て云々よ
こをれるは谷川士清の說に横折の義也といへるがごとく山のかた
ちのよこたはれるをいへるなるべしよこをりふせるさやの中山な
どあると同語なり　八幡の宮の事は標注にあぐるがごとし山城國
久世郡なり　山崎の橋の事も標注に見ゆるがごとし山城國乙訓郡
なり　相應寺の事も標注にあぐるがごとし同じく乙訓郡なり　と
かくさだむる事あり云々こは京にちかづくにつけて何やかやと京
にいらん用意などおきてさだむるをいへるなるべし　さゝれ波云
々萬葉に小浪をさゞれなみとよみ和名抄に淪漪をさゝらなみと訓
せり皆同じことにていさゝかなる波をいへりよするあやは波文を
あやに見なしていへりあやといふより險の糸しておるとはいへり
この歌の五の句原本にはおるかとぞ見ゆとあれどさてはてにをは
もとゝのはず誤なる事明らかなれば拾葉本類從本異本などにより
てあらたむ

十二日やまざきにとまれり　あり定

山崎も山城國乙訓郡なりいまだ船中なれば山崎の川にゐしなるべ
し

十三日なほ山崎に

なほ山崎にありといふを文字にふくめたる也

十四日雨ふるけふくるま（車）京へとりにやる

車を京へとりにやりたりと也こゝより車にて京へいらん料也

十五日けふ車ゐて（率）きたれり（扶ナシ）舟のむつかしさにふねより人の家にうつるこの人の家（将妙）よろこべるやうにてあるじ（饗）したりこのあるじ（主人）のまたあるじ（饗）のよきを見るにうたておもほゆいろ〳〵にかへりごとす家の人のいでいりにくげならずゐやゝかなり（うやゝけし爲　ゐやゝけゝなりイ）

きのふ京へとりにやりたる車をけふ率てきたれりと也　舟のむつかしさに云々むつかしはこゝにてはわづらはしき意なり標注にあげたる證など考へ合すべし六借とかけるはたゞ借字のみ也　あるじしたり云々あるしは饗應にて十二月廿六日の條に守の館にてあるじゝのゝしりてとあるに同じこのあるじのまたあるじのよきを見るに云々このあるじは家の主人をいふまたあるじのよきとは饗應のよきをいふ家のあるしの心もちひのよきうへにまた饗應さへよければうたて思ふと也　うたておもほゆ云々うたては標注にくはし意はあやしくよのつねならぬをいへるなるべし　家の人のい

らのすゞみころもぞ一

類聚國史卷卅二云弘仁四年二月己亥遊ニ獵于交野ニ以ニ山崎驛ニ爲ニ行宮ニ云々

同五年三月乙未遊ニ獵于交野ニ日暮御ニ山崎離宮ニ云々　帝王編年記卷五云仁德天皇十一年十月掘ニ難波江ニ築ニ茨田堤ニ今山崎河通レ海是堀江也云々

大和物語云さうぞくきよげにしむつかしき事などもなくて云々

宇津保藤原君云あやしくれいのむつかしきものつれに見せたまふ云々

源氏帚木云ちゝのとしおいものむつかしけにふとりすぎ云々

夫木八

くもはれぬさ月きぬらしたびごろもむつかしきまであまじめりして

古事記云侍ニ其大長谷王之御所ニ人等白宇多弖物云王子故應愼云々

萬葉十二

何時奈毛不戀有登者雖不有得田直比來戀之繁母（イツハナモコヒズアリトハアラネドモウタテコノコロコヒノシゲキモ）

古今春上

ちると見てあるべきものをうめのはなうたてにほひの袖にとまれる

貫之集云これはこゝにいますなる神のし給ふならんとしごろやしろもなくしるしも見えねどうたてある神也云々

眞淵云うたてはそかうへに物のかさなりたる樣の事にも思ふにたがひがちなる事をもいふこゝはあまりなるまでの意にてあるじのよきにその家の人などのよくものおこなふをかくまではい

かでかされ〴〵よしといふ也次に家の人のいでいりまでといふにてもしれ」
古事記云西方有熊曾建二人是不伏無禮人等云々
又云百官與殺往來之賊匪如王子之坐所云々
季吟云いや丶かとはうや〳〵しく禮義のたゞしきさまなるべし　梵燈院本には義の字なかけり
阿房宮賦に長直視也如何
谷川士清云ゐや丶か眞名伊勢物語にいと儼に實用と見えたりゐやは敬禮をいふやかは辭也實用は實目の誤りにやまめとよむべし又じちめともいへり
同書にいやめくといふは儼なる意なりといへり
從約古今注云肆所以陳貨鬻之物也店所以置貨鬻之物也肆陳也店置也
宇津保藤原君云むな車にいなしほつみてもてきたりあづかりどもよみとりてたなにするてうる云々
庭訓往來云市町通辻小路ニ令ㇾ構ㇾ見世棚ㇾ云々
下學集云見世棚
運歩色葉集卷四云見世棚
大安寺資財帳云合在檀小櫃壹合云々
和名抄云唐韻云櫃求位反字亦作鐀和名比豆俗有長櫃韓櫃小櫃等之名似ㇾ厨向ㇾ上開闔器也
安德天皇御五十日記云長絹六十匹納繪櫃二合但馬國献之云々
季吟云やまざきの小櫃のゑとは任國におもむきたまふ時見置たまへる物どもなるべしちひさきひつに繪をかきし在家の賣物のしるしなるべし

でいりにくげならずゐや丶かなり云々ゐや丶かは原本いや丶かとあれど中古のくせにて假名のたがひなる事明らかなれば爲家卿本拾葉本類從本などによりてあらたむさてゐや丶かのゐやは禮にてやかは下へつけたる詞にて物を形容したる語也花やかあてやかすみやかすぐやかおだやかこまやかゆるやかなどのたぐひのやか也かのあるじしたる家の男どものいでいりまで禮ありてうやまひあがむればにくげならずと也いや丶かとあるにつきて季吟の説もおれば標注にあぐ又わがとも長野美波留が新撰字鏡に森伊與々と加備とあをこ丶に引たれど別の事なれば引用るにおよばず

十六日けふの夕つかた(くれイ・ようさつかた定)京へのぼるついでに見れば山崎のたな丶る小櫃の繪もまがりのほらのかたもかはらざりけり(り定)うる人の心をぞしらぬとぞいふなるかくて京へゆくに嶋坂にて人あるじしたり(おほぢ定)かならずしもあるまじきわざなりたちてゆきし時よりはくる(かへる)時ぞ人はとかくありけるこれにもそれにもかへりごとす(定ナシ)

山崎のたな丶る云々原本たな丶るの四字なけれど脱文なる事明らかなれは爲家卿本附注本異本などによりておぎなふたなは崔豹古今注に店所以置ㇾ貨鬻之物也といひ宇津保物語にたなにするてうるといへるがごと物をうる所を云り今も田舍などにては物をうる

所をたなといへりこは古言の殘れるなるべしさて店は今いふ見世の事也中古見世ともいへり見世店の古圖はわがもたる鏡わりといふ蒔卷にみえたりこの圖はわが友岩瀬醒が骨董集に出たればひらき見てしるべし　小櫃の繪も云々眞淵の說にちひさき櫃に繪をかきて童のもてあそび物にうるにやといはれしがごとちひさき櫃に繪をかきしなるべし近頃までもみやこには小櫃に繪をかきしがありしとぞその圖は諸國奇遊談骨董集などに出せればひらき見てしるべし　まかりのほらのかたも云々まがりに二つあり一つは食物の名也一つは器物の名也こゝなるは食物のかたなるべしさてその糫餅（マカリ）を法螺貝のかたちにつくりたるをまがりのほらのかたとはいふなるべし此糫餅の圖は藤井貞幹が集古圖に種々の圖を出せるが中に法螺貝などの形に似たるもあればそれらをほらのかたとはいへるか又諸國奇遊談にも見えたれどこゝにはあげず猶まがりの事は標注にくはしくあげたり既に契沖もこゝなるまがりは食物のかたにしたがはれぬ今一つの器物のまがりは落久保物語禁祕御抄徒然草などに見えたりこれも標注にあげたり小櫃の繪もまがりのほらのかたもかはらざりけりうる人の心をぞしらぬ云々こは山崎の店にある小櫃の繪も糫餅（マカリ）の法螺貝のかたちも土佐の國にくだらざりし以前にかはらねどもそれをうる人の心はかはりたりやいかゞあらんしられずと也世の中の人の心つねなくかはりやすきものな

眞淵云小櫃の繪とはちひさき櫃に繪をかきたるを童の翫物に賣るにや

諸國奇遊談云今は繪櫃といひて洛北の村里にはまでは都にても用ひし故に二月の末には賣ある三月節句などにはかならず用ふ予がをさなき時きしことなるに今はたえて見あたらず」

和名抄飯餅類云糫餅文選云糫粔籹糫音還粔籹見下文

楊氏漢語抄云糫餅和名萬加利形如藤葛者也

拾遺物名まがり　　よみ人しらず

かすみわけいまかりかへるものならばあきくるまでにこひやわたらん

契沖云まがりは賀茂の神供に今もあり伊勢國などにて大縄餅といふ類也

附注云まがりは餅也關東に餅をまがりといふ山崎よりほら貝のなりなる餅をあぶらあげにして京都へいだす也東寺にて稻荷祭の時これを供す

庭訓に伏見曲煎餅云々

季吟云異本にほらのかたとは法螺にやいまもほら貝のなりせし餅ありそれをうる家のしるしなるべし又の義云まがりは曲の字也水飲器にて興福寺なとにもあるもの也ほらなどのやうに形をしたるをいふべしかやうのものをうる家のしるしなるべし

諸國奇遊談云八幡宮の北の總門のほとりにして神供をそなふその神供の御棚に糫餅をもりたりこの糫餅といふから菓子上賀茂下賀茂などの大社には今もそなふる定なれどもこのところにてはことにいにしへじのはれぬさるは土佐日記に

云々と見ゆむかしはこのところにて賣たることと見えたりさて今は猴餅法螺焼とて三品のかたちある也今の世のほらがひ餅きんとう餅といふ餅の名あるもふるきためしならすやこの御社にては猴餅をのみ奉ることなれどことのついでにかきつくることぞかし

禁秘抄毎日次第云女房[illegible]取二鍵指一[illegible]一御まがりまゐらせんといふ云々

落久保物語云御まがりしてたちはきにいときよげにてくはせたれば云々　参

徒然草云久我相國は殿上にて水をめしけるに主殿司土器をたてまつりければまがりをまゐらせよとてまがりしてぞめしける云々

徒然草野槌云貝ナスリテ作レル飲器ナマガリト云云々」

山城名勝志巻六云嶋坂土人云向明神南町端石塔寺南有二小坂一此所也

續日本紀巻三十八云延暦四年三月戊戌御二嶋院一宴二五位巳上一召二文人一令レ賦二曲水一賜レ祿有レ差」

山城名勝志巻十引二山城風土記一云月讀尊受二天照大神勅一降二于豐葦原中國一到二于保食神許一時有二一湯津桂樹一月讀尊乃倚二其樹一立之其樹所レ在今號二桂里一」

古今戀四

あすか川淵は瀬になる世なりとも思ひ初てん人はわすれじ　よみ人しらず

同雜下

世の中は何かつねなるあすか川きのふのふちぞけふはせになる」　よみ人しらず

ればことさらにかくはいはれしなるべし　嶋坂にて云々嶋坂は山城國乙訓郡なり續日本紀に嶋院とあるもこゝなるべし　人あるじしたりはいでむかひなどに來し人の饗應せしなるべし　かならずしもあるまじきわざ也云々こはあるじせし人の勞をいたはりてあるまじきわざ也とはいへる也眞淵の說に下のたちてゆきし時よりはくる時ぞ人はとかくありけるといふへつゞく詞と見られしはたがへりこゝの文勢さにあらず　たちてゆきし時よりはくる時ぞ人はとかくありける云々任國におもむく時は疎略なる人もありしかど今歸京のをりには追從にやむかへなどにくる人もおほしといへる也扨その迎に來たる人々にそれにもこれにも返報をなすと也

夜になして京(みやこ定)にはいらんと思へばいそぎしもせぬほどに月いでぬかつら川月の(の鴛)あかきにぞわたる人々のいはくこの川飛鳥川にもあらね(にこし鴛)ばふち瀬さらにかはらざりけりといひてある人のよめるうた(に定)

久かたの月におひたる桂川そこなるかげもかはらざりけりまたある人のいへる

あまぐものはるかなりつる桂川そでをひてゝもわたりぬるかなま(り定)たある人よめる

かつら川わが心にもかよはねどおなじふかさにながるべらなり(ながれけるかな鴛)

同雑下
久かたの中におひたる里なれば光をのみぞたのむべらなる　伊勢
新千載秋下　山階入道前左大臣
久かたの天てる月のかつら川秋のこよひの名にながれつゝ」

みやこ定
京のうれしきあまりに歌もあまりぞおほかる夜ふけて〔定ナシ くれば〕ところ〴〵も見えず京にいりたちてうれし
夜になして京にはいらんと思へば云々旅よそほひにて見ぐるしければ夜になして京にいらんと思ひていそぎもせざりしかばむかへの人々などのかへりごとや何やとひまとりしうちに春の日もくれて夜に成て月もいでぬと也　かつら川月のあかきにぞわたる云々桂川山城國葛野郡也飛鳥川にもあらねばふちせさらにかはらざりけり云々飛鳥川は大和國也飛鳥川ふち瀬かはれるよしふるく歌にもよめりされぱこの桂川は飛鳥川ならねばふち瀬さらにむかしにかはらずと也　久かたの云々かつら川といはんとて久かたの月におひたるとはいへりさて月といへばそこなるかげもとはいへる也月におひたるかつら川とは月中の桂の事也この事は正月十七日の條にいへりひらき見てしるべし　あまぐもの云々あまくもは天雲也はるかといはん枕詞のみさて一首の意は土佐國より舟出せしをりは天雲のごとくはるかに思ひしかつら川なれど今かく袖をひたすばかりにてわたるよと也京にちかづきしをよろこべる意もこもるべし眞淵云天雲とあるよりいひ下したればはるかなる月のかつらと名におへる川に袖をひたしてわたるよといへるなり　かつら川云々眞淵云ふかさとは京へかへりしよろこびのふかさ也わがよ

ろこびのふかければ川のながれもおなじふかさにながるとなるべし　京のうれしさに云々京へかへりしうれしさに歌もあまりなるまでおほしと也さて夜もふけたれば所々も見えずと也　京にいりたちてうれし云々かへすがへすよろこべるさまをかける也こゝらのとしをへて京にかへりたるなればうれしささもあるべし

家にいたりて門にいるに月あかければいとよくありさま見ゆきゝしよりもましていふかひなくぞこぼれやぶれたる家をあづけたりつる人の心もあれたるなりけりなか垣こそあれひとつ家のやうなればのぞみてあづかれる也さればたよりごとに物もたえずえさせたるこよひかゝる事とこわだかにものもいはせずいとはつらく見ゆれど心ざし○はせんとす扮池めいてくぼまり水づける所ありほとりに松もありき五年六年の内に千年やすぎにけんかた枝は○なくなりにけり今おひたるぞまじれるおほかたみなあれにたればあはれとぞ人々いふ思ひいでぬ事なく思ひ戀しきがうちにこの家にてうまれし女子のもろともにかへらねばいかゞはかなしき舟人もみな子いだきてのゝしるかゝるうちになほかなしみにたへずしてひそかに心しれる人と

長明無名抄云或人云貫之がとしごろすみける家のあとはかでの小路よりはきたとみの小路よりはひんがしのすみなり眞淵云受領にゆくにはみなゐてゆけばもとの家には一人もとゞめず隣のかたの人にあづけおきてゆくなどいともとそぎたる事なり受領のえものおほしといへどもさるほどのこともなきにや

竹取物語云かくや姫いはくこわだかになのたまひそやのうへにをる人とものきくにいとまさなし云々

宇津保藏開上云かゝるほどにとらの時ばかりにうまれたまひてこわだかになきたまふ云々
榮花つぼみ花云御ものがたりをこわだかにせさせたまひてうちゑみ〳〵せさせたまへば云々
眞淵云かくあれたる事などこわだかにいはせぬ也となりの人のきけば也つらく見ゆれどはとなりの家をあづかりし人の心つらく見ゆれどさすがに五六年も家をあつけたれば心ざしをばせんとなるべし

眞淵云舟人は舟にのりてきたりし人なるべし
上田秋成云舟人は舟にのりて來りし人なるべしと云注猶きこえがたしかく舟人といひては一わ

たり舟士等の事にきゝなさるれと舟よりのぼりこし人といふ義にやこの記の文勢あまりに言をはふきたるやうなるがところ／＼に多ければこゝもしかこゝろえてあらん歟

後撰雜二　もとよしのみこ
やればをしやられば人に見えぬべしなく／＼もなほかへすまされり

枕草子云人のやりすてたる文を見るにおなじつゞきあまた見つけたる云々

狹衣三上云からうじてやりほぐを見給ひて云々

いへりけるうた

うまれしもかへらぬものをわがやどに小松のあるを見るがかなしさとぞ〔扶ナシ〕いへるなほあかずやあらんまたなん

見し人を〔の定〕松のちとせにみましかばとほくかなしきわかれせましやわすれがたくゝちをしきことおほかれどえつくさずとまれかくまれとくや〔遺妙〕りてむ

家にいたりて云々紀氏の家の事は長明無名抄にいでたり標注にあぐるがごとし五年の任國のあひだに家もあれたるよし兼てきゝしかどきゝしよりもまさりてあれはてしと也いへをあづけたりつる人の心もあれたるなりけり云々前に家のあれたる事をいひてさてかくあれたるは家をあづけたりし人の心のあれはてゝ疎略なりし故ぞと也　なか垣こそあれひとつ家のやうなればのぞみてあづかれる也云々なか垣は中をへだてたる垣をいふこの家をあづけたりし人はとなりにて中垣はあれども一つ家のやうなればみづからわれあづからんとのぞみてあづかりしと也されば絶ずたよりあるごとに家を修復せん料もおくりたりしをかくあらしはてたる事よと也こよひかゝる事とこわだかに物もいはせず云々こわだかは聲高也さてこゝの意はかくの如く家をあづけたりし人の疎略なりし故に

かく家もあれはてたれば従者どもの口々にいへるをさすがにとしごろ家をあづけたりしものなればこよひはかゝる事と口々にいはせずと也　いとはつらく見ゆれど云々いとはのはもじ心得がたし衍字なるべし異本にはもじなきもあれど異本によりてけづりはぶかば人のうたがひあらん事を思ひてもとのまゝにておきつさてこゝの意はかく家をもあらしはてたればいとつらしとは思へどされどさすがに久しく家をあづけしものなれば其かへりごとをばせんと也　さて池めいてくぼまり水づける所ありほとりに松もありき云々むかしは池なりし所なれどあらしはてたればみくさおひなとしたるが池めいてくぼまり水づけるやうに見ゆと也こはあれはてしさまをつよくいはんとてかくはかける也　五年六年のうちに千年やすぎにけん云々延長八年土佐國にくだりていま承平五年なれば前後六年也されば五とせ六とせのうちといへり十二月廿一日の條に四とせ五とせはてゝとあるを見ても思ふべしさて池のほとりにありし松も五六年のあひだにかたえはかれなどして千とせもすぎしやうに思はると也　いまおひたるぞまじれる云々松の木にいまおひたる小松もまじれりと也こは下にうせにし子の事を云んとてまつこまつのあることを殊更にかくはかける也　思ひいでぬことなく思ひこひしきがうちに云々むかしのことゞも何ごとゝなく思ひいでゝ思ひ戀しきなかにもわけてこの家にてうまれし女子のもろと

もにかへらぬがかなしと也舟人もみな子いだきてのゝしる云々季吟云ふなびとゝは梶取にあらず船にのりてきたりし人なるべし云々こゝに上田秋成が說もあれば標注にしるす　うまれしも云々まへの詞にいまおひたるぞまじれるとあるをうけてさてこの家にてうまれし子もかへらぬものをむかしはなかりし小松もいまはおひたるなどを見るにつけてもむかしの子の事を思ひいでゝかなしと也　見し人を云々見し人はうせにし子をいへりさてその子の松の千年のごとくにながくあらんを見ましかばかくとほくかなしきわかれはすまじきをと也　わすれがたくくちをしきとおほかれどえつくさず云々なほむかしのことやうせにし子の事などわすれがたく戀しきことゞもおほけれどもさのみはとてえかきつくさずと也とまれかくまれとくやりてん云々とまれかくまれはともあれかくもあれ也やりてんはやぶりすてんと也すべて物を破るをやるといへり後撰にやればをしともいひ枕草子にやりすてたるとも又狹衣にやりほぐともあるやりは破り也さてこゝの意はかやうのいたづらなる事は外の人に見えんもわづらはしければとく破りすてんと也こは紀氏みづからを謙退していはれし詞なり

土佐日記考證下終

蜻蛉日記解環

全

かけろふの日記解環序

夫玉つしまのながれを汲ていとみやひたる伊勢小町はなほあがりにだる世なれは姑おきぬ其比より下つかたに至りて詞のうみの浦かへる和泉かなまめける妻に世繼をつゞりしふんての軸の赤染かまめなる心をかね少納言かそばだちかど／＼しきふしをもあさむきのとやかにして然もはなやぎたる紫のゆかりのさ衣のかさなれる口すさみをもうばへるに堪たるは唯此かけろふの君ならししかはあれと此文の世につたはれるもとほしくまれに殘れるだにいたくそこなはれてよみとくことのかたかんめれは玩ふ人もまれらなりけらし近き世に古きふみを讀とくことの妙なる難波のひじりかものせしといへる抄本を二三部見侍りしに其萬葉をはしめ歌集物語を釋せられしにはたかひてたとへはつひにあみたてつへきものゝより／＼おもひ出るまに／＼所々に爪じるしなせることくおぼろかにいとたと／＼しき物にそありける如此其門派の書のそはれるもまゝみゆやつかれもわかき時よりおろ／＼注しおける言のかのひじりの釋にあひぬるも有たがへるもありさてかの本文は水府の御本をうつしとれるさまなれは此上に善本もよにあるべうも思はれすなん茲にふるきを尋もて今あらたに梓して世に行はんといさめる心たけくまのまつにまたれしふた木の何かしの心をはからぬにはあらねと何くれと紛れてかくおそなはりぬかゝる名取川の水くきのなかれも絶々に世々の埋れ木顯はれん事いつの世をかは待へきと打なけかるゝあまりにおもへらくかう久しく謬そこなはれたる假字を碎きうちしてあらたにふるき詞の其の所々にことわりの叶へるをあなぐりものしてよみとかるゝやうになさんより外の術もなからんたとふるにかの戰國の君王后かとてもとかれぬ連環にとかくのおもひをも廻らさす槌もてとかれし心はえにひとし碎かねはとかれんやうなしいと正なきしわさなれとかくせし物の世にうせすしてちりほひもありなはのち／＼の世に此文をあつかはん君子のふとしも出來なはやつがれかひがわざをもたゞしてまたき文にも成なんをそらだのもし所にして姑くかけろふの日記解環と物するも名たゝる文にむかへてはをさなきものゝなき手を出しても

のするはおほけなしとやいはん又はかなき物の名に
おへる文をいつとなく老に老て已にやそちか上の秋
の露あるかなきかにしていとなめるは此文にはたふ
さはしともいはめ世にみん人の定めてよとなむあな
かしこ

あめあきらつひてふたつのさ月あやめふく日
くらけてふ名をおへるえせおきな
荻の軒はのほにてしるしぬ

かげろふの日記解環凡例之上

洛下　坂徵　仲文甫著

題號辨

今世流布の印本蜻蛉日記と題書せり蓋是源氏物語に
かげろふの卷ありて多くは蜻蛉とかけるにおのつか
ら習へるにやと思はゝ愚おもへらく此日記上卷の結
語に物はかなきを思へは有かなきかの心ちするかけ
ろふの日記と假名にてあり此日記を大鏡にいへるに
も同しく右のやうにかけりされば日記にいへる所の
かけろふは莊周かいはゆる野馬にして陽炎也詩にも
作れる所の遊絲に同し且此日記を八雲御抄學書篇の
私記に遊士の日記とあけたり士と絲の字とは和音の
となふる聲同しきによりて蓋印本にうつしあやまり
しとおもはれてこれ一の證據なり又萬葉集に玉蜻と
書る所もあれば虫をかけろふとよひ來れるも今にお
いてはふりにたることゝ見ゆされど蜻蛉は日本書紀
に神武帝の御代に出て古事記雄畧帝の卷に蜻蛉これ
を阿岐豆と訓すと安麻呂か自注にいへりこれ則蜻蛉
の本訓はあきつ也萬葉には石火のことをもかげろひ

又はかけろふともよみ來れり竊かに思惟するに天日も石火も共に陽物にして皆ひかりのあるゆゑにかげをいへり且つ野馬は陽炎春氣のあふるゝ物なればこれらのたくひを押並てかげろふとよひし也これかけろふの語の本づく所にして凡て物かげははかなきもの故に轉して小虫のことにも成たるならん萬葉の例文字をさま〴〵無レ極かきしものなれば玉蜻とありとて必ずしも虫のことならずその上に蜻蛉は世俗にいへるとんぼなれば至りてちひさきものにあらずあるかなきかといはんやうもなしされば源氏の抄物にも或は蜉蝣（ふゆう）或は蛾蝶等の虫をいひ出せるもありこれらはいとちひさき虫なればさもいひつべしあるかなきかにも叶ひもせんされどもかの虫らをかけろふとよひし證もみえねば又用がたし萬葉の歌の再新古今集にとり入られし春の部に今更に雪ふらめやもかげろふのもゆる春日となりにしものをなどよめる歌は分明に遊絲なり古今六帖にかげろふの歌を天象の部に稲妻の次に出し玉へるこれ陽炎はいなづまにたぐへるちらめくものなれば也若彼蜻蛉ならば何ぞ天象に入らるへきや是古賢哲の物をえらへるの正しき也

後世の類書には混合せし見ゆ宗牧かもしほ草には虫類に遊絲をのせりひがわざなるべし古へにかげろふといひいとゆふとよへる古今の詞のたがひて一物なり遊絲の題目はけだし六百番歌合の比よりあり初たるらん其いとゆふの訓義は大空にちりまがふことと白絲をむすぶに似たれば也源氏の比は游糸の題の世に出來ぬさきなればかげろふのみ詞にあらはれて卷の名にも成ぬ已に式部かむすめの大貳三位の比は後成卿の時めき玉ひし折にもやは及べければそのあみたる狹衣には大將いまだ中將におはせしころあまりなる泣笛の曲の妙を得玉へは天上に物の音のかよへるにやあめわかみこの天くだりていとゆふか何ぞとみゆるうす衣を大將の君に打かけて袖をひくなどゝ述たり朗詠集にえらはれし詩の語に天外の游絲或は有無これ訓釋をもまたずして此物語の題にひしと相協ぬる者乎

道綱卿は實に兼家公の次男たるべきの辨

愚按するに兼家公の息道隆道兼道長三人と與二東三條の女院一共に同腹也故に世に稱二之三道一而道綱は異母也系圖には兼家公之子四男あるのみ大鏡には右

四男の外又別腹の男あつて以上五男見ゆさて大鏡ばかりにのせたる別腹の男を除きては四男その四男の中兄弟の先後に異說區也先公定（キンサダ）の十四卷系圖には道綱卿を三男として道兼の下に次づ大系圖も又是に同し大鏡には道綱卿を次男とす又榮華物語には道綱を長男となせり今此日記をもて三道の各傳等を考合せ見るに天曆九年道綱の誕生より二年先天曆七年に道隆誕生なれば道綱は一男にあらざる事章々然として明らか也こゝに於て榮華の非なる說を破るべし道兼はその傳に誕生の年を記さずされとも其初任の年紀を校（カンガフルニ）兄道隆の初任の年に後れたる事凡八年ばかりも後なれば道兼は道綱の異腹の弟にして兄にはあらさること尤分明なりこゝにおいて系圖の道綱三男の說を破るに足れり又道長公は康和三年の誕生たること其傳に載すれば兄道兼の初任の年天延三年の比は道長纔に十歲ばかりなれば末子たること又猶明らか也且因曰大鏡と與二榮華一共世繼の稱あり今かの二書を併せてこれを審するに大鏡は後出書なれとも凡そ其記事實に近し愚按に盖爲業の朝臣かの榮華に虛失あることを深く嘆せられ釋し置れし所の古傳の實あるを世繼の翁といふものゝ言しと託して其隱れたる品々のことを顯はされし書とおしはかりぬ夫榮華の作者は時の關白家に昵近の侍女なれば御堂殿の爲に實事を蔽しと覺ゆ今その一二を擧けていはん花山法皇寳位を避（サケ）り俄かに出家し玉ひしことは其本を推さば是全く粟田殿の逆心よりしてそのこと成れるさま大鏡にはつぶさにしるせり榮華にはその事かくれたりさしも事物に聰明なる法皇ときこゆるにいかにこきでんのうせ玉ひし御歎の深かりともさばかりあわたゝしき御ふるまひありしはいかなることぞやと讀む人の必うたがひをのこすべきことになんかの作者の衛門は顯昭か色葉集に上東門院の女房或は鷹司殿の女房とあり盖さきに鷹司殿につかへて後上東門院に參られしにやいづれにしても御堂殿のことを宜めでたく書なしたる書也其同腹兄弟三道の中には粟田殿と中の關白殿とはなからひ甚あしくして御堂とあはたどのとは互に好みありきと見ゆ榮華を熟讀せば知るべしされば御堂をよくいはんとすれば粟田殿のあしきも自然につゝむべきは勢の然るべきことなりまた一事には三道たちの祖父九條師輔公の息女は村

上帝の女御にてやかて后に立玉ひし寵のあつきあまりに帝をつねにふすべさせ奉られ帝も得たへさせ玉はてつひに大にむつかりて其比の歴々一條殿堀川殿東三條殿等のいまだ殿上人の時にいたくかしこまりになりて朝を退かれしにおよべることなどを大鏡には具にのす此等の人臣の身として如此なれることは世の人のきゝ耳いとよろしからぬに渉れば其事榮華にははぶきて書もらせしさまにおもはるゝ也近き説に榮華は決して赤染にはあらずと云るありいかさまにも三四巻以下は他筆も交りしかと全くうたかひなきにしもあらねどまづ最初の月宴などの巻は赤染ならでは誰か及ぶべき宇多帝より書初たれども村上帝よりして其時事をつぶさに書しなり其比大臣月卿雲客おのかじゝさま／＼心ばえのたがひたる多く女御の中らひも曲々しくいとむつかしきことゝもをおだ／＼しくつぶ／＼とかきわけたる所榮華の稱すべきは此一巻にとゞまれる程におぼゆ勿論三十巻の後は後人の書つぎたるものされば大鏡の奥に世繼の名と標して鶴の林の巻までを載す此巻は御堂殿の薨葬を書して實に榮華のをはり也夫れ吾朝の國史は光孝帝までなるを衛門か女ずみにて書つぎにしと云説世人の耳の底にとゞまりおもへらく源氏等の作り物語とは大に殊なるものにすべてのする所實事とのみ心得て其文に齟齬あることをしらずひた信じに信ずるは陋也今兄弟の先後につきてかれこれ考へ合はするにいま此日記と大鏡とよく符合すれば尤かれを信ずるに足れり又かの別腹の一男たとへ愚痴ものにもせよ何にもせよ系圖には省へき道理は有るまじかた／＼もつて窃かに大鏡を正説に取て臆には道綱卿を次男と定めぬ流布の本の初に系圖歴官等をあげしには舛訛多ければ今はすべて取用ず此日記は道綱を主とすればわきてこれを分明にすること然り

藤原始祖 大織冠鎌足—淡海公 不比等—北家ノ祖 房前—眞楯—内麻呂—冬嗣—良房—基經—忠平—師輔—兼家 東三條 法興院

- 長男 道隆 中關白
- 二男 道綱 右大將 大納言
- 三男 道兼 粟田關白
- 四男 治部少輔君 此大鏡ニ獨所載
- 五男 道長 御堂關白

契冲師の此日記を甚好まれしさまはその著述のものに往々見和語のことにはやゝ疎かりぬべき靈異記さへにも釋文につきてにや粗書入られしものを世に契冲の抄物とて見ゆれば此日記におけるや必抄せらるへきとの了簡にて或は規としたる抄物そんじよそこにあるなども年來きゝつたへてゆかしく覺ゆされど其門人の述られし師の著述の目錄の中にも不見又水府の安藤氏の目錄せられしと互に異同はあれども此日記の書は不見大に損せしもいゆゑにとても全抄は成かたきとて全抄はつひに出來さりしと所詮これ無とおもひとりぬそれやまと詞に書つらねしものは源氏にしくものなきことは安藤氏の紫家七論のごとしかの物語に此日記のをもむきを取て明石の尼の夢をのべしを始め契冲のいひおかれしを思ひて見ればさもとおぼゆる所所々に見ゆそれ伊勢の御よりして後才女のあまたつどひし一條院の世迄かなふみにすぐれたりしはいととぼしくありぬしかるに清紫のたぐひよりも先輩にて人品といひ作者といひ此君の文藻をむなしくなして世にひろくも賞翫せざるは千古の恨にあらずやゆゑに身不才をも忘れて無手を出してとりなやめること自序にことわりしごとくなり

普通の原本上中下卷に又各卷の中上下或は上中下卷にわかちて全部八册あり余先年たま／＼見し寫本には卷數をあげず且つ八雲御抄學書篇の私記に此日記の名は出して卷數をあげすいぶかしく思て年經ぬ近比案するに上卷の終にかけろふと名付る旨を述べられたるを思へばその本は上中下三卷の卷物にてありしをとぢ本にせし時丁數かさなる故に今の如く八册にわかちしにや今此度は卷をたゞ上中下にわかちたること原のごとくして只各册數を一二三四とかぞへしるせり根源にかへす意のみ今の八册目の半ばより下は後人の添へたるなれば今此度附錄と題して別に一册となしぬ猶その册においてつぶさにしるす

余が所見の契冲本三本の内尾州より求めし本は谷川淡齋の本をうつせしなりそれも本は契冲より出て少異あるものにて他の契冲二本と互に得失見ゆ皆契冲家の直本に非は也今はかれこれの内理の宜やすらかなる說の方をとりて斟酌もて直しぬ猶各其本文の下においてことわれりいづれも契冲に屬せしなればすべて皆契冲本なり余釋中に或は契本と稱し或は冲本

と稱したゞ契沖の一字を略していふ異あるにあらず
その尾本と云ものも畢竟契沖本なれども間に淡齋の
手とおぼしく異なる意ありてとるべきものは尾本と
ことわれり
契沖諸本に直しの無所に及では止事を得ずして臆説
をもてあなぐり求めきその求むべき手よりは萬のか
なの轉訛せるよりおしはかりてやゝ本に復さんより
外に又術なきことと治定せるによりてなり
その轉の大例をいはゞ　ろう　らる　れれ等は互に
あやまりやすし或はにの偏旁を脱してことなり偏を
ににたがへにはひに轉しめは也に變し也がまた世に
化ぬかやうの類かぞふるにいとまなし甚しくしては
えの一字がらんの二字に別れりつの二字を乃の一字
に合せ或は常の字がゆふの二字にはなれ置く字かる
との二字に成又は罡をとの二字にも誤るこれらのるい
又すくなからずされどそれらは猶いまたし誤の字か
徒への二字のかなになり長櫃をかなにうつせるが又
轉してなりひ川にうつりながれ或は常の字げくるの
三字に轉せしこときも有かく大に轉ずとはいへとも
只一轉の誤はよく又思ひめぐらしてさかのぼりもと

むるに猶たよりなきにあらずもしくはこれらを又再
轉して凡假字には四十七字の外にもむかしよりかき
ならはせしかな文字のあまたあればそれらのかなに
又變じかはりて後は何を便にもとの字をさぐり出さ
んたとへば世にうつけたるしれものが高津鳥とやら
ん者にふといさなはれてしらぬ世界にさまよひ我ふ
る里はいつこのいつちならんと方角だにしらぬ狀に
成ぬべしちかくたとふるに此日記の上卷に兼家公の
長歌の中にとひくれことのありしかはと書る所あり
あまたたびかたふきておもひめぐらせばとひは問の
字をかなに書かへたるなり又其間の字はもと何の字
を訛りし物とおしはかり置てさて前後の文言を考合
てよめばなにくれことのありしかばの轉訛せること
疑なし即右の長歌の末にもいまはたえぬると云へる
を原本には何かたえぬるとあり是は又今か何に變し
たる也けり倘且つ現在分明に四たび轉せしよき證を
云ん今見に世に行はるゝ住吉物語の二本あるを取合
せてしりにき住吉物語に少將なる人の中納言の宮腹
姫君をひたすら戀こがれて中だちの侍從をもてせう
そこ度々に及べども反しのなきをうちなげかるゝ詞

に只なほ〳〵聞えさせよ此事のすべなくば世にある心地もせねばとあるを一本にすべのかなのすへをすゑなくはと書うつしてあり又一本を見るにその本にはすへなくをいまだなくはとかきうつせり此二本すゑいまだともにもじの轉して訛れる也本せんすべなきなとのすべの詞にて能きこえたるをすへのかなをかなつかひを心えねばすゑともよまるゝからして轉訛せる人のしわざにすゑと直しかける既に之れ一轉しぬさてそのあやまれるすゑを本末のすゑと定てすゑを末の字に作れり此二轉しぬさて又其の末の字の形(ナリ)か未の字に似たるからして未の字に轉しぬこれにて三轉しぬ其未か又かんなにいまだに轉して止ぬ此わけにて轉輾の義をさとすべし又すべて假字の後前入違たるもありこれは見易あやまる所的面に分明なれば直ちに直しぬ又同じ辭のかさなりて分明に衍ると見ゆる處は何の難なく省ぬこの上とにしてもかくしても得られぬ處は闕疑の訓にしたかへる而已猶此外にわきまふべきことは各本文の下に釋しぬ今こと〴〵くこゝにあぐるに暇あらす

原文とてもいとふるき寫本のまゝにして梓行せしと見えて文言の誤らさる所多くはふるき假名也けりふるきかんなといへるは　古事記　日本書紀　續日本紀以下の國史姓氏錄　延喜式　萬葉集　字鏡　和名鈔等のかななり萬葉集にまれ〳〵は少々たがひなきにしもあらねど大樣皆一樣のかなにて後世のごとく不レ定ことなく皆正しきなり大凡此の日記の比は定家卿かなづかひの沙汰し玉へる比よりは時代はるけく三代集にも入りし作者のわさなれば古きかなの多かるべきは勿論也三代集もとより平がな書の物なれば年月をへてひたと轉輾して書寫せしことの多きなれば今においては多は普通のかなになれり且此書の如きは源氏枕草子やうの世に行はるゝことひろきにわたらぬ書なればそのかなのもとの如くのこれるも其のいきおひの然る也されは今は其の多きかたのかなに便て相交れる後のかんなも古きかなにかたよりて直し侍りぬその大概は右にあぐる七書のかなに隨へともかれらの書にももれてなきかなあまたある故その外の古書にてたま〳〵見出せはしたがひぬれど未見出しえぬ日にはふるきかなの意をおろ〳〵おしはかりて今書る所もまゝありおほよそ古き假字に

て其義を推せはよし正には不レ中とも甚遠からざるやうに勞𢫤として覺ゆる事の有普通の假字にては其義をとらんに理において一向かなはざることまゝ見えけり其一事の明かなるをいはんに假令行方の詞は萬葉に多く方の字をへとよませたりゆくへは行方の義おのづから分明也後世のかなにては其釋する行末の中略の語としてゆくゑとかけりかくてはゆくへの詞の本意にたがへること甚しそれゆくへもしらず成にけりと俗にもよくいへるは其うせにし人東へ行しやらん西へやらんもしくは北さては南かと方角をしらねばたづねんやうもなくして茫然たりさるを行末の義にとらばすでにうせにし人の方角はしれとも遠くいづちまでゆきたりやとならば目あて心あてありて行方しらぬにあはせてはなけきのあさかるべしされば茫然としていへる詞にはかなはずなん若紫の巻に紫の上を父宮のわか方へむかへんとあるを源氏のきゝ玉ひて俄にぬすめるが如くしてともなひ歸玉ひし跡の事をいへるに行へもしらず少納言がゐてかくしたるとのみ宮へ聞えさするに宮もいふかひなくおはせると有これらにても知りわきまふべき事也もし

古書古詞の證とすべきをもとめ得さるときはいかにせんといはんにさるときはしばらく五十字文の三喉音のそれ〳〵の訓義に自然にわかるゝか如く萬葉より古今集の比に至りても　いゐ　をお　えゑのくさりの歌何なんとも正しくわかれたればそれらにたよりておほけなながら假字を定めて書しもあり及の假名などは普通には口のをを用來れは契沖の和字正濫に疑を殘されて曾をの部に入おかれしを愚は則男のおの假字に治定せりそのわけはひとの手足の指の古語はおよびと云こと和名抄に明らかなりその語からおせばすべて物に及かゝればそのいきほひ手の指まづ先だつ也靈異記の古本を見てふゝみさをのかなの正しきを得かつ其義を聊發明しぬ三は眞によくかよふさをは青也あをさと轉するはあめを村さめ春さめのさと同しこれ松のときはにて千歳の色を變せざるの義則松より出たる詞にて沖翁の解も非にしてかつ陋也それ契沖はかなものあつかひの上にては司命とも稱すべき先達なれど千慮一失はのがれがたし世人の口にある沙彌滿誓か世の中は何にたとへんの歌萬葉には朝開とよめるを拾遺集に朝ぼらけと直して入

れ玉ひしより朝ぼらけ朝びらき古今の詞にて心は同じと釋せられしを近世賀茂氏か說に右二の詞一樣にあらず朝開の詞は發船の詞也といへるを余いぶかり思ひて心みに萬葉一部を閱せしに朝開とよみし歌數首所々あり一首も船の字の無はなししかれは朝ぼらけとよむべき所を此詞を以代しそならは世の人の爲に笑はるゝことのがれずされば詞を用ゆること容易なるべからぬこと知られぬ又次第の訓を昔よりついでと書來りし故それを守りて多くは釋していときとは標通にして續ての義としぬ俗に云其ついてになんどのついではつぎてにあるべし次第次序のかなはつひで也と思はる此こと先代舊事大成經の內にて之れを得たり大樣かの書は美濃の潮音といへる禪僧の僞作のもの也然れとも所二引用一の上宮太子の言は實物と聞ゆかくの如くとりはからされば數限なき億萬の詞をひとつ〳〵古書古言の證を的面にとり得てものせんとせは千歲を經ともきはむべからずかくはいへれど又やむことを得さるのいとなみかくのこととし上直の直を中古以來とのゐとかき來れりされど殿に寝る義にてとのいとかける正しきよし賀茂氏か萬葉を

以質されしまことに然也殿に居るの義に非やがて此日記にも女君の養女を右馬の頭なる人がけさうしてはやくそひぶしを願はるゝ詞にとのい許を簾の端わたりゆるされ侍りなんやと書り是も分明にねふすことをいへり基の假字ももとゐと書來りし是又愚榮華物語にて得たり御堂の莊嚴をいひたつゐ處に水精のもといしの詞みえたれば基はもと石の下略也居の義にはあらざること明けし凡そいと書べきをゐに誤ること尤多し用のかなはもちい也續日本紀幷三代實錄宣命の詞に見ゆ世に多くもちゐとかき或はもちひとかくそれゆゑもちゆと書は誤るといへどかへつてもちゆは可也いは中の喉音能ゆにかよへれは也又正濫みさほと云かなを出してもし操行の竿の如くなほくしてたはまれぬたとひならばみさをと書べきといへり竿のかな後世はさほなれど古きかなのさをなるを以契沖のかくいはれしこれ彼師もをほの間治定せられさりき今近年日本靈異記の釋文を見てみさをのかなに治定しぬ且太子の論語の和訓は實物と見ゆ今入用の所のみを擧けていはんよむ音は呉音にて學而第一を我久爾多伊伊地其訓を摩那尾鐵四加茂丁途比頭

非登迩個阿多楷古曳と有索するにかの僧はかなあつかひはせぬ者ときこゆれば自私にかなの取さばきを致せぬ者のかく正しく書けるによつて彌史に此古語のかなを信用するに足れりゐひづつひでは死活の用捨はあれどそれは轉語にして同訓也かつ新井氏の東雅をいへる趣をもさし加へて案するに序は一旦の詞ならす次第する詞なれば一切物の轉語につかふひの假字なるべきと治定しぬ神道者流の釋についでのつはいくつのつにてつ出つるなんどの説をとりさばきするはかなづかひの悪道なり終にの訓も普通にはつゐにとかけど正しきはつひになりこれらもかよはせて思惟すべきこと也此日記原本にも。のかんなをんと書事しば／＼みゆ原本のみならす寫本にもかくのことなれば此時節の通用せしものならん愚少壯の時此書を讀て此のん。のかなにあふごとによみわづらひしこと限なかりきあまねくむ。にかよへるん。にてはなくして又中古つかひならはせし一つのかなにてありしにや其のむにかよへるん。の本字は无の字也と世に多く云り姑かれに習ひて今此も。にかよへるん。はもしくは本字毛にやとおもはるさるはその形をうかゞふにん。の形にみゆる多してむ。にかよへるはその形んなれば形についても少異あり故にそのん。よりてにかなの轉訛せしとみゆる所々もあり大やう似たるかなかきなればんん。ひとつに混合せし所も又あるべし此かなのこと麿光韵鏡を著されし文雄師が本寺の百萬遍にて勢觀聖人の[illegible]關の古珍書を得られし其の書の中に多くもにかよへるん。のかなあまたあり余もつてありてこれを見しそれよりも予ちかきは女君の兄長能が集を見しにも。とかくへき所んとかける所二所ありさればその比に人々も見知りてつかひならせし又一つのかななるべし或人云ん。はそのまゝむ。に用るん。にてもとむとは詞本よくかよへりといへどそれは宣命の詞或は祝詞につねには何なんとある所に何なもとあり又猿樂の謳にさん候と云はさもさふらふと云事也なんどいへるたぐひそれは詞のかよへるなれば書きたるまゝによんで通せるなり詞のかよへると云て。とん。とよんでおかるべきや歌の會席なとに及んで。と。んと直によみあげらるべしや必とぇと直してよまではかなふまじされば詞の通せるもとむとの義とは又一向別なることと也 淡齋も和訓栞に詞の かよふ

とかなのたがひあると一つに混せられしはすこぶる疎なり

諸本共に本行のかなのかたはらにイ本書あるは後勘の爲にそのまゝにしておくよかるべきわざなれど今愚老がしわざや凡そ文言のとりなやみ古今のかなのまじはりをわきまへなにくれのいとなみのしけゝればは或はイ本書の方よろしくきこゆる所は本行をすててイ本の方をつゞり用たる所もまゝ有之もとよめがたきに倦じたる書なればまぎるべきさまのことははぶくもあしかるまじいとわづらはしくなりてはかへりて本文の害にもなりもやせんと思ひて然せる也

和歌の下にもとはなけれど今悉く作者を付るは見易からんが爲なりよむ人もとよりありしと見誤ることなかれ兼家公を只公とのみしるせり女君と贈答多き故也道綱の母大鏡に女君ともいへれば今はそれにしたがふて付るなり

凡かな書のものには又平かなにて注釋しぬへく思へと今片かなもて釋するものは平かなの點畫はあやまりやすくかたかなは簡にして煩勞をはぶきかつはよみやすし狭衣にたゝん紙にかたかなして歌すらかけるためしもあればかな文を釋せんも何かはと愚意にまかせぬ此日記天暦八年に起り天延二年に竟れり大凡廿一年の間の日記也およそ日記と稱する書世に多し篁の日記は名のみ聞て何なる物をしらず貫之の土佐日記をはじめ家長が日記はかな文にして男の所作也女子の手に出る更科の日記よりいざよひの日記等に至るまで多くは道の記にして紀行の體也紫式部日記讃岐の介の日記中務内侍辨内侍日記等の如きは今此日記に對ては其のしるせる年月わづか也此日記ひとりいと久しき間にして其中に紀行とみつべきものあまたありその初瀬詣は二度あり石山まうであり唐崎のはらへあり皆目を刮て觀るべく握玩すべきに堪たるものなり

土佐日記なんどの如く最初より某の日〳〵と標せしにもあらねば眞の日記の體には背けるに似たれとも年月日を逐て書つゞけられしは實に日記にあらざるべきやその發端兼家公と幾ばくの贈答又の陸奥へ下られし後よみかはされし長歌のわたり迄は世にいはゆる和泉式部物語のあだめきたる此書のまめ〳〵しきは同年の談にはもとよりあらねども其書ざまはさ

も似たりすべて要し之にかな日記の雙紙とも云つべき者歟大凡かな書のものにとりては此日記の如き大文なるは名たかき草子物語の外にはいとまれなるべしされば和語をもてあそぶものゝ爲には至て手近かるべきものゝうつしあやまり多くして直にふみ以入かたく清女がいはゆるつゝら折なるものに成ぬかし

一　天德三年四年應和元年あはせて三年は全く日記の文闕たり原本に其年々をかたはらにしるせしも上卷の內すら或は記し或は記せずその記せし所四五所には過ず然して康和を康保にあやまり末に至ては一向年を記さず今改て年の改る所には何の幾年と標して高くかゝけ出して書せり末迄如此せり其年々實にあたれりや否はしらずされど粗考ふる所ありて然せり上卷に道綱の誕生をしるせり是を天曆九年と定系圖道綱傳には誕生の年は記せざれども此日記に分明也原本初卷序引をはりて書出せる所の日記の文の發端の傍に天曆八年と記せりこれ女君の自記せられし時からして自ら如此記しおかれしが今に殘りしにや又さなくとも此書をもてあつかへる人の据所ありて記しおきしにや其實は今しられざれどもこれを據にして此を最初と極めて次々の年を記せる而已

上卷の末に及んで道綱の成長のことを女君の述られたる詞にとをといひてひとつふたつの年あまりけると有又中卷の初に至りて內ののり弓のかけもの取てまかんでしとあり已に是わらは殿上せられし比也其卷の末に至て道綱をはじめて大夫とよべりこれより以前は只道綱ををさなき人とよばるすべて五位に叙爵して後大夫とその人を稱するなればなりさて下卷の半につかさめしに右馬の助に任せしことみゆ又上卷の末に村上帝の崩御冷泉帝の踐祚及花山帝の降誕中卷の初めに西宮高明公の左遷のこと又其卷の末に兼家公任右大將下卷の初に圓融帝の天皇元服且つ公の任大納言その卷の半に太政大臣伊尹公薨又同卷の末にもかざにて謙德公の息兩少將同日に死去右の事々此記にしるせる所の年月百練抄榮華物語大鏡等に考合するに多くは符合せりさて此日記の本文に直ちに年號を自らあげて記せられしは下卷の最初に天德三年と書せられしが原本の全部八冊の內唯是而已

女君を勅撰に右大將道綱母とし或は大納言道綱母或傳大納言道綱母或は春宮大夫道綱母或前の右大將道綱母とかくの如く一樣ならずいづれも子の道綱の顯官をあげて其母と稱す何も美稱也その傳大納言とは本官の大納言にて時の東宮の傳を兼たるも時の撰にて同しく美稱也

此日記中道綱卿任官右馬助迄に終る其以後は左少將藏人右中將中宮權の大夫權中納言右大將大納言春宮大夫按察使東宮の傳中宮大夫皇太后宮大夫等を歷官せられき

女君の咏歌の勅撰に入るは拾遺集か始にして其後勅撰にあまたみゆ其歌多くは此日記にみゆ撰集にのせ入たると少々異同もあり各文各歌の下においてしやくしぬ

此日記の外に女君の家集とてはきこえねば後々勅撰ある每には此日記より撰とられたるべきにや然るを此日記所載初卷の公と贈答の長歌中卷西宮殿の左遷を嘆息してよみ玉へる長歌等は殊にたくみにしてかつ優なるに勅撰あまたありし中にもれたるも疑らくははやくより文字多く損して取用らるゝに堪さりし故にもありなん是亦不遇の一端可レ惜可レ哀

野老か此日記を抄する主意は公に逢初られしより道綱卿の人となられし間の互に其中らひまじはりの時につけ折にあひ或はことよく或はふるされ何くれとよしあしにつけその曲折ありといへとも中絕にちかくても終には中絕ずして道綱を成長なさしめられし一通の心むけある品あるふし〴〵に及ばずながらあくまて心を盡して釋せり其のあまりの釋はとりわきて疎畧なることいと多かるべし僕もとより淺はかなる學問にしてかつ何かまどしき身にて校本をもとむるわざもかつ〴〵なればあやまりのすることかず〴〵あるべしされば自序に述るがごとく且つさきにもことわるごとく心にあきたりて後抄するにあらずかく名たゝる書のよめかぬるを何とぞ人々のたやすくよみときて世にも源氏枕ざうしなんどの如くひろく行はれかしとて先蒿矢を發して後の君子の能質されんことをこひねかふ而已

かけろふの日記解環凡例之下

洛下　坂徵　仲文甫著

料簡

兼家公の任官此日記終の比は右大將をかけし大納言にて道綱卿の後々の官職に同し扨其後兄の堀河の關白兼通公は極めて腹あしき人にておはしける殊更公とは御中大にあしく仇讎のごとくありしに俄に大納言の大將をも皆とりあげ心には遠流にも處せられたくおぼしけれとも不實を以て上へ讒奏せられしわけなれはさしてこれをと云たつへき罪なき故に治部卿に左遷せられ閉こもりおはせしがいく程なく堀河殿病死めされて又俄に右大臣にて攝政其後太政大臣にすゝまれ又關白にてつひに前途を極めたまへり按するに公の若き時おもひ人多くありしと見ゆさして好色に名たゝる人にあらねどその比は世に賢人右大臣と稱せられし後の小野の宮實資公だに色のかたには深かりしよしきこゆ蓋大むね其比の俗習にや村上の聖帝も色の方にはいと深くおはしけるよりして公卿の風儀もおのつからかくありしと覺ゆかの東三條院并三道たちを產れし仲正か女は最久しく公にそひ玉ひし女とみゆされはかげろふの女君も年比の人と肩して歌なとも折にふれよみかはされしこと此記にあらはるかの女の本性けはひありさま榮華大鏡にも見えすといへども物ねたみもなくしておいらかにおとなしかりし人と何となく推はかられぬされはおのづから身の幸福もありしにや中納言ためまさの女なとも思ひ人の中なるへし其こと附錄に見ゆかの町の小路の女は殊に賤しき女としらるされば女君のむねのあく隙もなかりし也町の女の外に懸想人も猶ありしなるへし中の卷に久しく公の女君のかたへかき絶られしころ女君の詞に心さへ知りたる人のうせ玉ひぬる小野宮のおとゞの御めしうどなりこれらを思ひかくらん近江はあやしう色めくなんめればとの玉へり其後近江がこと處々に見ゆきく所に十夜なんかよへるとちぐさに人はいふめるなんどゝ見えたりまだその外にも思ひ人のありけんもしるべからず

榮華物語花山の卷に云此殿はうへもおはしまさねは此女御殿の御方にさふらひつる大輔といふ人をつかひつけさせ玉ひていみじうおぼし時めかしつかはせ

られければ權の北方にてめでたしと云へりしかれば此時すでに彼年比の仲正の女も道綱の母の女君もはや世にいまさゞりけるとおし知らるゝに此日記既にをはりて後人の所爲に女君の歌の此記にもれぬるをすべあつめ載せし中に傅の殿のはじめて女の許(ガリ)やり玉ふに女君のかはりてよみ玉ひし歌數首をのす道綱の東宮の傅に補せられしは一條院寛弘四年なればその折道綱の年齢五十あまりなりしかれば女君の兼家公にあひそめられし年は規(キ)とはしれねども大よそ道綱にかはりて歌よみ玉へる時分はそのよはひ七十の前後なるべしこれによりて推はかるにかねて物思ひ多きに倦(ウン)じてもとよりの志の如く道綱卿をすでに公にまかせて其身は尼に成て退て天年を能をはられしと見ゆ其時分仲正の女の始終はいかゞなりけん今考ふるに所なし扨御堂道長公の時は土御門殿高松殿とて御臺所二室ありしかいづれも高貴の人のむすめなれば二人共に本臺也御堂殿の威勢おもひやるべし今此東三條殿には規としたる本臺ありしとも聞えずされど榮華に仲正か女をさして北の方とあれば正室に似たりもしはそれも又右にのべける大輔を權の北の方といはれしの類やらんも知がたし道綱の母君も顯昭か色葉集に東三條殿の室とあれは仲正か女と相共に二室ありしと云てもありぬべし御堂殿の二室の貴女にくらべては東三條殿の二室は其品おとりたれど又をんなめ召(メシ)うどの至て賤しきたぐひには又いと異なり姑あげて二室ありしとよばんも豈不可ならんや

水母野叟窃に難ずらくかの三道の君たちは各(オノ〳〵)次第に攝關の大職に至られしは東三條院の連枝たるにひかれて自然に威光ありたるからして如レ是道綱は同腹の兄弟もなく孤獨の身故に升進も甚おくれぬしかれば母子共に不幸不遇と云へし且又母公の著(アラハ)されし記文豈又清紫の二女におとらんやされと名のみ高くして世にひろくもてあそばざるこれ又千載の不遇不幸と云へし故に鄙文一篇を述ぶ韓文公の五原に倣ひて原遇と名つくること然なり

原遇

噫人不レ可レ無レ勢也藤原兼家蓄有二二室一其父也均是以二分憂任一稱豈其有二軒輊一而其所レ生子之選叙則大有二徑廷一何也得レ勢與レ不也夫東三條院者攝津守仲正

女所産乃爲圓融帝后而一條帝母后以故其同母兄弟三子少無遜譲競々乎升進之速或有未壯而冒台輔然後皆極攝關豈不得爲而爾耶獨道綱則不然同母外戚息而僅甫超四十而纔任納言大將而終斯已兼家之於朝典親戚望殊寄云爲有無不至之勢然而繼爲鍾愛而不能遂其私心以上下遷易百寮選叙者蓋提天職也公之賢雖未聞特以愛子故而必不至背天職矣是其有可遂私心之勢而不能強爲者亦自有不可爲之勢也況乎道綱之爲愛子亦無有聞焉則其升進遲滯者障於時勢也亦以明矣不特是焉於時文亦然清少納言之仕皇后也紫媛形媛之仕中宮也同時各得寵遇而皆亦有著書記所遇也斑々乎可觀也然而儀同之左遷于西海也皇后深憂苛以崩於是中宮之寵日以盛而清媛之奇鋒頓以折事中宮之二媛之文乃薰灼於坤位擅寵彌益大振其爲翩々源語遂延于千載且其寫注讒流世浴而夫清枕之行世雖稍讓紫源而其猶新儷鋒而能延于千載亦既維一時之際遇也形媛之蜻蛉詞固難遜清紫二媛其遭遇終身不衰且實錄之運也而今此道綱之母者自述己之不遇焉固非清紫形三媛各得其遇以著作之比此是背之所以傳世之希也夫是故凡士女之進退黜陟各在時勢之所由而其文之與廢亦以從焉可者道綱母世稱三國色之一風雅則時賞所推至于其書畫之傳蓋亦不凡詳覽其書可以類推其與藤公交會之際豐々婉々若訴若怨十數年間雖禅化串書其志氣則者貫魚然或時而契濶乃于墻于黄莫不斯須懷夫公焉翩々文辭年數年喜時屈時伸情意百端莫不盡皆爲道綱身上而發焉實賢婦人哉世好國風輩其精以舛訛難讀束高閣焉存執一二秀歌亦以與泉語作伍夫泉媛之浮艶較女君之婦德何啻天淵鳴乎寃哉余爲此故綴原遇一編以備論云爾

年立

今初學の見やすからん爲め源氏物語に年立あるに傚て始終のあらましをしるすのみ聞治定しがたき所々もまじれは源氏のやうにつぶさにはなしがたければなり今は光源氏の年齢をあぐるに准して道綱の成長は女君の主意のある處によりて道綱の年齢をあぐると云ふ

上卷

序引小序トイフカ如シ

村上天皇天暦八年道綱卿未生

兼家公通ひ初られしよりあまたゝび往來和歌之事

父倫寧陸奥の任におもむかれ親子別離のなげき并公へ歌を讀てのこしおかるゝこと　公の横川へ物せられ大雪の中音信あり其返事に歌をまゐらせらるゝ事

同九年道綱卿誕生

しばし物へまからんとて公へ歌を殘しおかるゝこと　道綱卿誕生之事　公の町の女へかよひ給へるをきゝ初らるゝ事　歎きつゝの秀歌の事

同十年道綱卿二歳

三月節供桃の花の事　年比の方へ往反の歌の事　公の夜がれをかこちてあしらひあしき事　小弓の矢を公より取におこし給へる事

同十一年道綱卿三歳

是即天德元年也

公より書籍を取におこさる事　町の女の子をうめる事　相撲(スマヒ)の節のはれ衣(キヌ)を調じにおこさるゝ事　野分の後の歌の事　しぐれにことよせて公のかへらるゝ時の歌の事

天德二年道綱卿四歳

町の女の子うみし後冷(スサ)まじく成し事

同三年四年應和元年以上三年闕

愚按に天德四年に兼家公の父九條師輔公逝去うたがふらくは九條殿は健ならぬ性質と見ゆそれ故病づきて出家し玉ふされは其煩ひ玉ふ前年へもかゝりぬべし又後年應和元年に至りてもいまだ喪を脱せられざればかれこれ此前後中三年は公のありきの暇もなかるべきなれば恐らくは本その文あつて亡失せるにはあらずして本より自然の闕なるへくやと推はからる

應和二年道綱卿八歳

公兵部大輔に任し給へる事　五月雨の比中宮と贈答歌の事　七月山寺へ上らるゝ事

同三年道綱卿九歳

道綱童(ワラハ)殿上の事　中宮の御方へ薄を乞はれし後長櫃へ入ておくり給へる事

康保元年道綱卿十歳

月夜の比公とかたらひて贈答歌の事　母君のわづらひてつひに失たまひ一族共に山寺にこもれる事

里に歸りて母の中陰を遂行はるゝ事　母の病中戒をうけられし時ひじりの袈裟を引かけられしを今見出して歌をよみ添てかへし送らるゝ事

同二年道綱卿十一歳

母の一周忌の法事をありし山寺にて行はるゝ事　琴をかきなしてをば君と互に歌よまるゝ事　たのもし人の遠方へ旅だつを惜まるゝ事　琴をひきてをば君と贈答の歌の事

同三年道綱卿十二歳

をば君の病につき齋せん爲山寺へ上らるゝ別の事

又山寺へ女君上りてをば君にあふて歸り給へる事

賀茂祭の日公とかたみに各物見に出て贈答歌の事　公のつかはれしゆするつきの水に塵ゐたるにつけてよめる歌の事　稻荷まうでの事賀茂まうでの事

同四年道綱卿十三歳

かりの子を重ねたるを一條の女御に參らせらるゝ事　天皇崩御に付女御と贈答歌の事　兵衛佐なる人山へ上り法師になり其妻も尼に成しを弔らへる事

冷泉天皇安和元年道綱卿十四歳

花山天皇降誕之事　手ずさみにかいぐりを樵の形にあみたてゝ歌をそへて女御の御方へ參らせて贈答の歌ある事　文を使人のもてたがへる事　女御の御方へ詣でゝ速にかへらるゝ事　七月月のあかき夜女御と贈答歌の事　初瀬詣の事是初度也　車を陸に立たる後又引返し宇治院へ詣づる事

中卷

同二年道綱卿十五歳

正月なれは世中の人の如くよごとしてたはふるゝ事　さびしとて公の方の人を招て弓射さする事

西宮殿左遷のなげきの事　帥殿の北の方の尼になれるをきゝてよめる長歌の事　公の御嶽詣に道綱供奉せらるゝ事　歌をつかひ人のもてたがへたる事　小一條殿五十の賀の歌の事

圓融天皇天祿元年道綱卿十六歳

安和三年三月改元

三月内裏ののり弓に道綱いまだ童形にて射且舞れ

て公悦給へる事　小野宮實賴公うせ給ふ事　幸崎へ祓に物し給へる事　貞觀殿の內侍のもとへ歌奉らる事　七月盆供の事　石山まうでの事　道綱卿元服の事

同二年道綱卿十七歳

朔日より長精進はしむる事　くれ竹を植させて歌よめる事　例の山寺へ上らんとする事　公の女君をしたひて山寺へ來りてむかし一所にのぼりし事などを語らるゝ事　道綱卿往反勞苦の事　これかれ山寺へ尋來れる事　女君止ことを得ず里へ歸らるゝ事　內侍のかみより御歌の事　二度初瀨まうでの事

下卷

同三年道綱卿十八歳

石山の法師の夢かたりの事　源宰相かねたゝのむすめのうまれし女ごをやしなはるゝ事　夜半許に火のさわきある事　加茂詣の事　八幡の祭物見の事　淸水へ詣る事其夜火のさわきの事　一條殿に途中にして逢奉る事　大和の女に贈答歌の事　菖蒲の歌の事　石山の法師御祈をなんすると云る反事の事　五月雨に郭公の歌の事　庭はくさか蟬の鳴をとかむる事　くつ〱ほうしの事　神無月例の物する寺へもみち見にまかれる事　一條殿うせ給へる事

同四年道綱卿十九歳

十二月改元天延

紅梅のいつよりもめてたきを道綱の折て公へ參らする事。やはたの祭物見に出る事父のことにつきて中川のわたりへうつる事

天延二年道綱卿廿歳

十五日儺火の事　加茂にまうづる事　道綱つかさ召に右馬助に任ずる事　夢中の歌の事　右馬頭かの養女を所望の事　右馬頭より養女へけさう文遣す事　藥玉の事　道綱卿もかさ煩ひ給へる事　一條殿の少將二人なから同日にもがさにて失たまへる事　道綱卿臨時の祭の舞人さゝるゝ事

補遺

洛下　坂徵　仲文甫著

上卷之二

なけきつゝの歌古今後撰に猶殘れる古歌今時の秀歌とを花山法皇の撰集たまへる上を又拔萃せられ

し公任の抄にも載たる歌也されは其意深重詞はきはめておたやかにわらはべの吟しても感すへき名歌也大鏡にも拾遺にも門を遅くあけれはと詞書ありあくるは門戸也歌のあくるは夜のあくる也これらいさゝかのふしだつことなくして天然の變化也奇々妙々と謂つべし

同三

町の小路の女の産る子や大鏡にのみいへるしれものなりやと本注に疑ひおきぬ後案におもへらく此時公のきんだち道隆道綱二人のみ其餘は未生已前也ことにかのしれものは四男とあれば其出生はるか後也しかれば今此にはいはれぬ也下巻に至て近江といへる賤女も子うめることとみゆこれなどをあつべき歟されど公の思ひ人多ければ所詮知られさることなるべし

同五

さいふ〳〵もと云より下は女君の母のわつらひに山寺にこもりてつひにうせ玉ひて中陰のことまてを述らる其山寺へうつられしことは影にして文なしすべてこの記かくの如き事まゝありこゝに准してしるべきなり

同八

上に候し兵衛佐のおやをもめをも捨て山に上りて法師になれることをいへるは榮華にも大鏡にものせし高光の少將のことなり此記に兵衛佐とあるはおほつかなし九條殿ははやくうせ玉ひしを親をも捨てとはあやまれり高光も兼家公の弟なれば也中巻に西宮おとゞの左遷の折女君の長歌よんでかの北方の尼になりしをとふらはるゝことあり其時に多武峯のことをいへるは今此の法師になり玉へる高光也その西宮殿の北方も又九條殿の女なればいつれも遁玉はぬ中らひなり世に多武峯少將と題せる一册ものゝ寫本ありて其の折のことを委く記せり

同九

女君初度の初瀬詣のかへるさの所に中に立る人とは兼家公のかれこれをいさなひて京より女君をむかへの爲出玉ひし也

中巻之四

辛崎の祓の段に云ひつじのをはりばかりに果たれ

ば又云山路にかゝりければさるのはてに成たり上にはてをいへるははらへの果也下のはては末の時のをはり也いさゝかのことなれども名人のかけるものには文章に變化ある故よみてもうまず自然にきゝよくよみやすし

同八九

すべてこゝのみならす此日記山寺とある多くは鳴瀧也すこぶる大寺ときこえて後々は廢せる寺なるべし鳴瀧の境地もひろければ今何處にあたりていかなる由の寺なりしにや雍州府志名勝名跡志輿地志のたぐひにて少の據も有やと搜せども求め得ずしらまほしきこと也猶博物を待のみ

同十二

此方ざまならでは方たがへなくやはこなたたがはゝかの近江の方ならずやと女君の物しく申さるゝなり

下卷之三

かの坂本の女約定まりて已に京へ出しを迎に道綱をはしめ人々をさしたてらるゝにかの女のことを公へはしばし知らさじとせらる折ふし公のきかれて見えて大夫はいつかたへまかりしやと尋られてやさしければかの女をよび出してあはせらるまだむかへられぬ先なれば女君の方にはをられねばさためて京へ出て居る所へ人をしてむかへとりてあはされたるべしさなければ文言たらはぬさまなり定めて略文とすべき而已

かけろふの日記解環上卷之一

洛下　坂徵　仲文甫著

かくありしとき過て世中にいとものはかなくとにもかくにもつかて世にふる人ありけりかたちとても人にもにす心だましひもあるにもあらてかうもの丶ようにもあらてあるもことわりとおもひつ丶た丶ふしおきあかしくらすま丶に世の中におほかるふる物がたりのはしなとをみれは世におほかるそらことたにありひとにもあらぬ身のうへまてうき日記してめつらしきさまにもありなんあめかしたの人の品たかきをんなとはんためしにもせよかしとおほゆるもすぎしとし月ころのこともおほつかなかりけれはさてもありぬへきことなんおほかりける

按するに是迄の文は日記一部の序引也發端にかくありし時すぎての一句にしかじかのこととの世間にありし時を過してと語ことを云出さんために大やうにせまらぬ書ざま先づ稱すべし次に物はかなくの一句に一部の名目を暗にふくめりとにもかくにもつかざるは汎彼栢舟在彼中河の意なりかたちとても云々はうつぼ物語に昔藤原の君ときこゆる一世の源氏おはしましけり童より名高くしてかほかたち心たましひ身の才すぐれ云々これを今は謝楽していへり心魂の心の字契沖本にはこと心と二やうに記して釋せりされども其一本のこたましひは其義小魂なるべしさる詞はきゝしらず分明にうつぼの語を用たれば疑なかるべし契沖もかのうつぼの語をたまたま見及ばざりしにやもし見られたらば必ひかれぬことはあるまじ小序の文にして一部へわたるべければ也さて此詞を容易に讀過れば謙退のやうなれどもかへつて此言は卑下ならずして實は女君の述懐也其のわけは顯昭の色葉集に本朝美人の其の一とみえ大鏡には歌の上手とあり且其志氣物にかゝまらず高上の女性なること自からはせる此記の中に往々見ゆさばかりの婦女の萬にふさはしからざりしを歎息せられしは宜なりけりかうはかくなりかくの如きと云が如しむだごとすら實に有が如く書なして世に行はるゝをまして身の上のまめごとを日記せんはねとも珍しげにさもありぬべき事とおもひ定めて筆を立そめられしな

りたましゐの古きかなはたましひ也ことはりの古きかなはことわりなり古きかなに改かくこと凡例につぶさにすかやうの類は此後こと／＼くにはことわらず事煩はしく釋する詞のとゞこほれば省けることと多かるべし扨うき日記のうきは憂の義なるべけれども上文に物はかなきといひとにもかくにもつかでといひ又あるにもあらでといへれば浮日記にてうかみたる意叶ふべしと治定せり源氏玉葛の巻に父おとゞのすぢさへ加はればにや品高くうつくしげ也とあり今は門地にかゝはらずたゞ心ばえの高きを云帚木の品定にて心うべしとはんためしにもせよかしとは中巻に住所の庭にくれ竹をうつし植らる時の詞にあはれに在し所とて見ん人も見よかしと思ふに泪こぼれて植さすとあると同じき口氣也品高き女を原本に也に作りし疑もなき誤故今すでに直し置しが契本とあへりさてもはさうじても也ありぬべきは日記しても可ならんの意おぼつかなかりければと云るも最初の物はかなきの詞に照して聞へしすべて此初段の文の始末題目せるかげろふの意をはなれず玩味すべきことになん

村上天皇　天暦八年

天暦八年は原本のまゝにして今上へさしあげ且上に二行四字加ふるは初學に便あらしめんが爲也此下皆これにならへと云

さてあはつけかりしすきごとゞものそれはそれとしてかしは木のこだかきわたりよりかくいはせんとおもふことありけり

あはつけかりしのあは。つ。を原本あ。の。に作れり契沖本には本のまゝに言を加へずあり愚按に恐らくははつの二字訛てのに變じたるものなり源氏をとめの巻に人のきゝ思ふ所もあはつけきやうになん又やどり木の巻にあはつけさともいひ帚木にあはつかにとある皆あは／＼しきの淡にして誠實なきの詞也つけは休のことばなり委くのばしていはゞあはつけくありしや今これらの證とすべき詞ありてこゝに能かなへるによりてかなを直せる也若紫の巻にすきものどもはかゝるありきをのみしてよくさるまじき人をも見つくるなりけりと源氏君の詞にありすきごとは即あは／＼しき好色事也和泉式部物語に云すきごとせし人々の文も不在とのみい

はせてさらに反事もせであるほどに云々それはそれとしてとは父倫寧の方より女君をいざなへることのあるを云出さんとてさきんじ云へる詞なり猶それそのことはまあさしおきてと云が如し兵衛の異名を柏木といふは奥義抄八雲御抄等に見ゆ系圖に女の父倫寧左兵衛佐とあり又兼家公の官此ごろは右兵衛佐にして頗紛はしされど高官にもあらざれば官職についてこだかきの詞はあるまじ父親をば子よりしていへば柏木の言にひかれて木高と云て協ふべしと父をさすに治定せり女をよばへる人は東三條兼家公也今は浅官なれどもつひに大臣にすゝんで執柄をせらるべきの下かたのしるければ公に配せんことをこひねがはれしなるべし此記の末の後附を併みれば此ころ實方の中將のいまだ少將なる時女君へいひよられしときこゆさしもの美人なれば懸想人も多かりしならん

れいの人はあないするたよりもしはなま女なンどしていはすることこそあれこれはをやとおぼしき人はたはぶれにもまめやかにもほのめかしうけひきごとしいひつぎをもしらずがほにうまにはひのりたる人してうちたゝかす

れいは例也例の人とは上にいへるあは〳〵しき人より也これはをやのをやは助辭也公の方よりまめなるの使人をいはんとて例のを云出してそれに對していひ出せる也あないは案内也例案内皆聲にて用上古は和語のみなるらめどもいつとなく聲にも唱へて音訓雜へ用ゆるは和文の變じゆくさまなり物語の祖といへる竹取にはやく例の詞見たよりは手よりの義にして便の字なりなまは生の字にて物を熟すの反辭也すべて物なれぬ事につかふなま〳〵の上達部なと源氏にいへり若紫にさる心ばえ見すれどさらにうけひかず須磨の巻にもうけひかざらんものゆゑゆきかゝりて空しく歸らんうしろでもをこなるべし皆うけひくの反也うけひくは承引也うまは馬なり後々はむまとかけども古くは皆うま也梅の訓も又同はひのりは這乘なり急ぎたる體にてもあるらん萬葉に赤駒にしづくら打おきばひのりて云々たゝかすはたゝく也かすの反はくなり必しも佗をしてたゝかさしむるならずたれなンどいはするにおぼつかなからずさわいだれ

ばもてわづらひとりいれてもてさわぐみれば紙なッども例のやうにもあらずいたらぬ所なしときゝふるしたる手もあらじとおほゆる迄あしければいとぞあやしきありけることは※

さ　公よりの使も女君の家人も互に和訓にして彼例のあはつけき人とは違ること知んぬべし彼此二のさわぐの詞味ふべしすべてもてわづらひの詞は不好語なるにかへつて今は好語也使人をもてなす意を含めり其詞煩多ならずして其さま締がける如しさて此文の公の自書や否をうたがひあやしむ公のいそがれて紙筆もとりあへずはしり書し玉へるさまにも思はるされどもありけることはといひ歌の後にとばかりぞあるの詞によれば文は代筆にて歌のみ自書にてやありけん

おとにのみきけばかひなしほとゝぎすことかたらはんとおもふこゝろあり　公

此歌風雅集戀の一に贈答共にのせ給ひて女につかはしける東三條入道攝政太政大臣とあり原本第二句かなしな第五句おもふこころに作今皆風雅の如く直せり

とばかりぞあるいかにかへりごとはすべきやあるなどさだむる程にかたいなかなる人ありてなほとかしこまりかゝすれば

さだむるとは人にも談合して是非を定むるの詞なり此日記に往々此詞見ゆ片田舍の人とは女君の父兄也今誰とさして定めがたし

かたらはん人なき里にほとゝぎすかひなかるべき聲なふるしそ　女君

風雅に右の公の歌の次に反し前右近大將道綱母とて載せ玉へり案ずるに此歌贈答の體を得るのみならず殊に工にしてしかも優なりかけうたの腰の五文字のみをそのまゝにおきてかたらはんの詞を上の句にすゝめかひなきの詞を下の句におほせりさばかりの歌の世々の撰にもれて風雅集に至て始て見るゝも不遇の一端といはまし又云贈答共に入玉ひしも女君の反しが却てむねとなりて公の歌はそれにひかれて入たるなら公の歌は此歌にむかへてはおとりてきこゆればなり

これをはじめにて又々おこすれどかへりごともせざりければまた

是れ公と贈答せる歌の始と也又おこすれどとは文なり
おぼつかな音なき瀧の水なれやゆくへもしらぬせをぞたつぬる　公
せは瀬にて逢せの意髣髴たり
これを今これよりといひたればしれたるやうなりや
今とは俗にやがてと云心間なきを云源氏にしれもの又しれ〴〵しきなどいへる諸抄に白痴の字をもて解せりおろかにして思慮の無ものを云ときこゆ
かくぞある
又立かへり文もやありし猶歌もてかくいへりしとなり
人しれずいまや〳〵とまつほどにかへりこぬこそわびしかりけれ　公
人しれずとは我のみ思ひて人にはしられざるの詞也案ずるに此歌の心は女のなひかんことをいつしかと待わぶるを人のものへ行てそのかへり来るをまつによそへたり後沖本を見るにかへりごとのなきを物へ行たる人を待にかへらぬほどの心をよそへたりと釋せり心は僕が先案とかはらねども僕が釋はくだ〴〵しく且切ならず彼釋は言すくなにしてしかも意思詳也此釋は下本ともすべしと沈感せり故に煩はしけれども彼師を慕へる人の爲にもやと且記せり
とありければ例の人かしこしをさ〳〵しきやうにきこえんこそよからめとてさるべき人してあるべきにかゝせてやりつ
例の人は父倫寧が兄長能が二人の中なるべしをさ〳〵しきは長の字にておとなしき心なりさるべきは然かるべき也下のあんべきも意同然るべき人して然るべき様にかゝせてやるなり
それをしもまめやかにうちよろこびてしげくかよはす
消息文の繁くかよへるなり
又そへたる文みれば
しげうかよへる文の中に又也そへたる文とは歌をよみそへたるふみ也
はまちどりあともなぎさにふみ見ぬはわれをこすなみうちやけづらん　公
古今集戀部五によみ人しらずわたつみのわが身こ

すなみ立かへりあまのすむてふうらみつるかな後撰集戀の二平貞文はまちどりたのむをしれとふみそむるあとうちけつなわれをこすなみ此後撰の歌は古今の歌を本歌にしてよめりその歌の心は君を我たのめる心をしれとて文をやりそむるの思ひを徒にけつなとなりけつはけす也五音横通なり扨今の公の歌は又後撰の歌を本歌にとりてよめる也なぎさは渚也あとなしとつゞけんためなりちどりのふむに文をそへたり心はあまたゝび文をやれども反しのなきはかほどまでの我おもひを打けしてとりあへぬはいかにと恨たる也

このたびも例のまめやかなるかへりごとする人あればまぎらはしつ

このたびは此書に往々こたみとかけるにしたがひいづこにてもこたみとよむべし今爰もさきの如くしかるべき人に可然かゝせてやりつればそれにてことを打紛はせしとなり

又もありまめやかなるやうにてあるもいと思ふやうなれどこのたびさへなくばいとつらうもあるべき哉などまめやか文のはしに書そへたり

いづれもとわかぬ心はそへたれどこたびはさきにみぬ人のがり　公

こたびはこたみと讀むべしこのたびと同おちくぼ物語にもこたみの詞あり此歌前詞を以てみれば其意髣髴きこゆされども詞のたらはぬさまなり契沖の釋もみえねばしひて姑く釋していへらく自書にもあれ代書にもあれ女のまめなる情は文の上にそはりたれどもと云べきをわかぬ心と云くされる乎がりは蓋しがありのつゞめ詞也せめて此たびだにまほしと云事をいひ殘せしてにをはなるべき歟凡これまでいまだ見ざる女の手自かける返事のあらかやうにいひ殘せるてには源氏等のかなものに往々見ゆ此日記にもまゝ見ゆ契沖本の中にがりを許の字として萬葉をひけるもあれど此歌においてはかなはねば其義取がたし

とあれどれいのまぎらはしつかゝればまめなることにて月日はくらしつ

秋つかたになりにけりそへたる文に心さかしらついたるやうに見えつるうさになんねんじつれどいかなるにかあらん

按するに源氏玉葛の卷の末きぬくばりの段に末摘花のことを云にかやうにわりなく古めかしうかたはらいたき所のつき玉へるぞさかしらにもてわづらひぬべくおぼす云々或抄にかしこだての心なりとねんじは念の字源氏に多あり蓋し念慮して物の忍びがたきをこらへる意に用又案ずるに女君の自書をひたすらまちにまてどもそのことのかなはぬはもしくはとやかく其のあひだにさしひきする者のありしならんとうたがへるさまなるべし

しかの音もきこえぬ里にすみながらあやしくあはぬめをもみるかな　公

案ずるに此歌上の詞の末のいかなるにかあらんへかけてきくべしあはぬめとばいねられぬと云心也いぬれば目あへる也古今に忠岑が山里は秋こそことにわびしけれ鹿のなくねにめをさましつゝ題林抄によな〳〵照射はすれども鹿は目をあはさずと云々今はそのともしの詞によせていへるのみ也又案に萬葉第十に鹿の歌あまたある中に山近くいへやすむべきさをしかのこゑをきゝつゝいねがてぬかも又山とほきみさとにしあればさをしかのつまよぶこゑ、ともしくもあるか蓋し今は此兩首をおもひて讀み玉ひしにやかつ萬葉の山遠の歌京の字を書てみやこともみさとともよめり今公の歌はみさとの訓を用ひられしとみゆ

とあるかへりごと

高砂のをのへわたりにすまふともしかさめぬべきとはきかぬを　女君

高砂は播磨に名所ありさならでも山の總名をもいへり古今集敏行朝臣秋萩の花咲にけり高砂の尾上の鹿も今やなくらんすまふともはすまひをするとも也此歌は又歌よりすぐにあやしのことやと下の詞へつゞけてきくべし

げにあやしのことやとばかりなん又程へてあふ坂の關や中々ちかけれどこえわびぬればなげきてぞふる　公

かへし

こえわぶるあふ坂よりも音にきくなこそをかたき關としらなむ　女君

かへしの歌は新千載集戀三に東三條入道消息して

侍ける返事に右近大將道綱母としていれり今此なこそを集にはなこそはとあり逢坂は近江奈古曾は陸奥の名所也逢坂はあひあふの義なこそは來ることなかれによせたり按ずるにあふ坂をこえわびぬると云るをうけて程の遠からぬにあひみぬは公の外にかよへる方ありてそれがためにせきとめらるゝならんとの心なり腰の五文字にてさきゝなさる

などいふまめぶみかよひ〳〵ていかなるあしたにかありけん

按ずるにあらはに詞の上にはみえねどもまめぶみかよひ〳〵ての詞の中を味ひみるにこのごろすでにあひそめられしこと髣髴としてしらる前後の歌をみあはせてかくの如く思ひよりぬ

ゆふくれのながれくるまをまつほどになみだおほゐの川とこそなれ　公

按ずるに後拾遺集雜歌二にこんといひてこざりける人のくれには必といひて侍けるかへし馬の内侍

まつほとのすぎのみゆけば大井川たのむくれもいかゞとぞおもふ右の歌は此日記より後の歌なれども暮を樽によせて大井川をよめる證にひける也大井は山城の名所樽は筏にせる材木なり

かへし

おもふことおほゐの川のゆふぐれはくるまもまたずながれこそすれ　女君

此歌の下句原本にころもにもあらずとあり尤心得がたし契本にはころもをこゝろになほせりされど意猶おだやかならず仍て例の假名の轉變を思ふにくはこに變じるはろに誤ゐがあに轉せしと心えおきさてかけ歌のくるまをまつの詞をまたずと打かへし且贈答歌の例大やうはかけ歌の上句を下の句に下の句を上へすゝむることの多きにとりて扱思ふこと多しとうけたり泣に流をそへたりかけうたの泪の多きをこなたは思が多とふりかへくれまつほどにとあるを此方はまつまたずたゞ夕暮ごとには打なかるゝと也またずの一句に公のとだえをいぶかる意見ゆらんかし

又三日ばかりのあしたに

しのゝめにおきける空はおもほえであやしく露ときえかへりつる　公

おもほえでは不覺也しのゝめは篠目也曉のまだほのぐらき也きえかへるは反覆にしてひたもの露のおきかへてやまぬを云疑起のおきと露おくとをかけていへり古のかなにてよくかよへればなり彼のかなにては不二兩通一なり

かへし

さだめなくきえかへりつる露よりもそらたのめなる君は何なり

果の何何なりけんと云詞を云のこせるてにはなり源氏若菜の卷下柏木右衛門の督の歌におきてゆく空もしられぬあけぐれにいづくの露のかゝる袖也これ今の歌のとめに同原本君はをわれはに作れるは大にあやまれり契本に君に更るに從ふ

かくてあるようありてしばしたびなる所にありき物してつとめてけふだにのどかにと思ひつるを何びッなげなりつればいかにと見には山がくれとのみなんとある返事に

按に女君その比所用ありて暫し外へうつりすまはれしときこゆ原本にはやうありてと書り或は何樣なんどゝつゞける詞はいかばかりもあるべけれども打出してやうありとはいかゞなればなんぞ所用ありたるにとりてようのかなになほせり又あるようありても語直なれば臆説にかくあると切て上の贈答の歌に看る詞とし 頭注云かくてあるやう有てには京本にてよしくてあるときりてよりとほたるひが也あるやうあては語のすれつにはすかにはかうやの體にれなし宣昭 さて所用ありてとよむべき歟はと遠からずとも我すまひをはなれ出てはいづこもおなじたびゐなるべし又案ずるにいまだ公のこゝろざしのしかとまめにしもみえずしてしげくせうそこのたえざるを少しはいとへる心ありしにやさればせめて今日だにのどやかにと思ひつるといへりつとめては早朝を云思ひつるを下に何をきるべしびは便なりびんなげとよむべし是よりは公の詞也定めて女君のつねのいへへ來られたれど女君の不在なれば便なかりつればと也こゝ 又何をきるべしさてそのよしをもしらされずして怱速 外へうつられしと云ことをおどろ〳〵しく山がくれとのみいひおこし玉へるなるべし今其返事におもほえぬの歌をよめるなり

おもほえぬかきほにをればなでしこの花にも露はたまらざりけり 女君

此歌は公よりの言にすがらずして只旅居のかりそめなるをよめる耳

なッどいふほどに九月に成ぬつごもりがたにえきりて二よばかり見えぬほど文はかりある

かへりごとに

きえかへりつゆもまだひぬ袖のうへにけさはしぐるゝ空もわりなし　女君

歌をそへずして文ばかりありし返事に此歌をそふるなりしきりては頻になり此歌後拾遺戀二に入道攝政九月ばかりのことにや夜かれして侍けるつとめて文おこせて侍しかへしにつかはしけると前書していれり按ずるにしきりて二夜ばかりみえぬとあれば此程はしげくかよはれたる事しらる九月になりぬの下に脱文ありたるにやされど水府の御本も亦かゝばかりなれば今はこの通りなりさてつごもりがたに二夜ばかりとあれば今朝は十月なるべし故にけさはしぐるゝとよめり後拾遺には泛然と九月ばかりとあれば秋の時雨もあれば必しも十月ならでもあ　ぬべ　されど日記にしるせしが實なるべければ必十月朔日によめるなるべし且かの撰者はすべて原文を改かふる性ある人のよし古書に散出せり

たちかへりかへりごと

たちかへりとは門をあらせぬ詞なり女君より公の文の反に歌をおくられし即時に反歌せるなり故にたちかへりと云

おもひやる心のそらになりぬればけさやしぐるとみゆるなるらん　公

凡おもひやると云詞にはすこしのわかちあり想像は緩詞也今の歌は端的也さればそなたを戀しいふる我泪が空よりかよへるをそなたには只よのつねのしぐれと詠めらるならんと也公の歌にしてはいと優にきこゆ

とてかへごとかきあへぬほどに見えたり

公よりかへしの歌をおこされしその又かへしをせんとしていまだ書もやらぬさきに公の來られし也

又ほどへてみえをこたる程雨なッどふりたるにくれにこんなッどやありけん

かしは木の森の下くさくれごとになほたのめとやもるをみる〳〵　女君

此歌後拾遺雜上に入道攝政夜がれがちになり侍る比くれになんと云おこせて侍ければ云遣しけると詞書していれり今此日記に程へて見えをこたるとかけるは集の前書の夜がれがちといへるに不同さきに云ごとく父の京官左兵衛佐なれば柏木といへり柏木には葉守の神のいますと云ればもるは本ト守るをいへど折ふし雨のふれば漏にそへたりさて集には暮になんと云おこせてと治定していへり此記にはくれに來んなとや有けんとよそのことのやうにほのめかしてかけるは伊勢の御がゆるやかなる筆法にならへるにてもありなん

かへりごとはみつからきてまぎらはしつ

公の日來をこたりを何くれと言よげに云紛らかせるならしさて按ずるに此わたり若誤て前後せるやの疑ありその故は上に九月に成ぬ晦日がたにしきりに二夜ばかりみえぬほどゝいひ已にして十月朔日によめるトおぼしき歌あり而又程へてみえをこたるト云て又此下にかくて十月になりぬとあればなり文の錯雜いづれの本にも皆如斯なれば姑く疑のまゝにさしおきぬ

かくて十月になりぬこゝに物いみなる程を心もとなげにいひつゝ

凡物忌とは何にてもあやしむことのあるとき不ニ宅出つゝしむことなり物忌はもと鬼王の名なるよし河海抄等に具に見

なげきつゝかへすころもの露けきにいとゞそらさへしぐれそふらむ　公

此歌新勅撰戀二にいれり古今集戀二に小町いとせめてこひしき時はうばたまのよるの衣をかへしてぞきる衣をかへしていぬればわが思ふ人を夢見るとむかしよりいひならはせしとなり

かへしいとふるめきたり

思ひあらばひなまし物をいかでかはかへすころものそれもぬるらん　女君

原本はそれもをたれもに作れり沖本はいづれもそれもに直せり今はそれに從へりおもひに火をそへたり言心はそなたがわれを思はん心のまことならばぬれし衣もかはくべきにさもなきゆゑといひけちたる也いとふるめきたりとは人々のはやく云ふるせしさまにてめづらしげもなしと思へるまゝに

いひ出せる詞耳
とあるほどにわがたのもしき人みちのくにへ出たち
ぬ
たのもしき人とは父親なりみちのくには陸奥也よむにはにを省きてみちのくとよむ習はしなり即守に成て任におもむく也
時はいとあはれなるほどなり
上段に十月に成ぬとあり下段にしはすになりぬとあり其中間なれば十月末霜月の初にもあるべし大かた秋色すさみ冬がれてあはれなる折節なり
人はまだ見なるといふべき程にもあらずみゆることはたゞさしぐめるのみあり
人は兼家公を云源氏若紫の巻に北山僧都の歌にさしぐみに袖ぬらしける山水にすめる心はさわぎやはする愚按に源氏のさしぐみはもとより山水によせたり此のさしぐみは上の詞に見馴といへる心なれとも水なるゝにも同じきゝみにかよへば詞のよせなきにもあらず但し此の心は只かりそめにさしあたるのみにて深からぬをいへるならん
いと心ぼそくかなしきこともの似ずみるひともいとあはれにわするまじきさまにのみかたらふめれど人の心はそれにしたがふべきかはと思へばたゞひとへにかなしう心ぼそきことをのみおもふ
見る人亦公也人の心はの人は凡の人を云て實に女君の心也それも又公をさす女に三從の道と云ことのあれとも今女君の心はあながちにそれにしたがふべきやとの意也頭注又云それも又公をさすと云けひかごとはそれは上にあはれわするまじき云々これあたりていへるにて意はしかたのもしげの玉ふめれどおよそ世間の人心はうつりやすうして始いへる言後々までしたがふものにはますと云る也人の心にうへは世間の人にて下には仏の心ないへりこ従ご讃いきむようの長物て実にこいになにすいみしきひかことも也略。按にそれのかな疑ふらくは本は夫の字にて有けるをそれともよむ字故にそれと轉せしにやと思ひもすれど再案を廻らせば原本のまゝにて可ならんもしをうとならば人の心といはずして女の心と夫の字に對していふべし且聘禮を行ふて規としたるわざにもあらざれば人の心と夫やうにいひし公をさしてそれと云んが宜しかるべし家に在ては父にしたがひ男しては夫にしたがふべき道なれとも公のいまだしかとまめなる心を見定めねばひたすらにしたがふべきやはと也かつ骨肉の親を思へるの厚情を知べきなり

今はとてみな出たつ日になりてゆく人もせきあへぬまでありとまる人はたまいていふかたなくかなしきに時たがひぬるといふまでも出やらずまたみなき硯にふみをおしまきてうちいれてまたはろ〳〵とうちなきていでぬ

既に發足の日にせまりぬ皆とは倫寧の従者(ズサ)をかけていふゆく人は父也とゞまる人は女也まいてはまして也ましてをもまいてとよむ源氏のよみくせなりせきあへぬは泪をせきかねて悲の切なるなり時刻おそなはらんと首途(カドデ)をせりたつる也原本みなきのきの字みなゞみなきの開分明ならず契本に見馴とありされどさにては又の字味なし故に不レ従みなきに定む（書入云こゝの説非也みなきは誤あるべし宣）言心は父子相見てなげく也上にせきあへぬあるに又也ほろ〳〵はなく聲也しきりに又の字を用玩味してきくべし

しばしは見ん心もなしみいではてぬるにためらひてよりてなにごとぞと見れば

原本こゝろの中のこを脱してころとす將(ワレ)は別のなげきに目もくれてかの硯にさしおきし文をも見る心もなかりしと也みいでは姿のかくるゝまでも目發する也（頭注書入云みいでせるかもとのまゝにては聞えず　みの下ならじか宣）さてしばし心をやすめて後にかの文をみるなりすべて此段親子の別離の切なる狀を千載の今眼前に見るが如く書なせる誠鬼神をも感ぜしむべし出の字見の字泣の字しば〳〵みえ意出て無感ありためらひは猶豫の字也

君をのみたのむたびなるこゝろにはゆくすゑとほくおもほゆるかな　父倫寧

後拾遺四部入道攝政かかく侍ける比大納言道綱の母にかよひ侍りけるにみちのくにへ罷下らんとてみよとおぼしくて女の硯に入て侍ける藤原倫寧朝臣君をのみ云々歌は此記に同旅に度をかねたり下の句は旅の道のはるけきによせて公と女とのなからひを頼むから且公の行末を祝せしなり（頭注書入云下の句の意公心いまださだまらさるやうなれとその心のつひにたのまるへくならん行末を思へはいと遠くおほゆると云意なるへし倫寧へ承吉によせたり宣）

とぞあるみるべき人みよとなゝめりとさへおもふにいみじうかなしくてありつるやうにおきてとばかりあるほどに物したり目も見あはせず思ひ入てあればなどかよのつねのごとにこそあれいとかうしもある

はわれをたのまぬなゞめりなッどあへしらひ硯なるふ
みをみつけてあはれといひてよとでの所に
見るべき人とは公をさせり女はさらなりありつる
やうにとは父のおきしまゝに也とばかりはもと時
ばかりの略語にてしばしの間を云物したりとは公
の來らるゝを云よとでとは夜戸出也　頭注再入云夜戸出の説誤ありや
宣　女君の許を出さまに戸口に此歌を書おけるな
り　かなしくの文字原本になけれども一本にあれば今補ひいるゝのみ。
われをのみたのむといへば行末のまつのちよをもき
てこそは見め　公
公の此歌も後拾遺に載たり歌は我をのみたのむと
いはゞと有異同考　爲に此記の原本の如く改ずし
て姑く存するのみ下の句も集には君こそはみめと
あり此記或は書寫の訛にやとも思へども來てこそ
はにても其義きこゆれば改ずし　兩存する已
となんかくて日のふるまゝに旅の空でおもひやるだ
にいとあはれなるに人の心もいとたのもしげには見
えずなんありける
しはすになりぬよかはにものすることありてのぼり
ぬ大雪にふりこめられていとゞ哀に戀しきことおほく
なんとあるにつけて
人は公を云横川に物するとは文の詞也横川は比叡
山三塔の其一也原本に大を人に訛分明なれば直し
き
こほるらんよかはの水にふる雪もわがごときえても
のはおもはじ　女君
氷るらんとは氷るべき也わがごとは我如也雪にふ
りこめられてこひしきとあるをうけてその戀しき
はいつはりならん我身何くれのかなしさ耐もきえ
はてんがごとき思にくらべては何ににもあらじと
云けちたる也
などいひてそのとしはかなく暮ぬ

かげろふの日記解環上卷之二

天暦八年 甲寅 誕生

[illegible]本此記發端に天暦八年とあげ此明年に又十年とあげたり然れは今此正月は右前後の間にはさまれたれは必九年と標しぬへきもの〻脱したる也すてに契沖本に補ひ與たり故に余今上へさしあけて初學者をして見安からしむること卷初にことわるか如し

正月ばかりに二三日みえぬほどにものへわたらんとて入こば。とらせよとて書おきたる

原本みねと有されど上下の文に準すれは必みえぬなるへし故に私に如レ之按に二三日公のみえさるといへは其餘はしげくかよはれたるなるへし我外へ出たるあとへもし公より使人來らば此歌を參らせよとなり

しられねば身をうくひすのふりいて〻なきてこそゆけ野にも山にも　女君

しられねはとは公の我を思心のあさきを云鶯は身の憂に云かけたり後撰春上によみ人しらす「梅の花ちるてふなへに春雨のふり出つ〻なく鶯の聲

かへりこと有

鶯のあだにいてゆかん山べにもなくこゑきかはたつぬ計そ　公

あだ　徒也歌意は明なり

な〻どいふうちよりなほもあらぬこと有て春なやみくらしつ

なほもあらぬのなほは直人な〻どのなほにてたゞといへる詞に意通して非常の事をいへり即今は懐妊の事を云

八月つごもりにとかうものしつ

道綱卿の誕日の事他書に見ず此日記にては分明なり

そのほどの心ばらしもねもごろなるやうになりけり

ねもごろはねんごろ也詞の上にかよへるもとんは則これら也ものかなにかへて用るんとはまた別の事也ようせずはまぎれやすし納凡例につまびらかに云りねもごろは慇懃の字也

さて九月ばかりになりて出にたる程に箱の有を手まさぐりにあけてみれば人のもとにやらんとしける文ありあさましさに見てげりとだにしられんとお

もひて書つく
出たるほどにとは公のこなたに宿して外へ又出られし間になり公の佗の女の許へあらたにかよへることを聞知たりとだにせめて思はせばやの心なり
うたがはしほかにわたせるふみみればこゝやとだえにならんとすらん　女君
此歌拾遺集雑の賀の部の下に入道攝政まかりかよ、ひけるとき女の許に遣しける文を見侍てと前書していれり上の句は今に同下の句われやとだえにとあり今此にはこゝやとあり亦可なるに似たり按に直さず又一本に初五もじわづらはしともあり共に橋をそへたりふみとも云とだえともいふ皆橋の縁語也文を蹈にそふ
なンどおもふ程に心もとなう十月つこもりかたに三よしきりてみえぬ時有つれなうてしはしこゝろみる（この間脱文あるへし注も非也宣）ほとに「なとけしきあり」（ふか宣）これより夕さりつかたう（楼裏を）ちのがるまじかりけりとていづたに人をしてたひつきてみれば町のこうぢなるそこ〳〵になんとまり給ひぬとてきたりされはよといみしう心うしと思へどもいはんやうもしらてあるほとに二三日はかり有てあかつきがたにかどをたゝくときありさなッめりと思ふにうくてあけさせねは例のいへとおほしき所にものしたりつとめてなほもあらじとおもひて
しきりての詞前に見ゆしきりに也しばし試むほどなんどよまるべきやうなれともこゝはさにはあらじ試むほどにと句を切てなどは何としてかと云心けしきありとは常にかはる氣色するなりこれよりとは女君の方より也夕さりつかたのつは休字也さりは去の字なれどかろくして只夕かた也こゝよりすぐにゆかでは叶はぬ所ありと云て公のこゝを出られしとの文義なるべし下も人をして公のとゞまられん所は何こと伺はしむる也まちのこうぢはちのかなりに形似よりたれは訛にて萬里をまりともよまれ且つまでのでをたちつてとにてまちといはんにてもあらん歟と思へども又此所を只こうぢとのみかける所もあり又末に至ては町の南ともあれば萬里の小路にてはあるべからずさらば此町に今の新町を云べし古は京城の内にたゞ町とのみいへるは今の新町也俗にとなふる出水通より北を町口といひ俗に云る椹木町より南を町尻とふるくは云

たるなりその町に小路の詞を添たれは町のあたりの小路にてせばきちまたを云にてあるらんさなめりとは門をたゝくは公の來られしなるへしと也例の家とは即上にいへる町の小路のかよひ所なるへしつとめてはそのあくる早朝を云也なほもあらはたゝもをられざればと俗言の心なり

なげきつゝひとりぬるよのあくるまはいかに久しきものとかはしる　女君〻〻

按に拾遺集戀四に入道攝政まかりたるに門をおそく明けれは立わづらひぬと云入て侍ければと前書して入たり公任の抄にも集の如し又大鏡には殿のおはしましたりけるに門をおそくあけゝればたびたび御せうそこ入させ玉ふにとあり大鏡の詞はゆるく拾遺の詞はせまれり此拾遺の詞によりて百人一首の抄にかの小式部かまだふみもみす周防の内侍かかひなくたゝん伊勢大輔かけふ九重に匂ひぬる哉等とひとしく當意即妙の類にせるは此日記の本實を外にせるの誤也夫大鏡は實に近し拾遺は撰集なれば潤色せるにてきもあるへし百人一首に釋せるはひがこと也詞書によりて歌も一入はへあるやうに聞なさるれは撰者の發明とはいはれましその事實は日記が分明也

と例よりはひきつくろひてかきてうつろひたる菊にさしたり

按するにむかしは獄令の前に菊をうゑたりと袋草子に見ゆ此は是れ訴をきゝて斷する所なれはきくの訓にとれり凡菊桐の訓は同き筋にて其源は神代の卷白山權現の本縁菊理媛に本づきて子細あると聞き及ひきされば歌を菊につけられしも時節の物なれとも心あるに似たり且此歌は日記中の歌の壓卷になるへし不啻女君詠歌中の第一なるへし定家卿も百首の中にえらはれ女わらんべもあまねく唱ふる所の秀逸なんそ當意即妙の濫美をからんや女君自らの心にもよみえたりと思食けん例よりは引つくろひてかゝれしなりこれらの詞を見てかの當意の説を破るに足れり　册

かへりをあくるまでもこゝろ見んとしつれどとみなるめしづかひのきあひたりつれはなんいとことわりなりつるは

これは公よりの消息の詞也夜の明はなるゝ迄も門

をあくるや否と待んとせしかども内より召あればとゞまらで立かへりしと也但大やけにかぎらず召使は何くにもあるべし大鏡に主は當時の母后の召つかひ高名のおほやけの世つぎといひて侍し云々
いとことわりなりつるはとは女君への日比の夜がれなれば宜にこそあれと公の意の詞なり
げにやげに冬のよならぬまきの戸もおそくあくるはくるしかりけり　公
拾遺には公の返歌はのせず蓋女君の歌のいとすぐれたるにむかへては共にのするにたへざればなるべし大鏡にはその實事を述る書なればともにのせられぬ原本に果の句わるしとありわるとあるはわびなるべしそれにてもきこゆれど今は大鏡にしたがひて直せり
さてもいとあやしかりつるほどにことなしびたる
古今戀歌に村鳥のたちにしわか名今更に事なしふともしるしあらめや顯昭云事なしふとは事なしざまにいふともと云心なりいとあやしかりつるとは彼町の小路の事を心に怪まるゝ也されども先其事をしばらくしらずがほをつくりて居る事をかくいへるならん何も事のなきふりをしてをる也蓋ぶりのつゞめ詞はびなりのばしていへばぶり也ぶりの假字がへりはびなれば也されば今は事なしぶりたると釋すべし
しはしはしのひたるさまにうちになどいひつゝあるへきをいとゞしう心づきなくおもふ事ぞかぎりなきや
原本にしのひたるさまこうちにとあり小路にてはきこえがたし契本にこをイにと記せり今は其イ本にしたがふて釋せりいとゝしうを原本にいとしうと有尾州よりえたる契本に一つのとを加へたりこれ又したがふて改釋して曰此言心は公のしかる時のさまはかくの如してあらまほしきことなり彼新にかよへる所の事をしばしは我方へふかく隠し忍ひて只おほやけ事にいとまなくしてしばしはとだえがちなるなんどゝ云つゝもあるべきことなるにさもなきはいとゞしく心づきなきとならしもつとも婦女の情なるべしうちとは内裏をいへりかぎりなきやのやはいはゆる捨やにて心なしたゞ云すつる詞也

同十年　道綱二歳

年かへりて三月はかりにもなりぬもゝの花なゞどやとりまうけたりけんまつにみえずいま人がたもれいはたちさらぬこゝちにけふぞ見えぬさて四日のつとめてぞみなみえたる

此段或は脱誤あるやことにいぶかし今姑く文のまゝに強て釋しぬ蓋三日の夜は公のやかたにとまり玉ひて外へありきもなく此ごろ新たにかよへる町のかたへも今宵ばかりはとだえある故に此ごろかの所にひまなくむつれて立さり玉はぬを反りて今日ぞしらるゝとの意なるべきにやさてあくる四日の朝より町のかたへも女君のかたへも來り玉ひて其夜さりはこなたにとまりたまひしにや桃の花を原本にものゝはなとあるは分明に誤也下文に又ものともとあるも同く桃の誤としらる

よッべよりまちくらしたるもゝどもなほあるよりはとてこなたかなたとり出たりこゝろざしありし花をおもゝちのかたよりあるをみればたゝにしもあらで

手ならひにしたり

よべは前夜を云俗によんべとも土佐日記にわらはめのうたへる詞の中にあり其餘は蓋ようべとよむべしよんべはいやしくきこゆれはなりさて案するに今日は公のこなたにいませる故所々の桃花ともこゝに參あつまりしとみゆおもゝちは俗にかほもち也源氏をとめの卷におもゝちこわづかひうべうべしく云々二條良基公思ひのまゝの日記元日節會の下に云おもゝちなんどけふをはれとつきしろふもことわりならんかし云々公のかほもちのかの町の方より來りし花にかたよると也たゞにしもあらでは上のなほもあらじと詞はたがへども心は同猶案するに直をたゞともなほともよまるればもしくは此所も本はなほにてありけるやもしらずされど此とほりにてもきこゆればそのまゝにさしおきぬ

まつ程のきのふすきにしはなのえはけふをることぞかひなかりける　女君

はなのえ原本にはなのみとあり沖本にえとなすみは實也えは枝也實はこゝにいふべきなし必枝なるべしをるは居也折にかけたり同しかななればなり

すべて後の假名にてはかなはざることあり．とかきてよしやにくきとおもひてかくしつるにけしきを見てばひとりてかへしえたり

ばひは奪也歌を手習がきのさまにしてかくさんとせしを公の見つけてばひとりて其うたのかへしをせられしなり

みちとせをみつへきゝみは年ごとにさくにもあらぬ花とえらせん　公

原本にはみつへきみにはとあり沖本の內尾州の本にきを一加へて君とせり今それに從へり又原本にすくにもあらぬとあり沖本にそのまゝにして傍に酢好の二字をかけりいかゞおぼつかなし拾遺賀の部躬恒みちとせになるてふ桃のことしより花さく春にあふそうれしき王母か仙桃は三千年に一度實のると云へはかくよめり今は蓋女君の怨むる氣色を見てそなたと我中は花のごとくはかなき契ならずしばしのとだえはありとも永きちぎりにこそはあれと也故に三千年に一度みのるの久しきをいへり滿に見をかねたり

とあるをいまひとかたにもきゝてん

花によりすぐてふことのゆゝしさによそなからにてくらしてしがな　女君

原本きゝてとばかりあり契沖本もそのまゝなりされどもさにては此歌町の女のよめるときゝなさる歌は分明に女君なりされば上のきゝて下にんの一字を補ふてきゝてんとせりきゝてんはきゝてあらんずれと推はかる詞なりいまひとゝはそのまゝ町の女のこと也ちかごろよりの公のおもひ人なればかく云り此下に女君自らの事をもとつひとゝ云り今人に對してなりさきの女君の手習書せし歌も公のなぐさめてよまれし歌も今人の方にさだめてほのきくらんと云て女君の此歌をよめるなり上にきらねば一向にきこえがたし必きるべしさて此歌原本ゆゝしきにとあり沖本さになほせり今それに從へり原本又はての句をくらしてえなりと誤れり花とは町の女をさして云ゆゝしきはいみしきと意同此詞は吉凶反していつれにもつかへる詞也今こゝにはいみじきときらひたるなり公の町へかよはるゝ道すがらなればつねに我門前を通らるゝが忌しければよそにてくらしたきとの事也

かくて今は此町の小路にわざと色に出にだりもとつ人をだにあやしうくやしとおもひげなる時がちやいふかたなう心うしと思へともなにわさをかせん

言心は此ごろまでは新たにかよへる町の女をさすがにかくせるやうなりしか今は漸町へのかよひのつねのしわざになれる顔色にあらはれて本よりわれをいぶせくおもはるゝばかりになれるとの歎息の詞なるべしわざは業の字なり町へかよへることが公のしわざとなると也いろは面色なり時がちのかちは多の字あたれり勝の義にはあらす

此今人かたの出入するを見つゝあるに今は心やすかるへき所へとてゐてわたすとまる人まして心ほそしかげもみえがたかゞへいことなゝとまめやかに悲しうなりて車よするほとにかくいひやる

何わざのわざは態也業にはあらすしてかろき詞也蓋女のはらから長能なゞとがすゝめて外へうつせるならんゐてはひきゐて也とまる人は女の親族且従者など也いひやるは公へなり心から外へうつれともさすかにしたへる也影もは公の影なり

なとかゝるなけきはしけさ増りつゝ人のみかゝるやとゝなるらん　女君

なげきに木をそへてしげとつゞけたるなりかるゝは離の字又木の枯にもそへたり何とてかくなげく事は目にましてかへりて人目はかれゆくと打歎かるなりなどかゝるの五文字に町の女故にうつれる事を含たるなり
書入云聞えかたし宣

かへりことはをとこそしたる

此かへり事は歌にはあらで只口づからの返事也公の従者の心にてせしなるべし

おもふてふわかことのはをあた人のしけきなけきにそへてうらむな　女君

此歌も又女君ならん下文になゞと云　おきてとあればなり跡にのこる人に對してよめるなるべしあだ人は公なり原本そひてとあるは誤

なゞいひおきてみなわたりぬ　おもひしも忘るくたゝひとりふしおきす大かたの世のうちあはぬ事はなけれはたゞ人の心のおもはずなるをわれのみならすとしごろの所にもたえにたゞなりときゝてふみなどかよふことのありけれは五月三四日の程にかくいひやりぬ

打あはぬことのなきとは凡て我身にとりて物のたらはずして萬まどしきやうのことはなきと也此たゝ人は直人(タヽウト)とよめるにはあらずたゞはひとり也人は公をさすひとり公のまめやかならぬをなげくなりおもはずなるを歎くといひ殘したる詞也われのみならずより下へつゞけてよむべし年ごろの所とは恐らくは東三條院をはじめ道隆公以下の人々の母親なるへし此下に子供あまたある所といへると此に年比の所といへるは同きなるべししかし末だ此をりは道隆のみにして以下の公等は末生以前也跡よりかくかけりといはゞかくいへるも背かすなり全體此日記年へて後跡より書たるものなれば也三四日はみかよかとよむへし（書入云此説心えかたし）

そこにさへかるといふなるまこも草いかなるさはにねをとゝむらん　女君

原本さはをさとゝかけり今は沖本にしたかへりそこは其所なり年比の女をさすまこもは眞菰也刈にそへて目離を云根に寢をそへたり

まこも草かるとはよその澤なれやねをとゝむてふさはゝそことか　年比の女

原本によそのをよどのとあり沖本には不レ改そのまゝにすそのまゝにして釋せば夜殿に淀をそへて歌の表は可なるに似たれとも歌の意においては切ならぬに似たりかけうたに向をさしてそこといへば打かへして向の方を又こなたにしていへは宅はよそ也言心は公の目かると云は此方にして公の寢所をとゞめらるはそなたにこそあらめと也さはの字二所にあれとも古歌にはかやうの類もあるにや

六月(ミナヅキ)になりぬついたちかけてながあめいたうすいみしうてひとり言に

わかやとのなけきのしたは秋またてうつろひにけりながめふるまに　女君

なげきを木にそへて下葉といへり腰の五文字原本に色ふかくとして旁にイに秋またでとしるせり今は其一本を取て本行と更るなり下文公の歌のをりならでといへるによくかなへばなり古今小町花の色はうつりにけりな徒らにわが身世にふるながめせしまに

なゞどいふほどに七月(フンヅキ)になりぬたえぬと見ましかはかりにくるにはまさりなましなゞど思ひつゞくるを

りにものしたる日有物もいはねばさうざうしげ也前なる人ありししたばのことをものゝつひでにいひ出たれば

女の心のやるせなき餘りの詞也たゞなほざりに來らんよりは一向に絶たるがましぞとの意なりかやうに思居るをりふしに公の來られたるなりさうざうしは寂々也何となう心さびしきを云詞なり前なる人とはまへにある女君の侍女なるべしありし下ばのは上にいへる女君のひとりごとなり

きゝてかくいふ

をりならで色づきにけるもみぢばゝ時にあひてそいろまさりける　公

折ならでとは上に女のひとりことの歌に秋またでと云る心に同じ此歌をよまれしはいつの時とはみえねども此下に至て九月計の詞ありさて此の上に七月になりぬとあれば概していはゝ八月末九月にもかゝるべければ木葉のやゝ染だす比にも及べば時にあひてぞと云へるなるべし

とあれは硯引よせて

秋にあふ色こそましてわひしけれした葉をたにもなけきしものを　女君

右のとあればより此歌かけてなげきしものを迄は流布の本に脱せし所なり余いまだ六十ばかりの今は昔或寫本を得て幸に補ひおきし近年冥沖本を見るに有レ之尾州より得し本には無レ之轉傳書寫の信じ難事如レ期已

とぞかきつくる

原本にはかきつくるかきつくると重ね言り下は必衍文分明なれば省おきし後沖本を見るにけちたり

かくありつゝきたらずくれとも心のとくるよなきにあれまさりつゝきてはけしきあしければはたふるゝにたち山とたち歸る時も有

蓋公のとだえがちにて女君こよなう打なげかるゝ折からなればあからさまに女のけしきのようしからねば間もなう立かへられし樣をかくおどろ〱しうかきなされしにやたふるゝに立山とは或常時の俗諺などによれるやもしるべからずたち山は越中の立山なるべし歌にはたちやまとよめり

ちかきとなりに心はえしれる人いへるにあはせてかくいへり

もしほやくけふりの空にたちぬるはふすべやしつる
くゆるおもひに　女君
なっど丶なりさかしらするまでふすへ　かはしてこの
ころはこと丶ひさしうみえず
源氏は丶きゞにこと丶あかくなれば障子口まで送
り玉ふ云々只夜のあくるを事として一すぢにあか
くなれると名殘ををしめる詞也今こゝの事と久し
うといへるも久しう見えぬことをしごと丶すると
云心にて久しきとだえを痛くいへる詞也すべて此
日記に此詞尤多し末に至て明くれば臥を事にてあ
るそいとあやしく又事とあけはてゝともありそれ
は取も直さずは丶きゞの事とあかくと同しふすべ
はくすべ也くゆるも同意にてくすぼるやうの詞也
それに後悔の悔のくゆるに同じかな故に秀句せり
後世悔の訓に用ゆるくひやくゐにては不レ協なり
頭注書入云などと切てとなりさかしらとよむへくやなとゝなり云言はあるへくもあらず宣
たゞなりしをりはさしもあらざりしをかくひごろめ
がれていかなるものどらかにうちおきたるものどめ
えぬくせなんありけるかくてやみぬらんそのものと
おもひいづべき便たになくそありけるかしと思ふに

十日はかり有て文あり何くれといひて丁のはしらに
ゆひつけたりしこゆみのやとりてとあればこれそあ
りけるかしとおもひてときおろして
日來目がれてを原本ころあかくとあるは脫誤せる
也今直してよめる事しかりたゝなりしのたゞも元
直の字にてなほなりしにてもありしと思へどもた
ゞにてもきこゆるからして始の本のまゝにうつせ
りのどらかはのどかに同じのどめえぬも心のどか
に打おきがたき心ぐせありと也めがれはてゝも猶
公をしたふ心のやまずゝの口ずさみなり丁は帳臺
也帳を丁とかけるは本性を本上とかける類にして
草子物語の常なり
おもひいつるときもあらしと思へともやといふにこ
そおとろかれぬれ　女君
此歌後拾遺にのせたり詞書に入道攝政かれ〳〵に
てさすがにかよひ侍る比帳の柱に小弓の矢をむす
びつけたりけるを外にて取におこせて侍ければつ
かはすとてよめると有上句おもひいづる事もあら
じとみえつれど此日記とは辭少しかはれり何れに
ても心はよくきこゆかの撰者の例の思ひぐせなる

べしやと呼へる聲に矢をかけていへりさて原本には腰の何思へとてとありこれ又例のとんのかなの轉じたるなり後拾遺の思へどもに同なり又はての何ぬるとあるはてにはたがひけるなり

とてやりつかくてたえたるほとわがいへはうちよりまゐりまかづる道にしもあれは夜中あかつきとうちしはぶきて打わたるもきかじといへどもうちとけたるいもねられず夜長うしてねふる事なければさなからと見きくこゝちは何にかは似たる今はいかで見きかずたにありにしがなとおもふにむかしすきごとせし人も今はおはせずとかなど人につきてきこえごつをきくをものしうのみおほゆれはめくれかなしうのみ覺ゆ

女君の住所は公の參內退出の道筋なるをいへり何にかは似たるは物ににずの詞のごとし昔すきごとせし人は發端にあはつけかりしすきごとどもに相照すべし蓋質方なども其の中にあるべしきこえごつは所謂言也世のさがにて聞にくき事をきくがうるさき也物しうは心にふくみあるやうの詞也源氏に多し

子どもあまたありときく所もむげにたえぬときくあはれましていかはかりとおもひてとふらふ

前に年比の所といへるに同かの仲正の女の子後にはあまたあれと此時は萬の兄中の關白道隆のみなりこれは後からかける日記故おのづからかやうにあるべき也そのわきまへしてきくべしむげは無下のもじなりすべてかなもみに多く用來れる文字なり意は至極の心なりこれよりくだれるはなきとの文字なり

九月はかりのことなりけりあはれなどしけくかきて

ふく風につけてもとはむさゝかにのかよひしみちは空にたゆとも　女君

そこにも無下にたゆと風聞するにつけてかくはとふと也そとほり姫の御詠にすがりて今は來る人のしるしも見えず成ゆく空の互のなげきをとふらふ也此歌新古今戀四に題しらず右大將道綱母とのせられたり

かへりことにこまやかに

いろかはる心とみれはつけてとふ風ゆゝしくもおもほゆるかな　年比の女

かはるは公の心也さればそなたの風の音信をきくもいま〳〵しきとなり

とそある」かくてつねにしもえいなびはてゞときときみえて冬になりぬふしおきはたゞをさなき人をもてあそびていかにしてあじろのひをにことゝはんとそ心にもあらでうちいはるゝ

いなびは否ぶり也いなみとよむべしびに通して半濁のよみ也六帖にいかでなほあしろのひをに事とはんなにゝよりてかわれをとはぬと此下句の心にてかくいへりあしろは網代也近江の田上(タナカミ)山城の宇治によめりをさなき人は例の道綱卿なり

同十一年 即天徳元年 此年十月改元 道綱三歳

年又こえて春にもなりぬこの比よもとてもてありくふみとりわすれてをむなをとりにおこせたり

蓋此ふみは消息文にはあらす書籍也さて原本にをむなのをの字を脱せり故に余が前釈にわすれてんと句して公のわすれてやありけんと云に見て又なをは後世のかなになほせりと見て古のかなにかへて我かたへよがれの久しくなりぬれど猶取におこされたりと釈し置しに沖本をみての後をを補て女を取におこされたりと治定しぬ

つゝみてやる紙に

ふみおきしうらも心もあれたれはあとをとゝめぬちとりなりけり　女君

蹈に文をかねたりうらを沖本に裏の字をかけれどもいかゞ也蓋浦は女の所に比し心は公の心のすさ(荒ス)べるを云なるべし裏の字を又こゝろとも讀るべきなれば頗まぎらはしければ其義をとらざるなり又沖本の一本に大穴むちの故事を引けるはいぶかしもしひかば蒼顔てしかざらんこれ決して契沖にあらず其門人の所レ加なり

かへりことをさかしらにたちかへり

心あるにふみかへすとも濱ちとりうらにのみこそあとはとゝめゝ　公

契本のイ本にとともをらんとありされど原本のまゝにす歌の心は女をなぐさめて末久しくあとをとゞむべきかたはそなたにこそあれとなり

つかひあれば

はまちとりあとのとまりをたつぬとて行へもしらぬ
うらみをやせん　女君

うらみに浦をそへたり

などいひつゝ夏になりぬこのときの所にこうむべきほとになりてひときやうひゞきつゞきていとき丶にくきまてのゝしりてこのかどのまへよりしもわたるものかわれはわれにもあらずものたにいはねは見る人つかふよりはしめていとむねいたきわざかな世にみちしもこそはあれなゞどいひの丶しるをきくにた丶しぬるものにもがなとおもへどこ丶ろにしかなはねはいまよりのちたけくはあらすともたえて見えずだにあらゞもいみじう心うしとおもひてある　に三四日はかりありて文あり

このときのとはもしやさの轉にて町の所をさしてさきの所にやと思ひしに沖木いづれももとの如きゆゑなほさすおだやかにしもあらねどもいまみさかりに公の寵あるものなれば此時の所なりうむべきのへを原本つとあれど一本にへとせり臨産月なればいつれにてもきこゆれともされど程の字にあたりてきけはうむべきが宜しき也はひのりは發端にあると同急速の意ありひとさやう来ゞ詳或は一行にや不穏沖木には一京とせりしからは左京洛陽の境地を汎然としていふ歟いづれにしてもおどろ〲しく仰山なるを形容せるなり道しもこそとは必門前を通らずともよぎみちはなくてやはの意たけくの詞落つかず愚案にたはしなとの轉にして繁くはあらずともにてあるべくと思へども立かへりみればいはれざる案なりたけしの詞源氏等にもみゆればそのま丶にてきくべしたけきにてきこえぬにはあらず

あさましうつべたましとおもふ〲みれば此ころこゝにわづらはるゝことありてえ參らぬをきのふなんものせられめるけがらひもやいむとてなんとぞあるあさましうめづらかなる事限なしたゞ給はりぬとてやりつ使に人とひければをとこ君になんといふをきくにいとむねふたがる

つべたましとは藻鹽草につべ〲しき也人にくさうの體也云々源氏柏木にまぶしつべたましくとありまぶしは目也おぞましきやうの體也かれこれ通はして心得べしおもふ〲はおもひ〲なり　な

く／＼の詞と同義蓋雅語也俗になき／＼と云ひ思ひ／＼といふ雅俗のたがひおのづからわかるべし此ごろより下は公の文の詞也物せらるは平産をいへりけがらひは産穢なり給はりぬとはそのよし承はりぬと也

三四日はかりありてみづからいともつれなくみえたりなにかきたるとて見いれねはいとはしたなくてかへることたび／＼になりぬ

はしたなきと云詞は萬の草子物語に多みゆさしあたりては先つ伊勢物語の發語の文中にありてはやくの釋は弱きものに強くあたる心といへりそこにおきてはしひてきこえもすらめども其外の文においてはきこえざる所がち也契冲が源註拾遺に此詞をくはしく辨して枕草子にはしたなき物といふ下のひとつに人をよぶに我かとてさし出たるもの又竹取物語に宮はたつもはしたなるもはしたにて居玉へりそれについて二つの心あるべし大氣なるをおほけなきあらきをあらけなしといふ類にして無の心ならねばたゞはしたとも又はしたなくとも云と云々余は則うけがはず先そのあらけなきなど云は俗語にて冥加といふを冥加なきと云類なりその俗語を以雅語を釋する事契冲の聰明もこれらの手くせあり又してもなきは無にあらす助辭也と俗語を引て雅語を使(スカ)せるは尤不可の甚也そのおほけなきと云詞のなきも無也されど流布の釋に應(オウ)の音(コヱ)をもてあつることこそひがことなれおほは負のかな也何にても其事を身に負ほどの才氣もなくしてと卑下の詞也今その流布の釋のよはきものにつよくあたると云說の據を思ふに眞名伊勢物語にうめたる強(ハシタナキ)の字を強弱の强にとりあやまれる也具平親王の本意をひそかにさぐるにこの强は一木强の强なりたとへば漢の高祖のいにしへ灌嬰が如き武人が學者にあふて何の會釋(ヱシヤク)なくわが生れ付の木なりの儘にあへしらふふりを云詞也されば源氏枕草子をはじめ萬のかなものに夜のすでに明はなれたる空のけしきに多く此詞をつかひたり夜の內は月の影あるは燈の光などにおほはれて物のすがたもかくれたるが夜明ぬれば十分にいさゝかの隱れくまなく本體のみえ透たるこれはしたなきの訓義なり其けしきのあらはなる如く凡そ人の交りの上は互に

會釋ありてこそ貴賤上下の分定るうへに禮意ありておのがじゝ斟酌の心あればまじはりも均くとゝのひ相和するが實に人の人たるの道なりさるに其の會釋なきは本上のあらはに見えすくによりてこれ又はしたなきの訓義は相同しかやうにみればかの伊勢物語の發端も思ひがけなく田舍には目なれぬ美女をはしたなく見る也都にては常なればさのみ目だたぬが草ぶかき所にして珍らしきよりかくれぐまなく其の體のあらはるゝ是又はしたなきにあふにあらずやされば景氣の上にてかれがごとくそれを人の上にとりてはいさゝかも會釋なく木なりなればはしたなきの詞よく相かなへりかくみねば此詞所々によりてかよひがたき事出來べしわきて源氏若紫の巻には此詞七所にありいつれも余が釋にては分明也顯昭が人にくしと云詞を釋して物あらゝかにはしたなき心を云りとあるも會釋のなきをいへる也

七月(フヅキ)になりてすまひの比ふるきさぬとあたらしきとひとくだりづゝひきつゝみてこれせさせ給へとてはあるものか見るにめくるゝ心ちそするこだいの人はあないとをしかしこにはえつかうまつらすこそはあらめなま心ある人なンどさしあつまりてすゝろはしやえせでわろからんをたにこそきかめなンどさだめて返しやりつるもしろくこゝかしこになんもてちりてするときくかしこにもいとなさけなしとかやあらん廿よ日(ハツカアマリ)おとつれもなし

七月に例おこなはるゝ相撲の節也むかしは國々よりすまひをめして叡覽ありし也そのをり公の着用の物なとを女君の方へもあつらへられし也こたいは古代也ふるめきたる人を云源氏にもあり今は女君の母にてもあるべし又さならでも老女を云べしさだめてとは定也此記此詞尤多

いかなるをりにかあらん文もある參りこまほしけれとつゝましうてなんたしかにことあらばおづ〳〵もとありかへりこともすまじと思ふにこれかれいとなさけなしあまりなりなンどものすれは

ほにいてゝいはじや更におほよそのなびくをばなにまかせても見む　女君

をばなは薄(スヽキ)の穗に出たる也ほに出てとはをばなの緣語すべて物のあらはるを云言心は公の來らるを

またずしもあらねどもこの比のとだえがちの中故あらはれては得いはずとの意也おほよそは大凡なり

たちかへり

すぐさまに反しをし玉を云也たちかへりの詞いつもかくきくべし

ほにいてはまつなひきなん花すゝきこちてふ風のふかんまに〳〵　公

東風を此方によそへたりこちてふのてふは後々のあつかひには詞のたすけと云れど古くは皆といふとの義にとる今も如レ此

つかひあれは

あらしのみふくめる宿に花すゝきほにいてたりとかひやなからん　女君

按に使あれはと有てさての歌なれば女君のよめるなるべしされとも此歌より下へつゝけたる詞になゝどよろしういひなして又見えたりとあれば又公の歌のやうなり女のよめる歌にして釋せは嵐のみ吹める宿とは公の我をいとひ荒せるの心を云て今はこなたよりあらはれて招きたりともかひのあるべきかはと也又公の歌にしてみれば公のをり〳〵とはれても女のあへしらひのあしきをさしてあらしのみ吹宿なれば行てもかひなしとなりかく二様にきかれもぞするされとも前の公の歌にほにいてばといへるをうけてほに出たりともかひなかるべしと女の反しに治定せるなりされば又此歌の後の詞によろしういひなしてと句を切て公の又來られたりと聞て可ならんと思はれ侍れどもさにてはあるべからず所詮よろしくいひなして又見えたりとつゞけて公の方より負て來られしなるべしさみればなゞどまでを上の歌かけて一つに切てよろしくを下へかけてよむべしうたがふ或はなゞどの下に脱句もありけるにや又知るべからず

なゞど句よろしういひなして又見えたりせざいの花いろ〳〵に咲みだれたるを見やりてふしながらかくぞいはるゝかたみにうらむるさまのことゞもあるへし

原本にうらむるさまとあるはさを誤也せざいは前栽なりかくぞいはるゝは公のいへる也即ち下の歌を云

もゝ草に亂れてみゆる花の色はたゝしら露のおくに
やあるらん　公

第四句原本おくしらつゆとあり下におくの詞あれはかならずたゝをおくに訛たるもの分明即直せり

とうちいひたればかくいふ

身の秋をおもひみたるゝ花の上につゆのこゝろはいへはさらなり　女君

三　原本内の心とありこれ必内はゆの訛にて上のつを脱せしなり上の歌に白露あればなり

な」どいひて例のつれなうなりぬ」ねまちの月のやまのはいづるほとにいてむとするけしきありさらてもありぬべきよかなと思ふけしきや見えけむとまりぬべきことあらはなゞどいへどさしもおほえねは

いかにせん山のはにたにとゝまらてこゝろもそらにいつる月をは　女君

從來の說はねまちの月（頭注書入云ねまちの月うつほ物語によれはまさしく十九日の月也宣）をふしまちとも云て十九日の月とす契沖が新義はねまちふしまちともに皆廿日の月を云（書入云契沖の說いがゝ昔よりいさよい（十六日）たちまち（十七日）ゐまち（十八日）ねまちともふしまちとも云（十九日）の說に從ふへし六帖におきふしまちとよめるは「ふす」を云詞によりておきと云詞を加へて句のたすけとしたる也廿日をねまちといへる證例ありや廿日よりはたゝ有明也空穂物語梅花笠二月廿日の條にねまちのりなきりふといひてとあるうごかぬ證也）六帖の歌を引て云君をのみおきふしまちの月なればと讀り十八日を居待と云廿日をねまちといへば其の間なれば十九日をおきふしまちと云と云々今六帖を閲するにかの歌は第五雜の思の部に人をまつと云る題の下に君をのみ起ふし待の月影はやちよもこゝに有明にせよとあり契沖によれば望月の後いさよひたちまち居まちおきふしまちねまちと廿日にいたるまで皆異名あれば其說によるべきに似たりされとも未二治定一後拾遺雜一に入道攝政物語なゞどしてねまちの月の出る程にとまりぬべきことなゞといひたらばとまらんといひ侍けれはよみ侍と前書して入たり下の句心のそらにとあり今此本の如きもいはれぬにあらざれば異同を見ん爲めに直さゞそのまゝあげぬ且後拾遺は撰者の心もて直されし歌もあるなればなり其旨は淸輔俗草子に見

かへし

ひさかたの空に心のいつといへは影はそこにもとまるべきかな　公

原本下句そこにもをそらとせるは誤也諸本ともに

直せり
とてとゝまりにけりさて又のわきのやうなることとして二日はかり有てきたりひと日の風はいかにとも例の人はとひてましといへはけにとやおもひけんことなしひに

野分とは七八月の比あらく雨まじりに吹風の名なり野分の風ともいへり源氏に野分の巻あり枕草子にも野分の風のさまつぶ／＼述べたり例の人の沖本に大かたの人ならばと釋せり姑それにしたがふ例の人とはもしくやかの町をさせるやとも思へど前後の文言をみれば沖本によるが可なるべし原本にはことなしととめたり尾州の本にはひにの二字をそへたり原本のまゝにさしおかんと思へとも下の歌にかけて味あるよしにも覺ゆればそれに姑したがひて書そへぬ

ことの葉は散もやするととゝめおきてけふは見からもとふにやはあらぬ　公

袋草子雜談に河内重如（カフチノシゲユキ）と云し者われより高き女に思かけて艶書を書てみつから持來て云人つてにちりもやするとおもふまにわれが使にわれが來るぞとよめる心に似たり沖本にけふはみからもとは身づからの心かと釋せりとふにやはあらぬは猶とふにはあらぬやといはんか如し言心はみつからとなり

といへは

ちりきてもとひそしてましことのはをこちはさはかりふきしたよりに　女君

歌の意は町の女をとへる便ならんとうらめるなり東風に春のものにして多くよめりさあれど能因が玄々集にある女に虫のねのかなしき野への花すゝきこち吹風に打なびかなん是こちを秋にもよめる證なり

かくいふ

こちといへはおほろけなりし風にいかてつけていとはんあたら名たてよ　公

原本にむねの句おほろ帚とあり契沖本にこれをおほぞふと直して曰源氏にある詞なりおほろかの意なりと定めてこれ原本のろはろに誤やすく帚は帝に形の似たればかくは直せしならん且契沖の撰はれし源註拾遺に東屋巻におほぞうとある詞に今こ

の歌を引ゝ然るに源氏の或抄におほぞうは大惣也公界むきの心也大やうに取ひろげたるやうの心也としかればぞふの假字にはたがひぬぞうと假字を直せし義慥ならず且又歌の詞にはきゝなれずいと古き歌にはかやうの詞もありもやせんされど三代の此に至りてはあるまじき詞なり故今は其の説にしたがはずして原本の[illegible]の一字をおに直しておぼろけと直しぬおぼろけは分明ならぬ詞也野分の雨風まじりにて鬱朦たるけしきなり今此公の歌は女の歌にこちとあるにすがりて鬱朦たる風は東風ののどやかなる風にはいかでかこつけていとはるゝはよしなき名たてがましさよと也原本に又いとはんをはとはんとあり契冲もいに直されき

まけじごゝろにて又

ちらさじとゝめ置けることのはをきながらだにぞけさいとはまし　女君

胸の何原本をしみおきけるとありて又イ本を傍にかけり今は其のイ本に從ふ公の歌二首ある上の歌のとゞめおきての詞を受て如此又契冲本には下の何いとはましのいをイ本にはとしてけさはとはましとあり此上の歌もつけてはとはんと原本の如くしてこゝもけさはとはましとなりかくいへる義歌も聞よきやうなれどもそれにては歌に何のふしなくやいとはんといひいとはましと云にて曲節あれば彼にしたがはざるなり且つ下の詞にこれはさもいふべしとやにかけてもかくのごときが可なるべし

これはさもいふべしとや人ことわりけん。

人は女の家内の人也此歌はわきて女の道理也と人々も思けんと也

又十月(カンナヅキ)はかりこよひしもやんごとなきことありとていでんとするに

こよひを原本にこそはとあるは例の轉倒の誤なり又原本にやんごとなきのんをむにあやまりこよひしもや心もとなきとありそれも文義はきこゆれとも非也契冲本も余が如くせりやんごとなきはやむことをえざるの詞也常には多く貴人のことを云それも心は同し事にて貴人のことはさしおかれぬの心よりまうけし詞也今は只たゞちに止事のえられぬなり

しくれといふばかりにもあらずあやにくにあるに猶いでんとすあさましさにかくいはる

時雨と云はかりにもあらすとは痛くふるを云也あやにくはあやしまるゝの深き詞也

ことわりの折とはみれとさよ更てかくやしくれのふりははつべき　女君

といふにしひいでんあらんやは

原本にしひて人と又一本にてをたるとともあり人はんの訛にてひの下にいの字脱たるへしいの字なくてもしひでんともよまるべけれともいの字あらまほし故いを加へける也

かげろふの日記解環上卷之三

天德二年　道綱四歲

年立かへる詞は見えねとも上に十月ありて此下に七月あれば必年かはりたるなり今の原本には此標なし余昔年みし寫本にありし今は高く上て標出す

かうやうなる程にかのめてたき所には子うみてしよりすさましけに成ンにたンべかンめれば人にくかりし心におもひしやうはいのちはあらせて我おもふやうにおしかへし物を思はせばやとおもひしをさやうになりもていてはてはうみのゝしりし子さへしぬものかそむわうのひがみたりしみこのおとしだねなりいふかひなくわろきこと限なしたゝ此ころのしらぬ人のもてさわきつるにかゝりてありつるを俄にかくなりぬれはいかなる心ちかはしけんわかおもふには今すこしうちまさりてなげくらんと思ふにいまそむねはあきたる今そ例の所にうちはらひてなンどきくされとこゝにはれいのほとにそかよふめれはともすれは心づきなうのみおもふほとに

かうやうを原本にかをらに作るは例の訛也かうや

うは俗に云かやう也かやうとのみかきてもかうや
うと引てよめるかよみくせ也めでたき所とは例の
町なり公の愛らるゝ女を云人にくかりしは人にく
からぬの言のうらなり顯昭云物あらくはしたなき
こゝろを人にくしと云ふやはらかになつかしき人
を人にくからぬと申めり抜にこゝの詞にてみれば
町の思ひ人はもとは王家の妾などにてもありける
にや原本になりそてともをそこに作は例の轉訛也な
りもていてはなりもてゆく也以往をいふの詞也注頭
書入云なりもていていの下きを脱せるかいきて一云いきないてとつゐいふは俗言也注非也このころのし
らぬ人とは公及公の人を云俄にかくなりぬればと
は上のすさまじげにかけてきくべし胸あきたると
は上文のむねふたがりたるの應なり例のほどゝは
今はこなたへしげうもがなと念へどもとだえ多き
は今もかはらずとの言なり其うみたる子さへ死ぬ
ものかと程なくしてうめる子の死せしやうにもき
こゆれどもとまれかくまれにくさを極てのべられ
たるなるべし仍て思ふに公の息は道綱ともにあら
はれたるは四男なるに大鏡に又別腹のしれものに
て世に交りもなかりし子を入て以上に五男として

もとよりそのうめる母もしれねばその女無下に賤
女なるべければもしくは此町の女のうめりしはか
のしれものにや

こゝなる人かたことなゞどするほどに成てそあるい
づとては必今こんよといふをきゝもたりてまねひあ
りく

こゝなる人は道綱卿也此時年齢わづかに四歳孩笑
の狀をいへること譜か如しもたりは持てありなり
公の言をよくきゝしり心にもちてまねせらるゝな
り凡まねはまなびの訓義に同

かくて又心のとくるよなく〳〵なけかるゝ身也さかし
ごとなゞどする人は　わかきつうらになゞかくてはと
云ともあれど人はいとつれなうわれやあしきなゞど
うらもなうつみなきさまにもてないたれはいかゞは
すべきなゞどよろつにおもふことの　みしけきをいか
てつぶ〳〵といひしらするものにもがなとおもひみ
だるゝとき心づきなきやむねうちさわぎてものいは
れずのみ有猶書つゞけてもみせんとおもひて

とくるよなくを原本とくるにとあり契本よにつく
るこれに從ふ心のとくる世なきなりつうらは列也

つらをゆるめいふ詞也かくいへる古書には例ある也頭注書入云つらをつうらと云ふ事古書に例ありとはやいをやう／＼まけをまつけなど云る例歟まさしく列をつうらと云へる例はなし宣などは常に多く物につけてなんどゝいへるにたがひて此などはなせになんどいふ詞也平家物語などになじかはといふ何也共に同くなどゝ書故に紛れやすしなせにの意にてとがむるなどは詞也なんどゝよむはてにはのなどなりつれなき人は公也われとは公の自也此われやはわれやはのてにはも也もてないは横通にてもてなし也つぶ／＼はつぶさの用也ものにもがなはかくもしらせてんと願ふ詞也さわぎを原本にさめてとあり契本に直せり今それに從ふさわぎは騒也多さはぎとかけともかなの正にさわき也かくのごとくいひ述るは長歌をよみ出さんとて也

女君『おもへたゝむかしもいまもわかこゝろのどけからてやはてぬへきみそめし秋はことのはのうすきいろにやうつろふとなけきのしたになけかれき

見初し秋はみそめし年の秋也文かよはしは其年の夏比よりして逢そめられしは初秋の比なるべし

冬は雲ゐにわかれゆく人をかしむとはつしくれくもりもあへすふりそほぢ心ぼそくはありしかど君にはしものわするなといびおきしとかきゝしかはさりともとおもふほどもなくとみにはるけきわたりにて白雲はかりありしかは心空にてへしほとにきりもたな引たえにけり

父倫寧の陸奥の任におもむかれしは九月の末十月の初比也されば初しぐれにかけていへりそほぢは露也そをぢとよむべしくもりもあへずふりそほぢの句は袖の泪にきほへるさまを述たり辭の句讀は君にはしにて切てきくべしものにてきるは長歌の句也古事記日本武尊の片歌にはしきやしわぎへのかたゆ雲居たちみゆ太古雲井とよめるは此かたうたの如く雲の居るなり後世雲井を空の異名の如くつかへるとは異也はしきやしは愛情也わぎへは我家也催馬樂のわいへのごとし方ゆは方より也萬葉に何よりと云事を何ゆと讀ることなん多かたうたの心はかの狄仁傑におのづから符合せり今は故さとにはあらで父の旅

居のかたの白雲なり君にはしのしは体詞也きり
を原本きみえに作れりこれ等のかなが如此特
寝せしものなり沖本は本の如くなれどもさにて
は下へつゞきかたし是必霧の字也上に云已に白
雲はかりありしが其白雲もいつとなく霧の深く
たなびきし故に一向蒙々として何もみえざるに
てこそ上下の文義のよくかなふべけれ
又ふるさとにかりかねのかへるつらにやとおもひ
つゝふれとかひなしかくしつゝわか身むなしく蝉
の羽の今しも人のうすからずなみたの川のはやく
よりかく淺ましき中故にながるゝこともたえねと
もいかなる罪かおもからんゆきもはなれずかくて
のみ人のうきせにたゞよひてつらき心は水のあわ
のきえはきえなんとおもへとも悲しきことはみち
のくのつゝじの岡のくまつゞらくる程をだにまた
てやはよすがをたゆべきあふくまのあひみてたに
とおもひつゝなけく涙のころも手にかゝらぬ世に
もふへき身をなぞやと思へとあふはかりかけはな
れてはしかすがにこひしかるべきからころもうち
きて人のうらもなくなれし心をおもひては浮世を

されるかひもなく思ひいてなきわかれやせんとお
もひかゝ思ひおもふまに山とつもれるしきたへの
枕のちりもひとりねの数にしとらばつきぬへし
つらは列也雁は春秋ごとに往来するものなれば
来を帰とも云へし父の任よりかへらんを雁によ
せて云いまた任をへねば待てもかひなしと也蝉
の羽はいたりてうすき物故我身の便なきにそへ
たりしたしき父にはなれて後は公をのみたのむ
我なるに馴れはおのつから厚かるべきにさなく
に今猶公の心のうすきと云心をうすからずなし
と涙に秀句して云へりうすからさることなきは
すべてうすきなり此蝉の羽のうすきたとへは我
身の便なきと公のうすきと両方へかゝるなりか
くのごとく秀句していふべきかずかずの詞をつ
ゞめて尤巧なる句なりさてはやくをいはん為に
又なみだ川にも云かけたり泪川は伊勢の名所也
それによらで只泪の多也なかを原本にそらとせ
り蓋し移はならはかの轉訛也沖本には本のごと
しされどあさましき空故に言をなさす決して中
なるべし言はまへかどより思ふまゝにはなき中

なれどもさすがにたえぬなからひなるにもしやわが心のおよばぬことありて歟公よりあへしらひのつらきとの心にていかなるつみかおもからんと述られしなりつらき心と見とかけて水の泡のと秀句なりかゝるたのみもなき身上なればいつかたへも水の泡の如くきえもしなんと思へとも父の任よりかへり來るをもまたずして父の公をたのみおけるそのよすがをたゆべけんやせめて父にあひみてだにすこし思をはるかさんといたくたへがたきを念じてたへをるとなりつゝじのをかは陸奥の名所也くまつゞらは和名抄葛の類馬鞭草和名久末豆々良古今六帖みちのくのつゝじの岡のくまつゞらつらしといもをけふぞしりぬる按につゞらはかづらに同くり出す物故に今は秀句に來るほどゝつゞけりあふくま又陸奥の名所あひみてだにを云んため也原本ころも手の下に又てにの二字あるは衍なれば今は省きぬ公のまめ心なきをなけきひたすらにそむきてかくもあらぬ世にもすまはれぬべきにもあらざらんなれども今まで年月久に相みて今はなれんもさすがにこひしかるべからんをいかにせんと打なげかるなり秤は物を二つかけあはせて輕重をはかるものなればあふはかりとよせたりしかすかは後々のさすがに同き古語なりさすがのさもしかなりからころもは打きてといはん料なり著來をかねたりうらもなきは表裏なきなり原本かひもなし沖本のイ本にかひもなくと下へつゞく今はそれにしたかふひとりねの數にしを原本人りねのよわしと大に誤かずといはねは不協原本又わかれのかを脱してわれやゝせり今沖本にて補へり沖本にひとり寢の數は枕のちりにもあまるべしと也尤從にたれり

今かたえぬるたひなりとおもふ物から風ふきてひと日もみえしあま雲にかへりし時のなくさめに今こんといひしことのはをさもやとまつのみとり子のたえすまねふをきくごとに人わろくなる泪のみわか身をうみとたゝふともみるめもよせぬみつのうらはかひもあらじとしりなからいのちあらはとたのめこしことはかりこそしらなみのたちもよりこはとはまほしけれ』

今かを原本になにかとあり今の字か何に轉して又かなに轉せしものなり此例又多し所詮何かと云ては下へつゞけて言をなさず今かうき中の絶はてなんときとは思ながらどち風が吹たやらおもひもかけぬに折角とはれしと存せしを又雨氣なりとて歸られしときにわか心をなぐさめん爲につい又今來んといはれし詞を道綱の幼くてまねをしてあそぶを見るまに〳〵人目わろく泪のみ海のごとくたゝへてもまめに相みることなき身はあいなしとしりながら命のかぎりにねもごろならんさまにたのめ來りし言のみこそ知られて心のまことは知がたしかりにも立よられたらばさきのことばのたがひしはいかにと問あきらめまほしけれとの文言也みどり子は道綱卿也公の事をまねせられしことは前に見えたり難波江にみるめのなきをいひて我身によせてかひあらじとつゞけたり

とかきつけてにかいの中に置たり例のほとにものしたれどそなたにもいでずなゞとあれはゐわづらひて此ふみばかりをとりてかへりにけり

にかいは二階厨子也其厨子等の圖は類聚雜要集にあり中は內なり文は即右の長歌なり

さてかれよりかくぞある

公『おりそめし時のもみちのさためなくうつろふ色はさのみにてあふ秋毎につねならぬなけきのしたのこのはにはいとゝいひおく初霜にふかき色にやなりにけん

紅葉の色にそへておりそめしと云へり即逢初し時をいふなり原本さのみにてのてを脫せり今ての一もじをたす長歌の句必さならでは不ㇾ調言心は或はをこたらすしてかよひ或はとだえもありし事をもみぢによせてうつろふ色は世中のならひしもかくこそあるのみなれあふ秋ことには只逢ことに也時秋にしてあひそめしよりの事なればかくいへるならんつねならぬ歎とはもみぢをいへるをうけて木によせて父が在京ならずして遠く陸奥へ下られしわかれをなげき又公へ父のたのみおかれしことをいとゞ云おくと云りもとより深きなかなるを父のこしおかるゝ詞にいよ〳〵ふかき中となりしと也初霜は時節のふ

り物にて深き色といはん爲又霜の縁語をとらん爲にいとゞいひおくとつゞけたり

おもふ思ひのたえもせすいつしかまつのみとり子をゆきてはみんとするかなる田子のうらなみたちよれとふしのやまへのけふりにはふすふることのたえもせすあま雲とのみたなひけはたへぬわか身はしらいとのまゐくるほとをおもはじとあまたの人のせかすれは身ははしたかのすゝろにてなつくゐ宿のなけれはそふくるに歸るまに〳〵は何くれことのありしかはひとりふすゐの床にしてね覺の月の槇の戸に光のこさすもりてくるかけたに見えすありしよりうとむ心そつきそめし

凡いつしかの詞待かぬる意あり待を松にそへてみどりことつゞけり行てはみんとするがに秀句し立よれどゝいはんとて田子の浦波にそへたり人のふすぶるをいはん爲にたごのうらよりふじの山べの煙を先いへり田子の浦富士の山皆駿河の國の名所也ふすぶるは町の女の方をいふ原本たえもせずたへずの二皆たへのかなに作て絶はたえ堪はたへを分たされば今各直せりまゐくるは參來也くるをいはんとてしら糸をそへていひ下せり言心は我身はしばしだに女君の方へ參來らんとするをかの女がおのれを思はざるとてその方の方人(カタフド)がせきとむれば我身はふすぶるとうらみらると二の中に居て心もそゞろになりぬといはん爲にはしたかのすゞとくされりすゞろもそゞろも同し義なり馴くるをいはんためにはし鷹をいへり女君の怨をとりて夜の深更に及てかへる事あまたゝび何くれの思ひして我方へ歸ても目もあはずさら〳〵しき月のみにむかひて女君の方をしたへど其かげだにも見ずせんかたなくおのづからうとむ心のつきそめしとなりふすゐは只床をいはん爲且は文のかさりのみ

たれかよづまとあかしけんいかなるいろのおもきそといふはこれこそ罪ならし

此邊沖本いつれもすべて一向に下をつけずあるをことさらに釋しかたきをやむことをえず愚意を回じてしひて釋すらくたれか夜妻とあかしけんとはがの町の女へ夜な〳〵ひたむきにむつれあかさるゝと女君の方のさかし人のいひたつれ

ども實にはさばかりにも非と也さて女君の長歌にながるゝこともたえねともいかなる罪かおもからんとあるにむかへてたれをか夜な〳〵たえまなき夜妻とすとうたがはるゝまでになりしことこそ我身になりて罪なるらめとならんか

今はあふくまのあひもみでかゝらぬ人にかゝれかし

女の長歌にあふくまのあひ見てだにと父のかへられての後公にははなれはなれず定めんとの心をいへるをうけて今は所詮父のかへらるゝを何そまたるゝことのあるひたふるに我をこそたのめとなりかゝるべき人は實の親なればかゝらぬ人は公の自らのことをいへばかゝらぬ人にかゝれかしとの文言なるべし

何のいは木の身ならねどおもふ心もいさめぬにうらの濱ゆふいくかさねへたてはてつる唐ころも涙の川にそほづとも思ひしいてはたきものゝこのめはかりはかはきなん

言心は木石の如く心なき身にはあらざれど君をふかく思染ておぼるゝ如きに及ても我心を反していさめもえせぬとなりいは木も陸奥に岩城の地名あればそへたりかつ上のあふくまの名所をうけて又同國の名所をそふるなり下にから衣をいはん爲緣語なればうらの濱ゆふと云出たる也浦は三熊野なり伊勢にも同名かつ又濱ゆふをもいへれとも今こゝは六帖の歌によりたりとみゆれば紀伊國三熊野なり六帖にみくまのゝうらのはまゆふ幾かさねわれをば君が思ひへだつる夫濱木綿はうすきものゝいくへともなくかさなりへだゝるものなればよせたりへだてはてつるは辛きとうけて泪にぬるゝといはん爲にかくつゞけたるにやそほづはぬるゝの深き詞也そをづとよむかよみくせなり思ひに火をこめたれば衣は泪にひたぬれにぬるゝとも思ひの火にはかはきなんと也たき物のこのめとそへたりこのふせ籠にて衣にかをりをとらん爲の具なり籠には目ある故かくいへり

かひなきことはかひの國みづのみまきにあるゝ駒のいかてか人はかけとめんとおもふ物からたらちねのおやもしるらんかたかひの駒やこひつゝいな

ヽかんとおもふはかりそあはれなるべき
みつのみまき原本つみとあり契本につをへとなほして和名抄甲斐國巨麻郡逸見の郷を引り余は則原本のつみをは倒せしと見て昔より歌によみなれし小笠原美豆の御牧の義にとれり且は字を改すして原のまヽを倒してみつとよまるればなりその上六帖の歌をかさ原みつのみまきにあるヽ駒もとればぞなるヽこらが袖はもとあり今はその意を取て可ならん歟されとも藻鹽草を閲するに顯昭か説にも忠岑が十體にもをがさはらは甲斐の國なりみづのみまきは山城の國淀のわたり也しかれば證歌にはをがさはらへみのみまきと侍能因歌枕にへみのみまきとは蛇に似たる色ある麻の生する故にとしかるを堀河院百首に顯仲か春雨の歌にをがさはらみづのみまきとよみたり是僻事歟云々古くよりこれらの説あるに依り契沖は且く本義を正さん爲にへみに直されたるならん又契本の内一本に六帖の歌をひけるもへみとあり流布六帖誤多ものなれば今の印本をも直してひかれしにやされど又原本によりて再案するに冲にしたかへばつの字をいつれのかなのへにとりても點畫の形最遠しつみをうちかへせばみつなり且つ本義にはあらずともよみ習たるまゝによむことも昔より其例なきにしもあらざるべければ此長歌を公のよまれしをりいづれにつかれたるも今にてははかりがたけん今原本を直すの少きに取り又は本義にはそむくとも詞の和順なるによりて姑余か思のまゝに直せし今此二説をあげおきぬればよむ人の好むかたにしたかへ玉へなんあるヽ駒は女君をさしかたかひの駒は道綱をさせりおやも女君を云たらちねは親といはん枕詞也古へはたらちをたらちめ等の詞はなかりしなり萬葉にはすべてたらちねと云て母おやにかきれるなり今もおやは母親也かひなきに國の名をよせたり公の中をはなれなば片飼なるべきや飼は養の義なり拾遺戀四にかふことのかたかひしたるみちのくのこまほしくのみおもほゆるかないは馬のなく聲也原本にいなかせんとあり誤れりいなゝかんと冲本も直しきとかつかひあれはかくものす

原本ものすの字を脱せり沖本に補之今それに従ふ
なつくへき人もはなてはみちのくのうまやかきりにあえらんとすらん　女君
契本の引歌六帖にみちのくのむまや〳〵とかぞへつゝあふひのちかくなるぞうれしき愚案に六帖の歌をひけるはうまやと云ふ詞にひけりうまや〳〵と云は今や〳〵と云心也それゆゑに今の歌もうまやと直せり古のかな馬はうま也後はむまとかけり尤もうとむとは横通なれどむを書てはうには通へどもいまやのいには通がたし下句原本るの字を脱せり字あまりにあれども必あるらんとあるべしあらんにては荒には詞たらぬなり　頭注書入云五の句あもじはなの誤りにてならぞんとすらんなるべしるもじを補ひて荒る意としたるは中々にひがことなり宣
いかゝおもひけんたちかへり
われかなほをふちの駒のあれはこそなつくにつかぬ身ともしられめ　公
原本をふちをゝふりにあやまる尾駮は奥州御牧の名駮駮通和名抄云駮馬説文に不純色馬也俗に布知無萬蓋ふとむとはよく通故鞭をそへたる乎歌の心はこなたより荒なばこそはなつかぬともしらめことよくいへるになつかぬはいかにとなり
かへし又
こまうけになりまさりつゝなつけぬをつなはたえすそたのみ來にける　女君
原本こまうをこまそと誤にたえをたへに作るもまた誤けるをけりに作はてにはかなはず皆これを直せり來ま憂げに駒をそへたりつなはを原本こなはとす契沖本のイ本につなと今それに従へり
又かへし
しらかはのせきのせけはやこまうくてあまたの日をはひきわたりつる　公
あさてばかりはあふさかとそある時は七月五日のこと何ながき物忌にさしこもりたるほとに
かくありしかへりことに
あまの川なぬかをちきる心あらはほしあひはかりのかけをみよとや　女君
七月五日にあさてばかりなれは七日なり河内國名所に天の川あり今はそれにはよらず此歌おくれて玉葉集にいれりかの集には下の句ののの字なし此あまれるや彼れたらすやのの字あらまほしきに似

たり

ことわりにもやおもひけんすこしこゝろをとめたるやうにて月ごろになりゆく

かげろふの日記解環上卷之四

應和二年 道綱八歳

按に上に七月あり下に五月ありて新年の詞見えされども原本に天德四年と標せり而此下文に兼家公兵部大輔に任せし由見ゆ系圖兼家公の傳を閲すれば兵部大輔に任せしは應和二年五月と見而又此次の年に契冲本に應和三年と記せりこれ定て考ふる所ありて記せしならんかれこれ合せてみれば原本天德四年とせしは一年のたがひあり故に今斷じて此年を應和二年と定而上に天德二年までの日記あれば同三年同四年及應和元年以上三年の間の日記闕然してその闕間を大鏡幷榮華等を考合見て推量するに其天德四年は兼家の父九條右丞相師輔公薨の年にあたれり其年五月二日に出家やがて四日に薨せられたる由をのす其病間いかばかりか具さには知られまじけれども壯年にて出家めされしなれば年ごろも健にはいまさざるべければ薨の前年も大かた御わづらひがちなるべく薨じ玉へるが五月なれば其御はてもあくる四年にかゝれば此前後中三年は兼

家にもその御暇もなかるべければおのづから日記も欠けたるものかとうたがはるふとみれば此三年の日記はもとありて失亡せしやうに思はるれどもさにてはあるまじくと因に臆説を姑記し置而已拙此一冊もと誤脱多きにや釋すれど落居ぬこと多し

めざましとおもひし所はいまは天の下のわざをしさわぐときけは心やすしむかしよりのことをはいかゞはせんたへかたくともわかすくせのをこたりにこそあゝめれなゝど心をちゞにおもひつゝありふるほとに小納言のとしへてよつのしなになりぬれは殿上もおりてつかさめしにいとねぢけたるものに大輔なゝどいはれぬれは世中をいとうとましげにてこゝかしこかよふより外のありきなゝどもなければいとのどかにて二三日なゝどとあり

右天の下のわざをしさわぐときけば迄は原本にもとよりありて心やすしと云より此下文ふためみめはけにすくなくしてゞけりいみあればと云ふ迄は原本に無き所也原本にはしさわぐときけばとめづどの玉へるとつゞきたりもと脱したる文なれば其ことわりきこえぬは勿論也其中間今補書する處の若干の文字は契沖か水府の御本を得て補入られし者也系圖兼家公傳天暦十年九月少納言應和二年正月從四位下同年五月兵部大輔とあり此に合へり少納言をこゝの文に小納言とかけり昔は少小通してかきしにや古き文に間みゆ天暦十年より應和二年まで凡七年なれば年へてとはいへり從四位下に叙すれば四つの品になりぬといへり夫少納言は太政官の官職なれども必又中務省の侍從を兼て天子に親近せしが兵部大輔に轉任せし故殿上を下てとはいへり京官の除目をつかさめしと云ねぢけたる云々はあざけりたはふるゝの詞なるべし此下に心もゆかぬつかさといへるも同意たるべし

さてかの心もゆかぬつかさのかみの宮よりかくのたまへり

みたれいとのつかさひとつになりてしもくることのなとたえにたるらん　宮

御かへり

たゆといへはいとぞかなしき君によりおなしつかさにくるかひもなく　女君

又たちかへり

夏ひきのいとことわりやふためみめよりあひくまん
ほとのふるかも　宮
御かへり
なくはかりありてこそあれ夏引のいとまやはなきひ
とめふために　女君
又宮より
君とわれ猶しら糸のいかにしてうきふしなくてたえ
んとぞおもふ　宮
ふためみめはけにすくなくしてゞげりいみあれはと
めつとのたまへる御かへり
よをふとてちきりおきてし中よりはいとゝゆゝしき
こともみゆらん　女君
ときこえらる
兵部大輔は兵部卿のすけの官也しかればつかさの
かみは兵部卿なり兵部卿も親王の任じたまへる官
なればつかさのかみの宮とはいへり此時の兵部卿
親王いつれの宮にや未ニ考得一且つ女君と御中らひ
の其贈答のおもむきはかり知りがたし強て不辨し
て姑かきおくのみ契沖も御本をもて補はれたれど
も其釋においては手をつけられずと見たり同しつ

かさの宮なればつかさひとつとあり來ることのな
ど絶たるといはん爲にみだれ糸をそへたり上の文
に目冷とは此段にては町にはあらで公の事を女君
のいへるやうにきこゆ補へる御本の上にも猶誤脱
ありなんもしりがたし上の文のたへがたくともと
云を補へる沖本にはかたくとてとあり愚按にそれ
にては下へよみくだしにくしこれも此書の例のも
の代りにかけるかなのんにてありしを゜てとあやま
りたるにてあるべしと思ひかつはともに直せば下
へよみ下しておほよそわけの聞ゆる故に私に直せ
し也言心は公と我とうちとけがたき交りながら年
久しく念じてもたへがたきを強てこれまで交り來
りしも畢竟前の世の宿縁の我をこたりと思てあり
ふるとなるべし夏引は催馬樂によらせられしと見
本歌は二段有その初段夏引の白らいとなゝはかり
ありさごろもにおりても着せん汝妻離れよ愚案抄
になゝはかりは七兩を云にやと云々されば此歌の
ふためみめのめも女によせたるなるべし
その比五月廿餘日ばかりより四十五日のいみたがへ
んとてあがたありきの所にわたりたるに宮たゞかき

ほへだゝる所にわたり給ひてあるにみな月ばかりかけてふりにだればふりこめられたるなるへしこなたにはあやしき所なれはもりぬるさわぎをするにかくの給へるぞいとゝ物くるほしき

あがた契の一本にありしと有ありしは前にありたるをいふの詞也源氏夕がほの卷にありつる扇などのるいなりあがたは縣の字にてゐなかをいふ此所あがたありし何れてもきこゆいつれか正なることをしらず此書多くいへるかたに先したかひぬさだめて父兄の内のすめる宿なるべし按に此宮とあるは先にいへる宮にはあらで村上帝の后にして中宮と稱す兼家公の姉妹なるべし物ぐるほしき原本に物くるおしきとおのかなは云にも不及をにかけるも非なるべし狂はしの轉にてほならではかなはず

つれ〳〵のながめのうちにそゝぐらんことのすぢこそをかしかりけれ　中宮

御かへり

いつこにもながめのそゝぐ比なれはよにふる人はのどけからじを　女君

又のたまへり

あめの下さわぐ心もおほみづにたれもこひぢにぬれざらめやは　中宮

御かへり

よとともにかつみる人のこひぢをもほすよあらじとおもひこそやれ　女君

又宮に

しかもせぬ君はぬるらんつねにすむところには又こひぢたになし　女君

さもけしからぬ御さまかなゝどいひつゝもろともにみる

按に桃園重明式部卿宮と申は朱雀帝の御弟村上帝の御兄也兼家公の父九條師輔公の女登子と申に其宮を聟取し玉ふ即時の中宮の御妹なり其御方禁中へ御物見の爲に上らせられたることありて折ふし村上帝の御覽あそばされいまだ式部卿の御存命の時からしてみそかに忍ひあひ玉ひしに其のち宮のかくれましゝを今こそとうれしく思食女御になされたくおほしめせともさすがに中宮へははからせられないしのかみになされしや此御事につきこよなき中宮の御なげきある折ふしにさし合せて女君

も公のとだえ多をなげかるゝなれば此心を以て今の女君と中宮と贈答の歌をきくべき也おの〳〵思ありて呻吟の內の雨なれば一入なげかるなりこひぢは泥土也それに戀路をよせたる也天と雨と同訓なればあめがしたといへりしかもゐぬとは中宮は暫の間女君のあたり近くおはしますわれは此所につねにすむと也こひぢだになしとは女君の身にとりて公の久しきとだえ故今はつや〳〵戀ぢとしもいはれぬほどのうき中ぞとなるべしなげきにせまりての詞也宮の御歌にことのすぢなどゝいへるも中宮も女君もなげくすぢのことならずさし合せしがをかしく思はるゝとのたはふれの詞なるべし

あまゝに例の通ひ所に物したる日れいの御文有おはせずといへど猶とのは見給ふとていれたるをみればとこ夏にこひしきことやなぐさまんきみがかきほにをるとしらさば　公

さてもかひなければまかりぬるとぞある

頭注書入云とこ夏は撫子ともいへれは道綱にたとへてもとより女君の方へ出玉へるにもや

あまゝは霖雨のしばしはれたる間也例かよひ所とはあがたありきの所と前にいへるに同父叉は兄長能にてもあるへし例の文は公よりの文也女君の家の人の女君は內にはいまさぬと云とも公の使の云は女君こゝにあらせ玉へるを殿のよく見つけ玉ひしとてしひて文を入たる也その文を女君の宿りへかへられて後に見れば（書入云以下注いかゝ本文にそのよしはみえず）「此の文は中宮の御方へ公よりおくられしをもてたがへたる文也されば公の歌にそなたの住玉へる近どなりに女のをるとしらさせ玉はゞ常にこひしきことをもいひなぐさむべきとなり

扱ふつかばかりありて見えたればこれなんさて有しとてみすればほどへにける　はびッなしとて句たゞこのころはおほせごともなきことゝきこえられさればかくの給へる

水增りうらもなぎさのころなればちどりの跡をふみやまどへる　公

ところみつれうらみたまへるわりなさみつからとあるはまことにおんなでに書たまへりをのこの手にてこそくるしけれ

女の在所をかくされてもよく見つけりと也此比は御ごともなきなんどうらみられたるわりなさみづ

からのをこたりにこそなど女のかきし文のさまなれど男の手なれば心ぐるしとなり

うらがくれみることかたき跡ならはしほひをまたんからきわざかな　公

しほにそへてからきをいへり

又宮に

うらもなくふみやる跡をわたつ海のしほのひるまは何にかはせん　公

とこそおもひつれことざまにもはたと有

又宮にとは女君への外に又中宮へも也歌の心はこなたより心のうらもなき文やりしあとさへ大海の如くくらまぎれすればよしなきと也ことさまとは文をもてたがへる事を反覆していへるなるべし

かゝるほとにはらへのほども過ぬらんたなばたはあすばかりと思ふいみもみそかばかりに成にだり日比なやましうてしはぶきなッどいたうせらるゝをもののけにやあらんかぢもこゝろみんせばきところのわりなくあつき比なるを例もものする山寺へのほる

積はなごしのはらへ也前に四十五日のいみたがへんとありかぢは加持なり原本はらへをむらいとあり蓋轉訛してかくなれるなるべし六月も過七月の月立て六日になれる也せばは狭き也原本きを脱せり山寺は例のぼる所けだし鳴瀧の邊ときこゆ

十五六日になりぬればぼになッどするほどに成にけりみればあやしきさまにになひいたゞきさま／＼にいそきつゝあつまるをもろともにみてあはれがりもわらひもす

ぼにを沖本に盆と釋せりぼんとはぬるもじをほにとかける例もとよりなり今それに從へりもろともは上より文のつゝきを案すれば公と一所にはあるまじければ兄長能なとにてもあるべし　頭注書入云になひいたゞき盆供を持参る樣也顆集に十五日ほんもたせて山寺にまうつる所　けふのためなれる蓮の葉なごろみ露おくやまに我はきにけり宣

さて心ちもことなることなくて忌も過きぬれは京に出ぬ

秋冬はかなう過ぬ

應和三年　道綱九歳

此契本に從其由前標に記

としかへりてなでふこともなし人の心のとかなるときはよろつおいらかにそありけるこのついたちより

そ殿上ゆるされてある
此れは是れ道綱卿の童殿上（ワラハテンシヤウ）を云る也系圖には安和二年童殿上とあれども系圖傳等もこと〴〵くは正と取がたし所詮此日記にいへるを正とすべしすへて童殿上の年齒定まれることあるとはきこえず此年九歳なればすでに十歳にとなれば童殿上し初られしなるべし

みそぎの日例の宮より物見られればその車にのらんとの給へり御文のはしにかゝることあり

わかとしの本んにかく
盖諸本ともにかくのことし今案に和歌の初五文字ときこゆほんにかくとあれは舊古の本磨滅なんどして久しくなりたる事しるべし其上此邊脱誤或は錯簡などもあるにや一向に手を措もの也契沖の甚好まれたる書なれとも此段なとの如く虚空裏にさまよへるかごとく手もつけられぬ處のある故にまめ〳〵しく解釋をもとげられさりしこととしられたり今只原本のかなを聊わきまへ正すのみなり

例の宮にはおはせぬなりけり町のこうぢわたりかとて參たればうへなんおはしますといひけりまづすゞりこひてかくかきていれたり

きみがこのまちのみなみにとしにおそきはるにはいまそたつねまゐれる
としを原本にとみにとありみは恐らくは之のあやまりと直しき此歌前書によれば女君の歌のやうなれとも猶うたがはしさに作者をしるさす

とてもろともにいでたまひける
そのころほひすぎてそ例の宮にわたりたまへるに參たればこそもみし庭なんおもしろかりきすゝきむら〳〵しげりていとほそやかにみえければこれほりわかたせたまはゞすこしたまはらんときこえ置てしをほどへてかはらへものするにもろともなればこれぞかの宮かしなどいひて人をいゐ參らんとするにをりなきるいのあれからなん一日とりまをすゝききこえてとさふらはん人にいへとてひきすぎぬはかなきはらへなれはほとなくかへりたるに宮よりすゝきといへはみれはながひつといふものにうるはしうほりたてゝあをきしきしにむすびつけたりみればかくそ

ほにいでばみちゆく人もまねくべきやどのすゝきを

ほるがわりなさ　中宮
いとをかしうもこの御かへりはいかゝわするゝほと
おもひやればかくてもありなんされどさき〳〵もい
かゝとそおぼえたるかし

此段もいとおぼつかなしされども文字はおほよそ
にとかる宮は又中宮なりその宮へ參りしと也もろ
ともにとあれば公と女君とともなはれ祓すとて賀
茂川原へ出られたるなりはらへは何故のはらへと
はしりがたしその宮のあたりをへてゆきてふと思
ひ出してみし薄のおもしろくおひしによりて此薄
すこしわかち玉へかしと我がかたにもうゑまほしな
ど宮へかたらひおかれしかども何くれとことに
まぎれておそなはりしと云ことを道より人して云
入られしときこゆさて祓することもいさゝけきわ
ざなれば何ばかりのほどもなくして宿へ歸りてき
けば宮よりはやく薄をうるはしく堀たてゝ長びつ
へ入ておこし玉ひしにそれに青き色紙に歌をつけ
させられたり穗にも出だにせば道行人をまねくべ
きすゝきをほるがわりなきことゝはたはふれたま
ひしなるべしその御歌のいと面白さに御返しをい
かさまにせんとあまりに案じすごしてかへりてそ
の案をも又わすれてやゝ思ひ出して御かへしをな
せりとの義にや此段はおほつかなからもおかしく
やさしき文ともいはさほし引すぎぬとは重なれば
なり

かげろふの日記解環上卷之五

水母子著

康保元ー　兼綱十歳
原本脱今所補定

春うち過て夏ごろとのいがちになるこゝちするにつとめて一日(ヒトヒ)ありてくるればまゐりなゞどするをあやしうおもふに日ぐらしのはつこゑきこえたりいとあはれにおどろかれて

あやしくもよるの行へをしらぬ哉けふ日くらしの聲はきけども　女君

といふに出かたかりけんかしかくてなでふことなければ人の心を猶(ナホ)たゆみなだりにっだり

とのいの假名普通にはとのゐと書ならはし來りぬ蓋宮殿に居るの義にとるされともその義あたらざるに似たり今賀茂氏の説に隨てとのいと直(トイ)せりまことに萬葉に侍宿とかけりその義は殿に緩(ユルブ)の義にして居の義にはあらずぬるをいとといふ即いもねずのいなり朝(アサイ)寝と云て晝(ヒル)いとはいはずひるねといふにて心得べしとのいがちはとのいする方の多きなりつとめては夙にて早朝なり其日晩景までこゝに在てくるればやがて立歸らるゝを又外にかこへる方出來やとあやしまる也易説卦傳堅多心をなかごかちと訓する例なりひぐらしはゝの蜩なり日暮に虫をそへたりいま公の行へおぼつかなし　なりなでふは何といふことなりさして何のことのあるにもなければおほつかながらも公の心を猶のどかに思ふと也なだりはなだらかのたぐひ也

月夜の比よからぬ物語してあはれなるさまのことどもかたらひてもありしころ思ひ出られてものしければかくいはる

蓋よからぬ物がたりしてとは今現在をあはれなるさまのことどもかたらひ　もありし比とは過さりし前つかたのことを今よからぬ物　するにけてふと昔をおもひ出しなりありしころをとをのかなをくはへてきくべし

くもり夜の月とわが身の行末のおほつかなさはいづれまされり　女君

なさを原本なくはとはあやまるまされりけんと云

侍せり此歌後拾遺雜一に月のおぼろなりける夜入
道攝政まうで來て物語し侍けるにたのもしげなき
ことなゞどいひ侍ければとして入たり初五文字く
もる夜のとあり上の句のとまり行末とゝあり心は
同くして今此歌の方優にきこゆるさまに私にはお
はゆる故本のごとく改めず

かへりことたはふれのやうに
をしへける月はにしへそ行さきはわれのみこそはし
るへかりけれ　公

此反歌は集にはいらず

なゞとたのもしげにみゆれどわがいへとおほしき所
はことになんあゞめればいとおもはずにのみぞよは
ありけるさいはひある人のためにはとし月みし人も
あまたの子なゞどもたりぬをかくものはかなくてお
もふ事のみしげし

我家とおほしき所とは父を云なるべし公のその方
へまめやかならぬを云るならん年月みし人は前に
女君ともしたしく贈答もありし年比の人仲正の娘
のことなるべしその腹にいはゆる三道生す又二女
生す姉女は冷泉院の女御中女は圓融帝の后いはゆ
る東三條女院なり乙女も圓融の女御也またこのご
ろはいと〳〵をさなかるべし實に後々幸福ありて
めでたかりしことなり此女君の腹には只道綱のみ
にておのづからまめ〳〵しげなきのなげきことわ
りなるべし

さいふ〳〵もめおやといふ人あるかぎりはありける
をひさしうわづらひて秋のはじめのころほひむなし
くなりぬさらにせんかたなくわびしき事のよのつね
の人にはまさりたりあまたある中にこれはおくれじ
〳〵とまどはるゝもしるくいかなるにかあらんあし
手なゞとたゞすくみにすくみてたえいるやうにすさ
いふ〳〵ものをかたらひ置なゞどすへき人は京にお
りけり山寺にてかゝる目はみればをさなき子をひき
よせてわづかにいふやうはわれはかなくてしぬるな
ゞめりかしこにきこえんやうはおのがうへをはいか
にも〳〵なしりたまひそこの御のちのことを人々の
ものせられんうへにもとふらひものし給へときこえ
よゝとていかにせんとはかりいひてかくなりぬる人
をいまはいふかひなきものになしてこれにぞみな人
はかゝりてましていかにせんよとかうはとなくがう

へは又なきまどふ人おはかりものはいはねどまだ心はあり目はみゆるほどにいたはしとおもふべき人よりきておやはひどりやはあるなぞかくはあるぞとてゆゝをせめているればのみなゞどしてみなゞどなほりもてゆく扨なほ思ふにもいきたるまじき心ちする此すぎぬる人わづらひつる日比ものなゞどもいはずたゞいふ事にてはかくものはかなくてありふるをよるひるなげきにしかはあはれいかにしたまはんすらんとしばしはいきのしたにものせられしをおもひいつるにかくまでおもあるなりける

円レ此巳下は女君の母の死去をのぶる也我たのみとすべき人母のみにあらず父をはじめとしてはらからをばのたぐひかずゝゝある中にわきて母におくれてはいきてもあられまじき程にかねゞゝ思ひしも今しられて我身さへ只すくみになりてたえ入さまになりぬとの言也をさなき子は道綱なり此御後のことゝは母の弔らうづのことを公へつたへよと也きこえよゝとてといへるはきこえよとにてたるべきを一のよのかなをそへたるにて縫かへりもくり返しいはれしさまの見ゆるかしこれにぞ皆人

はかゝりてとこれとは女君のわがことを云るなり母の死はせんかたなければ我にのみ親しき人の扱かゝれると也親は一人やはとは父の存生なればかくいへる也ゆゝは湯の字をおとらしていへるのみ

人聞つけてものしたりわれはものもおぼえねばしりもしられず人ぞあひてじかゞゝなん物じ給ひつるとかたればうちなきけがらひもいむまじきさまにありければいとびゞながるべしなゞどものしたるたちながらなんそのほとのありさまはしもいとあはれに心ざしあるやうに見えけり

人きゝつけての人は公也ものしたるを原本。みの。じ。なかたちとあり沖本には一本にものしてかたちと直せりものしてはさもあるべけれども下のかたちながらの詞おだやかならず沖本に直せしものしてのてと其下のかたちのかと二字をたるのあやまりと取てたちのかなを下の何の上につけて今本行に書しごとく直しぬ堂へあがらずして庭に立ながらねもごろにあはれましげに心ざしふかきさまに見えられたるとのことなるべし

かくてとかうもゝすることなゞどいたづく人おほく

てみなしはてつ今はいとあはれなる山寺につどひてつれ〳〵とありよるめもあはぬまゝになげきあかしつゝ山がらをみればきりぞげにふもとをこめたる京もげにたがもとへかはいでんとすらんいでなほみながらしなんとおもへどいくる人ぞいとつらきや

原本にやまつらを山川らとせり此川は即かなのつなり萬葉に川をつとよめり今は平がながきの物なれば川をつに直しぬとかうものするとは殯葬のことなり拾遺集題しらずふかやぶ川ぎりのふもとをこめてたちぬれば空にぞ秋の山はみえけるみながらは今此身ながらなりいくる人とは活延る人にて女自身を云女君の思ひのやるかたなくせめての言ばなり

かくて十よ日になりぬそうどもねぶりのひまに物がたりするをきけばこのなくなりぬる人のあらはにみゆるところなんあるさてちかくよればきえうせぬなりとほくてはみゆなりいづれの國とかやみゝらくのしまとなむいふなるなどくち〳〵かたるをきくにいとしらまほしうかなしうおほえてかくぞいはるゝ

ありとだによそにてもみむ名にしおはゝわれにきかせよみゝらくの嶋　女君

原本みゝらくを倒してみゝくらとし又嶋を山につくるは烏の落て山のみ几として殘りしなり袖中抄に曰みゝらくのわがひのもとの嶋ならばけふもみかげにあはましものを是俊頼の歌なり其詞に云尼上うせ玉ひて後みゝらくの嶋のことを思てよめるとあり今考に能因坤元儀に云肥前の國ちかの嶋此嶋にひゞらこのさきと云所には夜となれば死たる人あらはれて父子相見云々俊頼わがひのもとの嶋ならばと詠るは日本にはあらずと存賦考二萬葉集第十六二自二肥前國松浦縣美彌良久ノ埼一發船云々此國と云ことは一定也但因はひゞらこと云たれど俊頼みゝらくとよみたるはたがはず以上皆顯昭が言也頭注書入云とこそはところを誤れるなるべし宜

といふをせうどなる人きゝてそれもなく〳〵

いつことかおとにのみきくみゝらくのしまがくれにし人をたつねん　長能

せうどは兄なり系圖に理能長能兄弟につらぬされども契沖本せうとの長能と記せりまことに理能はきくこととまれ也長能におきては名高き歌人なりさ

れば今神にしたがふ
かくてあるほどにたちながらものして人にとふめれどたゞ今はなごゝろもなきけがらひの心もとなきことおぼつかなきことなゞどむつましき迄かきつゝけてあれど物おぼえざりしほとのことなれはにやおほえすさとにもいそかねど心にしまかせねはけふ皆出たつ日に成ぬ

右文の内のことなれはにやおほえすさとにもいそかねと此廿一字の假字も亦水府の御本より出て契沖の補へる所なりたちながら物してとは亦公なり人は女君にしたがへる人也人にとふめれどよりおぼつかなきことまでは公のいひおかれし詞也なごは和の字也かきつゞけてとあればついみれば文のやうなれどさにはあらず公のねもごろにいひおきてかへられける也かきは只詞にてかきくづしいへるなどの類也

こしときは久にふし給へりし人をいかでなりぬにしかやすらかにとおもひつゝわが身は汗になりつゝさりともとおもふ心そひてたのもしかりきこたみはいとやすらかにてあさましきまでくつろかにいられたるにも道すがらいみじうかなしおりてみるにも更に物おほえすかなしもろ共に出ゐつゝつくろはせて草なゞどもわづらひしよりはじめてうちすてたりければ生こりて色々に咲みだれたりわざとのことなゞともおのかとり／＼すれは我はたゞつれ／＼とながめのみしてひとむらすゝきむしのねとのみそいはるゝ

手ふれねと花はさかりになりにけりとゝめおきける露にかゝりて　女君

なとそおほゆる

車にのられたるなり來りし時は母と同車して來りしに今度はひとりくつろぎてのらるゝがかなしきと也前には母のやすらかにのられんことを思ひこたびは介抱のおもひもなくやすらかになるが中々淺ましき也二つのやすらかの詞緣易せり前は母のやすらかなり後は我身のやすらか也おりては車よりなりもろともには親族あるひははらから長能などなるべしおひこりは生凝なりわざとのことは母の追福の法事を云親族かけて長能など專とりはかり行　るなるべし古今哀傷に藤原のとしもとのあそんの中將にて住侍ける本司の身まかりて後人も

すまずなりたるに秋の夜更て物よりまうできける
ついでに見入ければもとありしせざいいとしげく
あれたりけるを見てはやくそこに侍ければ昔を思
ひやりてよみけるみはるのありすけ君がうゑし一
村すゝき虫のねのしげきのべともなりにける哉此
歌を女君の吟誦せるなり
これわれぞ殿上なゞどもせねばけがらひもひとつに
しなしがたかゞめればおのがじゝひきつぼねなゞどし
つゝあゞめるなかにわれのみぞまぎるゝことなくて
夜はねぶちのこゑきゝはじむるよりやがてなきのみ
あかさゑ四十九日の事これも欠ことなくて家にてぞ
するわがしる人おほかたのことをおこなひたゞめれ
ば人々おほくさしあひたりわが心ざしけゑ佛をはか
ゝせたる其日すぎぬれば皆おのがじゝいきあがれぬ
按に一箕あつまりてひとつに中陰をつとむれども
われこそは殿上な　どもせぬ身のたゞ一身のけが
ればかりなりつかへをする人の暇暇のけがらひと
ひとつにすべきにもあらざれば一つ家の内にて侍
引つぼねてをる。きとなるにや榮華物語若枝の巻
枇杷の皇太后宮の大喪の日のことを女房たちのい

ひしあふ詞につぼねしてさぶらひつきたる人には
つぼねながら萬を思ひいそぎたるにさとのゝこり
の人々は參て臺盤所にてはかなく屏風几帳ばかり
をひきつぼね隙もなく居たり此れにてひきつぼ
ねのさましるべしわが知る人とは公を云るなるべ
し大方のこまぐゝきことのとりはからひさめざ
るとのことなるべしおのがじゝは各それぐゝのわ
が謹退をなせるなり自然の體は非なるべし
ましてわが心ちは心ばそうなりまさりていとゞやる
かたなく人はかう心ばそげなるをおもひてありしよ
りはしげうかよふさて寺へものせしときとかく取み
だりしものどもつれぐゝなるまゝにしたゝむればあ
けくれとりつかひしものゝぐなゞども又かきたるふ
みなゞどみるにたえいる心ちぞするよはく成給ひし
時いむことうけ給ひしにある大とこのけさをひきか
けたりしまゝにやがてけがらひにしかはものゝ中よ
り今ぞみつけたるこれやりてんとまだしきにおきて
此おほんけさなゞど書はじむるより涙にくらされて
これのゑかく
原本は寺へ物せしときとのみありて其下凡二百言

ばかり闕て歌をかけり今其闕の所を契沖本に水府の御本にて補ひしをすぐさましたゝむる所右のごとし

はちす葉の玉となるらんむすふにも袖ぬれまさるけさの露かな　女君

此歌新勅撰雑歌にいれり詞書に云母の病おもくなり侍ていむことうけ侍けるにきせさせて侍ける袈裟を身まかりて後見いけてよみ侍ける第三句玉となるらんと思ふにもとあり今朝に袈裟をかけたり

とかきてやりつ又けさのぬしのこのかみもほうしにてあればいのりなどもつけてたのもしかりつるをにはかにはかなくなりぬときくにも此はらからの心ちいかならんわれもいと口をしたのみつる人のかうのみなどおもひみだるればしはしはとふらふさるへきようありて雲林院にさふらひし人なり四十九日なとはてゝかくいひやる

おもひきや雲の林にうちすてゝそらのけふりにたゝむものとは　女君

雲林院拾芥に常康親王造遍昭僧正云々うりんゐんとよむべし

などなんおのがこゝちのわびしきまゝに野にも山にもかゝりけるはかなゝがら秋冬も過しつひとつ所にはせうとひとりをばとおぼしき人そすむそれをおやのごとおもひてあれど猶むかしをこひつゝなきあかしてある所に

原本にけさのこのみもとあり沖本に少づゝの直しのたがひありかれこれ合せて今のごとくになせりさるべきようありてを原本にやうとあり様にはあらずして必用なりさらばようのかなならでは不叶ひとつ所にはとはのもじあるにてしりぬ女君の住ひの外なれど宅地の中の一の所なるべしそこにをばはらからなどすめるなりをばとおぼしきとあれば實のをばにてもなきやうにきこゆれども始終を考れば實のをばときこゆされば實のをばながら旨誠に打たのまるゝ心ゐてかくいへるにや

同二年（道綱十二歳）　原本誤作建保二年時代異大謬也建保は順德院年號也

としかへりてはるなつもすぎぬれば今ははてのこと

すとてこたひばかりはかのありし山寺にてそする
　はてのこととは一周忌をいへり
ありしことも共おもひいづるにいとゞいみじう●はれ
に悲し道命のはじゝにもうつたへに秋の山べをたつ
ね給ふにはあらざりけるまなことお給ひし所にて経
の心とかせ給はれとにこそありけれとばかりいふを
きくにもいおぼえず成てのちの事どもはおぼえずな
りぬあるべきことゞもをはりてかへるやかてぶくぬ
ぐにに゙色のものどもあふぎ迄にらへなどとする程
に
ふぢごろもながす涙の川水はきしにもまさるものに
ぞありける　女君
原本服たちとあり異本に従せしにしたがふうつた
へは藻塩草に打たへてなり偏にの心なり忠見集春
雨にふりこめしかとうつたへに山をみとりになさ
んとやみしふぢごろもは喪服也拾遺哀傷服ぬき侍
てよみ人しらずふぢ衣はらへてすつる涙川きしに
もまさる水ぞ流るゝこれと同心なり岸に着をよせ
たり
とおぼえていみじうなかるればへにもいはでやみぬ

忌日(きにち)などとはてゝ例のつれ〴〵なるにひくとはなけ
れど琴おしのごひてかきならしなどするにいみな
きほどに成にけるをあはれにはかなくてもなど
おもふ程にあなたより
今はとてひきつることのねをきけばうちかへしても
なほぞかなしき　をば君
とあるにことなることもあらねどこれを思へばいと
となきまさりて
なき人はおとづれもせでことのをゝたちし月日ぞか
へりきにける　女君
後拾遺雑一長々と詞書していれり同様にお　れ
侍て又の年のわざなど果てつれ〴〵侍ける夕ぐ
れにちりへありたる琴をおしのごひてひくとは
なけれど今は甲斐なく涙にければをり〳〵ならしけ
るをばなりける人のおひ仕けるかたよりことの
ねきけば物ぞかなしきなどいひおこせて侍ける反
しによめると絶絃伯牙がことに倣ひ今は琴あれば
琴の緒を断こととふればかくいへる也

かげろふの日記解環上巻之六

かくてあまたある中にもたのもしきものに思ふ人此夏より遠くものしぬべき事のあるをぶくはてゝとありつればこのごろいでたちなんとすこれを思ふに心ぼそしとおもふにもおろか也今はとていでたつ日わたりて見るさうずくひとくだりばかりはかなきものなゝとはかりはこひとよろひにいれていみじうさわがしうのゝしりみちたれどわれもゆく人もめも見あはせずたゞむかひゐて涙をせきかねつゝ皆人はなとねむせさせ給はぬいみじういんなりなゝとぞいふされは車にのりはてんを見むはいみじからんとおもふにいへよりとくわたりねこゝにものしたりとあれは車よせさせてのる程にゆく人はふたゐのこうちきなりとまるはたゞうすもののゝあかくちばをきたるをぬぎかへてわかれぬ九月十よ日のほとなりいへにきてもなどかくまがくしとゝがむるまでいみしうなかる ◦

案するにたのもしきものにおもふ人とは誰ならん下の文に衣をぬぎかふるわたりをよめば婦人のやうに見ゆれどもをばば君より外に婦人のしたしかるべき見えゝ故に契本に云へる長能が上野へ下られし時の事なるべしとあるにしたがへり系圖に伊勢又伊賀守なとゝありて上野は見えずされど系圖のこと信用なりがたきことども多、上野と契本にしるせし定てより所なくんばあるべからずさてものしぬべきことを原本にもろこし。。ぬと誤れるについてものへこしぬべきことと直せしが沖本これかれの内にものにぬと直せしありこれ詞ずくなにして意遠せれば今それにしたがふさうずくはさうぞく也しやうぞくの轉語なりひとくだりは一領也ひとよろひは一具なりはかなも原本にはなと誤也はかなもはかなくあれどもなりねんは念也こらへること也いんはいむ也家よりとは旅だつ人の宿所よりなり（書入に女君の家より也前にわたりて見るにト有首尾次にいにきてもとゝあり宜）女君の方より車の用意して我も來りてわかるゝなりふたゐを原本にふたい。とありはは是へのかなの轉せしにてふたへと直すべきをしかせずしてゐに直せるわけはこれは二重に非して二藍也ふたゐはふたあゐに同ゐうゐおの五音也源氏華花抄に二藍は紅花と

葉也紅もくれなゐ・調なれば也こうちきは花鳥餘情唐きぬをきざるとき唐衣のかはりにきるもの也と又日小うちきは女ならでは着せぬ也かくの如くなれば此旅立人女ともきこゆ愚案もし小は衍にて只うちぎにてありしも知るべからず容易に直しがたければ疑を殘し置ものなり杇葉胡曹抄黄杇葉赤杇葉あり衣を互にぬぎかへて各きて又あふ迄のかたみとせるならん家にきてもはいとまごひして旅立る所より女君のもとの宿にかへりきたれる也家にきてもにて何すべしなゞどを原本なくに作るは可なるごとくにして不可也さて此などは常に多くあるてにはのなゞどゝはねをよむにはことなりこゝのは何と他な世にとしがめたる詞なり平家などになじかはなゞど云詞に同なせにまが〳〵しく泣ぞと人々のとがむるまでもなきやまぬなり長能ならではかくもあるまじ

さてけふは關山はかりにもハすらんかしとおもひやりて月のいと哀なるにながめやりてゐたれはあなたにもまだおきてことひきなどしてかくいひたり

ひきとむるものとはなしにあふ坂のせきのくちめのねにそそぼつる　をば君

原本さての下にきのふの三字は分明に衍故に省きつたゞ今日にて言足なりあなたはをば君なり長能と同居してありしに今はさびしくいまだいねもせず琴ひきなんどして且歌よんで心をやれるならん掩留彈琴せかねたり拾芥抄樂器部和琴に杇目の名物ありそれを關の口と號せしなりそほづるは濡なりひたりとぬるゝなり

これもおなしおもふへき人なれはなりけり

長能がためにもをばなればなり

おもひやるあふ坂山のせきのねはきくにも袖そくちめつきぬる　女君

袖ぞ杇めと號何してことのねをきくにだにも袖くつるばかりになげかしきとなり

なゞどおもひやるに年もかへりぬ

同　三年　道綱十一歲
原本脫今補之

三月はかりこゝにわたるほとにしもくるしかりそめていとわりなうくるしと思ひまとふをいといみじう

とが宣誤　みるいふことはこゝにぞいとあらまほしきを何事もせんにいとびゞなかるべけれはかしこへものしなんつらしとなおぼしそにはかにもいくはくもあらぬ心ちなんするなんいとわりなきあはれしりぬともおほしいづべきことのなきなんいとかなしかりけるとてなくをみるにものおぼえずなりにでいみしうなかるればななき給ひそくるしさまさる世にいみしかるへきわざは心にはからぬほとにかゝるわかれせんなむありけるいかにしたまはんすらむひとりは世におはせじなさりとておのがいみのうちにしかなからしなずにありともかぎりとおもふなりありとてこちはえ參るまじおのがさかしからん時こそいかでも〳〵物し給はめとおもへばかくてしなばこれこそは見奉るべき限りなゝめれなどふしながらいみしうかたらひてなくこれかれある人々よびよせつゝこゝにはいかにおもひきこえたりとかみるかくて死なば又たいめせでやみなんとおもふこそいみしけれといへはみななきぬ

此以下は女君すでに母におくれて今はおやともたのめるをば君のわづらひて山寺へうつれるさまを述らるゝにわたるほどにしもを原本にしてとあるは例のかなのてに變したるなりこゝにとは山寺をさすいふことは以下をば君の詞なりこゝにぞいとあらまほしきとのこゝは女君の宿りをさすそのまゝこなたにをりたけれども齋するに便なければ山寺へうつるとなり何事もとはわづらひ故僧をたのみて齋するを云あはれしりぬともを原本にはあはれしらぬともとあれとそれにては下へつゞけてきこえぬことなれば直しぬ物おぼえずなりにてのには休字なりなりんでとよむがよみくせなりいみじかるべきとはいつ身の果ぬべきは心にもはかられぬわざなり又あふべきもしられぬ身なれば今遺言をしおくべしと也下の云々を述んためにかくいへるなり原本にひゝとりとあるは一字をあましたるのみにして一人なり女君の一人里におはせんことをうしろめたきの心あるべしさりとてはさやうに心にはおもへどもなりいみはいみゐなりしらは白痴にしてしれものなどいふ心わづらひによりて心の亂てわけなきさまにもなりなんしからばいまだ死なずにをらんとも今を限りと思ふなりた

とへ在ってもはやこなたへ心得かへるまゝ己が
まだすこしも本心のある内にいかなりとも心のお
ちつくやうに世話めされよとの云分なるべし且此
女君の兼家公の中らひをさば君に心あつかひあ
りしやうの状にきこゆ上にも一人は得おはせじと
いへりまけじ心をやめて公をひたすらに打たのま
れんこそよからめの心もちをいへるなるべし又家
内の人々をよびよせて告らるゝもこれ又女君のた
めなるべしこゝにはとは女げを指ならん恩ひきこ
えたりとかみるとはをば君の女君のことを深切に
いひおきしことゞも皆々をよくきかれたらんやいぶ
かしとの文段と見ゆるなり

みづからはまして物だにいはれずたゞなきにのみな
くかゝるほどに心ちいとおもくなりまさりて車さし
よせてのらんとてかきおこされて人にかゝりてもの
すうちみおこせてつく／＼うちまもりていといみし
とおもひたりとまるは更にもいはず此せうとなる人
なんなにかかくまが／＼しさらになでふことかおは
しまさんはや率りなんとてやかてのりてかゝへても
のしぬ

車に本くるとのみまゝのかなを脱すみおこせて原本
みをせてとこの字を又脱せりまもりてとはあから
めもせずして目を見す意たるなりとまるは女君の
自らいふなりせうとは長能とおもへど上にいへる
遠所へ旅立る人を一説によりて長能とせばこゝの
せうどは今一人の兄理能にあつるなりかゝへては
抱也原本かを一つ脱す今又契本にしたがふて加へ
ぬ

おもひやる心ちいふかたなし日にふたゝびみたび文
をやる人にくしとおもふ人もあらんとおもへどもい
かゞはせんかへりことはかじこなるおとなしき人し
てかゝせてありみづからきこえぬがわりなき事との
みなんきこえ給へなゝとぞある

人にくしとはをばの方へのみかほどまで細々音信
せるを家人の内或はそねましく思はん人もあらん
ずらめと思へどもやむべきやうなしとなりおとな
しき八原本にしの一字を脱す自らきこえぬとはせ
めて人して返事をかゝせてやる返事の旨を記きゝ
とゞけられんことをねがふぞとなり書入云なば此の白
のくるしさ代筆にてやる人とのわりなさなり筆にかくべきか猶
よく／＼いひやるべしと文面にあるとも宜

ありしよりもいたうわづらひまさるときけばいひしごとみつからみるべうもあらずいかにせんなゞどおもひなげきて十よ日にもなりぬと經すほうなゞとしていさゝかをこたりたるやうなればあのごとみゝからかへりごとす

いひしごととは云し如也上に又もあふまじといはれたる如く又あふべくもあらねばなり書入云みつからきこえぬかわりなきことゝあるこれ也されば次におこたりたるやうなればあのことゝ云々とはいへるなどきやうは讀經すほうは修法也原本に忩の字をゆふの二字に訛れりあのごとくは案の如也

いとあやしうをこたるともなくて日をふるにいとまどはれしことはなければにやあらんおぼつかなきことなゞとひと巻にこまぐ＼とかきてありものおほえにだれはあらはになゞともあるへうもあらぬをよのまにわたれかくてのみ日をふればなゞとあるを人はいかゞはおもふべきなゞど思へどわれも又いとおほつかなきにたちかへり同じことのみあるをいかゞはせんとて事を給へといひたればさしはなれたるらうのかたにいとよう取なししつらひてはしにまちふしたりけり

原本ひとまにこまぐ＼とかきてあり云々愚按にひとまの詞は人間にて它ゝの見ぬ間なりされど女房の心にをばの意を察していはんもさもあらんなれどおだやかならず是ひとまきなりしにきの字を脱してひとまになりたると臆斷して姑一まきに決せりものおぼへにだれはより下は文の中の言なり顯證には人のみるめもあれば夜の間にまゐられよとなりさらば迎へに車を玉へのりて夜に入てひそかに宿をまかんでん此下に詞のたらはぬやうなれば脫言せしやと思ふされども略してきゝても言は通るなり

火とほしたるに火けたせておりたれはいとくらうていらんかたもしらねばあやしこゝにぞあるとて手を取てみちびくなどかうひさしうはありつるな宣な宇行かとて手をとりて日ころありつるやうくづ〳〵かたらひてとばかりあるに火とほしつけよいとくらしさらにうしろめたくは猶うしとてびやうぶのうしろにほのかにとほしたり

火とぼし原本火ともし契本ほに直す下文も亦同けだしとほしと書てよむにはともしといふやうに半

濁の約束なりけたせてはけさせてなり横通なり原本にいけたせとあるはいひの轉訛也とばかりはときばかりにてすこしの心なりおりたれば丶車より下たるなりなど（寛三本也）かうは何とかくのごとくはなりうしろめたくは後が見たきの心にて心もとなくしてうたがふ意につかへる詞なり

まだいをなともかくはずこよひなんおはせばもろ共にとてあるいづらなゞどいひてものまゐらせたりすこしくひなゞどして ぜじたちありければ夜うちふけてごしんにとてものしたれば今はうちやすみたまへ日比よりはすこしやすまりたりといへは大徳しかおはしますなりとてたちぬ

いもゐの限ゝすぐれば精進の後魚を食ことのあるなりいづらとはそれならば早くまゐらせられよとすゝむるの詞也ごしんは護身と書加持等のことなりぜじは禪師也禪師號なんどの禪師にてはなしたゞ僧を稱美する詞大德も又同だいとこよむなり

さて夜はあけぬるを人なゞとめせといへば何かまだいとくらからんしばしとてある程にあかうなればをのこどもをよびてしとみあげさせてみつみ給へ草ともいかかもえたるとてみ出したるに

しとみは蔀也もえを原本にうゑに作れり上に三月ばかりといひ下文に四月とあれば萠出るころほひなれば必もえなり

いとはしたなきほどになりぬなゞどいそげば何か今はかゆなと參りてとあるほとにひるになりぬ

はしたなき原本いとかたりなるほとにとありつや〳〵よみとかれず利は本りの轉じたるにてそのりはわより轉ぜしや又直にわが利になりしにやとかく泝て案ぜは古言にかたわともかたはともゝ詞あればそれらにありしにやと思へどもこゝの文段にてそれらの語もとりあはずなんくりかへし思ふに原文の轉と思へどもこゝの文段にてそれらの語もとりあはずなんくりかへしぬ思ふに原文の轉さま〴〵にして上下おき所かへたるもあり猶其間に脫も又ある事さま〴〵なれば例の夜の川はなるゝ比にはやくより草子物語に儘云習はせしはしたなきのかなに治定しぬ

さていさもろともにかへりなんまたばものしかるへしなゞとあればかく參りきたるをだに人いかにとお

もふに御むかへなりけるとみはいとうたて物しから
んといへはさらばそのこども車よせよとてよせたれ
はのる所迄もかつ〳〵あゆみ出たれはいとあはれと
みる〳〵いつか御ありきはなどいふほどに涙うき
にけりいとしもいふとなければあすあさてのほどば
かりには参なんとていとさう〴〵しげなるけしきな
りすこしひき出て牛かくるほとにみとほせばありつ
る所にかへりてみおこせてつく〳〵とあるをみつゝ
ひきいつれば心にもあらでかへりみのみぞせらるゝ
かしさてひるつかた文有（つゞり）何くれと書て
かぎりかとおもひつゝみしほとよりもなか〳〵なる
はわびしかりけり　をば君頭注云二の句作見（ツヽミシ）の意也参ツヽミしの意には非ず宜○
もろとものとも原本例のごとくとんとありもろと
もにかへりなんまたは物しかるべしとはをば君の
詞なりかく此所に参来（シヨ）るをだに家の人々のわれを
いかんと思はんに今一所にかへりなばわが来れる
はをば君むかへにてありしと人々のいはゞいとう
たてからんと女君の詞也をば君のさらばひとりか
へられよとて車よせたれば女君ののれる處までも
をば君のおくりによは〳〵とあゆみ出られたるを

見る〳〵いつかはやまひなほりてよくありかせら
れんやと云て泪をながせるなり何ごとを又云こと
もなければあすあさてには又参こんと云て互に心
さびしくさてをば君は山寺のかたにかへられ車は
やゝひき出て牛をかけてのらんとする時にいたり
てをば君の方をみたれば車をひき出てもひたもの
とかへりみせらるゝと也歌はをば君の文の中の歌
なりまへにこれがあふかぎりと思て山寺へこしと
きよりもふたゝび相あふて中々に心わびしとなり
かへりこと猶いとくるしけにおはしたりつれは今も
いとおほつかなくなんなか〳〵に
われもまたのとけきとこのうらならてかへるなみち
はあやしかりけり　女君
案するになか〳〵の詞よりかけてきくべしをば君
の歌の中々に應ぜるなり床の浦は未ㇾ勘名所也ま
たゞ原本　○さそに作はあやまれり浪ちはとこの浦
の縁語のみ
さて猶苦しけなれとねんして二三日の程にみえたり
女君まだ心よからねどこらへてなりさて案に念じ
ての下うたがふ一行ばかりも委の脱せしや下文

は兼家公とのなからひのことにて上の文段につゞかねばなり

やう〳〵例のやうになりもてゆけば例のほとにかよふ

此二の例の字上は身のわづらひもなほりてやうやう常にかへれるをいふ下は公の例のごとくたまさかにかよへるをことわりたり

此比は四月句まつり見に出たればかのところにも出たりけりさなゝめりとみてむかひにたちぬまつほとのさう〳〵しければたちばなのみなゝとあるにあふひをかけて

あふ日とかきけともよそにたち花の　女君

といひやるやゝひさしうありて

君がつらさをけふこそはみれ　公

とぞあるにくかるべきものにてはとしへぬるをなめげにとのみいひたらんといふ人も有かへりてさありしなゝどかたればくひつぶしつべき心ちこそすれとやいはざりしとていとをかしとおもひけり

祭は賀茂祭なりたゞまつりとのみいふかもに限るなりかの所は公をさせり公と見定めてその向に車を立たる也さう〳〵しきは心に物さびしき詞なり本の句は女君なり逢日を葵によせたりよそにたちといひかけたり末の句は公也君がつらさといはれしをなめげといへるなり無禮と書くひつぶしつべき云々はたはぶれ言なり

ことしはせちきこしめすべしとていみじうさわぐいかでみむとおもふにところぞなきみむとおもはゞとあるをきゝはさめてすぐろくうたんといへばよかなり物見つくのひにとてめうちぬよろこびてまかるべきさまのことゞもしつ白き根のさしつまりたるに硯ひきよせて手ならひに

あやめぐさおひにしかずをかぞへつゝひくやさつきのせちにまたると　女君

とてさしやりたればうちわらひて

かくれぬにおふるかずをはたれかしるあやめしらずもまたるなるかな　公

といひてみせんの心ありければ宮の御さじきのひとつゞきにてふたまありけるをわけてめてたうしつらひて見せつ

せちは五月五日節會也公事根源日内辨なゝども四

節に同と云々つくのひは償也よき日打出して雙
にかちたるなり女君の歌切にまたるゝとかけたり
きゝはさめてを契木の一にはさみてと直せりされ
ど原のごとくはさめての方きゝよきに似たりかく
れぬは隱沼なり愚按に此一段頗うたがはしきこと
あり右に五月の節のことありてこゝに宮のさじき
を云りあやめの節にさじき不用に似たり又宮は公
のはらからなり外の宮ともきこえず中宮は此時已
に崩ぜし後也或は宮の字它の字にやもしくは第一
册應和三年の下にみそぎの日例の宮より物見られ
ばその車にのらんとの玉へりとある處にあるべき
が錯簡してこゝに入たるにやされども又彼と此と
引合てもいづれの方にも文言つゞきもせぬ上又水
府御本とても今の通りなれば疑ながら其まゝにさ
しおくと云

かげろふの日記解環上卷之七

かくて人にくからぬさま、てとをといひてひとつふたつのとしはあまりにけりされどあけくれ世中の人のやうならぬをなげきつゝつきせすすぐすなりけりそれもことわり身のあるやうはよるとても人の見えをこたるときは人ずくなに心ほそう今はひとりをたのむたのもし人は此十よ年のほどあがたありきにのみあるたまさかに京なるほども四五條のほとなりければわれは左近のうまばをかたきしにしたればいとはるか也かゝる所もとりつくろひかゝづる人もなければいとあしうのみなりゆくこれをつれなういでいりするはことに心ぼそうおもふらんなゞとふかうおもひよらぬなめりなどちくさにおもひみだるゝことしけしといふはなにゝか此あれたるやとのよもぎよりもしげげなりとおもひながむるに八日ばかりに成にけり心のどかにくらす日はかなきことといひ〳〵のはてにわれも人もあしういひなりてうちえんじていつるになりぬはしのかたにあゆみいてゝをさなき人をよびいでゝわれは今はこじとすなゞといひおきて

出にける
とをといひてひとつふたつのとしはあまりにけり
とは道綱今年十二歳なるを云たのもし人は父を云
り今はひとりをたのむとはすでに母うへはてられ
たれば也あがたありきは受領となりてかなたこな
たの國へ下られしを云也すでに陸奥の任ははてゝ
又餘國へ任ぜられしなるへしされは京師にとまら
るゝことはいとすくなかるべきなり左近馬場は河
海抄に一條西洞院なりかたきしにしてとは父の在
京の時の居所は四五條邊とあれは一條わたりより
は地形はるかにひきく上は地ゝおのつから高け
ればその心ばえにて片きしにしてといへるにも有
なれ拾遺に世中をかくいひ〳〵てはて〳〵はいか
にやいかにならんとすらんの歌の心を取て今詞を
つゞられしなるべしわれもは女君也人もは公也え
んするは怨の聲也源氏に多しをさなき人はもとよ
り道綱なりかゝづるはかゝづらふ也をとめの巻に
又々あまたかゝづらひ玉へる人々おほかり云々か
ゝづるはかゝづらふの約詞なり
すなはちはひいりておとろ〳〵しうなくこはなぞな

ぞといへどいらへもせで句ろなうさやうにそあらん
とおしはからるれど人のきかむもうたて物ぐるほし
ければとひさしてとかうこしらへてあるに五六日は
かりになりぬるにおともせす例ならぬほとになりぬ
れにあなものくるほしたはふれにとこそわれは思ひ
しかはかなき中なれはかくてやむやうもありなんか
しとおもへは心ぼそうてながむるほとに出し日つか
ひしゆするつきの水はさながらありけりうへにちり
ゐてありかくまてとあさましう
ろなうは勿論なりうたては菅家萬葉に別様の字を
用玉へりとひさしては問不レ竟也こしらへは新撰
字鏡に誂は人之仁乏の二反也引也誘也古志良不此
詞源氏にもまゝある詞俗語にたふすなど云やうの
言也又日本紀に慰の字をこしまへるともよませり
ゆするつきのつのかなを原本脱せり泔器とかけり
たえぬるかかけたにあらはとふへきをかたみの水は
みくさゐにけり　女君
新古今戀四入道攝政久しうまうでこざりける比鬢
かきて出けるゆするつきの水いれながら侍けるを
見てとして入りかけだにみえばとありきゝよきさ

まに直されたるなるべしよめるもとは此れなるべし

なンどおもひし日しもみえたり例のごとにてやみにけりかやうにむねつぶらはしきをりのみあるが世にこゝろゆるひなきなんわびしかりける

などは歌よりすぐになんどゝよむべし按におもひし日しもの詞湊巧（テクハス）の意ありゆるひのひみといへるさまにとなふ

九月（ナガツキ）になりて世の中をかしからんものへまうでせばや（頭注書入云ものへもじいかゞ宜）かうものはかなき身のうへも申さむなンどさだめていとしのび（頭注書入云いとしのび此下に必でもじ有べし宜）ある所にものしたりひとはさみのみてぐらにかう書つけたりけりまづしものみやしろに

いちしるき山口ならはこゝなからかみのけしきをみせよとぞおもふ　女君

中のに

いなり山おほくのとしをこえにけりいのるしるしのすぎをたのみて　同

はてのに

神がきをのぼりくだりはわぶれどもまださかゆかぬ心ちこそすれ　同

世中をかしからんにて句すべし季秋（キシウ）なれば野山の景色のおもしろければと也ものはかなき身是れ此君の恒言（ツネノコト）也さだめても此記に多き詞也一挿（ヒトミテクラ）の幣也稲荷社もとは山上にありて三所也後今の地にうつされてより五社となれり蓋山口といへるは宮殿をたつる材木を取り杣人の山へ入そむる時山口祭と云ことあり今は道綱の昇進を祈（イノ）れる心ならん源氏松風の巻に明石の姫君のことを源ののたまへる詞にもかくこそはすぐれたる人の山口はしるかりければうちゑみたるかほの何心なきがあいぎやうづきにほひたるをいみじうらうたしとおぼすと云々けだし下の社ゆゑに山口といひこゝながら上のと神の字にふくませてかつ昇進のことをかねだるならんしるしのすぎ稲荷に杉をよめる常のこと也はての歌のぼりくだりといふより榮に坂をかねたり神がきを原本神くみと其誤分明

又同じつごもりにある所に同じやうにて詣（マウ）でけりふたはさみづゝしも（下）のに

かみやせくしもにやみくづつもるらん思ふこゝろの

ゆかぬみたらし　女君
みに身をそへたり

又

次の歌にまたとあれば此一字必あるべし故補レ之

さか木ばのときはかきはにゆふしでやかたくなゝな
る（頭注書入云四の句いかゞ宜）めな見せそ神　同

又かみのに

いつしかも〳〵とぞまちわたるもりのひまよりひか
りみむまを　同

また

ゆふたすきむすぼゝれつゝなげくことたえなは神の
しるしとおもはん　同

なゞとなん神のきかぬ所にきこえごちける

又或所とは賀茂下上の社なり上やせゝを原本神や
せ九と今は神をかながきに改かみやは下にやと對
する也みたらしは御手洗なりときはかきは常磐堅
磐也かたくなを原本かたくるしと訛るいつしかも
に賀茂をそへたりもりのひまを原本たまに訛る

かげろふの日記解環上巻之八

頭注書入云この標をこゝに
擧たるはたがへり次の三月
云々の前にあるべし宜

同　四　年　（道綱十三歳　原本康保五に作康保今改）

秋はてゝふゆはついたちつごもりとてあしきもよき
もさわぐめるものなれどひとり寢のやうにてすぐし
つ

蓋秋すでにつき冬の日はことにみじかくて光陰の
いとゞしく早く過行心ちするをかくいへりついた
ちつごもりは元三と大晦となり宮もわらやもおの
がじゝ春の急ぎをいとなめども我は只ひとりねの
ごとくにさう〳〵しさを恨たる詞なるべし原本に
さわくめるものなればとゞがはになれる也

三月つごもりがたにかりのこのみゆるをこれとをづ
ゝかさぬるわざをいかてせんとてまさぐりにすゝし
のいとをながうむすびてひとつむすびてはゆひ〳〵
してひきたてたればいとようかさなりたりなほある
よりはとて一條殿の女御殿の御かたにたてまつる
うの花にそつけたる何こともなくたゞ例の御ふみ

にてはしに此とをかさなりたるはかうでもはゞべりぬべかりけりとのみきこえたる

かすしらすおもふ心にくらふれはとをかさぬるもものとやはみる　女君

とあれば御かへり

おもふことしらてはかひやあらざらんかへす〳〵もかすをこそみめ　女御

それより五の宮になんたてまつれ給ふときく

かりのこもしほ草にかもの卵の事と也清少納言うつくしき物に入たり原本誤て九條殿として傍に貞観としるせり榮華物語を考るに九條殿の女御は中宮にたゝせ玉ひて應和四年にすでにかくれさせ玉へり是は一條伊尹公の女の女御也傍に書しは可なりかずしらずの歌の下句原本にとをりと有もとはかにてありしをかの字を長く引すてしを見誤てりになれる也五の宮はすなはち圓融院の御事なり村上帝の第五の皇子なればかくいへり

五月にもなりぬ十餘日にうちの御くすりのこと有てのゝしるほともなくて廿餘日のほとにかくれさせ給ひぬ東宮すなはちかはりゐさせ給へば春宮のすけといひつる人はくらうどのとうなゞといひてのゝしればかなしひは大かたのことにておほんよろこひといふことのみきこゆあひこたへなゞとしてすこし人の心ちすれどわたくしの心は猶同じごとあれどひきかへたるやうにさわがしくなゞどあり

村上帝御位にて崩御即東宮冷泉院御位につき玉ふ春宮亮を原本に東宮とかけるは疎也すけは坊官なれば春の字を用へき也此春宮亮爲ニ藏人頭ニ者即兼家公なり故に其慶を申の對をなすなり

みさゝきや何やときくに時めき給へる人々いかにとおもひやりきこゆるにあはれ也やう〳〵日比になりて貞觀殿の御方にいかになゞときこえけるついでに

世中をはかなきものとみさゞきのうもるゝ山になげくらんはや　女君

御かへりことかなしげにて

おくれじとうきみさゞきに思ひいる心はしでの山にやあるらん　女御

貞觀殿の御方とは即一條伊尹公の御女にて冷泉院の女御になり玉ひて花山院を産まゐらせ玉ふ貞觀殿ぞやうぐわでんとよみ習はせり原本世中をの歌

を低てかゝずして本行に上の詞よりめひとつにかけり今例を以詞書に歌ははなちて低下してかけり原本なげく覧やうとせり下のうのかなはろの轉にやと思てやぞと直さんも不穏又やはにしては歌の心ゆきがたし故にやうは頗例にて且うははにてはやと治定せりはやは至て歎息の詞にていと古よりあまたいへる詞也これにて叶ふべし御返しのうき

みさゝきはうき身の柰何也

御四十九日はてゝ七月になりぬうへに侯ひし兵衛佐まだとしもわかくおもふことありげにもなきにおやをもめをもうちすてゝ山にはひのほりてほうしに成にけりあないみじとのゝしりあはれといふ程にめは又あまになりぬときくさき〳〵なゝともふみかよはしなゝどする中にていとあはれに淺ましきことをとふらふ

おく山の思ひやりだにかなしきに又おまぐものかゝるなになり　女君

手はさながらかへりことしたり

山ふかく入にし人をたづぬれど猶あまぐものよそにこそなれ　兵衛佐室

とあるもいとかなし

四十九日なゝなぬかとよむ此兵衛佐いぶかしめは又あまにのめを原本女に作るは誤則上文に親をもめをもとありめは妻を云なとかけばむすめとまぎらはしあま雲に尼をこめたりかへしも同いせ物語にあまぐものよそにのみしてふることはの詞を取用られたり手はさながらといへるはすがたは尼にかはれども文がきの手は前々文かよはしせしときの筆にかはらずとなるべしかへしの意は出家して山ふかく入ぬる夫をたづぬれど我をもすてゝ出し人なれば相そはずして它所に尼となりてすめるがかなしとなり此一件補遺に詳にす引合見て可也

かゝる世に中將にや三位にやなどよろこひしきりたる人はところ〳〵なるいとさわかしければあしきを句ちかうさりぬべき所いできたりとてわたしてのりものなきほどにはひわたるほどなれば人はおもふやうなりとおもふべかゝめり霜月なかのほどなりしはすつごもりがたに貞觀殿の御かた此にしなるかたにまかゝて給へりつごもりの日になりてなまといふものふみるをまたひるよりこほ〳〵はた〳〵とするぞ

ひとりゑみせられてあるほどにあけぬれはひるつかたまらうとの御かたをとこなんと句たちまじらねばのどけしわれものしるをばとなりにきゝてまたるゝものはなどうちわらひてあるほどに
三位にやを原本にみゐとあやまる且みゐにや〳〵と重ねたり沖本に衍とす故にはぶきぬしきりたるは頻に拜賀をなせる也それを惡とはかまびすきをいとひて近所へ幸にさりぬべき處出來て家內の人をそれへわたすちかければのりものも不用となり源氏にすまよりあかしの浦へはひわたる程といへるが如にして人々も思ふさま也原本にしも月なとのとあるは誤れる也その比は霜月中の程也となり扨そのしはすつごもりもつごもりがたとあればゆゐき詞なれど下文にあけぬればとあればつごもりの日をさす也もし小盞の晦にでもありしにやまらうとは卽女御の御方也男宮は卽花山院也榮華物語に伊尹一條に住玉へば一條殿ときこゆるその女御世中の大事いそぎどもはてゝすこしのどかに成てみこうみ奉玉へりとあり今こゝにいへるはその折なりなまと云ものの云々とは降誕なれば御いはひに膾なとをまうくる由なるべしごほ〳〵はた〳〵とはさわぎの聲也ごをと云ごとく讀べし拾遺素性法師あらたまの春たちかへるあしたよりまたるゝものは鶯の聲此歌を誦ぜられしなり

冷泉天皇 安和元年 道綱十四歲 康保五年八月改元

あるもの手まさぐりにかいぐりをあみたてゝこひにして木を樵りたるをのこの形をとりませてあかき色紙のばしたはきにおしつけてそれにかきつけてあの御方にたてまつる

かたこひやくるしかるらん山がつのあふごなしとはみえぬものから　女君

ときこえたればみるのひきぼしのみじかくちぎりたるをゆひあつめて木のさきになひかへさせてほそかりつる方の足にもとのこひをも結つけてもとのよりもおほきにてかへし給へりみれば

山がつのあふごまちいでゝくらぶればこひまさりけるかたもありけり　女御

手まさぐりは手ずさみ也かいぐりは糸なりあみた

てゝは編なりこひは和名抄に毛詩の注腫足曰瘇時
種の反足の病也瘇色亦成云於賓阿志此間云古比一
言は手なぐさみにかいぐり糸をあみたてゝ瘇にな
しおき又別に蕉の形を造りたるにこひのかたせる
物をかの蕉の形に相変へたる也さてかた一方のこ
ひなくして延したる足の脛に歌をかける色帋を押
張て女御の御方へ奉られし也歌は戀の歌なり堅き
瘇を片戀によせ荷に蕉楞を逢期によす物からはも
のながら也かへしの歌も詞書にてよくきこえたり
みるは海松也ちぎりたるはちぎれたるなり細かり
つる足とは即上にいへる延したる足なりむすびを
原本にけづりとあり沖本にそのまゝなれどもおだ
やかならず案ずるに結の字けつの離なればそれよ
りあやまりぬ結日の日がりに轉じたるなりこれに
て大かたそのわけきこゆるなりかへしの歌のあふ
こを原本にあしとあり沖本に直せしにしたがふ

日たてればせくまゐりなゝとすゝめるこなたにもさや
うになゝとして十五日も例のごとして過しつ

日立ればとは元三より漸々に日たちて七日の節に
なりしといふにや節供は七種などなるべし

三月にもなりぬまらうとの御方にとおぼしかりける
ふみをもてたがへたりみれば直しもあらでちかきほ
とに參らんとおもへどわれならでとおもふ人やはゝ
べらんとてなゝどかいたりとし北見給ひなれたれは
かくもあるなゞめりとおもふになほもあらでいとち
ひさくかいつく

松山のさしこえてしもあらじよをわれによそへてさ
わくなみかな　女君

とてあの御方へもて參れとてかへしつみたまひてゝ
げればすなはち御かへりあり

みしま江の風にしたかふ浪なれやよするかたこそた
ちまさりけれ　女御

おぼしかりけるは覺しくありける也我ならでとお
もふ人とは女君を云ほこらしげ也とたはふれ言な
るべし松山は奥州の名所浪のこえなん時こそかは
りもせめといへる故事によりてよめりよそへては
浪の縁語なりみしま江の歌原本ましまえとありま
しま江未ニ聞知ニ三嶋江は攝津にあり只見ると云を
よせん爲のみなるべし

此御かた東宮の御おやのごとして候ひ給へは坐給ひ

ぬべしかうでやなゝどたび〳〵しばし〳〵との給へはよひの程に參たり時しもこそあれあなたに人のこゑすればそこなゝとの給ふにきゝもいれねばよひまどひし給ふやうにきこゆるをゑなうむつかられたまはゞやのたまへはめのとなくともとてしぶ〳〵なる者あゆみきてきこえたてばのどかならでかへりぬ又の日のくれに參り給ひぬ　頭注書入云この一段誤脱多しと見ゆ宣

東宮は圓融院也則前にいへる五の宮の御事なり兼家公系圖の傳に是歲九月一日春宮權亮本官の藏人頭也參玉ふへしとは女御の御方へ公のまうてらるゝなりそゞに沖本長恨歌の驚破(ソヨヤ)をひけり宵の間參たりは女君の女御の方へ參らるゝなり宵まどひし玉ふとは花山院なり即女御のうみ玉へるみこなりゑなうは勿論なりむつかられはちごなきなりの玉へるは女御の仰なりしぶ〳〵はまめならぬやうの詞なりしぶときなどにかよへるなり乳母なくともといふてあゆみきてとあるはかくいふは即めのとにや又さしつぎのめのとのたぐひにや女御へ折はへて女君のまゐで玉へるにさしあはせて皇子のむつかり玉ふ故心のどかにも御物がたりもなくてかへり玉ひしなり又の日は其翌日女御の參内をいふならん

五月(サツキ)にみかどの御服ぬぎにまかゝて給ふにさきのごとこなたになゝとあるをゆめにものしくみえしなゝといひてあなたにまかゝてたまへり

みかどは村上帝なり内裏よりさきの如く又女君のちかくへわくらんと女御の思食たるなるや御夢見なゝどのあしくてあなたにまかんで玉へりあなたとはいづちにやしれさらまし或は此次下夢合の歌ともありそのはての歌によれば川なゝどをへだてし所にや

扨しは〳〵夢のさとしありければちがふるわさもかなとて七月(フヅキ)のいとあかきにかくの給へり

さとしは夢兆なりちがふるわざは御夢の物しきを轉しかふるのことなるべし

みし夢をちがへわびぬる秋のよはねかたきものとおもひしりぬる　女御

原本秋のよにとせるは誤れり

御かへり

さもこそはちがふる夢はかたからめあはでほどふる

身さへうきかな　女君
夢合に人に逢ことを引かけて云り
たちかへり
あふとみしゆめになか〳〵くらされてなごりこひし
くさめぬなりけり　女御
との給へれは又
ことたゆるうつゝや何そ中々に夢はかよひちありと
いふものを　女君
又ことたゆるはなにごとぞあなまか〳〵しとて
川とみてゆかぬ心をなかむれはいとゞゆゝしくいひ
やはつへき　女御
とある御かへり
わたらねはをちかた人になれる身をこゝろはかりは
ふちせやはわく　女君
となんよびと夜いひける
夜一夜なりよもすがらに意同ふちせは淵瀬わくは
分別也

かげろふの日記解環上巻之九

かくてとし比の願あるをいかではつせにとおもひた
つをたゝん月にとおもふをさすがに心にしまかせね
はからうじて九月におもひたつたゝむ月にかはだい
じやうゑの御けいこれより女御代出たゝるへしこれ
すぐしてもろともにやはとあれどわがかたのことに
しあらねば忍ひておもひたちて日あしけれはかどで
ばかり法性寺の邊にして暁より出たちて午の時はか
りにうぢのゐんにいたりつゝみやれば木の間より水
のおもてつや〳〵かにていとあはれなる心ちす

此より此冊を終るに至まで一事の文詞なり記中初
瀬まうで二度ありこれは初のたび也大嘗會とは天
子御即位の後あらたに悠紀主基の宮を立させられ
天神地祇を祭らせ玉ふ御一代一度の大祀なりごけ
いは御禊なりごけいとゝなふ賀茂川にて御祓ある
ことなり女御代とは其時のみの職名にて其人をえ
らはせらるといへり。原本には御けいのけをきに誤
女御御代と御の字を衍したりこれよりとは公の方
より女御代をさしたてられしなりこれらの大事過

て公も共にまうでんとのことなり法性寺原本法正寺のへにしてと誤たり法性寺捨芥抄九條河原云々今の一の橋の邊といへり花鳥餘情に貞信公建立尊意座主(ザス)は師檀たれば法性房の名をとれり云々宇治院はこの時は大納言師氏の領地なり其後御堂殿の手に入宇治の關白へ傳て後寺となり今の平等院其地なり水の面つやゝかとはつやは艶にてうるはしきさまなり

しのびやかにとおもひて人あまたもなうて出たちしたるもわが心のをこたりにはあれどわれならぬ人なりせはいかにのゝしりてとおほゆ

をこたりは怠慢なり是公のともなはるべきをまたざる故かく人ずくなにて詣らるよしなり我ならぬ人ならは斟酌なく花々として多く人をも連ぬべきならんといへるならんのゝしるは罵詈の字をよませたれど必しものりのゝしるにはあらで多は只かまびすきことに用ゆこゝのゝしりなどもかくきくべし

車さしまはしてまくなゝとひきてしりなる人ばかりをおろして川邊にむかへてすだれまきあげてみればあじろしもにしわたしたりゆきかふ舟どもあまたみざりしことなれはすべてあはれにをかし

まくは幕なりしりなる人は道綱同車なるべしむかへては對するなりあじろは網代(アミ)なり氷魚(ヒヲ)をとらん料にまうけたるものなり女君のよぎらるにより俄にわざとまうけたるにてもあるまじもとよりのあじろなるへし都にては池水に小舟などをうかべしのみをみなれて今あまたの船の行かふが珍らしきなり

しりのかたをみれはきこりしたるげすともあやしげなゝゆやなしやな(柚ガ宜)ゝどをなつかしげにもたりてくひなゝとするもあはれにみゆわりごなゝとものしてふねに車かきすゑていそぎもていけはにへのゝいけいづみ川なゝどいひつゝ鳥どもゐたりなゝとしたるも心にしみてあはれにをかしうおぼゆか(書入云かくの誤りなるべし宣)しのびやかなれはよろづにつけてなみだもろくおぼゆそのいづみ川もわたりてはし寺といふ所にとゞまりぬ

しりはしりへなりきこりを原本にきこうじたるとあり沖本の一本に來困(キコウジ)と注せり頗おだしからず故それにはしたがはず樵したるに直せりげすは下衆

也原本におしげなるとあれとも分明にあやしげなるのやのかなの誤しなりげすともを原本にけすとてとあるは例のかなのんかてに轉したるにて本はともなり原本にわりごの子がかなの子に變せりものしてはわりごのものを食ふなりにへのは賢野とかく山城の名所なり侍中群要にあぐる日次御にへの其一所なり故にその名を得たるなり枕草子ににへのいけ初せに參りしに水鳥のひまなくたちさわきしがいとをかしく見えし也と又中務内侍日記にもにへのゝ池のはたをすぐれば鳥多おり居てといへりいづみ川はもと挑川の轉なり日本紀崇神の卷に見則今の木津川にして同く山城の名所なりそのとは上にいへるをうくればなり橋寺は三代實錄に貞觀十八年三月山城の國泉橋寺申す牒に曰故僧正行基五畿境内に建立四十九院泉橋寺は是其一なりかいしのびやかとはかいは輕き詞也ついといはんか如し公にともなはずしてひとりなれは萬にともしきにつけてかくは口ずさめるならん

酉の時はかりにおりてやすみたれははたごどころとおほしきかたよりきりおほねものしるしてあへしらひてまづいだしたりたびだちたるわざどもをしたりしこそわすれがたうをかしかりしか明れは川わたりていくにしばがきしわたしてある家どもをみるにいづれならんかものものがたりのいへなゝとおもひいづるにいとぞあはれなるけふも寺めく所にとまりて

又の日はつばいちといふ所にとまる

はたごどころとは今云はたごやなるべし原本に誤てはたにとしろとのすきりおほねは切れる大根にやものしるは蓋猶汁ものといはんか如くなるへし原本によもの物語とあり契沖本によをかとよんてかもの物語とせりさだめてさいへる物語あるにこそいかなるものにやきかまほしつば市は日本紀敏達の卷に海柘榴市とかけり枕草子につば市はやまとにあまたある中に長谷寺にまうづる人の必そこにとゞまりければ觀音の御緣あるにやと心ことなり源氏にも玉葛の君の長谷にまうで玉ふにも椿市といふ所に四日といふ巳の時はかりにいきつき玉へるとあり大むね椿市は初瀬の近所にて灯明のことなと沙汰する所と知られたり

又の日霜のいとしろきにまうでもしかへりもするな

ンめりはぎ（書入云置巾ナルベシ宣）をぬのゝはしゝてひきめぐらしたる者どもありきちがひさわぐめりしとみさしあげたる所にやどりてゆわかしなンとする程にみればさまぐゝなる人のいきちがふおのがじゝはおもふことこそあらめとみゆ

原本ゆはしとあるを沖本にゆわかしと直せり今それに從ふ女君の思たえせぬ身ゆゑにおもふことこそはあらめとさまぐゝの物につきて人の上までもいへるなり

とばかりあれば文さゝげてくるものありそこにとまりて御ふみといふめりみればきのふけふのほどなにごとかいとおぼつかなくなん人ずくなにてものしにしいかゞいひしやうにみよさふらはんずるかかへるべからん日きゝて迎へにだにとぞあるかへりことにはつばいちといふ所まではたひらかになんかゝるついでにこれよりもふかくと思へばかへらん日をえこそきこえさだめねと書つこゝにて猶三日さふらひ給ふこといとびンなしなンどさだむるをつかひきゝて歸りぬれば

みればゝ公の文を披てよむ也みよは三ヶ夜なりかへるへからん日をとをのかなを入てみるへし迎にだにとはせめてむかへにだになりいとびんなしとときの女房たちの女君を異見するならん公の使が京へかへる日をきゝさだめてかへりしなり

それよりたちていきもていけるになでふなきみちも山ふかきこゝちすればいとあはれに水のこゑも例にすぎ霧はさしもたちわたり木のはゝ色々にみえたり水は石がちなる中よりわきかへりゆくゆふ日のさしたるさまなンどをみるに涙もとゞまらず道はことにをかしうもあらざりつもみぢもまだし花もみなうせにンだりかれたる薄ばかりぞみえつるこゝはいと心殊にみゆればすだれまきあげてしたすだれおしはさみてみれば着なやしたるものゝ色にもあらぬやうに見ゆうす色なるうすものゝ裳をひきかくればこしなンどちりてこがれたるくちばにあひたる心ちもいとをかしうおほゆ

原本に水のこゑもれいにすきもと有さしてたちいたり沖本にれいにのにをのかと疑ひて杉さしてたちわたりと直してあり初せ川に二本の杉をよめるをおもひて釋せられし尤由縁ありてめでたくきこ

ゆされども上下の文にあはせておだしからずより
て原本のきもと　もとの二字はりの一字の訛釋せ
しによみてこれをきりとよみすぎは上へつけて水
の聲も例にすぎきりはさしも立わたりとすれば文
義おだやかにきこゆれば臆を以直しつゞけりいし
がちは石の多なりうす色は紫の色のうすきなりう
すものは羅也まだし裳の腰に色づきたる木の葉の
ちりかゝれるさまをいひつゞけられしなるへしち
りてを沖本にちかひてと直せるは心ゆかず原本の
まゝにてよくきこゆらんかし案するにくちばにの
下に又一のにの字をそへてもきかまほしくおもは
れ侍るこがれたる朽葉に似合たるとの意歟

かたゐどものつきなぐるとすゑてをるもいとかなし
げすぢかなる心地してみつからけおとりしてそおほ
ゆるねふりもせられずいそかしからねはつく〴〵と
きけはめもみえぬものゝいみじげにしもあらぬがお
もひけることゞもを人やきくらんともおもはずのゝ
しり申をきくもあはれにてたゞなみだのみそこぼる
るかくて今しばしもあらばやと思へどあくれはのゝ
しりていだしたつ

かたゐは片居と書て非人乞食をいへりつきなぐる
を原本つきなべなゝとかけるは訛也契本に坏投と
釋せり今それに從ふすゑては坏を地に置を云なる
はその側に座也かなじはあはれむなり蓋今時も愛
宕山などにてかはらけなげするわざとしられたり
かやうの非人のたぐひと交りをれはみづからも氣
おとりするとなりいそがしからねばのねをぬと原
本にあやまれり參籠の中には盲人もあれは目のみ
えぬものを云

かくさはしのぶれどこゝかしこあるじしつゝとふめ
ればものさわがしうてすぎゆく三日といふに京につ
きぬべけれといたうくれぬとて山城のくにくせのみ
やけといふ所にとまりぬ

あるじは饗なりもてなしなりとふめを原本にとら
んとせるは轉訛なり言心は人のもてなしふるまふ
も或はうけもし或は辭退してゆきすぐとなり久世
の屯食なりすへて鄕名に屯食と號す諸國の郡内甚
多しみやけは後世御倉所なとの如し

いみじうむつかしけれど夜に入ぬれはたゞあくるを
まつまだくらきよりいけはくろみたるものをそおひ

てはしらせてくやゝとほくよりおりてついひざまづきたりみればずいじんなりけり何そとこれかれとへばきのふの西の時ばかりにうぢの院におはしまいつきてかへらせ給ひぬや（書入云衍か宜）とまゐれとおほせごと侍りつればなんといふ

黒みたる者とはけだし兼家公に從ふ隨身の黒色の衣をきたる馬にのりて來れるを遠くよりして望める體をのべたりおひては追てなるへし

さきなるをのこどもふねうながせやなゝとおこなふうぢの川ちかよる程霧はきしかたみえず立わたりていとおぼつかなし車かきおろしてこちたくとかくする程に人ごゑおほくて御車おろしたてよとのゝしる霧のしたより例のあじろもみえたりいふかたなくをかし

こちたくは言痛也御車おろしたてよとは已にかきおろしたる車を又かきて舟中へおろしたつるなり（書入云かく直してもわろし宜）

みづからはあなたにあるなるへしまづかくきこえてわたす

原本こえの二字を脱して只かくきてとありそれにては言ゆかずみづからは公の自也あなたとは川のむかひに居てかく歌を以てきこえさすとなり

人心うぢのあじろにたまさかによるひをだにも尋ねけるかな　公

人心うきの秀句也夜る晝にひををそへたり

ふねのきしによするほどにかへし

原本きしきするほどゝあり余さきにそのまゝにて釋してきするはきしるにて轢の字けだし女君の公へのかへしを倉卒にめさるゝこと舟の岸へわづかにきしるばかりの間によまれしと釋せり今思へば穿鑿の說にてよろしからざりき後契本によりて右の如く直せり尤おだやかなり

かへるひを心のうちにかぞへつゝたれによりてかあじろをもとふ　女君

公の歌は人心憂とかけたり氷魚に日をかねたりかへしはかへる日をに氷魚をそへたり心の內に宇治をもたせたり

みるほとに車かきすゑてのゝしりてさしわたるいとやんごとなきにはあらねど賤しからぬ家の子ともなにのぞうの君なゝといふ者どもながえとみのをのなかにいりこみてかのあじろわづかにみえてきり所々

にはれゆくあなたのきしに家の子ゑふのすけなゝとかいつれてみおこせたりなかにたてる人もたびだちて狩衣なり岸のいと高き所に船をよせてわりなくたゝあげにゝなひあぐながえをいたじきにひきかけてたてたりとしみのまうけありければとかう物するほど

なにのぞうは何丞なるへしその人は誰と不レ可レ考姑欠已和名抄車の具轄は車轅也和名奈加江俗に在レ前謂二之轅一在レ後謂二之鴟尾一或は云小轅清少納言云六月に人の八講し玉ひし處に人々あつまりてきくに此藏人になれるむこのれうのうへのはかますはうがさね黒半臂なんどいみしうあざやかにてわすれにし人の車のとみのをにはんびのをゝひきかけつばかりにして居たり云々とみのを或は富の字或は頓の字をもかけり契本には鵄の字をかけりゑふのすけは衛府佐なり源氏宿木の巻の花鳥餘情に云女の車におりのるときは打板と云物をしきて車の前板と轅とにわたす物也云々としみは賀の年滿にはなくてこれは潔齋畢てはじめて魚を食ふことなり此日記前にも見

川のあなたにあぜちの大納言のらうし給ふところありけるこのごろのあじろ御覧ずとてこゝになん物し給ふといふ人あればかうてありときゝ給へらんをまうでこそすべかりけれなゝどさだむるほどにもみちのいとをかしき枝にきじひをなゝとをつけてかうものし給ふときゝてもろともにとおもふもあやしう物なき日にこそあれと有御かへりこゝにおはしましけるをたゞ今さふらひかしこまりはなゝとゝいひてひとへぎぬぬぎてかづけてさながらさしわたりぬめり

原文あぜちの大納言のかたへにもろうぢの御事にやと傍注を加へたり榮華に師氏の按察をかけ玉へる事所見なしされと此日記末に至てふたゝひ初せ詣で有てそこの文に未の時計にあぜちの大納言の領じ玉ひし宇治の院に到たりと見ゆそれも師氏の御事なるへしかの所と見合すべしもろともにと思ふもとはわれもそなたへまゐりとも〳〵に川上のあそびをもすへき心もあるにせめてはしかるへき物なりともまゐらせたきにあやしう物もなき日也との會釋の詞なるべし

又鯉すゞきなゝとしきりにあゝめりあるすきものども

ゐひあつまりていみじかりつる物かな御車の脇の板のほとりの日にあたりてみえつるはともいふめり車のしりのかたに花もみぢなゞとやさしたりけん家の子とおぼしき人ちかうはなさきみなる迄なりにけるひごろよといふなればしりなる人もとかくいらへなゞとするほとにあなたへ舟にて皆さしわたるろなうゐはむものぞとて皆さけのむもの共をえりてゐてわたる川のかたに車むかへしぢたてさせてふたふねにてこぎわたる扨ゐひまどひてうたひかへるまゝに御車かけよ〳〵とのゝしればこうじていとわびしきにいとくるしうてきぬ

此段の詞つぶさに釋しがたし多酒にゐひたるものともの　たはことなるへし原本つきの板とありつきの板未ニ聞及ニ姑わきの板に直し置きぬごうじては困の字也源氏等に多し川のかたはかたはらなり

あくればごけいのいそぎちかくなりぬこゝにし給ふべきことこれ〳〵とあればいかゞはとてしさわぐぎしきの車にてひきつゞけりし物のぐてふりなゞとかくしいけば色ふしに出たらん心ちしていまめかし月たちては大ざうゐのけみやとしさわぎ我も物見のいそぎなゞとしつるほとにつゞもゝに又いそぎなゞとすゞめりかく年月はつもれど思ふやうにもあらぬ身をしなげゝばこえあらたまるもよろこぼしからず猶ものはかなきを思へはあるかなきかの心ちそするかげろふのにきといふべし

こゝにし王ふべきことこれ〳〵とは女君へ大事の何くれのしやうそく等をあつらへらるゝ也かくしいけばとはかくのごとくしもてゆけばなり大ざうゐはかなもゝのゝよみくせ也けみは冲本に閲と書蓋悠紀主基両國郡の神稲の毛見也又の急ぎはさし加へて春のいそぎなり此れ上巻の結語也題號をこゝにあらはされたることを契冲も賞せられしよしなり余因て云く榮華物語なとにも第五巻の疑の巻に始て榮花の文字をあらはせる類なり猶此題號のことは別に辨あり

かげろふの日記解環中卷之一

洛下　坂徵　仲文甫著

安和二年　道綱十五歳

かくはかなゝがらとしたちかへるあしたにはなりにけり年比あやしく世のひとのすることゝ忌なッどもせぬ所なればやかうはあらんとくおきていさりいづるまゝにいづらこゝに人々ことしだにいかでこといみなッどして世中こゝろみんといふをきゝてはらからとおぼしき人まだふしながらものきこゆあめつちを袋にぬひてとずッゞるにいとをかしうなりて更に身にはみそかみそよは我もとにといはんと云ばまへなる人々わらひていとおもふやうなることにも侍るかなおなじくはこれをかゝせ給ひて殿にやは奉らせ給はぬといふふしたりつる人もおきていとよきことゝなりてんげの気はうにもまさらんなッとわらふ〳〵いへばさながらかきてちひさき人して奉れたればこのごろときの人にて世の中の人まゥでいみじくおほくまゐりこみたりうちへもとくとていとさわがしげなりけれどかくぞあることしは五月ふたつあればなるへし

とし毎にあまれるこひか君がためうるふ月をばおくにやあるらん　公

發端は上卷の結語をうけていへりはらからとおぼ（書入云この説いかゞ宣昭）しき人とは只はらからといふよりは反てふかくおもんずるの詞なるべし上卷にも贄のをばをさしてをばとおぼしき人といへりさてこのはらからはきはめて長能なるへし任國より上られしことはみえねどもその折より任限四ヶ年の後なれはなり按（書入云此歌なにゝ見えたるにか宣昭）に正月もちひかゞみに唱ふる歌にあめつちを俗にぬひてさいはひをいれてもたれば思ふことなし一月三十日三十夜なればひたみちに公の我もとにい（書入云みそかみそよこれも歌の詞などなるべし宣）まさんことをねがはるゝ詞なりふしたりつる人も長能なりてんげは天気なり気はうは恵方なり原文にえほうとかなたがへりちひさき人は例の道綱なり公此時中納言にて藏人の頭なれば其た頭職なり世中の人まうでゝ敬命するなるへしまでと書てもまうでとよむべし

とあればいはひそゝじつとおもふ又の日こなたあなたげすのなかより事出きていみじきことゞもあるを人はこなたざまに心よせていとをしげなるけしきにあれどわれはすべてちかきがすることなり悔しくなゝと思ふほとにいへうつりとかせらるゝことありてわれはすこしはなれたる所にわたりぬればわざときらく／＼しくて日ませなゝとにうちかよひたれははかなきうちには猶かくてそあるへかりけるわれにしき書入云われにしき云々以下誤脱あるへし宣昭をきてこそいへふるさと人もかへりなんとおもふ

按に上の公の歌をうけて祝ぞしつとも云へけれとも契本に祝損じつと釋す蓋下の言にかけて釋せしなり今はそれに從へりこなたは女君の家人なりかなたは公の家人なり事の出來るもわが居所の公へ書入云兄長能の家移りせらるゝなるへし宣昭近きがするとなりさ思ふ内に公の所用ありて家移書入云非也をめさる我はすこしとはわれにはすこしはなれたる所に公のわたれるなり程遠くなれる故かへりてきら／＼しくこれまであらざる日ませにかよへるとなり日ませは隔日也日ませは榮華ものがたり書入云上に公のわたれる也と云たるにこゝのにもある詞なり公の方よりすこしはなれたる遠注にては女君のこゝと聞ゆされば家移りは長能なるへきことしらろ宣昭き方へわたらるゝにつきてふるさとへかへれる心ちするさまを朱買臣か故事をふと思よりてわれ錦をきるが如き時にあへる身ならは心よく遠き故郷へもかへるともいはめとの述懐なりはめの反へなれば錦をきてこそいはめ原本にへを人の字に誤る今臆を以料簡して如レ此

三月三日せくなゝとものしたるを人なくてさう／＼しとてこゝの人々かしこのさふらひにかうかきてやるめりたはふれに

もゝの花すき物ともをさいわうかそのわたりにてたつねにぞやる　女房

原本こしの句まいりうかとあり契本にさいわうに直せり蓋西王母に女房自ら比していへるなり契本に又引けり重之集に桃の花すける人の打ゑひてあるをみて人しれずすくとはきけど桃の花色に出てはけふそみえける臆に思ふに下の句そのわたりまでをにてと誤にや

すなはちかいつれてきたりおろしいだし酒のみなゝとしてくらしつなかの十日のほとにこの人々かたわきて小弓のこととせんとすかたみにいでゐなゝとそしさわぐしりへのかたのかぎりこゝにあつまりてなす

日女房にかけものこひたれはさるゞべき物やたちまちに覺えざりけむわびざれに青き紙を柳の枝にむすびつけたり
山風のまへよりふけは此春のやなぎの糸はしりへにぞよる　女房
かへしくち〳〵したるもわするゝほどおしはからなむ句ひとつはかくぞある
あまたの内一首のみあらはすとなり
かす〳〵に君かたよりてひくなれは柳のまゆも今そひらくる
つごもりがたにせんとさだむるほとに
かたよりは倚也つごもりがたは小弓の定日なるべし前いへるは習なるへし
世中にいかなるとがまさりたりけんてんげの人々ながさるゝとのゝしる事いできてまぎれにけり廿五日六日のほどにゝしの宮の左おとゞながされたまふみたてまつらんとてあめのしたゆすりてにしの宮へ人はしりまどふいといみじきことがなときくほどに人にもみえ給はでにげいでたまひにけりあたごになんきよみづになんとゆすりてつひにたづねいでゝながし奉るときくにあへなしとおもふまでいみじうかなしく心もとなき御事にかくおもひしりたる人は袖をぬらさぬといふたぐひなしあまたの御子どもあやしきくに〳〵のぞうになりつゝゆくへもしらずちり〳〵わかれたまふめるぞ御ぐしおろしなゞとすべていへはおろかにいみじおとゞはうしになり給ひにけれどしひてそちになしたてまつりておひくだし奉るそのころほひたゞ此ことにてすぎぬ
てんげ天氣叢勅命を云なりゆすりは動也あたごは愛宕なりきよみづは淸水寺也百錬抄云安和二年三月廿六日左大臣源高明坐レ事左二遷太宰權帥一依二左馬助滿仲等密告一也中務少輔橘敏延右兵衛佐連同配流依二謀反一也四月一日權帥西宮家燒亡二日御二五畿七道一追二討謀反之黨類一大鏡に云帥升のおとゞ左大臣にうつり玉ふ西宮の御かはり也此事の亂れは此小一條のおとゞいひ出し玉へりと云々國々のそう原本にそらと轉誤せりぞうは橡なり
身の上をのみする日記には入まじきことなれどもなしとおもひたりしもたれならねばしるしおく也
みのうへを原本にみの上をのみすなひきと書たり

なはるの訛日記の日をひとかなに誤らるもなしは喪無也息災の義なり伊勢物語にも見えし詞也たれならねばとはおろそかならざりし人のことなればしるしおくとなり源氏抄等に高明公は紫式部の深くむつまれし中なりければ左遷めされしをなげきて源氏を比しおのれを紫上に比せしとは大なる非也公の左遷の比は式部未生以前或はいと幼ときにあたれり其誤紫家七論に具なり私云これ今の女君のことととりたがへしなるべし

そのまへのさつきの廿よ日のほどものいみもありながき精進もはじめたる人山寺にこもれり雨いたくふりてながむるにいとあやしく心ほそき所になんなゝともあるへしかへりことに

時しもあれかくさみだれのおとまさりをちかた人のひをもこそふれ　山寺にこもれる人

とものしたるかへし

まし水のまして程ふるものならはおなしぬまにそおりもたちなん　女君

原本前の五月をまへのさみだれに作れるは誤女君の心にこなたにも雨のいたくふりてながむるにさぞな山寺は心ほそからんといひやりし凡をのふる詞なりその山寺にこもれる人其人誰人たるをしらす歌二首ながら原本にはあやまりたる今皆契本の直しにしたかへり

といふほとにうるふさ月にもなりぬつごもりより何心ちにかあらんそこはかとなくいとくるしけれどさばれとのみ思ふ命をしむと人にみえずもありにしか（書入云なの誤りか宣昭）ばとのみ念ずれどみきく人たゞならでけしやきのやうなるわざすれどなほしるしなくてほどふるに人はかくきよまはるほどゝて例のやうにもかよはずあたらしきところつくるとてかよふたよりもたちながらなゝと物していかにぞなゝともある心ちよはくおほゆるにをしかこでかなしく覺ゆるゆふぐれにれいの所より歸るとてはすのみひともとを人していれたりくらく成ぬればまゐらぬなりこれかしこのなりをみ給へとなんいふ

さばれはさもあらばあれのつゞめ詞也けしやきは芥子焼也護摩焼也源氏葵の卷に御ぞなゝとも只芥子の香にしみあへり云々人は公なりきよまはるは物忌なれは也これは蓮房をさすかしこの形とはう

つられし新宅を云
かへりことにはたゝいきていけらぬとごたへよとい
はせておもひふしたれどあはれげにいとをかしかゞ
なるところを命もしらず人の心もしらねばいつしか
みせんとありしもさもあらばもやみなんうしとおも
ふも哀也

いきてはをれどもいきたらんとしもいはしやなり
公のまめ心をしりはてぬからしてをかしかるべき
新宅をもみまほしなから日比をふると反覆して我
と我心をあはれむ意此段の文もてあそふへし

花にさきみになりかはる世をすてゝうき葉の露とわ
れうけぬへき　女君

此歌玉葉集雜三に東三條入道攝政外より歸るとて
はすの實を一もとみよとておくり侍ければ前右近
大將道綱母とあり原本みになりかゝるとあり玉葉
にしたがふて直しぬ

なゝとおもふまで日を經ておなじやうなれは心ぼそ
しよからずばとのみおもふ身なればつゆばかりをし
とにはあらぬをたゞこのひとりある人いかゞせんと
ばかり思ひつゞくるにぞ涙せきあへぬ猶あやしく例
の心ちにたがひて覺ゆるけしきもみゆゝべければや
むことなき僧なゝとよびかぢさせなゝどしつゝ心みる
にさらにいかにもあらねばかうしつゝ死にもこそす
れにはかにてはおぼしきこともいはれぬものにこそ
あなれかくてはてなばいと口をしかるへしあるほど
にだにあらばおもひあらむにたがひてもかたらひつ
へきをとおもひてけふそくにおしかゝりて書けるこ
とはいのちながかるへしとのみの給へはみはて奉り
てんとのみありつるにそらごとにもやなりぬらんあ
やしく心ぼそき心ちのすれはなんつねにきこゆるや
うに世に久しきことのいとおもはずなれはちりばか
りをしきにはあらて此をさなき人のうへなんいみじ
くおほえ侍るもしはありつるたはふれにも御けしき
の物しきをばいとわびしと思ひて侍ゝめるをばいと
おほけなきことなくて侍らんきはゝ御けしきなゝど
みせ給ふないとつみふかき身にははべゝらめ

風たにもおもはぬかたによせさらはこのよのことは
かのよにもみん　女君

侍らさらん世にさへうと〳〵しくもてなし給ひてあ
らばつらくなん覺ゆべきとしごろ御らんじはつまじ

どおほえなからかばかりもはてざりける御こゝろをみ給ふれはそれよくかへりみさせたまへゆづりおきてなと思え〔書入云ひの誤り宜〕給へつるもしるかりぬべかゞめれはいとながくなんおもひきこゆる人にもいはぬことのをかしうなゞときこえつるもわすれずやあらんとすらんをりしもあれたいめにきこゆべきほどにもあらざりけれは

露しげきみちとかいとゝしての山かづら〳〵ぬるゝ袖いかにせん　女君

と書てはしにあとにとひなゞどもちりのごとをなむあやまたざゞなるざえよくならへとなんきこえおきたるとのたまはせよとかきてふんじて上(ウヘ)にいみなゞとはてなんに御覽ぜさすべしとかきてかたはらなるから(ロチ)うつにゐさりよりていれつみる人あやしとおもふへけれどひさしくならはかくたにものせざらんことのむねいたかゞべければなむ

よからすばとは云のこせし詞なり薹公の心のあつからずしてまじはりのつひに言よからざる様ならば尼にもなり世をさけてかくれなんとのみ思ふ身なれば世の中のことのをしげはなきにたゞ一子の道綱のことの末のみ心にかゝれる也けふそくは脇息也をはたかへりと原本は誤れりおしかゝりと契本にありそれにしたがひぬありつるにそらことを原本ににそらの三字を小二らとありしは一向によみとかれずおほけなきの詞の釋は應ずるなきは尤不可契沖の説も俗語によりての釋尤非なり身にに〔荷〕なひお〔負〕ふへきお氣もなくして物に相あたるはおふけなきに非や臆説なれともしばらく釋しおけりおほけなると原本あやまれりうと〳〵しくもてなしたまひてあらはを原本もてなし給人あらはとせしはてのかなの人になりたるなりすべてこの段かなの誤尤居多こと〳〵くあぐるにいとまあらずいとながくなれおもひきこゆる人とはけだし父や兄なりそれらにだにもきかせぬことをもむつましかるへき中なればをかしきわざをもうらなく相かたらひしことのさすがに公の心にわすれずあるべしとのむつごとなりかく〳〵歌をかきて文の端がきに我か死にし跡に學問なゞどに心を入れわづかの人事の上にもあやまちのなきさまの才をよくならひて身を立てよと母か云おきたると相つたゝたまは

れと公への遺言のさまなりふんしては封してなり
からうつは唐櫃なりからひつとかけともよみはか
らうつなり俗にからをとゝよぶ是也

かげろふの日記解環中卷之二

水甘子著

かくてなほおなしやうなればまつりはらへなといふわざこと〳〵しうはあらでやう〳〵なゝとしつゝみな月のつこもりかたにいさゝか物おほゆる心ちなゝとするほとにきけばそちどのゝ北のかたあまになり給ひにけりとほとにもいとあはれにおもふたてまつるにしの宮はながされ給ひて三日といふにかきはらひやけにしかは北の方わが御殿もゝぞのなるにわたりていみじけにながめ給ふときくにもいみしうかなしくわが心ちのさはやかにもならねはつく〳〵とふしておもひあつむることとそあへなきまでおほかるを書出したれはいとみくるしけれと

とほとを原本にとおはとあるは極て誤ゑ萬葉に遠音の詞あり今は風聞にきくを云へし西の宮はと云を西の宮へと誤る拾芥抄西の宮は四條北朱雀の西百錬抄曰安和二年四月一日西の宮の家焼亡獻江人楚云桃園は在所一條の北大宮の西一條西の中許世尊寺の南當時の枸杞町歟師尹大納言の宅也保光中

納言代明親王の男 傳領仍號₂桃園中納言₁今按に敦固の親王のこと歟と云々弄花抄に桃園の宮はいまの佛心寺其跡なり云々愚按に今此に我御殿原本には命に作しは殿の誤なりも丶園なるにわたりてとあれは西の宮殿の北方の傳領歟甌江に云るも分明ならずいぶかし榮華によれは桃園の宮は是も延喜帝の皇子重明親王なり且つ西の宮殿も丶とより延喜帝の皇子なり又甌江にいへる代明親王もまた延喜帝の皇子なれは桃園の所由いづれにやもつともいぶかし猶博識の人に尋究すべしその所は一條大宮の西なること相違なかるへし猶此下文に見え₁多武タフの峯に住玉ふ高光少將は西の宮殿の北方の兄弟なれば北の方はこれ九條師輔公の女にして即兼家公の姉妹也桃園宮はこれ分明に九條師輔公の聟君なれば親王より九條殿の傳領となりて又西の宮殿の北の方の家になりしにや此段のあへなきも上の義に同

女君　あはれ今はかくいふかひもなけれともおもひしことは春のすゑ花なんちるときさわぎしをあはれ丶ときこ丶しまにしのみやまのうぐひすは限りの聲をふりたて丶きみがむかしのあたごやまさして入ぬときこ丶しかど人言しげくありしかばみちなきこと丶なげきわび谷がくれなる山水のつひにながるとさわぐ間によをうづきにもなりしかは山ほとゝぎすたちかへり君を忍ぶるこゑたえず何れの里かなかざりし

六帖第二山の題わがために何のあたごの山なれやこひしとおもふ人の入らん西のみ山とうけたり前世の宿業なんどの心にてむかしの仇とうけたり世をうきとつゞけたり原本たちかはりは誤なりしのぶるをしのぶのと又誤たりたえずをたへずと又々誤る

ましてながめのさみだれはうき世の中にふるかぎりたれかたもとかたゞならん

世中に經るを雨のふるにそへたりたゞならんをたゞならぬとは誤る

たえずぞうるふさ月さへかさねたりつるころも手はうへしたわかずくたしてき

雨のうるふに閏月をかねたりくたは朽すなり

ましてこひぢにおりたてるあまたのたごはおのがよ丶いかばかりかはそほぢけん

泥(コヒヂ)を戀路によせて後撰戀の三長谷雄朝臣しほのまにあさりするあまもおのがよゝかひありてこそ思ふべらなれそほぢは濡なりそをぢの如くよむなり

よるにわかるゝ村鳥のおのがちり〳〵すばなれてわづかにとまるすもりにも何かはかひのあるべきとくだけてものをおもふらん

よるは夜なり村鳥は群鳥なりすばなれは巣離なりすもりは巣守なりかひに卵をよす六帖にきゞし年をへてかへりがたのゝすもり子の君にしあはゞ飛立ぬべし

いへはさら也九重のうちをのみこそならしけめおなじかずとやこゝのへにしま二つをばながむらん

太宰府は九州をすぶれば已に都の九重をいひて同し數とやといへり下のこゝのへは九の上なりしまふたつは壹岐對馬なり九州二嶋といへばかく述られしにや

かつは夢かといひながらあふべき期なくなりぬとや君もなげきをこりつみてしほやくあまと成ぬらん

四句工(タクミ)にして優なり

ふねをながしていかばかりうらさびしかる世の中をながめよるらんゆきかへりかりのわかれにあらばこそきみがとこよもあれざらめちりのみおくはむなしくて枕の行へもしらじかし

古今いせ長歌年へてすめるいせのあまも舟ながしたる心ちしてをとれりかり(雁)のわかれは又來るなり今のわかれは又あはん期しられずかりはとこよの國より往來するといへばとこよに床をかねて末の枕の二句字あまりながら奇也

今は涙もみなづきのこかげにわぶるうつせみのむねさけてこそなけくらめ

今は泪もみなつきはてめと秀句せり

ましてや秋の風ふけは笆(マヽ)の荻の中々にそよとこたへん折ごとにいとゞめさへやあはざら(むの誤りか)は夢にも君か君をみでながきよすがら鳴むしの同しこゑにやたえざらんとおもふ心は大あらぎのもりのしたなる草の身もおなしくぬるとしるらめや露

上の君は北の方下の君は高明公なり思ふ心は多しと秀句せり後撰雜二にみつね人につく便だに

なし大あらきのもりの下なる露の身なれば今は此歌を取れりと見大荒木杜八雲に大和大あらきの浮田のもりともつゞけり又按に萬葉第三の挽歌にすめろぎのみことかしこみ大荒城の時にはあらねど雲がくれます此れは左大臣長屋王罪ありて死を賜ひし後倉橋部の女王のよめる歌也代匠記に大あらきと云名を木の葉もちりてあるゝ心になして二月上旬のことなれは木の目ももえいづる如く榮え玉ふべき人ことに大功ありし高市(タケチ)の皇子の御子なれは太政大臣にもなり玉はん人の五十三にて薨し玉へるをなげきてよめるなり云々仙覺抄には大あらきの時とは人の死期をいへり八雲には忌の詞ともみえずされど袖中抄に人の死ぬることにも云べきにやともあれは所詮斟酌すへき詞歟たえざらんとは長歌の句切なりよむにはと思ふなり

又おくに

やどみればよもぎのかどもさしながらあるべきものと思ひけんやは　女君

とかきてうちおきたるをまへなる人みつけていみじうあはれなることかなこれをかの北の方にみせ奉らばやなゞといひなりてげにそこよりといはゞこそかたくなしくみぐるしからめとてかんやがみにかゝせてたてぶみにてけづり木につけたり

かんやかみは紙屋紙也昔は今のかい川にてすきしなりけつり木は削たる木也前なる人は女房かもしくは長能にてもあるべし

いづこよりとあらばたふのみねよりといへとをしふるはこの御はらからの入だうの君の御もとよりといはせよとてなりけり人とりていりぬるほどにつかひはかへりにけりかしこにいかやうにかさだめおぼしけんはしらず

高光も九條師輔公の息也出家法名如覺多武峯少將入道と號す高明の北方の兄弟也

かくあるほどにこゝちいさゝか人こゝちすれば旬はつかみかのほとにみだけにとていそぎたつをさなき人も御ともにとてものすれはとかくいだしたてゝそその日のくれにそわれももとの所すりしはてつればわたるともなるべき人なとさしおきてゞげればさてわたりぬそれよりまかるうしろめたき人をさへそへ

てしかばいかに〳〵とねんじつゝ七月二日のうちあかつきにきて只今なんかへり給へるなゝとかたるこゝはほどいとゞおくまりにだればしばしはありきなゝともかたかりけんかしなゝとおもふにひるつかたなへぐ〳〵（衍か宣明）とみえたりしは何ことにか有けん

○はつかみかは蓋六月廿三日なり御嶽は金峰山なり公の道綱をつれて参詣なりすりは修理なりうしろめたき人は道綱なり公のともなる人を公へ道綱のともする人はもとの所にさしおかれたれは我は新なる處へわたりぬとなりそれより道綱公の供して詣也いかに〳〵と下向をまちかぬるにやう〳〵七月二日のうちあかつきに道綱かへりて語らるなりうちあかつき珍しき詞なりうちは詞なり歌にはよみがたかるべけれど文中には随分つかひても宜しかるへき詞なるへし女君の修理してあらたにうつられし所なれは狭にはみえられまじきと思ふにひるつかたかちよりなへぐ〳〵見えたりとなりみだけまうでのつかれなるへし

さてそのころそちどのゝ北のかたいかでにかありけんさきの所よりなりけりときゝ給ひてこの身なつき所とおぼしけるをつかひもてたがへて今ひとつ所へもていたりけりとりいれてはたあやしともや思はずありけんかへりごとなどときこえてげりとつたへきゝてかのところたがへてけりしもいふかひなきことを又同じことをものしたらばつたへてもきくらむにはいとねぢけたるべしいかに心もなく思ふらんとなんさわがるときくがいとをしければかくてはやまじとさきの手して

やまびこのこたへありとはきゝながらあとなきそらをたづねわびぬる　女君

とあさ花田なる紙に書てひのはしげう（檜葉繁）つきたる枝にたてぶみにしてつけたり又さしおきてうせにければさきのやうにやあらんとてつゝみ給ふにやありけん猶おぼつかなしあやしくのこともあるになゝとおもふ程へてたしかなるへき便をたつねてかくの給へる

ふく風につけて物おもふあまのたくしほのけふりはたつねいですや　高明公室

とていときなき手してうすにびの紙に松のえだにつけてたまへり御かへりには

あるゝうらにしほのけふりはたちけれとこなたにか

へす風こそなかりし　女君
とてくるみいろのかみに書ていろかはりたる松につけたり

さきの所は多武峰なりなつき所は懐處也今一所とはいづこならん知りがたし使のもてたがへたるをおやしとも思はでかへりことすと也もてたがへたるはせんかたなきに又同しことを物したらばさきに使のたがひたるよしをきゝつたへばいかゞ心もとなく思らんとかの室のさわがるゝといふことを
○女君のきくがかの室をいとをしければそのまゝにしてはおきがたしと前の同手して歌をかいておくられたるなりかの北の方も物ごりして又さきの如くたがへることもやあらんとほどへてたしかなる便を求てかくの如く歌よみておくり玉へりしと也

「八月になりぬその比小一條の左のおとゞの御賀とてえさるまじきたよりをはからひてせめらるゝこと有繪の所々かき出したるなりいとしら〳〵しきことゝてあまたゝびかへすをせめてわりなくあればよひのほど月みるあひだなッとにひとつふたつなッどおもひでものしけり」人の家に賀したる所有、

此蓋女君當時歌よみの名高き故得遁れられざる傳を求めてあつらへられし也此亦皆其賀の屏風の歌也おもひでは趣向のうかみ出るまに〳〵とのことゝなるへし

おほぞらをめぐる月日のいくかへり今日ゆくすへにあはんとすらん　女君下皆同

此歌玉葉に賀部に云小一條左大臣五十賀屏風の歌とて人のよませ侍けるにとあり下句いま行末とあり

旅行人のはまづらにうまとめてちどりのこゑきく所あり

一こゑにやがてちどりときゝつればよゝをつくさんかずもしられず

粟田山より駒ひくそのわたりなる人の家にひきいれてみるところあり

原本ところなりと有されど上下皆有とあれば此れも同かるへし契本に引く曾丹が集道のべの粟田の山に秋ぎりのたちのゝ駒も近づきぬへし

あまたとしこゆる山へに家ゐしてつなびくこまもおもなれにけり

人の家のまへちかきいづみに八月十五夜月のかげうつりたるを女共みるほとに垣の外よりおほぢにふえふきてゆく人あり

雲井よりこちくのこゑをきくなへにさしぐむばかり見ゆる月かげ

孤竹の笛に此方へ來とこそへたり契本に引後撰いにしへの野中のしみつみつるからにさしくむものは泪なりけり

ゐなかうどの家の前のはまづらに松原あり鶴むれてあそぶふたつうたあるべしと有

なみかげのみやりにたてる小松原こゝろをよすることぞあるらし

松のかげ眞砂のなかとたづぬるはなにのあかぬぞたづのむら鳥

あじろのかたある所有

あじろぎに心をよせて日をふればあまたの夜こそたびねしてげれ

はまべにいさり火とほしつりふねなどある所有

いさり火もあまのをぶねものどけかれいけるかひあるうらにきにけり

女車もみちみけるついでに又もみちおほかりける人の家に來たり

よろづよをのべのあたりにすむ人はめぐる／＼や秋をまつらん　已上九首

野邊に延の意をそへたりめぐるは車の縁語なり

などあぢきなくあまたにさへしひなされてこれらが中にいさり火とむらとりとはとまりにけりときくにもものし

なんどは上九首の歌をくゝりたる詞也物しとはこゝなんどにては心にあきたらぬ詞なるべきにや九首の詠の内には女君の心にもよみ得たりとおぼす歌もあるべきにえらばれたる二首心ゆかぬを云にや

かうなどしゐたるほどに秋はくれ冬になりぬればなにごとにあらねどことさわがしき心ちしてありふるうち霜月に雪もいとふかくつもりていかなるにかありけんわりなく身こゝろうく人つらくかなしくおぼゆる日有つく／＼とながむるにおもふやう

ふる雪につもるとしをばよそへつゝきらむごもなき身をぞうらむる

こは期なり
なゞどおもふほどにつごもりすぎ
此詞につゞけて春のなかはにも成にけりと有今愚抄は年のあらたまるたび毎に其年を標出せる故春より下は次の冊にかき下せる也

かげろふの日記解環中巻之三

圓融天皇　天祿元年　道綱十六歳
安和三年三月廿五日改元

春のなかはにも成にけり人はめでたくつくりかゝやかしつるところにあすなむうつるなゞとのゝしるなれど我は思ひしもしるくかくもあれかしとなりにだるなゞめりされば世にこりしかばなゞどおもひのべてあるほとに三月十日のほどに内ののり弓のことありていみじくいとなむなりをさなき人しりへのかたにとられていでにだりかたかつものならばそのかたのまひもすべしとあればこの比はよろづわすれてこの事をいそぐ

のり弓は賭弓と書かけもの丶ある故の名なり左右近衛左右兵衛四府の舎人射る也道綱もいまだ童形にて後の方の射者にとられてまゐられたりと見ゆ前後かたわきてかてるものは舞樂を奏することあればもし後の方かつものならば舞をもすへきことなれば師をとりて舞を習はせるなり

雛ならすとて日々にがくをしの丶しる出ゐにつきてかけものとりてまかゞでたりとをかの日になりぬこ丶にてしがくのやうなることするまひのしおほのよしもち女房よりあまたの物かづくをとこがたもありとあるかぎりぬぐ殿は御物忌なりとてをのこどもはさながらきたりことはてがたになるゆふぐれによしもちこてふらくまひて出きたるに黄なるひとへぬぎてかづけたる人ありをりにあひたるこ丶ちす又十六日しりへのかたうどさながらあつまりてまはすべしこ丶にはゆばなくてあしかりぬべしとてかしこにの丶しる殿上人かずおほくつくしてあつまりてよしもちうづもれてなむときく我はいかに〳〵とうしろめたくおもふによふけておくりし人々あまたなゞとしてものしたりさてとばかりありて人々あやしとおもふにはひいりてこれかれらうたくまひつることかたりになむものしつるみなひとのなさゐはれがりつることあすあさてものいみいかにおほつかなからん十五日の日まだしきにわたりてこどゞもはすべしなゞどいひてかへられぬればつねはゆかぬこ丶ちもあはれにうれしうおほゆることかぎりなしその日になりて

まだしきにものしてまひのしやうぞくのことなゞと人いとおほくあつまりてしさわぎ出したて丶又弓のことをねんずるにかねてよりいふやうしりへはさしものかけものぞ射ていとあやしう取たりなゞといふに雛をかひなくやなしてんいかならん〳〵とおもふに夜に入ぬ月いとあかければかうしなゞともおろさでねんじ思ふほどにこれかれはしりきつ丶まづこのものがたりをすいくつなむいつるかたきには右近衛中將なむあゑおほな〳〵いふせられぬうてまことの心にうれしうかなしきこともものに似ずかけ物とさだめしかたのこの矢ともにか丶りてなんぢになりぬるとまたつげおこする人もありぢになりにければまづれうわうまひけりそれもおなじほどのわらはにてわがをひなりならしつるほどこ丶にてみかしこにてみなゞとかたみにしつされはつぎにまひておぼえによりてにや御ぞたまはりたり内よりはやがてくるまのしりにれうわうものせてまかゞでられたりありつるやうかたりわがおもてをおこしつることかむだちめどもの皆なきらうたがりつることなゞとかへす〳〵もなく〳〵かたらるゆみの師よびにやりきて又こ丶

にもなにくれとてや丶かづくればうき身かともおぼえずうれしきことぞものに似ずそのことののち二三日までしりとしりたる人ほうしにいたるまでわかぎみの御ゞよろこびきこえに〳〵とおこせいふをきくにもあやしき泣うれし

まひならすは舞習なり出居につきてかけものとりて云々はのり弓のならしの時なるへし十日は其正日なりしがくは試樂なり當日のことをこゝろむなり舞の師原本にまひのしおほくと有契本におほえと有こゝに疑ありおぼえあるよしもちと云ことにや又は大江姓をいへるにや類まぎらはしもし姓をいはゝ樂人に多の姓おほければ多のよしもちにやと姑くさだめつ殿は兼家公なりこてふらくを原本らくを倒してくらと也ぬ和名抄啄木調の下に胡蝶樂あり自注云延喜八年亭子院童相撲之時山城守藤原忠房朝臣所作也よしもちが胡蝶樂を舞たるかづけぎぬに黄なるひとへを用いたるが折にあひたるふちすとは胡蝶の色黄なればかくいへるにやゆばゝ弓場也ゆばともいばとも通じてよめりたとひゆみばとかきてもゆばとよむへし弓場殿をゆばとのとも又は射ばとのとも云例なりよしもちつゞもれとはかづけもののよなう多くして其いもつゞもるばかりとの心なり原本いつかと云にことをかの三字なと脱しけるにや又脱たるは十の字にて現在のいつかも五日にてありけるにやしれず何こもせよ上文に十二月あ丶さ　公の詞にあすあさて頭注入云是公の詞と云注刈り公は物忌にこまれたろほこなればいへはもつせられましき事也これは道綱を送りて來たる人の言はなるべし宜ものいみいかにおぼつかなからんをうけてのつゞきなれば必六いつかにてはなきはずなり原本にまけものとあるはかゞ物の誤なり下文も同かたきはあひてなり原本に右兵衛中將とあるは右近衛中將の誤なりおほな〳〵はねもごろの儀射伏られしをつよく云ん爲の詞なり原本におほく〳〵とせしは誤りなりあたるへきはづの矢が鞆にかゝりてあたらずしてかつべきものが持になりしとなりそれゆえに道綱の外のわらはが陵王を先舞しとなり次にまひしとは道綱なりおぼえによりてとは道綱の名望人よりすぐれたる故に格別に御衣かりたりと悦べるなりれう王まひし童子も外ならぬ人なればそれも同車してかへられたるなりれう王もののの字

にて道綱はこもれりおもてをおこしはおもてぶせ
の反語也
かくて四月になりぬとをかよりしも又五月十日許まで
いとあやしくなやましき心になんあるとて例のやうにもあらで七八日おほとのにてねん（念）じてなんおぼつかなさになゞといひて夜のほどにてもあればかくくるしうてなんうちへもまゐらねばかくありきせりとみらんもびゞなかるべしとてかへりなゞとせし人をこたりてときくにまつほどすぐる心ちすあやしと人しれずこよひを心みんと思ふほどにはてはせうそこだになくて久しうなりぬめづらしくあやしとおもへどつれなしをつくりわたるによるはせかいのくるまのこゑにむねうちつぶれつゝとき〴〵はねいりてあけにけるよとおもふにぞまして淺ましきをさなき人かよひつゝきけどさるはなでふこともなかゞなりいかにぞとだにとひふれざゞなりましてこれよりはなにせんにかはあやしとも物せんとおもひつゝくらしあかしてかうしなゞどあくるにみ出したれはよる雨のふりけるけしきにてきどもつゆかゝりたりみるまゝにおほゆるやう

よのうちはまつにも露にかゝりけりあくれはきゆる
ものをこそおもへ　女君

十日より下からびんなかるべしとて返は公の言を述るなりさやうにいひてかへりし人は公をいへり公の詞の中におほとのとあるは下文にかくれ玉ひしとある小野宮殿なりこれ九條師輔公の兄にて兼家公には世父なり當時の一所にて猶大切なれはよるひるこゝろをつくしていましけるなるへしをこたりてとは兼家のわづらひのやゝいゆるを云つれなし作りてとはうらめしきふりをせざるなりわたるは日をすごすなりをさなき人は例の道綱なりすでに十六歳なれどもいまだ元服なければ童形也道綱の公の方へたえずかよはるれとも公の女君〇とだえあるふりをうかゞひ得ざるなりいかにともそのよしを問がたからんとなりまして直に女君よりうかゞはるまじきことなりとかれこれの思ひを述られたるなり夜のうちはの歌は玉葉戀二に物思ひあかして見出したるによるふりける雨のなごりみえて木どもに露のかゝりたるをみてと詞書あり松を待にそへたり露よりかけてきゆる思ひをいへ

り後撰集戀一にあひしりて侍ける人のもとに反事みんとて遣しける元良親王くや〳〵とまつゆふぐれと今はとてかへるあしたといづれまされる反し藤原かつみ夕ぐれはまつにもかゝる白つゆのおくるあしたやきえははつらん是亦三代集の比までのかなの正しきを知るへし

かくてふるほどにその月のつごもりにをのゝ宮のおとゞかくれ給ひぬとてよの中いとさわがしかゞなればつゝしむとてえものせぬなりぶくになりぬるをこれらとくしてとはあるものかいとあさましけれはこのごろものす察者どもさとにてなんとそかへしつこれにましてむやましきさまにてたえてことつてもなしさながら六月に成ぬかくてかぞふるはよるみぬことは三十よひるみぬことは四十日になりにけりいとにはかにあやしといはゞおろかなり心もゆかぬよとはいひながらまだいとかゝるめはみざりつれはみる人々もあやしうめづらかなりとおもひたりものしおぼえねばながめのみぞせらるゝひとめもいとはづかしうおぼへておつる泪をしかくしつゝふしてきけばうぐひすぞをりはへてなくにつけておほゆるやう

うぐひすもともなきものや思ふらんみな月はてぬねをぞなくなる　女君

按百錬抄閏讓天祿元年五月十八日攝政太政大臣實賴公薨七十一　榮華にも五月十八日にうせ玉ふとのせり此記につごもりとあるは不審今はかくれ玉ひし後をおよそにいへるにや公より服衣をぬはせにおこし玉へるを女君の心に物しければ折ふし物など縫へる女房か里に出てありあはぬとてかへされたるなり三十よかのこと此卷の始にみそかみそよは我もとにと祝せんとのことあれはそれにあたりていへるなり原本に鶯そおもはへてとあり冲本にをりはへてと直せり歌原本にこもなきとあり此のこは必との誤なり冲本のをりはへて心ゆかぬさまに覺侍る春ならは折はへてと云へきよし勿論なりさならでも何そことにつきて折はへてと云まじきにもあらねども今は鶯も心ありげにおのがなくべき折過て鳴ははづる心なればおもはへでとてを濁てよまんと釋し見ぬれと立かへり案ずれば女君のおもひの折にをりはへてなくといはんかおだしければつひに冲本にしたがひぬさて猶數四反復して歌

と詞とを合せみるに原本のごとくしてての字すみてきく〳〵し言心は友のすくなくなるをおもひてなげくらんとなり案におもはゞのへはかなはずおもはゆの物語なればなり故にかなはなほして言は原本のまゝにして沖本にしたがへり。

かげろふの日記解環中巻之四

かくながら廿よ日になりぬることちせんかたしらずあやしくおき所なきをいかで涼しきかたもやあると心ものべがてら濱づらのかたにはらへもせんとおもひて辛崎へとてものすとらの時はかりに出たつに月いとあかし我おなじやうなる人又ともに人ひとりばかりぞあればたゞ三人のりて馬にのりたるをのこども七八人はかりぞあるかも河のほとりにてほの〴〵とあくうちすぎて山ぢに成て京にたがひたるさまをみるにもこのごろの心ちなればにやあらんいとあはれなりいはんや（頭注に入云此語聞えず日比頃ついな文に出時へきことばとしおぼえず誤りあるべし宣）にいたりてしばし車とゞめて牛かひなどするにむなぐるまひきつゞけてあやし何木こる頃しもいとをぐらき中より來るも心ちひきかへたるやうにおぼえていとをかし關の山ぢあはれ〳〵とおぼえてゆくさきを見やりたればゆくへもしらずみえわたりて鳥の二ツ三ツゐたるとみゆるものをしひておもへはつりぶねなるべしそこにてぞえなみだはとゞめずなりぬるいふかひなき心だにかくおもへはましてこと〳〵

はあはれとなくなりはしたなきまで覺ゆれば目もみあわせられずゆくさきおほかるに大津のいとものむつかしきやどもの中にひきいりにけりそれもめづらかなる心ちしてゆきすくれははる〳〵と濱にいでぬ

おきところなきとは我心ながらおちつかぬさまなり人々のあやしむばかりに公よりうと〳〵しくなりぬる事と文を見合せて女君の心をおしはかるべしたゞ三人のりてと同車の樣にきこゆれと下文にむなぐるま引つゞけとあれば一つ車にはあらじ言心は車にのれる人は三人なりほの〴〵とあくとはやうやくすでに夜の明たるなり木こる比しもとは夏山の茂みを云也木こるは凝敷也原本にはきこりをろしてと有頗讀とかれざりし契本の一本にきこりに樵夫と旁注せしさにては下へかけて穩ならず下文のいとをぐらきの詞にかけて思は右の如く釋しぬ且つ引がへたるやうにとあれば樵夫にはかゝらざるなり上の文を見に牛に物かひなどする間しばし空車つゞけたるなりさて牛に物かひをはりて又車にかけて其山のしげみの中よりのり來るものあらたまれるさまなれば引かへたるやうにと前の容車ひきつゞけての詞にあたりて聞へしされはひきつゞけてあやしの下にしかと句して可なるへし釣舟なるべしとは遠きより舟を島にみなせるなり漢文に島舟と云る如しいふかひなきは女君自ら云ことゝ人とは伴なへる二人の婦人なりはしたなきとは我心のうれへを伴なへる婦人に對して會釋なく我なげきの本色をあらはさんことを恥るの意なりおぼつを原本におほへと誤れりむつかしき屋はむさ〳〵といぶせき家なるべしひきいるは車を挽入也濱は所謂打出の濱なるべし

こしかたを見やれば海づらにならびてあつまりたるやどりの前に船ともを岸にならべよせつるあるぞいとをかしきこぎゆきちがふ舟どもゝありいきもてゆく程にみの時のはてになりにだりしは馬ともやすめんとてしみづといふ所にかれと見やられたるほとに大きなるあふちの樹たゞひとつたてるかげに車かきおろして馬ともうらにひきおろしてひやかしなどしてこゝにて御わりごまちつけんかのさきはまたいと遠かンめりといふ程にをさなき人ひとりつかれたるかほにてよりゐたれはゑふくろなるものとりい

でゝくひなゝとするほどにわりごもてきぬればさま〲あがちなゝとしてかたへはこれよりかへりてしみづにむすびもゝゆきやりもなゝとすなり

うみづらは海面なり消行のこきを原本に誤てうきとせりしみづは清水たるべし凡て地名のやうに記せりおぼつかな　たゞひとつたてるとは樹の木一樹其所にありし也蔭は即あふちの木蔭也うらは其處の裏の方也ひやかしは馬の足あらふ也原本にひやうしと書あやまてりわりごは今の破子やうのもの飯並て食物をいるゝ食器ならんかの崎　させるは即からさき也かのさきと云ひそのさきと云ふ自由に云なせりをさなき人は道綱也わがちはわかちくばるなりこゝにて供人　内なかばゝ亦崎までゆかすしてかの清水をむすびゞて先へ反しやりなゞともする　也えぶくろは蓋し鷹の餌畚なんど賦わりごなんどの衆らぬ時の用意にえぶくろにくひものを入おかれ　なるべしとりいでゝはかくのごとくちかいてよみくせにはとうでゝとよむ也凡かな草　に直にとうでともかける所もまゝある也さて清水にむすぶとは清水を手してくみてのめるを云

原本にし水にけつるとてとせり異本一本にけつるはきつゞの誤とみたりされどもさにては文となさずよりてさま〲に案じみるに源氏等に付のけちと云に結ふ字を用ひ物のけおめなどのけちにも結の字を以ゝ多くは准ずることもある故に此日記を書寫するものもとは結の字にてあ　たらんを行にいへるけちの詞あるに思ひたがへてけつると書しにや　聽におしはかりてむすびのかはに直せりこれら先よみとかへる爲に此ことをえざるの說なりその古書にあたるや否はしらざるなり

さて車かけてその崎にさしいたり車引そへてはらへしにゆくまゝにみれば風うちふきつゝ浪高くなるゆきあふ舟ともをひきかげつゝいくはまづらにそのこともあつまりゐてうたつかうまつりてまかれといへはいふかひなきこゑひきいでゝうたひてゆくはらへのほどにけだいになりぬべくなみかくる　ほくせばき崎にてしものかたは水ぎはに車たてたり

原本に車引かへてとあり恐その字かに轉せしならん　おしはかりて今はひきそへてと直せり蓋此時おか〲車をおりてかちよりゆくなりされば車も

それについてやるなり俗にひつそふてと云意なり下に水ぎはに車たてりに首尾してみるべし往來の舟どもの風波あらき故に舟を岸へひきあけて舟子どもいくに供の男どもが女君たちの御前を歌うたひて過よとよばゝるなりけだいを原本にけい。だ。に作れり分明にかなの倒せし也折しも風あらくて波陸地へ打かくる故はらへのをこたりになるべきといへるなり解怠の字也かなものにも往々漢字のこえにていふ事常なり

見なおろしたればしきなみに（頭注書入云かひもあかけり是は古歌などの詞にやかひは貝なるべし注いみじきひがこと也宜）よせてなごりにはなしといひふるしたるかひもありけりしりなる人々はおちぬはかりのそきてうちあみすゞほどに天下に見えぬものどもとりあけませてさわぐめりわかきをのこもほどさしはなれてなみ居てさゝ浪やしがのからさきなゞと例のかみこゑふり出したるそいとをかしうきこえたり風はいみじうふけどもこかげなければいとあつし

しきなみによせてなごりにはなしとはもとより人のいひふるしたると云るはすなはち上にいへる舟子どものうたひたるうたなるべしなごりは餘波とかけりにはとうたへるは俗に日和などゝあてゝかく所の海上ののどやかなることにいへる詞か又は庭を云へるか庭の訓も海上の風浪なしづかなるにはの詞にかよひてともに平なる意ときこゆさらば今はいづれにつかん庭の方おだやかなるべし風波たかき故に舟より物を陸におろしたてぬればうたへるうたにあへるをかひもありけりとたはぶれたるさまなるべししきなみはしきりなみにて浪の大にうちしくなりしりなるとはしりへなるなりのぞきてとは物のあひよりのぞくにはあらずうちのぞむを云うちあみは網をうつなりとりあげませてとは湖水にうかべる魚ともをとれるなるべし天下云々はぎやうさんに云へる詞なりかみごゑは神楽聲なりこかげは木陰なり

いつしかし水にとおもふひとしのをはりばかりにはてぬればかへるふりがたくあはれと見つゝゆきすぎてやまぢにいたりかゝればさるのはてはかりになりにたり

ひとじは未也たちつてとの相通也ふりがたき源氏にもある詞なり源内侍が年老て猶色めくなどにい

へりこゝにてはあかぬ心にてたちかへりみるにふ
るめかしからずふたびもあたらしく心にくきさまに
立かへる消すがらの景色をもかねて云なるべし
ひぐらしさかりとなきみちたりきけばかゝぞ覚えけ
る

なきかへるこゑぞきほひて聞ゆなるまちやしつらん
せきのひぐらし　女君

和名抄爾雅注云茅蜩一名は蟪子列ゐ小青の蟬也和名
比久良之わがなげきかへるによせたるにやきほひ
はゝらそう意又わがなげきにあらそふやうなると
よめる平原本にきせゐとかなあやまる

とのみいへる人にはいはず
右の歌は女君の心中に占て作なへる婦人へもしめ
されぬ也されば歌の前にかくぞおぼえけると書り
はしりゐにこれかれうまうちはやしてさきだつもあ
りていたりつきたればさきだちし人々いとよくやす
みすゞみてこゝちよげにて車かきおろすところによ
りきたればしりなる人

うらやましこまのあしとくはしりゐの
といひたれば

しみづにかげはよとむものかは

はしりゐは近江の名所走井なりその所は今云はし
りゐにやしらすさきだつもありてとは前にかたへ
はかへりとある供人とも也いたりつきたればとは
跡より今そこへ来つきたる供人なり其に行あひ出
あひぬることを言すくなによくかきなせりこゝに
しりなる人とは先だちこゝまでかへりたる人にお
くれたればしりなる人といへるなり馬の走るにそ
へたり連歌のやうに言てかたみにたはぶれたるな
りさしもの女君の家人ともなればおのづから風致
もあるならんしみづは前にみえたり

ちかく車よせてあてなるかたにまくなゞとひきおろ
してみなおりぬよあしもひたしたればこゝら物思ひ
はるけるやうにぞおぼゆるいしどもにおしかゝりて
水やりたるひのうへにをしきにすゑてものくひて手
づからすいえなゞどする心ちいとたちうきまであれ
と日くれぬはなどゞのかすかゝる所にてゝ物な
ゞど思ふ人もあらじかしと思へども日のくればわ
りなくてたちぬ

蓋し車に引し幕をおろして前にいへるあふちの木

などのある如きわたりに打たぐらせるなるべしあてなるかたとは其場所にていちすぐれたるよき方に引たるならんあてはあて人のあてにて貴をあてなる人と云り直し源氏などにもあてびとゝいへり貴人の上にもよしあしの品多かるべけれどもすべて木性の官が貴人のあたりまへにして貴人ならばよき人なるべきわけにてあて人といひつけたる詞なるべしあては實には當の字たるべし皆とは伴ふる婦人と女君と三人車より下たるなりいしは石なりひは樋なり契本に夫木集はしりゐのかけひの水の音そひてのどかにすぐる望月の駒と云歌をひけれどもこゝにはしかとかなひかたかるべしをしきは折敷なりすいえはあつき比なれば原本のえははんの轉にて水飯なるべしとかねて余が旁注しおきしかとも尾本をみてかれに隨て水宴、直しぬ原本のまゝに同くはありたき故なり其余の文義はよくきこゆ

いきもてゆけばあはた山といふ所にぞ京よりまくもちて人きたる此ひる殿おはしましたりつといふをきくもいとぞあやしきなき間をうかゞはれけるとまでぞおぼゆる扨なむこれかれとふなりわれはいとあさましうのみおぼえて來つきぬ

あはた山は山城の名所粟田山なりまくは幕なりひるは晝なりといは兼家公なりなき間のなきは不在なりさてはしかしてなり此のなどはなんどのことばにあらず何とて女君の同道せし婦人のとへるならん

おりたれば心ちいとせんかたなくくるしきにとまりたる人々おはしましてとはせたまひつればありのまゝになんきこえさせつるさとかこの心ありつるあしうもきにけるかなとなんありつるなどあるをきくにも夢のやうにぞおぼゆる

車よりおりたればなりはらへしに供せで家にとまりたる人々のいへるさまなりおはしましてとは公の來られたるなり原本にさとかとあるを尾本にはさことかと直せりしかれどもさとかはしかとかと云心なれば原本のまゝにて心廻すべければもとのまゝにす

又の日はごうじくらしてあくる日をさなき人とのへといでたつあやしかりけることもやとはましとおも

ふも物うけれどありし濱べをおもひ出るこゝちのし
のびがたきにまけて
ごうじのごうは困なりをさなき人は例の道綱なり
とのへとは父親兼家公の方へなり公の道綱へ女君
このだひのしのびありきの事を具さに問れんも物
うけれどとなりまけては曲(マゲ)てとも思へども沖本に
思ふには忍ぶることぞ負にけると云歌をひければ
それに從て負てとす
うき世をばかばかりみつのはまべにてなみだになご
りありやとぞみし　女君
辛崎のわたりをすべて御津(ツ)の濱と云なればなりか
ばかり見つとうけたるなり
とかきてこれ見給はざらんほどにさしおきてやがて
物しねとをしへたればさしつとてかへりたりもしみ
たるけしきもやとしたまたれけむかしされどつれな
くてつごもりごろになりぬ
さしつとては然(シカ)しつとなりもしおくれる歌を公の
みたまひてそれによりてたづねよられけんかと下
まちをせしとなり
さいつ比つれ〴〵なるまゝに草ごもつくろはせなど
どせしにあまたわかなへのおひたりしをとりあつめ
させもやのゝきにあてゝうゑさせしがいとをかしう
くらみて（書入に黄ばしげり　たゞさまなけ本）水まかせなどとせさせしが
今色づける葉のなづみてたてるをみればいとかなし
くて　いなづまのひかりだにみぬやがくれは軒ばの
なへもものおもふらし　女君
とみえたる
さいつ比はさき也つは休なり近習と書つれ〴〵は
何もしわざなくぼなるなりなへは苗なりすべて物
の生たる初を云もやはおもやの略な　母屋と書ば
屋の軒なりくらみてはくろみなり水まかせは水を
引てうるほすなりなづみ　泥の字こゝにてはいき
〳〵せずしほるゝさまを云べしなづみてたてると
は人の物思ひあるさまに草の葉もみゆるとなりさ
ればいとかなしくてとうくるなり歌の心は明らか
なり公の來る影だにまれなる屋なればふたりの草
さへものおもふさまにみゆるなりいなづまは稲妻
な　公によせたり必とみえたるを歌よりつゞけき
くべしやがくれの詞よきことばと云つべし
貞觀殿(ヂヤウクワンデン)の御かたはをとゝしないしのかみになり給

ひにきあやしくかゝる世をもとひ給はぬは此さるま
じき御中のたがひにだればこゝをもけうとくやお（書入云衍なり宣）
ぼすにやあらんかくことの外なるをもしり給はでと
おもひて御文奉るついてに

をとゝしはをちとしにて去々年なりないしのかみ
は尙侍なりさるまじき御中とは世俗にのがれぬな
かと云ごとし按に貞觀殿の女御の事上卷の末 至
て女君とひたと往來ありそこにいへるは東宮の御
おやのごとくしてさふらひ玉へばとあり其時兼家
公東宮の權の亮なれば女御へつねに參たまへりし
ならん女御は女君は公へ二心もありてうとくある
とおぼしたがへられたるにやかつてさにはあらず
して女君の方より二た心はなきに公よりことの外
にうとまるゝをいへるなりこゝは此所にて女君の
宿りを云こなたよりまゐらす文なるを御の字をそ
へたるは向をたふとみてなりかくもかく事と見ゆ
貴き方よりおこさるゝ歌のかへしを御かへしとか
ける類なるべし

さゝかにのいまはとかゝるすちにてもかくてはしは
したゝじとそ思ふ　女君

ときこえたりかへりことなにくれといとあはれにお
ほしのたまひて

たえきともきくぞかなしき年月をいかにかけこしく
もならなくに　尙侍

女君の歌の今はとかゝるを原本にかきるとありく
ものあしがきいがきの詞あれど上よりいひくされ
る詞おだしくもきこえず尾本に懸と旁注せるによ
りてかゝるとなほせりさゝがにの秀句はさゝがに
のいと云へば今は迄にかゝればなり又かゝるとし
てもくもの絲なりすぢも又くもの緣語也又下の句
にかくてとひたえしとも云始終くもによせてよ
める也さゝがには蜘蛛の異名也詳せにくさり過た
るといはまし

これを見るにも見きゝ給ひしかばなゞとおもふにい
みしく心ちまさりてなかめくらすほとに文あり文も
のすれどかへりこともなしはしたなげにのみあゞめ
れはつゝましくてなん今日もとおもへどもなゞとそ
あゞめるこれかれそゞのかせはかへりこと書柾に日
くれぬまだいきもつかじかしとおもふほとにみえた
る人々猶あるやうあらんつれなくてけしきを見よな

〻といへはおもひかへしてのみありつゝしむことのみあれはこそあれさらにこじとなんわれはおもはぬ人のけしきばみくせ〴〵しきをなんあやしとおもふな〻とうらなきけしきなればけうとくおほゆつとめては物すべきことのあればなむ今あすあさての程にもな〻とあるにまことゝは思はねどおもひなほるにやあらんと思ふべしもしはたこのたびはかりにやあらんと心みるにやう〳〵又日数すぎゆくされはよと思ふにありしよりけに物そかなしき

文ありは公よりの文なり文物すれどより以下は公の文の詞なり人々のかへりごとせよとすゝむる故こなたよりかへりごとかきてまゐらす使の公の方へ来行つくまじとおもひ消るところへ公の来られたるなりつれなくてはこゝはつれなしつくりてなりつゝしむことあればより以下は公の詞也みじとを原本にみずとあれどみじに直しぬつとめてはより下又公の詞なりありしよりげにはありしにまさりてなり伊勢物語わすれなんと思ふ心のつくからにありしよりけに物ぞかなしき

つく〴〵と思ひつゞくることは猶いかで心として祈

にも死にしがなと思ふよりほかの事もなきをたゞこのひとりある人をおもふにぞいとかなしき人となしてうしろやすからん女などにあつけてこそしかも心やすからんとはおもひしかいかなる心ちしてさすらんすらんと思ふになほいとしにがたしいかゝはせんかたちをかへて世を思ひはなるやと心みんとかたらへはまだふかくもあらぬなれどいみじうさくりもよゝとなきてさなりたまはゞまろもほうしになりてこそあらめ何せんにかは世にもま　らはんとて、みしうよゝとなけばわれもせきあへねどいみじさにたはぶれにいひなさんとてさてもかくはてばいかゞし給はんずらんといひたればやをらたちはしりてにすゑたる鷹をにぎりはなちつ見る人もなみたせきあへずまして日くらしがたしこゝちにおほゆるやう

あらそへばおもひにわぶるあまぐもにまづそるたかそかなかしかりける　女君

たゞ此ひとりあるとは道綱の事なり右歌原本上句の木あまくとばかりにて下二字脱してなし尾本にもにとつけしに一たがひて如此せりおもひにわぶるも尾本におもひぞとなほせり今に原本の如くせ

りいづれにも歌かけに前の詞にも語脱ありたるや（書入云この說是なり宣）
おぼつかなけれど姑くかくしてやみぬ
にそ
此二字原本には此次の册の始に混入今はこゝに付
且つ契沖本の內省きたるもあればなくても可なる
べけれどももとありしものなれば姑こゝに附する
而已そのまゝ用いば上の歌につけてよむべし

かけろふの日記解環中卷之五

日くるゝほどにふと見えたり天下のそらごとならん
とおもへばたゞいまこゝちあしくて漸（書入云誤りなるへし聞え離し扱是やうやくとかなづけたゞはびりことなりやうやくはやう／＼といふを後にあやまりたるとなへなりまたやう／＼と云も後の音便にてたゞしくはやゝなり宣）はとてやりつ
原本にひくるゝほととはふみみえたりとあり頗よ
めがたし契沖本を閲するにはをかと直し且つやう
やく返事せんとにやと釋せり愚案にみえたりとあ
れば文にはあらで公の直に來られしなるべしされ
ばははにを誤みはとを誤たるものにして上のとは
衍字にして日くるゝほどにふと見えたりと直しぬ
ふみみえたりの詩おだやかならざれば契本にそむ
きて私に案をつけしなり天下のそらごとゝはつよ
くいへる詞にして來られたるも實心にはあるまじ
例のそらごとのみなるべしとなり女君のかやうに
推はかりて我はあはずして人して今はこゝちあし
けれは漸はとてかへされたりともいはるべければ
かく釋しぬ
七月十日にも成ぬれは世人のさわぐまゝにぼにのこ

ととしごろはえとこゝろに物しつるもはなれやしぬらんとあはれなき人もかなしうおほすらんかししばしこゝろみてすらときもせんかしとおもひつゞくるに涙のみたりくらすに例のごと誦じてふみそひてありしなき人をこそおぼしわすれざりけれ（書入云前より記つゞきては文聞の讐にも聞ゆ又文君の心中の様に聞ゆ宜し）ほからでかなしきものになれとかきてものしたり（略）

ほには益也をせにとよめるに同しまとこゝろ冲本は圓心にてもろ心にやと疑ひて注せり余はすでにとを衍とみて眞心と直しこれと前原本をいかしてそのまゝ用ゐにしかずと冲本に従て圓心とは改めて眞心としても両手をまてといへば心は同じことなりなき人は亡人にて女君の母なり原本に齊を濟につくりてすら濟と書り其すらを尾本にはすくに直して濟は齊にして粥齊となせり蓋し粥をすくとよみたるなり此説尾本なればもしは淡齋の説にやいづれにしてもいとむづかしければ今余はかれ（書入云これにてもわろし宜）に不從すらは其まゝすらのかなにして心みてすらと上へつけてよみ濟はかりを齊の字になほして言心は年角の盃に海の雪に公よりも齊饌をおくられつゐが今年はうとき中になりぬればいかゞあらんしばしふみてよし贈られずば自ら齋ことも行はんとおもひしに例のごとく齋饌を調しおくられ文をもそへてあれば母を忘れさせ玉はざりしと悦へる詞なり契本にとほからでかなしきものは身なりけりうきよをすてゝもよしをしらねばの歌をひけり此歌何に出しにや未考得

かくてのみおもふに猶いとあやしめつらしき人にうつりてなどともなく俄にかゝることをおもふに心さへしりたる人のうせ給ひぬるその、宮のおとゞの御めしうどもふりこれらをはおもひかくらんあふみぞあやしきことなどありて色めくものなめればそれらにこゝにかよふとしもせじとかねてたちおかむとならんといへはきく人いでやさらずともかれらいと心やすしときく人なればなにかさわきさわきしうかまへたまはずともありなんなとそいふもしさらずは先たいのみこたちかならんなどうたがふともあれかくもあれたゞいとあやしきをいるはを見るやうにてのみやはおはしますべきこゝかしこにまうでなどともし給へかしなど只此比はことなくあくれはい

ひくるればなげきて

小野宮の大臣かくれさせられたる事上卅に見めし
うどは召人と書姿にしておもひ人なり近江はおも
ひ人のよび名なるべしなにかさを原本なにか七と
あり契本には七を九として何かくかと疑へりこれ
は不可なり七は七文字にあらず形に似て七になり
たるなり七もむかしのかなの又一つにてかなのさ
にあたれり例せばふるきかなにあのかなに似て乃
と書るかな有これ見の畧なりみとよんで通せるこ
と古書に往々有之日本紀にもあるなり今時から思
へばいかゞしき假名なれどもふるくはかやうに用
たること今これらもその殘れるならん然ればなに
かさわざ〳〵しうとよみて意通せざるなりさとは
しかくと同せんだいは先帝なりかなもののよみ也
隋の煬帝の性惡を儒者がにくみてやうだいと唱ふ
るのみならずみこは皇子なり入日を見るやうとは
氣のおとろへたるもやうを述るなり
さらにいとあつきほとなりともげにさいひてのみや
はとおもひたちていし山に十日はかりと思ひたつし
のひてとおもへばはらからといふはかりの人にもし

らせず心ひとつにおもひたちてあけぬらんとおもふ
ほどにいではしりてかも河のほど計などにぞいか
でき丶あへつらんおひてものしたる人もありあ
けの月はいとあかけれどあふ人もなしかはらにはし
に人もふせりと見きけどおそろしくもあらず
おもひたつの詞しきりにいへれど心はやゝ異なる
故み丶にたゝずなんある十日ばかりといへるは石
山へまうづる往反をかけて參籠の日數をいへるな
らんすでに有明をいへれば月なかばすぎての出立
ときこゆ且人々にしらさずしていではしりとあれ
ばかちよりなるべし
粟田山といふほどにゆきさりていとくるしきをうち
やすめばともかくもおもひわかれず只涙ぞこぼる丶
人や見るとつれなしつくりてたゞつゞしりてゆきも
てゆく山しなにてあけはなる丶にぞいとけむせうな
る心ちすればあれか人かにおほゆる人は皆おくらか
しさいだてなどしてかすかにてあゆみいけばあふも
のみる人あやしげにおもひてさゝめきさわぐぞいと
わびしきからうじていきすぎてはしりゐにてわりご
なとものすとてまく引まわしてとかくする程にいみ

じくのゝしるものくいかにせんたれならんともなる人みしるべき者にもこそあれあないみじとおもふほどにうまにのりたるものあまた車ふたつみつひきつゞけてのゝしりて來ぐわかさの守ののぼるなりけりといふたちもとまらでゆきすぐればおもふことなげにも行かなさるはあけくれひざまづきありくもののしくてゆくに社はあゞめれとおもふにもむねさくる心ちすげすども車の口につけるもさあらぬも此幕ちかきわたりよりつゝあげさわぐふるまひのなめうおほゆること物に似ずわかとものの人わづかにをゝたちのきてなゞといふめれば例もゆきゝの人よる所とはしりたまはぬかとかめ給ふはなゞといふをみるこゝちはいかゞはある

たゞつゞしりてを原本たゝそゝしりてとあるを契本たゝけうしてんと疑を注せり尾本も亦同愚おもへらく原本のりのかなをはぶきて興じてといへるおだしくもきこえず余は則原本のそに邊を加へてつゞしりと釋すつゞしりは行吟の心なるべしつれなしつくりはわざとさらぬ禮をするなりあはた山辛崎のはらへの所にすでに見やましなは山科山城國宇治郡の郷名にてひろくわたれる地名なりけむせうは顯證の文字なり意は字の如くはきりとあらはれたる心也むをはぶきてけしようとよみくせなりさいだては先たてなりいはきのひゞきなりさゝめきはさゝめごとなどのさゝにて私語なり下にさわぐの詞あればざんざめくともきこゆれども不可なるべしからうじては辛の字にて心はやう〳〵してなり走井も前に見わりごも同さるは然あるものはなりひざまづきは跪なりものは原本に物の字なれども今は者の字にかゆ下のものは物なるべしもしくは物々しくとよまんなれどもものしくにてもきこゆれば上の者は公のあたりへまゐりては常にひざまづきありく者との心なれば上のものは上文に屬へしなめうはなめしにて無禮なり物に似ずとはたとへを何にとるべきもなきなりをゝは戒る聲なり

やりすごして今はたちてゆけば關うちこえて打出の濱にしにかへりていたりたればさきだちたりし人舟にこもやかたひきてまうけたり物も覺えすはひのりたれははる〳〵とさし出してゆくいく心ちいとわひ

しくも苦しくもいみじう物がなしく思ふ事たぐひなし申のをはりはかりに寺のうちにつきぬ死にかへりは（頭注書入云死ぬと云ことをつよくいへる詞なり）猶いきかへると云がごとし上の見る心ちの句へかけてよむべし（書入云ひがこヽなり宣）ゆやに物なゝとしきたりけれはいきてふしぬ心ちせんかたしらずくるしきまゝにふしまろびうるかなゝなゝよるになりてゆなゞとものして御堂にのぼる身のあるやうを佛に申すにも涙にむせぶとすゞまでいひもやられず

ゆやは沖本に齋屋と注せり尤從にたれりふとよまば浴室ときこゆれとさにはあらずゆはいみに通して清淨なるを云うるかなな此れ即原文のごとし沖本に日本紀に出として駿の字をうるけと旁注せり尾本もまた如此今日本紀につきて見るに神代下卷彦火々出見尊の兄火の闌降の命と幸易の一書に癡駿鉤と出たる即此れなり意は癡駿の字義のごとく極めておろかなる心なりかきくけこの相通にてうるけを今はうるかと述られたるの釋ときこゆ穩ならぬ説なれども又外に案もつかねば姑かれに從ふうるかとして下にななとあるを一つによみてうるかなんなんと强てよませり上のなんはなるなり下のなんは助語なり所詮うるかなるなんとよんで其の心はあまりの物ぐるはしさにふしまろびおろかものになりなんとの意ならん原本涙にむせぶとまでとあるはすを脱せるなり

夜うちふけてとのかたを見出したれば堂は高くてしもは谷とみえたりかたきしに木どもおひこりていとこぐらかりたる廿日の月夜ふけていとあかかりけれは木蔭にもりて所々にきえがた（頭注書入云きしかたの誤か宣）ぞみえわたりたる見おろしたれはふもとにあるいづみは海のごと見えたり

もりは月影のもるゝなり廿日の月なれはあり明なれども木のしげみにてきえがたの月のやうなりとみゆるといへるにやうみを原本にはかみとあり尾本にて直せりごとはごとく也

かうらんにおしかゝりてとはかりまほり居たれはかた崖に草のなかにそよ／＼しらみたるものあやしき（書入云いか、）こゑするをこは何ぞとひけれはしかのいふなりといふなどか例のこゑにはなかさらんとおもふほとにさしはなれたゝ谷のかたよりいでうらわかき聲には

えかにあなきたゞめりきく心ち空なりといへばおろかなり

かうらんは勾欄なりそよ〳〵は物のうごく聲なりなどかは何とかなり原本になからさらんとありさにてもきこゆれども異の一本になかさらんかと疑をなしたり故にきこえよきにしたがへりいでは上へつけて出ともよまるべきなれども下へつけて發語とせりためりはたるめりなり委くいはゞ鳴てあるめりなりなきたんめりとよむべしうらわかきのうらはうらさびしうらがなしのうらと同じ勿論そへたるかろき詞なれどもうらは裏にて心にもかよへば心あひをかろくのぶる詞ときこゆめなきは雌鹿の鳴なり

おもひいりておこなふ心ちものおほえてなほあれば見やりなるやまのあなたばかりにたもりの物おひたるこゑいふかひなくなさけなげにうちよばひたりかうしもとりあつめてきもをくだくことおほからんとおもふにはてはあきれてぞゐたる

原本にみやかなる山とあり冲本によりてみやりなる山に直せりみやりは舘目路の詞のごとしさてたもりは田守也原本におもりの物とあり冲本の一本におをだとかへて家持の集に山田もるたもりのひたの心にて慈する鹿の道ぞとめつると云歌を引ぬひたは鹿なゝとをおどす引板なりとめはもとめの古語なり此釋によりて此本文の心もあきらかなりおひは追なり鹿なとをおふ聲なり

扱後夜おとなひつきつれはおりぬ身よはければゆやにあり夜のあくるまゝに見やりたれはひんがしに風はいとのどかにてきり立わたり川のあなたは繪に書たるやうにみえたりかはづらにはなちうまとものあさりありくもはるかにみえたりいとあはれなりになくおもふ人をも人目によりてとゞめおきてしかはいではなれたるついてにしぬるたばかりをもせばやとおもふには先此ほだしおぼえてこひしうかなしなみだのかぎりをぞつくしはつるをのこどものなかにはこれよりいとちかくなりいざさくらだに見にはいてもくちひきすごすときくぞからかゝなるやなゝといふをきくにさて心にもあらずひかれいなばやとおもふ（書入云術なり）る

あさりは求食なりになうは多くは二なきと釋せり

古物がたりにもある詞にてもしくは其はじめはふたつなきといひとなへしを二の字にかきなどして二なきの詞も出たるやとうたがはる所詮兼良公の御說にしたがひて似なきの義を用へしおもふ人は例の道綱なり原文いさうくなたの身になくらいたもくちひきすこすと云々一向によみときがたし然るを契の一本に今本文にしるせしごとく直せりそれにても落つかざれとも盖水府の御本どもにかくのごとくなればもとあやまりあり來りたらんもしられず此文言にては外に案もつくべき樣もなきをもて契の一本にしたがへり其本にはさくなだにとあれども谷の名をいはゞ櫻谷の名のこれば今姑さくらだにゝ作れり後來もしくは善本いで又さなくとも聰明の君子の考をのこせるのみさくら谷の末の詞にいたりても文義も聞えがたけれども櫻谷の地名をいはゞ上文にこれよりいとちかくなりいざさくらだに見にとつゞけてきかるちかくなりはにあの反なゝれば其谷は最近くにありと釋せらるゝなり下の詞に心にもあらずひかれいなばやと女君いへるを以ていさゝか案をつけて見るに女君の公に對して何かと物しくいひてかく忍び物まうでしてあるを櫻谷も中臣祓にあるさくなたりなどに言かよへばいさゝかのもよりの詞にすがりて諷諫の氣味ありて女君のとくかへられずしていそがれぬをそしりたるやうにもきこゆされども心いきのみの釋にて文義を得釋せねば此釋も止まんにはしかざるか

かくのみ心つくせば物なゞともくはれずしりへのかたなる池にしぶきといふ物おひたるといへばとりてもてことといへはもてきたりてゞげるけにあへしらひてゆをしきりてうちかざしたるぞいとをかしうおぼえたる

和名抄水菜類云蕺は祖立反養生秘要云之布木おひたるは生たるなり原文におもひとあるは謬なりもてこととは持て來れよなりけは尾本に饌と旁注せり今それにしたがふゆは柚なるべし柚を切てなりしは休字也打かざしはうち出なり盖しぶきを汁物などにして柚をきりてあへしらひたるならん俗に云吸口などにしたるなり

さては夜になりぬ御堂にてよろづ申なきあかして曉

がたにまどろみたるに見ゆるやう此寺の別當とおぼしき法師てうしに水をいれてもてきて右のかたひざにいるゝとみるふとおどろかされて佛の見せ給ふにこそはあらめと思ふにまして物そあはれにかなしくおぼゆる

海人藻屑に所見仁和寺東大寺興福寺六勝寺北野四天王寺棍來高雄鶴岡佐女牛等の仙利并神社等別當あり三代實錄に藥師寺西寺等にも見ゆ日吉小野八幡の別當古記に見ゆ榮華物語に太[illegible]に見ゆいまだ石山の別當古書に見あたらずべたうと唱るなりてうしは銚子の字なるべしかたひざは片膝なり

あけぬといふなればやがてみだうよりおりぬまだいとくらけれど海のおもてしろく見えわたりてさいふ〳〵人廿人ばかりあるをのらんとするふねのきしかげのかたへばかりにみくだされたるぞいとあはれにあやしき見あかし奉らせし僧のみおくるとて岸にたてるにたゞさしいでにさしいでつればいと心ぼそげにてたてるを見やればかれは目なれたるらん所にかなしくやとまりて思ふらんとぞたる 書入云みの誤りか宣

めなれたるらんところの所の字を原本には二字にあやまりわかれて一つにとなれりうるは心うるとにや

おのこどもいまこんとしのふゝづきともなひまゐらんとよばひたればさなりとこたへて遠くなるまゝにかげのごとみえたるもいとかなし空をみれは月はいとほそくてかげは海のおもてにうつりてあま風うちふきてうみの面いとさわがしうきら〳〵とさわぎたりわかきをのこどもこゑ細やかにておもやせにだると歌をうたひ出たるをきくにもつぶ〳〵と泪ぞおつるいかゞさき山ぶきのさきなゝどいふ所〳〵みやりて蘆のなかよりこぎゆくまだ物たしかにもみえぬほとにはるかなるかちのおとして心ぼそくうたひくる舟ありゆきちがふほどにいづくのぞやととひたれば石山へ人の御むかへにとぞこたふなる此こゑもいとあはれにきこゆひめいひおきしをおそくいでつればかしこなりつるしていでぬればたがひていくなゝめりとゞめてをのこどもかたへはのりうつりて心のほしきにうたひゆくせたの橋のもとゆきかゝるほどにそほの〳〵とあけゆくちどりうちかけりつゝとびちがふものゝあはれにかなしきこと更にかすなしき

てありしはまわにいたりたればむかへの車いできたり京にみのときばかりいきつきぬ
今來ん年のふんづきを原本にいまらいねんの友月となせり今此かなのさまをはかるに文月の文を友にあやまり文月とあれば上もこんとしとやはらげかくべき理なるに來年とかきしをかなか轉じてその來年か又かなのらいねんに轉輾したる者也原文に又とほくのとを脱してをくとせり又或は遠とありしかをになりたるもしらず遠くのかなは古はとほくなり雨風を原本に又ある風とあやまれりつぶ〲は泪のをつる光景なるべし伊香崎山吹の崎皆近江の名所也今古集物の名かぢにあたる浪のしづくを春なればいかゞさきちる花とみざらん契本に顯仲家集いはねどもくちなしいろにしるきかなこや音にきく山吹のさきと云歌をひけり又源氏こてふの卷に風ふけば浪の花さへ色みえてこや名にたてる山吹のさきひめは秘するなりかしこなりつるとは蓋女君の方にあらぬ衆家公の方の下人なるべしかたへの詞はすでに辛崎のはらへのときにもありしことばなり心のほしきとは心まかせに何にても歌てゆくなり拾芥抄大橋の部に山崎勢多宇治と三橋の其一也勢多は近江なり山崎には今なきなり濱わとはわは輪のごとく廻りたる所をいふうらわのわも義同爰のかなにうらはとせるは本義にあらずありしとはすでにまゐりさまにいたりし所に又來を云

かげろふの日記解環中巻之六

水母子著

これかれあつまりて世界にさてなゞどいひさわきけることなゞどいへはさもあらはあれ今は猶しかるへき身かはなゞとぞこたふる

石山より下向して家におちつかれたれば家人があひあつまりて女君のこのごろの伎倆(ワザ)を何くれと世間に風説せしことをかたるにこれまでのごときのしかるべき身にあらねば人の風説をきゝても今は何かはせんとこたへられしなりさもあらばあれとは一向事を打捨たる詞なりさてなとは然なんどなり

おほやけにすまひの比なりをさなき人參らまほしげにおもひたれはさうぞかせていだしたつまづとのへとてものしたりければ車のしりにのせてくれにはこなたざまに物し給ふへき人のさるゞべきに申つけておきあなたざまにときくにもさまして淺まし

又の日もきのふのごと參る參るさまにえしらでよきりは所のざふしきこれらかれがおくりせよとてさいだちて出にければひとりまかゞでゝいかに心に思ふらん例ならましかばもろともにあらましをとをさなき心ちに思ふなるへしうちくんじたるさまて入くるを見るにせんかたなくいみじと思へど何のかひかあらん身ひとつをのみきりくだく心ちす

すまひの比とは例七月相撲の節なりさうぞかせては裝束せさせてなりいまだ元服なきまへは童形(トウギャウ)なればすべて道綱ををさなき人といへりまづ殿へとは兼家公のやかたへさして參らせるなり車のしりにのせてとは公の乘車の後のかたに道綱をいつもかやうの折は同車してかへり玉へるにとなり所のざふしきは藏人所の雜色なりかれは道綱を云なりさいだちは先だちなりくんじは屈の字なり所の字を原本に示の草書をあやまり寫して一つの二字にわれたり沖本にその由をいへり

かくて八月になりぬ二日のよさりがたにはかにみえたりあやしと思ふにあすは物いみなるを門(カド)つよくさゝせよなゞとうちいひちらすいとあさましくものゝわくやうにおぼゆるにこれさしよりかれひきよせねんせよ〳〵とみゝをしそへつゝまねさゝめきまとは

せばわがひとりのおれものにてむかひゐたれはむけにくゝじはてにたりとみえけん

又の日もひくらしいふことはわが心のたかはぬを人のあしうみなしてとのみありいといふかひもなし

明日は物忌よりは公の從者どもへ火急に命せらるゝ體なり故に湯などのわくやうに覺ゆるとなりこれさしよりの下は又公の此物にさしより彼物へ引よせて何かはしれず此事を心にかけてわするゝな／＼などゝ耳によせてひそかにいひつけらるゝ體をしるされたりとみゆるなりまねは學さゝめきは私語まとはすは契本にはまどはすと濁をさしたれども道綱をちかくよびて親切にのべらるゝ體ならば淸て續はすにてあるべしそのやうすを女君の心に道綱へ何事を云ふくまさるゝやおぼつかなけれど今はさし出とふべきにもあらねば我ひとりはおろかものになりてそれにむかひて居るのみとなりおれものは上にもある詞にてしれものなどの意に同きことばなりいふかひなしは毎にいつはり多ければ何ほどよきさまに申されてもいとかひもなきとなり

いつかの日はつかさめしとて大將になるいとまさりていともめでたしそれよりのちぞすこししば／＼見えたるこの大ざうゐに院のみたうばり申さんをさなき人にかうふりせさせてん十日の日とさだめてすることゞもれいのごとしひきいれに源氏の大納言物し給へりことはてゝかたふたかりにゝだれど夜ふけぬるをとてとゞまれり

兼家公系圖曰天祿元年八月五日任二右大將一云々道綱卿も是歲十六元服乃叙二爵從五位下一と系圖に見へたり其門地における頗おくれたる元服なるべしこれ既に先不幸と云べし即亦女君の不幸也其事余別に辨せりひきいれとは加冠の人を云冠を着せそむる俗に云えぼしおやなりもとどりを引入るの義にて名づけたりこの大納言其人考がたし博物の君子にのこしおくめり大嘗會をかなものには大ざうゐとかきよむもかくよむは常の事なり原本には大ま衞とあり本性を本上とかくならひなれば大上とありしがまに變せしとみゆ院のみたうばりとは院の御給のことなり職原抄式部省の下本省において諸國の一分召を行ふ史生これを一分といふ内給院

宮大臣已下參議已上皆年給あり式部卿行之也とあり內給には掾二人目三人一分廿人院宮大臣已下皆差別ありその內給とは主上の御よけものとして女房などに給るなり其掾等には御心むけの人をたれにても任せらるゝことと見ゆ抄に院宮といへるは院の御所と中宮とをさすれば院の御給も內給のごとし蓋此ノ歲新帝御代始に行はるゝ大事につきて院の御給も行はるゝについてよき折と公の思めして元服させて敍爵をかふむらせんとのことをかくいへるならんさて此段の原本大に錯簡あり此冊の八丁目の終源氏大納言より次の九丁めを越て十一丁めの首物し玉へりにつゞくさてその十一丁めの終より九丁へかへり其九丁の終ひ火ともすほどにの句詞にもの一字をそへて十一丁めの首なりぬへつゞけるなり

かゝれどもこたみや限りならんとおもふ心になりにだり九十月も同じさまにて過すめり世には大上會のごけいをとてさわぐ我も人も物見るさじきとりわたり見ればみこしのつらちかくつゝましとおもへばめくれておぼゆるにこれかれやいでなほ人にすぐれ給へりよしあなあたらしなともいふめり聞にも物見のすべなししも月になりて大上衛とてのゝしるべき

大上會のごけいとは此會の前にみそぎはらへあるを御禊と唱るなり物みるにて何すへしさじきは其來由は神代八岐大蛇より起る人王に至ても所々に見假屋と書これをさずきと訓す即今云さじきなり原本にはさしきとてとあり今は尾本を以て直せりみこしは主上の御輿なり其儀式は江家次第十四卷に委載之つらは頭也ほとりなり原本につらしとおもへとと有これあやまりにて契本をもていまかくなほしぬ尾本にはづかしと思なりと注せりしかしおもへとは原本のまゝに契本いづれも同けれとも下へのつゞきいかゞなれば余は今おもへばと又直せりこれかれ以下は女君へ人々のすゝむる詞なりなほ人はひろき詞にてすべて古書に多みえてそのさす所はさまざまなりこゝにいへるなほうどはたとへ攝關のたふときも天子よりしてはなほうどなりあたらしとは女君のをがみに出立たまはぬを惜める詞なり

その中にはすこしまさかく見ゆる心ちすかうふりゆ

ゐに人も又あいなしとおもふ〳〵わざもならへてとかくすればいとこゝろあはたゝしことはつる日よふけぬほどに物して行幸につきてあがりぬべかりつれどよのふけぬべかりつればそらむねやみてなんまかンでぬるいかに人いふらんあすはこれがきぬきかへさせてゐてんなンどもあればいさゝかむかしの心ちしたりつとめてともにありかすべきをのこどもなンどまゐらざンめるをかしこにものして行幸にとゝのへんさうずくしてこゝよとて出られぬよろこびにありきなンどすればいとあはれにうれしきこゝちすその中にはを其なかにはときりてその心は此頃大上ゐにつきて何くれといとまなきに合せてはすこしたび〳〵見えるやうに思はるゝとなりあいなしは愛相なき（六）なり言心は道綱の元服のことを公の何くれと心を用いらるを悦こばしく思からあいさうもなき公と思ひつゝながらもうれしき故に女君は勿論とやかくと心いそがしとなりあはたゞしとは右のわけなりならへては馴習なり事はつる日とは已に首服のことをはりたるその日を云べし則その夜女君のかたへ公のおはせしなり行幸のことにつきてすぐに參內すべかりつるにさだめて何くれと又いとまなくして夜も更すぐべきかと思て胸やましきなンどいつはりごとして出來りて今こゝへ參しとなりいかにいふらんとはいつはりやみの體を人々もよくしりなどして御所には人のいかゞいふらんとおぼつかなしとの文言なるべしこれがとは道綱なり位袍をきせてつれて參內せんとなりゐはひきゐてなりつとめては明早也ともにとは道綱の供をいふなりさうずくはさうぞくに同こよとては來んよとなり何してこよなンどと人にいひつくるにはあらで公の白身のことばなりさうぞくは衣服のみならずそのことに用る器物等にもかゝるべしよろこびとは拜賀故所々へ參拜せらるを云べし

それよりしも例のつゝしむべきことありふつかみかごとになンどきつるもたよりにもあるをさりやとおもふほどに夜いたく更ゆくゆゝしとおもふ人もたゞひとり出たりむねうちつふれてそあさましき只今なんかへりたまへるなンどかたれは夜ふけぬるにむかしながらの心ちならましかばかゝらましやはとおふ心そいみしきそれより後もおとなし

蓋し公の道綱をひきゐて出玉ひてそのかへるさにも同く共に女君の方へ夜もふけぬるには例にはともなひて我方に宿り玉へるにこよひは夜ふけぬれども道綱ばかりかへられてあるを前々のことを思出してなげかるゝの文段なりさて右の文の内さりやとおもふ迄は原本に存して其下ほどによりゆゝしとおもふ迄の十八字脫落せしを今契本を以補ひぬ

しはすのついたちになりぬ七日ばかりのひるさしのぞきたり今はいとまばゆき心ちそしにたればさ丁ひきよせてけしき物しげなるを見ていで日くれにけりうちよりめしありつればとてたちしまゝに音信もなくて十七八日になりにけりけふのひるつかたより雨いといたうはらめきてはふらねどつれ〴〵とふるましてもしやとおもふべきこともたえにたりいにしへをおもへはわが心にしもあらじ心のほかにやありけんあめ風にもさはらぬものとならはしたりしものをけふおもひいづれば昔も心のゆるふやうにもなかりしかは我心のおほけなきにこそありけれあはれさらぬものとみしものをそれまでおもひかけられぬとながめくらさる雨のあしおなしやうにて火とほす程になりぬ

さ丁は几帳なり帳を丁に書かなるもの丶常なりけしき物しげなるはうらめる心の面にあらはるゝなり内よりは禁中よりなりかくの如く云のべて起かへられしより後日かず廿日にちかきまでも音信のなかりしとなりされど下のけふの詞をみればしはすの十七八日にて十八日をけふとさせるに似たり原本にあめいたうはらめにてあられにとあり今契本によりてはらめきてに直せり蓋雨のつよきを云へる詞なりされと其下あられにとありては又その下の詞へつゞくよしなければ臆断してあらねどに直せりかくつれ〴〵とさびしき雨の中もしくは公の我を思出てとはれんこともあらんやと思ふ心さへ此比はたえはてたるとなり我心を契の二本ともに我ためにと直せし然れとも下へのくさり意通じがたきにより今は姑原のごとくしてよみ下せり昔公の中らひの打とけたりし時のことを思ひ出て同じやうなることを打かへし〳〵いへるくりごと丶聞べし今の心とてもその折の心に心のかはるべき様

はなき理なれども今の心の外のやうにおもはるむかしは雨風にもいとはでかよはれし中とおもひ馴(ナレ)にしもつく〴〵思へば其時だにうきふしなきにしもあらで心のゆるまりたることもなかりしかどわがおほけなき心からにや我中はさらんとすれどもさられぬ中と深く心のおちつきしを今公の心にそれらのちなみまでを忘れはてゝいさゝかも我を心にかけられぬと怨じたる文言なるべしおほけなきの詞は萬葉日本紀等にもみえず古き詞には非ず後々は歌にもよめり契冲は俗におつかなきといへるにあたりてなきは無の字には非といへりこれ穩にもあらず古解は無應と釋すれど應の音にあつるも猶おだしからず臆說にはおほを負にとりて我身におへるばかりの心行もなくてと謙退の詞と釋しぬ猶後賢を竢のみさらぬの詞は所謂さらぬわかれのなくもがなのさらぬに同遁れがたきなり

南おもてにこのごろくる人あり足おとすればさにぞあゞなるあはれをかしくきたるはとわきたぎる心をばかたはらにおきてうちいへばとしごろみしりたる人むかひてあはれこれにまさりたる雨風にもいにしへ人のさはり給はざゞめりしものをといふにつけてぞうちこぼるゝ泪のあつくてかゝるにおほゆるやう

あゞなるはあるなるなりみしりたるはなじみの人なりむかひては相對してなりあつくは熱なりいにしへ人は公を云

おもひせくむねのほむらはつれなくてなみたをわかすものにさりける　女君

原本せくをせはとしほむらをひむらとしわかすをあかすにあやまりたり

とくりかへしいはれしほとにぬる所にもあらで夜はあかしてゞげりその日みたるばかりのほはにてとしは越にけり其のほどのさほうれいのごとなればしるさず

ぬる所にもあらでとは常の寢所にはなくて客とはなしておもはずその夜を明せしとなり其下に段落を付べしさてその日と立かへりきくべし公の七日の書ばかりちらりとみえて其後又もみえずしてつひに年くれぬとなり原本にその月とあるは日のあやまりなり

かげろふの日記解環中卷之七

同　二年　道綱十七歳　是標題原本所脱今補之

さてとしごろ思へばなどにかあらんついたちの日はみえずしてやむ世なかりきさもやと思ふ心づかひせらるひつじのときばかりにさきおひのゝしるそよなゝど人もさわぐほどにふとひきすぎぬいそぎにこそはと思ひかへしつれどよるもさてやみぬつとめてこゝにぬふものどもとりがてらきのふのまへわたりは日のくれにしかばなゞとありいとかへりことせまうけれどなほとしのはじめにはらだちなそめそなどいへばすこしはくねりてかきつかくしもやすからすおほえていふやうはこのおしはかりしあふみになんふみかよふさなりさるへしとよにもいひさわぐ心づきなさになりけり

などにかあらんは何故乎といはんごとしついたちは即元日なりやむよなかりきを原本にはやむまなかりきとありさきだちて臆に時のとの脱せしやとときなかりきと釋せし後契本を見ればまをよの誤として夜なかりきとせし余はまた世としぬ原本ふとの下にきのかな有れども是亦契本にしたがつて衍とす急がるゝ故今に車を引すぎたれども夜は歸りに我方へ來らるならんと思ひてまてどもつひに其夜もみえざりきとなりつとめてはその明早なり此日記往々ありきのふより下は公より文中の詞なりその反事せんも心うけれともとなり腹立しそめなとは家人なゞどの云るならんくねりては古今の序にをみなへしの一時をくねるにも云々又くね〳〵しきと云詞も源氏に所々に見ゆ畢竟おだしからず一ふしあるの詞ときこゆあふみはさきにもみえしもと小野宮殿より出たるいやしき女にてそれへ文のかよひあるなとゝ人々もいひさわぐとなり

さて二日もすぎしつ三日また申のときに一日よりもけにのゝしりておはします〳〵といひつゝくるを一日のやうにこそあれかたはらいたしとおもひつゝさすかにむねはしりするをちかくなればこゝなるをのこども中つ（書入云門ノ宣）おしひらきてひさまつきてをるにうべも

なくひきすぎぬ今日ましておもふ心おしはからなん
原本に二三日とあれと下の三日によれば必三の字は衍なるべしとはぶきぬ二所の一日ひとひとよむべけれど頭注云二所の一日いつれもひとひとよむへし宜　已に上についたちとあればそれをうけてついたち〳〵とよまんも宜かるべしとひとひとよめる常の例にかへてよみぬ女君の心に又こよひもついたちの如くたとひ立よらるともやがてかへらるべしとおしはかりてかたはらいたけれども又さすが思ふ心の自(ミツカ)らおさへがたきを胸はしりするといはれたりかたはらいたきの詞かなものに多くある詞にして各其文言の前後によりて釋せんにすこしのかはりあるべけれとも概していはゞ心じんきなる趣なるべし女君の方にをる下部とも立よらるかと思て門うちひらきかしこまりをれどもたゞに行すぎられし此日の我心を公のおしはかられなんとの言なりうべは諾なり（書入云いかゞ）
又の日は大饗(タイキャウ)とてのゝしるいとちかけれはこよひさりともと心みんと人しれず思ふ車の音(おと)ごとにむねつぶるよゝきほとにてみなかへるおともきこゆかどのまへよりもあまたおひちらしつゝゆくをすぎぬときくたびごとに心ぞうごくかぎりときゝはてつれはすべてものはおぼえぬあくる日まだつとめてなほもあらてふみみゆかへりことせず二日はかりありて心のをこたりにはあれどいとことしげき比にてなんようさりものせんにいかならんおそろしさになとありこゝちあしきほどにてえきこえずと物して思ひたえたるにつれなくみえたりあさましとおもふにうらもなくたはふるれはいとねたさにこゝらの月ごろねんじつることをいふにいかなるものとだにいらへもなくてねたるがうちおどろくさまにてわろけなる迄ちあれどいは木のごとしておかしつれはつとめてものもいはてかへりぬ
又の日は三日の翌日にて四日たるべし春の始二宮（東宮中宮）の大饗もあれどこれは大臣の大饗たるべくなり其饗に公も着坐めされしなるべしいと近ければとは其所女君の宅甚近きを云それ故こよひはその歸りに我方へ來らる事もありなんやと我心にのみまたせらるなりすべて門前を車の引すぐるたび毎に心をなやますとなりよゝきほどにとは饗の所よりその夜る饗につかれしかた〳〵も能(ヨキ)ほ

どに退出せられて反らるゝ車の音きゝはてつればこよひもむなしく心待せしとすべて何事もおぼえぬばかりかなしきとなりあくる日は其あくる日五日の日也なほもあらではたゞにもあらで文をもて消息せられたれど反事もせざりしと也さて後ふつかばかりありて又文ありし心のをこたりと云より下はその文の詞なりようさりは夜去なりようとのばしていへるにやようべと云詞もあればばうの字を不レ聞してそのまゝ用いぬ心ちあしきよりは(書入云口にて)はさにては(いへる逐事也)其文のかへしの様なれど恐らくはさにてはあらじ言ふ心は其日はわきて心わろき折故其おくられし文をもすみやかにも女君へまゐらすとも得せず(書入云非也)と家人のこたへしならんされどもそのよしをかやうに物せよと女君の家人へいひつけられしとおのづからしられたりさてかくのごとくして公にあはんとも思ひたえたる心ちに物してをるに思がけなく公の一夜(ヒトヨ)来られしとなりその夜は文おこされしその夜にや又はその後別の夜にやしるべからず思ひたえたるにの詞によれば少し程へたるにもあるへきかなれどえきこえずなどいとつれなき反しゆゑ即ちその夜のことともきこゆらんつれなくみえたりのつれなきの意は下文の公のさまをいへる詞にてしるべしいはきのごとしては木石の如くひたにとりあへぬさまなり

それより後しひてつれなくてれいのごとはりこれとしてかくしてなゝとあるもいとにくくていひかへしなゝとしてごとたえて廿日よ日に成ぬ

はりは張にて衣(キヌ)なとをはり物することなるべしとしてかくしてとは其物をかくのごとくして其うへを又かくのごとくしておくられよとのことなるべし皆衣服をとりあつかふこととききこゆこのきぬをまづはりものしてさてとかくしてとの心にしてこれはりとしてかくしてと倒して心うべき[illegible]しひてつれなくても又倒してつれなくてしひてときくべしけだし上よりの文のごとく女君につれなくあしらはるゝ公なれともあながちに服のことをあつらへらるゝも女君のことに女工のことにも人よりすぐれし故つかふる女房なとも服用の上によくなれてしわざしざまめでたかりしによりて公の方にもかやうのことにたへたる女もなきにあらざゝめれ

ともわきてはれの着様のものなどは今はうとき中なれどもしひていひこされしとの文段なるべしにくゝは悪き也いひかへしとはさためて女君の心あしきに託して衣のことをうけがはずしてかへされたるなるべし

あらたまれどもといふなる日のけしき鶯のこゑなゞとをきくまゝに泪のかはきしなし

古今春上もゝちどりさへづる春はものごとにあらたまれども我ぞふりゆく原本になみだのかぬきもとありぬは分明にはの誤なり契本にもかくいへり而してもは衍字とせり臆に思ふにさならばかはくなしとあるべし故にもをしの誤とみてかはきしとなせり

二月も十よ日になりぬきく所にとよなんかよへるとちくさに人はいふつれ〳〵とあるほとにひがんにいりぬればなほあるよりはしやうじせんとてうはむしろたゞのむしろのきよきにしきかへさすればちりはらひなゞとするを見るにもかやうのことは思ひかけざりしものをなゞど思へばいみしうて

きく所とは上にみえし近江がもとへ十夜ばかりもはらかよはると人々がとり〳〵さま〳〵に風説あるとなりちくさは千種なりひがんは春の彼岸なりなほあるよりはとはたゞあらんよりはとなりしやうじは精進なり下文には則さうじといへりしやゥじとかきてもさうじとよみくせなり

うちはらふちりのみつもるさむしろもなげくかずにはしかじとぞおもふ　女君

此詠續千載集戀四に題しらずとして入りさむしろは狭筵とかけりされどたゞむしろのことをいへりしかじは不及なり筵の縁語をとりたるなり原本にはのみのみをかなを脱しさむしろもをさむしろをに誤れり

これよりやがてながさうじして山寺にこもりなんにさてもありぬへくはいかで猶世の人のたはやすくそむくかたにもやなりなましとおもひたつを人々しやうじは秋なとよりするこそいとかしこかゞなれといへどえさらずおもふへきうふやのこともあるをこれすごすべしとおもひてたゝむ月をぞまつ

えさらすはのがれぬことなりうぶやは産屋なり女君の親族の中産月にあたれるなりたゝん月は來る

三月なるべし人々の秋ほどよりこそといへるに秋までは遠ければ秋またずして山寺へこもりに行なんとなり原本にかしこかなれといへはとあるを今はははとの誤るとみていへどゝなほしぬかしこかはかしこかるのるを略したり故にかしこかんとのよみくせ用へし

さばれよろづにこの世の事はあいなくおもふをこその春くれ竹うゑんとてこひしをこのごろ奉らんといへばいさやありもとぐまじう思ひにだるよの中に心なげなるわざをやしおかんといへはいと心せはき御ことなり行基菩薩はゆく末の人のためこそ實なる木はうゑたまひけれなどいひてはらせたればあはれにありし所とて見ん人もみよかしとおもふになみだこほれてうゑさす

さばれはさもあらばあれの縮詞なり凡のことどうあらうともと打捨たるやうの言なりあいなくは愛相なきなり行基菩薩を沖本の内に水鏡聖武帝紀に普昭法師とありと注せり仍て今其文を見るに道の邊にくだものゝ木を植べし往來の人それにやすみ實をとりてつかれをさゝへんとなり東大寺普昭法師おこなひし也云々げにそれにこゝも似よりたる事也或は行基のことゝ出處ありけるにやもしかの普昭ぞならば此文行末の二字を行來に作るべしと思はるされど姑もとのごとくうつしぬ

ふつかばかりありて雨いたくふりこち風はけしく吹てひとすぢふたすぢうちかたぶきたれはいかでなほさせんあまゝもかなとおもふまゝに

あまゝは雨間なりあめのしばしのはれまなり

なびくかなおもはぬかたにくれ竹のうき世の末はかくこそありけれ　女君

世は竹の緣語なり感慨ある歌さまなり心はくみてしるべし

けふは廿四日雨のあしいとのどかにてあはれなり夕つけていとめづらしき文ありいとおそろしきけしきにおもてなん日比へにけるな。とぞあるかへりことなし

公よりかく文おこされたるそのかへしもせざりつとなり

廿五日霖雨やまでつれ〳〵とおもはぬ山とかやいふやうに物のおぼゆるまゝにつきせぬものはなみだな

りけり

思はぬ山は古歌の詞なり六帖に紅葉見に君におくれてひねもすにおもはぬ山を思ひつる哉今こゝに此詞をいひ出せる心は公のをこたりのいみじきゆゑ公を思ひ果たれどもこよなきつれ〳〵にさすがに公を思ひ出せるなり思はぬを公へかけても心は通べしされど思はぬを女君にかけて辨する方本歌の意にかなふべし

ふる雨のあしともおつる涙かなこまかにものを思ひくだけは　女君

此歌詞花集雜上にのせたり詞書に物おもひける比よめるとあり歌も此に同じ女君の獨吟なり

今は二月つこもりに成にけりいとづれ〳〵なるを忌もたがへがてらしばしほかにとおもひてあがたありきの所にわたることひさはりしこともたひらかになりにしかばながきしやうじはじめんとおもひたちて物なゝどとりしたゝめなゝとするほどに

あがたありきの所は父の居所を云所を原本には誤りて不の字をかけりこれ分明に所の字の轉訛なりことひも原本には思ひに作れり尾本にことひとイ本書に傍注せり案ずるにことの二字思の一字に轉訛せしにやとも見え且つおもひさはりしの詞もおだやかならずことひになせばかつてさはり有しことをいへるなれば異日にてわけよくきこゆれば今はその一本にしたがへり即今平らかになりといへるは前にいひしうぶやの安産せしなりしやうじは精進潔齋なりかなものにはたとひしやうじとかきてもさうじとよみならはせり

かうじは猶やおもからんゆるされあらばくれにいかがとありこれかれみきゝてかくのみあくがらしはつるはいとあしきわざなりなほこたみだに御かへりやむごとなきにもとさわげどふた月もみなくにあやしとはかり物しつしづかにあらんとおもへはいそきわたりぬ

かうじは勘事なり俗に云勘當などの意なりもし勘事をゆるされば此暮にまゐらんと思ふがいかゞおもはるゝぞ（書入云非なり）となりあくがらしはこなたよりしてさきの心に彌あかすやうにしかくるの心なり女君の親族或は從者などの女君の公へのあへしらひのあしくひたすら文のかへしもせられぬを見きゝてき

のどくに思て此たびだにせめて返事有てよからん
とゝりく〳〵にさわぎいへとも此春にいたりて正二
箇月をへて實にあひあふこともなきやうになりぬ
る身なればせめてかへしすへきことも我心におや
しまるとのみ異見せる人々へ物せしとなり原本に
はやむごとなきにもとの下はわけはたゝ月も見な
くにとあり此所予か見る所の諸本ともに筆をさし
おけりたゞ契本の一本のなほしにしたかへばはわ
けははさわげばの誤たゞ月を立月としても上下の
文言かなはずさらば岦の字もとは弟なりしを字形
あしくかけばあやまりやすくして岦の字に變しも
と弟とせるふか岦の字の重字となりて今岦ゝ月
となれる歟と思ひ扨此冊の初め年かはりて春にな
りしより書出して今此時までの内正月の上旬に一
夜公の見へし事をいへれどむつごともなくしてか
へられたれはそれは數にもとられぬわけにて實に
正二ふた月のとだえなれはふた月も見なくと姑し
ひてよみ下さん爲にかく直しぬ又みなくにの下あ
やしくとばかりものしづかにと作れり是亦推はか
るにしつの二字をけだしおとせりいかんぞなれば

原のことくにては上下の詞のわかちなし上は公へ
の返事をすゝめし人へのあへしらひの詞下は父の
所へうつるをいへるの言されはかく〳〵いひて物
しつと何を切てさてしづかにあらんと思へばいそ
ぎわたりぬにてことわり立ぬべし

月なき空に夜うち更てみえたり例のわきたぎること
もおほかれどほどせばく人さわがしき所にていきも
えず（頭注云いきもえずえずの間せられし歟たるか）むねに手をおきたらんやうに
てあかしつゝとめてそのとかのことものすべかりけ
ればといそぎぬなほしもあるべき心を又けふやく〳〵
とおもふにおとなくて四月にもなりぬ

月なき空原本につれなきはそうにとあり此れよみ
とかれず此又諸本にいかにともことわらずよりて
又臆におもふに上文に二月晦日になりにけりとあ
れば闇の夜なれは月なき空にかなへり是はきの轉
はは衍にてそうはそらの誤なりあがたありきの旅
宿なればすまへる屋の内も狹く且さわがしき所に
て息もしあへずとなり寢おびれたるさまにてその
夜をあかせしとなりつとめては早旦なりそのこと
かのことは精進せらるにつきて何くれの用物なる

べしなほしもあるべきとは公のひたすら女君を見すつるにもあらてをりふしは音信あるを云へしそれ故けふや／＼と下待せるなりされどもその後おとづれもなくて既に早四月にも成しなり

いとちかき所なるをみかどに車たてりこちやおはしまさんずらんなどやすくもあらずいふ人さへあるぞいとくるしきありしよりもまして心をきりくだく心ちすかへりことをも猶せよ／＼といひし人さへうくつらし〳〵

みかどといへるは即女君のすめる家内の下衆のいへばなりさならでは天子の御事を申すやうにてまぎらはしきなりかへりごともなほせよ／＼とは前にいへる親族等なりこちやおはしまさんずらんなんど云人さへきくもくるしきについて又かくいひ出せるなり

ついたちの日をさなき人をよひてながきしやうじをなんはじむるもろともにせよとありとてはじめつ

をさなき人は道綱なり今はすでに元服叙爵の後なれども母の口よりせば年たけても猶いふべきなり

我はたはじめよりもこと／＼しうはあらず

右にはしめつと此我はたとの際に原本我はたはしめつの七字あり冲本に衍とせりげに分明に衍とみゆれは省ぬ且原本にこと／＼しうとのみあり今イ本がきにしたがひてはの字を加ふ

たゞかはらけに香うちもりて脇息のうへにおきてやがておしかゝりて佛を念じ奉るその心ばえたゞきはめてさいはひなかりける身なりとしごろをだに心ゆるみなくうしとおもひつる我かく淺ましくなりぬとく死なさせ給ひてぼだいかなへ給へとこそおこなふまゝに涙ぞほろ／＼とこぼるゝあはれ今やうは女もずゞひきさげきやうひきさげぬなしと聞し時あままさりがほなさるものぞやもめにはなるてふなゞどもどきし心はいづちかゆきけん夜のあけくるゝも心もとなくいとまなきまでそこはかともなけれどおこなふとそのまゝにあはれさいひしをきく人いかにをかしと思ひみるらんはかなかりける世をなどてさいひけんとおもふ／＼おこなへばかた時なみだうかはぬ時なし人めぞいとまさりがほなくはづかしければおしかくしつゝあかしくらす

ひさげは提なり俗に云ひつさげなり原本にまさか

かほとあるを異本二本共にえの上におまの二字を補入かをりに直して尼増りかほと傍注せり今はそれにしたがふ且つ異の一本に紫式部か日記を引云なでう女かまんなぶみはよむ昔は經よむをだに人は制しきと後言いふを聞侍へり又云まぎるゝことなきまゝに行ひがちに口ひゞらかしずゞの音高き なんど心づきなくみゆるわざなりと思ひ玉へて云々これは此日記よりいさゝか後の文なれど似よりたること故に引しなるべし夜のあけの下日の二もじ落ぬかと思へど或は略していへるにやとあらためずさいひしとは上の文あはれ今やうは以下の詞をさせりまさりがほなくはさきにいへる尼まさりがほに應ぜしことばなり

廿日はかりおこなひたる夢にわかかしらをとりおろしてひたひをわくとみるあしよしもしらず七八日はかりありてわが腹の内なるくちなはありきて肝をはむこれを治せんやうはおもてに水なんゐるへきとみるこれもあしよしもしらねどかくしるしおくやうはかゝる身のはてを見きかん人夢をも佛をももちいるへしやもちいるまじやとさだめよとなり

かしらをとりおろせし云々髪をそる體相なるべしわが腹の内なる云々再夢みしさまをいへるなり水なんゐるへきとは面に水をそゝぐを云なるべし

五月になりぬわが家にとまれる人のもとよりおはしまさずともしやうぶふらではゆゝしからんをいかゞせんずるといひたりいて何かゆゝしからん

原本にはわか家とさだにとまれるとありこれは上文にもちいるまじやとさだめよとの詞ありその詞の中のとさだの三字又あやまり入たるなるべしと案を付おきしに後異本をみるに此三字はぶけりよつて定めて衍として省ぬしやうぶは菖蒲なりよむにはさうぶとよむゆゝしは好反にかよへりこゝはあしきを云

世中にある我身かはわひぬれはさらにあやめもしられさりけり　女君

歌の意分明なり

とぞいひやらまほしけれどさるべき人しなければ心に思ひくらさる

言心は我宿にのこりとどまる人の内に歌をきゝしる人もあらねばとなり

かくて忌はてぬれは例の所にわたりてましていとつれ〴〵にてあり

案ずるに公のいみじきとだえ故二月の比山寺にこもりて長さうじせんとの志なるを親族たちの何くれといひてしばらくとどめられしにその後公の志淺きながら折ふし來られしをうるさく思はれて親族のかたへうつりていもゐなんどせられしがはやいつとなく忌もはてゝ今もとのすみかへ歸られしを例の所にわたれりと云るなるべし即上にいへる我家なるべし規とトられたる館にもあらざらんもの故例の所といへるならん

なかめに成ぬれは草どもおひこりてあるをおこなひの隙にほりあかたせなゞどするあさましき人わが門より例のきら〳〵しうしおひちらしてわたる日ありおこなひしゐりたるほどにおはします〳〵とのゝしれば例のごとぞあらんと思ふにむねつぶ〳〵とはしるにひきすぎぬれば皆人おもてをまほりかはしてゐたりわれはましてふたときみときまで物もいはれず人はあなめづらかいかなる御心ならんとてなくもありわづかにためらひていみじうくやしう人にいひさまたげられて今までかゝるさとずみをして又かゝるめをみつるかなとばかりいひてむねのこがるゝことはいふかぎりもあらす

ながめは長雨なり即梅霖の時候也おひこりは生凝なりほりあかたせは堀頽也あさましき人は心のあさ〳〵しき人にて公をいへりおこなひしゐりとは行ひに心を染入たるの意なりひきすぎは公ののれる車のゆきすぐるなりまほりかはしてとは人々かたみに目をみあはせてあきれたる體なりまほりはまもりとよむへし守なりみこゝろは公の心也人々の公の心をうたがひあやしむ體なりなくは打泣なりさまたげられてとは人々の異見せし故すみやかに山寺へかきこもりもせざりし故にかくうき目をみると後悔なり

六月のついたちの日御物いみなれどみかどのしたよりもとて文有めつらかなりと思ひてみればいみは今はもすぎぬらんをいつまであるべきすみどころぞいとびんなかゞめりしかばえものせず物まうでではけがらひ出來てとゞまりぬなゞどぞあることゝと今まできかぬやうもあらしと思ふに心うさもまさりぬれど

ねんじて返りことかくいと珍らしきはおぼめくまでなんこゝには久しくなりぬるをげにいかでかはおぼしよらんおぼしかけぬみありきのたび〳〵になむすべて今まで世にはゞべる身のをこたりなれば更にきこえずとものしつ

御物忌は主上の御物忌なゝりけだし云我も御物忌にこもりぬれどもそなたのなつかしさに内裏よりして文をおこせしとなり物まうでは公のいづかたへぞ物まうでめさるべきを折ふし何ぞのけがらひありてとゞまられしとなるべし尾本にはとゞまりぬの下にらんの二字をおぎなひ入れたれどもそれにてはらんの推量のことばなれば女君のものまうでなりされど女君の物まうでのこととみへず山寺へ入まほしきさまは上文に女君の口に出たれどそれをさして物まうでとはいはれまじければ尾本には今はしたがはさるなり上にいへるごとく今はすでに本のすみかへかへられしに公の文にいつまであるべきすみ所といへるを今はかへりて此にあるを公のきかれぬやうも有まじきをかく云こされたるも公の例のいつはりとしらるるとなり女君の反事に今はへだゝりし中なればいとめづらしき文といはんすらおぼめいていへるさまなりとの文意なりおぼしかけぬみありきのたび〳〵とは此春の比女君のうたがはれし近江がことを暗にふすべ申さるゝならん原本にはいみをいたみとし又すみかのかを脱せり今皆契本にてあらためぬ又此段おぼしよらんとおぼしかけぬとの間に一行あまりも衍文あり極て衍とみゆれば省きぬ

さて思ふにかくだにとひいへるもむつかしさきのやうに悔しき事もこそあれ猶しばし身をさりなんと思ひたちてにし山に例のものする事ありそち物しなんかの物忌はてぬさきにとて四日出たつものいみもけふぞあくらんと思ふ日なれは心あわたゝしく思ひつゝものとりしたためなゝとするにうはむしろのしたにつとめてくふくすりといふものたゝうがみの中にさしれてありしがこゝにゆきかへる迄ありけりこれかれみいでゝこれ何ならんといふをとりてやがてたたう紙の中にかくかきたり

　とひいへるもむつかしとは公よりとはれてよしなきかへりことなとをするも心むつかしとなり西山

は蕣鳴瀧をさして云に似たりそち物しなんとはゆかましとなり上に公より御物忌なんど云ひおこされたる物いみもけふぞあきぬらんとおしはかるるゝなりさらば又文ならてたゞちにふと來らんも物うければ來られぬさきに西山へといそがるゝ體なりつとめてくふくすりとは旦ごとに服するところの丸散の藥やうのものにやありけんたゝうがみは帖紙とかけり懷中して何にても書記す物なりその折かたは一樣ならぬものときこゆさしれてを契の一本にさしいれてといの字を加へぬれどおそらくは中略せし詞なるべければ原本の儘にすこれかれは女君の侍女をさして云なるべしこゝは今のすみ所なりゆきかへるは親族の方へゆきて又此所へかへるまで帖紙のそのまゝもとのごとくありしとなり

さむしろのしたまつこともたえぬればおかむかたゝになきそかなしき　女君

とて文には身をしかへねはともいふめれど前わたりせさせ給はぬ世界もやあるとてけふなん句これもあやしきとはずがたりにこそなりにけれとてをさなき人のひたやごもりならんせうそこきこえにとて物するにつけたりもしとはるゝやうもあらばこればかりおきて早くものしね句おいてなんまかるへきとをものせよとぞいひもたせたる文打見て心あわたゝしけに思はれたりけんかへりことには萬いとことわりにはあれとまづいくらんは何くにぞ此ごろはおこなひにもびゞなからんをこたみ計いふこときくとおもひてとまれいひあはすべきこともあればたゞ今わたるとて

あさましやのどかにたのむ床のうらをうちかへしけるなみのこゝろよ　公

いとつらくなんとあるをみればまいていそぎまさりてものしぬ

かの藥のありし帖紙にやがて公へ留別の文にそへんためによまれし歌なり歌の下句をよむにかの藥も公も知られけるものにや上の句は上にうはむしろの下にとあるに應ずべし文の詞に身をしかへねばの一句引歌あるへきに似たり未案しつけず契の一本に古今にも勢語にものせたるおもへども身をしわけねはの歌をひけりこれを引きたる意を察す

るに原本の身をしかへねばのかへをかなにわ〱とかきしを公の字の誤と見て直しおかれしものゝ又それをうけて書入する人のうつしおとせしと見ゆ何にもせよ身をしわけねばにては此本文義不通身をかふるとはすがたをかへて尼などにもならねば所詮逢事を逃れぬといふめれども公のまへわたりのつらさをしばしわすれんがために身はかへねどもしばし山寺へ行さるとなりしかればそのまゝ原本のごとくしてよく通ぜるなりけふなんの下しかと何してよむべしすみかをいづると云残せるなり文(ブン)の脱にはあるまじをさなき人は上にいへる如く道綱なりこれより以後に道綱を多くは大夫といへりひたやごもりとは一向にこもり居るを女君は公へのなからひ和せざれとも道綱におきてはひたやごもりしてはいかゞなれば公の安否をとはんとて文をことつけらるゝなりもし公の女君のことをとはるゝぞならば此文のみさしおきて早くかへれとなりものしねにてしかと何をきるべし下の詞は此文を公の見らるゝ方へかゝれるなりさらばいひもたせたる文とつゞけよむべし

何くにそを原本になにえにそとあり沖本に何くにと直せりこれ蓋何の字の訓をかき誤たるなり且原本こゝの上に沖本此の字を補入たりこれにてよみ下さるゝなり此此はすでに六月大暑の折なれば行ひも苦しからんにしばし待て本のすみかに我容ことをしひてきゝてとゞまれとなり公も公事にいとまなき折なればとりあへず返事せられしなりいひあはすべきことゝは官寮などゝ公事につきて云合さるゝことのおそかるまじきことゝきこゆ故に只今ふたるとてとありて反歌をせられしなり

按此冊原本六に錯簡ありいかならんおそろしきになどの下下へ二丁をへだてゝありこゝちあしきほどにて上へつゞけりそれより二丁のをはりなびくかなの歌までつゞきて其歌より二丁をへだてゝ上へ逆のぼりて三丁めのけふは廿四日雨のあしいとのどかにてへつゞけりさてその丁のをはりむねにより其上の丁のはじめ手をおきたらんへつゞけりさてその丁のをはり尼まさりがほなさるものぞやもより下へ三丁をへだてゝめにはなるてふへつゞけりこれら今流布の本のとぢたがへの錯丁にはあ

らずして今の本を板行せしもとの寫本の錯簡なり
その寫本ももとよりとが本ときこえぬさて又其寫
本せし根元は卷本にてありたるべし今は其錯簡を
正し次第して書直し侍りぬ

かげろふの日記解環中巻之八

山寺のなでふことなければあはれにいにしへもろと
もにのみ時々は物せしものを又とゝまることありし
二三四日も此ころの程ぞかし宮つかへもたえこもり
てもろともにありしかばなンどおもふにはるかなる
道すがら泪もこぼれゆくとも人三人（ヒトミタリ）ばかりそひてい
く

山寺を原本には山ぢに作れり契の三本ともに原の
ごとくあり山路（ヤマヂ）としてもよみ下されぬにはあらね
ども下の詞にとゞまるこもりての言あれは必るの
ちに誤れるなりもろともは公と共になりいにしへ
は必しも往昔を云のみに非きのふは早けふのむか
しにて過去しは皆いにしなりかつて二三四日も此
にとまりしとの言を倒語せる也此頃のほどゝはむ
かし公ともろともに來りし折も六月にて恰（テウ）ど今來
る時候と同しきと也ともびとはともなへる人にて
も又下人にも有へし山寺は鳴瀧邊の山と聞ゆ今は
廢せる大寺なるべし宮づかへは公の出勤をいへり
とゞまることを原本にやむことありしと誤れり臆

におしはかるにその原は山ことゝありしならん止の字をやむともよめればかきうつせる人のあやまるならんこゝの文においてはきこえぬことになればなり案するに契沖の源注拾遺にやんごとなきの詞を釋せる貴人をやむごとなきといへるもとはやむことなきの義より出たる詞也されはかけろふの日記にはやむことありといへる詞もみえたりとひかれたるは此の誤りし詞を用られたり和語おきては司命とも云へき人なれとも發起あまたあるよりして口にまかせて云すごさるゝくせあり心得べきことになんやまるゝことならはやむと云て足れりあにやむことあると云ることばの起ることあらんや可笑にたれり

先僧房におりゐてみいだしたれば前にませゆひわたしてまだなにともしらぬ草どもしげきなかにりうたん草ともいとなきけなげにて花ちりはてゝたてるをみるにもをばながうへを秋といふことをかへしおぼえつゝいとかなし

ませは籬也まだ何ともしらぬ草とは秋にいたりて咲みるべき草花も今はひとつに夏草にまじれゝば其咲比をしたへる風情なりりりうたん草を原本りの一字しかと見えねども今はおしてりうたんとなせりりうたんは即りんだうにて秋の野の尾花にまじりさく花なんど古くもいへれば時たがひぬれば或はたはれの訛り上のよめかぬる字はほにてほうれんさうなんとにてあるにや又は時おくれたるぼうたんにやとも思へどそも又草の字あれば牡丹にてもあるまじければしひて龍膽草になせり其下文に原本に花かかへははきといふことをとあり余か見し契の諸本ともにいさゝかも注なしよりて止事をえずして案するに萬葉集第十卷秋の雜歌と標してあまたある中に人皆は萩を秋といふよしわれは尾花か末を秋とはいはん此歌なんどを思ひ出されて今は夏なれど色の草を打見るよりして尾花の比にくりかへしおもほゆるとの言にやされば原本花の上に尾を脱しあの字をはにあやまるにや姑今のごとく詞をつゞれりさていとかなしとは花のかれはてゝ尾花の秋になりゆくが如く我おふ中もかれはてゝうき身の秋になれるとの述懐なるへし原本のあへは決定うへの誤也萬葉の末を上にかへて唱

へられしなるへしかやうのたぐひ源氏にもあるな
り
ゆなゝと物して御堂にとおもふ程にさとより心あわたゝしげにて一人とまれる人の文ありみれば只今殿より御文もてそれがしなん參たりつるさうじゝて參り給ふこととあゝなりまづ／＼參てとゞめきこえよたゞいま殿のわたらせ給ふといひつればありのまゝに早出させ給ひぬこれかれもおひてなんまかりぬるといひつればいかやうにおぼしてにかあらんとぞ御けしきありつるをいとさはきこえんとありつれば月頃のみありさまさうじのよしなゝとをなん物しければうちなきてとまれかくまれまづとくをきこえんとて急ぎ歸りぬるをさればろなう僧に御せうそこありなんさるようにせよなゝとぞいひたるを見てうたて心をさなくおどろ／＼しげにもやしないてんいとものしくもあるかなけがれなゝどせばあすあさてなとも出なんとするものをとおもひつゝ湯のこといそがして堂にのほりぬ

湯は佛前へちかよらんとての湯あみなるべし原本に御堂を御道に作れり和音となへ同しければ誤にや其下の殿字もあやまれるをいまは沖本を以直せりさとは女君の栖なりそれがしは公の近習にて女君にもなれ奉れる人ならんされは下にうちなきてとありそれがしとは名をいはずして何がしといへる言なりわきてそれがしといへるも女君にしたしき人としらるありのまゝてふ下は里にのこれる人の公の使それがしへのこたへなりありのまゝとは何くれつくろはでとく出玉ひて侍女のたぐひもあとよりしたひまゐりしどなりいかやうにより下はかのそれがしの詞なり御けしきとは公の女君を思ひやらるゝ光景を述るの詞なり月ごろより下は又とまれる人のそれがしへの答なりうちなきては使それがしが演なりとくをのをは休字なりともあれかくもあれ公へそのよし申さんとて公の文をわたして使のかへれる也さればは上の公より云おこされたるおもむきなればと上の云々をつゞめて一口にいへる詞也さあれば勿論寺の僧へも公より消息ありぬへしとなりさる用意せよなとゝまれる人の女君へ心づけさせん爲の詞なり心をさなくおどろ／＼しげにしなしてんとは女君のとまれる人のこ

かれゐとより追てなんど仰山に云なせるをいさゝか謌詞也けがれとは月事をいへりまづ〳〵をかつ〳〵とせしは原文のあやまりなり

あつければしばし戸おしあけてみわたせば堂いとたかくてたてり山めぐりてふところのやうなるに木だちいとしげくおもしろけれどやみのほとなればたゝ今くらかりてそあるそやおこなふとて法師ばらさうどけば戸おしあけて念数するほどに時はいづらときのかひよつふくほどに成にだり

山めぐりては歐陽氏の環滁皆山也のたぐひなりそやは初夜なり藻鹽草にさうときは早速とかくなりはやきなりと注せり世にいふ湯桶よみに釋するは僻ことなり速の字は當るへしさうはさわぐなとのさにてともに訓なり源氏常夏の卷に人々あつまりて物くふにさうときつゝくふとかけり念数するはすゞをつまぐるなり時はいづらはもはや何時ならんと云詞なり貝は法螺なり

大門のかたにおはします〳〵といひつゝのゝしるおとすればあげたるすどもうちおろしてみやればこまより火ふたとほしみとほしみえたりをさなき人けいめいして出たれば車ながらたちてあが御むかへになん參きつるをけふまでこのけからひあればえおりぬをいづくにか車はよすべきといふにいとものくるほしき心地する

大門は寺の總門たるべしすは簾なりこまは木間也とほしはともしなりをさなき人は道綱なり後々は多く大夫とよばれともあるは又をさなき人ともいへるなりみえたりは公のおはしたるなりけいめいは敬命なり車にのりなから立て自ら女君のむかへに來りしが前にいへるけがらひも今日までのこればいもゐめさるゝ寺内へははゞかりあれば車よりおるゝとをえせぬと道綱への玉へるなりその公のいへるを道綱の承てしからばいづこに御車はよすべきと女君へ申さるゝをきゝてものぐるはしとなりかなものに從來多くくるをしとかけれどはひふへの通ひなればほのかなにあるへければ今はくるほしとかきぬ

かへりことにいかやうにおぼしてかかくあやしき御ありきはありつらんこよひばかりとおもふ給侍りてなんのぼりはゞへりつれば何不淨の事もおはしま

すなればいとわりなかるべきことになん夜更（フケ）て侍りぬらんとく歸らせ給へといふをはしめてゆきかへることたび〳〵に成ぬ一町のほどをいしはしおりのぼりなゝどすればありく人ごうじていと苦しうするまでなりぬこれかれなゝとはあないとをしなゝどよはきかたざまにのみ云此ありく人するゑてきんぢいとくちをしかばかりのことをばいひなさぬはなゝどぞみけしきあしとて泣にもなくされどなどてか更に物すべきといひはてつればよし〳〵かくけがらひたればとまるべきにもあらずいかゝはせん車かけよとありときけばいと心やすしありきつる人は御おくりせん御車のしりにてまからん更に又まうでこじとてなく〳〵いづればこれをたのもし人にてあるにいみじうもいふかなと思へども物いはであれば人なゝと皆いでぬとみえて此人はかへりて御おくりせんと申つれどきんぢはよばん時にをことておはしましぬとてよことなくいとをしう思へどあなしれそこをさへかくてやむやうもあらしなゝどいひなく時は八になりぬ道はいとはるかなり供の人はとりあへけるにしたがひて京のうちの御ありきよりもいとすくなかりつる

と人々いとをしがりなゝとする程に夜はあけぬ

不淨のことは前にいへる公のけがらひなりいかやうにおぼしてかよりかへらせ玉へとまでは女君の返事なり其後公より女君へ申こされ又女君より其返事あること往來あまたゝひに及べる皆道綱を使とせるなり故にかへらせ玉へといひたるを始として道綱の往反度々に成ぬと也いしはしは此山寺へのぼれる幾級もある石階をいへるならん一町ばかりもあれば長ききざはしなるべしかくのごとき道をたび〳〵上下すれば道綱も苦しかるらんと女君のおしはかりあはれまるの詞なりこうじては困の字なりこれかれは女君につきそへる女なりよはきかたさまにのみいふとは綱の柔弱にてさがなき道をひたと往反せらるゝをいとをしくのみ思ひいふと也するゑては公の前におきて戒しめらるなりきんちは汝といへるが如しかばかりの中使もことよく云なさぬと公の折檻（セッカン）めされしと女君へ申て泣（ナカ）るとなり泣にもなくとはひたすら泣の言なりなどてか更に物すべきと云果つればとはもろともにかへられよと幾度仰られてもいかでか今一所にかへりは

いたさぬといひ切つれはなりよし〳〵より下は公の詞なり車かけよと公の云出されたりとき〻て心やすくなりぬと也ありきつる人は勿論道綱なり同車して公のおくりせん更に又此山へはまうで不來とて打泣ながら出られたれば女君の心に公との中らひのよろしく無にせめて道綱を我がたのもし人と思ふにかれさへいみじうもいふかなとなげかる〻なり此いみじきはいま〳〵しきなりいみじきの詞は善惡に通してつかへり善を云より又轉して甚しきことにつかへること多しあまりのかなしさに一向物もいはでありしに公の供人等は皆山をいで〻道綱は寺へ立かへられしなり公の詞に汝はつれてかへらぬ此寺から召ん時にわが方へ來れよと仰られて京へおはしましきとかたりて又なかるとなりよ〻とは泣聲を云能々と解せるは非なりしれはしれもの〻しれなうあなと嘆息してさて〳〵愚痴なる心にて公のおくりして又まうでまじと云るをき〻のがしにせしはと道綱の山へ立かへられし今は道綱をさへ離別せんやうはかつてあるまじきこと〻いひて女君のなかれしなりもはや夜も八つ時になりぬ道はいとはるかなり下は人々の又公の女君のこと故に人ずくなにして京よりは遠き道なるにと公をいとをしがるとなりさてとかうするほどに已にその夜もあけぬとなりともの人はより京のう迄は契本にて補へりさだめて水府の御本如此なるへし原本にはあまたの字脱けてはるかなり御ちのとのみありいかてよまれんや

京へ物しやるべきことな〻どあれば人出したつ大夫よべのいとおほつかなきを御門のへむにて御けしきもきかせんとてものすればそれにつけて文ものすいとあやしうおどろ〳〵しかりし御ありきの夜もやふけぬらんとおもひ給へしかばたゞ佛をおくりきこえさせ給へとのみいのりきこえさせつるさてもいかにおぼしたることとありてかはとおもふ給へれどいまはあま〻いたくてまかりかへらんこともかたかるべき心ちしけるな〻どこまかにかきてはしにむかしも御覽せし道とは見給へつ〻まかり入しかどたぐひなく思ひやりきこえさせし今いと〻くまか〻でぬべしと書て苔づいたる松の枝につけてものす

女君の里へ所用ありてしも人をつかはさるなりそ

のついでに公のせつかんせられしけしきのおぼつかなき故いかゞ公の光景を伺はせんとて道綱の京へまからるればそれにことつけて公へ文を參らすとなり道綱をこゝに初て大夫とよばるゝなりよべは前夜なりようべとよむいとあやしうより文の詞なり程とほき夜みちにしかも供人もすくなければつゝがなからんやうに佛をいのるとの言なり佛をは猶佛にといはんか如しあまゝは雨間なり折ふしあしく雨ふりてたえまのなきをあまゝ痛くてと云なるべしはしは文の端書なりむかし公にも御らんぜられたる道なれは今はじめての所ならねどこたみは我ひとりなればむかしのことを思ひやらるゝとの言ばなり切にまかり反れとの仰なれは雨のはれま待てとく此山をまかんでんとなり文を苔づいたる松につけられしもたゞにしもあらで心あるにや契の一本に萬葉第二歌の題に從吉野折取蘿生松柯遣を引り

あけぼのをみれば霧か雲かとみゆるものたちわたりてあはれに心すごし晝つかた出つる人かへり來り御文はいでたまひにければをのこどもにあづけてきぬとものすさらずともかへりことあらじとおもふさて書は日ひと日例のおこなひをしよるはあるじの佛をねんじ奉るめぐりて山なればひるも人やみんのうたがひなしすだれ卷あげてなどあるにこの時すぎたる鶯のなき〳〵て木のたちがらしにひとく〳〵とのみいちはやくいふにぞすだれおろしつべくおぼゆるそもうつし心もなきなるべしかくてほどもなく不淨のことあるをいでむとおもひおきしかど京はみなかたちことにいひなしたるにはいとはしたなき心ちすべしとおもひてさしはなれたるやにおりぬ

出つる人は道綱也日ひと日は終日にて俗にいへる日がな一日也原本にはよるはあかしのと有余かつてあかしてなるへしと思ひしに後契本をみれば今なほして書る如くあかしのかをるにかへてあるじの佛とせり余今此意をはかりみるに佛は是山寺の主と云心にや又はわが一心に專あるじと打たのむの意にや姑く契本にしたがひぬめぐりて山なればゝ前にも山めぐりてと有に同し此時過たる鶯枕草子に鳥はと標して鶯はと云る下文に夏秋の末まで老ごゑになきて蟲くひなどようもあらぬものは名

をつけかへていふぞ口をしくすごき心ちする原本に木の字をおとせしいま契本を以おぎなふ立死日と櫁と注せり櫁は樒の正字にて音は支なり契本に又古今誹諧歌宥の花みにこそきつれうぐひすのひとく〳〵といとひしもをる尾本には大和物語草深くあれたる宿に鶯のひとくとなくやたれをかまたんをひけりいちはやきに契本勢語のむかし人はかくいちはやきみやびをなんしけるを引りすだれおろしつべくはすだれまきあげての照應なりうつし心は現心なり人來となくをきけばいとゞ物しくて心もうかれたるなり此不淨は女君の月事なるべしかたちことにとは山寺にかきこもりて尼にもなるへきさまに京の人々のきゝなさば本の姿にてかへるも顯露に我心のつたなきを見透すさまなるべし故にはしたなき心ちすべしと思ひて御堂の方へさしはなれたる屋に下りぬとなり

京よりをばなゝどおぼしき人ものしたりいとめづらかなるすまひなればしづ心もなくてなんなゝどかたらひて五六日（イツカムイカ）ふるほどに月盛（サカリ）になりにゝだり木かげいとあはれ也山かげのくらがかりたる所をみればはたるはおどろくまでてらすめり里にてむかしそのおもひうすかりしときふたこゑときくとはなしにとはらだたしかりしほとゝぎすもうちとけてなくくひなはそことおもふまでたゝく〳〵いといみじけさまさる物おもひのすみかなり人やりならぬわざなればとひとふらはぬ人ありともゆゑにつらくなどと思ふべきならねばいと心やすくてあるをたゞかゝるすまひをさへせんとはかまへたりけり身のすくせばかりをながらむあとにそひてかなしきことはひごろのながしやうじしつる人のたのもしげなけれどみゆづる人もなければかしらもさしいでず松の葉ばかりにおもひなりにだる身のおなしさまにてくはせたれどえもくひやらぬをみるたびにぞなみだはこぼれまさるかくてあるはいと心やすかりけるをたゞ涙もろなるこそいとくるしかりけれ

しづ心は靜心なりしたしきなかなれはめつらかに里ばなれたる山住をなせるも公とのなからひの打とけすおぼつかなきよりしてかくこゝに來ればいとしづかなる山中なれどわが心はかつてしつかならぬと相かたらはるべし五六日をいつかむゆかと

読かなものゝならひなりむゆかと訓ずるは常にいふいかの中の喉音にていゆかよへばなり原本にはたるのほたの下數字をおとしてほたるのるをかに訛りてほたかしものとかけり今契本をもてなほし入たり腹ゝしを原本にはたらたゝしと誤れり契本引歌拾遺集夏ふたこゑときくとはなしに郭公夜ふかく目をもさましつるかないまはむかし二聲だにとほしかりし時鳥の山里なれは打とけてあまたきかるとなりくひなは水鷄なり今はくゐなとかける或說にくゐなの唱を忌てかきかふると杖のかなは古くはつゑなるを今のかなのつえなるも和名抄の刑具に杖もあればそれらを忌てかへたるにもありなんやと思はるすべて本朝はとなへを專とせるならはしあること名目抄に見ゆ松江をずんがうととなふるも院號にとなへのひとしきを辟たりと云傳るたぐひ多かるべしゆめにもは努の字の心なり夢にはあらすいとふるくは夢はいめと書て寢目の義にてゆめとは書分のありしにいつとなく中古よりひとつにかきなれてまぎらはしくなり來れるならんすくせは宿世とかく宿緣也なからんあとは死後なり長精進しつる人は道綱なり見ゆづる人もなければはの二句は公のあへしらひのうときよりしておのづから道綱の威勢もつかぬよしの述懷ときこゆ我のみは世をはなれたる仙人の心に松葉のみをくらふ境界なるを同しさまの物をくはせどくひやらぬを歎くとなりさだめて清少納言かいへるやうのさうじものゝあしきたくひなるべし松の葉といへるは文章なりうつほ物語に松の葉ばかりをすきてとあり源氏角總にも同語あり若紫にもみゆ契本には曾丹集にうばそくがあさなにきざむ松の葉はけさの雪にやうづもれぬらんを引り案するに前にしづ心なきといへるに今はいと心安とは齟齬せる樣なれど言心はかくしてあるは心やすきさまなれどもと云て泪もろなることぞとの詞にてしつ心なきにそむかし

夕ぐれのいりあひのこゑひくらしのねめぐりの小寺ちひさきかねども我も／＼とうちたゝきならし前なる岡に神の社もあれば法師ばらど經たてまつりなッどする聲をきくにぞいとせんかたなくものはおぼゆるかく不淨なるほどには夜ひるのいとまもあればは

しのかたに出居(イデヰ)てなかむるを丶さなき人(書入云いかなる)一いもね
(事に〱注なきはいかに)〱」といふけしきをみれば物を深く思ひいれさせ
たとなるべしなどかくはし給なほいとあしねふたく
も侍りな。(書入云このあたり誤脱あるべし)どいへばひたごゝろになくもなりつへき
身をそこにさはりて今まであるをいかゝせんする世
の人のいふなるさまにもなりなんむけに世になから
んよりはさてあらばおぼつかなからぬほどにかよひ
つゝなきものにおもひなして見給へかくていとあり
ぬべかりけりと身ひとつにおもふをたゞいとかくあ
しきものしてものをまゐればいといたくやせ給ふを
みるなんいといみじき何かたちことにても京にある
人こそはとおもへとそれなんいともどかしうみゆる
ことなればかく〱思ふといへばいらへもせでさく
りもよゝになく

うちたゝきの下ど經たてまでの言は原本におとせ
しを契本にて今補へり尾本にはうちたゝきうちな
らしとあり下のうちの二字を契本によりて今は省
なりをさなき人は例の道綱なりなどかくはのなど
はなせにといへることなりねふたきはねむたきな
りひた心はひたすらの心なり中比より何くれ世の
いとはしくなりぬれば世に我身のなくもがなと一
向に死ぬべき身なりとやなくもは亡なりされども
今までも活(イキ)て居るは道綱の身上のおぼつかなきに
よりてしひてながらへをるとなりそことは道綱に
むかひてそなたといへるか如し世人のいふなるさ
まとは尼にもなりなんとなりむげのむを契の諸本
に衍としたれとも無下として此文段はふらまほし
く覺る故余は原本のまゝにしるせりいたくやせ玉
ふをみるなんいみじきの下に規と何すへしその下
は立かへり又女君の詞なれはなり道綱い女君の言
をきいて答へもなく唯泣によゝとなかるゝなり

さて五日(イツカ)ばかりにきよまはりぬれば又堂にのぼりぬ
日頃ものしつる人けふぞかへりぬる車のいづるをみ
やりてつく〲とたてればこかげにやう〱いくも
いとゝしくすごしみやりてながめたてりつるほどに
けやあがりぬらん心ちいとおぼえてわざといとくる
しければ山ごもりしたるぜじよびてごしむせさする
ゆふぐれになるほどにねんずごゑにかぢしたるをあ
ないみじとき丶つゝおもへばむかしわか身にあらん
ことゝはゆめにおもはであはれに心すごきことゝ

もはたゝかやかにゐにもかき心ちのあまりにいひにもいひてあなゆしとかつは思ひしさまにひとつたかはず覺ゆればかゝらんとて物のおもひをいはせてなりけると思ひふしたるほどにわれもはらからひとり又人もかへりものしたりはひよりて先いかなる心ちぞとさとにておもひがたく參るよりも山に入たちてはいみしくものゝおぼえ侍ることなんかくふさずまるなりとてよゝとなく人やりにもあらねば念じかへせどえたへずなきみわらひみ萬の事をいひあかしてあけぬれはゐいしたる人いそぐもあるをけふはかへりてのちに參侍らんそも〳〵かくてのみやはなゝどいひてもいと心ぼそげにいひてもかすかなるさまにてかへるこゝちけしうはあらねばれいのみおくりてなかめ出したるほどに

月事も盡常に成たるをきよまはりぬれはとなりされば再堂へすゝまるなり日頃ものしつる人とは前にいへるをばなり今日此山を立かへらるゝ車をはるかに山上より名殘をしみてつく〳〵と立ながらやう〳〵車のすゝみゆくを見すごしやれるもとよりたよはき身なれば久しく立るほどにいつとなく氣のぼり心ちあしく苦しければ折ふし此山にこもり居たる僧をよひていのらするなりぜんじは何禪師なとゝ稱する貴僧にはあらでおしなへての僧の美稱なり今は驗者なるべしごしんは護身かぢは加持なりわざは病態なりゆめは努なりあないみじときくとあれば驗者かよりましなんどを立ていはすることのおどろ〳〵しきさまのかねて思ひし事をたがはずとなるへしかゝらんはかくあらんなりものは妖物を云なるべしすべて女の身には物のうらみを取やすく或はいきすだまのよりつくことなゝど昔より多云つたふるたぐひなるべしはらからはしたしき長能なりしにや又人もかへり物したりとはかの立かへられしをばの病態をきゝて心もとなくおもはれ我里にて女君を思ふてのみ居りがたくして又山に立かへり參れるとなりはひよりは這て女の枕上により來れるなりすでに山へ入たちて樣子をみれば不祥なるわざと云てよゝと泣るゝなり物の怪めきたる病態なれば不祥といへり不祥は不善なり不吉なりすべて物のふさふといへる事物につきて適然として吉なり此うらなれはふさはぬと

云は不祥なりふさずまるとはふさはずもあるなりもあの反まなれは今は約ていへるなり類したる人はかの再來られしをばの達人なるべし人やりとは人のいたさするを云詞今此わづらひは自心よりなればかへりみすれども得たへられぬとなりやうやくその夜の内にわつらひも輕まれは萬の事をかたりあはせてさて夜もあけぬればつれたる人の京へいそぐとあればかへりて又參こんと云て京へは遙かなるさまにてかへられしとなりかすかはゝるかに通べしこゝちは下へつけて女君の心ちももはやあやしまれぬばかりになりたれば又先のやうに見おくれるとなり

又おはすとのゝしりて來る人ありさならんと思ひてあればいとにぎはゝしくさと心ちしてうつくしきものどもさま〳〵にさうぞきあつまりてふたくるまぞある馬ども引ちらしかひてさわぐわりごや何やとふさにありず經うちしあはれげなるほうしばらにかたびらや布やなゞどさま〳〵にくばりちらしてものかたりのついでにおほくは殿の御もよほしにてなんまうできつるさらしてぞものしたりしかばはてずなりにき又ものしたりともさこそあらめおのが物せんにはと思へど得ものせずのぼりてあがち奉つれ法師らばらにもいとたい〴〵しく經をしへなゞとすゞなるはなでふことぞとなんの給へりしかくてのみはいかなる人かある世中に云なるやうにともかくも限りになりておはせばいふかひなくてもあるべしかくてともおぼせざらんときかへりいでゝゐたまへらんもをこにぞあらんさりとも今ひとたびはおはしなんそれにさへ出給はずばいと人わらへになりはて給へらんなゞどものほこりかにいひのゝしるほどに西の京にさふらふ人々こゝにおはしましぬとてたてまつらせたるとて天がしたのものふさにあり山のすゑと思ふやうなる人のためにはるかぞあるにことなるにも身のうきことはまづ覺えけりゆふかげになりぬればいそぐとあればえひきもきこえずおぼつかなくはありなんなほいとこそあしけれさていづともおぼさぬかと云ば只今はいかにも〳〵おもはず今物すべきことあらばまかゞでなんつれ〳〵なる比なればにこそあれなゞとてとてもかくてもいでんもおこなひみてんさや思ひなるともいたさじとおもふなる人の

いはするならでもなにわざをかせんずるとおもへばことなくおぼすにこそあゝなれ萬のことよりもこの君のかくそゞろなるしやうじをしておはするよとかつうちなきつゝ車にものすればこゝなるこれかれおくりにたちいでたればおもとたちも皆勘當にあたり給ふなりよくきこえてはやいだし奉り給へなゞどいひちらしてかへるこのたびの なごりはまいていとこよなくさう〲しければ我ならぬ人はほとほどなきぬべく思ひたりかく思ひおもひにとざまかくざまにいひなさるれどわが心はつれなくなんありけるあしともよしともあらんをいなむまじき人は此ごろ京に物し給はず文にてかくてなんとあるにはたよかゝなりしのびやかにてさてしばしもおこなはるゝとあればいとこゝろやすし人はなほしすかしがてらにさるいはるゝにこそあらめ何かぎりなき腹をたつともかゝる所をみおきてかへりにしまゝにいかにともおどろかれずいかにも〱なりなばしるべくやはありけめなんど思へばこれより深く入ともとぞおぼえける

おはす〱とのゝしれば公の又來られたらんと思ひをればさにはあらずしてきぬや何くれの物をさうぞきたてあつめて車二輛その外食物のたぐひ僧どもに布かたびらやうの物までももたらせて來れるとなり來る人の口帖にも多くは殿の御催といへれは公よりといはずして何くれ用ゆべき品々のものをおくられしと見ゆ里ごゝちすとはうつくしききぬ綾やうのものをあまた目前にみつれは京に居る心ちすとなるへし馬ともひきちらしかひてはまぐさをかへるなり清少納言なまめかしきものゝ内によくしたる檜破子といへりふさは總の字にて豊饒に物の多くあるなりくばりはそれ〱へ分配して與ふる也さらしてとは僧につかはす布などを晒さして參しゆゑおそなはれるとなり又物したりともとは自らゆきたりともなほ又先のごとくならんと思へは得ゆかねばのぼりてそれ〱に物を頒行となりたい〲しくのたいを源氏等の抄に或は退或は怠の字などをあてり今は婦女に經なとを敎其方に導さまなるは尾籠なりとの詞なるべしともかくも限になりてとは出家になりて一向世をはなるゝを云なるべしさもなきに山寺に久しくありて

又京住めされんも尾籠にこそあらめとの異見也をこの釋にはやうより多く嗚呼の字をうめれともあたらざることゝきこゆ世俗にびろうと云此俗語云傳たる言なるへし疑ふらくは尾をこむるは我面目をあらはさぬよしにて不直なる心なるべし又をこたりにもかよふべし嗚呼はこゑのとりあつかひの上に嗚呼は歎息のこゑなれば其義においてもかなはぬなるへししかく〳〵の公の詞をうけて來れる人のほこりかにのゝしれるなり西の京は枕草子にもみえて此時代より荒廢せし所なるへし一時軒のかの抄に大内裏の宮城の内がまへをさして今の大宮より西といへるは恐らくはひがことならん又今いへる西の京にてもあるまじ此日記且つ清少納言いへる所なゝとは實に何處をさすやらん今世には知れがたきにてあるべしそこにさふらふ人々とはたれ人か知れず女君にしたしき方よりと見ゆ山の末と思ふやうなる人とは女君の我ことを云り則これより深く入ともといへる心なり天か下のものふさにうるは我身には不レ應せことのはるかに遠きわざなりとなりかへりてこれらのことにつきても身のうきことを覺ゆるとなりいたさじとは我行をいたさせまじと思へる人のいはするならんと也さならでとは今行ひをやめて又さらに何わざをかせんとなり此君とは西の京より來れる人の道綱をあはれめるなりほど〳〵はほどんど也よしあしともにいなむるまじき人とは父倫寧を云受領にして京に不レ在也文を以てわが今のありさまをしらせるその反ことを述らるなりはたよかんなりよりは父の返事なりさてさもいはるゝにこそあらめにて何してかぎりなきより下は女君の公をひたみちにうらみの詞としらる一旦山へ見えられてそのまゝにして實には深く思はれざればこの後いかさまに我身のなれるとも打すてゝしらぬさまにもならんからして山をいづることはさておきこれより山ふかく入などの筆ずさみなりやはの詞にてしられぬさまにいとうとく棄られんときこえ獨此一段所々に脱誤やありけん姑おぼつかながら釋しおきぬ納後賢の補正をまたんのみ　〽

けふは十五日いもゐなどしてありからくもよほしていをなゝと物せよとて今朝京へ出したてゝ思日なが

むる程にそらくらく松風音(オト)たかくて神ごほ〳〵となる今はまたふりはへ歸らんものをみちにて雨もやふらん神もやなりまさらんとおもふにいとゆゝしうかなしくて佛に申つればにやあらんはれてほどなく歸りけりいかにぞとゝへば雨もやいたくふり侍(ハンベル)とおもへば神のなりつるおとになんいでゝまうできつるといふをきくにもいとあさましくてかへりにしかは又々もさこそはあらめうくおもひはてにンだンめればと思ひてなんもしたまさかにいづべき日あらばつげよむかへはせんおそろしきものに思ひはてにンだンめればちかくはえおもはずなどぞ有又人の文どもあるをみればさてのみやはあらんとする日のふるまゝにいみじくなんおもひやるなンどさま〳〵にとひたり又の日返りことすさてのみやはとある人のもとにかくのみとしも思ふたまへねどなかむるほどになんはかなくて過つ日數(カズ)ぞつもりにける

かけてたに思ひやはせし山ふかく入相のかねにねをそへんとは　女君

又の日かへりことありことばかきにあふべくもあらずいり相になんきもくだく心ちするとて

いふよりもきくそかなしきしきしまのよにふるさとの人やなになり

十五日は十齋日の一つにして阿彌陀如來の緣日分ニ十戒ニ不妄語と拾芥に見えたれは原本にはいもゆとあるをゆはゐの誤なるへし人のよみやすきを專として姑く直しぬ余淺學なれはもしやいもゆの名目有やをしらずもし古語ならば亡失せまじきか爲にかく記し置なンめりからくは辛の字なり道綱も一所にありて日を經て精進せらるれば今やう〳〵魚なンど物せよと京へもよほし出したつるとなりさて猶道綱を思ひつゝ空をながむれば雨そらにみえて松風高く吹雷の聲すごほ〳〵とかみなるおと也でを〳〵とよむべしされば引かへしかへりなんに途中にて雨ふりいでゝなるかみもつよらめと佛を念ずるしるしにや雨うちはれて反られしをよろこべるなりまたは又也ふりはへの詞におのづからいそぐ心ふくみてきこゆさてその下にいとあさましくてかへりにしかばの詞をもて案するに道綱を京へおもむかせられしは魚を物せんのみならで公の光景(ヤウス)をもほのうかゞひがてらにさし出され

たるにや雨にもぬれずして反られたるはうれしけれとも公のやうすをきかさる故にあさましくかへりしと云るにやとおしはかられぬ疑ふらくは其後に京より公の文をもて來りし人もありしにやいかんそなれは又人の文ともあるといへる又の字にてさ心えらる且つ分明に又々もより下は公の詞也しかれは此わたりに必脱語あるに似たり又人とは前にいへる西の京にすめる人にて女君を深く思へる人とみえたりかけてたにの歌心あきらかなり又の日かへりことせるに詞書して歌のかへしもしけるなり下句故郷に世にふるされたると女君の心中をあはれめるなり何なりとはけんを云のこしたるうたの一體なり敷島をいへるは歌人なれはにや

かげろふの日記解環中卷之九

とあるをいとあはれにかなしくながむるほとにとのいの人あまたありしなかにいかなることゝろあるにかありけんこゝにある人のもとにいひおこせたるやう
いづれもおろかに思ひきこえざりし御すまひなれどまかゞでしよりはいとゞめづらかなるさまになん思ひいできこえさするいかにおもとたちもおぼしみたてまつらせ給ふらんいやしきもといふなれどすべてすべてきこえさすべきかたなくなん

上冊の末の西の京なるねもごろなる方より女君の心中をよくのべし反歌をよみてあはれにかなしく詠吟せる折からにとなりとのいは我つかふる主のかたへに夜まもりのために寢ぬるをいへば女君のもとつかはれし馴染の女ときこゆ直宿をとのゐと書來れども正しきかなはとのいたるべし賀茂眞淵が萬葉を考てあらため書るげにさることなりいは寢にて殿にいぬるを云居の義にはあらずおもとは近侍の女を云俗に腰下といふがごとし蓋はやう女君につかはれて今つかふる女房たちへむかしのこ

とを思ひ出女君をとふらはん爲におこせし文なりいづれものれを尾本には省ていつもとせしかども今此文言の意をむかへみるに女君のすまひのかはりしさまをとふらへる詞なればいづれの所に住はせられてもおろそかには思ひ奉らぬ御かたざまとの口状ならば原本のまゝにてもよかりなんと思ひて本のまゝにすおろかはもしやおろそかにてはありしやと思へどこれ又おろかにてもきこえぬにあらされば亦もとのまゝにせりきこえさすべきを原本にきこえますとあり契本によりて直せりさだめて原本のまはさの轉せしなるべしいやしきもといふなればとは下文をみれば此女の名をだまきとみゆされば我名よりして古歌を思出て其歌の心をふくみてかく云出せるならん古今雜上讀人しらずいにしへのしづのをだまきいやしきもよきもさかりはありしものなりとよめる如く人の盛衰のたまきのはしなきやうにさだまらぬものなれどもいとかしこき御まへにはおそれあれば人して申させ奉らん方なきにとの文言たるべし原本にはいふなればとありされどさにては下のうけことば心ゆかぬさまなれば臆にとになほせりあしくかけばをとと誤やすし前々にも此例みゆればなりなればとしては意趣かはれども又しひてつゞけよまるればよまん人の心々にまかせなん姑余がよみつけのまゝに直しぬ

身をすてゝうきをもしらぬたひたにも山ちにふかくおもひこそいれ　前の侍女

といひたるをもていでゝよみきかするにまたいみじかばかりのことも又いとかくおぼゆる時あるものなりけりはやかへりことせよとてあればをだまきはかく思ひしることもかたきとよに思ひつるを御まへにもいとせきあへぬまでなんおぼしたゞめるを見奉らるもたゞおしはかり給へ

おもひ入ときくぞ戀しきおく山のこのした露のいとゞしげきに　今の侍女

となんいふめる

身をすてゝの歌を契本に身をすてずましてうきことをもしらぬ旅人だになりと釋せり案するにといひたるをとあればさきにきこえさすべきかたなきといひつれどそは謙辭なれば身をすてゝの歌はか

の前の侍女の歌なりそのよめる歌を今の侍女が女君の前へもてきてよみきかするとなり又いみじの又はかの西の京よりの反歌に又なり今の侍女にはやゝ此反歌をせよとあれば侍女のおもへらくかのをだまきは歌をよくよむことはもとより難し歌の心をしることだにやすからずとまへかど常にいひしばかりの歌のことを心得たるものゝ歌なれば御まへにも涙せきあへぬまでも感じ玉ひき其みありさまをちかく見奉る私のかなしさを思はかりしられよといひて反歌をせしなり原本に思ひいづるときぞかなしきとあるを今のやうに契本をもて直しぬかけ歌の下の句おもひこそいれといへるをきくがゝなしきとなり

たいふ一日(ヒトヒ)の御かへりいかでたまはらん又かんだうありなんをもて參らんといへばなにかはとてかくすなはちきこえさすべく思たまへしをいかなるにかあらんまうでがたくのみおもひてはんべンめるたよりになんまかンでんことはンべンとも思ふ給へわかれねばきこえさせんかたなくなンどかきてはしがきはいかなることにかありけんと思ふ給へいでば物しかむべければ更にきこえさせずあなかしこなンど書て出したてたれば例の時しもあれ雨いたくふり神いといたくなるをむねふたがりてなげくすこししづまりてくらくなるほとにぞかへりたるものゝいとおそろしかりつるみさまのわたりなンどいふにぞいとゞいみじきかへりことをみればひとよの心ばえよりは心よはげにみゆるはおこなひよはりにけるかと思ふにもあはれになんなンどぞある

大夫は道綱なり公より前に文來りし其反事はいかでなされぬいで今反事をたまへさらずは又公の勘當をうけなん今御かへりことをもて參らんと道綱の責らるれば何かゝへしすまじきにもあらじとて書玉へるなりその下反事の文の言なりすなはちは即なり早速にも反しをきこえさすべきにしか〱と摸糊(マギラ)にのべられたる文のさまなりはしがきは俗にいへるなほ〱がきなりあなかしこはかなぶみの結の常語にして俗にかしくとかける意に同例のとはさきに道綱を京へ出さるゝ時雷雨せし故にかくいへり時しもあれはのどけき空もあるにさしあはせてといへる心なりされどすこし雷雨のしづま

りて日のくれあひに歸られたるにてふたがりし胸もひらけしとなりみさまを契本に地名歟とうたがひ尾本にも名所歟としるせり何樣にもわたりとあればわたりはそのあたりなんどゝ同詞なれば名所はしらず地名のやうに聞ゆされど誤多き書なればもしやは途中にておそれられしみづからのさまを人の相みるをはぢられたるの言にて下のわたりのかなも外のかなをうつし誤りて人のわれを見るさまをかくいへるにやそも又わが身のさまと云るをにや姑案のつきしまゝにかく記しおけり後來の博物の正されんことを俟にはしかじ公より再應の文の詞は分明なり

そのくれて又の日なましぞくだつ人とふらひ物したりわりごなゝどあまた有まづかくは何となせさせ給ふにかあらん異なる事あらではいとびゝなきわざなりといふに心におもふやう身のあることをかきくづしいふにぞいとことわりといひなりていといたくなく日くらしかたらひてゆふくれのほど例のいみじげなることどもいひて鐘の聲どもしはゝべるほどにぞ歸る心ふかく物思ひしる人にもあればまことにあはれともおもひいくらんと思ふに

しぞくは契本に親族と傍注せり余思ふにさにても可ならめども同じくは氏族の方にとるべきにやいかんとなれば生の字を蒙せたればなりなま上達部なま浮み俗にもなまものじりなんどいへるにて生熟の生の心也今此なまも同訓のすぢなれど疎意にとりてなましぞくといへりこゝの文意を味ふにいみじく女君をおもへる人なるべししからばもとよりの親類にしてことにねもごろならばなまの詞はあるまじ氏族ゝ親族よりもひろき詞なればいと遠き人の親類にもまさりてねもごろなるを感じてなま氏族なれどもといはまほし破子なんどゝは食物のたぐひを多くもたせたるならんかきくずしとは心に思ひのありたけをあまさずいへりとなり日くらしは終日なり夕ぐれは物がなしさの增る折なれば例のいみじげなるとかゝれたりいくらんとは歸さの道にてもわれを實にあはれ／＼とおもふ／＼かへりなんとおしはかれるなり

又の日旅にひさしうもありぬべきさまの物どもあまたある身にはいひつくすべくもあらずかなしうあは

れなりかへりし空なかりしことのはのなかに木だか
き道をわけいりけんとみしまゝにいと〳〵いみじう
なんなど萬かきて
世中のよのなかならばなつ草のしげき山べもたづね
ざらまし　しぞくだつ人
ものをかくておはしますを見給へおきてかへること
ゝ思ふ給へしにいぬめも皆くれまどひてなんあるき
みふかく物おぼしみだるべかゞめるかな
世中はおもひの外になる瀧のふかき山ぢをたれしら
せけん同
などすべてさしむかひたらんやうに書たり
此又の日 頭注書入云又の日雅語にて はいつこも〳〵翌日なり とは其翌日にはあ
らでかへりて後に又々我山住をして久しくも居る
べきことをはからひて何か用ゆべきもの品々を送
りしと也原本には身にはを心にはに作れり心には
にてもきこゆべしされど今は契本にまかせたり上
にも身の有事をかきくづしいふともあり且女君の
今の身にとりてはの意をもて心を身になほせしか
と思はるればなりかへりし空なかりしとはかの人
又々物を送られし時にそへられし文の詞なるべし

その文の中の要語をつまみて今女君のかくのべら
れしにこそものをばたづねざらましものをと歌よ
りすぐにつゞけてきくべしいぬめもとは今立 書入云注い かへ
り往ぬるも目くれまどへるといへる心なるべし下
の世中の歌は山ぢをたれしらせけんとあれば女君
の歌のやうにもきゝなさるれども下にさしむかひ
たるやう云たりとあれば二首ともにかの人のよめ
るならん思ひの外になると秀句せり
なるたきといふぞ此まへより行水なりけるかへりこ
とも思ひ至る限ものしてたづね給へりしもげにいか
でと思ふ給へりしとて
物思ひのふかさくらべにきてみれば夏のしげりもも
のならなくに　女君
契本に後撰集平貞文君をおもふふかさくらべに津
の國の堀江見にゆく我にやはあらぬを引けりまこ
とに今の歌はかの歌を本歌にしてよめりとみゆ原
本にたづねとのみありてその下のことば皆脱して
ありしを今さいはひに契本をみておぎなひ入れぬ
まかゞでんことはいつともなけれどかくの給ふこと
なん思ふ給へわつらひぬへけれ

身ひとつのかくなるたきを尋ぬればさらにかへらぬみづもすみけり　女君

かく成とうけたり此歌はるか後の續後拾遺集雜の上に山里に侍ける比人のおとづれて侍けるかへしにと前書していれり

とみればためしある心ちしてなんなどものしつとみればも歌又よりすぐによみつゞくべし

又ないしのかんの殿よりとひ給へる御かへりに心ぼそくかき〳〵てうはぶみに西山よりといひたるをいかゞおぼしけん又ある御かへりにとばのおほざとよりとあるをいとをかしと思ひけんもいかなる心々にもたるにかありけん

うはぶみ契本に題の字をあげて日本紀と肩書にせり封じぶみの上書を云にや

かくしつゝ日ごろになりながめまさるにある修行者みだけよりくまのへおほみねどほりにこえけるかごとなるべし

と山だにかゝりけるをと白雲のふかき心はしるもしらぬも

とておとしたりけりかくなんとみつゝあかすほどにある日の晝つかた大門の方に馬のいなゝくこゑして人のあまたあるけはひしたり木の間よりみとほしやりたればすがたなる人あまたみえてあゆむ〳〵來るありくなかに關白殿の兵衛のすけと申けるとかやなめりとおもへば大夫よびいだしていまゝできこえさせざりつるかしこまりとりかさねてとくなん參りきたるをいひいれて木かげに立やすらふさま京おぼえていとをかしかゞめりこゝろはのちにといひし人ものぼりてあればそれになほしもあらぬやうにあればいたくけしきばみたてりかへりことはいとうれしき御名なるをはやくこなたにいりたまへさき〳〵の御ふしやうはいかでことなかるべくいのりきこえんと物したればあゆみいてゝかうらんにおしかゝりてまづてうづなゞど物していりたりよろづのことどもいひもてゆくにむかしこゝは見給ひしはおぼえさせ給ふやとゝへばいかゞはいとたしかにおぼえて今こそかくうとくてもさふらへなゞどいふをおもひまはしせばものもいひさしてこゑかはる心ちすればしはしためらへば人もいみじと思ひてとみにものもいはずさて御聲などかはらせ給ふならばいとことわりには

あれどさらにかくおぼさじよにかくてやみ給ふやうはあらじなどひがさまに思ひなしてにやあらんいぶかしまゐらばよくきこえあはせよなゝどの給ひつるといへばなどか人のさはのたまはずとも今にいりなんなゝどいへばさらば同じくはけふ出させたまへやがて御ともつかうまつらんまづは此大夫のまれ〳〵京に物しては日だにかたふけば山でらへといそぐを見給ふるにいとなんゆゝしき心ちし侍るなゝどいへどけしきもなければしばし休らひてかへりぬかくのみ出わづらひつゝ人もとふらひつきぬれば又はとふべき人もなしとぞ心のうちにおほゆる ※

上巻に貞観殿の御方はをとゝし内侍のかみに成玉ひきと有今はその御方にやかの御方より文してとふらひ玉ひしその御返事に山住なれば心ぼそきさまをかず〳〵書て所はなるたきの邊なるを大やうにたゞ西山よりといひたるをいかゞおぼされけんとにやかんのとのより又の御かへりありしうはぶみに鳥羽の大里よりとあるを又こなたにはいとをかしとのことにやけだし鳥羽も大里も共に山城國の紀伊郡に屬せる郷名なるをとばのおほさととあるをいぶかしきとのこと其下の詞のきたるとは持なりながらまさるとは何となくさら〳〵しき山住して詠吟がちなりとの意なるべし然る折ゝ修行者の熊野へ御嶽よりまうづるが歌一首をよみて山寺に落していにけりとなりかくみつゝあるほどに或日の晝つかたあまたの人京より入來れるとなりすべて此段原本誤ことに多しと見ゆ異本往々直せしをとりてやゝ書つゞけ畢すがたなる人とはすがたよき人をいへるにてあるべし原本にはすがたなほ人とあるを今は異本によれり原本にごのまよりみとをしやりたればすがたなほ人あまたみえてまゆみ〳〵ある衞中關白殿のともえのすけと申けるとかやなめりとおもへばとかけり此時中の關白をいふべきあらぬことなりしかれば中の字は上へつけて關白殿なるべし百錬抄に天祿二年五月十八日攝政太政大臣實賴薨廿日以右大臣伊尹爲攝政とあり冷泉院の御代には實賴公關白たれば今いへる關白は實賴を云なるべしともえは沖本に兵衛と直せり大夫は例の道綱なり大夫をかの今來りし人がよび出してとくとふべきををこたるとのかしこま

りを述たる也とりかさねてに冲本けしきどる類かと傍注せりこかげに立やすらふさまを原本きかけたりやすらふとありよみとかれざるを今は契本をもてうつせり又この心を原本にこのことはとありしをこれも契本にしたがへり後にといひし人とはたれ人をいへるにや此段の始末を閲するに此たづね來し人は本田舍にありてやう〳〵京なれし人をいへるにや下文にいまゝできこゆさせざるなどおくれてきたりし會釋なんどをなせることを京おほえてをかしと云るにや又後にと云し人とは前に歌をおとしていにし修行者にてはあらずや歌を此ところにわざとおとしけるは遠き山ぶみせしついでに女君へ歌をのこしおきてさて又來らんとのことにて來りて會釋せし人たちも修行者も皆女君によしみの深くありける人たちにてやありけんなほしもあらぬやうにあればけしきばみの傍に尾本にはだまつてゐるやうなによつてとかけり後にのぼらんと云人我らより早くのぼり居て我はかへりておくれたれば其挨拶なくてはと思ひていたくけしきばめるなり契本の一本には土佐日記のかやうに物

もてくる人になほしもえあらでを引けりこれはこといさゝかかはりたれどもたゞも居られぬ心は同しことなればひけりと見ゆさていたくけしきばみての下にかへりことゝはすでに來りてあまたして尋きたられし人々を待合せてをるかの修行者なるべしうれしきみなは尋きたられし人の名の事なるべしこれも契本にみなのかなに御名と傍注せるを用ゆはやくこなたに入たまへまで修行者の詞にて此下ついでもしは脱辭ありけるにやさき〳〵の御不祥はいかでことなかるべく祈きこえんと云は分明に修行者の詞なりあゆみ出ては女君なりかうらんは勾欄なりてうづは手洗なり原本にいたりとあるを契本にいりたりとしぬ物もいひさして聲かはることあるは物のけにやされば見る人もいみじと思ひて物もいはぬなり案ずるにけふ尋來られし人々のことばをおしはかるに女君の京へ出玉はんことを公のまちかねらるれどしぶ〳〵にてはたされぬ故女君へ心ある人をまはして早く立かへらるやうにすゝめさせらるゝ文言としらるなどひがさまのなどは助のなんどにはあらでおもき詞なりいぶ

かしは不審なり山寺へまゐらば能々きこえあはせよゝ公の仰られしとなり道綱のことをも參りし人の何くれといはるゝも公のことゞてをうけてさま〴〵にいふて京へのことをすゝめられしときこゆさてありふる程に京にのこれるもとよりふみどもありみれば今日とのおはしますべきやうになんきくこたみたにさへおりずはいとつべたましきさまになん世人もおもはん又はた世にものしたまはじのちに物したらんはいかゞ人わらへならんと人々おなじことどもをものしたるにいとあやしきことにもあるかないかにせんこたみはよにしぶらすべくも物せじとおもひさわぐほどに我たのむ人ものよりたゞ今のぼりけるまゝに來て天下のことかたらひてげにかくてもしばしおこなはれよとおもひつるをこのきみいとくちをしうなりたまひにけりはやなほ物しねけふならばもろともに物しねけふもあすもむかへに參らんなどうたがひもなくいはるゝにいと力なく思ひわづらひぬさらば猶あすとて物せられぬつりするあまのうけばかり思ひ亂るゝにのゝしりてものに似ぬさなめりと思ふにこゝちまどひだりこたみはつゝむ

ことなくさしあゆみてたゞ入にいればわびて幾丁ばかりをひきよせてはたかくるれど何のかひなし香もりすゑずゞひきさげ經うちおきなどしたるをみてあなおそろしいとかくはおもはすこそありつれいみじくけうとくてもおはしけるかなもしいでたまひぬべくやと思ひてまかできつれどかへりては罪うべかゞめりいかに大夫かくてのみあるをばいかゞなどとへばいとくるしう侍れどいかゞはとうちうつぶしてゐたればあはれと打いひさしてさらばともかくもきんぢがこゝろ出給ひぬべくは車よせよといひも果ぬにたちはしりてちりかひたるものどもたゞとりにつゝみふくろにいるべきはいれて車どもにみないれさせひきたるぜざうなゞどもはなちたぐりたるひしひしととりはらふにこゝちはあきれてあれか人かにてあれば人々目をくはせつゝぞいとよくゑみてまもりゐたるべしこのことかくすれば出たまひぬべきにこそはあゞめれ佛にことのよし申たまへ例のさほうなるとて天下のさるがうごとをいひのゝしらるめれどゆめに物もいはれず涙のみうけれどねんじ反してあるに車よせていと久しうなりぬ

原本にさてふるほどにとあり契本にふるの上にありの字を加ふ今はそれに從へり次ハ句一本に京のこれかれのもとよりともあれど今原本 よれりとのは兼家公なりこたみはこのたびなりおりずはとは山を下りて京へおもむかではなりつべたましは已に上卷に釋せり言心は人々の京へ出らるゝことをすゝむるに物しくかれこれいはずして速にとくかへられよ人々につべたましきさまにいひなさばたとひ山住せんも世中に人よくもなくては心よくもすまゝれざるべし又かく人のすゝむる期をすごして後におりられたらば人わら八にもなりなんとなり又公よりのみならずよの人々も同じさまにいへるもあやしきことにこそあれとおもへどこのたびはしぶらずしてかへりもすべしと思ひ何くれと心さわぎするほどに我たのむ人いなかよりのぼるすなはち山へ來られしとなり親倫寧の吏務をはりて歸京 てすぐさま 見えたりと也天の下の事とは何か世間の物語をしていへるには山寺にかくしても暫し行はれよとさきだちても田舍よりもいひおこせしかどもむまごの道綱をいとをしみ思へる

かたも心苦しきに早く京へかへられよ今日にてもかへられんならば我と一所に此山を出られよもしけふならずは三日はむか に又こゝへきなんとなり道綱を此君といへるはかしづく心にてかくはよべるならんかくのごとく父のせめさへうくれば力なく思ひわづらへるとなりさらばなほあすとてものせられぬの一句は原本脫なりけるを今冲本にて補ひぬつりするあまのうけばかりの句はか 古今にいせの海につりするあまのうけなれや心ひとつをさめかねつるの歌の心なりさる のゝしりてものしぬとは京よ の文にいへるにたがはで公の來られたり此度はつゝむことなくとはさきのやうにたゝずまずしてたゞ入にいられければき丁もてはたかくるれどもかひなしとなりき丁は几帳なりずゞひきさげはつまくりし珠數をひつさげてなりきんぢは前にも出きんぢが心にまかするといひ殘せる詞なるべしちりかひはそのあたりにちりぼひありしものどもつゝむべきものはつゝみ袋に入べきもゝは入てなりせざうは 障也一條ノ兼良公の御說に幕のやうなるもの高き松など繪に書て壁に

濕て引たつるものとありあれかはわれかなり目をくはせは尻目にてしらすることなりさはうは作法なり天の下のさるがうごとゝは世にあるとあらゆるおとけごとをいはるゝとなりさるかうは猿樂ごとなりくうの言權通すればかくもよべるならん或說にさるがくの本字は散樂なりといへりもしさらばあるなりをあんなりとよべるたぐひにて通はしてこれも云ならはせしにや後世申樂など云るはひがことならん所詮公のたはふれごとなれば作法といはれしにもあらんずれどもおだやかならねばさほうとあるは左道のたぐひの言にもありけんかし

かけろふの日記解環中卷之十

申の時ばかりにものせしを火ともす程になりにけりつれなくてうごかねばよしゝゝ我ゝ出なんきんだにまかすとてたちいぬればとくゝゝとてをどりてなきぬばかりいへばしふかひもなきにいづる心ぞ我にもあらぬ大門ひきいづればのり、ばりて道すがらうちもわらひぬべきことゞもをふさにあれどゆめおかものぞいはれぬこのもろともなりつる人もぐしければあへなんとて同じくゑまにあればそれぞときゞゝいらへなゞどするはるゞゝといたるほどに亥の時に成にけり京には書さるよしいひだりつる何人々心づかひしちりかいはらひかどゝあけたりければあれにもあらずながらおりぬ心もくるしければ戸さしへだてゝうちふす所にひやうとよりきていふなでしこのたねとらんとしはゝべりしかどねもなくなりにけりくれたけもひとすぢたふれてはゝべりしつくろはせしかどなゞど云たゞいまいはでもありぬべきことをかなと思へはいらへもせであるにねふるかと思ひしかどよくきゝつけてこのひとつくるまにて物しつる

人のさうじをへたてゝあるにきい給ふやこゝにことありこの世をそむきて家を出てぼだいをもとむる人にたゞ今こゝなる人々がいふをきけばなでしこはなでおほしたりやくれたけはなでたりやといふものかとかたればきく人いみじうわろふあさましうをかしけれど露ばかりわらふけしきもみえずかゝるに夜やう〴〵なかば斗になりぬるにかたはいづかたふたがるといふにかぞふればうべもなくこなたふたがりたりけりいかゞせんいとからきわざかないざもろともにちかき所へなゞどあればいらへもせであな物ぐるほしいとたとしへなきさまにもあつかゞなるかなと思ひふしてさらにうごくまじければさふりはへこそはすぐるなれかたおきなばこそは参りくべかゞなれと思ふにれいの心ゆかぬものいみになりぬべかりけりなゞどなやましげにいひつゝいでぬ

火とぼすともすと聞ふべしうごかねは女君のしぶられて出起れぬなり我は公なりをとりは辟踊の踊のごとしかなしみのふかき體を形容せるなりくばるは分配の義にていへり京へめしつれかへるものそれ〴〵に乗わかつなり道すがらは山寺より京の居所までの間を云詞なり夜もすがらのすがらに同かの例のさるがうごとを公の口にたやされぬをふさにあれどゝのべられたりふさは總の字にて俗にいへるふつさなり夢路鰔とは今歸る眞とも思はずゆめにありくかとうたがはるとなりゆめぢとぢの字をつけていへるはかへる途中によりてぢと添たりもろともなりつる人とは道綱なりぐしければゝ具するなりつれてともに京へゆくなりぐしければを契本にくらければになほせしかども原本よく聞ゆれば契に今はしたがはざるなりあへなんは食物のあへものなとのあへに同合するにてあひのるを云それゆゑにかへる道のわびしさも道綱と時々ものいひかはせるにかゝれるとなりまかりかへるべき由を日のうちに相しらせたれば皆心づかひして待てるとなりいひたりつるの下にしかと句してよむべしちりかいはらひは掃除なりかいはかきなりゝとはかなもたがへりおりぬは車より下るなりひやうとは冲本に俗にひよつとゝ云詞なりと注せり余云今の俗にひよいといへるたぐひなるべしひや

うとかけるは中の喉音にてかよへるにや又へうの
かなたる心きか文字にあては瓢たるへき歟と思へ
ばなりされど本のまゝにせりねは根なり　本にね
ともともありねふるかと思ひし人はたれをさして
かくいへるにや外の人々にはあらじ女ばのかたの
女なる心しひとつ事　て物しつる人とは先にもさ
いへば道綱なるべしさうじは障子なりきい玉ふは
きゝをやはらかにいへる詞のみぼだいは前に見え
し菩提なり佛道を求むる人にとなりなでしことい
へる花なればなでおほしともいはれもせんにくれ
竹を云にもなでたりやと云をきく人のをかしがり
てわらへるならんおぼしはなでおほせたりやと云
ことを相通じていへるならん露ばかりは女君の心
にいさゝかもわらふべき氣色のなきなりかたはい
づかたふたがるとは蒼天ニ神ハふたがりなりふた
がりは世に云ふさがりなりさとたは横通なれど事
物のすべてふたがるといへるが雅言なるべし源氏
はゝきゞの卷　中川のやどりへ方違におはせしこ
とあり天一神を中神とも一神ともいへる各其義あ
りときこゆ一甲子六十日の内自二癸巳一至二戊申一十

六日在ニ天上ニ其餘は西方に五日宛四隅に六日宛い
ませり其方へ行むかふがあしき故にかたたがへに
一夜外へゆきとまりて扨其處よりゆくべき方へ行
なかふなり今鳴瀧の方より女君の里へはふたがれ
るなり夜もやう〳〵夜半になる折ふしたれかふと
此事を云出せしなりうべもなくとはうべは諾の字
なり唯諾するにも及ばず山よりこゝはふたがれど
も今いかにせんといへるを公のかたゝがへせぬは
わろきことなりいざもろともにちかき所へとあれ
ど其答もせでたとふべきかたもなきむやましき夜
の暑さかなと打ふしてかたゝがへにゆくべきさま
にも見えねばせんかたなく何くれとなやましげに
いひて公はかへられつとなりさふりはへこそはよ
りは公の詞なりさはしかなり天一神のこと甌江人
楚にのせられたるを今其大概をとりて注せり
つとめて文ハ夜ふけにければいとなやましくてなん
いかにぞはやとしみをこそしたまひてめこの大夫の
さもふつゝかにみゆるかななどぞあツめる何かはか
ばかりぞかしと思ひはなるゝものから物忌はてなんに
いぶかしきこゝちぞそひておぼゆるに

としみ賀に年滿と云こともみゆれどこゝはかつてさにてはなし精進あげのことゝ見上巻にもすでに此ありとしみは何の字をあつべき或は正五月を年三と云ことあればこれをとしみとも云にや未詳ふつゝかは藻鹽草に太の字なり下すしき心もありと今案に源氏椎の巻に齋院のをばぎみの女五の宮年老ぼれ玉へるを云にふるめきたる御けはひしはぶきがちに又云聲ふつゝかにこち〳〵しくとあり今こゝの文言をうかゞひ見るにそなたもはやく精進あげなどをとり行ひ玉へ道綱もふつゝかに下すしうみゆるもそなたの何くれと云て我にしたしくめされぬ故おのづからかくもなり行ぬと女君をかこち且つはちしめらるゝおもむきとしらる女君の心には公のさばかりいはるゝのみにして實ならぬことがちなればこなたにはひたすら公を思ひはなるゝ物ながら公の物忌のはたされば又もや來られんかといぶかしき心ちぞそへるとならし

六月をすごして七月三日になりにだりひるつかたわたらせ給ふべしこゝにさぶらへとなん仰ごと有つるといふものとも來たればこれかれさわぎて日ごろみだれがはしかりける所々をさへごほ〳〵とつくるを見るにいとかたはらいたく思ひくらすにくれはてぬれはきたるをのこども御車のさうぞくなどもなしつるをなど今迄はおはしまさゞらんなゞどいふほどに夜もふけぬある人々猶あやしいざ人をして見せに奉らんなゞどいひてみせにやりたる人かへりきて只今なん御車のさうぞくときてみずいじんばらもみなみだれ侍りぬといふされはよとてまた思ふにはしたなき心ちすればおちひなげかることゝ更にいふ限なし出ならまし（時はかばの誤り、下のやゝ聽えず）かくたねふだかるめを見ましやとこよなうおもふありとあるもあやしうあさましと思ひあへりことゞも見よばかりにこずなりぬるやうにぞ見えたるいかばかりのことにてとだにきかばやすかるべしと思ひみだるゝほどにまらうとぞものしたるこゝちのむつかしきにと思へどとかくものいひなゞどするにぞすこしまぎれたる

六月を原本に六日にあやまれり数本にはやく直したり今從ふ公の方のもの共來りて午の時ころ公の來られしほどにこゝに來てまちうけよと仰ごとありつると云により家内の人々さわぎてみだりたる

所などをごほ〳〵とかゝがましく取つくろふをもかへりて心やましく思ひくらし居るにはや日もくれはてぬれども公のみえねば前にきたりをゝ者ども總　玉ふべき御車の裝束〳〵もなせし　何にしておはせぬことゝ云程に其夜もすでに更ぬると也ある人々は女君の家内に所有の人々なり車のさうぞく解ては前にさうぞくしつるをの應ょりみずいじんは公のめしつれらるゝ隨身なり隨身は本おほやけのものなれば御の字をよべるなりさればよとは公の志のうすきを云へるなり其穴の女君へかくまでうとくなり行を世の人はさ　なり我につかふるものにさへおもなく公のうとさいみ透くがごとき故にはしたなき心ちすとかけるなるべ　京へ出ずして山にのみあらばかくのごとき思事も出くまじと悔ましきなり家内にある人すら皆あさましきこととたがひにかたりあへるさまなりことゝもは來んとも云て皆其言たがひぬることの三夜さにも成れるとのことにやいかほどのことにて猶かくばか　たがふるゝよしだにせめてきかばすこしは心もやすまるべきこととなるにやかやうに思ひ亂るゝほどに客人の來りぬ心ゃあしき折にとおもひ　れどもとやかく物かたりしてすこしは物思ひのまぎれとかへりてなれりとなり原本にまらうどをまかうどとあやまれり又結句まぎれたるの下にその字あ　契本いづれも脱しぬ今かれに從ふ

さてあけぬれば大夫なにごとによりてにかありけんとまゐりてきかんとてものすよべはなやみ給ふことなんありける假にいとくるしかりしかばなんえものせずなりにしとな　のたまひつるといふしもできかであるべかりけるにぞおぼえたるさは　にそあるをもしゝだにきかばなゝをふはましと思ひむつかるほどに

先夜何事によりて公のきまさんとしてきまさゞるおぼつかなければうかゞひてんとて公の方へ道綱のまいらるなりさてかへりてようべはなやみありて出物せざりしと玉ひしといへるをさやうのいつはりごとはきかずぞあらまほしもし公のまめ〳〵しくば故障のこともありもせしかされどもしやゆかれなすきまもあらばと思ひしに得ゆきもせざりしなどまことしきさまでもしやきかば我も何

をかくは思はましとの文言にや
ないしのかんのもとより御文有みればまだ山ざとに
かとおぼしていとあはれなるさまにの給へりなどか
はさびしげさまさるすまひをもし給ふらんされどそ
れにもさはり給はぬ人もありときくものをもてはな
れたるさまにのみいひなしたまふめればいかなるぞ
とおはつかなきにつけても
原本まだ山さかとあるはかな倒してあやまれり又
さびしのひを脱せりその誤分明なれば今かなを加
へて補ふ
いもせがはむかしながらのなかならば人のゆききの
かけはみてまし　尚侍
此尚侍の歌は玉葉集雑の二に入れり
御かへりには山のすまひは秋いけしきもみ給へんと
せしにまたつき時のやすらひにてなかぞらになん何
しげさはしる人もなしとこそおもふ給へしいかにき
こしめしたるにかおぼめかせ給ふにもげにまた
すまいを原本にすさみとあやまるまたは久なるべ
し古今集雑に世を捨て山に入人山にても猶うき時
はいづちゆくらん此歌の心にて今詞をかくつゞけ
られたりしげさはしる人もなしも又古今集戀にわ
が戀は深山がくれの草なれやしげさまされどしる
人のなきの謂なり
よしや身のあせんなけきはいもせ山なかゆく水のな
もかはりけり　女君
なは名なるべし尾本にはあせもと直したりこれは
此日記の例にものかなをんにかけるを以かく直さ
れたるにやされど此歌におきて尋常いむと通へる
んにてあるべしときく故に尾本に今はしたがはず
原本のまゝにうつせり上の詞のげにまたはげには
實なりまたは又にて此歌へかけていへるにてもあ
るべし
なゞどぞきこゆるかくてその日をひまにて又物いみ
になりぬときく
癸の方のものいみなり
おくる日こなたふたがりたる又のひと日をみんかし
と思ふ心こりずまなるに
原本に又みんの又の字なし契の一本に又の字を補
入たり今それにしたがへりみんかしはみえんかし
也下の詞に夜ふけて見えられたりとあればこゝに

もみえんかしなるべき花えの字脱たるにやされど
みんかしにてもきこえもすらんと補入れず

夜ふけて見えられたり一夜のことゞもしか〳〵とい
ひてことひだにとていそぎつるをいみたがへに皆人
ものしつるをいだしたてゝやがてみえてゝなんなど
どつみもなくさりげもなくていふかひもなし

原本にはいみたがへにをいみたるべきにとあり今
契本の直しにしたがへりさりげもなくてのても契
本にしたがふて補ひぬ罪もなくさりげもなくてと
は公 自らをこたりを何とも思はれぬさまなれ
ば所詮いふかひもなきとなり

あくればしらぬ所にものしつる人々いかにとてなん
とていそぎぬ

しらぬ所とは公のしりおよばれぬ所へ女君のはゞ
りのがれられたるなるべしいそぎぬを原本にいに
きぬと誤とみゆ或はいきぬにてにの字をあませ
しも知がたしすみやかにのがるゝわざならばいそ
ぎぬにてもありなんと思ひてかく直しぬ

それよりのちも七八日になりぬあがたありきの所は
いせへなどあればもろともにとてつゝしむ所にわ
たりぬ

あがたありきの所とは父のかたを云父倫寧系図に
伊勢守ともあれば此比その任のときにあたりしな
らんおもふに女君の公にあはんことを遁れん為に
外へうつらる比にて父ともろともにその所へうつ
らるゝなりつゝしむ所とは公にかくれ遁るゝ意に
てかくのべられたるにあらん原本に御せへとある
は伊の字が御に轉せしなり

ところかへたるかひなく午の時ばかりにはかにのゝ
しるあさましやたれかあなたのかうしはあげつるな
どあるじもおどろきさわぐにふとはひいりて何ひ
ごろれいのかうもりすゑておこなひつるもにはかに
なげちらしすゞもさきてうちあげなどらうがはしき
にいとぞあやしきその日のどかにくらしてまたの日
かへる

かうしは格子なるあるには僧寮なり日比例の如く
佛前に香 燈明て行ひてありしなるべし 念珠
なり長き数珠もまろにしおあげ仏がはしきさまを
いへり

かげろふの日記解環中巻之十一

さて七八日はかりありてはつせへ出たつ巳のときばかり家をいづ人〻とおほくきら〳〵しうてものすゝめり未の時ばかりに故あぜちの大納言のらうじ給ひしうぢの院にいたりたり

原本にはこのあぜちとあり此大納言は巳に物故せし人なりされば原本のの字をあましたり故に今故の字にかふ則師氏大納言にして初度の初瀬詣のかへるさに女君と往反ありし人なり下文にも其こと見ゆ按するに榮華物語天祿元年の下に七月十四日師氏大納言うせ玉ひぬと載す今此にみはてとあれば榮華にあぜちとゝなけれとも大納言にて按察を兼られしこと此日記を證とすべしうぢは宇治なりらうじは領なり原本に[illegible]とあるは[illegible]の誤れるなりかな文に多くはらうとあれば今はらうとうつせり

人はかくてのゝしれどわが心ははつかにて見めぐらせばあはれに心にいれてつくろひたまふと聞し所ぞかし此月にこそは御はてはしつらめほどなくあれにだるとおもふこゝのあづかりしける者のまうけをしたれば旬たてたるもの主のなめりとみゆ物見よりすだれあじろびやうぶ黒かいの背に朽葉のかたびらかけたる几丁ともゝいとつき〳〵しきもあはれとのみ見ゆる

きゝし所ぞかしを原本にはそかしの三字をによしとあやまりたり今契本にて直せりあづかりは預の字蓋宿守なりたてたるものゝ下原本このかなにや己の字にや書うつしあやまりてあやち甚みがたし契本に主の字につくりてその傍に遺物としるせりこれにて明らかにしりぬかの師氏のぬしののこしおかれし物どもを女君の立よられし故宿もりがしつらひまうけたる也原本にものみはりとあるはよのかなの光に轉せしならん車の物見よりまうけし物どもを見わたせるを云ならん網代屏風宇治によしあり黒がいは黒柿なり几丁は例のかり字なり

こうじにだるに風ははらふやうにふきてかしらさへいたきまであればかざがくれつくりてみ出したるやゝこぐらくなりぬればうぶねともかゞり火さしとほしつぎひとりはさしゝきたりをかしく見ゆることか

ざりなしかしらいたさのまぎれぬればはしゐすま
きあけて見出してあはれわが心とまうでしたびかへ
さにおなの院にぞゆきかへりせしこゝぞなりける
みしあせちどのゝおはして物などおほせ給へめり
しはあはれにもありけるかないかなる世にさだにあ
りけんと思ひつゞくれば目もあはで夜なが過る迄な
がむる

ごうは困の字風がくれは風をよぎるわざをしてな
りうぶねは鵜舟なり一人はかゞり火ともしつぎ一
人は船をさしてゆけるさまなりかゞがくれなど珍
らしく面白詞なりさて此かしらさへよりをかしく
みゆることかぎりなし迄かな数七十字は原本に脱
落せしを沖本にて得たりさだめて水府の御本より
出たるならん殊に詞つゞき興ありける段幸なる哉
玩吟するに堪たりは　のすは端の靡なり原本にあ
がたの院とはあやまれり彼方の院なり即宇治の院
なりみしあせち殿とはその折相見しと今跡よりい
へる詞なるべしさだは定かなるべし

うぶねどものゝぼりくだりゆきちがふをみつゝ

原本　は御ふねどもとあり今沖本にしたがふ

うへしたとこがるゝことをたゞぬれはむねのほかに
はうふねなりけり　女君

原本。かへしたとせり是う。をあにまがひてかき情し
たること明けし

なゞどおほえてながむればあかつきがたにはひきか
へていさりといふものをぞする又なくをかしくあは
れなり

あけぬればいそぎたちてゆくににへのゝ池いづみ川
はじめみしにたがはであるをみるもあはれにのみお
ぼえたりよろづにおぼゆることいとおほかれどにぎ
はゝしきにまぎれつゝあり

按にはじめ見しにたがはて云々と云へる公との中
のはじめにことたがひてうときに引あてゝの歎息
なるべし

かうたてのもりに車とゞめてわりごなゞどものすみ
な人のくちむまげなり

かうたての森原本にようたてとあり是かのかなを
ふ。とかけるをよの字にまぎれてかくなりたるもの
なるべし沖本にかうたてと直せる　今は　たかへ
り見本には日本後紀続喜部香達池を引りタさいば

らの藤生野のかたちがはらを引て円く上達藤神祠
下達藤神祠倶に在二禪定寺村一　傍注せり然るに山
城名勝志にさいばらの藤生野を引て円く藤生野は
松尾の北法輪寺の西三町許道より一町程東に森あ
り土人藤キと唱ふ古へは神社ありとなん云々さ
れど今は詣せまうでの途なれば綴喜郡是ならべし
枕草子にもりはとあまたあげたる中にかうだての
森と云が耳とゞまるこそあやしけれもりなどいふ
べくもあらず唯一木あるを何につけたるぞ
かすがへとてすく院のいとむつかしけなるにとゞま
りぬる
春日は大和添上の郡の郷名にてその郷名今は廃せ
り又同郡の郷に大宅と云るも今磨して白毫寺村に
存して俗　古春日と稱すと并河氏の輿地志に見ゆ
考に備る已らく院は宿院なるべしかすがへといふ
日本二考得一もしくは春日部などゝよめるにや又思
ふにかすがへと云へるはいづくの方へと云して春
日の社へまうでんとてたゞちにはせの道にすゝま
ずしてかすが山の方へよきるたいに宿院にとまれ
るゝ云へるにもありなんかしからばすくゐんは春
日につきたる所ならんト文へつゞけてよむにかく
おもはる
あれよりたゞ程に雨かせいみじうふりふゞくみかさ
山をさしていくかひもなくぬれまどふ人おほかり
あれよりのあはかのかなの誤にてかれよりにや
されど始原のまゝにすみかさの名ある故風雨はげ
しければ笠をさせどもしぶきてぬれまとへるとの
詞なり此いみじきは甚しきをいへる詞にて忌の義
にはあらず一笠山は春日山の別名なり
からうじてまうでつきてみてぐらたてまつりてはつ
せざまにおもむく
からうしては在労なりやうやうとしてなり春日の
社に參詣して御幣を奉りそれより初瀬への道筋へ
すゝまるなり
あすかになあかし奉りければ
あすかは飛鳥寺なり本は飛鳥の地にて法興寺と云
元明帝の和銅三年にならの京へうつし玉ふ今の塔
のみのこれる元興寺なり即はつせへの道なれば立
よりてみあかしを奉れるなり
たゞくぎぬき頭注書入云抄に物語におはしつきたれとかとなと
もくたゞてくぎぬきといふ物なそしたりけると

あること[illegible]てい[illegible]め[illegible]門にてあらで今[illegible]にくるまをひきかけて見ればこだちいとをかしきところなりけり庭きよげに非おいとのまゝほしければむべやどりはすべしといふらんと見えたり

原本にくるまのまを脱せり非もいとを非もはとしいふらんをゆふらんと皆あやまれるを直しぬ契本に釘貫は里門を云防の橋に釘を打てかへさすあればくぎぬきといへりむべやどりはすべしとはさいばらの飛鳥非にあすかゐにやどりはすべしかげもよしみもひもさむしみまくさもよし此さいばらにうたへる飛鳥非或は今の京二條萬里小路の人家のうらにありなど云説もあるを契沖は今此日記にいへるか正説ならんと甚信じられし由をきくされど釋鬮の愚案抄に右の二條わたりの非と又大和の飛鳥川のあたりと両所をあげられしあすか川の邊とあれば今こゝにいへるとは壇地又かはれりされば此日記にいへるをさいばらの正説とも定めがたし

いみじき雨いやまさりければいふかひもなし

此いみじきも甚なり原本にゐめのめの字を脱せり

からうじてつばいちにいたりて例のこととかくして出たつほどに日もくれはてぬ雨や風なほやます火とほしたつと吹けちていみしうくらけれ夢のみちの心ちしていとゆゝしくいかなるにかと泣おもひまどふ

つばいちを原本にはいうとかな轉したり此いみしうも又甚なりゆゝしくは忌にき意なり

からうじてはらへ殿にいたりつきければ雨もしらずたゞ水のこゑのいとはけしきをぞさなゝなりときく

はらへ殿は祓殿なりつきければを原本には給ければとせり一の抄本に傍注して給の字つぎの訓あるにて誤と誠にしかり故につきのかなに直す又はげしきぞそさなゝなりも原本にはおきの二字をうきと誤れりさななりとは水の聲をきいて雨のやまさるとしれるなり

御堂にものするほどに心ちわりなしおほろけにおもふことおほかれどかくわりなきにものおぼえずなりにだるべしなにごとも申さであけぬといへど雨猶同じやうなりよべこもりてむげに晝となしつおとせで堂もりのまへをさすがにあなかまゝとたゞ手を掻面か振そこらの人のあざとふやうにすればさすが

にいとせんかたなくをかしく見ゆ

心ちわりなしとは何となく心あしきなるべし何くれと鬱情の多くあれど心ちのあしければおほえぬさまになりたるならんとにや大悲尊へわざとまうでゝおのか身上のことを願べき心ばえを申上べきを申さぬ内にこもりし夜も雨のふるまに〳〵明行體なり心のあしくて長き夜もいつしかあけて日の出る比にもなりしとなるべしさてまうでゝ後はかへるさになれば心いそがはしくて堂を下らんとて堂もりのあまたある中を會釋して出るさまときこゆあかまと原本にあるはなの字の落たるにや手をかき面をふたぎ皆會釋して人中を出る形容をいへるなるべしあぎとふは原本にあぎとうとあれどもふのかななり沖本一に喩嗢日本紀と傍注あり今案にこれは神武紀の文字なり又仲哀紀に神功皇后の角鹿よりいでまし安藝國淳田の門に到らせ玉ひ船上に御食ますときに魚多くあつまるに皇后おほみきを以て魚にそゝぎ玉ふ故に其處の魚を六月に常に傾浮如レ醉とあり神武紀の喩嗢を字はかはれども共に同しく水中より浮び出て人にしたがへる事を云りしかれは今そのふるき詞をかりて女君　會釋せらるゝを心よくうけて各其座をよけて通せることをいへるならん此行文にわづかの中にさすがの詞を二つ用らるたゞにも通り下らるべきをさすがと云へば女君のおのれを云下のさすがは心よりはさなけれども女君の會釋あればのさすがにて彼方を云也さて堂守の堂が原本にわたるの三字に訛り此日記の印本往々かくのごときこと有をかしくみゆのみゆも原本にはゆみと倒せり

つば市にかへりてとしみなどいふめれどわれは猶しやうじなりそこよりはじめてあるじする所ゆきもやらずありものかづけなゞどするにてをつくしてものすゝめり

としみ前にも見えて俗にいふ精進あげなりそこはつば市をさせりあるじは饗なりこゝの書ざまなど見るに前のたびからして馴たる人どもありて饗ものゝ多かるべしされど旅のことなればたゞありあひたるいさゝかの者をかづけれどもそれをあまなひうくるからなじみのものゝいやしきもなき手をつくしてもてなせるよの言なるべしものすゝめりは

もてなすを云

泉川水まさりたりといかになゝどいふほどに宇治より
船の上手具して參れりといふがわづらはし例のやう
にてふとわたりなんとをとこがたにはさだむるを女
方に猶ふねにてをとあればさらばとて皆のりてはる
はるとくだる心ちいと興ありかおとりよりはじめう
たひのゝしる

くだるとは川上よりいへる詞なり

つち近き所にて又車にのりぬさて例の所には方あし
とてとゞまりぬ

例の所とは宇治院なるへしそれより都へかへる方
のあしき故乎

さる用意したりければ鵜飼かずをつくして一篝うき
てさわぐいさちかくて見んとて岸づらものたてしき
なゝどとりもていきておりたればあしのしたにうか
びちがふこつをどもなどまだみざりつることなれば
いとおかしうみゆそかし旅心ち馴て夜のふくるもし
らず見入てあればこれかれ今はかへらせたびなんこ
れよりほかにいまはことなきをなゝどいへばさばれ
とてのぼりぬさてもあかずみやれば火の夜一夜とほ
しわたるいさゝかまどろめばふなばたのごほ〱と
うちたゝくおとにわれをしもおどろかすらんやうに
ざんなるあけてみればよるのあゆいとおほかりそれ
よりさゞべき所々にやりあがつめりあらましきざ
なり日よいほどにたけしかばくらくそ京に來つきた
る

おりは車より下たるなり原本にうかひをうたかひ
としひとかゝりを人かりとうつしあやまれり今昔
沖本にて得たりこつしもこつをを誤　和名抄鱗介
の部に鮠魚漢語抄云古部乎本朝式　用二乙魚一字一
世に或は鮒などの類といへり然らば今の小ぶなな
るべしあしは蘆なりみゆそかしの按のかなを原本
二字のかなにわかちてきこと成た　たゞさ又たる
と變じぬたひなんはたうびなんとよんで給ひなん
と同さばれはさもあらばあれの極てつゝめ詞也と
ぼしはともしとよむべしやうにざんなるはやうに
ぞあらんなるなりあゆは年魚なりあがつは道傾な
りあらましきわざとはしかすべきをとなり

かげろふの日記解環中卷之十二

我もやがていづらめとおもひつれど人も困じたりとてえものせず

人は兼家公なり

又の日もひるつかたこゝなるに文あり御むかへにもとおもひしかどもこゝらの御ありきにもあらざりければびゞなくおぼえてなん例の所にかたゞ今ものせんなゞどあれば人々はや〳〵とそゞのかしてわたりたればすなはちとみえたり

こゝなるにとは此に在になりすなはち上卌初瀬もうでの前にしらぬ所に物しつるといへる其所なりこゝらは多きをいへることばなればともなひ人おほくもなくしのびありきなゞどゝいふほどのことばなりそれ故むかへにまゐらんも便なく覺えてとなり例の所とはしらぬ所へうつられぬ前の居所をいふなるべし言心はかくれた所にはなくて例かよひなれし所にましまさばたゞ今も參らんとなりさすればしたしき人々はやく前の所へかへられよかしと女君へすゝむるなればそれにそゞのかされて本のところへかへりたれば間もおかずやがて見えられたりとなり

かうしもあるはむかしのことをたとしへなく思ひ出らんとてなるへし

此一二句は爾来公との中のかく疎になりぬれどさすがにむかしのいとむつましかりしことをも思ひいづべきよすがなるべしとおのが心中をあかさるゝよしなるべし

つとめてはかへりあるしのちかくなりたればなゞどつき〳〵しういひなしつあしたのかごとがちになりにだるゝ今更にとおらへばかなしうなん

此時七月晦日なれば相撲の纏なるべしつき〳〵しは實々しく云なすを云かごとは託也むかしは公事に託して早朝かへらるゝこととはなかりしを思ひ出さるなりかごとがちは託多也

八月といふはあすになりにだゞめればあれより四日れいのいみとかあきてふたゝびばかり見えたり

原本にめれ。よりとありよまれず故にそれよりと直しおけれど尾本を見てあれ。とせしも又不穩どもめ。とあとちかければ姑かれに從ひぬふたゝび許と

いへるともいかゞなれば此ばかりはのみに通へる詞ときくべし

かへりあるじははてゝいとふかき山寺に修法せさすとてなゞどきく三四日になりぬれどおとなくて雨いといたくふる日心ぼそけなる山住は人とふものとこそきゝしかさらぬはつらきものといふ人もありとあるかへりことにきこゆべきものとは人より先に思ひよりながらつらきものとしらせんとてなん露けさはなごりもあらじとおもふ給ふれどよそのむらくもあいなくなんとものしけり

此段原本重複顛倒誤脱等ありてよみとかれず契沖本尾本等に少許所々に手を入しをかれこれ斟酌して姑かくのごとく記せり但其大意を得て止ん而已

またもたちかへりなゞとありさて五日許のほどに今日なんとてようさりみえたり

ようさりは只夜去にて夜陰なりようべのようのことしようとのばしいへるまでときこゆ

つねにしもいかなる心のえおもひあへずなりにだればわれからつれなければ人はた罪もなきやうにて七八日のほどにぞわづかにかよひたる

原本われらとあり沖本かを加ふ今それに従ふわれは女君の自云人は公なりほどはあひだなり

長月のつごもりいとあはれなるそらのけしきなりましてさ昨日今日風いとはげしくしぐれうちしつゝいみじう物あはれにおぼえたり遠山をながめやればこんざうをぬりたるとかやいふやうにてあられふるらしともみえたり

こんざうは紺青也沖本に更級の日記に富士の山にさまことなる山のすがたこんじやうぬりたるやうなるに雪のきゆる間なく積りたるは色こき衣に白きあこめ着たらんやうに見えてとあるをひけり蓋しふるき物にはあらざれども紺青の證にかけるならんあられふるらしは古今とりものゝ歌に深山にはあられふるらし外山なるまさきのかづら色づきにけり今遠山をながめやるにつきてこゝもとは時雨うちすれば遠山はあられもふりぬへしと古今の詞によりて思よせられたり

野のさまいかにをかしからん見がてら物にまうでばやなゞどいへばまへなる人げにいかにめでたからんはつせにこのたびはしのびたるやうにておぼしたて

がじな〻どいへば去年も試んとていみじげにて詣たりしに石山の御心をまづみはて〻春つかた御ものせんそも〳〵さまでやは猶うくていのちあらんな〻どこゝろほそうていはる

こぞも云々は去年石山へまうで玉ひしことを云出せるなりこゝろみんとは女君の我世のあらましを大悲尊に打まかせて治定せんとの意なり石山の下冲本尾本ともににてと補入たり因て臆に思ふには調たらはぬさまにもあれどこれは原本のまゝにてもあらまほしくも思はる石山の御心とは石山の觀音の御心と云意なりされどかなものなれば石山の御心とのみ云ても言足りなましはつせ石山ともに名高き大悲尊の靈地なれとも石山には殊に心をこめて詣て玉ひしやうによみなさるれば先石山のたのみのしるしあらんことをも見果て來春にも反てはせへもまたまうづべしと也しひて契本のごとくしてにての詞をくはへては其言切ならずかへりて文言も明かならず心の字も女君の心かともみえて一句落着せぬなり故に姑臆說にまかせり猶後來の君子の是非を待のみ

袖ひつる時をだにこそなげきしかみさへしぐれのふりもゆくかな　女君

此詠續古今集雜部上に長月のつごもりの比いとあはれ打しぐれける空をながめてと前書していれり歌はこれに同但ひつるをぬれしに易たりひつと云詞三代の比はあれと後々は好まぬになりて改られしなるべしされど此日記が正なり且此歌だにとさへと一首の内にありて其別も分明なり後世注者多はひとつ詞のやうに覺ゆるはひがことなることこれ等の歌にてもしるべし

すべて世にふることかひなくあぢきなき心ちいとするころなりさながらあけくれて廿日になりにたりあくればおきくるればふすをことにてあかでいとあやしくおほゆれどいかゞはせんけさもみいたしたれば屋のうへの霜いと白しわらはべよりべの姿ながらしもくちまじなはんとてさわぐもいとあはれなりあなさも雪はづかしき霜かなとくちおほひしつゝ句かくれみのたのむべかゝめるところちたくならずなほおろ〳〵人どものうちきこえける

上の時雨よりすべて世にふることゝいひ下されたた

り臆に原本のあくればのはをとの訛と見ゆ且つ下の言にけさも見出したればとはふしながら見る體のやうにもあれば夜あくれども只臥をしごとにしてと釋しおきしかるに契本に原本のあくればとふすをの間におきくるればのそこばくのかなを補入たれば今はそれにしたがへりしもくちは和名抄類和名比美辨色立成云之毛久知手足中寒作瘡也かゝれば俗に云霜腫しもやけのたぐひなりとこゝろうべきなりさもは其なり（昔人云非也）霜はづかしきは大霜にて雪も此霜の色にはすぬべしとこれ新たに云出されたるにや先輩にて名たゝる歌人なれは紫式部も此日記をとりてかける所往々見ゆされば末摘花を色は雪はづかしく白くしてとあるも今の雪はづかしき霜より出たるにやとおぼゆる也かくれみのは隱蓑なりかのわらはめを見る人どものたはふれごとなるべし此所も原本重復脱誤すくなからず契本におろ〳〵補し所且つ臆をもて姑かくつらねおけるのみ猶後賢の正を待といふ

神なづきもせちにわびしみつゝすぎぬ霜月も同しごとにて廿日になりにければ今日見えたりし人そのまゝに廿日より跡をたちて文のみぞふたゝひはかりみえける

十月もわびしくて過霜月も同じ如くにていつしか廿日になれる日公のたま〳〵見えられしも又まへのごとくそれよりあゝをたちて文のみぞ二たび見るとなりふたゝび許と原本にはあれども此はかりものみにかよへるはかりなるべし

かうのみむねやすからねどおもひつきにだれば心よはきこゝちしてともかくもおぼえで何よそか許の物いみしきりつゝなんたゝいま今日だに○こそおもへなゞどあやしきまでこまかなりはての月のとをかむゆかばかりなりしばしありて俄にかいくもりて雨になりぬたふるゝかたならんかしとおもひいでゝながむるにくれゆくけしきなりいといたくふればさはらんにもことわりなれど昔はと許おぼゆるに涙のうかひてあはれに物の覺ゆれば念じがたくて人出したつ

おもひつきは思ひのつきたるなりともかくもおぼえではおぼえずしてなりこゝにて何すべし以下は公よりの文の言ばなりよそかを原本にようかとはかなあやまれり四十日許となりこゝもとへ來らん

とせし折ふし物忌しきりにつゞきて得まゐらでやうやく今日だに來らんと思とこま〴〵云おこされたるとなりかくいへる日は極月の十六日也これらのばかりはすでに十六日のことをあとよりいへれば詞のゆるめるまでなるべしたふるゝかたならんかしとはたとひ來らるともまもなくついたちてかへらるべしとおもひながら雨のもしいたくふりなばみえぬことにも又なりなんやとくれゆく空をながめらるゝなりたふるゝとは前々公の來りてはたふるゝとたち山とありしことと見えたる詞にすがりてかく述られしなるべしさて雨のいたくふればそれに障てみえぬもことわりなれどむかしの中ならばと何くれ思ひ出て今はうとき中なれどもさすがに戀しさのしのびかねて人を出したてゝものすと也

かなしくもおもひたゆるかいそのかみさはらぬものとならひしものを　女君

萬葉集第四にいそのかみふるとも雨にさはらめやいもにあはんと契りしものを此歌を本歌とすおのづから雨はこもれり

とかきて今ぞいくらんとおもふほどに南面の格子もあげぬ所のけはひおぼゆ人はえしらずわれのみぞあやしと覺ゆるにつま戸おし明てふとはひ入たりいみじき雨のさかりなればおともえきこえぬなりけりこゝに御車とくさしいれよなゞどのゝしるも聞ゆなどかしも月比のかうじなりともけふのまゐりにはゆるされなんとぞおぼゆるよしおほしあすはあなたふたがるあさてよりはものいみなりすべかゞめればなゞどいと言よしやりつる人はちがひぬらんとおもふにいと目やすし夜の間に雨やみにたゞめればさらば暮になゞどいひてかへりぬかたふたがりたればうべもなく待にみえずなりぬよゞべは夜のふけにしかば經なゞどよませてなんとまりにし例のいかにおぼしけんなゞどあり山ごもりの後はあまがへるといふ名をつけられたりければかくものしけりこなたざまならでは方もなゞどなげかしくて

おほぞらの神のたすけやなかりけんちぎりしことをおもひかへるは　女君

右の歌をよんでもたせやりたる使の今比は行つくらんとおもふ時分に公のきたられたるなり原本にあけぬとこ人のけおほゆとあり讀レ之不レ知ニ何謂一

幸得二異本一よみとけり異本に人をふとしけの下にはひの二字をたせり原本こゝに御車とくを今に御車とてと誤なとかしもよりは公のわびことなり勘事も原本にようしとせりかうじの系をよに誤たるなり勘事は勘當と俗にいへるに同しよしおほしとはゆるされなんのわびことの言をつくしてさま〳〵とことばの多ありしとなり言よしは言好なりすべかんめりとはふたがりやものいみ何くれとさはりありて參らまほしけれど心にまかせぬとなりすべかんめればをふたがりものいみへかけてきくべしすべかんめればは猶すべからくと云詞の類なりこなたよりやりつる人とまちがひしとうしろめたかりしも思の外にことよげにてむかひたればめやすしと也人目やすきの詞にてうちとけられし體を家人のみきゝてもあしからざりしとの心なりくれに又來んとありければ公の口よりかたふたがるとのことなれども猶もしくやと待に見えざるは宜なりとの意也しかるをうべもなくとはうべは諸の字をもよますれば唯諾にも及ばずの心にもかよふべしよべより下又公の言ば也沖本尾本ともによべはの下に人のものしたりにしかばと一本がきに傍注したりいづれか是ならんと記しおく也和名抄曰本草云く蛙黽は形小如二蝦蟇一而青色者也和名阿末加閉流歌の五文字原本におほはこのとあり必あやまれるなるべしこはらの訛にして大原の神ともも しほ草に神の部にあげたれば夫にやと思へどもされど大原は何のより處なし方たがへのことなれば天一神を中神ともよべる方にとりて大空の神とよみしにやとはもその轉訛とみて姑かく記しぬ勿論沖本等にいづれも手をつけねばかくのごとし

とやうにてれいの日すぎてつごもりになりにだり忘の所になん夜毎にと告る人あれば心やすくてありふるに月日はさながらおにやくひきぬるとあればあさまし〳〵とおもひはつるもいみしきに人はわらはおとなともいはずなやらふ〳〵とさわぎのゝしるをわれのみのどかにてみきけばもしも心ちよげならん所のかぎりせまほしげなるわざにぞみえける事なんいみじうふるといふなりとしのをはりには何事につけても思ひのこさゞりけんかし

按するに例の日とはこゝにも廿日の日をいへるな

らん上文にさながらあけくれて廿日に成にけり又
云しも月もおなじごとにて廿日になりにければと
あればなりいみの所とは物忌する所なり夜ごとに
そこにおりと告る人のあればうしろめたきことな
くて心やすきとなり原本におにやくひとあるはく
はらの轉せるにておにやらひなるべしと治定して
よみしに冲本のたぐひ皆原本の如く直さずして傍
に燒ゝ字を付たり夫追儺は朝廷の公事の一にして
除夜に行はるゝこれをおにやらひともなやらふと
も云それに准して佛名のごとく家々にも行はれ或
は下民にても今の節分にうちまめするやうなるわ
ざもありたるならんさおもへば或卅日の日鬼形な
どを作りて燒やうのわざもあることを知てかく
傍注せしなり下卷に正月十五日に此事あり畢竟こ
とに託して下すのたはふれことゝきこゆ

かげろふの日記解環下卷之一

洛下　坂徵　仲文甫著

同　道綱　三年　十八歲

かくて又あけぬれば天祿三年といふめり
此日記直に年號を擧ていへるは唯是已
今年はうきもつらきもともに心ちはれておぼえなと
して大夫さうぞかせていだしたつおりはしりてやが
て拜するをみればいとゆゝしうおぼえて淚ぐましお
こなひをせばやとおもふをこよひよりふざうなる事
あるべし又いかなるとてにかと心ひとつにおもふこ
としは天下にくき人ありともおもひなじらじなゞ
どしめりておもへばいと心やすし
原本にとゝしとあるは必ことしの訛也その下のも
も又その下又もの字しげく三あるによりてまぎれ
あやまりてもに成たるか或は身の色に變したるか
にて所詮ことしはとなくては下への文意つゞかず
ふざうは不淨にて蓋月事なりなじらじは不詰也詰

字鏡に奈是留と假名をつけたりしめりては沈の字の意なるべし心ひとつは人知れず我心に思の滿チにるなり

三日はみかどの御かうぶりとて世はさわぐ

百錬抄曰天祿三年正月三日帝元服

あをうまやなといへども心ちすさましうて七日もすぎぬ

すさましうは冷の字あつへし

八日ばかりにみえたるいみじう節會セチヱがちなるころにてなゞどありつとめてかへらる

八日の日公の年あけて後はじめて來り玉へるならん然るを八日ばかりといへるは年あけてやう／＼八日比に來られしの意ある歟いみじうより下は公の例のわびことなり

しばしたちとまりたるをのこどもの中よりかく言つけて女房の中にいれたり

しもつけやおけのふたくをあちきなきかけもうかはぬかゝみとそみる

そのふたにさけくたものといれていたすかはらけに女はう

さしいてたるふたくをみれはみをすてゝこのむはたまいこぬとさためつ

此段二首の歌よみときがたし漢字多くありげに見え侍りさるによりてか契本一向に手をつけず仍て原本の如く平字をもたがへずそのまゝに書うつし置のみされど後來探索人の手かゝりにもなるべきにやと臆説をいさゝか左に記しおくのみ今しひて案を付みるに公の方のをのこどもより女君のかたの女房の中へ明櫃アケビツをもて酒を乞におこせるにや五もじの歌は海。に字形あやまりやすければ減。糸に汚濁にても本は六。なりしを轉じ／＼てもになりて此五文字もと白酒やにてもありしにや下句に影も浮はぬといひしの句に樋の蓋フタぐと有又下の歌に倚をかくしてさしいでたるふたぐをといひみをすでてなゞどいへればあき樽をもて酒を乞たる故に酒くだものをいれて出すといへるにや又このむはたまをいと酒にくもりをさへいへるにやかくて中々なる身のひまなきにつゝみて世の人めさはりておこなひもせで二七日はすぎぬ

つゝみてはつゝまれての心猶はだされをはたしと

いふか如き歟原本に世の人のさりてとあり思ふに上のつゝみてと同意にて必さはりのはを脱せしとはの一字をくはへてき二七日は次にいへる十四日と同しかるへし

十四日ばかりにふるきうへのきぬこれいとようしてなどいひてありさるべき日はなどあれとばにきもおもはであるにつかひのつとめておそかしとあるにひさしとはおほつかなしやからころもうちきてなれんさておくらせよ

とあるにたがひてこれよりふみもなくてものしたればこれからよろしかめりきならさぬがわろさとばかりありねたきにかくものしけり

わびてまたとくとさわげどかひなくてほどふるものはかくこそありけれ　女君

とものしつ

此段も誤脱等ありげにてこよなう釋しがたし契本も半口の解もなければ例の臆をもて姑少しく試みに直し侍ぬ原本きるつきひとあり語をなさずさだめてかなのあやまりあるべし仍てつの字は本はへにてありしがつにあやまりてそのつが汝のかなになりたるにやきもさに多くは互にあやまりやすければさるべき日はとよませたりとばゝ常の訓あればたとひやゝ故き袍なりともいと能してとあつらへられたる衣なればはれぎぬなるべしされば常に用らるゝにあらざればとりあつかひよくしつらへる間だもあるべきなればのどやかにおもひをるに公よりの使が早旦來りて遲しとのせめに及且歌をもよんでしめされしとにあるべき乎さて公の歌を原本にあるまゝに強て釋せばあつ口口口衣をかく久しくまたんとはおぼえざりしとおぼつかなしの詞にふくめて口着てなれんに女君の方へ來りなれし心をよせられたるにやたがひてとは女君はかのきぬをよくしたてゝおくらんの心と公の心と違れはこれより文もて音信をもせさりしと也さしたれば又公の方よりにくさげなる言を云おこされたりこれからとは公の方からは言よげにあへしらふにきぬのことなんともおろそかにめさるゝとの言分ときこゆ着せならさぬがわろさといへるにも歌の詞と同じく女君の心からしてかく我をも來せならされぬとかけていへるなり原本にきをならぬと

は誤りて又さの字を脱せしならんねたさはねたましさ也とくとは疾なり

それよりのちつかさめしにてなゞどおとなし

つかさめしに除目也今正月なれば縣召の除目なるへしされど名目はあがためしなれども京官をもさつけらるればかよはしてつかさめしといへるにや又臨時の除目もありけんも知るへからす今下文をみれは公の大納言に任せられしとあれは公の自分このことを申されしにや

けふは廿三日まだ格子はあげぬほどにある人起はしりて妻戸をおしあけて雪こそふりたりけれといふ程にうくひすのはつこゑたりともことしはまいて心ちも老すぎて例のかひなきひとつ子ともおぼえざりけり

ゆきを原本にゆくと誤はしりてをはしにてと誤れりさて此一件も沖本いづれも傍注なしよつて又やむことをえず臆に思へらく此一件は女君の述懐とみゆおきはしりて雪ふりたりと或人のいへるとあれどもある人といへるは實に道綱をいへるにや下文にひとつ子とも覺えざりけりとあればなり伊勢物語にも業平を母のひとつ子といへり業平朝臣も兄弟あれとも外は皆異腹なり今道綱も兄弟あまたあれどもことはらにて似かよひたり

つかさめし廿五日に大納言になゞどのゝしれどわがためはまして所せきにこそあらめとおもへばおほんよろこびなゞどおこする人もかへりてはろうずる心ちしてゆめ嬉しからず大夫許そえもいはずしたには思ふべかゞめる

兼家公系圖に天祿三年正月廿四日大納言に任すとあり此には廿五日とあるは除目のあくる日云ひのゝしれば系圖にたがはすいよ〳〵所せきつかさを得られたれは我爲にはかへりてうとくあらんとの謂なりそれ故その慶を云おこせる人も却てろうずる心ちすとなりろうは弄の字にて嘲弄の意なり道綱のみぞ我にむかひていはねども下心には大納言にすゝまれしをうれしくおもはんとなり

又の日ばかりなどかいかにしていふまじきよろこひのかひなくなんなゞどあり

此任官のよろこひをいふまじきことにあらすそれにてはよろこひを申入るゝ人もかひなくあらんと

公よりいひおこされたるならん
又つごもりの日ばかりになにごとかあるさわがしうイなんなどかおとをだにつらしな何とはではいはんことのなさにやあらんさかさまごとぞある
又つごもりばかりになりて公より人していひおこされたるときこゆけだしさわがしうてとは女君の方へ公より人してことよく云々されてもとりあへられぬさまをおそれていへることばにやたとひことよくうけられずともなどかはおとづれをなさすしてあられふものかあまりのことにてつらしなとの文言にやさてその下は女君の公のしうちをうらみらるゝ詞にしてとはでとは此公来られぬを云ならん公の自らとはれずしては何のいひくさもなさにやかへりて女君のしうちをつらしなつどゝさかしま言をめさるゝとのことならん歟
今日みづからはおもひかけられぬなめりとおもへはかへりことに御まへまうしこそ御いとまひまなかッべかめればあひなけれとばかりものしつ
みづからは思かけられぬとはけふも使のみにして所詮来られまじきとなり御前まうしは奏聞なりあひなけれとは無二間然一の門のごとく其間に毫髪も言を入べきことの無なり原本にあいといのかなは誤れり愛相のあいにてはなきなり
かゝれど物とも覚えず成にだれば中々いと心やすく夜るもうらもなううち臥て寝たりさるほとに門たゝくにおとろかれてあやしとおもふ程にふとあけてげれば心さわがしくおもふほどにつまど口にたちてとくあけ早なとあなり前なりつる人々も皆うちとけたればにげかくれぬみくるしきにゐさりよりてやすらひにだに無蔵にだればいとかたしやとてあくればさしてのみまゐりたればにやあらんとありさに叱かたに松ふく風のおといとあらくきこゆるこゝらひとりあかす夜かゝる音のせぬはもののたすけにこそありけれとまでぞきこゆる
うらもなうは無レ裏ノ詞ニ同けれとも上よりの云くさりによれは今はひたふるに物を物ともおもはぬうかりとなりて心やすくして心内に伏蔵なきの意なるべし門をあくるは下人也とくあけとは妻戸をあけよなり急に早々なといはれしなりまへなる人は仕女也うちとけしねすかたなればおとろ

きて逆臣たりその門の自他・もに見苦さに女君のかたへ居さりよりて申さるゝなりのどかに相交ることは思よらぬさまになりちよと休らひにだにも來がたく成ぬとて夜もあくればわびことに使して來べきをしらせてさてまかるべきものをつんざしてふと參りておどろかせしかばかく便なきにやあ・るらんとなりこゝらより下は獨言なりこゝらは多の詞なり獨ねがちに多くの年月をへしに今のごとき松風のあらく音せざり　も幸に物の助にこそあるらめとなりとまできこゆるは松風のきこゆるなり公へきこゆるには非ひとりごとにて心の內を日記にしるさる　み

あくれば二月にもなりぬめり雨いとのどかにふるなりかうしなゞとあげつれど例のやうに心あわたゝしからぬはあめのするなゝめりされどとまるかたはおもひかけられずとばかりありてその　こどもは參りにだりやなゞどいひておきいでゝなよゝかならぬなほし　ほれよいほどなるかいねりのうちきひと、たれながら帶ゆる、かゝてあゆみいづるに人々御粥なゞどあや　きはんめれば例くはぬものなればなにかは何にと心よげにうちいひてたちとくよとあれば大夫よりてすのこにかたひざつきてゐたりのどかにあゆみ出て見廻してせざいをらうかはしくやきたゝめるかなゝどありやがてそこもとにあまかははりたる車さしよせをのこどもよりたるにてもたげたればはひのりぬゝめりしたすだれひきつくろひて中門よりひきいでゝさきよいほどにおはせてあるもねたげにぞ聞ゆるひごろいとはせはやとてみなみおもてのかうしはあげぬを今日かうで見いだしてとばかりあれば雨よいほどにのどやかにふり　庭うちあれたるさまにて草葉ところ〴〵あをみわたりにけりあはれとみえたりひるつかたかへしうちふきて晴る貌の容はしたれど心ちあやしうなやましうてくれはつるまでなかめくらしつ

原本に心ありたゝしと是分明にあわたゝしの誤也世に多くはあはとかけれとも此詞は水の泡につごときを形容せしと治定してかなをあわに作りぬ例のやつにしくたゝれぬに雨のにれの故となりされど又此幕かけてとゞまられんとは思はずとなりとばかりは少許なりよいほとなるは直衣へかけてみ

るべき歟原本にうちきひとかさねとつゞけれど單が一重に轉語せしとおぼゆうちきも袿にはあらで或は打衣にや裝束拾葉抄に衣の色のこと搔練は表裏紅打とあり猶有識の正をまつのみ盖女君の行ひの所なれは家人の粥をすゝめんとてあやしき侍れはといへりうちきとあるも或は打衣にやあやまり多き今の日記なればうたかはし容易にかやうの所はことに定かたしすのこは簀子なり世に云竹縁なりせざいは前栽也らうかはしくは亂かはしく草燒などをしたるかなとをしまるゝなりあまかははりたる車未ﾚ詳皮を張て雨中に用ん支度せし車とはきこゆもたげはもちあげなり擡の字也はひのりは這乘なり下すたれは帷裳なりさきおふもよきほどにておどろ〳〵しからねともそれだにねたげに聞なすとなり南おもてははれの方にて客人を申入る正面なれとも公にしはらくはあかしいとはす爲にかうしを上させぬを今日は不意に來りて雨故しばらくとゞまられしからめおのづからかうし上てさきおはして物々しき體にて立かへらるゝをまれに見出せりといけつころしつ毀譽なかばにおのが心

中をかくのべられしなり見出してしるすべしかへしは吹反の風にて晴をもよほせるなりはるゝがほをかし

かげろふの日記解環下巻之二

三日になりぬる夜ふりける雪三四寸ばかりたまりて
今もふる簾をまきてながむるあはれとはんといふこ
ゑこゝかしこきこゆ風さへはやし世中いとあはれ也
さて日はれなゞどして入日の程にあがたありきの所
にわたりたるにおほくわかき人がちにてさうのこと
びはなゞど折にあひたるころにしらへなどしてうち
わろふことがちにてくれぬつとめてまらうとかへり
ぬるのち心のどかなり

あかたありきのあがたを原本に脱せり上冊に倫寧
と一所にすまはれし所なり今又本の家より其所へ
うつらるなりわかき人々は皆親族なる也折にあひ
たる聲とは四季に應しての調子あればなりくれぬ
は其日はかたりあひて笑がちにてくれはてぬとな
り其明旦ありし客人のかへりし也女君のうつられ
て所せくなれるゆゑなるへしそのゝち心のとかな
りと也

たゞいまあるふみをみればながきものいみにうちつ
ゞき着座といふわざしてはつゝしみければけふなん
いとゝくとおもふなゞどいとこまやか也かへりこと
ものしていとしげにあゞめれど世にもあらじいまは
人しれぬさまになりゆくものをとおもひすぐしてあ
さましうちとけたることおほくてあるところにうま
の時ばかりにおはします〳〵とのゝしるいとあわた
ゝしき心ちするにはひ入たればあやしく我か人かに
もあらぬにむかひゐれば心ちも客なりしばしありて
だいなど參たればすこしくひなゞとして日くれぬとみ
ゆるほどにあすかすがのまつりなれば御てぐらいだ
したつべかりければなゞどゝてうるはしうひのさうぞ
きにせんぐおまたひきつれおどろ〳〵しうおひちら
してくるすなはちこれかれさしあつまりていとあや
しう打とけたりつるほどにいかに御覽じつらんなゞ
どくち〳〵いとをしげなることをいふにましてみぐ
るしきことおほかりつるとおもふ心ちだに身にうゞ
じはてられぬると覺えけるいかなるにかありけん此
比の日でりみてもわが身いと春寒い年とおぼえたり

（原本いとはるさむるとしとおぼへたりよるはか
ふむま時許よりあめになりて一本いとはるさむ
かるとしとおほゑたりよるは月あかし十二日雪

だち風にたぐひてちりまがふむま時許よりあめ
になりて）

たゝあゝ共と、公よりおこされてある文なりながき物いみに公の御物忌なるべし着座とはちやくざと聲によむべし己のつかさどる役義にあらざれどゝ其行事の時剛〳〵その座につくを着座と云べしさやうのわさにてまかるべきいとまなければけふなんしばしの内いと疾まからんなんどこまやかなるまめ文ありけるとなりその反りことをいさゝか物してわが心に溢なき事をせんもさすがにいとをしげにあれども也今はいとしげにておのづからをのかなはふくめるならんうちとけたるおほくとはさだめて公へのかへしに來られぬやうに言をつくされたるならんされば今は世をすてこゝろに何わざもつくろはずしてをるをうちとけたること多くてある所にとなるへししかる所に午のときばかにみえられたれば我にもあらぬ身にてむかひをれは心ちもうかゝとなれるを空なりといへりだいとは御臺にて膳也二月上申日春日祭來の日に御使立也みてぐらは幣帛也ひのさうぞきは日の裝束即束帯のことなり枕草子に日のさうぞくうるはしうしてといへりせんぐは前驅也公のかくみな數々　女君の方の人々のわれ〳〵どものつゝしみなゝおしけすがたにてむかひぬるを公はいかに御覽しおぼされんといと惜げにいふに倍て女君の身にとりて見苦きこと多と思へば公も今はうんじはてらるべしとなりかなものにうんじを多くは悒の字をあつ聰には音の字を借らずとも倦の字にてもありなんかし未治定

四日はけふうまの時はかりより雨になりて靜にふりくらすにしたがひて世中あはれげ也けふ迄おとなき人ともおもひしにたがはぬ心ちするをけふより四日かの物いみにやあらんとおもふにぞすこしのどめたる

今日まで音なき人とは公をいへり思ひしにたかはぬ心ちとは身にうんじはてられぬと思ひしにたがはぬを云

十七日雨のとやかにふるにかたふたがりたれとおもふことも有世中あはれに心ぼそくおほゆる程に石山にをとゝしまうでたりしに心ぼそかりしよな〳〵だらにいとたふとくよみつゝらいだうにたゝすむはう

しありきとひしかば去年から山ごもりして侍なるし
しほら原本こゝたち　本こくたら
ぼちなりなといひしかばさらばいのりせよとかたら
ひしは師のもとよりいひおこせたるやういぬる五日
の夜のゆめに卯までに月二日ようけたまひこ月ゝば
あしの下にふみ日をにむ札に帯て抱きたまふとなん
見て侍つるこれゆめときにとはせ給へといひたりい
とうたておどろ〱しとおもふにつたかひそひてを
こなることゝちすれば人にもとかせぬ時しもあれ夢あ
はするもの来たるに異人の上にてとはすれば上らな
しいかなる人のみたるぞとおどろきてみかどをわが
まゝにおぼしきさとのまつりごとせんものぞとそい
ふされば〱これおそらわはせにはあらずいひおこせ
たるそうのうたがはしきなあなかまいとにげなし
とてやみぬ又あるものゝいふ此殿のみかどをよつ足
になすをこそみしかといへばこれ大臣公卿出給ふ
べき夢なりかしまうせばをとこ君の大臣ちかくもの
し給ふを出すとぞおぼすらんさにはあらで君達の御
ゆくさきのことなりとそいふ又みつからのをとゝひ
の夜みたる夢右の方の星のうらにをとこ門といふ文
字をふとかきてつくればおどろきてひきいるとみし

をとへば此ゝおなじことの見ゆゝな〻といふこれは
をこなるべき事なれば竹ゝえほし〻おもへどさらぬ
御ぞうにはあらぬわかひとりもたる人もおぼえぬさ
いはけもやとぞ心のうちにおもふかくはあれ〻たゝ
いまの〻とくに〻はゆくすゑさへかはるきにたゞひ
とりをとこにてあればとしごろもこゝかしこにまう
でなどすゝ所にはいのりごとをまうしつくしつれば
今はましてかたかるへき年よはひになりつ〻をいや
しからさらん人のをんなご一人とり〻〻〻〻せ
んひとりある人をもうちかたらひて〻〻〻〻に
もあらせんと此ごろ思ひたちてこれかれにもいひ
あはすればとのゝかよはせたまひ〻源宰相やねたゞ
〻かきこえし人の御むすめ〻〻らにこそ女きみ〻と
うつくしげにてものし給ふなれおなじうはこれをや
はさやうにもきこえさせ給はぬ今は忠信の親になん
かのせうとの禪師の君といふにつきて物し給ふなる
などいふ人あるときくにそよやさに申ありきなん故
陽成院の御後ぞかしさい相なくなりてまだぶくの内
に例のさやうのこと聞すぐされぬ心にて何くれとあ
りし程にさめりし事ぞ人はまづその心ばえにて殊に

いまめかしうもあらぬこゝちによはひなどもおうよりにたべければ女はさらんともおもはずやありけんされどかへりことなどすめりし程にみづからふたゝひ許など物していかでにかあらんひとへきぬの限りなんとりてものしたりしことゞもなどもありしかど忘れにけり扨いかゞありけん

せきこえて旅ねなりつる草まくらかりそめにはたおもほえぬかな　公

とかいひやり給はめりしなほもありしかばかへりこと／＼しうもあらざりき

おほつかなわれにもあらぬくさまくらまだこそしらねかゝるたびねは　兼忠女

とぞありしをたびかさなりけるぞあやしきなどもろともにこそわらひてきのち／＼しるきこともなくてや有けんいかなるかへりことにかかくあめりき

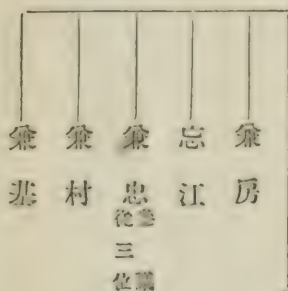
おきそふる露によな／＼ぬれこしはおもひのほかにかはく袖かは　兼忠女

などあめりし程にましてはかなくなりはてにしをのちにきゝしかばありし所にをんなこ産たなりさぞとなんいふなるさもあらんこゝにとりてやはおきたらぬなどのたまひしかれなゝりさせんかしなどいひなりてたよりをたづねてきけば此人も死ぬをさなき人は十二三のほどに成にけりたゞ其ひとりを身にかへてなんかのしがのひんがしのふもとに水うみを前に見志賀の山をしりへに見たる所のいふかたなう心ぼそげなるにあかしくらしてあゝなるときゝて身をつめばなにはのことをさるすまひにておもひのこしいひ殘すらんとまづ思ひやりける

しぼちは新發意にて沙彌を云いめは夢なり上古は夢のかなはいを用努にはゆを用後代は夢努も皆ゆめのかなゝりいま古にしたかひてしるす此日記もとふるきかな多故なり原本御にて月とをととせり冲本に何ともなけれとも又ゑの一字何によりて餘れりとも云がたしよて思ふにゑの字の訛なるへし故に雨の字になほして其訓は萬葉の左右のよみをとりてまでとよむへしと姑臆にさだめぬゆめときは夢解にて俗にいふ夢判事なりうたては菅家萬葉に別様とかけり尋常のことにあらざるの意にてきらへる義平そひては副の字なとにていよ／＼うたがひの重なる意也夢あはするも夢をよくうつゝ

のことに相かなはせるのことなれば又夢ときの類なりみかどは天子をさしていへるか又いかなる人といへるを下文にいへるごとく此殿のみかどにや其たふとき人の御門をいふにやいつれにもすこし詞たらはぬやうなれど畢竟は天下の政事をほしきまゝにすることを云そらあはせとは夢を断することは周禮詩經などにも見えて其法あるわざなるにそれにもよらで恣當なるを云へし今はさやうにはあらじとなりみかどを四つ足にとは今の親王方攝家なとに設るか如きを云なるべしきんだちは道綱をさすふとかきてつくればは告ればにやをこは尾籠也原本にをとこかとゝあれとも下文に此夢も同しことのみゆるといへるを閲るにこはとの誤にて大臣門なるべし御ぞうは御族なるへしさらぬ御族にはあらぬといへばかへしていへばさある御族にて道綱の卑稱もやありぬやと心中におもふとなり宰相は參議の美稱にして呼こと唐名の如しせうどは兄を云帝鄕の君とは僧を美稱して云なり原本に宰相を皆さい將とかけるはもとより誤又なくなりて又とある又は又にはあらで未なるべしと直しぬ

ふくは服なり例のさやうのこと聞すぐされぬ心とは女君の公の色ぶかきことを申さるなり何くれと公よりいひよられしほどにさうありつらんと云ことをさめりしことぞといへり人はとは下文の女に對して公を云よはひなともおうよりにとは兼忠卿のむすめは兼家公より年まさりなるを奥寄と云なるへしもろともにとは公と女君と前にありしことどもをいひ出て打わらひもしけるとなり此人は公のゆきかひせられし兼忠卿のむすめなり兼忠の系圖を左に畧記せり

陽成院——大納言正二位清蔭（延長三年賜源姓）
- 兼房
- 忠江
- 兼忠（參議從三位）
- 兼村
- 兼悲

かげろふの日記解環下卷之三

かくてことはらのせうども宍生にて法師にて有こゝにかくいひ出したる人しりたりければそれしてよびのぼせてかたらはするに何かはいとよき事なりとなんおのれはおもふそも〳〵かのたにゝのぼりてものせん世中いとはかなければ今はかたちをもことになしてんとてなんまゝのところに月比はものせらるゝなどいひおきて又の日といふ許に山ごえにものしたりければこと腹にてこまかになどしもあらぬ人のふりはへたるをあやしがる何事によりてなどありければとばかり有て此事を云出したりければまづともかうもあらでいかに思ひけるにかいといみじうなきなきてとかうためらひてこゝにも今は限りに思ふ身をばさるものにてかゝる所にこれをさへひきさげてあるをいといみじとおもへどもいかゞはせんとしつるをさらばともかくもそこにおもひさだめてものしことにてもありけるかなすくせやありけんいとあはれなるにさらばかしこに先御ふみをものせさせ給へ給へとありければ又の日歸りてさなんといふ上なきとものすればいかゞはせんかく年ごろはきこえぬばかりにうけ給はりなれたれば何ばかりおぼつかなくはおぼされずやとてなん

拾芥抄三十三所觀音宍太寺丹波本尊藥師號二菩薩寺一但觀音記之云々谷にとはかの志賀のふもとなるへしものせんとはそのことを云かたらはんとなり世中より下はかのむすめのことなりかたちをもことにしてんとは尼にならんとなり原本にさゝのところにとあり沖本にさゞなみの所にと直せりされど頗おだしからず臆にはさゝはさく〳〵のあやまりかと疑て此まゝにして釋せりまゝは乳母なるべし宍太よりのぼりたる法師のかく〳〵いひおきてさて翌日に山ごえにしがへ行なりふりはへはわざ〳〵也こまかはものごとのこまやかなる也こまかにあらぬさまに思ひて法師のかたらひいへることをもあやしく此女が思へるとなり今は限とは乳母のわづらひて大切にもなりしさまを云るならんかやうにはかなき身として又かやうの山邊に此幼女をさへたづさへいかゞはせんとしつるを幸にも思へばそ

なたに思ひさだめてよく物し玉へとなりひきさげは提なりその又の日京へ歸りてまゝの申せし返答を女君へ云きかせるなり上なきことは至てよきことゝなりすくせは宿世なり此事宿縁にてもあるべしおのれもいとあはれに存すればさらばかの川邊へ先に文を物せさせ玉へといふを女君の心に年比音問なきが如くにうとかりし御方なれば文してもさぞおぼつかなくおぼしめすらんとなり此下文に云々は則かれへつかはせる女君の文のことばなりあやしとおぼされぬべき御ことなれどこのぜんじの君に心ぼそきうれへを聞えしをつたへきこえたりけるにいとうれしくなんのたまはせしこととうけたまはればよろこびながらなんきこゆるけしうつゝましきことなれどあまたことうけ給はるにはむつましきかたにてもおもひはなち給ふやとてなんなゝどものしたれば又の日かへりことありよろこびしなゝどありていと心よくゆるしたりかのかたらひけることのすぢもぞ此文にあるかつは思ひやるこゝちもいとあはれ也萬かき〳〵て霞にたちこめられて筆のたちどもしられねばあやしとあるもげにと覺えたりそれより

後もふたゝびばかり文ものして事定り果ぬればこのぜじたちいたりて京に出したてけりたゞ一人いだしたてけんもおもへばわりなしおぼろげにてかくあらんやたゝをやも死し給へはなゝどにこそはあらめさ思ひたらんにわが許にてもおなじごとみることかたからんことまださともなからんとき中々いとはしうもあるべきかなゝどおもふこゝろそひぬれどいかゞはせんかくいひちぎりつればおもひかへるへきにもあらすこの十九日よろしき日なるをとさだめてしかばこれ迎に物すしのびてたゞきよげなるあじろぐるまに馬にのりたるをのこども四人しも人はある大夫やがてはひのりてしりに此事にくちいれたる人とのせてやりつけふ珍らしく消息ありつればさもぞあるひきあひてはあしからんとく物せよしばしはけしきみせじすべてあがりやうにしたがはんなゝどさだめつるかひもなく先だゝれにゝだればいふかひなくてあるほどにと許ありて來ぬ大夫はいづこにいきたりつるぞとあればとかういひまぎらはしてあり日比もかく思ひまうけしかば身の心ぼそさに人のすてたる子を我とりたるなゝどものしおきたればいで見んた

が子ぞ我今おいにだりとてわかうどもとめて我おかんとてしたまへるならんとあるにいとをかしうなりてさば見せ奉らん御子にし給はんやとものすればいとよかゝ也させんなほ〳〵とあればもともいぶかしさによび出たりきゝつる年よりもいと小く云かひなくをさなげなりちかうよびよせてたてとてたてたればたけ四尺ばかりにて髪はおちたるにやあらんするゑそぎたる心ちして長に四寸ばかりぞたらぬいとらうたげにて頭つきをかしげにてやうだいいとあてはかなめりみてあはれいとらうたけなめりたが子ぞなほいへ〳〵とあればはぢなかゝめるをさばれあらはしてむと思ひてさばらうたしと見給ふやきこみてんといへばましてせめつるあなかまましつらにくしといふにおどろきていかに〳〵いづれぞとあれど頓にいはねばもしまゝの所に在ときゝしかとあればさなゝめりとものするにいといみじきこと哉今ははふれうせにけんとこそみしかかうなる迄みてりけるとよとてうちなかれける此子もいかにおもふにかあらん打うつふしてなきゐたりみる人もあはれにむかし物語のやうなればみななきぬひとへの袖あまたゝひひきい

でつゝなかるればいとうちつけにもありきにはまたこじとするところにかへていましたることわれゐていなんなどたはふれいひつゝよ深るまでなきみわらひみして皆寢ぬつとめて歸らんとてよひ出していとらうたがりけり今ゐていなん車よせばふとのれよとうちわらひて出られぬそれより後文なゝどあるにはかならずちひさき人はいかにぞなゝどしばしはありけしうは怪なりつゝましは裏なり皆會釋のことば也霞にたちこめられてとたちとは霞の縁語なりせじは禪師なりたちいたりては起到なりわが方へむかへて我許にてはこなたの心はむつましくおもへどむすめの心には山里にありしときのやうにはあるまじ且いまだ馴染のあさくして我心のごとく女はさやうにも心安くやはあるさる時もありなばむかへてとりてもかへりては我心も女のうちつきがたきさまを見てはいとはしき方にもなりなんやと思慮する心も添たれども今はいかゞせん思ひかへさるべきことにもあらずと終によき日をえらびてむかへられしなりあじろは網代車也凡女房通用の車なり下人はしもうどゝ唱ふべししりはしりへに

同車するなり今日めづらしく消息ありつればさもぞあるとは女君の方へ此ほどは音信もなかりしけふせうそこあれば來られもやせんとなりしのぶることのよはりもぞするのてにはなり此女をむかふることをしばしは公へしらせずしてありたしとの女君の所存ある故むかへに出ぬ先に公の來られてさしあはぬやうにと心せかるゝさまを述られたるなりあがりやうとは領の字にて女を我物にせんと思たつに公のしられたらんときは我思ひしかひも無なるへきとなり我今は老たりよりは女君にむかひてのざれ言なりもともは尤なりはぢなかゞめるは公に見られてもはづかしからぬ女と也さばれはさもあらばあれの急詞なりさばゝさらばなりつらにくしは煩惡なりかの種姓（スジヤウ）をいひ出しかねらるゝ故公のます〳〵せめつけとはるれば女君も物しきさまをいはるゝに公のおどろかれて猶たがねそとあれとも早速に返答せられねばもしやまゝの所にありときゝしがそれかとあれはそれ也とやむことを得ず始てしらさる也はふれは本滋の字にて今は零落（オチブレ）たる詞也ありきは歩なりまたきじは復不レ來となり所は貝前公のかよはれし所なりかへてはその所さかへ女君の今此所へうつり來しを云へりゐてかへらんとは此むすめを我方へたづさへ歸らんとなり

さて廿五日の夜宵うち過てのゝしる火の事なりけりいとちかしなゞどさわぐをきけばにくしとおもふところなりけりその五六日は例のものいみときくを御門の下よりなんとて文ありなにくれとこまやかなり今はかゝるもあやしと思ふ七日はかたふたがる八日の日未の時ばかりにおはします〳〵とのゝしる中門おしあけて車ごめひきいるゝをみれば御前のをのこどもあまたながえにつきてすだれまきあげしたすだれ左右におしはさみたりしぢもてよりたればおりはしりてこうばいのたゞ今盛なるしたよりさしあゆみあなおもしろといひつゝあゆみのぼりぬ

にくしと思ふ所とは公の方をさしていへる也其とは上の廿五日をさせりしかれば廿五日六日といへることとなりいつかむゆかにはあらず此下に原本にやうかと假字にかけるはあやまれり上をうけて廿八日のことゝ也さるにより八日と今作れりはちにち

とこれをよむへしこまやかなりの下原本脱誤あり沖本等によりて斟酌してかくつゞれりさて此時公はいまだ納言(ナウゴン)（書入云納言なる殿(オトヽ)と云とおつらしからぬを也）也しかるにおとゞとあるは家人のたふとみていへる又殿(トノ)をおとゞの訓もあればひろく殿といへるにやされども攝關を殿(トノ)と申せばたゞ何となく家人の詞なるへし車ごめは車ながら入を云清少納言五體ごめをむくろごめといへるたぐひなりこうばいは紅梅なり

さての日をおもひたれば又南ふたがりにけりなどかはさはつげさりしとあれば先にこひたらましかはいかゞあるへかりけると物すればたがへこそせましかと有おもふ心をや今よりこそはこゝろみるべかりけれなどとな ほもあらじにざれことのゝしりけり

こゝろみるは試也なほもたゞも也

ちひさき人には手ならひ歌よみなどをしへこゝにてはけしうはあらじとおもふをおもはずにてはいとあじからん今かしこなるとも ろともに もぎせんなどいひて日くれにけりおなじうは院へまゐらんとてのゝしりて出られぬ

けしうは怪なりかしこなるとはかの三道と同腹のむすめごなるべしそれともろともに裳着(モギ)のこともとり行はんとなり

此ころ空のけしきなほりだちてうら〱とのどかなりあたゝかにもあらずさむくもあらぬ風梅にたぐひてうぐひすをさそふばかりのこゑなどさま〲なごみ聞えたりやのうへをながむればすくふすゞめども瓦の下を出いりさへづるにはの草こほりにゆるされがほなり

古今集巻上紀友則花の香を風の便にたぐへてぞ鶯さそふしるべにはやるなごみは和也すくふは巣をくふなり

かげろふの日記解環下卷之四

うるふ二月の朔日の日あめのどかなりふつかよりのちそらはれたり

原本に閏三月とあるはあやまれり前後に二月三月あり其間の閏なり雨のどかなりとは雨の靜にふりくらすなり上文に雨のどかにふりてとあるに同し

三日方あきぬとおもふをおとなし

四日もはやくれぬるをあやしとおもふ〳〵ねてきけば夜半許に火のさわぎする所有近しときけど物うくておきもあがられぬをこれかれとふべき人かちかくあるまじきもありそれにぞおきていでゝこたへなゞどして火しめりぬゞめりとてあがれぬればいりて打ふす程にさきおふ者門にとまる心ちすあやしときくほどにおはしますといふともし火のきえてはひいり（頭注書入云後撰我妹か門のはひいりにたてる青柳に今やなくらん鶯の聲但しこれとは異なるか）にくらければあなくらありつる者をたのまれたりけるにこそありけれちかき心ちのしつればなん何今はかへりなんかしといふ〳〵うちふしてよひより參りこまほしうてありつるをそのこどもゝみなまかりてにげければえものせで何むかしならましかば馬にはひのりてもものしなましなてふ身にはあらむなにばかりのことあらばかとて來なんやなゞどおもひつゝねにしけるをかうのゝしりつればをかしうあやしうこそありつれなゞど心ざしありげにありけりあけぬれば車なゞどことやうならんとていそぎかへられぬ

なてふを原本になでうともありこれ後のかなものに多き何條也此日記の原本になでうともあり又なでふともありそのなでふとあるに准して何れもなでふと直しぬこれ古語なれは也ありつるものとはかのむかへられし女のこと也にげは逃也ねにしとは寢し也車なんどことやうとはいそぎ來しかば其儀つねにことなれば見苦しかりなんとなるべしとふべき云々とは火をとふべき人のみならでさならぬ人もみえたればその爲におき出たるとならし

六日七日ものいみときく

八日雨ふる夜日はいしのうへのこけくるしげにきこへたり

朗詠集春風暗剪庭前樹夜雨偸穿石上苔此下句の心を折節にかなひたれば吟しられしなり

十日賀茂へまうずしのびてもろともにといふ人あれどなにかはとてまうでたりいつもめつらしき心ちする所なればけふも心のばへに心ちあらたまるべしなゝどするもかうしひけるはと見ゆらんさきのとほりに紫野にものすればはまへにものつむ女わらはべなゝともありうちつけにゑぐつむかとおもへばもすそ思ひやられてげり（頭注書入云萬葉第十君がため山田の澤にゑぐつむと雪けの水にものすそぬれぬこれにてかけりゑぐは今ごわゐと云もの也と加茂いへり）ふなをかうちめくりなゝどするもいとをかしくらういへにかへりてうちねたるほどにかどいちはやくたゝくむねうちつぶれてさめたればおもひのほかにさなりけり心のおにはもしこゝちかき所にさはりありてかへさにもやあらんとおもふに人はさりけなければうちとけこそおもひあかしけれつとめてすこし日たけてかへるさて五六日ばかりあり十六日雨のあしいと心ぼそしあくれば此ぬるほどにこまやかなる文みゆけふは方ふたがりたりければなんいかゞせんなゝどあべしかへりこと物してとばかりあればみづからなり日もくれかたなるをあやしとおもひけんかし夜に入ていかにみてぐらをやたてまつらましなゝどやすらひのけしきあれといとようないことなりなどそゞのかしいだすあゆみいづるほどにあいなうよかずにはしもせじとすとしのびやかにいふをきゝてさらにいとかひなからんことよとありとかならずことよひはとありそれもしらじ其後おぼつかなくて八九日許に成ぬかくおもひおきてかずにはとありしなりけりとおもひあまりてたまさかにこれよりものしけること

かたときにかへしよかずをかぞふればしぎのもろ羽もたゆしとぞなく　女君

かへりこと

いかなれやしぎのはねがきかずしらずおもふかひなき聲になくらん　公

とはありけれどおどろかしてもくやしげなるほどをなんいかなるにかとおもひけるこのごろにははらはす花ふりしきて海ともなりなんとみえたり（書入云非也）

しのびてとは忍にはなくてむかしをしのぶなどのしのふにて女君のかもまうでをきゝてそれをしたひて我らもともにまうでんとなるへしされと女君の心に何かはつれをまたんとてひとりまうでてられたるならん原本にはもろともにと云人あればとあ

れど恐らくはとをはに訛せしとゝ直せり原本心のはゐにとあれど屈伸の伸の意にて心のばへなるべし延の字など當るへししひけるは强なるへし言はいつとなくあかぬ境地なれは我心して自らあながちにまうでしかは柴のことくわびしき心も改まるやうにおもほゆるとなるべき歟原本に北野とあるは紫の字の訛なるへしゑぐは芹などのたぐひのもの也原本又船岡もあやまれりいちはやくは最速也さめたるは目の覺たるなりさなりは然なり來られはせまじきと思ひの外に公なりけりとなりおには鬼なり云いださす心におもふなりあらはるは陽なれはかくれたるは陰也おにはおんの聲をたゞちにおさへて訓したるなりこゝのちかき所へかよはれてその方に故障ありてむなしくかへらるゝ道ゆきふり來られしと思ふに公はさありげもなくみゆれば中々こよひは打とけて夜をあかしけるとなりみづからなりとは公の自らみえしとなりみてぐらは幣帛なりいつこの神社にか奉幣の比ほひなればかく云玉へるなりやすらひはためらはるゝ心なりしかれどもそのことにたがへるはよくもあらぬこ

とといさめそゞのかしてかへせるなりあいなくは愛相無也夜數とは世俗に云傳たる深草の少將とやらんのしちのはしがきの數にして公のかよはるゝ數にはとらさるとなりふと來てほどもなく歸られたればかくしのひやかに申さるゝなりそれを公のきゝてさやうにこよひを數にとられずしてはかへりてはそのかひもなしことよは異夜なりこよひの外の日まなく立かへらん時はかすによしとられずとも今夜はかたふたがれるを强て來れる懇切なれは又女君にもしひてかよへる數にとられよとの文言ときこゆかたみにたはふれ言なりそれもしらしとはさやうに仰らるともこなたには數にはとるまじとなるへししらじとはたえて承引せさる詞なりかけ歌のかへしは歸りしなりもしはかへしのしはるにてかへると本はありけるにやされどさにも直しがたければ原本のまゝに記するなり古今集戀五によみ人しらず曉の鴫の羽がき百羽がき君かこぬ夜は我ぞ數かくを本歌にしてよまれしなり公の反し釋するに及ばずおどろかしても悔しげとは數にはとるまじなどいへるはこなたより公の心をお

びやかすわざなればおどろかすといふべしさやうにしてもかよはるゝことの同しくひまあれば悔しまるなり此ごろは物うくして庭をもはらはぬ體おもふべし冲本に花の波の海とありなんおどろ〳〵し

けふは廿七日あめ昨日のゆふべよりくたり風のちは（又イ風そのゝち）（イ風のゝち）なをはらふ

廿七日のあしたに庭の花の風雨にあまたちるを見てきのふより雨のふりしを今みしれるなりひたやごもりの體たることをおしはかるへしちはなは千花なり

三月になりぬこのめすゞめかくれになりてまつりのころおぼえてたかきこずゑこひしういともぞはれたるにそへてもなどなにごとを猶おどろかしけるもくやしそれよりれいのたえまよりもやすからず覺えけんは何の心にか有けん

このめは木の目なりすゞがくれは鈴隱とかくべき歟俗に鈴なりなんどいへるごとく木の目のこんもりと繁りたるなるべしと臆に釋しおきし後冲本に曾丹の集のあさちふはすゞめかくれになりにけりむべこのもとはこぐらかりけるといふ歌を傍注せり原本は直さねど引歌にてめの脱せるをしりぬよてあらためぬ祭の比とはかもの祭の比なり日にそへてしげりまさるゆゑ其比をおもひやるの言なり原本にこひしうの上の四五字あやちもみえ上はたるとかなの二字みえ下にえの字ある故上を高の轉としえは梢のゑのかなのたがひしにやと姑高き木するとせり春心を姑おしはかるに春もやゝたけなはに成行祭の比もとほからぬにつけて光陰のむなしく過れと公の同しさまにそへてつれなさのまさりゆくを思へは何にかこなたよりおどろかしけんと彌益に後悔せるとならん

此月七日になりにけりけふぞこれぬひて云つゝしむことありてなんとありめづらしげもなければ給はりぬなゞとつれなうものしけりひるつかたより雨のどかにはじめたり

これぬひては此衣を縫てたべとなりぬひての下に何すべし

十日おほやけはやはたの祭のことゝのゝしる我は人のまうづめる所あめるにいとしのびて出たるに詣つ

かた歸りたればあるじのわかき人々いかでものみんまだわたらざなりとあればかへりたるくるまもやがていだしたつ

此八幡のまつりは臨時の祭なり三月中の午の日午二あれば下の午に行はる御國忌にあたりなどして或は延引四月に及ぶることもありし由なり加茂の臨時の祭に對して南祭とも云其行事は建武年中行事公事根源等にくはしまうで玉ひしはいづれの寺社にありけるにや知りがたしあるじとは前にいひしあがたあるきの家なればわかき人々とは女君の親族たるなり

またの日かへさみんと人々のさわぐにも心いとあしうてふしくらさるればみ心ちなきにこれかれそゞのかせばたゞびらうひとつに四人許のりて出たり冷泉院のみかどのきたのかたにたてりこと人おほくもみざりければ人ひとりふたりしてたてればと許ありてわたる人わがおもふべきべいじうひとりまひ人にひとりまじりたりこのほかことなる事なし

びらうとはびらうげなるべしもしくはけの一字脫せるやしるべからず檳榔毛の車或はたゞ毛車とも申せし清少納言心ゆくものゝ條にびらうげはのどやかにやりたるいそぎたるはかろ〳〵しく見ゆ網代は走せたる冷泉院拾芥抄に大炊御門南堀河西此院累代の後院本冷然院依二火災一改二然字一爲レ泉びらう毛の車に四人許あひのる支度せしに多く見えずして二人のりたると也我思ふへき人とは蓋道綱なるへしべいじうは陪從とかけり樂人にあらずして其事を行ふを云ふよしなりされば此日道綱も陪從にさして舞人にまじはられしなるべし舞人はまひうどゝよむ此外殊なることなしとなり原本に外の字のなきは必脫せしならん

十八日に清水へまうづる人に又しのびてまじりたり

まじりたりは交たるなり此又の字をみれは南祭の日しのびて出てまうでられし所も清水にや

そやはてゝまかづれば時は子許なりもろともなる人の所に還りて物などものする程にあるものゝともこのいぬゐのかたに火なんもゆるをいでゝみよなどいふなればもろ町ぞなどいふなり心ちにはなほくるしきあたりなどおもふほどに人々かうのとのなりけりといふにいとあさましういみじわがいへもついぢ許

へだてたればさわがしうわかき人なゞどをもまどはしやしつらんいかでわたらんとまどふにしもくるまのすだれはかけられけるものかはからうじてのりてこしほどにみな出にけりわがかたかくのこりあなたの人もこなたにつどひたりこゝには大夫ありければいかにつちにやはしらすらんと思ひつる人もくるまにのせかどつようなど物したりければらうがはしきこともなかりけりあはれをのこどもようおこなひたりけるよとみきくもかなしわたりたる人々はたゞいのちのみわづかなりとなげくに火しめりはてゝしばしあれどとふべき人はおとづれもせずさしもあるまじきところ／＼よりもとひつゝしてこのわたりならんやのうかゞひにていそぎみえし世もありしものをましてもなりはてにけるあさましさかなしさなどかたるべき人はさすがにざうしきやさふらひやときゝつるをあさまし／＼とおもふ程にぞかどたゝく人みておはしますといふにぞすこし心おちゐておぼゆるさてこゝにありつるをのこどものきこえつげつるになんおどろきつる淺ましうござりけるがいとをしきことなどある程と許になりぬれば鳥もなきぬときく

／＼ねにければことしも心ちよげならんやうにあさいになりにけりいまもとふ人よまたのゝしれはせて名乘もしさわがしうぞなりまさらんとていそがれぬそやは初夜なり初夜のつとめなり初夜のつとめをはりてまかんづれば子の刻にもいたるべきなりともなひける人の居所まで歸りてものはくひものなるへしそこにあるものゝ失火のことを告るなりもろ町はむろ町なり原本にもろこしと誤れりかうのとのとは尙侍を云ついぢは築地なり車のすだれはかけられたるものかはとはいそぎまどへるさまをいへりかはをを原本にあやまりてとはとせり契本もて直せり我方は女君のすまひなりあなたとは尙侍のいませる方なりいかに土にやはしらすらんと思ひつる人とは近比むかへられし童女なり道綱の幸に折よく女君の方にありたれば火急に童女を車にのせ門よくしめてのがれたれば亂かはしきこともなかりしとよろこべるなりあはれをのこどもも火急の折からよくことをとり行ひしと也此あはれは俗にも云天晴なり此かなしは愛憐の意也わたりし人々とはないしのかみの方の女君の方へうつられ

たる人等なりといふべき人とは公をさせり此わたりならんよりは昔のことを云て述懐なりざうしきは雑色なりさむらひは侍なりうかゞひを沖本の一にはうたがひとせり共に心通ずるさまなれどもうかゞひと原本の如くせりましてもはむかしを思へは公の疎さの近ころはますく\との心なるにやこゝにありつるとは女君のかたにさしおかれし男ともより告しによりは公の詞なりあさいは朝寝なり公の詞に今も又火をとふらへる人ともの追々來もしてさわがしくならんとて急ぎかへられぬとなりしばしありてをとこのきるべきものともなどかずあまたありとりあへたるにしたがひてなんかみにまづとてありけるかくあつまりたる人にものせよとていそぎけるにはかにひはこのすぎいろめくしたりいとあやしければみさりきものとひなとすれば三人許やまひごとくせちなゞといひたり
ひはこの杉原本かくのことし契本にひはら色の杉と直し又一本にはいろめくしたりを色にてしたりとありすべて此段錯簡語脱などもあるなり三本とも右のことくのみにて不分明姑原本のまゝになしおくものなり

廿日はさてくれぬ
一日のひより四日れいのものいみときくこゝにつどひたりし人々はみなみふたがるとしなればしばしもあらじかし
一日は廿一日なるべし四日は廿四日なるべし
五日あがたありきのところへみなわたられにだり心もとなきことはあらじかしとおもふにわが心うきぞまづおぼえけんかしかくのみうくおほゆる身なれば此いのちゆめばかりをしからずおほゆるに物忌と柱に押着てなどみけるこそもどかしからん身のやうなりければその廿五日に物いみはつる夜しもかとのおとすればかうでなんかたうさしけるとものすればたふるゝかたにたちかへるおとす
五日原本に廿日とあるは五の字ようせずは廿日にあやまりやすければ五の轉して廿になりけるなるへし五にあらねは前後の日たがふればなり物忌はもと鬼王の名にして其名を書てみすにつくると河海抄にあれは今は柱に押なり其廿五日は即上の五日なりたふるゝかたにたちかへる此詞上巻よりし

て此日記に多ししばしもとゞまらでたちかへること見ゆこゝは公いきたらんなとはかりしりて固く門をさしたると云て門外よりかへられたる狀也

又八日は例のかたふたがるとしる〳〵ひる間にみえて御ついまつといふほとにそかへる

ついまつは續松なり御ついまつと下人の云へる詞なりさいふ比にかへられしとなり猶秉燭の比と云ふが如し

それよりれいのさはりしげくきこえつゝ日へぬこゝにも物忌しげくて四月十餘日になりにだれば世にはまつりとてのゝしるなり

十餘日とかきてとをかあまりとよむかなものゝ常なりまつりはもとより加茂祭なり

人しのびてとまかればみそぎよりはじめてみるわたくしの御てぐら奉らんとてまうでたれば一條のおほきおとゞ詣であひ給へりいといかめしうのゝしるなどいへばさら也さしあゆみなどしたまへるさまいたうに給へるかなとおもふに大方のぎしきもおとることあらじかしこれをあなめでたいかなる人など思ふ人もきく人もいぶせくぞいとゞものはおぼえけんかしさる心ちなからん人にひかれて齋院のわたりに物する日たいふもひきつゞけてあるにくるまどもかへるほどによろしきさまにみえける女ぐるまのしりにつゞきそめにければおくれずおはひきければいへをみせじとにやあらんとくまぎれいきにけるをおひてたづねはじめて又の日かくいひやるめる

おもひそめ物をこそ思へけふよりはあふ日はるかになりやしぬらん　女君

とてやりたるにさらにおぼえずなどいひけんかしされば又

わりなくもすぎたちにける心哉みわの山もとたづねはじめて　女君

といひやりけりやまとへたつ人なるへしかへし

三輪の山まちみることのゆゝしさにすぎたてりともえこそしらせね　大和の女

となん

みそぎといへる加茂祭齋院の御禊なるべしみそぎはその義なれどもこれを多くは御禊と注せりしかるにこゝにみそぎとかけるはもと眞字にありしを

訓をもて云たがへしにやと思へど姑原本のまゝに記せり百錬抄天祿元年五月廿日以右大臣伊尹爲攝政今年天祿二年正月三日帝御元服十四とあり定て此天皇御元服によりて太政大臣に成り玉ひしなるべし似玉へるとは兼家公によく似玉へると云ならんぎしきは儀式也女君の歌逢日に葵をかけたり

かげろふの日記解環下巻之五

かくて晦日になりぬれど人はうのはなのかげにもみえずおとだになくてはてぬ廿八日にぞ例のひもろぎのたよりになやましきことありてなどありき

原本に。となんかくてと書出せりとなれは上冊の結語なれば今は上冊につけてこゝにははぶけり沖本につごもりの下に廿八日とある故誤て前後せりと見て上の晦日の旁に廿八日かとし下の廿八日につごもり歟とうたがひを記せりされどもつごもりがたと云心にて大凡をいへる詞とすれば前後取なほさでもと原本のまゝにすそれもひもろぎは神代神籬磐境より事起りて榊をたつるもひもろぎといひ神の供物を膰も胙といふ例とあるは春日に藤氏の氏神なれば毎々その事ありしと見ゆこゝにたよりとあるは上冊のをはりに大和にかへる人ありこゝに合せおもふべし

五月になりぬさうぶのねながきなどこゝなるわかき人さばけばつれ／＼なるにとりよせてつらぬきなどすこれかしこにおなじほどなる人にたてまつれなど

どいひて

さうぶは菖蒲なりねながきは根の長きを賞翫すれはなりさばけとは取さばきをなすを云なるべし又騒とすればかなたがへり姑く原のかなにして釋しぬ又原本にたてまつりとあり冲本にりをれに作れり今それに従ふわかき人はかの志賀より迎へられし少女ならんかしこに同し程なる人とは前にもろともに裳着(モギ)さすべしと公のたまへる少女なるべし

かくれぬにおひそめにけるあやめ草しる人なしにふかきしたねを　女君

人しれず山中に生たちし女といへるをあやめによせられたり

とかきて中にむすびつけて大夫の參るにつけてものす

歌を菖蒲の中にゆひつけて道綱にことつけらるゝなり

かへりこと

公のかの少女にかはりてかへしめされたるならし

あやめ草ねにあらはるゝ今日こそはいつかとまちしかひもありけれ　公

原本には腰の句けふだにはとあり今冲本にしたがひて直しぬ五日を秀句して何日(イツカ)とせり

大夫にはいまひとつもかくしてかんのとのには

蓋今ひとつ又菖蒲の中にむすひつけて常に交かよはしあるないしのかみの方へも大夫を參らせてとなるべし

わが袖はひくとぬらしつあやめ草人のたもとにかけてかはかせ　女君

御かへりこと

ひきつらんたもとはしらずあやめ草あやなき袖にかけずもあらなん　倘侍

といひたゝなり

案するにいひたるなりと女君のいひしときこえて反事の歌につかぬさまなりしからず贈答を一つにしてかく／＼かんのとのと贈答せしとのことわりにや恐らくはかけ歌の次にありてさて御返事とありしを誤てこゝにかきたるにやされどしばらく原のまゝにす

六日(ムユカ)のつとめてより雨はじまりて三四日(ミカヨカ)ふる川などまさりて人ながるといふそれもよろづをながめおも

ふにはといふぞかきりにもあらねど今はおもひにだることなゞどはいかにも〳〵おもはぬに
原本には川とまさりてとあり今尾本川などゝあるに随ふ以上は下の此石山云々のことをいひ出さんが爲の前置の詞なるへし以上云々の詞冲本等にもいさゝか手を入れねばしひて其意を釋して試るに人のながるゝまでのながめを云出して長雨の詞によりて萬のことを吟味しておもへば何かと深くおもひすぐるはひがことゝ心をふくませてさてかやうにいはんもぞ又さだめてこれが心のきはめ限りにもあらざらめども今は所詮もとより思ひなれたることなんどは何も〳〵我思ひにはいれぬに此石山のことのみはおもはではやまれぬとのことにや頗る穿鑿に似たりと釋しながらも思へど姑かくのみ原本におもなれとあれどもさにては一向に右の釋までにも及ばれずおもにの詞の上にあればそれにすがりておもひとひを加へて姑くほせるなり原本にすべて詞の中に一字おとせること毎々例あるによりてなり
このいし山にあひたりし法師のもとより御いのりをなんするといひたるかへりことに今はかぎりにおもひはてにだる身をば佛もいかゞし給はんたゞ今は此大夫を人々しくてあらせ給へなゞどばかりを申給へとかくにぞ何とにかあらんかきくらして涙こぼるゝ
人々しくとは俗に云人らしきなり原本にばかりを字にて許とあれどもこゝは耳をと云心なればかなになほせり何との下原本おりとあり尾本にかなのあやまりと見たるにやにかと直せりげにもとそれにしたがへり
十日になりぬけふぞ大夫につけて文あるなやましきことのみありつゝおぼつかなき程になりにけるをいかになゞどぞあるかへりこと又の日ものするにぞつくる昨日たちかへりきこゆへくおもひ給へしをこのたよりならではきこえんこともびゞなき心ちに成にければなんいかにとのたまはせたるは何か萬ことわりにおもひたまふるべき心ならねば中々いと心やすくなんなりにだるかせだにさもくときこえさすればゆゝしやとかきけり日くれてかもいづみにおはしつればかへりもきこえでかへりぬといふめでたのことやとぞ心にもあらでうちいはれける

おほつかなきを原本におほかなきと有おほかなきは俗語也こゝにいはるべからず契本につの字を加へしにしたがふ昨日かへりのかへりの上に尾本にたちの二字を補へりたちかへり即時に返事をなすの詞なればさにて宜かるべければこれ又よりてくはへぬびなきは便なきなりかもいづみを原本にかもてはつみにおへ〳〵とかなを多く誂れり沖本によりて直しぬ沖本に原本のきんくをさむくに續古今[illegible]四好忠眞葛原風だにさむく吹こすはかへらぬ人をうらみざらまし同時の人なれどもこれをとられしにやといへりげによく引てあたれりといはまし但しさむくと直されし心はたがはねどもさもくに直さんにはしかじ何ぞとなれば此原本のんはむにかよへるにはあらで其形の似て又其比の一の假字ときこゆ又此日記の中に前にもあなさもといへる詞もあればこゝも同じさもなりんの又一種のかなゝるべきとは愚老が凡例につぶさ也拾芥抄名所の篇に鴨(カモヰ)院二條の南室町の西一町南北二町或は非院の字鴨井也又云或は昔有ニ古井一鴨常に居と云々このごろくものたゝずまひ靜心なくてともすれば田子のもすそおもひやらるほとゝぎすのこゑもきかずものおもはしき人はいこそねられざなれあやしう心ようねらるゝ氣なるべしこれもかれも一夜きゝき此曉もなきつるといふを人しもこそあれわれしもまたじといはんもいとはづかしければ物はいはで心のうちにおぼゆるやう

我ぞけにとけてぬらめやほとゝぎすものおもひまさるこゑとなるらん　女君

とぞしのびていはれける

初五文字原本我そはにとあるを契本尾本ともに云一本我ぞげにと記せり其一本皆可也とおもひてしるせるにや今反覆して吟じみるに一本まことに可なるに似たれば一本の方になほしぬ

かくてつれ〴〵と六月になしつ

なりつといはでなしつとは心のごとならずしてあたら月日をこなたよりしてむなしくせしとのさまならし

ひんがしおもての朝日の氣いとくるしければ南のひさしに出たるにつゝましき人のけぢかくおぼゆればやをらかくれふしてきけば蟬のこゑいとしげうなき

にだるをおぼつかなうもまだえ身をやしなはぬ翁あ
りけり庭はきしとて箒をもちて木の下にたてるほどに
俄にいちはやくなきければおどろきてふりあふぎて
いふやうよいぞ／＼といふてなくせみ木にをるはむ
しだにもせちをしりたえよとひとりごつにあはせて
しか／＼となきみちたるにをかしうもあはれにもあ
りけん心ちそあちきなかりける
みなづきの極熱の比なればさす日影朝からしては
げしくあれば南のひさしの方へうつれるなり翁に
なるまでしれものにしてまだ一身をだにも養得ぬ
ありて庭はきはらふとて箒をもて木の下にたてる
也すべて持ての訓ちを略してもてとよむ習なり新
撰字鏡曰蟬時旃反蜩也世比とあり案するに世に蜩
の聲をそのまゝ和訓としてせにとよめるたぐひと
して蟬の聲を直にせみと訓にせりといへども蜩の
訓はさなれども蟬はかれには同しからず唐土にお
きてもなく聲を以字音をとれるならん此方にもま
たかの如くたゞちにせみ／＼となくを此虫の名と
せしならん蟬を和名抄には世美とせり字鏡には世
比とすこれ又自然に鳴聲なるの聲ともすべし原本

にきにけるとははけはをの誤にて樹に居るなりはむ
しは羽の有虫にて則蟬也其下に原本はむしだにと
きせちをしりと有せちは元は時節とまながきにて
有しがかやうに湯桶よみにうつり來れる事顯分明
也今は直に時節と改めて本へ反し如本尼本共に
原本のなねせみとあるねの字をはに直して和名抄
をひけり和名抄曰本草云蚱蟬は啞蟬不能鳴者也
作蟬の二音和名奈波世美と有されど此一件の心を
釋せねばかく直せしも其意は知るべからず故に臆
説には其なはせみをとらず原本のよひぞよいぞと
有をもとより此原本いひのかなのたがへる樣は往
々にみゆれば今は其よひをよいのかなにして蟬は
平聲善は上聲韻のかはりはあれど本同時同音の字
なれば今は本實を失たる蟬の字音に翁か言にとり
てせみ／＼となくを善とゝとりて善の字のよみの方
についてよいぞ／＼といふて鳴せみと翁が蟬にむ
ゝかふてよばゝる也又此一件によひの義用なし其
よひぞ／＼といふの下にてをくはへたるはいづれ
の本にもありされど他本の心はしらねば其ての字
許をとりて其餘の他本になほせしはとらずしてか

く本文をつゞれりと云ことしかり
大夫そはのもみぢのうちまじりたる枝につけて例の所にやる
和名抄木の類唐韻云楓梭は木の名なり又四方木也和名曾波乃木例の所とは公也女君の道綱をしてやらるゝ也大夫してとか大夫にとかあるべきさまなりしかれども前々も此文例あり
なつやまのこのした露のふかければかつぞなげきの色もえにける　女君
かへりこと
つゆにのみいろもえぬればことのはをいくしほとかはしるべかるらん　公
なゞどいふほどによるになりてめつらしきふみこまやかにてあり
甘よ日いとたまさかなりけりあさましきことゝめなれにだれどもいふかひなくてなかごろなきさまにもてなすもわびぬればなめりかしとかつおもへばいみじうなんあはれはありしよりけにこそ句そのころあがたありきのいへなくなりにしかばこゝにうつろひて類おほくことさわがしうてあけくるゝも人目いかゞと思ふ心あるまでおとなし
あがたありきの家は父兄の任る方なるへしなくなりにしかはとは火災にあひたるなるへしおとなしは公よりの音信もたえてなきなり
七月十よ日になりてまらうとかへりぬればなごりなくつれ〴〵にて句ほにのこと御ふうなどさま〴〵になげく人々のいきざしをきくもあはれにもありやすからずもあり
まらうとは誰にやありけんほにを沖本には七月十日あまりとあるによりて盆と傍注したれとも前後の文言一向にとかれず只盆とのみにて其意を釋せざれば姑臆を以ほにを穂荷とよまん歟原本にほにのことのふうとあり如此乃のかな二つあり下の乃は上の乃にひかれて誤の字乃にあやまれるにや或は院宮の御封封戸などのことによれることにやとうたがはる女君の父兄の任する所の國郡に御封戸ある所もあるべければかく思ひよりぬ又此下文に政所と云こともあれば受領として國郡のさばきをする身なれば其下の百姓等の御封のことにつき或は訴或は願ひなどもあるべきなればそれらを思て

かく試に姑釋しおきぬ又やむことを得ざる仕業也
三日れいのごとてうじてまところのおくりぶみそへ
てありいつまでこゝにと物はいはで思ふ
三日は上に十日あまりとあればそれを踏でこゝは
十三日なるへし上冊にも此例あればなり政所は國
郡のしおきをとり行ふ所を云ぞなればかくいひつ
べし今も泉州堺の町本行所を政所と武鑑にいへり
てうじては調じてなるべしてうじての下に原本ぬ
してとあるは恐くは衍也又いつまでかこたにとあ
るはこゝのあやまりならん歟としばらく直す

かげろふの日記解環下卷之六

さながら八月になりぬ
ついたちの日雨ふりくらすしぐれだちたるにひつじ
のときばかりにはれてくつ〳〵ぼうしいとかしかま
しきまでなくをきくにも我だにものはといはるいか
なるにかあらんあやしとも心ぼそうなみだうかふな
り
和名抄曰陶隱居か本草注云蛁蟟〻八月に鳴者也字
亦作〻蛁蟧〻和名久豆々々保宇之寒蜩の下茅蜩の上
に載せたればせみの類ときこゆ原本われだにの四
もじを脱せり尾本補入てかしかまし野もせにすだ
く虫のねよわれだに物をいはでこそあれと云る古
歌をひけりこれ不レ可レ脱文字也今用レ之
たゝん月に死ぬべしといふさとしもしたれば何此月
にやともおもふすまひのゑあるじなゝどものゝしら
るをばよそにきく
たゝん月は九月をいふ此月にやと云よりよそにき
く迄を一串に讀で可也皿冊にすまひのかへりある
じみゆればこゝもかへりあるじと云を誤れる歟又

すまひの會（エ）や饗（アルジ）やと二（フタツ）ことにいへるにやうたがはしければ姑原本のまゝに記せり此下にもかへりあるじあればこゝはあやまると思はる

十一日になりていとおぼえぬ夢みたりとてゑふてなど例のまことにしもあるまじきこともおほかればちりにもものゝいはれねばなどか物もいはれぬとあり何事をかはといらへたればなどか來ぬとはぬあからしとてうちもつみもし給へかしといひつゞけらるればきこゆべきかぎりのたまふめれば何かはとてやみぬ今此けいめいすぐして參らんよとてかへる

ゑふは酒氣あるなるべし原本にようとしたるはかなの誤るなりちりにもは微塵物いはぬなりあからしは厭の字たるべしうちもつみもはたゝきもつめりも也きこゆべき限とは女君の方よりうらみかこつべき事をつくしての玉ふめれば此外に何いふべきこともなきと也けいめいは敬命也公の出勤の何くれを云

●十七日にぞかへりあるじときく

つごもりになりぬればちぎりしけいめいおほくすぎぬれど今は何ごともおぼえずつゝしめといふ月日ちかうなりにけることをあはれとばかりおもひつゝふる

つゝしめといふ月日とはすなはち前にたゝん月しぬべしといふさとしなり九月をさしていふ

大夫例の所に文（ふみ）やるさき／＼のかへりことどもみづからのとは見えざりければうらみなどして

大夫の自らやるにはあらず前冊にもこゝにたがへる書ざまあり女君例の公への文をつけらるゝ也

ゆふされのねやのつま／＼（書入云いかゞ）ながむればてづからのみぞくもゝかきける　女君

くもは蜘蛛也巣をかくに書をそへたり原本にかきぬるとあり同心なれど今は尾本によれり

とあるをいかゞおもひけんしろいかみにものゝさきしてかきたり

盖筆を用いずして何にてもさきの尖（トガリ）たるものにてかゝれたりと見ゆるを云

くものかくいとぞあやしき風吹（フク）ばそらにみだるゝものとしる／＼　公

くものいと最とをかけていへり

たちかへり

闇をあらせの詞也
つゆにてもいのちかけたるくものいにあらき風をば
たれかふせがん　女君
つらしと句かへりことなし
又の日昨日のしらかみおもひ出てにやあらんかくい
ふめり
たちまのやくゝひのあとを今日みればゆきのしらは
ましろくてはみし　女君
原本にたしろのやとあり分明に但馬の誤也且たち
まのかなもたがへり沖本いづれにも六帖に濱の題
歌但馬なる雪の白濱もろせにと思ひしものをひと
のとやみんと云歌をひけり此歌沖本も六帖を引け
るのみにて釋はなし前の歌の詞書に物の先にてか
けるとあるはやきずみにてかゝれしことをいへる
にや且ひける六帖の歌も亦其意不レ詳今しひて釋
せば但馬野燒と發句を字あまり六もじによみてく
ひ火は野やきせし殘のくひにてかけるとかば大
凡はきこゆらん乎
とてやりたるを物へなんとてかへりことなし
またの日かへりにだりやかへりことゝことばしてこ
ひにやりたればきのふのはいとふるめかしき心ちす
ればきこえずといはせたり
又の日ひと日はふるめかしとかいとことわり也とて
ことわりやいはでなげきしとし月もふるのやしろの
かみさみにけん　女君
原本になげきのきを脱せること分明也年月を經る
もそへたりふるめかしきもあるも理なりとなりか
みさびをさみとせりびみは假字かよへばかくもあ
るべければ原本のまゝにす
とあれどけふあすは物いみとてかへりことなしあく
らんと句おもひのまたしきに
物忌はもはやあきぬらんにとなり
夢ばかりみてしばかりにまどひつゝあくるぞおそき
あまの戸さしは　女君
尾本云天のとざし岩戸の闇の事をいへるにや珍し
き云々
このたびもとかういひまぎらはせば又
さもこそはかづらき山になれたらめたゞひとことや
かきりなりけん　女君
たれかならはせるとなん

葛城山に一言主の神坐せり雄略帝のかつらき山にて此神にあひ玉ひし事日本紀に見ゆ今は公の一言やかぎりとなりけんと也

わかき人こそかやうにいふめれ

右の歌をよんで公へおくられながら思ふ我は所詮世中に口さはしからぬ身と思ひつめ死なんしるしをたのむほどの身にしてよしなしことをもいひけんわかくたのみある人こそかやうにいはんとすれど打反しての述懐なるべし

我ははるのよのつね秋のつれ〴〵いとあはれふかきながめするよりはのこらん人のおもひいてにもみよとて繪をぞかくさるうちにもいまやけふやとまたるるいのちやう〳〵つきたちて日もゆけはされはよよもしなじものをさいはひある人こそ命はつゞむれと思ふにうべもなく九月もたちぬ

つれ〴〵とあるに徒に吟咏などをせんよりはわがうせし後のかたみと人の爲に繪を書と也さるわざをする内にも死ぬべきと思ふ心なれば死ぬる折の今や今日やとまたれしにやう〳〵さとしある九月もたちて日もいつしかに日數たちぬれども死ぬべき折もきたらず世にさいはひある人こそ命をつゞむることもあらんにわれは幸なき身なればこそ死ぬべき折のきたらねとこゝのたちぬといへるは上の月たちと殊にしてこゝは月の盡を云なるべしうべもなくたちぬとは唯諾のまもなく速なるの詞なるべし此詞前にもみえぬさてひきつきに廿七日の程にとあるはあとよりその廿七日の程に云々とかき記せしとみればそむかぬなるべし

廿七日のほとにつちをかすとてはかなきにしもめづらしきこともありけるを人つげに來るもなにごともおほえねばうとくてやみぬ

つちをかすひとり尾本に槌と傍注せり其意未レ詳もし鍛冶のことにやと思へども女の見物にはうとかゞめり按ずるに拾芥抄八卦部年禍害絶命件の三方不レ可二犯レ土造作一又云金神の方犯レ土事切に忌レ之但三白九紫有氣之方置レ園殖二竹林一起二樓臺一堀レ池即搏二其災一當レ得二其處一云々かくあれば起立て宜方に或は寺社などに堂塔を建ることを土を犯と云べきなれば今世の地築などにてもや有べし是或は其事につけて風流なるわざもあるべければ婦女

女の物見にはふさひぬべしその槌の字を注せしも
薬方にていへるにや

かみな月例の年よりもしぐれかちなる比なり

原本誤てころを心とせり

十よ日の程にれいの物する山でらにもみぢもみがて
らとこれかれいざなはるればものすけふしもしぐれ
ふりみふらずみひねもすに此山いみじう面白きほど
なり

山寺は鳴瀧の寺なるべし後撰集冬部かみな月ふり
みふらずみ定なき時雨ぞ冬のはじめなりける

ついたちの日一條の大じやうのおとゞうせ給めると
のゝしるれいのあないみじなゝどいひてきゝあへる
夜七八寸のほど（書入云七八寸云々雪をいへるか）たまれりあはれいかできんだちあゆ
み給ふらんなゝどわがすることもなきまゝにおもひ
をれば例の世中いよ〳〵さかえのゝしる

百錬抄曰天祿三年十一月一日太政大臣伊尹薨四十
九

しはすの廿日あまりにみえたり

かげろふの日記解環下卷之七

天延元年　道綱十九歲

天祿四年十二月九日改元

さてとしくれはてぬれば例のごとしてのゝしりあか
して三四日にもなりにたゞめれどこゝにはあらたま
れる心ちもせずうくひすばかりぞいつしかとおとし
たるをあはれときく

例のごとしては例のごとくしてなり三四日は上の
あかしてをうけて正月三四日となり

五日許の程に雪みえ又十よ日廿日許に人わゞたれた
るほどみえ此月ぞすこしあやしと見えたるこのごろ
つかさめしとて例のいとまなげにのゝしる

二月になりぬこうばいのつねのとしよりもいろこく
めでたうにほひたりわが心ちのみあはれと見るなれ
どなにとみたる人なし大夫ぞ折て例の所にやる

かひなくてとしへにけりとながむればたもとも花の
いろにこそしめ　女君

冲本にたもとものゝ原本に脱せしを補ひ且云紅梅

にそへて血涙をよめりと
かへりこと
としをへてなどかあやなくそらにしも花のあたりをたちはそめけん　公
あやなくしてはそのあたりをこなたよりたちそめはせじとならん諸本原のごとく也窃にうたがふ恐らくは覆み五文字そこにしもにてはなかりきやされど姑原まゝにす
といへりなほありのことやとまちみるさてついたちて三日のほどに午の時ばかりにみえたりおいてはづかしうなりにだるにいとくるしけれどいかゞはせんとばかりありてかたふたがりけりとてわが染たるともいはゞにほふばかりの櫻がさねのあや文はこほれぬばかりしてかたもんのうへのはかまつや〳〵としてはるかにおひちらしてかへるをきゝつゝあなくやしいみじうもうちとけたりつるかななゝど思ひてなりをうちみればいとにくげにはありまたこたびうつじはてぬらんとおもふことかぎりなし
おいては老てなりしかるを原本におつてと誤女君の我手して染にしきぬどもいはふぞならばきぬはにほふばかり綾の紋はこぼれぬるばかりにつやめきたるをきて堅紋のうへのはかましてかへられしときゝてあな悔しとなり原本にくるしとあるは誤れり我染たるともいはじと原本にあるを沖本にいはゞと直せしにしたがひて釋しぬうきもんにあらぬを堅もんと云へり聞はおひちらすこゑをきゝてなりなりは公のさまなり原本にうちみとばかり有下にればの二もじを沖本に増たり今それにしたかへりうんじの解は前にあり
かゝることをつきせずながむるほどについたちより雨がちになりにだればいとゞなげきのめをもやすとのみなんありける
六帖に春雨のふるに思ひのきえなくていとゞなげきの目をもやすらん此古歌を吟じて嘆せらるなり原本許多の脱字あり
五日よなかばかりにさわぐをきけばさきにやけにしところこたみはおしなふるなりけり
原本さきをされとあやまるおしなふは押並なりおしなふと珍らしき詞記すべきにたれり
十日許にまだひるつかた見えてかすがへなんまうづ

べきほどのおぼつかなさにとあるも例ならねばあや
しうおぼゆ
または又とも来ともきこゆれども下を見廻らして
案ずるにいまだなるべしほとは間なるべし是例に
かはりたるむつごとなり
三月十五日に院のこゆみはしまりていでゐなゝどの
ゝしるまへしりへわきてさうぞけばそのこと大夫に
よりとかうものすその日になりてかんだちめあまた
ことしやむごとなかりけりこゆみおもひあなづりて
ねんぜざりけるをいかならんとおもひたればさいそ
にはいでゝもろやしつつぎ〳〵あまたのかずこのや
になんさしてかちぬるなどのゝしるさて又二三日
すぎて大夫のちの矢はかなしかりしかなゝどあれば
まして我も
このゆみは小弓也まへしりへは前後也原本にまつし
つゐとあやまる異本をもて直せりわきては方分て
なりさうぞけばは装束すればなり上達部もあまた
ありてことしはつねの年よりもはれ〳〵しきをい
ふにや原本におもひあなぐりてとあれども尾本に
よりてくはつのあやまりとして小弓とあなづりて

心たゆめるをふかく念ぜざりしと云なるべしされ
ば大夫の射いかならんと氣づかはしく思ひたれば
最初にいてもろやしつるとなりあまたのかずこの
矢にとある恐らくはこの字は〳〵のをとり字をあ
やまりてことなりもしつらんさらばかず〳〵の矢
に算をさせる也されどこのは大夫の射しをさして
いはゞ原本のまゝにてもしひてきこえもしなんな
れば改直さす二三日すぎて又射るにはあらじ二三
日もすぎて前にいつる日の後のもろやはあしかり
けるとつたへきゝし我心はいやましにかなしかり
きと云るならし我れもとのみ云てかなしきの言を
含めたる文言なり又案ずるに右の詞もろやにて何
を切てはを下に付てはかなしかりしとにやいづれ
にても心は同じく通べし
おほやけにはれいのその比やはたのまつりになりぬ
前にも見えし臨時の祭なり
つれ〳〵なるをとて忍びやかにたてればことにはな
やかにていみじうおひちらすもの来たれならんとみ
れば御せんどもの中に例見ゆる人などありさなりけ
りとおもひて見るにもまして我身はとほしき心ちす

すだれまきあげ下すだれおしはさみたればおぼつかなきこともなし此事を見つけてふと扇をさしかくしてわたりぬ

たてればは女君ののれる車なりことにより下は其の日の公の樣體を云御前は前驅なりその中に女君のつねに見なれしものもまじり居るゆゑ兼家公なりとしれるとなり沖本に我身いとをしきとせりこれ我身はのはのかなをゐの誤とみたりさしてよろしからんぞなれども原本のまゝにてもきこゆれば今は直さずとほしきはともしきなり簾なンど卷あげたれば我とはまぎるゝ方なくしられんとなりされば扇をさしかくしてわたられしとなり

御文あるかへりごとのはしに昨日はいとまばゆくてわたりたまひにきとかたるはなどかはさはせてぞなりけんわかくしうとかきたりけり

反りごとには老のはづかしさにこそありけれまばゆきさまに見なしけん人こそにくけれなンどぞある

葢し前に公のみづから老てはづかしなんどの詞のありしゆゑわかくしうと女君より述られたるならし

又かきたえて十餘日になりぬ日ごろの絶間よりは久しき心ちすれば又いかになりぬらんとぞおもひける大夫例の所にふみ物することつけてもあらずこれよりもいとをさなき程のことをのみいひければかう物しけり

葢例の大夫にことづけわさにあらずして今度はわざく大夫して文をつかはせりと也

みがくれのほどゝいふともあやめ草なほゑたからんおもひあふやと　公

かへりごとなほくし

ゑたからんほどをもゑらずまこも草よにおひそはし人はかるとも　女君

原本結語人はよるともと沖本によりてうつせり直々しとは葢たゞあるべかしきさまよめるとのことわりにや

かくてまた廿よ日の程にみえたりさて廿四日のほどにちかう火のさわぎすおどろきさわぎするほどにいとゞくみえたり風ふきてひさしううつりゆくほどにとくすぎぬすぐなればとてかへることゝと見きける人は參りつるよしきこえよとてかへりぬときくもお

もたゞしげなりつるなゞどかたるもくじはてにゞだる所につけて見ゆるならんかし

廿四日を原本には三四日とあれども火事は其日にかぎりて云べきなればかくはいふべからず且上文に廿日あまりの言あればかならず三の字は廿の字のあやまりなりとしる疾みえたりとは公なり原本に。さ。ら。な。れはとあるを冲本にす。く。な。れ。ばと直せり

今それに隨ふ蓋火の遠くへうつりすぎぬるとて公のかへられたるなるべし火は此と見てこゝに見廻に來れる人にわがこゝに來りしよしをいひきこえよと女君の家人に申おきてかへられしは女君の身にとりて面目なゞど人のかたるも屈じはたせるの我ぞなればさ思はるかしとなり

又つごもりの日ばかりにありはひいるまゝに火なゞどちかき夜こそにぎはゝしけれとあれば衛士のたく火はいつもと聞えたり

原本に云又つごもりの又の日許と下の又は上に又の字あるゆゑ衍とみゆ又にきはしきのにぎを倒してきにと讀る大中臣能宣の歌に御垣守衛士の燒火の夜はもえ晝はきえつゝ物をこそ思へ此歌の心にて我はいつも物思ふと答へらる原本に火の字を脱せり

五月のはじめの日になりぬれば例の大夫に

原本大夫の下にのかな必あるべき故に補ふ

うちとけてけふだにきかんほとゝぎすしのびもあへぬ時は來にけり　女君

かへりこと

ほとゝぎすかくれなきねをきかせてはかけはなれぬる身とやなるらん　公

五日

ものおもふにとしへけりともあやめ草けふにたび〳〵すぐしてぞしる　女君

原本年へけりとてとあるはもにかよへるん。を又。てに再誤るものなり今日のたび〳〵すごして物思ひに年へぬるとなり

かへりごと

つもりけるとしのあやめもおもほえずけふもすぎぬる心みゆれば　公

とぞあるいかにうらみたるにかあらんとぞあしかりけるさても例の物おもひはさ月もとき〳〵同じやう

なり廿日のほどにとほうものする人にとらせん此ゑぶくろのうらにむすびてとあればむすぶほどに出來にだりやうたをひとゑにふくろにいれてたまへとこふにいとなやましうてよむまじとおもへれどいとをかしうての給へるものあるかぎりよみいれて奉るをもしもりやうせんにひとへぶくろをぞたべてましとものしつ

とほうは遠也今時は遠にとをのかなを多くは用ゆれど古く正しきはとほなりうはくのひゞきなり遠方へ旅だつ人にやらんとてなり餌袋にやと思ふに此一件さにてはきこえず恐らくはゑは繪なるべし即繪を此の袋のうらに結びてとなるべし即その繪を袋のうらにむすばんとせし折から出來たりとは公の女君の方へ來られしなりやは詞なり上につける捨やにはあるべからずその繪ごとにうた一首づゝよみそへて其の袋のうちへ入れてたべと云出さんとての發語のやなるべしなやましさにえよむまじと思へども又そのおもむきのをかしくもあればある限り繪に歌をよみそへて參らせんもしもり失なんも便なければ別にひとへの袋をたべとなるべきにや

二日許有て心ちのいとくるしうてもこと久しければなんひとへふくろといひたりし物をわびてかくなん物したりしかへしかう／＼などあまた書つけていとようさだめて給へとて雨もよにあればすこしなさけある心ちして待みるおとりまさりはみゆれどさかしうことわらんもあいなくてかう物しけり

心ちのいとくるしと云より公の文の詞なりかへしはその返事なりあまたかきつくるとは公よりおこされたる繪どもそれ／＼にあはせてよまれし歌然に繪のよしあし評論などをして此上に公の是非を定め玉へとのこととききかるさて折から雨催にあれば愛情もうかべる心ちして公の來られんやと待見るとならん繪の勝劣はおのが目によくみゆれどもひとつ／＼ことわりいはんもかしこだてにして愛相なければかく／＼物しぬとならん

うらとのみ風のこゝろをよすめればかへしはふくもおとるらんかし　女君

と許ぞものしける

上の廿日のほどよりといふより此一段或は重復或

は脱落且誤字等も多し契沖本も誤脱なれば據らん方もなくして姑臆を以斟酌してつゞれり猶有識の遇ん原本を見合せて正さるべくなん

六七月おなじ程に有つゝはてぬ

つごもり

此つごもり下に八月あれば七月晦日なるべし此下に詞の亡失にや

廿八日にすまひの事により内にさぶらひつればこちものせんとていそぎ出ぬるなんとて見えたりし人そのまゝに八月廿よ日まで見えず

こちとは女君の方を云右のたりし人より下の若干(ソコバク)の字は原本にはなかりしに今契沖の一本にて此を得て補ひぬ

きけば例の所にしげくなんときくうつりにけりと思ふからうつし心もなくてのみあるにすんどころはいよ〳〵あれゆくを人ずくなにもありしかば人(ワレ)にものしてわがすんどころにあらせんといふことを我たのむ人さだめてけふあすひろはたなかがはの程にわたりぬべしさべしとはさき〳〵ほのめかしたれど今日な(ン)どもなくてやはとてきこえさすべきこともものしたれどつゝしむことありてなんとてつれもなければ何かはとておともせでわたりぬ

例の所とは前にいひし近江にてあるべしわがたのむ父兄の間なるべし原本にひ°へ°は°た°な°か°ら°は°と誤れるを沖本に廣幡中川と文字を塡めたりしに今はよるうつし心は現心なりすんどころは住所也人に物しての人は公なるべしさべしはしかあるべしなり今日などもは今日などにてもなりその方へうつることを公へしらせたれどさはりありとてつれなき返事なれば今は何をかまたんとて再音信(フタタビオトヅレ)もせずして父兄の方へ一所にうつりわたれるとなり中川は京極の北御堂殿と法成寺との中の川なり多くは鴨川と桂川との中にいへるは不可也廣幡中川とあげいへばひろはたもちかしときこゆ鴨川のあたりの地名にて古今高家の稱號あるも此の地名によりてならん

かげろふの日記解環下卷之八

山ちかうかはらかたかげなる所に今は心のほしきにいりたればいとあはれなるすまひと覺ゆ二三日になりぬれどしりげもなし五六日許(バカリ)さりけるをつげざりけると許(バカリ)あり

山もちかく河原の邊にうつりて二三日になれども公のうつるをしられたるさまもきこえすやう〳〵五六日許になりにのかなを脱せしにやされど此日記かやうにある所往々あればなくてもおのづからきこゆべしさりけるはしかりけるをなり

かへりごとにさなんとはつげきこゆべしとなんおもひしかどびゞなき所には　たかたうおぼえしか　ばなん見給ひなれにし所にて今一度(ヒトタビ)きこゆべくは思ひしなンどたえたるさまにものしつさ　もこそ　はあらめびゞなかゞなればなんとてあとをたちたり

原本ひなきところにはたかたうとあり定て誤字あるべし沖本も不㆓分明㆒よて姑無㆑便處に將難(ハタカタウ)と釋したりさもこそ以下二句公の反の詞なり

九月(ナガツキ)になりてまだしきにかうしをあげて見出したればうちなるにも外(ト)なるにも川ぎりたちわたりてふもとも見えぬ山のみやられたるもいとものかなしうて

かうしは格子なり內なるとは中川なり外なるとは鴨川なり前文山ちかうと云へるは山のかたちのみゆる遠山に對しては靑々とみゆるをちかしとは云なり當今三本木より望と心得て可なるべし

ながれてのとこととたのみてこしかどもわが中川しあせにけらしも　女君

原本床(トコ)の下とのかなを脱せり契沖二本ともに皆とことせり尾本にはところとあり不可なるべしかくのごとくして歌の意も大やうきこゆ中川に公との中のすさびたるをかねたり

とぞいはれける

ひんがしの門(カド)のまへなる田ともかりはてゆひわたしてかけたりたまさかにも見えとふ人にはあをいねからせて馬(ウマ)にかひやいごめさせなどするわざにおりたちてありこたかの人もあればたかどもとにたち出(イデ)てあそぶ

原本に田どもかりてとあり今沖本によりてかりはてとなせりあをいねは靑稻也やいごめは和名抄曰

俗に云雄米夜木古女可用二福米の二字一イ本にやいごめせさせともありこたかは小鷹なり時秋なればば小鷹狩する人なりとは外なるべし

例の所におどろかしにやるめり

さごろもゝつまもむすばぬ玉のをのたえみたえずみ世をやつくさん　女君

此歌結句撰集二右近大將道綱とせり是善印本のあやまりにて母の字を脱するならん分明に今此歌なればなり原本に結句をむすばんとせり上句にむすばぬとあればば分明にあやまれり今新勅撰を以つくさんとせり

かへりことなし又ほどすぎて

露ふかき袖にひえつゝあかすかなたれながきよのかたきなるらん

此歌三本誤あるにや沖本皆上の句のえの字下の句のたの字ほを傍に附て不審をなせり（頭注書入云下句いさたきは あいてなりあそひかたきのかたきに同し意は誰かこのながき夜に我があいてとなりてもろ共にふす人のあらんと云にてあなたなうらみたるなり二の句のひえ可考

かへりことあれどもよしかゝじさて廿よ日に此月も成ぬれど跡たえたりふさましさはこれしてとて冬のものあり御ふみありつるははやおちにけりといへばおろかなるやうなりかへりことせぬにてあらんとてなにごとゝもしらでやみぬありしものどもはしてふみもなくてものしつ

公よりの文使が落せしにやされば何ごとゝもしらぬなりありしものどもはあつらへ來されし冬の裝束なり文みねばこなたよりも又ふみなくてつかはせるなり

其後は夢のかよひぢたらてとしくれぬ

案ずるに此下文つごもりにとあるは九月晦日也又其の下についたちとあるは十月朔日也又公より下襲をこれしてとあつらへられたるをよく仕立て道綱にもたせて參らせらるゝ事ありてそのゝち往來つひに絕たりときこゆしかればこゝに其後の一句はつひに夢のかよひぢもたえて此年もくれぬと中間にことわられたるときいて可也

つごもりに又これしてとなんとてはてはふみだにもなくてぞしたがさねあるいかにせましと思ひやすらひてこれかれにいひあはすれば猶このたびばかり心見にせよいどみたるやうにのみあればとさだむるこ

とありてとゞめてきたなげなくしてついたちの日大夫にもたせて物したればいゝきよらなりぬとなんありつるとてやみぬあさましといへばおろかなり

此下にゆめの通ぢ絶てと前にいひおかれし詞をこゝへうつして心得べししたがさねは下襲なりいどむは挑なり挑戰なゞどの挑の意にて此方よりしかけあらそふなり原本には一のいの字をあましていといみとせしは衍語也きよらはけうらとよむべし源氏等にきよらともけうらともかける同言也

さて此霜月にあがたありきのところにうぶやの事ありしを得とはですぐしてしをいかになりにけんこれにだにと思ひしかどこと〳〵しきわざはえものせずことほぎにぞさま〳〵したる例のごとなりしろうてうじたりうめのえだにつけたるに

冬ごもり雪にまどひしをりすぎてけふぞかきねの梅をたづぬる　女君

とてたちはきのをさそれがしなゞど云人つかひにて夜に入て物したりつかひつとめてぞかへりたるうす色のうちきひとかさねかづけたり

えだわかみ雪まにをれる初花はいかにととふにゝほひますかな　長能

此一件は極月の事なるべし此霜月にといへばなり此あがたありきの所はさだめて兄長能たるべし此比いづれの國の受領たるにあたれるにやことほぎはことぶきなり原本にことはたとあるはほをはにきをたに誂りたるものなり今は沖本によりて直せり余沖本をみぬ前にうたがひしに符合せり白く調するは産屋の儲(マウケ)の常のみ女君の歌第二句まよふの意にや又繞(マト)はれしにやまどふの意是に近かるべし此歌冬ごもりとおけば春に至てよめるさまにもきゝなさるれば此所錯簡にもやと思はるれども上に此霜月とあればまだ年の内にいへる詞故錯簡にもあらじたちはきのをさは帶刀の長なりそれがしは其姓名をあらはさずしていへるなり原本にうらきとあるは例のらはちの轉訛なり又かつきとあやまるは元(もと)けともよめる氣なりしをきとよみてたがへたるなり又長能の反歌原本いかにとしふとあるはとのをどり字をみたがへてかく成たるなり

なゞどいふほどにおこなひのほどもすぎぬしのびたるかたにいざとさそふ人もあり何かはとて物したれ

ば人おほうまうでたれどしるべきにもあらなくにわれひとりくるしうかたはらいたしはらへなゞどいふところにたるひいふかたなうしたりをかしうもあるほど見つゝかへるに

おこなひは前より所々此事見ゆ長き潔齋ときこゆ今其事も漸々して限も滿はてたるなり此今まうでらるゝ所は下文の沖本によれば田上ときこゆさだめて據ありてなるべしはらへの祠あれば神社にや或は宮寺と稱する所にや祓など云所とあれば祓殿などにや

おとなたるものゝわらはさうずくしてかみをかしげにてゆくありみればありつるこほりをひとへの袖につゝみもたりてくひゆくゆゑあるものにやあらんと思ふほどにわがもろともなる人ものをいひかけたればひくゝみたるころにてまろをのたまふるかといふをきくにぞなほものなりけりと思ひぬるかしらついてこれくはぬ人は思ふ事ならざるはといふまが〳〵しうさいふものゝ袖ぞぬらすゞめるとひとりごちて又思ふやう

さうずくはさうぞくに同裝束なり此日記には例さうずくとありおとなたる者の童形せしなり此一件事奇なりありつるひは上に所云祓所の垂氷(たるひ)なるべしそれをかの者單衣の袖に包み持て食々あゆむなり女君の伴なへる人が物いひかくれば氷を口に含みながらわれに物の玉へるかといへるなり古へはおのれがことをまろといへり麿なり丸ともかきてまろとよむなり物とは鬼の字をものとよませり常にことなる怪ものを云からのかを原本によと誤る沖本に頭衝かと傍注す實の字にてもあるべくや思ふ事ならざるかと原本にましをは沖本にかをはに直せり今はそれに從ふまがは枉の字にや或はまことがましくにてもありなん其下原本にかなをあませりこれ又沖本によりてはぶきぬ

わが袖のこほりは春もしらなくに心とけても人のゆくかな　女君

原本にこほりのりを脫せり必然故補ふ案ずるに此次にかへりて三日許ありて加茂へまうづとあるを沖本にかへりての祠をうたがひて二樣に釋しおかれたり一つには田上よりかへりて歟とせり又一つにはかへりての上に年の字脫せる乎とうたがへり

尾本にもかへりての上極て漏脱ありと記せり下文を帯しするに田上よりかへりてに治定しぬ加茂へ詣て雪にあひて風おこりてふしなやむほどにしもむつきになりぬとあれば今は其一件を明る天延二年の初に属し畢

かげろふの日記解環下卷之九

天延二年

かへりて三日許ありてかもにまうでたり雪いふかたなうふりくらかりてわびしかりしに風おこりてふしなやみつる程にしもむつきにもなりぬしはすもすぎにけり

上冊の終に契本に疑をのこされし事を記しおけるが如しかへりてを田上よりかへりてに今治定せり猶風氣に臥す間に正月になり年もかはれるとなり猶しはすもすぎむつきになりしといはんがごとし原本にむの字を脱せしは下にしはすの字あるによりてふしなやみつる程にしもの詞字をトへつけてしも月しはすと心えてむつきのむの字を脱せしならん且すでに前に此しも月に云々の事みゆれはこゝに霜月をいはんやうなければ必落たるなり

十五日なびあり大夫のざふしきのをのこどもなびすとてさわぐをきけばやう〳〵ゑひすぎてあなかまやなどいふこゑきこゆるをかしさにやをらはしのかた

にたちいでゝ見いだしたれば月いと、をかしかりけり
ひんがしざまにうち見やりたれば山かすみわたりて
いとほのかに亦すこしはしらによりたちておもは
ぬ山なゝど思ひたてれば

なびは原本に背大夫とかけり儺は見やらひなりな
びのこと前にもいゆ今は正月十五日なれば定りた
る儺にはあらずして儺に事よせてそのことゞもが酒
のまんとて催せるにや川のいとをかしきとあれば
十五日に誤れるにも非山かすみわたりてなんどい
へる去年の九月よりうつられし廣幡中川の住ひな
るべし拾遺集春中小貳につかはしける藤原朝忠朝
臣時しもあれ花のさかりにつらければ思はぬ山に
入やしなまし今は女君の述懐に公のつらければこ
ゝへうつりておもはぬ山を見るとにや又本歌の如
き意にてつひに山に入なんと云る心にもあるへし

八月よりたえにし人はかなくてむつきにそなりぬる
かしとおぼゆるまゝに涙ぞさくりもよゝにこぼるゝ
まゝに

八月より正月をかぞふれば六月になればむつきの
詞にかねていへるにもありなんさくりはさくりあ
げなくなりよゝは泣聲になり能々と釋するはひがこ
となり

もろごゑになくべきものをうぐひすはむつきともま
だしらずやあるらん　女君

此歌は玉葉集戀四にのせられたり

とおぼいたり

原本おほひは假名たがへりおぼえにてもありたら
んやと思へとひをいとよめるかたによればおぼい
なりえといとは中の喉音にてかよへるなり

廿五日に大夫しもなにがしなゝどにもきほひおこな
ひなゝどすらんと思ふほどにつかさめしのこと有め
づらしき文にてうまのすけになんとつげたり

廿五日を原本には十五日とありしかるに上にも
十五日とあり上には月のことあれば十五日誤るべ
からずとして姑こゝを廿五日とせり尾本にも此十
五日をうたがひて五をはぶき十を直してたゞ廿日
とせり系圖に天延二年正月三十日任二右馬助一とあ
れば任日かくのごとくなれば廿日はいさゝか日遠
ければ廿五日月末にちかければ任官すべきことす
てに治定の上に公より内々につげこされたるなる

べし又は尾本に廿日とあるも傳寫の人のあやまりて卅を廿とせしかさなれば系圖と日を合せしならんされとそれも原本にあやまりたがへば先姑臆に廿五日となしおくものなりなにがしとは何の官にか進つらんと諸人と爭如く隨分奉公つとめ行はんと女君の推はかりて思はるゝなりさるに除目ありて右馬助になりしと告こしたりと也めつらしき文とあれば公より告こされたるときこゆ職員令左馬寮左馬頭一人掌下左閑馬調習養飼供御乘具配給穀草及飼部戸口名籍事上助一人大允一人少允一人大屬一人少屬一人馬醫師二人馬部六十人使部二十人直丁二人飼丁右馬寮准レ此

こゝかしこによろこびものするにそのつかさのかみをぢにさへものしたまへばまうでたりけるいとかしこうよろこびてことのついてに殿にものし給ふなるひめ君はいかゞものし給ふいくつにか御としなどはととひけりかへりてさなんとかたればいかで聞給ひけんなゞど心もとなくおもひかくべきほどにしあらねばやみぬ

そのつかさは右馬寮也寮は司の義にかよへばなりつかさのかみは右馬の頭なりをぢは父かたは伯叔父母方は舅といへり此右馬頭の系圖不分明もとより兼家卿の兄弟ならず又女君の兄弟にしもきこえねばこれ道綱のをぢならずしかれば女君の身よりさしてをぢにや女君のをぢにしても母方のをぢなゞどにもありなんかしよろこびは左馬助拜任の慶禮なり

そのころ院ののり弓あゞべしとてさわくかみもすけも同じかたにいでゐの日にはいきあひつゝ同じ事をのみの給へばいかなるにかあらんなゞどかたるに

のりゆみは賭弓也　正月十八日天子弓場殿に出御弓射るを叡覽あり左右近衛左右兵衛四府の舍人どもの射るなり又殿上の賭弓とて臨時に行はるゝこれ殿上の侍臣射侍也と公事根源に見ゆ今は院にて行はるを云すべてかたわきて射なれば頭も助も同右方なれば同方出居するなり同事とはかの志賀より迎られし童女の事をいきあふ度ごとにの玉ふとなり原本には院のゝしりゆみとしの字をばあませり

二月廿日のほどに夢にみる事あるところにしのびて

おもひたつなにばかりふかくもあらずと云べき所なりのやきなどする此の花はあやしうおそき比なればをかしかるべき道なれどまだしいと奥山は鳥のこゑもせぬものなりければうぐひすだにおとせず水のみご珍らかなるさまにわきかへりながれたるいみじくくるしきまゝにからくてある人もありかしうき身ひとつをもてわつらふにこそはあゞめれとおもふおもふいりあひつく程にぞいたりあひたるみあかしなゞどは奉りてひとすく許だちゐするほどいとゞくるしうて夜あけぬときく程に雨ふり出ぬいとわりなしと思ひつゝほうしのばうにいたりていかゞすべきなゞどいふほどにことゝあけはてゝみのかさやと人はさわぐ我はのどかにてながむればまへなる谷より雲しば／＼とのぼるにいと物がなしうて

おもひきやあまつ空なるあま雲を袖してわくる山ふまんとは　女君

とぞおぼえけらしあめいふかたなけれどさてあるまじければとかくたばかりて出ぬあはれなる人の身にそひて見るぞわがくるしさもまさるばかりかなしう覺えける

此段大奇事下文を閲するに平を寺の誤とみて大やうに釋しおきしに沖本を見て後そのひける歌の下の句によりて案ずるに高平の地をひらといへるにやと覺ゆしかりとも未ニ治定一ども姑それに從ふ沖本に引く所の歌は何ばかりふかくもあらずよのつねのひらを外山とみるばかりなりとあり猶その沖本に引ける歌とても余が見る所の本いくばくの轉寫やらんもしられず且余が記臆甚乏ければ未ニ考得一何に出たる歌にや姑今此沖本にすがりて釋しぬのやきは野燒也古今集戀一に飛鳥の聲もきこえぬおく山の深き心を人はしらなん又古今春上春やとき花やおそきと聞わかん鶯だにもなかずもあるかな此歌を錯綜して文を作れりおともせずの下原本とのみぞとあり下文を照すに分明にとは水の字のあやまりなれば直しぬからうでは辛勞なりこれ我のみならす又まうづる女あるにかけていふ詞也さ思ふ／＼寺の入相の鐘つくほどにかの女も我も佛前にいたりあひぬとなりひとすくを尾本にひとゝくと直せしは心えがたし余は原本のまゝにし[illegible]すくは達世話する人多く佛前へ入こめば立居も

くるしきとなるべし原本夜あけめを沖本あけぬと雨せし今それに從ふ分明にぬのかなをめに誤たりほうしは僧ばうは僧房也ことゝあけはてゝはあくるを常のことゝなり只夜の明なり雨ふり出せば蔑や寛よと人々はさわげども我はのどかにとなり歌も女君の夢中に詠せるなり其の心は分明なりとぞおぼえけらしとに夢さめて後夢によみたる歌をかくのごとく記憶せしとなりいふかたなけれどゝは雨のいはんやうもなくおびたゝしげにふるを云されどかくして久しくもこゝにあられまじければ也たばかりは只はかるなりたは手にて心なしかの行わづらへる女をしばらくとやかく思てうれへみ居れはそれにわかれがてにゝやかくはかりてその所を出て歸りしとなりまさるを原本に誤てまざるとせり例のさときとの形近ければなり

又の日いでゐのところより夜ふけてかへりきてふしたる所にかへりていふやう

上文我くるしさもまさる許かなしくおぼえけるにてか○夢語はつきぬしかるを原本にそれに引つゞけてからうじてかへりて又の日いで井の所よりとつゞけかけり是夢ならずしてかの山寺よりからうじて歸るさまにかける道理なし今推量するに今世流布の原本をしたゝむる人の上の夢語に心をつけずして下文にかへりきてのもじあるよりしてまぎらにうかとかきしならんさならずしては決して文言つゞかず故原本のからうじてかへりての句を衍として省きぬさて又其下の原本にふしたる所よりかへりてとありこれ又文をなさず誤の甚也これ本乃の一つなりしかよりと二字轉訛せし也ふしたる所は女君なりかへりてとは道綱なればなり

殿なんきんぢがつかさのかみのこぞよりいとせちにのたまふことのあるをそこにあらんこはいかゞなりたるおほきなりや心ちづきにだりやなゝどのたまひつるをまたかのかみも殿は仰られつることゝやありつやなゞどのたまひつればさりつとなん申つればあさてばかりよき日なるを御ふみたてまつらんとなんのたまひつるとかたるいとあやしきことかなまだおもひかくべきにもあらぬをとおもひつゝねぬ

きんぢは汝と意同しきんぢよりして以下は公の道綱へかたらるゝ詞也そこには女君をさす子は養女

を云そらつはさありつゝ他云々おもひつゝ寝ぬは上文ふしてこゝ所の首尾なり
いでゐの日になりて文有いとかゝりしことうちとけしにくげなるさましたり文のことばは月比はおもふることありて殿につたへ申さゝせ侍りしかばことのさまばかりきこしめしつ今はやがてきこえさせよとなむ日ごろうけ給はりにしかどいとおほけなき心の侍りけると覺しとがめさせ給はんをつゝみはべりつるになんついでなくてとさへ思ひ給へしにつかさめしに見給へしになん此すけの君のかうおはしませば參りはゝべらん事人もとがむまじと思給ふるになゝどいとあるべかしうかきなしはしにむさしといひはゝべる人の御ざうしにいかでさふらはんとありかへりこときこゆべきをまづこれはいかなる事ぞと申してこそはとてあるに物いみやなにやとをりあしとてえ御らんせさせずとてもてかへる程に五六日になりぬ
上件のをはりおもひつゝねぬの下原文こてし日になりてと有何ともきゝがたしよりて前にも見ゆるによりて日の字にすがりていでゐの日と記しぬ又その下のまたの詞も不審なればおもふにもと文なりしが又にあやまりそれが又假名のまたになりしもやと文となしぬいとかゝりし云々は頭のありさまを述たりさてその文の詞を云つゞけたりその文の詞のはじめを原本うちはのことはとあやまる沖本はそのまゝにうちとよんで文の内の詞と釋したれどもされどさにてははのかな衍れりよりて臆に思ふに此日記すべて一字を二字になし或はかなの點畫の脱して外のかなに成りしことさま〳〵あやまれる例を以て恐らくは元はふみなどなりしをふの兩畫を脱してうに成みの字かちはの二字に變せし事も或はなきにしもあらねば姑文の詞と取なほせしなりおほけは負氣なり前にすでに釋しぬ
おぼつかなうもやありけんすけのもとにせちにきこえさすべきことなんあるとてよび給ふ今々とてある程にまづこひてかへしつそのほどに雨ふれどいとまして出るほどに文とりてかへりたるをみれば
原本いよ〳〵とあるを尼本によていま〳〵と直しぬその下文のよろも沖本にまづと直せしに從ふげにもさならではきこえず今々とは頭より道綱へ文

して急ぎ來りませと云おこさるなりさるを其使ひ人にそなたは先歸られよと請たるなり折ふし雨ふれども使ひはいとまごひして出るなり其程に頭よりの文を助のもてかへられしを女君のみればと也又原本に雨ふればとありしを沖本によりて雨ふれどゝなほせりいとまのまのほにあやまれり

くれなゐのうすやうひとかさねにてこうばいにつけたりことばゝいそのかみといふことはしろしめしたらんかし

詞は云々とは盖六帖戀部人しれぬの題詠の内に石の上ふるのわさ田のほにには出ず心のうちにこふる此ごろ此歌の心を示されたるならん万歌にも人しれぬ身とよめり

春雨にぬれたる花の枝よりも人しれぬ身の袖そわりなき　右馬頭

わが君〳〵猶おはしませとかきてなどにかあらんあが君とあるうへはかいけちたり

原本にありきみと誤もとはかにてありしかりに轉ずるの上りのかなに再轉せし事毎々例あれば分明直すべきにたへたり頭の何の心ありてやあがきみと書ながら其上をみえげしにけしたりとなん

すけいかゞせんといへばあなむつかしやみちになんあひたるとてまうでられねとていだしつ

女君あなむつかしやとありて道になんより下は道綱へ頭にかく〳〵申せよと敎へらるゝなり頭よりのおとづれをうるさくおぼししばしだにも何かとひまあらせてのがれたき意主と心得べしまうでられねとの下詞たらはぬさまなんどしひて解せばかく釋すべきにや或は申せよなんどの字の脱たるもしるべからず

かへりてなどか御せうそくきこえさせ給ふあひだにても御かへりのなかるべきといみじううらみきこえ給へるなゝどかたるにぞ今ふつかみか許ありてからうじてみせ奉りつの給ひつるやうはなにかは今さだめてとなんいひてしかばかへりてことははやうおしはかりて物せよまだきにこんとある事なんびゝなかゝめるそこにむすめありと云ことはなべて知人もあらじ人ことやうにもきけとなんの給ふときくにあなはらだゝしそのいはん人を知はなぞと思ひけんかし

道綱の頭の方より立かへられて頭の反事の無をか

くく云ひてうらみ玉へると語らるなり此下女君の詞ありぬべかんめるにもしくは何の脱たるにやさて二三日へてやうやくして頭よりの文を公にみせられしならん何かはより下は公の道綱に對して女君へのことづてなるべし云々の玉ふときくにの下は公よりの言つての趣を心よくうけられぬことを自逃られたりときこゆそのいはん人とは頭をさせるならん頭のいひよれるを女君の知りたるを何事ぞと公のさかしらに思はれけんかしと公へあたりて腹たゞれしときこゆ本文のおもひけんを原本には思はんとあるを沖本にて直して其直しにすがりてかくのごとく釋しぬ

さてかへりことけふぞ物する此おぼえぬ御せうそこは此おもくのとくにやと思給へしかばすなはちもきこえさすべかりしを殿はなどの給はせたることのいとあやしうおぼつかなきを尋ねはべるほどのもろこし許になりにければなはされどなほ心得はべらねばいときこえさせんかたなくとて物しつ

けふぞ物するは女君より頭への反事なりけふぞといふにてやうやくして反事今になりしときこゆちもくを原本にじもくとはかなあやまるとくは德といへるにや或は得なるべきにや何れにてもきこえなんすなはちは時をおかずして頓なりもろこしばかり珍きことばなりもろこしははるかに遠ければはるかなるのたとへなり

はしにざうしにとのたまはせたるむさしはみだりに人おとこそきこえさすめれとなん

はしは端書なりざうしは曹司にてつぼねするなりむさしは侍女のよび名なりみだりは慢なり人れとは人音なり沖本に云みたりに人をよせじものをとなり

さてのちおなじやうなることゞもありかへりこともたびごとにしもあらぬにいたうはゝかりたり

三月になりぬむかしこゝにも女房につけて申つがせければ其人のかへりこと見せにありおはめかせ給めればなむこれかくなん殿のおほせはべめるとありみればこの月ひあしかりけりつきたちてとなんこよみ御らんじてたゞ今ものたまはするなどぞかいたるいとあやしういちはやきこよみにもあるかななでふことなりよかるあらじ此文かく人のそらごとなら

んと思ふ
むかしはさきになり女房はかのむさしなるべしおほめかせより下は頭の文の詞なりみればは女君の見玉ふ也此月の中はよき日なければ來月にうつりて吉日次第早く行はんと公の暦御覧じてかくのたまはする日だによくば只今にてもなんどやうかきたるはあやしういちはやき暦にもあるかなと女君のたはふれことなり何といふとも此事ならじ所詮頭の中のやるせなきまゝにかゝれし文なればまことゝも思はれずとなり

ついたち七八日のほどのひるつかたうまのかみおはしたりといふあなかまこゝになしとこたへよそのいはんとあらんにまだしきにびッなしなッどいふほどにいりて庭なるまがきのまへにたちやすらひれいもきよげなる人のねりそしたにさてなよゝかなるなほしたちひきは例のごとなれどあかいろのあふぎすこしみだれたるをもてまさぐりて風はやきほどにえひふきあげられつゝたてるさまゑにかきたるやうなりきよらの人ありとておくまりたるをんならのもなッどうちとけすがたにていでゝ見るにときしもあれこの風のすがたをとへふきうちへふきまどはせばすだれをたのみたるものも我か人かにておさへひかへさわぐまになにかあやしのそでぐちも見なみつらんと思ふに志ぬばかりいとをし

ついたちは月たちなりあなかまはあゝかしがましなりこゝになしとは不在なり原本にきよげなる人のねはそしたるとあるはねりそしたにの誤なるべしねりそは練衣なるべしそのきぬを下にきて上に直衣をきたるを云なるべし又原本にたちひさはきとあるもさはきにてひきさげ詞の例にてひきはきなるべしひきは裾也武官なれば劒を帯するなり尾本にもかく直せり今それに従ふ又あかいろをありいろと誤れりえひは纓也江次第燕尾とかく和名抄俗に云と有いとをしは（書入云この説いとわろし）「もしくはかの字を脱してをかしくにてもや有つらん歟いとをしにても文理通ずべければ原本のまゝにすしぬばかりは死ぬるほどになりさて此風のすがたとあるは下の行のすだれと相並あればこれも風のすだれをあやまりたるに近けれどもしひてよめばきこえぬにしもあらねば姑奇語と料簡して原本のまゝにすとは外也う

ちは内也
よッべいでゐの所よりよふけてかへりてねふりたる人をおこすほどにかゝるなりけりからうじておきいでてこゝには人もなきよしいふ風の心ちあわたゝしさにかうしみなかねてよりおろしたるほどになればなきといふもよろしきなりけり云ひてすのこにのぼりてけふよき日なりわらふだかいたまへゐそめんなゞどばかりかたらひていとかひなきわざかなとうちなげきてかへりぬ

ねぶりたる人は道綱なりかゝるとは道綱のやうやうおき出てこゝにはなしと云にぞかゝりたるとなりあわたゞしを原本にありたゝしと誤世に多くはあはたゞしとかけども盖水の泡だつより出たる詞とおもへば今如此しるせりわらふだは圓座なり和名抄曰此間云圓座一云和良布太尾本には紫式部日記をひけりかい玉へは借玉へなり

二日許ありてたゞことばにて侍らぬ程にものしたまへりけるかしこまりなッどいひてたてまつりてのち頭のかひなきわざよとてなげきかへられて後二日許ありて文にはあらでたゞ詞をもて我外にありて不在の折からおはせしかしこまりを申おくりし後になり

いとおほつかなくてまかッでにしをいかでとつねにありにげないことゆゑにあやしのこゑさてやはなとあるはゆるしなきをすけにものきこえんといひがてらくれにものしたり

にげないことはをさなきわらはめをうまの頭ののぞまる一向とりあはぬことなればあやしの聲たてゝとやかくいふもさてやはなッどゝうけがはれずゆるしなきはせんかたなけれどうまの頭のひたすら心にたへかねて道綱にきこゆる事あれば其事いひきこえんがてらといひてくれにおはしたる也

かうしふた間許あげてすのこに火ともして庇に物したりすけたいめしてはやくとてえんにのぼりぬつま戸をひきあけてこれよりといふめればあゆみよりもし又たちのきてまづ御せうそこきこえさせたまへかしと云のびやかにいふなればいりてさなんとものするにおぼしよらん所にきこえよかしなといへばすこしうちわらひてよきほどにうちそよめきていりぬすけと物がたり云のびやかにしてさゝにあふきうちあ

たるおとばかり時々してゐたりうちにおとなうてやゝ久しければ助に一日かひなくてまかッでにしかば心もとなきになんときこえ給へとていれたりはやうといへばゐさりよりてあれど頓に物もいはず内よりはたまして音なしとばかりありておぼつかなうおほん文にやあらんとていさゝかしはぶきのけしきしたるにつけて時しもあれあしかりけるをりにさぶらひあひ侍りてといふをはじめにておもひはじめけるよりのこといとおほかり

かうしは格子すのこは簀子なりたいめんは對面ぬんとはねてよまずして可なりさくは笏和名抄曰四聲字苑云笏音忽俗云釋盖させる笏につかふ扇の打あたる音せしならんはたは將なりしはぶき和名抄曰病源論云欬嗽欬字亦作ㇾ咳之波不岐

内にはたゞいとまが〳〵しきほどなればかうの給ふも夢の心ちなんするちひさきよりも世にいふなるねずみおひの程にだにあらぬをいとわりなきことになんなッどやうにこたふこゑいたうつくろひたッなりときけばわれもいとくるしあめうちみだるくれにてかはづのこゑいと高しよふけゆけば内よりいとかくむくつけげなるあたりは内なる人だにしづ心なく侍るをといひ出したればなにかこれよりまかろと思たまへむからはおそろしきことはべらじといひつゝいたうふけぬればすけの君の御いそぎもちかうなりにッだらんをその程のざうやくをだにつかうまつらん殿にかうなんおほせられしと御けしき給はりて又の給はせんことときこえさせにあすあさてのほどにもさふらふべしとあればたつなッなりとて几丁のほころびよりかきわけて見いだせばすのこにともしたりつる火ははやうきえにけり内には物のしりへにともしたればひかりありてとのきえぬるもしられぬなりけりかげもや見えつらんと思ふにあさましうてはらぐろうきえぬとものの給はせでといへばなにかはさふらはんとこたへてたちにけり

まが〳〵しきは枉の字たるべし言心はまだいといわけなくしてたへてかゝづらふほどにあらざるを云へる詞なるべしちひさきよりねつみおひとは鼠生なりかはづは蛙なり和名抄には蛙の屬類皆加閉流と訓ずれども歌にはかはづと專唱へる事萬葉よりしもしかりむくつけゝはおとなしからすおどろ

おどろしく人々のうけかはずしていや目するさまなるべししづ心は靜心也まろと思たまはんからとはむつましき中らひに成たればむぐつけく思食事は侍らしとなり助の君のいそぎとは今歳の加茂祭に馬寮のつとめにあたられしなりざうやくは雜役なり右馬頭のこたみの事について女君へ追從せらるゝの言ばなり几丁は几帳なりほころびは縫あはさぬ透間なりとのきえぬるもしられぬとはとは外也かげは火の影なりはらぐろは腹黑にてきたなき心といはんがごとし腹あしき一般の語なり

きそめぬればしばしは物しつゝおなじことをものすれどこゝには御ゆるされあらん所よりさそあらんときこそはわびてもあゞべかめれと思へばやんごとなきゆるされはなりにだるをとてかしかましうこの日とこそは殿にも仰ありし廿よ日のほどなんよき日はあゞなるとてせめらるれどすけつかひにとてまつりにものすべければその事をのみおもふに人はいそぎのはつるをまちけり

こゝにはゝ此方にはなりゆるされあらん所とは公方を云わびてもあゝかめれとは得心なきながらもやむ事を得ず其事をとり行はんとなるべし原本にはせんことなきとあれどもやんごとなきの誤とみゆればやんごとなきゆるされとは公を頭のたふとみてかくいへるならん此廿よ日とあるは前々より往々所云のはつかあまりにはあらで廿あまり四日とよみて廿四日（書入云非也）なるべしさてこそよき日と云へるもきこゆらめつかさのつかひは前にも見えし道綱の馬寮の使にさゝれしなり此方には外の事は心にかゝらず助の使の事をのみ思ふに人はゝ頭をさして頭は使の事の果て我事のならんをまたるとなりはつるを原本にははへるとありつをへにあやまること分明なり

御禊の日いぬの死にだるをみつけていふかひなくとまりぬ

御禊は加茂祭齋院の御禊なり酉日の祭よりは前なれば其のけがれにて助の使とまりて它人かはりてつとめしなるべし原本にはかなにてみそぎの日とあれどもこのみそぎは御禊と聲にて唱る事源氏にもかくの如くなれば今は文字にうつせり

さてなほこゝにはいとしちはやき心ちすればおもひ

かはることもなきをこれよりかくなん仰ありきとも
せんかごときこえんよとのみあれば
貴方には頭の事　思ひかくる事なきをこれよりと
は猶これによりといはんが如く助の祭の出たちも
死穢によりとまれるかた〳〵につきてわが事もの
び〳〵になり行かこつけごとをきくらめとのみ頭
より申さるゝとなり

いかでさはのたまはせるにかあらんいとかしかまし
ければ見せたてまつりつへくも御かへりをいひた
れどにおもひしかどもすけのいそぎしつるほどにて
いとはるかになんなりにけるとおもふたまへ御心か
はらずば八月（ハヅキ）ばかりになんなるにものし給へかしと
あればいとめやすき心ちしてかくなんはンべンめるい
ちはやかりけるこよみは不定（チヤウ）なりとはされぱこそき
こえさせしかとものしたればかへりごともなくてと
ばかりありてみづからいとはらたゞしきことききこえ
させになん參つるとあれば何事にかいとおどろ〳〵
しうはンべらんさらばこなたにといはせたればよし
よしかうよゑひゐ參りつるとあれば何事にか來（キ）ては
いとゞはるかになりなんといらへてとばかり助と物
語してたちてすゞりかみとこひたり出したればかき
ておしひねりていれていぬ見れば

ちぎりおきしうづきはいかにほとゝぎすわが身のう
きにかけはなれつゝ　右馬頭

いかにしはンべらましくしいたくこそくれにをとか
たりてもいとはしげ（つかイ）なりやかへりことやがておひて
かく

なほしのべはなたち花（ハナ）の枝やなきあふひすぎぬるう
づきなれども　女君

凡て此一件冲本にも釋なければやむ事をえず分明
にあやまれると思しき假字（カナ）或は倒或誤と分明に見
ゆる處々粗斟酌してうつし置き後賢を待のみ

かげろふの日記解環下卷之十

さてその日ころえらひまうけつる廿四日のよものし（書入云原本のまゝにすべし）たり

原本に廿二日とあり恐くは此誤前冊の末廿よ日とあり此語只この日記ならすかなものに往々ある言、にして通例如レ此かけるをはつかあまりとよみ習はせりされど今所云の廿よ日は例にたがひたる廿餘日にしてはつかあまり四日也已に前冊に其義を（書入云非なること前にもいへり）明し畢されば今こゝにいへるは廿よかにして廿二日にあらず定て四の畫の中を脱せしこと分明故直し正す

こたみはさき〴〵のさまにもあらずいとづしやかになりまさりたるものからせむるさまいとわりなし殿の御ゆるされは道なくなりにだりその程はるかにおぼえ侍るを御かへりみにていかでとなんとあればいかにおぼしてかうはの給ふそのはるかなりとの給ふほどにようゐごともせんとなんみゆるといへばかひなきほとも物がたりはするはといふこれはいとさにはあらずあやにくにおもぎらひする程なれば社などいふもきゝわかぬやうにいとわびしくみえたりむねはしるまでおぼえ侍るを此みすの内にだにさふらふと思ふ給へてまからんひとつ〴〵をだになすことにし侍らんかへりみさせ給へといひてすだれに手をかくればいとけうとけれどきゝもいれぬやうにていたう更ぬらんを例はさしもおぼえ給ふ夜になんあるとつれなういへばいとかうは思ひきこえさせずこそありつれあさましういみじうかぎりなううれはしと思ひ給へし御こよみもちくもとになりぬわるくきこえさする御けしきもかゝりなどおりたちてわびいりたればいとなつかしさになほいとわりなき事なりや院に内になどさふらひ給ふらんひるまのやうにおぼしなせなどいへばその事の心はくるしうこそはあれとすにいりてこふるにいといふかひなしいらへわづらひてはてはものもいはねばあなかしこ御けしきもあしうはべめりさらば今はおほせごとなからんにはきこえさせじいとかしこしとてつゝまはじきうちしてものもいはでしばしありてたちぬ

づしやか宗牧がもしほ草におも〴〵しき也愚按に源氏若菜の上に朧月夜のことをづしやかなる所お

はせざりし人又柏木卷に女三の宮をもかくいへり俗に性根なきなどいふに當るへしけうとは氣疎なり用意を原本にやうひとかけりかな大にそむけりおもぎらひは面嫌なり兒の人おめするなどなりひとつ／＼尾本に云それほどのこと一つ／＼も物をなしたりと思はんとなりあさましういみじうかやうに何しう／＼と同しやうに詞を二ついひつゞくる時はたとひしうとありとも一はくにかへて何しくとよめるよみくせの一なりもし又同しやうの句三つくさりつゞくる時は中の一を上下にかへて上下うなればくといひくならばうと唱ふへき約束也とうけたまはりしかやうのことはかなきさまのことなれど實熈公の名目抄にの玉へるたぐひ本邦一種の學問なるべしうれはしを原本うれ。し。とあれど上より詞のくさり必うれはしなり脣もちくもとに榮華にも脣の軸のあらはになりたりとも脣のぢくもとちかくなるともいへりつまはじきは爪はじきなりいとひさるの意なり源氏うつ蟬の卷につまはじきをしつゝ恨玉ふ

いづるにまづなどいはすれどさらにおともせでなんときくにいとをしくなりてまだつとめていとあやにくにまつとものへ給はせでかへらせたまふめりしはたひらかにやときこえさせになん

ほとゝぎすまたとふへくもかたらはでかへる山ちのこぐらかりけん　女君

原本に第三句にたのかなを脱せり

こそいとをしうとかきてものしたりさしおきてゝげればかれより

原本にを。き。て。な。れ。はとあるは必誤なりけ。を。なに轉せりてげればをてんとはねてよむこと習なり

とふこゑはいつとなけれどほとゝぎすあけてくやしきものをこそ思へ　右馬頭

といたうかしこまり給はりぬとのみありさくねりても又の日すけのきみけぶ人々のがりものせんとするをもろともにつかさにときこえになどしていでがてにものしたりれいのすゞりこへばかみおきていだしたりいれにだるをみればあやしうわなゝきたる手にてむかしの世にいかなるつみをつくり侍りてかうさまたげさせ給ふ身となり侍りけんあやしきさまにのみなりまかり侍るはながく侍らんこともいとかたし

さらに〱きこえさせじいまはたかきみねになんのぼり侍るべきなゞどふさにかきたり

古今集誹諧歌に秋のゝになまめきたてるをみなへしあなかしかまし花も一時これを同序にをみなへしの一時をくねるにもと貫之のかゝれたればくねるは媚たる體なり又そねみふすふる様の釋もあり又の日すけのきみになり或はにのかなを脱せしや頭助もろともにその寮へまかり出がてらに女君の方へ來られたるとみゆさて硯を乞てよんで書入たる歌なりわなゝきは泣啼によりたる詞なるをわなゝきふるへるより轉して如此も用來れるとおしはかりしらる形容の詞なるへしふさは俗に云ふつさなんど物の澤山なるをいへば總の字の心にあたりて汎大なる詞也此には言多くかき散せるをいふなるべし

かへりことあなおそろしやなどかうはの給はすらんうらみきこえ給ふべき人はことにこそ侍べめれみねはしり侍らずたにのしるべしもとかきていだしたればすけひとつにのりてものしぬすけの給はりうまいとうつくしげなるをとりてかへりたり其くれに又物して一よのいとかしこきまできこえさせ給ひしを思ひ給ふれば更にいとかしこし今はたゞ殿よりおはせあらん程でまちさふらはんなどきこえさせになんこよひはおひなほりしてまゐり侍りつるなしにそとおほせ侍りしはちとせのいのちたゆまじき心ちなんしはんべる手を折侍ればおよびみつばかりはいとようふしおきし侍るとおもひやりのはるかに侍ればつれ〲とすごし侍らん月日をとのい許をすのはしわたりゆるされ侍りなんやといとたとしへなくけざやかにいへばそれにしたがひたるかへりごとなゞど物してこよひはいとゝくかへりぬ

すけのたまはり馬とは道綱の上より賜はりたる馬なりおひなほりとは生直なり按古語に生レ死而肉レ骨也なしにそは勿死也命たふまじきを沖本にたふをたゆに代ふるはよきに似たり今沖本にしたがふはかなき命など云べきことを只仰山にいひたるまでのことなり原本にはてをゝり侍るはおよひやりのはるかに侍れはとあり沖本には今こゝに記せし如く原本とは一行ばかり文字多し沖本とてもこと〲くも信ずべからざれども本文はいづこにても

それにしたがひきぬれば其是非はたしかにしらねども先は水府御本なるべしと存ずればかくの如くせりさていづれにつきても及のかなの手指のおよびと同訓の證にもなるべくやと窃におもはれ侍るさて沖本のおよびみつばかりとあるは三指を折にやもしくは又滿ばかりにて五指にやともうたがはるいづれにても其あふべき折を待かぬるの志をいへるなり又そのふしおきし侍の待の字に形近ければふしおきし待けるとになかりきやともうたがはるこれらはあまりのことなれど後來たゞさん人の爲にあげおくならしあざやかは俗にさつはりなんど云が如くの詞なるべし

すけをあけくれよびまとはせるさまに物す女繪をかしくかけりけるがありければとりてふところにいれてもてきたりみればつりどのとおぼしきかうらんにおしかゝりてなかじまの松をまぼりたる女ありそこもとにかみのはしにかきてかくおしつく

よびまとはせるは招繞なり此女の繪頭の方にありしを道綱の懐中してかへられしを女君にみせしならん女繪とは女のさまを繪にかきたるをかくいふなるべしつりとのは釣殿かうらんは勾欄なりなかしまは池の中島なりまほりはまもりとよむべし物を守るが如く目をはなさずしてながむるなりかみのとは頭をいへるにはあらじ紙の端に書て如此押附たるとのことならん

いかにせん池の水なみさわぎては心のうちのまつにかゝらば　右馬頭

書入云いかゞ

松に待をそへたり

又やもめずみしたる男の文かきさしてつらづゑつきてものおもふさましたる所に

和名抄曰釋名云無レ妻曰レ鰥言鰥々然不レ寐如レ魚目恒不レ閉者也和名夜無乎又曰釋名夜無女やむめやもめ同今は男女通じてやもめと云つらづゑは頬杖なり源氏はゝきゞに中將いみじく信じてつらづゑをつきてむかひゐたまふ後のかなはえなれども古はつゑなり原本につらをつくに訛又おもひまゝしとあるは沖本にて今の如く直せり

さゝかにのいつこともなくふく風はかくてあまたになりぞすらしも　同

蛛のいに何處とうけたり下も蛛の巣がくに物書を

そへたり
とものしてもてかへりおきけりかくてなほおなじご
とたえず殿にもよほしきこえになどつねにあればか
へりこともみせんとてかくのみあるをこゝにはこた
へなんわつらひぬるとものしたればほどはさものし
てしをなどかゝくはあらん八月まつほどはそこにび
ゞしうもてなし給ふとか世にいふめるそれはしもう
めきもきこえてんかしとありたはふれと思ふ程にた
び〳〵かゝればあやしう思ひてこゝにはもよほしき
こゆるにはあらずいとうるさくはべればすべてこゝ
にはの給ふまじきことなりと物しはべるとなほぞあ
めればみたまへあまりてなんさてなでふことにも侍
るかな

物したればゝ公の方へ申たれば也ほどはよりは公
の女君への反事のことば也ほどは其の時分にて八
月の比と定めおきしものをとなりびゞしうは美々
敷なりうめきもきこえてんかしとは右馬の頭のい
みじく待かぬるより様々とそなたへせまりて申さ
るゝならんかしと也たはふれとより以下は女君の
心也こゝにはより下は女君の公へ消息の詞也さて
かく申せども公よりなほ〳〵かのことを仰せあれ
は女君のうるさくおぼしてさて何たることにてや
まれぬことゝて公へ歌をよみて参らせらるゝなり

いまさらにいかなるこまかなつくべきすさめぬくさ
とのかれにしみを　女君

此歌玉葉集戀四東三條入道攝政かれ〳〵になりて
かよふひとあるかなど申て侍りければと前書し
て載せたり又此日記の末に女君のよめる歌どもを
後人のあつめしるせし所にも玉葉と同じく結句の
がれにし身をとありこゝの原本にはのがれせぬ身
をとあり此原本ものがれける身をとありけるが如
く此あやまりたりやと覺ゆ今何にもあれ玉葉と卷
末にのすると相同ければ多きかたについて玉葉の
如くに改めぬ

あなまばゆと物しけりかうのきみ猶此月のうちには
たのみをかけもせんこのころれいのとしにもにずほ
とゝぎすたちをとほしていふ許になくときくにも
かくふみのはしつかたにれいならぬほとゝぎすのお
となひにねやすきそらなくおもふ心かゝめれかしこ
まりを甚しうおきたればつやゝかなることはものせ

さりけり
此四月の内は四月也頼みをかけてせん原本かくの如し尾本に責となほせりせむも爲なれども原本にあはさばせもなるべしせもといはんもせむに義同じけだし此日記むどかよへるんはいとすくなくもにかよへるんはいと多ければなりたちをとほしてといふばかりにほとゝぎすのなくといへるおそらくは此日記ごろの俗諺ならん歟たちとは館の字にやつやゝかの詞前に右馬の頭の體をいへるにづしやかとあればもしぐやこゝもかれに同づしやかの誤れるにやと思へどきと證すべきならねば原本の如ぐうつせり
すけうまぶねしばしとかりけるを例の文のはしにすけの君にことならずば馬ぶねもなしときこえさせ給へとありかへりごとにもうまぶねはたてたる所有ておほくすなれば給へらんにわづらはしなかなんとものしたればたちがへりてたてたる所はべなるふねはけふあすのほどにらちふすべき所ほしげになんとぞあるかくて月はてぬればはるかになりはてぬるにおもひうじぬるにやあらんおとなうて月たちぬ

うまぶね和名抄曰唐韵云櫪は馬櫪なり和名與舟同とあり例の文とは頭の方よりをこたらず女君の方へ音づれらるべきその文のはしがきになりかのことならずはうまぶねもなしときこえさせ玉へとはことならずはうまぶねもありてもなしとて借すまじきと云へるにやこなたよりのかへりごとにうまぶねは多くありぬべければかしたまへらんに何のわづらはしくおぼしめさることはあるまじとなりすなはち又そのうまぶねのことにたよりてたてたることけふあすのほどに成んことを欲するなりと馬のことに託して尋あけまほしと申されたるならんおもひうんじは倦の字にあつべき歟
四日に雨いといたうふるほどにすけの許にあまゝ侍らはたちよらせ給へときこえさすべきことなんあるうへにはみのすくせのおもひしられはべりてきこえさせずととり申させ給へとありかくのみよびつるは何ことゝいふこともなくてたはふれつゝぞかべしける
あまゝは雨間にて霖のしばしふりやむ間なりうへは女君をたふとまれたる詞なりすくせは宿世なりとりは執奏なとの執なり

今日かゝる雨にもさはらでおなじ所なる人と物へまうでつさはることもなきにと思ひて出たればあるもの女神にはきぬぬひてたてまつるこそよかなれさし給へとよりきてさゝめけばいでこゝろみんかしとてかとりのひゝなぎぬみつぬひたりしたがひどもにかうぞかきたりけるはいかなる心ばえにかありけん神ぞしるらんかし

　雨にもさはらでとはかゝる雨をもいとはで參詣するとなり此の女神はいづこの社にや沖本にもしるさずかうがへしるべきことなんいまだ不㆓考得㆒さしたまへとはしかし玉へとなりさゝめくは近よりてさゝやきいふなり和名抄曰毛詩註曰絹は縑なり釋名云縑は其絲細緻數㆓兼於絹㆒也和名加止利したがひは衣の下交なり

しろたへのころもは神にゆづりてむへたてぬ中にかへしなすへく　女君

又

から衣なれにしつまをうちかへしわがしたがひになすよしもがな　同

又

なつ衣たつやとそみるちはやふる神をひとへにたのむ身なれば　同

くるればかへりぬ

かげろふの日記解環下巻之十一

あくれば五日の曉にせうどたる人外より來ていづらけふの御うぶはなどかおそうはつかうまつるよるしつるこそよけれなどいふにおどろきてさうぶふくなれば皆人もおきてかうしはなちなどすればしばしかうしはな參りそなゆぐ香さへうせん御らんぜんには尤なりけりなどいへどみなをきはてぬればことおこなひてふかす昨日の雲かへす風うちふきたればあやめの香はやゝかゝへていとをかしすのこにすけとふたりゐて天下の木草をとりあつめて珍らかなるくすだませんなどいひてそゝぐりゐたるほどに此ごろはめづらしげなうほとゝぎすのむらがりてぞこゝにおりゐたるなどいひのゝしるころなれど空をうちかけりてふた聲みこゑきこえたるはみにしみてをかしう覺えたれば山時鳥けふとてやなどいはぬ人なうぞうちあそぶめりすこし日たけてかんのきみてつがひにものしたまはゞもろともにとありさふらはんといひつるをしきりにおそしなどいひて人くればものしぬ

せうどは例の長能なるべし原本にたゆくとある契本になゆくとせりそれに從へり皆人漸起はてゝ而後に菖蒲をふきたるなり原本にふかすをつかすとあやまる余そのあやまりにつきてはやくあやめをふけといへども何かとことおこなひてそのふけとある詞にしたがはぬをつかずと釋せしをよくみれば下の詞にあやめの香のかゝえていとをかしとあれば其釋はかなはざればふかすと直せり枕草子に汗の香かゝえなどの詞の類なるべしきのふの雲云々とは昨日の雲雨のかへし風にてさりげなく打はれたる體なりくす玉は藥玉なり師光年中行事曰弘仁近衛式に菖蒲料并蓬雜花種々花三日平旦中內侍司也當時もあやめよもぎ石竹芍藥あざみ一枚半中白き紙ぐるりは紅にそめ五色の糸にてあみかけ奉るよし承りし今は女君の私にしてめつらかなる藥玉のいとなみなり拾遺集夏題しらず延喜帝御製あしびきの山時鳥けふとてやあやめの草のねにたてゝなく此御製をとなへぬ人はなしとなりかんのきみは例の右馬頭なり原本にたゝてつがひとのみあり沖本尾本ともに五日は左近の眞手つがひを引てまの字を加ふされど今は左右にとれば右近は六日

名は手つがひなれば原本のまゝにせり且つ馬寮の官は騎射にあらざれは左右の沙汰にも及ばず只てつがひを見んとてさそはれしなるべし

又の日もまだしきに昨日はうそふかせたまふことしげかんめりしかばえものもきこえずなりにき今のあひだも御いとまあらばおはしませうへのつらくおはしますことさらにいはんかたなしさりとも命はべらば世の中は見給へてんしなばおもひくらべてもいかがあらんよし〳〵これはしのびごとゝてみづからは物せず

まだしきにとは其くるつあしたにいと早く人をこされたるをいふきのふより下は馬頭の文の詞なりうそふかせ給の傍に沖本に引貫之家集ほとゝぎすなくともしらずあやめぐさこぞくすり日のしるしなりける此歌いかに引るにや其意ひが耳に髣髴たり畢竟頭よりの文の意は昨日は節日なれば女君はじめ何くれ嘯吟せらるゝことのあやめもしらず繁かりつらんとはかりてえ物もきこえずありしを今いとまあらばおはしませとなりうへは女君をさす死なば云々は頭の女君をうらめしくおもはるゝのくねり言なるへしよし〳〵此言は助殿へ對してしのびごとなりとて其日は頭は來られざりきとなり

又二日許ありてまだしきより[よくきせん]そなたにや參りくべきなッどあれはゞやうものせよこゝには、、、、、、、、なにごともなかりつとて歸り來りぬ。

右の[　]中のかなを沖本の一本と尾本にはよくきの傍になえよとあれども何ともよみとかれずもしくは右の本等にも又轉寫のあやまりもあらんもしられねば一向筆をさしおくもの也又下文のはやうものせよとは女君の道綱に對しての詞としらるゝに助の頭の方へゆかれてさて女君へ何事もなかりつとて歸り來られしとは分明なればこゝには下に一行ばかりも文句脫せしと臆せしのみ故に姑一行空紙になし置ぬ

今二日許ありてとりきこゆべきことありおはしませとのみかきてまだしきにあり唯今さふらふといはせてしばしあるほどに雨いたうふりぬよべからふりてやまねばえ物せでなさけなしせうそこをだにとていとわりなき雨にさはりわびて侍りてかばかり

たえずゆく我なか川に水まさりをちなる人ぞ戀しか

りける　女君
とりきこゆべきとは執奏などのとりなり此一件の詞も所々に誤みゆ諸冲本にすがりて掛酌をくはへて直せりこと／＼くあぐるにはいとまあらず歌にも中川の下ににのかなを脱せり此時女君の住かは上冊に見えし廣幡中川なり（ギ入云非也）されはわが中川とよせらるをちは遠にて頭をかねたり歌は女君のよめるなり頭は女君のをち行（ワタ）の人そのこと前に見ゆ

かへりこと
あはぬせを戀しとおもはゝ思ふとちへん中川にわれをすませよ　右馬頭

なゞあるほどに暮果て雨やみたるにみづからなり例の心もとなきすぢをのみあれば何かまつとの給ひしおよびゝとつもをりあへぬ程にすぐゞめるものをと云ばそれもいかゝ侍らんふぢやうなることゞもゝはゞべゞめればくゞじいのちもまたからぬほどにもやなり侍らんいかでおとゞの御こよみのなかきりてつぐわざもし侍りしがなとあればいとをかしうてかへる鴈をなかせてなゞど答たればいとほがらかにうちわらふさてかのびゞしうもてなすとありしことをおもひていとまめやかには心ひとつにもはゞべらずそゞのかし侍らんことはかたき心ちなんあると物すればいかなることにか侍らんいかでこれをだにうけ給はらんとてあまたゝびせめらるればげにともしらせんことばにかつはいでにくきをとおもひてごらんせさするにもびなき心ちすれどたゝこれもよほしきこえんことのくるしきを見給へとてなんとてかたはなるべき所はやりとりてさしいでたればすのこにすべりいてゝおぼろなる月にあてゝ久しう見もいりぬ紙の色にさへまぎれてさらにえ見たまへず晝さふらひて見給はんとてさしいれぬはや今はやりてんといへば猶しはしやらせ給はでなんといひてこれなることはのかにもみたりがほにもいはでたゝこゝにわづらひ侍りし程のちからなればつゝしむべきものなりと人もいへば心ぼそう物のおぼえ侍るをとてをり／＼にそのよゞもきこえぬほとにしのびてうちいでんずることそあるつとめてつかさにものすべきこともはべる助のきみにきこえにやりてさふらはんとてたちぬ
みづからなりとは文づかひならで自身來也例のことのみを云出さるれは反答に八月を待とて指もて

かぞへ仰られしもいつとなく光陰の過もてゆくの間なきを頭の申されし詞にすがりて其指わづかひどつ折もあへぬほどにと也頭云夫も我まちわづらへるから屈して我命も全たからじと也此段の原本又あやまる所多しくしはからまたおらすほとにもやとあり其よめかぬるを沖本にはからをはてゝとしてくんしはてゝとよめれどもからをてゝと直せるはあやまるべき點畫の筋やゝ遠くおぼゆよりて臆にははからのかなのハといとは形相似かのかなあはのにまぎれやすし又らとちと轉じやすきをもてはからをいのちとしておらすのお又かに近ければ今かける本文の如なせり殿の字とのともおとゞともよめれば今おとどのと云るも兼家公をさしていへるなり其下のつゞきの詞原本又誤りて御ことのみなかまりてとあり沖本二本尾本ともに皆釋なしよりて又やむをえずして臆釋をなせり前件にいちはやき暦にもある哉と女君の詞もあるに據て今はおとゞの御こよみの中きりてつぐわざもし侍りしがなと猶其月をみじかくしたきとの文言に姑定めぬしがなはもがなと同く願へる詞なり鴈は秋來り春歸るものなれども毎年かはらず往反するぞなれば春ならでも秋來るをもかへるとも云べし漢武の秋風辭のごとしされば今は暦を縮めたしと云るをうけて八月のことなれば今秋くる鴈がねをなかせてなんどたはふれらる也さてかのびゝしうもてなすと云るも前に公より女君の方へ申されし詞を女君の物しう思はれしことありその折のことを今更おもひいだされて頭へ對して此事我こゝろひとつにまかせがたければ公をそゞのかすこともかたしと也さて何くれと頭のせめらるれば女君もせんかたなく此こと我口にのぶる計にては頭の心にあたるまじきと思ひてもよほしすゝめんことのかたきわけは此公の文をみて知り玉へとさし出さるも又さすが頭にみせにくき所はやふりて指出さるなり沖本にかたはなるべき所はとある所の傍に文言のきかせまうき所なりと釋せり尤あたれる釋と云べしかたはを或はかたわとかける其羽と輪とのたとふべき物はたがへども心は同じ詞なりおぼろ月は春の夜をいへど今夏にいへるは五月雨のはれくもる時なればおぼろなる月かげもさもいはるべし

久しう見もいりぬを原本には見ていりぬとかけり此後に云々めさしいれぬとあれば此時頭の入ぬにはあらず毎々述る如く此日記もに用ゆるんのかなの或はてにまぎれたる所もある例あればこゝもその訛にてあると定てみもいりぬとなせり見も入ぬとはその文言を心にいれてふかく見るさまをよくかたどれるものなるべし今は此文やぶりすてんとあれば今しばし破らせ玉ふなとなりこれなることのことは言にして文の詞をさしていへるなり

よッべみせしふみ枕上にあるをみればわがやると思ひし所はことにて又やれたる所あるはあやしとぞ思へばかのかへりことせしにいかなるこまかとありしことのとかくかきつけたりしをやりとりたるなるへしまだしきにすけのもとにみたり風おこりてなんきこえしやうにはえまゐらぬこゝに午の時許におはしませと有例の何事にもあらじとてものせぬほどに文ありそれには例よりもいそぎきこえさせんとしつるをいとつゝみ思たまふることありてなんよッべの御文をわりなうみ給へがたくてなんわざときこえさせ給はんことこそかたからめをり〳〵にはよろしかッべいさまにとたのみきこえさせながらはかなき身の程をいかにとあはれにおもふ給ふるなどれいよりもひきつくろひてらうたげにかいたりかへりことはようなしつねにしもとおもひてせずなりぬ

よべは前夜なりその夜頭に見せし公の文枕がみにあるをみれば我破れりと思ひし所は異所にて又外に破たる所のあるはと奇み思へば前に公へかへりごとせし時のいかなる駒かとありし歌の所を頭のそこをやぶりてとられたるならんとなり彼の歌のことは前に見ようなしは不用なりとなりつねにしもとはかくせめらることの常のことになりたればとの言なるべし

又の日猶いとをしわかやかなるさまにありと思ひてきのふは人のものいひ侍りしにくれてなん心あるとやといふらんやうにこゝろおき給ふへしをり〳〵にはいかでと思給ふるをついでなき身に成侍りてこそ心しげなる御はしがきをなんげにと思きこえさせずやかみのいろは晝もややおぼつかなうおぼさらめとてこれよりぞものしたりける折りにほうしばらあまたありてさわがしげ也ければさしおきてきにけりまだ

しきにかれよりさまかはりたる人々物し侍りしに日もくれてなんつかひも參りにける

古今集戀四たえずゆくあすかの川のよどみなば心あるとや人の思はんこれはもと萬葉第七に作者なき歌なり古今の注に中臣の東人の歌なりとあり今此歌のやうに我に心をおき玉ふなとなり紙の色は書もやとは前に頭に文を見せらる時馬の頭のおぼろなる月かげに紙の色さへまぎれてとありし首尾也これより文して申入る折から頭の方に何事にか僧などあつまりし折なれば使が文をさしおきて歸るにやがて頭の方より使きて人に物せし故や丶日もくれてなんとて歌をよみこされたるなりさまかはりたる人とは則前にいへる法師ばらなり原本にかれよりをも又これよりとあやまりし故釋しがたくありきこゝの文は隔句にきくへし

なげきつゝあかしくらせばほとゝぎすこのうのはなのかげになりつゝ　右馬頭

尾本に結句をなきつゝとせり蓋かへしにかけにしもなどかなくらんとあるにより直せるにや上になげきつゝあり猶うたがはしくて先原本のまゝにす

いかにし侍らんこよひはかしこまりとさへありかへりことは昨日かへりにこそかへりけめなにかさまではとあやし

かげにしもなどかなくらんうの花のえだにしのぶのこゝろとぞきく　女君

尾本に下句枝に忍ばぬとせり姑原本のまゝにす

とてうへかいけちてはしにかたはなる心ちし侍りやとかいたり

うへは上なり上かいけちてとは右の歌をかいてみえげしにけしてて其端にかたはなる心地なとかゝれたる其心は知りがたけれども所詮女君のもとよりいたくきらはることとなれば何くれとやかくやといひまぎらはしていつとなく此こと止んとの心にはたがひあらじなん

そのほどに左京の官うせ給ひぬとものすへかゝめるうちにもつゝしみふかうて山寺になゞどしげうてとき〲おどろかしてみな月もはてぬ

此左京の官誰人にや知がたし其下云々のことも上の件につゞけきかば右馬頭のことを云へるにや又下へかけてもかの養娘のことと右馬頭のことをいへ

ばなりされど日記の全體をおもへば例として兼家公のことなるべきにやされどその方にとりてもおぼつかなし內は內裏にやもしくは上の物すべかゝめる內にもとよみ下せる文義にや又文に脫誤ありしやらんもしれがたししひて釋せば後悔出來りなんよて姑原本の如く遮おくのみ

七月になりぬ八月近きこゝちするにみる人は猶いとうらわかくいかならんことゝ思ふことしげきにまぎれて我おもふことはいまはたえはてにたり

八月ちかきと云出せるはかの馬頭のことによりて也こゝに見る人といへるは初卷より時々いへる兼家公にはあらずして分明に坂本の養女のこととききこゆまだいと幼稚なればうらわかくて何くれとことしげく心むけのさしつどひぬればそれにまぎれて我いみじく思ひしことの今は中々絕果にたるなり蓋思ふこととはいや目にきらはしく思し右馬頭をさせり

七月中十日許になりぬかうの君いとあさりよればわれをたのみたるかなと思ふほとにある人のいふやううまのかんのきみはひとのめをぬすみとりてなんあるところにかくれ居給へるいみじうをこなることになん世にもいひさわぐなるときゝつれば我はかぎりなくめやすいことをもきく

あさりよればとはあさりは求むるなり原本にあさりかれはとあり契本にあさりをあまりとさをやのかなにあやまりたりと見てしかりされど心ゆかず其下彼我をたのみたるかなともつゞくめれどかれはのかのかなをあをよにあやまるとしてあさりよればとなすの詞のおだやかなるにはしかじと臆には思へる且同く婿を求るにも似よらぬなからひを（書入云々說笑ふにたへたり）しひて欲するは貪なればいやしき漁魚をあさるにもたとへていはんはかなふみのかざりなるべければ女君の本文かくありたるべしと沖にそむきてかくしるせり

みな月のすぐるにいかにいひやらんと思ひつるにと思ふものからあやしの心やとは思ひなんかしさて又ふみありみれば人しもとひたらんやうにいであなあさましや心にもあらぬことをきこえさせはつべきにもすまじかゝらぬすぢにてもとりきこえさすること侍しかばさりともなゞどそある

原本は上件の末我は限なく目やすいことをもきくかなと詞をとめて月のすぐるに云々と下へつゞけたり何月の過るとはいふべし只月のすぐるとはいはれまじ上に七月中十日許のことあれば六月の過るとはいはまし又上の詞の結にかなの詞無くてもきこゆなればかなのかはみの誤として上にはなちて六月のすぐると此件の發端の語にとれり

かへりこと心にもあらぬとのたまはせたるは何にかあらんかゝらぬさまにもとは物わすれをせさせ給はさりけると見給ふるなんいとうしろやすきとものしけり

かへりごとを原本にかくがごとゝ轉訛せり

八月になりぬ此世中はもがさおこりてのゝしる廿日のほどに此わたりにも來にだりすけいふかたなくおもくわづらふいかゞはせんとてことたえたる人にもつぐばかりあるにわが心ちはまいてせんかたしらずさいひてやはとてふもしてつげたればかへりごといとあらゝかにてありさてはことばにてぞいかにといはせたるさるまじき人だにもきとふらふめるとみる心ちぞそへてたゞならざりけるうまのかみなどはしば〱とひたまふ九月ついたちにをこたりぬ

ふもは文也かやうの轉語此日記所々希に見ゆ和名抄皰は面瘡也類聚國史曰仁壽二年皰瘡流行人民疫死皰瘡此間云二裳瘡（モガサ）一此比もがさ流行すること榮華にも見案ずるに和名面瘡とあるによればおもがさの古訓義にやと思へど榮華に又いもがさとも見えたればもかさはおもがさの略にもあらじ且おもてのみにもあらざればなりことたえたる人とは離家公也をこたるとは病の大牛いえぬるを云ならん下の詞をみれば大かたの本復也

八月廿よ日よりふりそめにし雨この月もやまずふりくらかりて此中川も大川もひとつにゆきあひぬべく見ゆればいまやながるゝとさへおぼゆ

中川は加茂河の西にしていとちかければ霖雨に水あふれて一つになれるなり大川とは加もがはなり原本に大つとありこれもと本は大川なりしを萬葉に川をつとよめる乃かたかなのツ也其ツと川とは一つかなゝるに轉せしよりしてつをかはとはよまれねばおほつとよみては通せぬことなり

世中いとあはれなり門のわさ田もいまだかりあつめ

ずにまさかなるあま間にやいでめばかりぞわづかにしたるもがさ世中にもさかりにて此一條の大上の大とのゝ少將ふたりながらその月の十六日になくなりぬといひさわぐ思ひやるもいみじきことかぎりなしこれをきくもをこたりにだる人そゆゝしきかくてあれどまだありきもせず廿日あまりにいとめづらしき文にてすけいかにぞこゝなる人はみなをこたりにだるにいかなればみえざらんとおぼつかなさになんいとにくゝしたまふめればうともとはなくていどみなんすぎにけりわすれぬことはありながらとこまやかなるをあやしとぞ思ふかへりことゝひたる人のうへばかりかきてはしにまことわするゝはさもや侍らんとかきてものしつ

契本に六帖家持わが門のわさたもいまだからあげぬにまだき吹ぬる木枯の風わさだはわせ也あまゝのまを原本に一おとせり契本にて補へりやいごめは前に具に釋せり大上は太政の借字なり少將を原本に小鷂に誤かやうの訛かぞふるに不レ暇百錬抄に天延二年六月十六日右少將義孝卒異香滿レ宅往生の瑞相なり榮華に天延二年になりぬの下にこと

しは世中にもがさといふもの出きてよも山の人上下やみのゝしるに大やけわたくしいとみじきことゝ思へりやんごとなき男女うせ玉ふたぐひ多かりときこゆるなかにも前攝政殿の前少將後少將同し日に打つゞきうせ玉へると云大鏡にも前少將はあしたにうせ玉ひ後少將はゆふべにうせ給へると云

すけありきしはしむる日みちにかのふみやりし所ゆきあひたりけるをいかゞしけんくるまのどうかゝりてわづらひけりとてあくる日よべはさらになんしらざりけるさても

とし月のめぐりくるまのわになりておもへばかゝるをりもありけり　右馬頭

といひたりけるをとりいれて見てそのふみのはしになほ〳〵しき手してあらずこゝには〳〵とちうてんがちにてかへしたりけんこそなほあし

沖本になほ〳〵しき手してあると直し尾本にはあらずの傍にかとあるはうたがひを付おかれしや又總の詞を原本にはあらとゝめたるを沖本に落字歟としるせし臆はあらとあるを書の近きをとりてあ

しと姑とめ詞にしぬ所詮姑さしおくべき一件とせん

さて此冊原本錯簡有みな月のすぐるにといへるそのみな月のすのかなより一丁隔てくるにいかにとつゞけりさて又其紙のをはり八月廿より上紙のはじめよかよりふりそめにつゞく又其かみのをはりゆきあひたりけるをより下一丁をへだてゝいかゞしけんへつゞけるなり今契沖二本且尾本を合て三本皆同出處水府御本の直しの如くこゝに改正連書すされどかくのごとく改直せども前後錯雜のうたがふべき者なほのこれりやと姑存而已

かけろふの日記解環下巻之十二

かくてかみな月になりぬ廿日あまりのほどにいみたがふとてわたりたる所にてきけばかのはるのいみのところに子うみたるなりと人いふなほあらんよりはあなにくとも聞思べけれどつれなうてある

はるのいみの所に子うみたるとはかの公の新なるおもひ人にてまへにいひたる近江のことにや直あらんよりとはたゞあらんよりはにてたゞにも悪く思ふに子さへいできぬればいとゞしけれども何ともいはですごせりと云るにや

よひのほどひともじだいなゞど物したる程にせうどゝおほしき人ちかうはひよりてふところよりみちのくにかみにてひきむすびたる文のかれたる薄にさしたるをばとり出たりあやしたがぞといへばなほ御覧せよといふあけて火かげにみれば心づきなき人の手のすぢにいとよう似たりかいたることはかのいかなるこまかとありけんはいかゞ

しもがれの草のゆかりぞあはれなるこまがへりてもなつけてしがな　一條殿

あな心ぐるしとぞある

原本よゐのほどゝあれどよひなるへしとかなをかきかへぬひともじ題とは一字題たるへしせうどは長能也みちのく紙は檀紙也くにのにはよまずいかなるこまとは上冊に文の中によみこめられし其後右馬頭のやりとられし今さらにいかなる駒かなつくべきすさめぬ草とのがれし身の歌なりなゝもじはこまがへりてもの七字なり源氏玉葛河海抄に萬葉集十一朝つゆのけやすき我身老ぬとも又こまがへり君をしまたんと又此日記の今の歌をもひけりさて又うつぼ物語大將こまがへらせ玉ふべしの詞をひけり細流　も當時流布の仙覺が點本にはわかゞへると點せり古點はこまがへると云々

わが人にいひやりてくやしと思ひしことのなゝもじなればいとあやしこはたがぞほり川殿の御ことにやととへばおほきおとゞの御文なりずいじんにあるそれがしなんとのにもてきたりけるをおはせずといひけれどなほたしかにとてなんおきてっげりと云いかにしてきゝ給ひけることにかあらんと思へども〳〵いとあやし又人ごとにいひあはせなっどすれ　ばふるめかしき人きゝつけていとかたじけなしはや御かへりしてかのもて來りけん御ずいじんにとらすべきものなりとかしこまるされはかくおろかにはおもはざりけめどいとなほざりなりや

堀川殿兼通公も九條師輔公の中男にて一條殿伊尹公謚を謙德と稱せしがさしつぎの弟にして兼家公には兄なりおほきおとゞに謙德公なり榮華に關白殿太政大臣にならせ玉ふと是也此しもがれの歌の文を太政大臣の御ずいじんが兼家公の御第へもて來たるを今はおはせずと家人の申せどもたしかなることにとてその文をさしおきてかへりしとなりいかにしてかの歌のことを一條殿の聞玉ひしにかとあやしまるゝをふるめかしき人とは父の年よれるをいふ父倫寧がそのことをきゝつけられて忝しはやかへりをとすゝめらるなりかくおろかにはおもはざりけめと云々は女君のなほざりにいかなる駒の歌をよまれしよりして公のまじらひ疎くなられしとの後悔をいへる詞なるべし

さゝわけばあれこそまさめ草がれのこまなつくべきもりのしたかは　女君

蓋兼家公の心の荒たるにたとへたるべし
とそきこえけるある人のいふやうこれがかへしいま一たびせんとてなからまではあそばしたゝなるをすゑなんまだしきとの給ふなるときえてひさしうなりぬるなんをかしかりけりりんじのまつりあさてとてすけにはかにまひ人にめされにたりこれにつけてぞ珍らしきふみあるいかゞするなどゝていゝるべきものみな物したりしがくの日あるやうけがらひのいとまなるころなれば内にもえまゐらましきを参りきてみいたしたてんとするをよせ給まじかゝなればいかゞすべからんいとおぼつかなきことゝありむねつぶれてさらになにせんにかとおもふことしげければとくさうぞきてかしこへをまゐれとていそがしやりたりければまづぞうちなかれけるもろともにたちてまひゝとわたりなさせて参らせてゝげり
賀茂の臨時の祭十一月下の酉日也試樂調樂とてあり試樂はちかし拾芥に申の日とあり義は文字の如しけがらひの遑なる比とは此冬もがさ流行こゝらの雲客うせ玉ふとの多ければ藤氏の親族多くて公の輕服のけがれのいとま有て參内めされねばこなたへ參て道綱の舞人たるを見出したらんと也
まつりの日いかゞはみざらんとて出たればまくのつらになでふこともなきびりやうげしりくちうちおろじてたてりくちのかたすだれのしたよりきよげなるかいねりにむらさきのおりものかさなりたる袖ぞいでたゞめるををんなぐるまなりけりとみる所に車のしりのかたにありたる人の家の門より六位なるもののたちはきたるふるまひいで來て前のかたにひざまづいてものを云におどろきて目をとゞめて見ればかれがいできつる車のもとにはあかき人くろき人おしこりてかずもしらぬほどにたてりけりよくみもていけばみし人々のあたりなりけりと思ふれいのことしよりはことゝくなりてかんだちめのくるまかいはりてくるものゝみなかれをみんなゝべしそこにとまりてとおぼしき所にしぢをつどへてたちたり我思ふ人俄に出たるほどよりはとも人などもきら〳〵しうみえたりかんだちめ手ごとにくだものなゝどさしいでつゝものいひなゝどし給へばおもたゞしき心ちす又ふるめかしき人もれいのゆるされぬことにて山ぶきのなかにあるをうちしりたる中にさしわきてとらへさ

せてかのうちよりさけなゞどとりいでたればかはらけさしかけられなゞどするをみればたゞそのかたどき許ばかりやゆく心もありけんさてすけにかくてやなゞどさかしらかる人のありてものいひつぐ人あり

まくのつら幕の列也原本にまたと誤るを沖本にて直せりびりやうげは檳榔毛也唱ふるにはびらうといふへししりくちは車の後口也かれが出來たる車とは兼家公の車のもとなり赤き人は五位黑き人は四位なるべしはや此時代にはふるきすがたの變じておほよそ今時の位袍なりしと見ゆかいゝりてはかき入なり我思ふ人とは道綱なるへしおもだゞしきは我面目たるをいふふるめかしき人は例の倫寧也さかしらがる人の今日女君も物見に出玉ひてあられしを助もて公へおとづれしらせるならん

やつはしの程にやありけんはじめて
かづらきやかみよのしるし深からばたゞひとことにうちもとけなん　女君

賀茂の八橋の名目未詳程にやとありてかつらきの歌をよめれば言主の社のわたりならん契本に續古今集神祇部加茂の氏久君をいのるたゞひとことの神のみやふた心なきほとは知らん

かへりごとひとたびはなかゞめり
かづらきのくもてはいづこ八橋のふみみてけりとたのむかひなし　同

原本に初五文字かへるさのとあり沖本によりてあらため前書も多く誤脱あり

こたみぞかへりこと
かよふべきみちにもあらぬやつはしのふみゝてきともなにたのむらん　公
とかきてしてかいたり

沖本能書にかゝすとにやと傍に注せり

又
なにかそのかよはん道のかたからんふみはじめたるあとをたのめば　同

此歌續後撰集戀二女につかはしける東三條入道前攝政太政大臣原本結句たのめると有

かへりごと
たづぬともかひやなからんおほ空のくもぢはかよふあとはかもあらじ　女君
まけじとおもひがはなゞめれば又

おほぞらの雲のかけはしなくばこそかよふはかなき
なげきをもせめ　公
ふるとしにせち分するをこなたになゞいはせて
いとせめておもふ心を年のうちにはるくることもし
らせてしがな　女君
かへりごとなしまたほどなきことをすぐせなゞどや
あげけむ
かひなくてとしくれはつるものならばはるにもあは
ぬ身ともこそなれ　同
こたみもなし
　又かへりごとなきなり
いかなるにかあらんとおもふほどにとかういふ人あ
またあゞなりときくさてなるべし
　とやかくいふ人あまたある故にさてかへりごとも
なきなるべしとなり
われならぬ人まつならはまつといはでいたくなこし
そおきつしらなみ　女君
かりごと
こしもせずこさずもあらずなみよせのはまはかけつ
ゝとしをこそふれ　公

としせめて
　せまりてなり
かへし
ふみゝれどくものかけはしあやうしとおもひしらず
もたのむなるかな　女君
又やる
なをゝらん心たのもしあしたづのくもぢおりくるつ
ばさやはなき　同
こたみはつらしとてやみぬ
しはすになりにだり又
かたしきしとしはふれどもさごろものなみだにしむ
るときはなかりき　女君
ものへなんとてかへりことなし
又の日許かへりことこひにやりたればそばの木にみ
きとのみかきておこせたり
やがて
我なかはそばみぬるかとおもふまでみきとはかりも
けしきばむかな　女君
　原本そはのとあり尾本により
かへりこと
あまくもの山のはるけきまつなれはそばめる色はと

きはなりけり　公
さもこそはなみの心はづらからめとしさへこゆるまつもありけり　女君
かへりこと
ちとせふるまつもこそあれほどもなくこえてはかへるほどやほどかは　公
原本結句ほとやとほかす倒且謬として姑如此す他本の釋も不詳故
とぞあるあやしなでふことぞと思ふ風ふきあるゝほどにやる
ふく風につけても物をおもふかな大うみのなみのしづこゝろなく　女君
とてやりたるにきこゆべき人はけふのことをしりなんとことでしてひとはついたるえだにつけたりたちかへりいとをしくなゞどいひて
わがおもふ人はたそとはみなせどもなげきのえだにやすまらぬかな　公
たそ一にさそとあり
なゞどぞいふめることしいたうあるゝことなくはたら雪ふたゝひ許ぞふりつる初のついたちのものども又

あをうまにものすべきなゞどものしつる程にくれはつる日にはなりにけりあすのものおりまきつゝ人にまかせなゞどしておもへばかうながらへつゝけふになりにけるもあさましうみたまなゞと見るにも例のつきせぬことにおぼほれてぞはてにける
みたまとはみたまのふゆなり今時は久しく世にたえて知り行はぬことなれど此折には行はれしと分明に今日記にしるされてしらるゝ也清少納言もゆづり葉の事をいふになべての月ごろは露きこえぬものゝしはすの晦日にしも時めきてなき人のくひものにもしくやとあはれなるに又よはひのふるはがための具にもしてつかひたんめるはいかなるにか云々兼好か比にははや都にはなきを東の方にはなほすることゝつれ〲草にしるせり
年のはてなれば夜いたうふけてぞ
此此日記の大結尾也次の一册は後人の附錄也さてあくれば天延三年道綱卿廿一歲也

かげろふの日記附錄解環

契沖曰此以下は後人續て書る物也余云今流布せる印本下卷の終に年の果なれば夜痛更てその詞につゞけてたゞきくなるとに乎に本のまゝかくのごとくありいたくふけてぞは本書の結語にてたゞきく以下は附錄せる者の言なるをひとつに書つゞけり附錄せる者さだめて其始は本書いたくふけてその下とりはなちて附錄などゝ標して佛名以下をしるせしならん今推察するに佛名の歌を書出さん前にたゞきくなることにと歟まゝにと歟しるしおけるならんさてその後轉寫ごとに誤字出來てそれを見る人誤ありと知て又後人の本のまゝなど付おきしなるへし故に今印本のたゝきく云々を删り去て附錄の二字を標出して佛名以下を記すと云

附錄

佛名のあしたに雪のふりければ

としのうちにつみけつにはにふる雪はつとめてのちはつもらざらなん

原本につみけすとあるはあやまりのしるけれは直しぬ

殿かれ給ひてのちひさしうありて七月十五日ぼにのことなどきこえのたまへるつか所ごとに

原本かれをかなとしほにをほとにしなとのとを脱す沖本につかを塚と釋す原本のとよをことにと直す今かれにしたがふて下文に毎にとあれば上の所々の々を省て塚所ごとにとせり

かゝりけるこのよもしらすいまとてやあはれはちすの露をまつらん

四の宮の御ねの日に殿にかはり奉りて

時に冷泉帝の四の宮敦道親王あれど今此は村上帝の四の宮爲平親王なり

みねの松おのかよはひのかずよりもいまいくちよそきみにひかれむ

原本結句ひかれて（書入云コレヨシ）とあり恐くはあやまる

そのねの日の日記を宮にさふらふ人にかゝり給へりけるをそのとしは后宮うせさせ給へりける程にくれはてぬれば又のとし春かへし給とてはしに

袖のいろかはれる春をしらずしてこぞにならへるのべのまつらん

ないしのかんの殿あまのはごろもといふだいをよみてときこえさせ給へりければ

ぬれぎぬにあまのはごろもむすびけりかつはもしほの火をしけたねば

蓋題は天の羽衣なるを海人のもしほ火ぬれぎぬゝとりなせり

みちのくにゝをかしかゝりける所々を繪にかきてのぼりて見せ給ければ

父倫寧の陸奥の任みちて上られける時のことなるへし

みちのくのちかのしまにてみましかはいかにつゝじのをかしからまし

可笑のかな岡の假字古くはひとつなればこそ秀句せられけれ後世のかなにてはうけがたし且をかしきのかなの證とするにたれり

ある人かものまつりの日もことゝせんとするにをとこのもとよりあふひうれしきよしいひおこせたりけるかへりことに人にかはりて

もこはむこなり

たのみずなみかきをせばみあふひはゝしめのほかにもあゝといふなり

おやの御いみにてひとつ所にはらからたちあつまりておはするをこと人々はいみはてゝ家にかへりぬるひとりとまりて

ふかくさのさとにふりぬるやどもなどとまれるつゆのたのもしげなき

余他本をみざりし時ふかくさにつゞける故やどはさとにやと案をつけおきしが契本にやとはやぶかと傍註せり此こもられし所いづくにや深草の註なければ草深くてやぶのごとくなれりとの義なるべし

かへし　　ためまさの朝臣

契本爲雅

ふかくさのたれも心にしげりつゝあさぢがはらの露にけぬへし

當代の御いかにゐのこのかたをつくりたりけるに

此時いつれの御代ときなりけるにやされば當代未詳いかは產後五十日をいへり猪は子を多く產かつ子をよくそだつるもの故に祝して用ゆるなり沖本に引く順家集云天元元年十月はじめの亥の日右大

臣の女御の火桶にもちひくだもの盛て內裡の女房につかはす大臣此火をけひとつ奉らせ玉ふ白銀してゐのこがめのかたをつくりてすゑさせ玉へる云々

よろづよをよばふ山べのゐの子こそきみがつかふるよはひなるへし

封禪書郊祀志皆云漢武登中嶽太室從官在山上聞若有言萬歲歌にも萬代とみかさの山ぞよばふなるあめのしたこそたのしかるらん今此下句うたがはしけれど契本もかくの如し

とのよりや へ山ぶきを「たてまつらせ」給へりけるに 書入云イカ、

たれか此かずはさためし我はたゞとへとぞおもふやまぶきのはな

詞花集雜五入道攝政八重山吹をつかはしていかゞみるといはせて侍りければよめる大納言道綱母と載たり

はらからのみちのくにのかみにてくたるをながあめしけるころそのくだる日はれたりければ

冲本はらから長能なり

かのくにゝかはくといふかみあり

書入云非なり白いへる注にて古今等にもあり

按に此一句は附錄せし人の又後人の注せし細書にやありけん神名帳に陸奥國白河郡河福麻河伯神社と冲本に注せり

わがくにのかみのまもりやそへりけんかはらけかり(くイ)(あイ)しあまつそらかな 長能

原本そらをそことあやまるかへし

けふぞしるかはくときけばきみがためあまてる神の名にこそはあれ

冲本尾本も結句なにこそありけれとす原本のまゝにてもきこえぬにしもあらねは本のまゝにせり

鶯柳のえだにありといふ題を

わがやどの柳の糸はほそくともくるうぐひすのたえずもあらなん

本鶯はとありイ本にしたかふ

ふのとのはじめて女のがりやりたまふにかはりて

ふのとのは道綱也一條院寬弘四年正月十八日東宮の傅に補せらる東宮は三條院なり道綱卿于時五十三歲なればかげろふの君は凡そ七十ばかりの年齡

ならん
けふぞとやつら〳〵またんわが戀ははじめもなきかこなたなるらん
　沖本になるへしとせり尾本は本のまゝ
たび〳〵のかへりことなかりければ時鳥のかたをつくりて
　原本にかたをうたとせり今イ本にしたかふイ本に又御かへりと御の字あり案にさならば上のの字は御の轉にて衍になるへしもし貴女にてありけるにや
とびちがふ鳥のつばさをいかなれはすだつなげきにかへさゞるらん
　イ本になげきのとあり
猶かへりことせざりければ
さゝがにのいかになるらんけふだにもしらばや風のみだるけしきを
又
たえて猶すみのえになき中ならばきしにおふなる草もがなきみ
　住吉に忘草をよめれはなり

かへし
すみよしの岸におふとはしりにけりつまんつまじは君がまに〳〵
　沖本に古今わかれをは山の櫻にまかせてんとめんとめじは花のまに〳〵これは下の句の句の法に同例にひけるのみ
さねかたの兵衛の佐にあはすべしときゝたまひて
　兵衛の佐は兼家公をいふ
少將にそおはしけるほどのことなるへし
　少將を原本に兩將と大誤實方は中將か極官なれはかくいへり亦案するに此一行を原本に上の詞につづけてかきしは前の河伯のことわりの如く本は注せしことにて細書すへき理なるに轉寫のものゝ所爲ならん
かしは木の森だにしげくきくものをなどかみかさの山のかひなき　實方
　かしはぎは兵衛の異名也時に兼家公も兵衛佐なりされば此かしはきは父倫寧をいふにはあらず此日記の上卷の初に父をさしていへるとはこゝは異なり八雲御抄にみかさ山大將中將少將も又同とのせ

玉ふさればみかさの山は實方自ら異名をいふてかしはぎに對せしなり

かへし

かしは木もみかさの山もなつなれはしげれどあやな人のしらなく

本かしはぎの今はイ本による下句本しげりとあれとも沖本にしげれかとうたがひをつく今はそれによる又しらなくをイ本にしらなくにともあり

かへりことするをおやはらからせいすときゝてまろこすげにさして

原本におやからはらと倒せしなりせいは制なり

うちそばみきみひとりみよまろこすけまろは人すげなしといふなり　實方

沖本云小大君集には此歌もろこすげとありこれまで上の實方云々よりひとつことなり

わづらひたまひて

みつせ川あさゝの程もしられじとおもひしわれやまづわたりなん

此新千載集に云右近大將道綱心ち例ならざりける比女に消息つかはしけるにかはりてよめる右近大將道綱母としてのせられたり腰の五文字原本不ニ分明ニ今新千載集のごとくす

かへし

みつせがはわれよりさきにわたりなばみぎはにわぶるみとやなりなん　女

かへり事するをりせぬをりのありけれは

かくめりとみればたえぬるさゝかにのいとゆゑ風のつらくもあるかな

わづらひ玉てよりこれまで一事なるへし此歌も道綱にかはりて女君の詠なるへしくものすをかくに如此をそへたり

七月七日

これ詞花集戀上さらにゆるぎもなき女に七月七日つかはしける大納言道綱とあり今此所に入れはこれも女君のかはりてよめるなるへし二首とも

たなばたにけさひくいとの露をおもみたはむけしきもみでやゝみなん

原本腰の句露をにもとし下の句多誤今詞花によりて正せり又原本ひくをイ本にかすとせり

わかるよりあしたの袖そぬれにけるなにをひるまの

なぐさめにせん

これはあした

これはの下イ本に八日の字ありさて原本にこれはあしたのと云詞を歌の前におけるは倒せり今こゝに直しぬ且あしたのの丶字を省ぬ

入道殿中納言ためまさの朝臣のむすめをわすれたまひにけるのちひかげのいとむすびてとてたまへりければそれにかはりて

かけてみし末もたえにし日影草何によそへてけふむすぶらん

此歌續後拾遺戀四東三條入道攝政かれ〴〵なるさまにみえ侍ける比五節のほとに日かけの糸むすびてとありければつかはすとて右近大將道綱母とあり今此に人にかはりてとありうたかはし

女院いまだくらゐにおはしまし丶折(ヲリ)八講おこなはせ給けるほうもちにはちすのずゞまゐらせ給ふとて

續後撰釋敎部に上東門院御さまかはりて後八講行はれける捧物調じ奉るとてと前書していれり今云女院は上東門院なり原本に八酒とあるは分明に八講のあやまりなり又さ丶げものとかなにかけり源氏等に捧物を多くかなにてほうもちとかけり故にそのごとく直せり齋院の御禊を此書にみそぎとかなにかきしたぐひにて何の考なく故實にわたらざる人の心まかせにうつしあやまれるたぐひなること知べしずゞは珠數也

となふなるみなのかずにはあらずともいかではちすの露にかゝらむ

原本となふなるなみのかずにはあらねどもはちすのうへのつゆになりなんとあり沖本續後撰によう てなほせりとみゆ且集にみなみとあるを沖本にみなかとしるせり是又げにもさあらましきことと今契沖にしたかひかれが如くになほしぬ

同(マチ)し比ふのとのたちばなを參らせ給へりければ

かばかりもとひやはしつるほとゝきすはなたちばなのえにこそありけれ

かへし

たちばなのなりものならぬみをしれはしづえなくてはとはぬとぞきく　道綱

本は第二句もりものならぬとあり今はイ本をとりてかけり下の句ももしくはしづえならでにてはな

くや姑く原のまゝにす
小一條の大將白川におはしけるにふの殿をかならずおはせとてまちきこえ給ひけるに雨いたうふりければえおはせぬほどにすいじむしたしくらをおほえときこえたまへりけるかへり事に
ぬれつゝも戀しきみちはよがなくにまだきこへすゐとおもはさらなん
此一件詞幷歌もきゝがたしえおはせぬほどにのつゞきに原本すいしむ雨いたうふりければえおはせぬ程にの數字は分明に衍なれば省きぬ又其餘冲本いづれも不分明一向に手をつけずして原本の如くつらねおく而已よがなくにはイ本がきにて本はよりなくにとあるこれはよがなくにてあるべしと改にたらはぬさまなれど後人のふと手がかりにもなるべくやといさゝかのことなれどこれらも捨るも恨みあるに似たればなり
中將のあまにいへをかり給にかし奉らさりければ
はちす葉のうきばをせばみ此世にもやどらぬつゆとみをぞしりぬる
かへし
はちすにもたまゐよとこそむすびしか露はこゝろをおきたがへけり　中將尼
あはたのみてかへり給とて
　粟田野なるへし
花すゝきまねきもやまぬ山ざとにこゝろのかぎりとゞめつるかな
故ためまさの朝臣普門寺に千部の經供養ずるにおはしてかへりたまふにをのどのゝはないとおもしろかりければ車ひきいれて
拾遺哀傷部爲雅朝臣普門寺にて經供養し侍て又の日これかれもろともに參侍けるついでにをのへまかりて侍りけるに花の面白かりければとしていれり原本に車ひきいれてかへり給にとありかへり給の一句誤あるやうたかはしければ衍にして删りさりぬ
たきゞこることはきのふにつきにしをいざをのゝえはこゝにくたさん
歌は集に同じ小野なれば斧にそへたり
こまくらべのまけわざとおぼしくてしろかねのうりわりがたなをして院にたてまつらんとし給ふにごの

けにうたんとて攝政殿より歌きこえさせ給へりければ

うりは瓜なり今世ふりと書はいならず原本にうりわりかをしてと有分明にたなの二字を脱したれは加へぬごのけは碁笥なり蓋兼家より院に奉らんとし玉へしを攝政殿の乞によりその銀の瓜刀を碁笥のかざりにうちそへられし其由の歌を女君へ攝政殿の乞せられたるならん

ちよもへよたちかへりつゝやましろのこまにくらべしうりのするゑなり

山城のこまは瓜所なればこまくらべのまけわざに奉らるべき瓜刀の行末となり又碁を期にとりてちよをまつ心もあるへし爪刀もきりものなればたちかへるの詞もまうけたるにや

衛のところに山里にながめたる女ありほとゝぎすなくに

都人ねでまつらめやほとゝぎすいまぞ山べをなきていづなる

この歌は寛和二年歌合にあり

拾遺集夏寛和二年内裡歌合にとあり原本下句のとまり鳴てすぐにと今契本に拾遺の如くす此歌清輔袋草子に郭公秀逸五首の内へ入れり

法師の舟にのりたる所

拾遺集雜下屏風に法師の舟にのりてこき出たる所とあり

わたづみはあまの舟こそありときけのりたがへてもこぎいてたるかな

原本にこぎてけるかなとあり

とのかれ給てのちかよふ人あじべしなゞどきこえ給ひければ

いまさらにいかなる駒かなつくべきすさめぬくさとのがれにし身を

原本いざゝらばと誤る此歌已に日記の内にみゆうたあはせにうのはなうの花のさかりなるべし山ざとのころもさらせるをりとみゆるは

原本にさほせると誤るとしてもみゆればとせり

ほとゝぎす

ほとゝぎすいまぞきわたる聲すなるわがつげなくに人やきくらん

あやめぐさ
あやめぐさけふのみぎはを尋ればねをしりてこそか
たよりにけれ
イ本にけれをすれにつくる
ほたる
さみだれやこくらきやどの夕ざれはおもてるまでも
てらすほたるか
イ本たぐれとあり
とこなつ
さきにけるえだなかりせばとこなつものどけき名を
やのこさざらまし
かやり火
あやなくややどのかやり火つけそめてかたらふむし
のこゝろをさけつる
せみ
おくるといふせみのはつこゑきくよりぞいまかとを
ぎのあきをしりぬる
五文字イ本におつるとあり
なつ草
こまやくる人やはくるとまつほどにしげりのみます
宿のなつくさ
原本人やわとかなあやまる
こひ
おもひつゝこひつゝはねじあふとみるゆめはさめて
もくやしかりけり
玉葉戀三にあり原本ゆめをさめてはとあり今ヨ[illegible]
のごとくす
いはひ
かずしらぬまさごにたづのほどよりはちぎりそめけ
んちよぞすくなき
こゝろえぬところ〲は本のまゝにとかけり賀の歌
は日記にあれはかゞず
これらも附錄者の又後人の筆としらる其附錄者は
女君のよしある人ならん歟そのしるせしことば往
々たふとめるさま見ゆ

題遊糸日記解環後

勢語源語之類行二于世一已久矣而其文雖二富艶可レ玩其
事皆空語寓言淫褻數倫戲謔爲虛唯玩二其辭一則可也何
至三尙レ之之甚令二婦女一吟誦之以爲二女範一乎方二天曆
之聖代一人物盛興才女如レ雲有二藤倫寧女者一濟閑貞靜

才貌絶倫曹姑之文王嬙之美兼而全レ之愼レ事則有二敬姜之德一教レ子則有二孟母之賢一然而命蹇數奇賢而不見荅幽怨同二婕妤一悠思似二莊姜一於レ是乎作二此記一其爲レ辭也艶而不レ淫怨而不レ怒體直而義正可レ謂二女範之寶玉一矣而此書亦不見荅于世且歷年之久錯簡脫文亥豕焉馬不レ可レ句者居多是以人唯知二其名一耳焉知三其爲二寶玉一哉荻軒坂先生講經授業之暇涵泳於此書數十年行年八十有七終校二正一本一且爲二之註解一於レ是賓心再起玉瑕復全嗚呼先生之有レ勞二於此書一豈可下以二數言一盡上之乎在二觀者察一レ之夫古人之著レ書猶不レ能レ無二短長一大抵富二於辭一者必貧二於義一盛二於義一者或衰二於辭一後之玩レ之者宜下棄二其短一而用上其長一故勢語源語可レ取二其辭一而不レ可レ取二其義一若夫辭義兩取二左右具一宜三唯在二此書一乎是此書之所三以千載不朽一而　先生之所三以爲二之註解一也

癸卯冬十二月

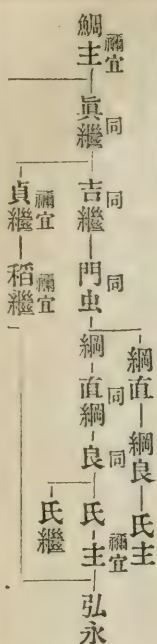
阿波　今城世綱謹識

方丈記抄
方丈記流水抄
方丈記細説
全

長明方丈記抄

小野山優婆塞槃齋記

此題號方丈記とある本もあり長明方丈記と書本もありいつれか正本とすへきとならは長明方丈記とあるを用へき也玄疏に別名通名の二にわけて維摩羅詰所說經を釋せり是に准するかゆへに長明方丈と云は別名なり記と云は通名なりいかんとなれは長明方丈と云は是にかきりたる名なり記と云は是にかきるへからさるかゆへ也扨此題號にも人と法を以て心得へし長明と云標レ人也方丈記と云は標レ法也玄疏云非レ人無ニ以弘レ法非レ法無ニ以顯レ人といへることく長明にあらすは方丈の心をひろむる事なく方丈の事をかゝすは長明か心あらはるましけれは此題號にも人法ならへて長明方丈記と云へきことはりなるへし

長明が系圖諸抄にあり不及記歟

鴨御祖社系圖

禰宜鯛主―同眞繼―同吉繼―同門虫―綱直―綱良―氏主
門虫―直綱―良―氏―禰宜主―弘永
眞繼―禰宜貞繼―禰宜稻繼
良―氏繼

氏人維方―氏人眞助
―禰宜津滄丸

祝禰宜弘雄 仁明天皇御宇同―祝永―禰宜主―祝禰宜時主
貞觀十六年ニ禰宜千繼門丸外從五位下ニ叙
―同千繼―初ハ祝禰宜眞吉―禰宜惟秀 宇多院ノトキハシメテ禰宜祝別々ニナル 昌泰三四月外從五位下叙
―禰宜正秀 村上御時―同清明 圓融院一條院―同久清 初神主トナル
―禰宜惟清 後朱雀院―惟任―河合禰宜經貞―同惟貞―五位貞長―清長―清光―清繼
貞長―貞重
清長―清眞
―惟時 辰イ 殺害ノコトニヨリ社参チトヽメラル
―禰宜惟道―禰宜惟季―同禰宜正四位上正五位下使禰宜正四位上季長―季繼―有季―季平―保季 鳥羽院 崇德院 母禰宜惟長女
―有繼―道平
―禰宜長繼―五位長守―眞平
―長明 號南太夫

方丈とは淨名の室の名なり長明外山の草庵の名とせ

るなり名を用るのみにあらす庵のせはき體をもなす
らへたる也せはさをなすらへたるのみにもあらす心
をも用たると見えたり
釋氏要覽云始因ㇾ唐顯慶年中勅ニ差衛尉寺承李義表前
融州黄水令王玄策ニ往ニ西域ニ充使至ニ毘耶黎城ニ東北四
里許ニ維摩居士宅示ㇾ疾之室遺ㇾ趾疊ㇾ石爲ㇾ之王策躬
以ㇾ手板縦横量ㇾ之得ニ十笏ニ故號ニ方丈ニ
弘決一云淨名空室表ニ常寂光ニ十方諸佛常集ニ其中ニ是
故入者唯嗅ニ佛香ニ
觀經疏六云常即法身寂即解脱光即般若是三點不ニ縦
横並別ニ名ニ秘密藏ニ諸佛如來所遊居處眞常究竟極爲ニ
淨土ニ庵の作やうを方丈に准することをは要覽にて
しるへし補注にもあり心を寂光に表することは弘決
にてしるへし一記とは上古にては假名にてかく事は
なきを紀貫之唐の文の體にならひて古今の序をかき
土佐日記をつらねしよりかなの序記と云ことに見え
たるなるへし記の字は居吏切去聲説文云疏也謂ニ一
々分別記ニ之
方丈淨名玄云問云三藏摩訶衍皆明ニ三假ニ二經之異云
何分別答曰若隨ㇾ情明ㇾ假則是聲聞經所說若就ㇾ理明ニ
假皆如ニ夢幻ニ即是摩訶衍所說此經訶ニ陵波雖ニ具明ニ
此三假之相ニ也問ム二乘從ニ三假ニ入空若爲分別答曰
有人言聲聞多用因成假ニ縁覺多用相續假ニ菩薩多用相
待假ニ今謂三藏所明三假散別隨ㇾ便入ㇾ理若ニ摩訶衍所
ㇾ明三假ニ皆如ニ幻化ニ三乘觀ㇾ此同入空也

此記は慶保胤か池亭記の體をうつせりと見えたりこ
のうへに記のうちに池亭記の詞をかり用ひけること
おほしされと保胤は身官人なり業は儒者なり所居は
市朝なり蓮胤は身隱者也業は佛者也所居は山林なり
故に保胤か樂ところせはし蓮胤かたのしふかたはひ
ろくしてたのしめり
此記淨名の室を用て名とし世にある人の身と住家の
あたなるをみて新空觀をさとるを體とし極樂淨土に
往生するを宗とし世の人の身と住家のいつれもある
物と思ふ常見をやふるを用とし世の人の身とすみか
の無常なることをしらはかく世をすてゝねかふへき
ことをしらするを敎とせり
此記は四段に分てみるへし行水と云より又かくのこ
としといふまて一たん玉敷のみやこの内といふより
いかなるわさをしてしはしもこの身をやとし玉ゆらも

心を憑むへきといふまて一たん我身父方の祖母の家
を傳てと云より大原山の雲にいくそはくの春秋をか
へぬるといふまて一たん爰に六十の露きえかたに及
てといふよりすゑまて一たん也一たんめには所詮の
理をのへ二たんには法說譬說因緣說の三周ノ說法に
准てはかなきことはりをかけり因緣說の下に大小の
三災のことをあり昔物語に合せてかけり三段には
我身のむかしのことをのへて領解の心にかけり四段
に方丈の記の趣をのへたり文筌の叙事十一法のうち
の婉叙に一たんはあたり直叙に二段はあたり略叙に
三たんはあたり正叙四段あたる也婉叙とは設レ辭深
婉レ事寓二於情理之中一也直叙とは依レ事直叙不レ施二曲
折一也略叙とは語簡事略備見首尾也正叙とは事得二文
質詳略之中一也末をこの法に合てみるへし

行川のなかれはたえすしてしかも本の水にあらすよ
とみにうかふうたかたはかつきえかつむすひて久し
くとゝまる事なしよのなかにある人とすみかと又か
くのことし
是まて發旦の詞也序也是は二序由序述序のなかに
ては述序也述序は正說之弄引となるよし云て宗とい
ふへき事を先述て後にいふことをひきいたすを云
也二この詞に人とすみかとのはかなき大旨をのへて
おくにそのことはりをいへり文筌云起端有八法其
一曰原本若或原二理之本一或原二事之本一或原二古之
始一云々此記には原本を用て是をおこせりいふ所
の理の本をたつねていひいたせる也〇行水のなか
れはたえすして　とは人家の世界にたえすあるに
たとふる也〇しかも本の水にあらす　とは人家の
たえすしてあるかとみれは昔より常住不變にして
あるはなしいくたひもつくりかへし家ともなりと
たとふる也このたとふる心を思ふに人間の實有の
相に着して常見をおこすを諸法は空なりとしらせ
んか爲也このことはりをたとるゆへに住家に心を
とめす方丈の分際なる事をいはんための序也この

たとへは成實論にある三假浮虛食の第二の相續假と云を思ひよれると見えたり○よとみにうかふうたかたはかつきえかつ結ひて久しくとゝまる事なし　とは人の身のはかなきことにうたかたをたとへたりかつ消かつ結てとはあるはなくなきはかすそふ生死の轉變の體にたとへたり久しくとゝまる事なしとはいよ〳〵はかなきことをいへりこのたとへは維摩經のたとへを用たると見えたりうたかたは水のあはのことをいへり
歌に「こゝにきえかしこに結ふ水の淡のうき世にめくる身にそ有ける三假事因成假者諸法は因緣和合有二其體一離二因緣一其體空也相續假者念々相續假有二其體一如二流水前後相續一故水不レ絕似其體空也相待假者諸法相待假有レ法待レ長有短待レ小有大離二長短大小一虛無無レ體也　維摩經方便品云諸仁者如レ此身明智所レ不レ怙是身如下聚沫不上可二撮摩一是身如レ泡不レ得二久立一云々
此文ともにて玄るへし成實論とは空理を說て訶梨跋摩と云人の作る論也用二初番四悉旦一造二成實論一通二三藏見空得道意一也矣と云義にもあることく空

門に此觀を以て諸法を極微に折破するゆへ也さるによりて住家を空するに用たる也維摩玄義にも此經訶二優波離一具明二此三段之相一也とあり玄かれは便ある也維摩經のたとへも空の理をいへり肇曰撮摩聚沫之無レ實以喻レ觀二身之虛僞一明二空義一也不レ似レ爲二無常義一然水上泡以二虛中無一レ實故不レ久立猶空義耳とあり故に身の無常にして空なることにたとへたり○うたかたの事袖中抄十一卷にくはしく色々の說を擧たり爰にては水の淡の事也顯云古歌のよみやうさま〳〵也或はひとへに水の淡の心にてよみとをせり「庭たつみみもあへすきゆるうたかたの哀かなしき天の下哉」「うき事は世にふる物を瀧つせにまさるうたかたたえん物かは如此一義をいたせり○又かくのことし　といへるはたとへをうけて結成することは也起承の文法なるへし
玉玄きの都のうちに棟をならへいらかをあらそへるたかきいやしき人のすまゐ代々をへてつきせぬ物なれとこれをまことかとたつぬれは昔しの家はまれなりあるは大家ほろひて小家となるすむ人もこれにお

なし所もかはらすおほかれといにしへみし人は二三十人のなかにわつかにひとりふたり也あしたに死夕にむまるゝならひたゝ水のあはに似たりけるしらすむまれしぬる人いつかたよりか來りいつかたへかさる又しらすかりのやとりたれかためにか心をなやましなにゝよりてか目をよろこはしむる

○玉敷と云よりこれまては身と栖とのはかなき事をたゝちにいへり是は三周の説法にあてゝかける也此一段は法説にあたる也三周の説法と云は佛上中下の根性に對して説法し給ふ也法花經の方便品は法説なりこの品には直に妙法の道理をときて上根の舍利佛をさとらしむ次に譬説一周は譬喩品也此品のはしめには法説の述成授記あり是まて舍利佛に對しての説法也その次に三車一車のたとへをかりて三乘は終に一乘に歸する趣をのへて中根の須菩提迦旃延伽葉目連にさとらしむ信解品藥草喩品まても譬の述成授記也次に因縁説一周は化城喩品也此品は過去久遠劫に大通佛と云如來の法花をとき給を聞し人の中比退屈の思をなして小乘を修行せしか今亦釋尊の説法を聞て回心向大の聲聞となれる因縁を説て下根千二百人に次第に授記し給より三周の説と云事あり此説相をかりて源氏物語帚木の卷の雨夜の品定をもかける也さるによりて長明身と住家の定なる事を此三周の説相をかりてあらはせりかゝる事は上根中根下根の人をもらさすこの心をしらせたき故なり故に疏四云但上根智利聞レ法得レ悟中根處レ中聞レ譬得レ悟下根居レ下聞レ三聞レ悟矣とあり○玉しきの都の内とは此一句依所をいへり都をほめて玉しきとはいへり○棟をならへ　此一句都の内に人家の多きをいへり○いらかをあらそへる　此一句都の内に有人家とものゆゝしきを結構にしたるをいへり○高きいやしき人のすまゐ代々をへてつきせぬ物なれと　此は都の内の人家品と久事を云り序の詞の行水のなかれはたえすしてと云をうけてかけり○是をまことかとたつぬれは昔の家はまれ也　此は人家の無常の體を云り○あるは大家ほろひて小家となる　此は人家の昔のはまれなる相を云り此詞等は序分のもとの水にあらすと云にうけてかけり○すむ人も是に同し此詞は死前生後也○所もかはらすおほかれと

此は都の有所と人との數不變にしてある事を云り○いにしへみし人は二三十人かなかにわつかにひとり二人也　此は不變のことを前に云て人身の變易しやすきことを云たり○あしたに死夕にむまるゝならひたゝ水のあはに似たりける　此にはいにしへみし人のなきいはれを云て水のあはに似たると序分をうけたる心を結したりあはの事はかりいひて水のことはいはさりしは影畧互顯して水のたとへも是にてあらはせり○しらすむまれしぬる人いつかたより來りいつかたへかさる又しらすかりのやとり誰か爲に心をなやましなにゝよりてか目をよろこはしむる　此詞は生死のありさま家をいとなむありさまを心に付てなにことそとさとりしれといふ事也さとりしらは身と家とに着すへきにあらすといふ心なり領解の心なるへし　傳教釋云伏以生死二法者一心之妙用有無之二道者本覺之眞德所以心者無來無去之法心者周遍法界之神也故生時無來死時無去無來無去心施二有之用一心即現二六根之體一以レ之名レ生周遍法界神施二空之德一神即亡二五陰之身一指レ之曰レ死則無來妙來無生之眞生無去之圓去無死之圓死也生死體一有空不二如是知見如是觀解心佛顯レ體生死自在也哀哉六道衆生悲哉三界凡夫離レ生徒生故不レ知離レ死空死死由不レ覺本有無作之生死無始無終常住有無之心體非二斷見一非二常見一若云レ離レ生三世諸佛出二於世間一不レ可レ利二益衆生一若云レ止レ死十方如來入二於涅槃一不レ可レ受二寂滅之樂一勿レ欲レ住生死離レ忍輪之體早離二二見苦・或除二自他共無因之四計一或愈二作止任滅之四病一是生死自在之法藥臨終正念之秘術也行者常能思念勿レ怖二生死一矣

そのあるじとすみかと無常をあらそふさまをいはゝ朝かほの露にことならすあるは露おちて花殘れりのこるといへとも朝日にかれぬあるは花しほみて露なをきえすきえすといへとも夕をまつことなし

此一段三周の說法の譬說にあたれりたとへをとり身と住家のはかなきことをしらせたり○其あるしとすみかと無常をあらそひ　此言葉たとへの體を先云り○無常とは　攝大乘論云有二三種一一念々壞滅無常二和合離散無常三畢竟如是無常唯識論疏釋無常有二二義一一有生滅體是無常二無他常故名二無

常ニ○さるさまをいはゝ此詞たとへをさとしたる也()朝かほの露にことならす此詞譬のことはりの相叶ことを先いへりあるは露おちて花殘れり殘るといへ共朝日にかれぬ此詞たとへの姿をことはりたりあるしの人は死て住家殘るといへとも殘りもはてす住家もやかて無常なりといへりあるは花えほみて露にもきえすきえすといへとも夕をまつことなし此詞住家はなくなりて主は殘る事あれとも殘りもはてす主もやかて無常なりといへり就ニ譬喩ニ分喩全喩と云事あり法譬相對するとき以レ譬顯ニ法體ー分ニ云ニ分喩ニ了ニ法全體ニ云ニ全喩ニ也但學者の相傳に一切譬皆分喩といへり妙樂一處の釋には以レ事喩レ法皆是分喩と有亦約ニ行者得入初門ニ一切譬皆分喩也悟至極法體外不レ論ニ事法ニ故皆全喩也ともいへり妙樂の釋の心ならは此記は分喩なるへし

をよそ物の心をえれりしより四十あまりの春秋ををくる間に世の不思議をみる事やゝたひたひになりぬ

この詞因緣の昔物語の心をいへり不思議と云心は小大三災のすかたに思合するゆへなるへし凡物の心をえれりしよりこの凡とは大概といふ心なり物の心をえるとは事々物々のことはりをわきまへたるなるへし大學に致知有格物と云格物の心なるへし○四十あまりの春秋ををくる間に　此詞物の心をえりてより此かたの年數をいへり記の文體也○春秋　と云は一年の事也春に夏をこめ秋に冬をこめてかくいへる常のこと也魯史記を春秋と云もこの心也()世の不思議をみる事たひたひになりぬ　此詞四十年あまりの間に有しそのさまを云てみな不思議の事そとしらせたりさて次下に不思議の事のすかたをのへたり

去安元三年四月二十八日かとよ風はけしく吹てしつかならさりし夜いぬのときはかり都のたつみより火出來ていぬゐにいたるはてには朱雀門大極殿大學寮民部省まてうつりて一夜かほとに灰となりにき火本は樋口富小路とかや病人をやとせるかりやより出來けるとなんふきまよふ風にとかくうつり行ほとに扇をひろけたる如くすゑひろになりぬ遠き家はけふりにむせびちかきわたりは一向ほのをゝ地にふきつけたり空には灰をふきたてたれは火のひかりに映してあ

まねく紅なるなかに風にたえすふききられたるほのほ飛かことくにして一二町をこえつゝうつり行その中の人うつゝ心ならんやあるひは煙にむせひてたふれふし或は炎にまくれてたちまちに死ぬあるは又わつかに身ひとつをからくしてのかれたれとも資財をとりいつるにをよはす七珍萬寶さなから灰燼となりにきその費へいくそはくそこのたひ公卿の家十六やけたりましてその外數しらすすへて都のうち三分か一にをよへりとそ男女しぬる者數千人馬牛のたくひ邊際をしらす人のいとなみ愚なるなかにさしもあやうき京中の家をつくるとて寶をついやし心をなやますことはすくれてあちきなくそ侍るへき

此一段因縁說に大小の三災のすかたを用るその一なりこれは火災をいへり三災の次第本文にあはさることは此記には時代の次第にまかせてかける故なりそのことを思准たるまてこそあれしかとその三災の事にてはなけれはなるへしとみるへし三災と云事は三界義云問小三災者何乎答小三災者一饉災二病災三刀兵災也問人壽幾時災起乎答依劫章意者人壽三歳時飢饉災起廿一歳時疾病災起十歳

時刀兵災起問此三災起間各經幾時乎答飢饉災起經七年七月七日疾病災七月七日刀兵災七日七夜也問爾者此三災相云何答飢饉災者人壽減至卅歲時人身長四尺短者三尺人多貪欲常行十惡若行一善衆共誹咲無有一善人爾時天龍忿責不降甘雨由是五穀絶種人遭飢饉但食稊糠粃以自連命糠粃既盡穿鑿地下瞻部州唯遺一萬人爾時空中自然有聲告言何不生厭離諸聞此聲人皆念三寶故天龍降雨飢饉微息壽雖未增人數漸增二疾病災相者人壽二十歲時身長三尺短者二尺五寸薄福德故廣行非法非人侵嬈疾病流行亂神奪命不可救療閻浮所遺人且唯一萬人也如前空中有聲告言何不生厭離聞大音已微生善心故疾病止息三刀兵災相者人壽至十歲時人身一尺短者一尺一切珍寶皆滅亡地上多有荊棘皆如刀劒手執草木悉成刀劒但欲相殺害猶如獵師見群鹿爾時空中亦有聲言何不生厭離聞此音已乃至生怖畏漸修十善故令漸增問此三災餘州亦有乎答東西二州無根本災但小飢餲身羸劣嗔恚等以此爲災北州都無彼災唯南州具

有二此三災一問大三災者何乎答大三災者一火災者二水災三風災也問此三災壞二何處一乎答火災能壞二欲界五趣幷色界初禪一此中爲レ火所二焚燒一故水災能壞二二禪已上一此中水災所レ便レ爛故風災能壞二三禪已下一此中爲レ風所二飄散一故問此三災壞劫時有情世間及器世間中何先壞乎答先壞二有情世間一次壞二器世間一問爾者壞二此有情及器世間一各經二幾時一乎壞劫之間惣經二二十增減一初十九劫壞二有情一後一劫壞二器世間一（有情世間々所居有情也器世間山河大地等外器世間也）問水火風起時爲二同時壞一爲二異時壞一乎答異時非二同時壞一也○物の空なることはかりをいへる故に三災の相をかりてかけると見えたり○去安元三年四月二十八日かとよ　安元は高倉院御宇の年號也年代記には安元は二年にて改元ありて治承に成たると見えたり三字は二字歟又は治承元年に大極殿燒亡すとあれは不審なり猶可尋　此詞時代をまつ擧たり○風はけしくふきてしつかならさりしよ　此詞かいをなすものゝ體を云り○宮古のたつみより火いてきていぬゐに至る　此詞害せらるゝ所の大概を擧たり○朱雀門大極殿大學寮民部省　拾芥云長安南面皇城門是謂二朱雀門一又大明宮南面五門正南曰二丹鳳門一夫丹鳳朱雀其義一然則以三其在二南方一故謂二之朱雀一乎○大極殿　拾芥云朝堂院正殿各八省院又南之最大輔敏行中將額書○大學寮　拾芥云二條南朱雀門東神泉苑西○民部省　拾芥云改二仁部省一宮城内太政官南美福大路西　如此一々に云ことは害の大にして禁中迄及ふことを云り○一夜か程に灰となりにき　此詞火の災難のすみやかなる事を云り程をへたる事にもあらす一夜かほとにかくのことしと不思議のありさまを結したり○火本は樋口富小路とかや病人をやとせるかりやよりいてきけるとなん　此詞火出來るもとをのへたり如レ此こまかにしるす事記の文體也樋口通は五條通と六條坊門通間也横道なりとみの小路は竪也○吹まよふ風にとかくうつり行ほとに扇をひろけたるやう（コトク）にすへひろになりぬ遠き家は煙にむせひ近きあたりはひたすらほのほを地にふきつけたり　此詞たとへをとりて火の盛なることを云り○火のひかりに映してあまねく紅なる中に風に堪すふきなられたるほのほ飛かことくに一二町をこえつゝ移行其の中の人現心ならん

や或は煙にむせひてたふれふし或は炎にまくれてたちまちにしぬ　此詞火の難人にをよふ事をいへり○或は又わつかに身一をからくしてのかれたれとも資財をとりいつるにをよはす七珍萬寳さなから灰燼となりにき其費いくそはくそ　此詞火の難資財にをよふことをのへたりからくしてとは辛苦の字也辛勞してと云心也七珍とは金銀琉璃頗梨瑪瑙金剛等を云歟○このたひ公卿の家十六燒たりましてその外かすしらすすへて都の中三分か一にをよへりとそ　此詞火の難天上地下にをよふことをのへたりとそとは人傳に聞たるよし也源氏物語にある筆法也○男女死ぬるもの數千人馬牛のたくひ邊際をしらす　此詞火難有情に及ふ事を云り○人のいとなみおろかなるなかにさしもあやうき京中の家をつくるとてたからをつゐやし心をなやます事はすくれてあちきなくそ侍るへき　此詞は火の事を云て人をいましめてかくいへり事を記して論をかく事文の一體也あちきなくと云は無味と日本紀にかけりすさのをのみことと日神にあたをなし給とき諸の神達のよからぬわさをし給とていへる詞なれはよからぬと云詞なるへし或神代抄には食の味をもおほえぬほとよからぬことゝ云心なりとなん

又治承四年卯月二十九日の比中御門京極のほとより大なる辻風をこりて六條わたりまていかめしく吹ける事侍りき三四町をかけて吹まくる間に其中にこもれる家とも大なるもちいさきも一としてやふれさるはなしさなからひらにたふれたるもありけたはしらはかり殘れるもありまた門のうへを吹はなちて四五町かほとにをきまた垣を吹はらひて隣とひとつになせりいはんや家のうちのたからかすをつくして空にあかり檜皮ふき板のたくひ冬の木の葉の風にみたるるかことしちりをけふりのことく吹たてたれはすへてめもみえすおひたゝしくなりとよむをと物いふ聲もきこえす地獄の業風なりともかくこそはとおほえける損亡するのみならす是をとりつくろふ間に身をそこなひかたわつけるもの數をしらすこの風ひつしさるのかたにうつりゆきておほくの人のなけきをなせり辻風はつねにふくものなれともかゝる事やはあるたゝことにあらすさるへきものゝさとしかなとそ

うたかひ侍りし
この一段風災を思ひよせたり〇又治承四年卯月二十九日の比　治承も高倉院の御宇の年號也〇中御門京極のほとより大なる辻風をこりて六條わたり迄いかめしく吹ける事侍き　中御門とは一條通より下る六めの横通也京とは東のはしの竪通也風災の難の標する詞也〇三四町をかけて△△△風にみたるゝかことし　此詞は風の災のさかんなる事を述たり〇すへてめも見えす△△かたはつける者數をしらす△△おほくの人のなけきをなせり　此詞風災の人に及事を述たり〇地獄の業風なりともかくこそと覺えけるとは　風のあまりなるによりて地獄を思ひ合て歎様也　地獄とは　三界義云問五趣中且何名ニ地獄一耶答梵云ニ捺洛迦一此云ニ苦器一造ニ惡業人一隨ニ苦器中一受ニ諸苦一故云ニ苦器一婆沙云多分在ニ於贍部洲下一過ニ五百踰繕那一乃有ニ其獄一故地下獄非レ適レ今也其字從レ言從ニ二犬者所ニ以守一也若ニ此方獄一皐陶作レ告也〇業風とは妙樂云情非情並是共業所感而爲ニ心變一籤云八寒者一頌部隨此云レ飽謂寒風逼レ身生レ飽云々　此文ともにて心得へしこのよにてつくれるつみによりては寒地獄の第一の地こくへおつる也そのことくにもおとるましき風也といへる心也めも見えすおひたゝしくなりとよむ音物いふこゑもきこえすとかけるもちこくのありさまを思ひよせたる歟へしいかんとなれは文句四云初皆正ニ苦受レ苦時痛聲不ニ復可ニレ分別一妙樂在云初入ニ地獄一如ニ本有語一後時但作ニ波々等聲ニ不ニ復可ニ辨ともいへり地獄におちぬるものは物いふこゑはしめはこのよにてのことくにて後は辨かたしとあるによりていまこの風にて人の物云もきこゑぬに思ひよそへたるなるへしとよむとは動字なり〇辻風はつねにふく物なれと△△△うたかひ侍りし　此詞風よの常ならぬことを評論して不思議をみ侍しと云詞を結成したる也

又おなし年のみな月のころかとよ俄に都うつり侍き　いと思ひの外なりしことなり大かたこの京のはしめをきけは嵯峨天皇の御時より都とさたまりにけるより後すてに數百年をへたりことなくてたやすくあらたまるへくもあらねは是をよの人たやすからす愁あへるさまことはりにもすきたりされととかくいふか

ひなくてみかとよりはしめたてまつりて大臣公卿こと〳〵くうつり給ふ世につかふるほとの人たれかひとり故鄉にのこらん官位に思ひをかけ主君のかけをたのむほとの人は一日なりともとくうつらんとはけみあへりときをうしなひ世にあまされて期する所なきものは愁なからとまりをり軒をあらそひし人のすまゐ日をへつゝあれ行家はこほたれて淀川にうかひ地は目のまへに畠となる人の心みなあらたまりて只馬くらをのみおもくす牛車を用とする人なし西南海の所領をねかひ東北國の庄園をはこのますそのときをのつからことのたよりありて攝津國の今の京にいたれり所のありさまをみるにその地ほとせはくて條里をわるにたらす北は山に傍てたかく南は海にちかくて下れり波の音つねにかまひすしくして鹽風ことにはけし○內裏は山の中なれは彼木丸殿もかくやと中々やうかはりて優なるかたも侍りき日々にこほちて川もせきあへすはこひくたす家いつくにつくれるにかあらん猶むなしき地はおほくつくれる屋はすくなし故鄉はすてにあれて新都はいまたならすありとしある人みな浮雲の思ひをなせりもとより此所に居るものは地を失ひてうれへ今うつりすむ人は土木にわつらひあることをなけく道のほとりをみれは車に乘へきは馬にのり衣冠布衣なるへきは直垂をきたり都の條里忽にあらたまりてたゝひなひたるものゝふにことならすこれは世のみたるゝ瑞相かときゝをけるもしるく日を經つゝ世の中うきたちて人の心もおさまらす民の愁ついにむなしからさりけれは同年の冬なをこの京にかへり給ひにきされとこほちわたせりし家とものはいかになりにけるにかこと〳〵くもとのやうにもつくらすほのかにつたへ聞にいにしへのかしこき御代にはあはれみをもて國を治めすなはち御殿に茅をふきて軒をたにもとゝのへす煙のともしきをみ給ふ時はかきりあるみつきものをさへゆるされき是民をめくみ世をたすけ給によりてなり今のよの中のありさまむかしになそらへて知ぬへし

○又同　年の水無月の比　治承四年なるへし○俄に都うつり侍きいと思ひの外なりし事也　此詞此一たんの大むねを標したり此一段は刀兵災を思ひよせたると見えたり段のおもてに軍のことは見え

ねとも源平の亂もこの都うつりなとより事おこりたれは則刀兵のことゝみるも相違あるましくや又は都うつりは天子の御はからひにて代々ありしことなるに此たひは武家よりかく我まゝにしけれは武家は刀兵をことゝする家なれは刀兵のことにみるもたかはすや侍らんその上に所々のことはに刀兵の趣みえたり俄といひおもひのほかなりしと云詞おもき心あり心を付へし入道か我まゝをふるまひ民の愁なることをにはかにと云にてことはり不思議なると云心を思ひのほかと云ことはにて結成したり○大かた此京の初をきけは△△△とはりにも過たり　此詞都うつり理にそむくゆへに世の人の愁となることをいへり此京は桓武天皇延暦十三年に都を山州平安城にうつすとあるにさかといへる事不審成事也猶可尋されとさたまるといふ詞に心あるへき事歟桓武の御時はいまた京成就せさりしにさかの御代となりて都首尾したるゆへにさかんなる時をさして定まりてといふなるへし數百年と云はさかより高倉迄百年にはあらす三百八九十年をへたり大數をとりて數と云字を置たるなるへし事なくてとは永代不改の都と定給し平安城なれは何そ不吉の事あらてはかゝる平民かはからひなとにてはあらたむる事ならねはと也ふかく平氏か非禮非義をおこなへることを顯たり○されといふかひなくて△△うつり給ひぬ　此詞王位すたれ世も末になりて逆臣の時をえたる事を述たりされとゝ云は次上をうけたる詞也○世につかふる程の人△△△とまりをり　此詞は天子さへ御心にまかせ給はねは其外は如此といへり○軒をあらそひし人のすまゐ△△△△畠となる　此詞平安城のあれゆくさまをのへたり○人の心みなあらたまりて△△好ます　此詞人の心もかはりて衰代になれることをいへり都も世にすむ人も世の人の心もかはりはてたることをいへり馬くらをおもくして牛車を用る人なきとは武士のわさをこのむことをいへり刀兵の心にかなへりこれ亂世の相をしるす

老子經曰天下有㆑道却㆓走馬㆒以糞（タツクル）天下無道戎馬生㆓於郊㆒罪莫㆑大㆓可欲㆒禍莫㆑大㆓於不㆑知㆑足云々

文選東京賦云却㆓走馬㆒以糞注云言禮義大布軍兵不㆑起却㆓走馬㆒以務㆑農雖㆑有㆓駿馬㆒終無㆑所㆑用云々平

相國の可欲よりをこりて禮義をしかさるにより兵事を専にする心なるへし　西南海の所領をねかひとは武士になりて國の守になりさかえんことを樂と也　東北國の庄園をこのますとは公家をはこのますして文道を用ひぬといふ心なり詞をついしてかくかけるなり是も禮儀はすたれて武にほこり兵事をこと〻して亂をなすことをいへり○その時をのつからことのたよりありて攝津國今の京にいたれり△△△優なるかたも侍りき　この詞都は四神相應の地にてあるへきを福原はその地都となるへき所にあらすあなことを述たり攝入道か無道なるをあらはせり〽本の丸殿とは天智天皇のまし〳〵し所也御歌に朝倉や木のまろとのに我をれは名乘をしつ〻行はたか子そとあるを兼良公抄をあそはしたるにくはしその抄に云朝倉の宮は天智天皇の行宮つくしにあるよし奥義抄八雲抄等に載られ侍れとたしかなる所見をみ侍らす爰に日本紀を勘侍るに齊明天皇の御時（皇極天皇重祚の諡號也）百濟より高麗をせめしときすくひの軍を我國にもとめ侍しかは天皇筑紫へおもむき給はんとて伊與國

に幸して熟田津の石湯の行宮にとまり給へり其時天智天皇はいまた太子にて供奉し給へりその年朝倉橘の廣庭の宮にうつり給ひて朝倉の社の木をきりはらひて此宮を作給ひしかは朝倉の神いかりをなせりとなん齊明天皇はつゐに朝倉の宮にして崩し給へり朝倉の社は延喜式神名帳には土佐國土佐郡にありとしるせり風土記にも土佐國朝倉の郷に朝倉の社ありと見えたり西國のうちなれは伊與の國より土佐の國へ移りまし〳〵けるにや朝倉木の丸殿は土佐の國に侍るを古來あやまりてつくしにありといへりきのまろとのは行宮を云まろきのくろ木にてつくれる名なり天智天皇いまた東宮と申侍る時齊明天皇にしたかひ給て朝倉の行宮にとゝまり給へる時此宮へまいる百のつかさ名揭して罷出侍る事をなのりしつ〻も行はたが子そと詠し給へる也云々長明か福原の京にゆきて昔のおとろへたる御時の事に思ひ合たりされと天子のおはします所なれは殊勝なるよし也又下心には天智天皇のことく運をひらき給て本のことく王道をさかんになるへきそと思ふ心もあるへし○日々にこほちて

△△△つくれるやはすくなし　此詞遷都の費をのへたり○古里はすてにあれて新都はいまたならす　この詞遷都のことを決ていへり入道か威盛を以てはからへとも都の成就しかたき事をいへり威勢にてすることは費(ツイヘ)ははやくありて善はなりかたきことをいへり伊物にならの京ははなれこの京は人の家またさたまらさりけるにと云筆勢をうつせり心はかはれり○ありとしある人△△△事をなけく　此詞は遷都の費人におよふ事をいへり　ありとしあるとは新都にあるものともをさして云さてもとより居ものには地をうしなひいまうるものは土木の煩とことはりたる也○道のへをみれは△△△武士にことならす　此詞すてに新都の風俗あしく成事をいへり○是は世のみたるゝ瑞相とか△△△人の心も不定　此詞は武をこのめは亂世の瑞相とた闘をけることくに世かうきたちたると也　世のうきたちたるといへるは案するに治承四年に頼朝豆州に義兵を挙て平家兵を關東に發向したるよしあり此ことを云なるへし愛を以て刀兵災に准したる事明也　浮雲の思ひとは定まらぬ心也とみをみることわれにおひてうかへる雲のことしと論語にあり又は禪師惠旻曰寄レ世若二浮雲一共いへり　老子曰夫佳レ兵者不祥之器物或惡レ之故有道者不レ處是以君子居則貴レ左用レ兵則貴レ右兵者不祥之器非二君子之器一不レ得レ已而用之恬淡爲レ上破不美也美以樂レ之樂レ之者是樂レ殺レ人也夫樂レ殺レ人者不レ可レ得二志於天下一三略云兵者不祥之器大道惡之此心なとにてよのみたるゝ瑞相なといへるにや猶本文可有事也○民の愁つゐにむなしからさりけれは△△かへり給にき　此詞入道の無道のわさは成就しかたき事をいへり○されとこほち△△△もとのやうにもつくらす　此詞もとのことくかへり給へとももとのことくにならすといひて遷都の費のとほく及ふことをいへり○いにしへのかしこき△△是民をめぐみ世をたすけ給によりてなり　此詞聖代を臭て今の世のあしきことをいへりあはれみをもて國を治めとは大學云堯舜帥二天下一以レ仁民從之と有仁政ある心なれは思ひ合すへし御殿に茅をふきてとは史記秦本記韓子曰堯舜采椽不レ剪此心にや煙のともしきをみてとは日本書紀第十一大鷦

鶴天皇四年春二月己未朔甲子詔群臣曰朕登二高臺一以遠望之烟氣不レ起二於域中一以爲百姓既貧而家無炊者 朕聞古聖王之世 人人誦二詠德之音一家々有康哉歌今朕臨億兆於玆三年頌音不レ聽炊烟轉踈卽知五穀不登百姓窮乏也封畿之內尙有二不給者一況乎畿外諸國耶三月己丑朔己酉詔曰自今之後至二于三載一悉除課役息百姓之苦是日始之黼衣鞋履不弊盡不更爲也溫飯煖羹不酸餧不易也削心約志以從事乎無爲是以宮垣崩而不造茅茨壞以不葺風雨入隙而沾衣被星辰漏壞而露床蓐是後風雨順時五穀豐穰三稔之間百姓富寛頌德既滿炊烟亦繁 古事記云天皇登二高山一見二四方之國一云々 餘同二日本紀一 是民を惠み世をたすけ給によりてなりとは吹上のことのはを決して別の事にあらすといへる詞なり○今の世中のありさま昔に准らへて知ぬへし 此詞は溫レ古知レ新と論語にいへることくにて今の世のことはいはさるか又は禮記に國にありては大夫をたにもそしらすと侍れは今の世のことは何ともいはすしてかくいへるにや

又養和のころかとよ久しくなりてたしかにもおほえす二年か間世中飢渇してあさましき事侍き或は春夏日てり或は秋冬大風大水なとよからぬ事ともうちつゝき五穀こと〳〵くみのらずむなし（くイ）春耕し夏うふるいとなみのみありて秋かり冬收るそめきはなし是に依て國々の民或は地を捨てさかひを出或は家を忘て山に住樣々御祈りはしまりなへてならぬ法とも行はるなれと（もイ）更にそのしるしなし京のならひなにはにつけてもみなもとは田舍をこそたのめるにたえてのほるものなけれはさのみやはみさほもつくりあへん念しわひつゝ寶物かたはしよりすつるとくすれともさらに目みたつる人なしたま〳〵かふるものは金をかろくし粟を重くす乞食道の邊におほく愁かなしふ聲耳にみてり先の年かくのとくからくしてくれぬあくるとしは立なほるへきかと思ふにあまさへ疫癘うちそひてまさるさまに跡かたなし世の人みな飢死けれは日をへつゝきはまり行さま少水のうをのたとへにかなへりはてには笠うちき足ひきつゝみよろしき姿したる者ひたすら家ことにこひありくかくわひしれたるものともありくかとみれはすなはちたふれ

ぬついひちのつら路頭に飢死ぬるたくひはかすしらすとりすつるわさもなけれはくさき香世かいにみち〳〵てかはり行かたちありさま目もあてられぬ事おほかり況や河原なとには馬車の行ちかふ道たにもなしあやしき賤山かつも力つきて薪にさへともしくなりゆけはたのむかたなき人はみつから家をこほちて市にいてゝうるに一人か持出たるあたひ猶一日か命をさゝふるにたにをよはすとそあやしきことはかゝる薪の中に丹つきしろかねこかねのはく所々につきてみゆる木のわれあひましれり是をたつぬれはすへきかたなき物の古寺にいたりてほとけをぬすみ堂の物の具をやふりとりてわり（かくイ）くたけるなりけり濁悪の世にしもむまれあひてかゝる心うきわさをなんみ侍りき又あはれなる事侍りきさりかたき女男（男女イ）なと持たるものはその志まさりてふかきはかならす死すそのゆへは我身をはつき（次）になして男にもあれ女にもあれいたはしく思ふかたにたま〳〵こひえたる物を先ゆつるによりてなりされは父子ある物はさたまれることにて親そ先たちてしにける父母か命つきてふせるをしらすしていとけなき子のその乳房にすいつきつゝふせるなとも有けり仁和寺に隆暁法印と云人かくしつゝかすしらすしぬることをかなしみてひしりをあまたかたらひつゝ其死首のみゆることに阿字をかきて縁に結はしむるわさをなんせられける其数をしらんとて四五両月かほとかそへたりけれは京の中一條より南九條より北京極より西朱雀より東の道のほとりに有頭すへて四萬二千三百餘（あまり）なんありけるいはんや其前後にしぬるものもおほく川原白川西の京もろ〳〵の邊地なとをくはへていはゝ際限もあるへからすいかにいはんや諸國七道をや近くは崇徳院の御位のとき長承の比かとよかゝるためしはありけると聞と世のありさまはしらすまのあたりいとめつらかにかなしかりし事なり

この一段は飢饉災と疾病災とを思ひよせてかけるものなり〇養和の比かとよひさしくなりてたしかにも覚えず　養和は安徳天皇御宇の年號なり四五両月大飢と編年合運にもあり久しくなりて覚えすとは此段にかきらす此心ありとみるへし謙退の詞なり〇二年か間飢渇してあさましき事侍りき此詞

一段の大綱をあけていへり
○或は春夏は日てり△△△そめきはなし
此詞はよの常ならぬ飢饉なる子細をいへり
○是によつて國々の民△△△山に住
この詞飢渇の大に民に及事をのへたり
○なへてならぬ法とも△△△しるしなし
此詞飢饉の災朝廷へまてをよふ事を記せり
○京のならひ△△△△△△△つくりあへん
この詞洛中の飢渇の根本をしるせり洛中は田畠は作らねとはその本あしきゆへに災難及ふ事をいへり源氏夕顔巻にとなりの家々あやしき賤のおの聲々めさましくてあはれいとさむしやことしこそなりはひもたのむ所すくなく田舎のかよひも思ひかけねはいと心ほそけれとあるなと思ひあはせていと哀なりみさを作りあへんとは操の字なり少の間こそ飢饉にめいはくせぬかほなれ田舎よりのほることもなきゆへにめいはくする體かあらはるゝとなり
○念しわひつ△△△△△△たへす
此詞災のあまねくをよふゆへに財寶も用る所なき事をしるせり
○乞食△△△耳にみてり
此詞災の人をそこなふ事をしるせり
○先のとし△△△△△からくしてくれぬ
此詞災のうれへ年月をふることをしるせり
○明るとしは△△△△△△あとかたなし
この詞飢災の年をこえてなやます事を云てそのうへ疾病災難あることをのへたりえやみと云は疫病なり是を疾病災に思ひよせたりと見えたりよの災の相をはなかくあらはしたるにとり分飢災をなかくのへたれは疾病の事をかくみしかくかきたるは筆法なるへしそのうへ飢渇にてしぬるさま疾病にてしぬるに似かよふへきゆへなるへし
○世の人みな飢死けれは△△たとへにかなへり
この詞災難世にあまねくをよふ事をたとへをかりて述たり小水の魚の事摩竭魚の古事たるへし太平記にあれは人々よくしりたるゆへに事多ければ畧之
○はては笠うちき△△△△則たふれしゝぬ
此詞災よろしき人にもをよひて飢死ぬる事を述た

りしれたるとは白痴とかけり萬葉第九水江浦しまか子長歌には世間之愚シレたる人のとあり
○つゐちのつら△△△行ちかふ道たにもなし
此詞飢死たるものとものありさまをしるせり
○あやしきしつ山かつも心憂わさをなんみ侍りき
此詞飢災山中まてをよひて京へ薪なともて出ねはかゝる悪行をなすにいたる事をのへたり　濁悪の世に生れあひといへるにて三災に思ひよせてかけるといふ事をしるへし此詞やなんとか證文たるへしとおほえ侍る　法花經方便品云舍利弗諸佛出ニ於五濁悪世ニ所謂刧濁煩惱濁衆生濁見濁命濁如レ是云々　釋云刧者梵云ニ刧波一此翻ニ時分一即是長時也剎那是短時也刧濁無ニ別體一所以文云刧濁亂時即其時也衆生濁者只是攬ニ彼見慢果報一謂衆生垢重也煩惱濁指ニ五鈍使一也見濁指ニ五利使一也命濁者連ニ持色心一而爲レ體也五刧濁相者當レ知四濁增極聚在ニ此時一所謂嗔恚增極刀兵起貪欲增極飢餓起愚痴增極疾疫起以ニ三災起一故煩惱倍隆諸見博熾麤弊色心惡名穢稱云々文殊問經云何五濁惡世謂刧濁衆生濁命濁煩惱濁見濁云何刧濁三災起時更相殺害饑饉疾病云何衆生濁惡衆生善衆生勝劣衆生云何命濁十歲衆生二十三十乃至千載有長短故云何煩惱濁多貪多嗔多痴云何見濁邪見戒取見取常見斷見有無見我見衆生見如是五濁如來悉無○かゝる心うきわさをなんみ侍りき　此詞上を受たる詞なり文の筆法也
○又あはれなる事侍りき△△ふせるなとも有けり
この詞災難のありさまをこまかにつらねて世の人に厭離の心をつけんためなるへし
○仁和寺に隆曉法印△△△わさをなんせられける
この詞如此時はせんかたなけれは如此慈悲ならてはすくひかたしと云心を曉師のことを引てしらせたり
○其數をしらんとて△△△△諸國七道をや
此詞死人の多事をしるせり四五兩月かほとゝは四月五月なり二ケ月と云ことは少間と云事をしらせん爲なり一條より南なと委かくことはあまねく災のをよふことを云てふかくいたむ心あるゆへなり四萬二千三百あまりとしるす事は死の體也是もふかくいたむ心あるゆへ也諸國七道とは五畿内東海道十ケ國東山道八ケ國北陸道七ケ國山陰道八ケ

國山陽道八ヶ國南海道六ヶ國西海道十一ヶ國是なり五畿內をはのそき七道と云也五畿內の事をはこまかにいひて諸國も如此と影畧互顯していへり京の事をいへは五ヶ國の事になるゆへ也況の字心をつけてみるへし初況は死人の數多ある事にいへり後況はあまねくをよふことにいへり

○近くは崇德院へ[illegible]かなしかりし事也

此詞あまりいたむ事には其類を尋る事常の事也近くはと云にて遠くもありし事忘られたりいとめつらかにといふ詞にて不思議をみ侍りしと云たるを結成したり飢饉のことをくはしくのへたる心を愚案するに政をする人をいましめたる心あるへし水火風刀兵疾病の災はつねになき事也上たる人の政によるといへと水火風は天なり刀疾は民をなていつくしみたまへはをこらすされは民のうへすここへぬやうに政をするか根本也仁をほとこせは民そむかす民そむかねは兵をこらす兵をこらねは疾病なし大亂の後大の病事あれは必疾病をこらすして民所を得君　しけれは天道序をうしなはすして風雨時をたかえねは風水の難なし如此して國に政正しけれは火災なきことはりなれはとこそ思ひ侍る老子曰民之飢以二其上食レ稅之多一是以飢といへりされは政をする人の根本たることをいましめてかくいへるにや

又元曆二年の比大なゐふる事侍りきそのさま常ならす山くつれて川をうつみ海かたふさて陸をひたせりつちさけて水わきあかりいはほわれて谷にまろひ入渚こく舟はなみにたゝよひ道行駒は足の立とをまとはせり況や都のほとりには在々所々堂舍塔廟一として全からす或はくつれ或はたふれたるあいた塵灰立のほりて盛（あをりイ）なる烟のことし地の震き家のやふるゝ音いかつちにことならす家の內（中イ）に近（居イ）れは忽にうちひしけなんとすはしりいつれは又地われさく羽なけれは空へもあかるへからす龍ならねは雲にのほらん事かたしをそれの中に恐るへかりけるは只地震なりけりとそ覺侍しその中にある武者ひとり子の六七はかりに侍りしかついひちのおほひの下に小家を作りてはかなけなるあとなし事をしてあそひ侍りしか俄にくつれうめられてあとかたなくひらにうちひさかれて

二の日なと一寸はかりうち出されたるを父母かゝへて聲をおしますかなしひあひて侍しこそあはれにかなしくみ侍りしか子のかなしみにはたけきものも恥を忘れけりとおほえていとおしくことはりかなとそみ侍りしかくをひたゝしくふる事はしはしにてやみにしかその名殘(ぢしんイ)しは〳〵たえすよのなかつねにおとろくほとのなゐ二三十度ふらぬ日はなし十日二十日過にしかはやう〳〵ま遠になりて或は四五度二三度もしは一日ませ二三日に一度なとおほかたその名殘三月はかりや侍りけん四大種の中に水火風は常に害をなせと大地にいたりてはことなる變をなさすむかし齊衡の比かとよ大なるなゐふりて東大寺のほとけのみくし落なとしていみしき事共侍りけれとなをこのたひにはしかすとそ

この一段は水災の相をおもひよせたり地動は水災にとる子細あり三界義曰泥洹經云地有四因緣一者動者地有ニ水上一水在ニ風上一風動ニ搖水一水動ニ搖地一二阿羅漢欲ニ自試ニ通力一以ニ手兩指一按レ地是故地動三天中有ニ大威神力一意欲レ動レ地々即動四佛不レ久當ニ涅槃一是時地動阿含經云佛言地動因緣有八地在水上水止ニ於風一風止於空空中風大有レ時自起則大水擾大水擾則普地動是爲一也云々此第一の因緣の以てみれは地動は水の所爲也故に地動を水災にとれり其上次上の詞に四大種の中に水火風は常に害をなせと天地にいたりてはことなる變をなさすといへるは地動は水の所爲なる事をことはりたる評論なり是まて大小三災みなをはりぬ○又元暦二年の比　元暦は後鳥羽院の御宇の年號也此年號二年にてをはりぬ二年めに文治とかはる也○大なるなゐふる事侍き　此詞一段の大綱を擧たり○そのさま常ならす　此詞なゐの大なる事をいひて不思議なる事を明せり

○山くつれ川をうめ……理かなとはみ侍りし　この詞どもなゐのかひをなせる事人物にをよへるさまをのへたり武士の獨子のことをいへるに親子の哀を云て人は子と云もの持ましき敎をいへる成へし小家を作りてといへるは世間の人の住家をいとなむもこのわらへにこゝならぬ理をも思ひよせたるなるへし

○かくをひたゝしくふることはしはしにて△△△

三月はかりや侍りけん
此詞はなゐ大にしてよのつねならぬによりて名殘まて大かたならぬことをいへり
○四大種の中に　　ことなる變をなさす
○此詞は四大の中にて大地はことなる變をなさすなゐのふることとは水大のしわさなる事とことはりたる心也此詞を證據として地動を水災にとり侍るなり四とは地水火風也大種とは補注云新譯諸論皆云二大種一即四大種也婆師問云何名二大種一答大而是種故名二大種一如レ言二大地及大王等一能滅能增能損能益是爲二種義一體相形量偏二諸方域一能成二大事一是爲二大義一
○昔齊衡の比かとよ[illegible]此度にはしかすとそ
この詞昔を引て此度の猶益れる事を明せり佛の說法に過去の事をのへ給ひ文殊の先佛の事を引て六種震動の瑞を答給心也齊衡とは文德天皇の御宇の年號也二年五月五日大地震ふりて大佛の頭地に落たるよし見えたり東大寺の佛とは大佛の御事也元亨釋書云東大寺者天平十五年十月十五帝於二近州信樂京一創レ之鑄二盧舍那佛銅像一長一十六丈帝製二發願疏一普告二天下一云々十六年十一月於二甲賀寺一造二像模一帝親引二其繩一勅二大常一奏レ樂十七年八月移二和州添上郡一改造云々天平勝寶元年十月二十四日大像成經レ年三歳改鑄八度殿高十五丈六尺東西二十九丈南北十七丈

すなはち人みなあちきなき事を述ていさゝか心のにこりもうすらくかとみしほとに月日かさなりとしこえしかは後はことのはにかけていひいつる人たになし。

すへて世のありにくき事我身と栖とのはかなく（すへてと云より是迄なき本有）あたなるさまかくのことし況や所により身のほとにしたかひて心をなやます事あけてかそふへからすもしをのつから身かなはすして權門の傍に居るものはふかくよろこふことあれとも大にたのしふとあたはすなけきある時も聲をあけてなけく（なくイ）事なし進退安からす起居（立居につけて）にをそれをのゝくたとへは雀のたかのすにちかつけるかことしもし貧（まつしく）くしてとめる家のとなりにをるものは朝夕そほきすかたをはちてへつらひて出入妻子僮僕のうらやめるさまをみるにもとめる家の人のないかしろなる氣色を聞にも心念々にうこきて

時としてやすからすもしせはき地にをれは近く炎上
する時そのかいをのかるゝ事なしもし邊地にあれは
往反わつらひおほく盜賊の難はなれかたしいきほ
ひあるものは貪欲ふかくひとり身なるものはかすめ（人にかろしめ）
（らる）らる寳あれは恐れおほく貧しけれは歎き切なり人を
たのめは身他の奴となり人をはこくめは心恩愛につ
かる世にしたかへはみくるし又したかはねはくるへ
るに似たりいつれの所（とし）をしめいかなるわさをしてし
はしもこの身をやすむへき我身父方の祖母（イ我身ー祖母）玉ゆらも
と云よりこれまでなき本有
心を慰むへき

この一段水火風刀兵飢饉疾病あらぬときも世には
すみかたきことをのへたり世の中にすまんとすれ
は色々の災難にをそれ災難のなき時もかくありて
すみかたきと云事をしるしたりさるによりて是ま
てを大にわかちて二たんめとみるへし是詞は因縁
說の中の法說也すへて三周の中にあれこれかよひ
てありて九周となる也尊舜の釋云如此三周各具三
三周一法說開悟人不レ限ニ弟子一人ニ無數人可レ有レ之
顯也乃至因緣時不レ限ニ下周聲聞ノ機類無盡說敎作
レ一顯歟とあり此にて心得ぬへし

○すなはちみな△△△△云いつる人たになし
この詞は世の人の無常を思はぬ心をのへたり述て
と云はかゝる災難のあるみきりは人々世にありに
くき無常なる事いひあへるなり述てはあとの過た
る事を云出す心なり災難ありしあとにそのことを
かたりてあちきなき思ひをせしと云事なるへし論
語に述而不作と云字心也心のにこりには五濁の事
なりまへの詞に五濁惡世にいてゝとあるに應して
かけり年越しかはとは災難しつまりて一年ほとや
すき間をへたれはことのはにいひいたす人もなく
なりて又五濁惡世の人となりたるとなり

○いはんや所により身のほとにしたかひ△△△△へ
からす

此詞災難のなき時も世にありにくき大綱を述たり
是よりおくへそのさまをいへりいはんやと云は山
居するとても惡世の外ならねはありにくきに世中
は色々の苦のあると云事をいはんやといへり

○もしをのつから△△△△巣に近くかことし

此詞權門のそはに住する災難をいへり若と云は

蒙潤釋云若之爲レ言乃不定之辭也池亭記云又近ニ勢家ニ容ニ微身ニ者雖レ破不レ得レ葺垣雖レ壞不レ得レ築有レ樂不レ能ニ大開レ口而咲ニ有レ哀不レ能ニ高揚レ聲而哭ニ進退有レ懼心神不レ安譬猶ニ鳥雀之近ニ鷹鸇ニ矣云々

此詞を以て此にうつせり

○若まつしくしてとめる家の隣にをるものは△△時としてやすからす

此詞富者の近くにあるは益なうして損のあることをいへり池亭記云南院貧北院富富者未ニ必有レ徳貧者亦猶有レ恥云々此句の心をかりて云述たり

○若せはき地にをれは△△△のかるゝ事なし

此詞京中の住家の損をいへり池亭記云高家北門連レ堂少屋隔レ壁接レ簷東隣有ニ火災ニ西隣不レ免ニ餘炎ニ此句を用ていへり

○若邊地△△△盗賊の難はなれかたし

此詞邊地といへるは京のかたはきを云なるへし池亭記云南宅有ニ盗賊ニ北宅難レ避ニ流失ニ云々此句邊地となけれと心をとりて此句をとりてかけり若と云字四ある權門富者狹地邊地には害ある事をいひて山中ならてはやすからぬ心をあかせり

○いきほひあるものは△△△△くるへるに似たり

此詞貴と賤と富と貧と奴と主と世重と世輕との八の品を擧て世をいとはぬものは如此品々の損あることをいへり畢竟山中方丈のすまひの安樂なるかたをいはんためなり

○いつれの所をしめいかなるわさをして△△△心をなくさむへき

此詞初よりをすへて結成したる也住家と身とのありにくき事をいひつゝけてさていかにして身をやすくやとす住家をもとめ心を慰めてくるしましめすやとす身とならん世中にありてはせんかたしといひておくに山中こそ身をやとし心を慰むる所といへり決前生後の詞也世にありにくきことを決し如此ゆへ山中をもとむる心を生したり

吾身父方の祖母の家を傳て久しくかの所にすむその後縁かけ身おとろへて忍ふかた／＼しけかりしかはつゐにあととゝむる事をえすして三十あまりにしてさらに我心と一の庵を結ふこれをありしすまゐになすらふるに十分か一なりたゝ居屋はかりをかまへてはか／＼しくは屋をつくるにをよはすわつかについ

ひちをつけりといへとも門たつるにたつきなし竹を柱としてくるまやとりとせり雪ふり風ふくことにあやうからすしもあらす所は川原ちかけれは水の難ふかく白浪のをそれもさはかしすへてあらぬ世をねんし過しつゝ心をなやませる事は三十餘年なりそのあひた折々のたかひめにをのつからみしかき運をさとりぬすなはち五十の春をむかへて家をいて世をそむけり妻子なけれはすてかたきよすかもなし身は官祿あらすなにゝつけてか執をとゝめんむなしく大原山の雲にいくそはくの春秋をかへぬる

これ三段也世をそむき家を出たる趣をかけり

○吾身父方△△△かの所にすむ

此詞身の世にすみし初を先舉たり

○其後緣かけ△△△跡とゝむる事をえすして

此詞先祖の家を出たる由を述たり緣かけとは家の破損したることをいへり身おとろへてとは貧に成たることをいへり貧なるゆへに修理もならぬことをいへり忍かた〳〵しけかりしとは續世繼の打聞卷云堀川のみかとの內侍にて周防とかいひし人の家をはなちて外にわたるとてはしにかきつけたり（周防守棟仲女）

けるすみわひて我さへ軒の忍ふ草忍ふかた〳〵しけき宿哉とかきたるまたその家はのこりてその歌も侍る也みたる人の語侍りしはいと哀に床しくその家はかみわたりにいつことかや冷泉ほりかはのにしと北とのすみなる所とそ人は申しおはしまして御らんすへきそかし云々此歌の心にてかけり是を以てみれはあととゝむる事をえすといふは家をはなちけるにや（金葉に入）○三十あまりにして更に我心と一の庵を結ふ　此詞先祖の家をはなちて我力にて家を作る事をいへり

○是をありし△△△十分か一也

此詞心と作る家のちいさき事をいはんとてむかし先祖の家にくらへて十分か一なりといへり○只居屋はかりをかまへて△△△あやうからすしもあらす此詞心とつくる家のありさまを述たりたつきなしとは門をたつるまてのたよりなきと也家の成就せぬせはき躰をいへり雪風にあやうきとは家の丈夫ならぬことをのへなり○所は川原ちかけれは水のなんふかく白なみのをそれもさはかし此詞家を立所も昔よりあしきことをいへり白浪は盜人の事

なるへし前詞に邊地にあれは盗賊の難はなれかたしといへるに相應すぬす人をしらなみと云古事諸抄にあれは略之池亭記云或卜ニ東河之畔ニ若遇ニ大水ニ與ニ魚鼈ニ爲レ伍とあり

○すへてあらぬ世をねんし過しつゝ△一△三十餘年なり

此詞世をそむく由來をいへり三十餘年とあるは凡物の心をしれりしよりと云よりこの方成へし

○其間折々のたかひめに△△△家を出世をそむけり此詞道したるゆへ又道心したる事をいへり其間は三十餘年の間をいへりたかひめとは逆境によりてなり道心は逆境にあらねはをこらぬゆへあるなり

○妻子なけれは　なにゝ付てか執をとゝめん

この詞道心發すに障碍なきことを述たり此詞にて一旦の發心にてなき趣に見えたり

○むなしく大はら山△△△△春秋をかへぬる

此詞發心せしより方丈をつくるまてありし所を擧たり十年大原に有しとみえたりむなしくといへる詞心を付へし

こゝに六十の露消かたにをよひてさらに末葉のやどりをむすへる事ありいはゝ旅人の一夜の宿をつくり老たるかいこのまゆをいとなむかことし是を中ころのすみかになすらふれは又百分か一にをよはすとかくいふ程に齢は年々にかたふき栖は折々にせはし其家のありさまよの常ならすひろさはわつかに方丈たかさは七尺かうちなり所を思ひさだめさるかゆへに地をしめて作らす土居をくみ打おほひをふきてつきめことにかけかねをかけたりもし心にかなはぬ事あらはやすく外にうつさんかためなりそのあらためつくるときいくはくのわつらひかあるつむ所わつかに二兩なりくるまのちからをむくふる外はさらに用途いらす今日野山のおくにあとをかくして南にかりの日かくしをさしいたして竹のすのこをしきその西にあかたなをつくり中には西のかきにそひて阿彌陀の畫像を安置し奉りて落日をうけて眉間のひかりとす彼帳のとびらに普賢并に不動の像をかけたり北の障子のうへにちいさき棚をかまへてくろき皮籠三四合を置すなはち和歌管絃往生要集ことさの抄物を入たり傍に箏琵琶各一張をたついはゆるおり琴つきひわ

これなり東にそへてわらひのほとろをしきつかなみをしきて夜の床とす東のかきにまとをあけて爰にふつくゑをつくりいたせり枕のかたにすひつあり是を柴折くふるよすかとす庵の北にすこし地をしめあはらなるひめかきをかこひて園とすすなはちもろ〳〵の藥草をうへたりかりのやの有さまかくのことしその所のさまをいはゝ南にかけ樋あり岩をたゝみて水をためたり林の木近けれはつま木をひろふにともしからす名を外山と云正木のかつら跡をうつめり谷しけゝれと西ははれたり観念のたよりなきにしもあらす春は藤なみをみる紫の雲のことくして西のかたにゝほふ夏は郭公を聞かたらふことにしての山ちを契る秋はひくらしの聲耳にみてり空蟬の世をかなしむときこゆ冬は雪をあはれむつもりきゆるさま罪障にたとへつへしもし念佛ものうく讀經まめならぬときはみつからやすみみつからをこたるにさまたくる人もなく又はつへき友なしことさらに無言をせされともひとりをれは口業をおさめつへしかならす禁戒をまもるとしなけれとも境界なけれはなにゝつけてかやふらんもし跡のしらなみに身をよする朝には岡の屋に行かふ舟をなかめて滿沙彌か風情をぬすみ桂の風はちをならす夕には潯陽の江を想像(ヲモヒヤリ)て源都督のなかれをならふもし餘興あれはしは〳〵松のひゝき秋風のたのしみをたくへ水のをとに流泉の曲をあやつる藝はこれつたなけれは人の耳を悦はしめんとにもあらすひとりしらへ獨詠してみつから心をやしなふはかりなり又麓に一の柴のいほり有即この山もりかをる所なりかしこに小童あり時々來てあひとふらふもしつれ〳〵なるときは是を友としてあそひありくかれは十六歳我は六十そのよはひ事の外なれと心をなくさむる事是おなしあるはつはなをぬきいはなしをとる又ぬかこをもりせりをつむあるはすそはの田井にいたりて落穗をひろひて穗組をつくるもし日うらゝかなれは峯によち登りてはるかに故郷の空をのそみ木わた山伏見の里鳥羽羽束師をみる勝地はぬしなけれは心をなくさむるにさはりなしあゆみわつらひなく志遠くいたるときは是より峯つゝきすみ山をこえかさとりを過て岩間にまうて石山をおかむもしは又あはつのはらを分て蟬丸翁か跡をとふらひ田上川をわたりて猿丸大夫か墓をたつぬかへるさまには

おりにつけつゝ櫻をかり紅葉をもとめ蕨をおり木のみをひろひて且はほとけにたてまつり且は家つとにすもし夜しつかなれは窓の月に故人を忍ひ猿の聲に袖をうるほす草村の螢はとをくまきのしまのかゝり火にまかひ曉の雨はをのつから木の葉ふく嵐に似たり山鳥のほろ／＼となくをきゝて父か母かとうたかひ峯のかせきの近くなれたるにつけても世にとをさかるほとをしるあるは埋火をかきをこして老のね覺の友とすおそろしき山ならねと梟の聲をあはれむにつけても山中の景氣おりにつけてもつくる事なし況やふかく思ひふかくしれらむ人のためには是にしもかきるへからず大かたこの所にすみはしめし時はあからさま（白地）と思ひしかと今までに五年を經たりかりの庵もやゝふるやとなりて軒にはくち葉ふかく土居苔むせりをのつからことのたよりに都をきけはこの山にこもりゐて後やんことなき人のかくれ給へるもあまたきこゆましてその數ならぬたくひ盡してこれをしるへからすたひ／＼の炎上に亡ひたる家又いくそはくそたゝかりの庵なる身のとけくして恐れなしほとせはしといへともよるふす床ありひる居る座あり

一身をやとすにふそくなしかうなはちいさきかひをこのむ是身をしるによりてなりみさこはあらいそにゐる則人をおそるゝによりてなり我又かくのことし身をしり世をしれらはねかはすましらすたゝしつかなるをのそみとし愁なきをたのしひとすへて世の人の栖を作るならひかならすしも身のためにはせすあるは妻子或は眷屬のためにつくりあるは親昵朋友のためにつくるあるは主君師匠及財寶馬車のためにさへ是をつくる我今身のためにむすへり人のために作らすゆへいかんとなれはいまの世のならひこの身のありさまともなふへき人もなくたのむへきやつこもなしたとひひろくつくれりとも誰をかやとしたれをかすへんそれ人の友たる者はとめるをたうとみねんころなるをさきとすかならすしもなさけあるとすなほなるとをば愛せすたゝいとたけ花月を友とせんにはしかす人のやつこたる者は賞罰の甚しきをかへりみ恩のあつきをおもくすさらにはこくみあはれふといへともやすくしつかなる事をはねかはす唯我身をやつことするにはしかすもしすへき事あれは則をのつから身をつかふたゆからすしもあらねと人をし

たかへ人をかへりみるよりもやすしもしありくへきことあれはみづからあゆむくるしといへとも馬くら牛車と心をなやますには似す今一身をわかちて二つの用をなす手のやつこ足ののりものよく我心にかなへり心又身のくるしみをしれらはくるしむときはやすめつまめなる時はつかふつかふとても度々過さす物うしとても心をうこかす事なしいかにいはんやつねにありきつねにうこくは是養生なるへしなんそいたつらにやすめをらん人をくるしめ人をなやますは又罪業なりいかゝ他のちからをかるへき衣食のたくひ又おなし藤の衣麻の衾うるにしたかひてはたへをかくし野へのをはなみねのこのみ命をつくはかり也人にましはらされは姿をはつるに悔もなしかてともしけれはをろそかなれともなを味をあまくすすへてかやうの事たのしくとめる人に對していふにはあらすたゝ我身ひとつにとりて昔と今とをたくらふるなり大かた世をのかれ身をすてしよりうらみもなく恐れもなし命は天運にまかせておしますいとはす（この間なき本あり）身はうき雲になすらへてたのますまたしとせす一期のたのしひはうたゝねの枕のうへにきはまり生涯の望はおり〳〵の美景にのこれり三界はたゝ心ひとつなり心もしやすからすは牛馬七珍もよしなく宮殿のそみなし今寂しきすまゐ一間のいほりみつからこれを愛すをのつから都にいてゝは乞食となれることをはつといへともこゝにをるときは他の俗塵に着することをあはれふもし人此いへることをうたかはゝ魚鳥のありさまをみよ魚は水にあかす魚にあらされはその心をしらす閑居の氣味も又おなしすますして誰かさとらん抑一期の月影かたふきて餘算山の端にちかし忽に三途のやみにむかはんときなにのわさをかかこたんとする佛の人を敎へ給おこりは事にふれて執心なかれとなりいま草のいほりを愛するも咎とす閑寂に着するもさはりなるへしいかゝ用なきたのしみをのへてむなしくあたら時を過さんしつかなる曉このことはりをおもひつゝけてみつから心にとひていはく世をのかれて山林にましはるは心をおさめ道をおこなはんためなりしかるを汝か姿はひしりに似て心はにこりに沈めり栖は則淨名居士の跡をけかせりといへともたもつ所は周梨槃特か行にたにもをよはす若是貧賤の報のみつからなやますか將また妄心のい

たりて狂はせるかその時心さらに答る事なし只かたはら成舌根をやとひて不請の念佛兩三返を申てやみぬ時に建暦の二とせやよひの晦日比桑門蓮胤外山庵にして是を記す
（辭イ　情イ　阿彌陀佛イ）

月かけはいる山のはもつらかりきたえぬ光をみるよしも哉

この一段山中の方丈の樂をいへり此一段正文也是をいはんとていろ〳〵の事をのへたり或は一篇を二に分てもみるへし一段には世の無常なることを云出して二段目にはこのことはりをのへたれは心は一なり三たんめには古里の山家のありにくきゆへを云出して四段めにさるによりて方丈を山中につくると云のへたれは心は一なり或は又事理の二なり一二段は身と住家とのはかなきことはりをのへたれは理なり三四段は住家のありさまをのへたれは事なり或は四たんには起承轉合に合てみる也一たんには方丈を作る理を云をこし二段に其理をうけてはかなきすかたを云述三たんには我昔ありし家居の事を一轉して云のへ四たんには如此ゆへ方丈を作ると上をくゝり合てかけり疎略にみるへからす○爰に六十の露消かたにをよひて　此詞方丈を作る時分をあらはせり六十といへは時代もをのつからしれ侍るゆへ也

○さらに末葉のやとり△△△△いとなむかことし
此詞死のちかき事をしるゆへにひさをいるゝにすきぬ事をたとへをとりていへり池亭記云猶下行人之造二旅宿一老蠶之成中獨繭上矣其住幾時乎

○是を中比の……一にたにもをよはす
此詞方丈の狹事をくらへていへり只せはくちいさきことをいはんためなりある人のこの方丈の分量を以て中比をはかり中比の分際を以て初の家のひろさをしるには事の外初の家大きなるといへり是まて心を入てみるは入ほか成へしと思ひ侍るなり

○とかくいふほとに△△△△おり〳〵にせはし
此詞やう〳〵によはひと栖の衰事を決しいへり扨其衰たる趣をとくに云端をおこせれは決前生後のことはなり

○其家のありさまよの常ならず△……△七尺かうち也此詞方丈の分量をのへたり

○所を思ひさためさるかゆへに△△△△かけかねを

かけたり
この詞方丈を疎に作るゆへと作りたる躰とを述たり
○もし心にかなはぬ時は△△△報る外は用途いらす此詞方丈を疎につくる益をいへり○今日野山のをくに跡をかくして△△△この詞方丈のある所をのへたりある人の云今日野山のをくにとあるを以てみれは此日の山にて初て方丈をつくるとは見えすよそにて作りたるかさて後かの日の山に移てこの山にては南にかりの日かくしなとをしたるとみえたりといへりいかゝさもあるへし
○南にかりの日かくしをさし出して△△△かりのやのありさまかくのことし
此詞庵のうちのありさまを云述たり　閼伽とは名義集云阿伽此云レ水稱讃淨土佛攝二受經明は功徳水二一澄淨二清冷三甘美四輕輭五潤澤六安和七飲時除二飢渇等一切過患一八飲已定能長二養諸根四大一落日をうけて眉間の光とすとは釋云放光即表二應レ機設レ敎破レ惑除レ疑白毫者狀如二白瑠璃筒一內外一切功德皆現二毫中一矣毫在二二眉中間一表二中道常一也

云々眉間は白毫の光なり諸佛ともにありあみたの畫像を安置するとは佛祖統記云漢明帝使二秦景一往二月氏國一得二優塡王雕像師第四畫像一此西土畫像始勅圖二於洛陽西陽城門及顯節陵上一供養東土畫始極樂往詣をねかふ成へし法然宗にてはあるましくや普賢ならひに不動の像をかけたり此二菩薩をかけたるにて法然宗にてあらさることをしるへし往生要集とは惠心院源信の作也釋書云夢西天馬鳴龍樹摩頂讃歎傳敎大師合掌告曰我山敎法今屬レ汝焉往生要集者備二西方之勸發一也箏琵琶とは琴世本云神農所レ造琴操云伏羲作レ琴所以修レ身性理反二其天眞一白虎通云琴禁也禁二止於邪一以正二人心一也廣雅云長三尺六寸六分象二三百六十六日一五絃象二五行一大絃爲レ君寛和而温也清廉不レ亂文王武王加二二絃一以二君臣之恩一爾雅云大琴謂二之離一二十七絃今無二其器一琵琶從遣二烏孫公主嫁一昆彌一念二其行道思慕一故使下工人裁中箏筑上爲二馬上之樂一以レ手爲二琵琶名一推レ手前曰批引レ手卻曰把をりことつきひわと云は未勘也園とすとは名義集云僧伽藍譯爲二衆園一僧史略云爲衆人園圃一々生植之所也佛弟子則生二殖道菩

薩聖果㆒也
○その所のさまをいはゝ△△△罪障にたとへつへし此詞日の山のありさまをのへたり
○名をと山と云正木のかつらにあとをうつめり
この詞かくらの歌に太山にはあられふるらしと山なる正木のかつら色付にけりとある歌にてかけり
観念のたよりなきにしもあらすとは観經十六想觀の日想觀の事也注云是日欲沒狀如懸鼓既見日已閉目開目皆令明了是爲日想名初觀云々この心なるへし
○春は藤なみを見る△　△西のかたに匂ふ
此詞藤の色をみて聖衆來迎を思へる也凡夫の悪業は黒色なると聖者の赤色と合して紫にみゆる事なりとなん　慈鎮歌に「紫の雲まつ宿の西の山かゝれる藤の色そかなしき　寄藤花述懐西行「西をまつ心に藤をかけてこそその紫の雲と思はめ
○夏は時鳥をきく△△△△山ちをちきる
このことは時鳥は冥途の鳥にてしての山を越てくるといへるによりてしての山をともにこえんと契なるへし　伊勢「しての山越てやきつるほとゝきす戀しき人か上のたらなん
○秋はひくらしの聲△△△世をかなしむと聞ゆ
空蟬とはむなしきせみのからを云ともいへり又はうつくしきせみを云ともいへりうつせみの世にとはむなしき世と云心なり歌にもうつせみの世は常なしとよめりされは蜩(ヒグラシ)も蟬のたくひなれは其こゑを聞て此虫のなくむなしきよをかなしむかといへり
○冬は雪をあはれむ△△△△たとへつへし
この詞兼盛歌に「年の内につくれる罪はかきくらしふる白雪とともにきえなんとある歌にて心得ぬへし　池亭記云春有㆓東岸之柳㆒細煙嫋娜夏有㆓北戶之竹㆒清風颯然秋有㆓西窓之月㆒可㆓以披㆑書㆒冬有㆓南簷之日㆒可㆓以炙㆑轢㆒とあり四季をつらぬる事は似たれ共樂物は異なりみるものことに無常をかへしける事殊勝なり○もし念佛ものうく△△△何に付てかやふらん
此詞山中は修行に益のあることを述たり念佛とは智度論云一稱㆓南無佛㆒是人亦得㆑畢㆑苦其福無盡問云何但空稱㆓佛名字㆒得㆑畢㆑苦其福不㆑盡答是人曾

佛功德一能度二人老病死一若少供養及稱二名字一得二福無量一亦至畢レ苦楞嚴經云大勢至菩薩超日月光菩薩如來敎我念佛三昧若衆生憶佛念佛現前當來必定見レ佛去レ佛不レ遠不假方便自得二心開一如染香人身有二香氣一此則名二香光莊嚴一我本因地以二念佛心一入无生忍一今於二此界攝二念佛人一歸二於淨土一讀經とは滅後五品の第二讀誦品也經云何況讀誦受二持之者謂內以二圓觀一更加二讀誦一如二膏助レ火止觀云讀誦如膏圓觀如レ火文句云看レ文爲レ讀不レ忘爲レ誦信心故受念力故持云々口業をおさめつへしとは口業とは口四の罪也十惡の中也所謂妄言綺語兩舌惡口也優婆塞五戒經加說二無義語一而爲二五惡一也爰をたちてゐる故に口業ををかさぬと云なり必禁戒をまもるとは釋氏要覽云古師云尸羅此云レ戒以二止レ過レ防レ非爲レ義增輝記云戒者警也警策三業遠二離緣非一也優婆塞戒經云戒者名レ利能制二一切不善法一故云々境界とは止觀に十境を立たり所謂十境とは一陰入境二煩惱境三病患境四業境五魔事境六禪定境七見境八慢境九二乘境十菩薩也獨居する故に我に對する境かなき故にまもらねとも禁戒をたもつなり

○若あとのしらなみに△源都督のなかれをならふ この詞和歌管絃に慰る趣をのへたり跡のしら波とは觀音寺を建とき沙彌滿誓か詠る歌「世中はなにゝたとへん朝ほらけこき行舟のあとのしらなみとよめる事なり風情をぬすみとは和歌に三盜ある心也ひけの詞也和歌をよくよまぬ心をいへり潯陽の江を思ひやりてとは琵琶行の心也初句に潯陽江頭夜送レ客楓葉荻花秋瑟々とあり楓葉にかつらを思ひ合たるにや白樂天自序云元和十年予左二遷九江郡一司馬明年秋送二客湓浦口一聞二舟船中夜彈二琵琶一者聞二其音一錚々然有二京都聲一云々源都督とは西宮左大臣高明公なるへし左遷して帥に成給也都督は帥の唐名也ならふと云もひけのことは也

一方丈元正天皇釋書云養老七年二月詔二滿誓法師一造二觀世音寺一滿誓誰是右丞也口云 誓靈龜六年尙出右丞是于薙レ髮とあり

○若あまり興あれは△△心をやしなふはかりなり 此詞も樂をたのしむ事をいへり　秋風樂流泉曲

○又麓にの一のしはの庵あり△△ほくみをつくる 此詞少人の無欲なるは友たる心をいへり大人者如

赤子なと云心なるへし小童とは　法師云七八歳已上乃至未レ娶者之總名也釋名曰十五曰レ童故禮有陽童牛羊之無レ角曰レ童山無二草木一曰レ童言未冠者似之故云々童と樂事の同事をいへりつはなをぬきは春なり岩なしとるは夏也又ぬかこをもり芹をつむは秋なり或はすそはの田井にいたりて落穗をひろひてとは冬なり四季をつらねたり或は夏はもらして三季を云ともいへり或亦或字を以てみるへし

○若日うらゝかなれ岑によちのほりて△△△△△△△△△△△△△△△△△心をなくさむるさはりなし

此詞日の山の樂をいへり勝地とはすくれて面白所をいへり前赤壁賦云且夫天地之間物各有レ主苟非二吾之所レ有一雖二一毫一而莫取惟江上之淸風與二山間之明月一耳得之而爲レ聲目遇レ之而成レ色取レ之無レ禁用レ之不レ竭是造物者之無盡藏也而吾與子之所二共適一この心を用てぬしなしとはいへるなるへし

○一歩わつらいなく志さしとをくいたるときは△△△△△△△△△△△△△△△△且は家つとにす

此詞とをく風景を樂ことをいへりすみ山笠とりは岩間までの道なり岩間とは本尊観音なり開山等重る可勘石山者元亨釋書云石山寺者聖武天皇創二東大寺一鑄二一十有六丈遮那銅像一多聚レ金爲レ薄此時本朝未レ有二黃金一帝詔二良辨法師一曰傳聞和州金峰山其地皆黃金也師祈二金剛藏王一得レ金資二銅像薄二不二亦宜一乎辨入二金峰山一持念夢藏王告曰此山黃金不二敢自恣一也今示二汝別方一近州湖西勢多縣有二一山一如意輪觀自在靈應之地也汝至レ彼持念必得二黃金一辨便赴二勢多一時老翁坐二大石上一釣レ魚辨問曰汝何人對曰我是山主比良明神也此地觀音靈區言已不レ見辨就二其石一縛レ廬安二如意輪像一持誦不レ幾與州始貢二黃金一爾後刻二丈六大悲像一藏二先像於中一亦造二金剛藏王及執金剛神一安二左右一其像各八尺當レ寘二基趾一地中得二五尺寶鐸一益爲二靈地一とあり蟬丸猿丸か傳諸抄にあり不及載之也櫻をかりはらひを折は春なり紅葉をもとめ木のみをひろひは秋なり佛に奉り家つとにす　如是おほく對をとりてかけり文の躰なり奇妙の對ともありゆるかせにみるへからす

○若夜しつかなれはまとの月に△△△△△△△△△△△△△山中の景氣おりにつけてつくる事なし

此詞ひの山の風景につけて思ひをのふることをいへり窓の月に古人を忍ひとは朗詠詩に三五夜中新月色二千里外古人心と云にてかけり猿の聲に袖をうるほすとは絶句注宜都山川記曰峽中猿鳴行者歌曰巴東三峽猿鳴長悲猿鳴至二三聲一聞者涙沾レ衣とあり月に古人を忍ふ歌さるの歌あまたありしるすにをよはす螢はとをくまきのしまのかゝり火にまかひ喜撰か歌に「木の間よりみゆるは谷の螢かも釣する舟の沖に行かもとよめるは宇治山にての成へけれは喜撰かむかしを思へる心あるへし次の曉の雨も樂天か詩にてかくと見えたれは喜撰か歌と對にかけるなるへし曉の雨とは廬山雨夜草庵中と樂天か作る詩の心を用たりとみえたり喜撰か行ひをしたひ樂天か才をねかへる心あはれふかし山とりのほろ〳〵とは行基菩薩の歌に「山鳥のほろほろとなく聲きけは父かとそ思母かとそ思と云歌にて書り歌の心は梵網經に不救存亡戒云故六道衆生皆是我父母也而食者即殺二我父母一古迹云皆我父母者起二普親觀一如二世尊云一我不レ能レ見二一切有情長夜不三曾爲二汝父母一云々此心にてよみ給成へしほさつにてましませは菩薩戒の心を用給といはんには由あるへき歟又云心地觀經云有情輪廻生二六道一猶如三事無二始終一或爲二父母一爲二男女一生々世々互有レ恩云々○かせきのちかくなれたる　とはかせきとは鹿の事なり春日明神のかしまよりかせきにのりてとよみ給へるにてかけりとみえたり行基の歌を用明神の歌を用てかける事つゐをとる事尤可愛事なり西行高野にてよみて寂然かもとへをくる十首のうちに「山深みなるゝかせきのけ近さに世をとをさかるほとそ知るゝ春日明神御歌「かしまよりかせきに乘て春日なる三笠の山の白雲の宮

○おとろしき山ならねとふくろうのこゑをあはれむ　とはひのゝ外山と云とあるによりておそろしき山なりぬといへり源氏物語夕顏卷にとりのからこゑに鳴わたるもおそろしき山になくらんふくろうは是にやとあり西行高野にありて寂然かもとへの歌十首のうちに「山ふかみけちかき鳥のをとそへて物おそろしき梟の聲

○山中の景氣おりにつけてつくる事なし　とは上に云所をすへて決していへり況やふかく思ひとは

造物は無盡なれはみる人によりて色々の樂ありと云事をいへり我みる所を謙退していへり

○大かたこの所にすみそめしときそ△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△土居こけむせり

此詞外山にすむとし月をしるしたり白地（アカラサマ）と云に二の心あり一には日の山に久くはゐましきと思しといふ心あり一にはよはひもたけ無常の世の中なれはやかて終をとりぬへけれはしはしのまにてあるへしと思ひしにと云心もありとみるへし

○をのつから事のたよりに都をきけは△△△△△△△△△△△△△△△△のとけくしてをそれなし

此詞世間と山居とをくらへて安樂なることをのへたり

○程せはしといへとも夜ふす床あり△△不足なし

此詞ひさをいるゝに易安なる事をいへり山居はをそれなきのみにてあらは身をやとすには金殿玉樓にもかはらす樂と云心をいへり

○かうなは少き貝をこのむ△△我またかりのことし此詞山居ありさまのひさをいるゝにすきぬたのしみをたとへをとりていへり

○身をしり世をしれらは・・・愁なきを樂とす此詞我身安樂なるによりてそのてたてを人にをしへたるなり殊勝の心なり後人ゆるかせにみる事なかれ

○すへてよの人のすみかを作るならひ△△△△△△△△△△△△△△△人のためにつくらす

○此詞世間の人の家を作ると山居の家を作るとのことをくらへて方丈をつくることをいへり

○ゆへいかんとなれは今のよのならひ此身のありさま△△△△△たれをかやとした・れをかす・へん此詞方丈をつくる由來をのへたり

○それ人の友たるものは△△△△△△△△△△△△・△△△△情あると直なるとをは愛せす

此詞世間に友のなき由來をいへり池亭記云近代人世之事無ニ一可レ戀人爲レ師者先レ貴先レ富不ニ以レ文次ニ不レ知無レ師人爲友者以レ勢以レ利不ニ以レ談交ニ不レ如無レ友予杜レ門閉獨吟獨詠云々　如此心詞よく似たり

○糸竹花月を友とせんには如す此詞友たる者を擧たり非情の物を友とする心記の中に多くみえたり

○人の奴たるものは賞罰のはなはたしきをかへりみ△△△△閑なるをはねかはす此詞世間の奴たるもの丶我身にしたひにくきゆへをのへたり
○唯我身を奴とするにはしかす　此詞奴をもたぬか勝ることをいへり　白氏文集歸田化ニ吾足一爲レ馬吾因以行レ陸化ニ吾手一爲レ彈吾因以求レ肉形骸爲ニ異物一委順心猶足幸得且歸農安知不爲福況吾行欲老暫若風前燭孰能俄須間將心繫榮辱
○若すへき事あれは△△いか丶他の力をかるへき此詞奴のあると奴のなきとの損益をあけてなきかましなりと決したり是養生成へしとは佛説醫經に病を得る十の縁をとけるに一には久坐とありこの心なるへしいかにいはんやとあるは動は不養生なりともと云心也○衣食のたくひ又おなし　此詞は奴をもたぬに衣食をあり次第にする同しと云ことを擧たり○藤の衣麻のふすま　したかひてはたへをかくし野へのつはな峯のこのみ命をつくはかり也　この詞衣食ありさまをのへたり佛道修行のものはかくのことし是は止觀一方便の第二衣食具足のこと也衣に有レ三一者如ニ雪山大士ニ隨ニ所得衣一蔽レ形即足不レ游ニ人間一堪忍力成故二者如ニ迦葉等一集糞掃衣及但三衣不レ畜ニ餘長ニ三者多寒國土如來亦許ニ三衣之外畜ニ一百衆具一食亦有レ三一者上根大士深山絶レ世菜根草果隨レ得資レ身二常乞食三檀越送食僧中淨食云々衣食ともに三の品あるに長明かあり樣は衣は迦葉に似たり食は上根大士に似たる也糞掃衣者南山云世人所レ棄無ニ復堪用一義同ニ糞掃一體是賤物離ニ自貪着ニ不下爲ニ王賊一所上レ貪常得資レ身長レ道文止觀云深山絶レ迹去遠ニ人民一但資甘果美水一菜一菓一而已或餌ニ松柏一以續ニ精氣一如ニ雪山一甘香藕等如レ是食者上士也文此道宣天台の釋を以て心ゑぬへし
○人にましはらされは△△△△△△△あまくす此詞衣食のはたへをかくし命をつくはかりなるかかへりて益ありて樂める事を述たり
○すへてかやうのくるま△△△△たくらふるなり此詞閑居の勝たるを云て世間を云をとすにあらすと用捨してかくいへりすへては衣食にかきらす此記の中に云述たる事ともと云心なりかやうの字心を付へし

○大かた世をのかれ身をすてしより△△△△折々の美景に殘れり　此詞山居の身となりての心得を述たり命は天運にまかせてとは池亭記云壽夭者付二乾坤一丘之禱久焉とあり又は歸去來賦云聊乘レ地以歸レ盡樂二夫天命一疑亦者易云樂レ天知レ命故不レ憂文此心あり身をは浮雲になすらへてたのますとは法智大師行業碑宋清獻公文云知二身變滅一如二浮雲一云々この詞の心なり枕の上にきはまりとは夢のことしといふ心なるへし美景に殘れりとは四季轉變の風景のうつくしきにはこのよになこりか殘ると也その外世になこりおしき心なしと云心はへなり

○三界心一なり△△△△△△△宮殿ものそみなし　此詞尤殊勝也此方丈の樂の根本なり能々可思之三界心一とは三界唯一心々外無別法の經の心也心是一切法一切法是心と釋せり三界とは三界義云欲界色界無色界此云二三界一也欲界衆生具二三事一故名二欲界一一者有二睡眠一二者有二段食一三者有二婬欲一故也色界天人有二淨妙色故身相端嚴等是也無色天人無レ有レ形唯有レ心故○今寂しきすまゐ△他の俗塵に着する事をあはれふ　此詞心ゆへに樂事を云りみつからと云字心をつくへし乞食となれるとは法云集出家爲レ成二道菩薩一乞食者破二一切憍慢一故寶雲經云凡乞食分爲二四分一一分奉二同梵行者一一與二窮乞人一一與二諸鬼神一一分自食肇法師云乞食略有二四意一一爲レ福二利群生一二爲三折二伏憍慢一三爲レ知二身有一レ苦四爲除二去滯着一此心をしるへし乞食とは出家たるもの丶頭陀をするを云也頭陀の十二の功德の內に常乞食を第二にあけたり智論云應供因二乞士一以感德とありこの心は乞食の修行によりて未來應供の德をうるとなり俗塵に着するとを憐ふとは色聲香味觸法を六塵と云なり法界次第云一色一切對レ眼所見之色名爲レ色色有二二種色一攝二一切色一一正報可見色衆生身色青黃赤白黑色等二依報可見色外無知色青黃赤白黑色等也聲一切對レ耳所聞之色曰レ聲々有二二種聲一攝二一切聲一一從二正報色一出レ聲衆生語言音聲也二從二依報色一出レ聲香一切對レ鼻所聞之色名レ香々有二二種香一攝二一切香一一正報色處香衆生身中香臭也二依報色出香外一切無知色中所有香臭味一切對レ舌所知之色名レ味々有二二種

味一攝ニ一切味ニ一正報色處味衆生身中之六味也二依報色處味外一切無知色中所有六味觸一正報色處觸衆生身中冷暖澁滑等十六觸也法一切對レ意所知之法名レ法々有ニ二種法攝ニ一切法ニ一者心法是中除ニ心生ニ但取ニ相應諸心數法ニ二者非心法即過去未來色法及心不相應行及三無爲法也　法鏡經云　凡夫貪ニ著六塵ニ猶ニ餓夫貪レ食不レ知ニ厭足ニと說りこれらを以てしるへし又者釋氏要覽云頭陀梵語杜多誤言ニ抖擻ニ謂三毒如塵能坌汚眞心ニ此人能振掉除去故訛稱頭陀是にてみれは俗塵といへるは三毒をさすへきにや都にいてゝ乞食して三毒のちりをのそきて山中にて都の人の三毒のちりに着するをあはれふと云にや然共色聲香味觸法の六塵可然三毒の說むつかし

○若人のいへることをうたかはゝ△△△△されはその心をしらす　此詞山の人しれぬ樂をたとへを以てのへたり莊子古事魚同見と云事あるにてかけると見へたり○閑居の氣味又かくの如し　此詞たとへを合結したる也○すますして誰かさとらん此詞長明か如く不山居しては山居の趣をしらしと也我とひとしき人なきほとにしるましきと也今のよに友なふべき人もなしと云心也○抑一期の月かけかたふきて餘算山のはにちかし此詞月によせて年の寄たることを述たり算とはあまりの年のかすといふ事也○忽に三途のやみにむかはんとき何のわさをかかこたんとする　此詞は如此草庵を愛し閑寂に着するならはほたい心うすくなりて三途におつるにてあらんかそのときさためてをこたりしことをかこたんそといへり三途とは名義集云言ニ三途ニ者撫華云途道也論語云遇諸塗　通惠云　有本作レ途非也須レ作ニ塗之泥之塗ニ又妄云ニ畜生餓鬼地獄ニ名ニ三塗ニ當レ知ニ此畢指ニ地獄ニ也然此　指歸之說非ニ但違ニ於吾敎四解脫經刀血火三之文ニ又復違ニ其應師音義ニ後學尋　檢自見ニ妄立ニ云々爰に略して如此猶名義集五十二丁にくはし是より終りまては閑寂に着する非をのへて修行をはけます心をいへり是さんけをいへりと見えたり懺悔者止觀云懺名ニ陳ニ露先惡ニ悔名ニ改レ往修ニ來とあり又は弘決云金光明疏釋ニ懺悔品ニ彼疏廣釋レ名云懺名ニ白法ニ悔名ニ黑法ニ白法須レ尙黑　法須レ捨又懺名ニ披陳ニ悔名ニ

斷讀ニ　止觀第二の二四十三丁云　又行中寂然有ニ定相一
若不レ察レ之於レ定生レ染貪ニ着禪味一
佛云若先擧レ過○於レ法起レ著故云ニ生染一
今觀ニ定心ニ心尙無レ心定在ニ何處一當レ知此定從ニ顛
倒一生如是觀時不レ見ニ於空及不レ空一即破ニ定想一不レ
生ニ貪着一以ニ方便一生ニ是菩薩解一
佛云今觀下明レ得ニ即離ニ貪ニ著禪味一縛ニ體ニ同法
界一遍應ニ一切一名ニ方便生一
○佛の敎給をこりは事にふれて執心なかれと也
此詞我をこたるに付て佛の敎をさとる心なり方便
品云舍利弗吾從ニ成佛一已來種々因緣譬廣演ニ言敎
無數方便ニ引導衆生令離ニ諸著一文釋云說ニ散十善一
離ニ三塗著一說ニ淨十善一離ニ欲界着一說ニ三藏法一離見
思說菩薩離ニ涅槃着一說ニ佛法一則離順道法愛着也云
々此心は猶可詳
○いま草の庵を愛△△△△△△△△△△障なるべし
此詞我身のとかを擧たり出家は樹下石上のすまる
をするも居所に着あらせしか爲なり閑寂にして
ゐるは修のさはりあらせしかため也さるをそれに
着せはさはりとなると也止觀着するは邪に同しと
ある心なるへし諸法は空の理をさとりて山居して
身をも捨たるは佛法修行の爲なるに佛法修行はせ
すして山居したる身をよしと思ふはとなり空をさ
とりたる事もなしとなり中論云諸佛說ニ空法一本爲
レ化ニ於有一若有ニ着レ空者一諸佛所レ不レ化云々智度論
云觀ニ其空一人先有ニ無量布施持戒禪定一其心柔軟諸
結便薄然後得ニ眞空一邪見之人應レ無ニ此事一但以ニ憶
想分別邪心ニ取レ空譬田舍人初不レ識レ鹽見ニ人以レ鹽
着ニ種々肉菜之中一而食上問言何以故爾與語此鹽能
美ニ物味一他便抄レ鹽滿口食レ之鹹苦傷レ口遂而問曰
汝何以言ニ鹽能作ニ美彼貴癡人此當レ籌量得レ中令ニ
美云何純食然無智人聞ニ空解脫門一不レ備ニ功德一但
欲レ得レ空是爲ニ邪見一斷ニ諸善根一云々○いかゝ用な
き樂をのへてむなしくあたら時を過さん　此詞愚
を思ひゑりて善を修すへきことをいへり用なきと
は修行の用にたゝぬ事をいへり
○ゑつかなる曉△△△△△△△△忘心のくるはせるか
此詞はさとりたる心歟着したる心に對していへ
る也山林にましはるとはさはりなく道を行かん爲
にすむ所にかへりて着すれはかくいへり止觀云若

深山遠谷途路艱險永絶二人蹤一誰相惱亂恣レ意禪觀
是處究淨名居士のあとをけかせりとは方丈のこと
也名義集曰維摩羅什曰秦言二淨名一垂裕記云淨即眞
名即應身眞即所證之理應即所觀之身生曰此云無垢
稱二其晦一迹五欲一超然無レ染清名遐布故致二斯號一大
經云威德無垢稱王優婆塞西域記毘摩詰唐言二無垢
稱一舊曰二淨名一然淨則無垢名則是稱義雖レ取レ同名
乃有レ異舊曰二維摩詰一者訛也けかせりとは淨名の
ことく不思議解脱の法をあらはす事ならすと云心
なり周梨槃特とは弘二云法句經第一云佛在二舍衛一
有二比丘一名二槃特一新作二出家一稟性頑塞佛令下五百
羅漢一日々敎上レ之三年始獲二一偈一今文依二阿含大論一
故云二九十日一佛知愍傷即呼着レ前授二與一偈一佛云
守レ口攝レ意身莫レ犯如レ是行者得レ度レ世槃特感二佛
恩深一誦二得上口一佛告二槃特一汝今年老唯誦二一偈一
人皆知レ之不レ足レ爲レ奇須レ解二其義一所謂身三口四
意三觀二其所起一察二其所滅一由レ之生レ天由レ之墜レ淵
由レ之得レ道泥洹自然分別乃至無量妙法心開意解得
二阿羅漢一由レ無レ遮故其根雖レ鈍易レ得二道果一得二道
果一已五百比丘尼請敎誡説法次當二槃特一至レ彼食訖

諸尼皆笑昇レ座已自慚鄙曰自幸薄徳得レ爲二沙門一
最爲頑鈍所レ學一偈粗識其義當二爲敷説一諸菩薩牟
尼先知二其偈一預欲二前誦一口不レ能レ開驚怖悔レ過槃
特於是依二於佛説一次第敷演諸尼皆得二阿羅漢果一後
匿王請二佛及諸比丘一於二正殿一坐佛欲レ試二其神力一
令三其取レ盋來二至王門一守門者不レ許二其前一其於二門
外一申レ手送レ盋王驚問レ佛此誰手耶佛言槃特王問但
誦二一偈一云何乃爾佛言雖レ誦二千章一不レ義何益不レ
知二一要一聞可レ滅レ意雖レ誦二千章一不レ義何益不レ知二
一要一聞行得レ度雖レ誦二千章一不レ解何益解二一句法一
聞可レ得レ道二百比丘聞レ之得二阿羅漢一王及夫人方
乃不レ疑此偈乃對二極鈍者一説豈可レ例二於多聞一增二
智惠一廣讀二諸異論一則知二智者意一等耶然皆各有レ意
勿二妄去取一若增一第六云兄見下弟誦二法句一難上語言
汝若不レ能レ頌二法句偈一還作二白衣一弟聞レ之詣二祇洹
門一泣佛見問レ之具答二兄言一佛言成二菩薩一可レ由二汝
兄一佛手牽詣二靜室一令レ誦二掃帚一復名二除垢一槃特思
念灰土瓦石除即清淨結縛是垢智惠是除今以二智帚
掃二除諸垢一今文所レ引偈文即大論及大經廿四經云
四事爲二涅槃因一若言下懃修二諸行一是涅槃因上者無レ

有是故槃特ニ思ニ惟一偈ヲ得ニ第四果ヲ天台三大部補注第五ニ云周梨槃特亦言ニ周梨槃陀伽ト此云ニ小路邊生ト又云ニ蛇奴ト於レ路而生性多愚魯昔爲ニ法師ト善ニ經律論ヲ有ニ五百弟子ト秘ニ吝佛法ヲ不レ教レ人故今受ニ愚報ヲ同云周羅槃特將ニ弟子一千六百人ヲ往ニ由乾陀山ニ如レ是聖人皆不ニ涅槃ヲ於ニ刀疾飢三災之時ニ人壽千歲時佛法盡滅而衆生壽復更增長至ニ百歲時ニ十六羅漢與ニ諸弟子ト下ニ閻浮提ニ說法敎化云々及はすと云心二の心有法句經と補注との說にて知へし○その時心更にこたふる事なし此詞心かとひつめられて返答のなき體なり舌根をやとひてとは六根のたかひなれは也尤あやまりとうけたるなり少もたかひあれは返答あるゆへ也舌根をやとひてとは六根のたかひなればなり尤誤とうけたるなり少もたかひあれは返答あるゆへなり終の結句面白かきたり○不請念佛兩三度申てやみぬ　此詞論語にあやまりを二たひせす又はあらたむるにはゞかる事なしとあることく心に返答はせすしてあやまりたりと云心にて念佛をはや申てやみぬるなり問答して云をはりたる體漁父辭に似たり是も文の一體なり文筌曰結尾九法一曰問答なり問答を起して折伏して終レ之とあり此記にかなへり

建暦の二とせ△△△△△△△△△△△これをしるす

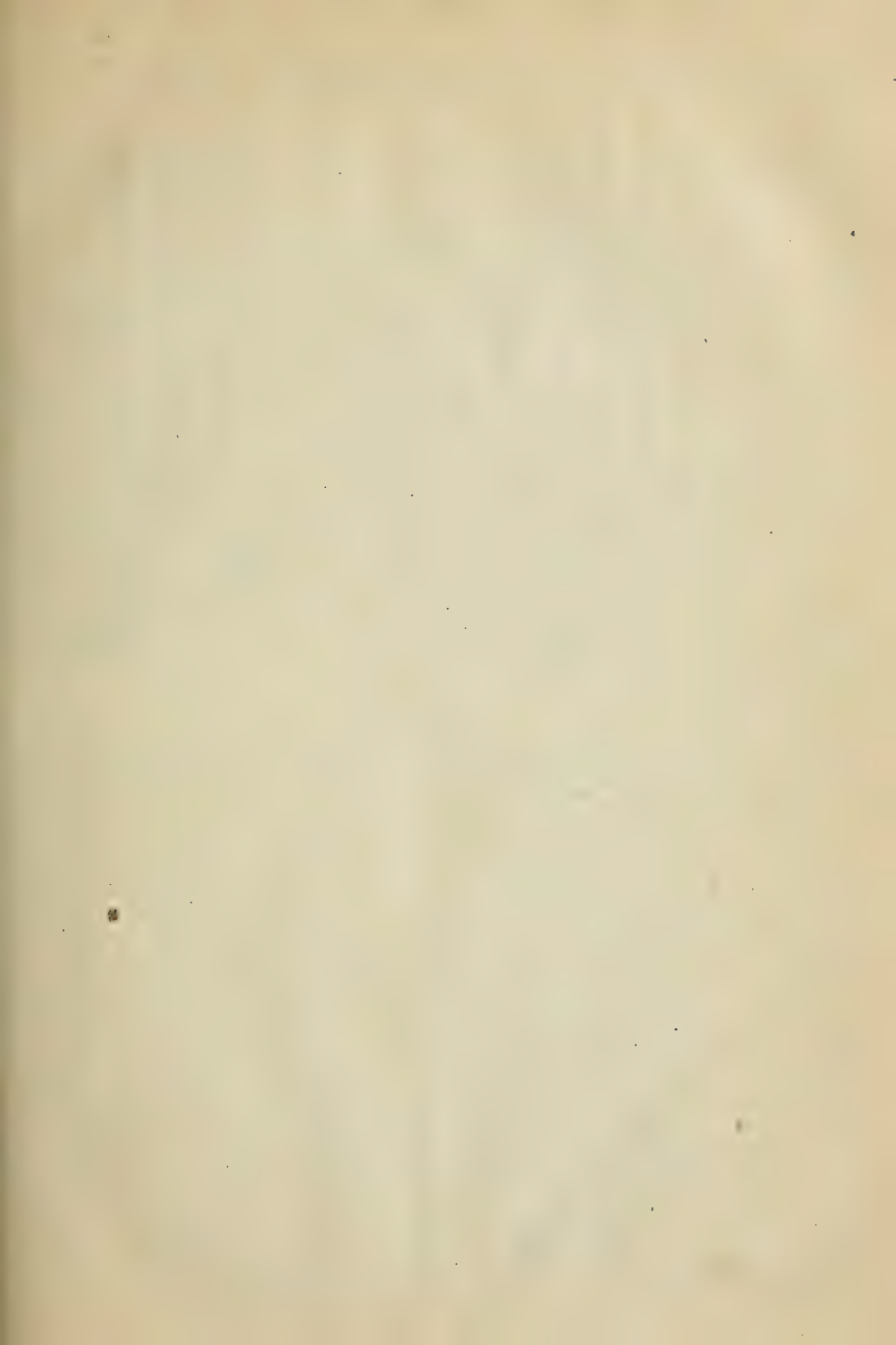
○此詞記をかく時代年月日をしるせり作者の名をみつからしるすは醉翁亭記に似たり桑門とは飜譯名義集曰沙門或云桑門六物採摘云今案するに沙門は沙迦懣囊の訛音なれは定而梵語そ桑門は文選にある字なれは漢語と見えたり文選西京賦云展季桑門誰能不レ營矣云々蓮胤とは長明か實名なるへし外山の庵にして是をしるす記の體なり

歌に「月かけは入山のはもつらかりきたえぬ光をみるよしも哉

此歌は新勅撰卷第十釋敎部にいれり詞書に云十二光佛の心をよみ侍けるに不斷光佛源季廣とありて此歌ありされは長明か歌にあらすいふかしき事なり猶可尋事也○十二光佛　と云事は阿彌陀佛に十二の名あり謂所雙觀經云無量壽佛威神光明究勝第一諸佛光明所不能及或有佛光照百佛世界或千佛世界取要言之乃照東方恒河沙佛刹南西北方四維上下亦復如是故無量壽佛號無量光佛無邊光佛無碍光佛

無對光佛炎王光佛淸淨光佛歡喜光佛智惠光佛不斷光佛難思光佛無稱光佛超日月光佛若在三途勸苦之處見此光明無復苦壽終之後皆蒙解脫云々

萬治三年子葉月下旬槃齋所作抄以懇望令書寫畢

英澄

鴨長明方丈記流水抄

鴨長明方丈記標題

鴨　山城國愛宕郡下鴨河合の社神職の姓なり昔時洛北出雲路に住し女鴨河にあそびて鴨の羽を笄に加へたる丹塗の矢の流れ來るを執得て是に感通し産る處の男兒初て賀茂氏と稱す其事顯昭の袖中抄錬禪師の元亨釋書等に詳也故に後世上の宮に賀茂の字を用ひ下の宮に鴨を用ふ所謂下鴨は御祖神と號す上賀茂別雷神の父大山咋神也とぞ廿二社次第に見えたり當時鴨の社司の中廣庭梨本の兩家かはる〴〵社務職に補せらる鴨脚家は祝部たり公文氏と稱ずる家傳て云長明の後裔也とぞ

長明　作者部類云鴨禰宜長繼男應保元年十月十七日中宮叙爵云々東鑑十九云建暦元年辛未十月十三日鴨社氏人菊大夫長明入道法名蓮胤依二雅經朝臣之擧一此間下向奉レ謁二將軍家一実朝公及二度々一云々而今日當二幕下將軍右大将頼朝卿御忌日一參二彼法華堂一念誦讀經之間相二催懷舊之涙一註二一首歌於堂柱一

草も木もなひきし秋の霜きえて空き苔を拂ふ山風

家集二巻世に傳はれり源俊頼帥大納言經信卿男俊惠法師俊頼次男の門弟にして和歌の道に達し琴瑟を翫て胡渭州の三秘曲までを受つたへられたり一歳八月十五夜の月くもりけるに

吹拂へ我神山の峯の嵐こはなをさりの秋の空かは

此歌を讀れしにひとしく雲晴て月亦朗なりしとぞ素より鴨の神社につかへて南大夫或は云菊大夫と號す安元治承の比及社務職を望けれども叶はさりしを怨み憤りて薙髪し蓮胤と稱じて洛外の大原に退隱其比さきだちて世をそむきける人のもとへ

いづくより人は入けんまくづ原秋風ふきし道よりそこし

新古今雜下に身の望かなひ侍らで社のまじらひもせでこもり居て侍けるに葵を見てよめる

見ればまづいとゞ涙もろかづらいかに契りてかけはなれけん

土御門院の朝建仁元年後鳥羽上皇和歌所を置れ源家長を開闔とし藤原清範鴨長明藤原秀能を寄人にすへらる然れとも幾程を經す辭して退去す其後上皇もと

のごとく寄人に還し補せらるへき勅ありしに

　しづみにき今さら和歌の浦浪によせばやよらんあ
　まの捨船

此歌を献りて重ねてつかへず東南北越の靈區にさぞらひ多くの勝緣をむすべり唯識止觀の旨を學び老莊の道に本づく建永承元の間幽居を日野の外山に移し環堵の室に志を養ひ終りを全せらると云々長明家集に美濃國の虎溪といふ山に引こもり侍りし比參學のともからとふらひ來り侍りければ

　世のうさにかへたる山のさびしさをとはぬぞ人の
　情なりけり

心敬僧都のさゝめごとの記に長明が石の床には後鳥羽上皇二度御幸ありしと記さる誠に有難き世の覺にこそ件の石の床今も外山に在り草山集卷四遊二石田一記云訪二鴨長明舊蹤一幽居之態其方丈記盡焉有レ巖俗名二方丈石一或云二千人石一高二丈許其上幾平而可レ座二數十人一云々幽齋法印玄旨（俗名長岡兵部大輔藤孝）の集に日野と云處にまかりけるつゐでに長明の浮世をはなれて住居せし由申傳へ侍る外山の庵室の迹を尋て見侍るに大きなる石の上に松の年ふりて水の流いさぎよく心の底さこそとおしはかられ侍る昔の事などおもひ出て

　岩かねに流るゝ水も琴の音の昔おぼゆるしらへに
　はして

事迹はあら〳〵十訓抄東齋隨筆隱逸傳人物史等の書に擧けたり生誕終焉の年記はいつれの實錄に遺れるにや管見の考るなし或は云久壽元年甲戌に產れ建保四年丙子六月八日寂す六十三歲とも云り讀る歌千載新古今續後撰以下代々の撰集に入れり但新勅撰には見え侍らす子細あらんなれどもおもふ處ありて毫を閣く瀨みの小河の詠は（新古今神祇部）みづからも秀逸のおもひありし事無名抄に見えたり

方丈　祖庭事苑卷六云今以二禪林正寢一爲二方丈一蓋取二則毘耶黎城維摩之室一能容二三萬二千師子座一有二不可思議之妙事一故也云々（今案に佛家に四法界あり所謂理法界事法界理事無碍法界事々無碍法界也維摩居士の大室に件の師子座を入られしも則此法界にこもれり）書言故事云長老所レ歸室曰二方丈丈室一唐顯慶中王玄策使二西域一至二毘耶黎城東北四里許一維摩居士示レ疾之室遺址疊レ石爲レ之王策躬以二手板一（其長一尺）縱横量レ之得二十笏一故號二方丈一維摩詰淨名居士は釋尊と同代にして大悟の優婆塞也一丈四方の石室に入て病に臥せり文殊大士行向ひ談ありし

事則維摩經續高僧傳等に委く見えたり長明の外山の居石座のごとき淨名の方丈に准據せられし事は此集の卷末に記す

記 說文云疏也疏謂二一々分別記一レ之廬云記者以備レ不レ忘蓋敘レ事如二書史法一也如二尙書顧命篇一是也敘レ事之後略作二議論一以結レ之云々すべて史記日記の類事をその儘につらね述るを記とは云也長明の無名抄に假字にもの書事歌の序は古今のかな序を本とす日記は大鑑のことざまをならふ和歌の詞は伊勢物語ならびに後撰の歌の詞をまねぶ物語は源氏に過たるはなし皆これらをおもはへて書へしと云々凡長明の遺稿は無名抄四季物語伊勢の紀行鎌倉道の記瑩玉集發心集方丈記など也其内無名抄は大原退隱の比の作と見えたり四季物語發心集は外山閑居の後の書也但四季物語の事二條爲定卿飛鳥井雅世卿三好伯陽軒長慶等の奥書ありて有識の家に秘藏せられ世に見るものまれなり當時の梓に鏤し本は長明の作書にはあらず道の記も名のみにして今既に傳へず流布の本は仁治三年の秋鄙曲の好士關東へ下向せし路次の記なり又海道記といへるも貞應二年の集にて是も長明の遺稿にはあらず然ども澄月の歌枕には海道記の歌を擧けて長明と書れ侍るいかなる故かと覺束なし

今案に此書は順德院の朝建曆元年長明鎌倉へ下向有し翌の年外山の草庵におゐて記されたる抄物なり一生著述の終りにして此後の筆作有べからず方丈の事に便り維摩の十喩を地盤として文飾に筆力を勞せずたゞ志の歸く處を擧られ侍り其趣は發語三段の間に釋するがごとし是より前首書（山岡元隣子）泗說（貞德高弟加藤盤齋）等の抄出ありて世の人もてあそぶといへどもたゞ本據のあらまし而已にて文意の深切を解する事なし況予か短才にして全く是を覺すにはあらずといへども粗按排して增補ひ官家の藏書をもつて本文を校合し刻刷氏にあつらへ侍る然るべくは末の代につたへて江山風雲のたすけにもなし侍らんと也于時寶永三年の春釣谷散人槇嶋昭武是を記すと云レ爾

鴨御祖社氏人系統

○鴨主（禰宜）―眞繼―吉繼―門蟲―綱直―綱良―氏主（累世禰宜）―

―弘雄（仁明朝禰宜）―永主―時主―千繼（貞觀十六年叙爵）（祝禰宜相續）

昌泰三四月叙爵
宇多朝禰宜祝部相分爲兩家

—眞吉—惟秀（禰宜）—惟淸—惟道—惟季

—季長—季綱　累代禰宜崇德朝正四位上

—有季（正五位下）—季平（正四位上）

—長繼（禰宜）

—長守　従五位下

—長明　従五位下　南大夫

鴨長明方丈記流水抄　上

行川の流れは　發語第一段是此集の小序也山岡自慍齋の首書に論語子罕篇子在二川上一曰逝者如レ斯不レ舍二晝夜一とあるを引れたり尤逝水の本據たるべし今案ずるに文選卷十六陸士衡歎逝賦に悲哉川閲レ水以成レ川水滔々而日度世閲レ人而成レ世人冉々而行暮人何世而弗レ新世何人之能故野毎レ春其必華草無二朝而遺一レ露云々長明この賦に本づきて書出され侍ると見ゆ十訓抄にもしか侍りなを維摩經方便品に水性不レ住但池沼方圓得レ之則住非二性之住一也人亦如レ是又十喩に是身如泡不レ得久立一などの文段皆此發語の奥意にて侍るべし然るを逝水の縁を以てしはらく歎逝賦の詞を借り用られし粉骨にこそ標題に載することく此書は作者獲麟の記にして一生涯見聞する處の轉變を擧け畢竟身心を安樂に處して性を養ひ名利をいとふの要路を說述られ侍ればさまで文法の沙汰にも及ばず古例先蹤當代當時の詠までも心にうかふを以て何の造作もなくつかねむすはれ侍ると見ゆ其儀は所々の文段にあらはなり羅山先生の野槌に衆好のつれ〳〵

なるまゝにと書出されしは此記の發語にまされる由見え侍れどもこの小序は死生無常觀念の骨髓より發出の文段なる故大形の筆力にはあらす心をつけて再三翫味すへし南花老人云死生亦大矣而不レ得二與レ之變一是莊子全篇の一大條貫にして釋氏の一大藏經又此數字の中を不レ出と林希逸の口義に見えたり鶴林玉露にも佛家の所レ謂生滅々已寂滅爲樂は乃老莊の本意なりと有此記の意味又是を以て量り知へきにこそ後撰集に大江千里「流れての世をは賴ます水の上の泡に消ぬるうき身とおもへは　夫木集定家卿「しつむ身はかへらぬ老の浪なれは水ゆく川の果そかなしき

しかも本の　文選長歌行云百川東到レ海何時復西皈載叔倫詩沅湘日夜東流去不下爲二愁人一住少時上

よどみに　よとみは委の字也水流の遲滯して聚る處を云爾雅註鄭玄曰委流之所レ聚也と有天台止觀には湉の字をよめり本朝の俗淀の字を用ゆるはあやまれるなり吳都賦注云淀如レ淵而淺也

うたかた　源順和名に沫雨と書り淮南子注云沫雨雨潦上沫起而若二覆盆一者也清輔の奥義抄にうたかたは水の上につほのやうにうきたるあは也と有後撰の歌に「降やめば跡たに見えぬうたかたの消てはかなき世をたのむかな

かつきえかつ　拾遺に藤原高光「世の中にふるそはかなき白雪のかつは消ぬる物としる〳〵　千載に公任卿「こゝに消かしこにむすふ水の泡の浮世にめくる身にこそありけれ

久しくとゝまる　維摩方便品の十喩云是身如二聚沫一不レ可レ撮二摩一者水流衝擊因成二聚沫一一往似レ有レ撮之則無此身亦爾也云々又云是身如レ泡者上水滴(たゝる)二下水一上水爲レ因下水爲レ緣得二有レ泡起一斯須則無或因レ觸滅一往異レ水如レ實知レ之離レ水無也身亦如レ是云々是等の語を本として書れたる文段なり金剛般若經に一切有爲法如二夢幻泡影一如レ露亦如レ電應レ作二如レ是觀一と說れたるも涅槃經に是身無常念々不レ住猶如二電光一纂レ水如レ淡と侍るも皆維摩の十喩の儀に同し又長明の發心集に大かた此身は有にもあらず又久しくとゝむへき物にもあらずたゝ流來生死の夢の中に因緣をのつから和合して假に業報の形のあらわれたるはかりなり云々

世中にある人と住家と　此詞まことに絶妙の文也と先達も申置れたるなり

玉しき　玉樓金殿なといへるごとく珠玉を以てよそほひ飾れる美麗の稱なり八雲抄にも玉しくはたゞ物をほむる心とあり源氏初音の巻にいとゝ玉を敷るおまへは庭より初見處おほくみがきましたまへる云々萬葉に橘諸兄公「葎はふいやしき宿も大君のまさんとしらは玉しかましを

むね　棟の字也五車勻瑞に屋脊木也と有

いらか　甍の字なり釋名云屋脊曰レ甍圓機活法云屋棟所ニ以乘ヲ瓦也と有　文選蜀都賦比屋連レ甍千廡萬室云々

昔有し家は　菅三品文時の詩に桃李不レ言春幾暮煙霞無レ迹昔誰栖又發心集巻五に百千年あらん爲に材木をえらび檜わた葺瓦を玉かゝみとみかき立て何のせんかはあるあるしの命あだなれは住事久しからず或は他人の住家と也或は風に破れ雨に朽ぬいはんや一度火事出來ぬる時年月のいとなみ片時の間の雲煙となりぬるをや云々是又爰の筆勢に同し新古今に西行法師「これや見しむかし住けんあとならん蓬かつゆに月のかゝれる

所もかはらす　後漢書曰思二其人一至二其郷一其處存其人亡文選思舊賦棟宇存而弗レ毀兮形神逝其焉如萬葉の歌に「ときはなる石室(イハヤ)は今も有けれと住ける人そ常なかりける源氏四阿屋の巻に「里の名も昔なからに見し人の面かはりけるねやの月かけ

いにしへ見し人を　文選歎逝賦序云余年方(なんなんとす)二四十一而懿親戚屬亡多存寡暱交密友亦不二半在一或所下曾共遊二一途一同宴中一室上十年之內索然已盡云々爰の文段前後此賦の趣を以て述られたりと見えたり拾遺に藤爲賴「世中にあらましかばとおもふ人なきがおほくもなりにけるかな　千載に登蓮法師「もろともに見し人いかに成にけん月はむかしにかはらさりけり

朝に死し　是より發語第二段也最初の一段を受て謂返し結語せられたる也法華隨喜功德品に世皆不二牢固一如二水沫泡焔一云々文選陳情表人命危淺朝不レ慮レ夕と有註に左傳趙孟云朝不レ謀レ夕何其長也今案するに爰の文段は莊子秋水篇に時不レ可レ止消息盈虛終則有レ始是所下以語二大義之方一論中萬物之理上と侍るに義同かるへし

泡に似たり　傳灯錄巻卅樂普和尚の浮漚歌云雲天雨落庭中水水上漂々見二漚起一前者已滅後者生前後相續無二窮已一本因二雨滴一水成レ漚還緣二風激一漚歸レ水

云々
しらす生れ　心地觀經に有情輪廻生ニ六道一猶如ニ車輪一無ニ始終一或爲ニ父母一爲ニ男女一生々世々互有レ恩云々宗鏡錄云循ニ色空成一周ニ遍法界一隨レ業發現處ニ異生一時浮ニ沈業海一生死相續云々　西行上人の撰集抄にも　生れ〳〵生れ〳〵て生の初をしらず死し〳〵死し〳〵て死の終りをもわきまへず三途つゐの住家にあらずめぐりと廻る處皆しばしのほどの宿りなりと有是皆無邊の生死無始無終の道理にして心地の法門也此卷末に心更に答る事なしと書れたる同してにをは也深意筆舌に及べからず源氏蘐卷に「おほつかな誰にとはましいかにして始も果もしらぬ我か身そ

又しらす　上にしらすとあるにあたりて書り生死一大事の深理豈外を求べきやたゝ自己の一心にあり本心悟る則ば千條萬端皆空にして拘束せらるゝ處なし是を上にしらすとある段に籠られたり是則作者方丈記を書れたる本志なるべし然れば浮生の一身を寓するの居家なんそ心をつくるに足んや爰を以て作者方丈の室をむすはれたる所以爰の又しらすと書れたる段にこもれり凡物の心をしれりしよりと侍るより不請の念佛兩三返を申て止ぬと書捨られしまて文意悉發語三段の內を出す眼をつけて熟讀すべし

かりのやとり　逆旅寄寓なとゝ書り旅宿の儀也左傳僖公二年註に逆旅客舍也詩格注邸也と有陶淵明詩に家爲ニ逆旅舍一我如ニ當レ去客一選集抄に祇園託宣の歌とて「長き夜のくるしき事をおもへかしかりのやとりを何歎くらん

其あるしと　是より發語第三段なり前の段にて人事の死生を擧け爰の段にて浮世の無常をことはり結語せられたるなり白氏文集に多少朱門鎖ニ空宅一主人到了不ニ終歸一

無常　釋氏要覽云生滅輪廻謂ニ之無常一荀子曰趨舍無レ定謂ニ之無常一

あさかほの露　是も歎逝賦の詞より書れたりと見えたり本草綱目卷三十六云木槿花如ニ小葵一淡紅色五葉成ニ一花一朝開暮斂云々時珍云此花朝開暮落故名ニ日及一曰槿曰蕣猶ニ僅榮一瞬之義一云々法花文句曰迦葉說法曰五欲無常如ニ花上露一見レ陽則晞往生要集卷三に止觀に云無常の殺鬼と云ものは貴人賢人撰はすして威勢有といへ共此身はあやうく脆ければ

朝顔の露水の泡あたに頼もしからぬ也云々新古今清水觀音の御歌「何かおもふ何かはなけく世中はたゝあさかほの花の上の露　選集抄に
見るやいかにあたにも咲る朝顔の花に先たつけさの白露

朝日にかれぬ　中華文粹に僧紹隆か朱槿花の詩に朝開暮落渾閑事祇要㆔人知㆓色是空㆒源氏寄生卷に霧の籬より花の色々面白く見え渡る中に朝顔のはかなげにましりたるをなを殊にめとまる心地し給ふ明るまさきてとか常なき世にもなずらふるが心くるしきなめりかし云々

露なを消す　寄生卷に
消ぬまにかれぬる花のはかなさにおくるゝ露はなをそまされる　新古今曾禰好忠
起て見んとおもひし程にかれにけり露よりけなるあさかほの花

夕を待事なし　是まで發語第三段なり歎逝賦花無㆓朝而遺㆒露又云譬日及之在㆑條恒雖㆑盡而弗㆑悟と有筆勢爰にて結語と見えたり槿花を住家とし朝露をあるしに比しておくれ先たつ遅速は有といへ共畢竟主も空しく住家も朽て共に無常變易の理に歸する事を論し畢て小序三段の義終り此書一部の大綱に備へられ侍るにこそ奥義抄混本歌の證歌に
朝顔の夕かげまたずちりやすき花の世ぞかし

凡　是より此記の發端也說文云凡撮括也大槩也文選註大指也と有すべてと云に同し

物の心を　論語爲政篇孔子曰吾十有五而志㆓于學㆒九條殿遺誡云凡成長頗知㆓物情㆒之時讀㆓書傳㆒次學㆓手迹㆒云々　乙女卷にも學問などして少物の心も得侍らば云々今案するに此記は建曆二年作者七十歳許の筆作と見え侍れば爰は廿歳許の比を斥れたるなるべし夫より四十餘の春秋とつゝけて年數よく聞え侍り

春秋　楚辭云日月忽其不㆑淹兮春與㆑秋代序一歳のことを春秋と云り春に夏をこめ秋に冬をこめたり魯國の年譜を春秋と號するの例なりなを下卷にしるせり

たひ〳〵に成ぬ　天變地妖の類左に記されたる趣のことし但保元平治治承元暦の間兵革の擾亂聊も其沙汰なし天地の變を述て人事をはこめられしにや

今案するに此書隱逸の樂む處を專として書れ侍れは慾に當代の盛衰興亡をあげられん事作者の本意にあらされはなるへし莊子德充符篇云死生存亡窮達貧富賢不肖毀譽飢渴寒暑是事之變命之行也云々誠に此或皆人間世目前の境界也然れとも死生無常の理を悟りて本心全けれは事の感するに隨ひ偏ならす滯らす物に應し自得して操を變せす時に樂をなして生を養ふを德とす長明此義を說述られんか爲に四十餘年の變災をは假に設出され侍ると見えたり小序三段下卷の趣なをよく翫味すへきにこそ

安元三年　八十代高倉院御在位九年にあたれり是歲丁酉八月治承と改元又今年日吉の神輿振天台座主明雲左遷幷に成親西光康賴俊寬等の事あり

四月廿八日　此回祿の事平家物語卷一源平盛衰記卷四に出たり合せ考へし但件の物語は後鳥羽院の朝信濃前司行長筆作の由兼好徒然草に見えたり然れは長明同代の書なり盛衰記は葉室家の編述にて後代の集也今案するに平家物語盛衰記ともに火災旋風遷都の事實は大概方丈記の文法を本として書れたりと見えたり

戌のとき　盛衰記には亥の刻とあり

たつみ　東南の隅なり巽の字を用ふ舊事記白氏文集なとには則南東をたつみと訓す

いぬゐ　西北の隅なり乾の字を用ふ白氏文集には則北西をいぬゐと訓す

はてには　平家物語にはてには大內に吹つけて朱雀門より始て應天門會昌門大極殿豐樂院諸司八省朝所一時か內に皆灰燼の地とそ成にけると有

朱雀門　拾芥抄云長安南西皇城門是謂二朱雀門一云々

大極殿　拾芥云朝堂院正殿名二八省院一又謂二之最大殿一天子臨朝即位諸司告レ朝所云々

大學寮　拾芥云二條南壬生西と有職原抄云大學寮者四道儒士出身處也安二置先聖先師九哲一春秋二仲釋奠有二東西二曹一菅江二家爲二其曹主一云々

民部省　拾芥云宮城內太政官南美福大路西職原抄云邦國土地圖戸口人民之數此官之所レ知也云々

一夜かほとに　呂蒙正詩撥盡寒爐一夜灰吳融詩不二獨淒涼眼前事一咸陽一火便成レ原

樋口　五條の下の小路也富小路は壬生の東西に在り爰は東の方なるべし

猶人を宿せる　平家物語には何の沙汰なし盛衰記卷四には山門神輿振の時小松重盛の侍成田と云る者十禪師の神輿に矢を射立たる科によりて伊賀國へ流罪に究り此夜富小路に止宿同僚等名殘を惜み酒宴を設けしより事出來ぬと有

扇をひろげ　手習卷に髮は五重の扇をひろげたるやうにこちたき末つきなりと有是も髮のすそひろごりたるを五重の檜扇に取なしたるなり

すへひろ　扇の形を以て云り源氏枕双紙なとにかはぼりと侍るも今の世の末廣の事也蝙蝠を見て扇を作り初るによりての名也と河海抄に見えたり

空には灰を　仁王經四無常偈に劫燒終訖乾坤洞然須彌巨海都爲レ灰揚

映して　うつりかゝやく心也通俗文曰陰曰レ映字彙映明相照也

紅なる中に　文選兩都賦序云紅塵四合煙雲相連

風に堪す　風にこらへさるなり夫木に地獄の繪を見て西行法師〜ひとつ身をあまたに風の吹きりてほむらになすぞかなしかりける

一二町を　平家物語に云折ふし巽の風烈しく吹て車輛の如くなる炎三町五町を隔て乾の方へ筋違にとびこえ〳〵燒行或は具平親王の千種殿或は北野の天神の紅梅殿橘逸勢の蠅松殿鬼殿高松殿鴨井殿冬嗣の大臣の閑院殿昭宣公の堀川殿是を初てむかし今の名所三十餘ヶ所公卿の家たにも十六ヶ所まで燒にけり其外殿上人諸大夫の家々は記すに及ばず果は大内に吹付て云々

うつゝ心　萬葉に現心と書り源語類聚にうつゝ心ならんとは狂亂の心也とあり

からくして　辛の字なり辛勞辛苦しての心なり

資財　匂會に資助也貨也活法に財貨也寶也

七珍萬寶　重寶の品多きを斥り般若論に寶有二一百二十種一玉寶七種云々輔行記卷五に七寶者金銀琉璃車渠瑪瑙珊瑚琥珀也と有なを群書拾唾卷八にも見えたり

灰燼　隨求陀羅尼に自然化爲二灰燼一云々說文灰死火餘燼也左傳注燼火之餘末也と有もえくゐの事也

其つゐえ　平家物語云家々の日記代々の文書七珍萬寶さなから塵灰と成ぬ其間のつゐえいかはかりぞ云々

公卿　攝政關白太政大臣左右內大臣を公と云參議三位以上を卿と云すべて公卿を卿上月卿などいひ四位より以下を雲客殿上人などゝ云也

馬牛の類　平家物語に人の燒死する事數百人牛馬の類數をしらず云々

邊際を　楞嚴卷三空性無邊水當ニ無際一又止觀の卷一に現在現在無邊無際云々

さしもあやうき　常住ならぬの心也

あぢきなく　無狀無道などの字を讀り力もなきなと云詞なり竹取物語に見えたり藻鹽草にはせんかたなき心也とあり後漢章帝紀注に其狀無レ爲ニ寄言一故曰ニ無狀一

治承四年　高倉院御在位十二年庚子に當れり是歲以仁親王源三位入道敗死及賴朝卿義兵の事あり但此旋風平家物語卷三には治承三年五月十二日の午刻はかりと有

つしかせ　飆の字也旋風とも扶搖風とも書り勻會に暴風從レ下而上也と有中華にも宋の熙寧九年に恩州武成縣旋風の沙汰菅溪筆談に見えたり

籠れる家　史記項羽本紀に楚軍圍ニ漢王ヲ一三匝於レ是大風從ニ西北一而起折レ木發レ屋揚ニ沙石ヲ窈冥晝晦云々

けた　桁の字也景福殿賦注梁上所レ施也と有活法屋楹上横木也

空にあかり　浣花翁歌に八月秋高風怒號卷ニ我屋上三重茅一々飛度レ江灑ニ江郊一高者掛ニ罥長林梢一下者飄蕩沈ニ塘坳一野分の卷に山の木共も吹なびかして枝共多くおれ臥たり草むらは更にもいはず檜皮かはら所々のたて蔀透垣などやうのものみだりかはし云々

冬の木の葉　平家物語に桁なけし柱などは虛空に散在し檜皮ふき板の類冬の木の葉の風に亂るゝかことし

塵を煙の　陶淵明の詩飄如ニ陌上塵一分散逐レ風轉白氏文集に九重城闕煙塵生ル

なりどよむ　平家物語に夥しう鳴とよむ音は彼地獄の劫風也とも是には過しとぞ見えし云々とよむは八雲抄に響也と有古今に貫之
杣人は宮木ひくらし足曳の山のやまびこ聲どよむなり

地獄　輔行記云贍部州下過ニ五百踰繕那一乃有レ獄云々大毘婆娑論云地底也下也謂ニ萬物之中最在ニ底下一也獄局也謂ニ拘局不レ得ニ自在一也なを地獄の事正法念經に詳也

業風　劫風也天の三災とて世界の滅却する時火災水災の上に毘嵐と云る大風吹て色界天まて吹破る事有是を風災と云委は俱舍論大智度論等に見えたり水鏡にも第廿の條に火出來てしかも風輪とて風吹はりたる所の上より梵天まて山川も何もかもなく燒うせぬかくやふれたれは壞劫とは申す也とあり

損亡する　平家物語にたゞ舍屋の破損するのみならす命を失ふ者も多し牛馬の類數をしらず打ころさる云々

かたい　踦の字也楊氏方言に梁楚之間物䠒之不レ具者謂ニ之踦一

ひつしさる　西南の隅也坤の字を用ゆ舊事紀に則西南をひつじさると訓す

たゝことにあらす　平家物語に是たゝ事にあらす御占あるべしとて神祇官にして御占あり今百日の中に祿を重んする大臣のつゝしみ別しては天下の大事佛法王法ともにかたふきならひに兵革相續すへしとそ神祇官陰陽寮共に占奏る云々

物のさとし　恠異也兆也左傳僖公十六年隕ニ石于宋一襄公曰是何祥也吉凶焉在註云祥吉凶之先見者云々史記殷本紀注祥妖恠也と有薄雲卷に大かた世中さはかしくておほやけさまに物のさとししげくのどかならて云々萬葉の短歌に

つるき太刀身にはきそふと夢に見つ何のさとしそも君にあはんため

おなし年の　治承四年六月二日太政入道淸盛のはからひとして攝州福原へ遷都なり事は平家物語卷五盛衰記卷十七に詳也

此京の始　桓武天皇の延暦三年十月三日奈良の都より山城國長岡の地へ皇居を遷さる是則今の西の京也爰に十年おはしませしか地狹しとて同十二年正月藤原小黑丸紀古佐美等に勅して葛野郡宇陀村の地を相せしめ宮所を定られ翌十三年十月今の京へ遷幸なり此時葛野郡を右京とし長安城と云愛宕郡を左京とし洛陽と云平安城是なり委は日本紀略平家物語に見えたり左傳京曰ニ天子之居一文選註地絶

高平謂ニ之京一

嵯峨天皇　桓武帝第二の皇子御諱は神野と云皇統五十二代御在位十四年承和九年七月十五日崩す五十七歳

都と定まり　今案するに桓武帝崩御の後平城帝即位御在位三年にして大弟神野へ讓り給ひて奈良の舊都に遷りまし〳〵御隱謀の企あり其亂劇しづまりて後代々の天子今の京の外他國へ皇居を改らるゝ事なし盛衰記卷十六に嵯峨天皇大同五年他國へ都を遷されんとし給ひしを公卿僉議有て諫奉りし故やみにきと有

既に數百歳　延暦十三年十一月廿一日長岡の京より此京へ遷されし此かた是歳治承四年まて帝王は三十二代星霜は三百八十餘歳と平家物語にも見えたり

改まるへくも　神皇正統紀に桓武天皇初は平城にましますす山城の長岡に遷りて十年計都なりしか又今の平安城へうつさる永代にかはるましくなんはからせ給ひける昔聖徳太子蜂岡にのほり給ひて今の城を見めくらし四神相應の地なり百七十餘年有て都に遷されて替るましき處也と宣ひけるとそ申傳へたる其年紀も違はす數十代不易の都と成ぬる誠に王氣相應の福地たるにや云々

故郷に　平安城を斥り惣て何れの所にても皇居の跡をはふるさとゝ云流例也とそ

官位　有ニ才德ノ名一曰レ官位座次也代醉編官以分ニ職務ヲ一階以叙レ勞云々

かげを頼む　荀子に木成レ蔭而衆鳥息矣古今集の序に仁流ニ秋津洲之外一惠茂ニ筑波山之陰一又古今の東歌に

筑波ねのこのもかのもにかげはあれと君かみかけにますかけはなし

時を失ひ　文選の答賓戲に得レ氣者蕃滋失レ時者零落云々藻鹽草に時を失はおとろへたるなりと有古今のかな序に或はきのふはさかへ奢て時を失ひ世に侘したしかりしも疎く云々須磨卷の歌に

いつかまた春の都の花を見ん時うしなへる山がつにして

軒をあらそひし　平家物語に軒をあらそひし人の住居日を經つゝあれゆく家々は鴨川桂川にこほち入

筏にくみうかへ資財雜具船につみ福原へはこひくたす云々

あれゆく　萬葉の歌に「みかの原くにの都はあれにけり大宮人のうつりいぬれは

こほたれて　毀の字也孟子梁惠王篇に人皆謂ニ我毀ニ明堂一毀諸已乎

淀川　城州也東は久世郡西は乙訓郡と云り源は宇治川より出て伏見を歷難波の海へ流れ入とそ

目前に帛と　文選古詩に古墓犂爲レ田松栢摧(クダケテ)爲レ薪

西南海　西海道南海道を斥り東北國は東海東山北陸道なと也

庄園　往古堂上家の所領として年貢所當も國司のいろひを受さる所を云源氏物語に所々の御莊と侍る是なり

今の京　攝州八部(ヤタベ)郡福原の京也世に云兵庫の築島是なり

程せまくて　盛衰記巻十七に治承四年六月九日福原の新都の事始あり河内守光行丈尺を取て輪田の松原西の野に宮城の地を定けるに一條より五條まて有て五條以下は其處なし云々

條里　條は大道を云拾芥抄云條起レ從レ北行ニ於南ニ里起レ西行ニ於東ニ三十六町爲ニ一里ニ六里爲レ條云々本朝京師を定るに一條より九條の制あり周禮の冬官に都城方九里國中九經九緯と侍るに起れり里は公羊傳注古六尺爲レ步三百步爲レ里句瑞に路程以ニ三百六十步ニ爲ニ一里一

北は山に　是より潮風烈しくと侍るまては平家物語都かへりの巻の文段おなし本朝文粹山家秋の歌に吾家嶺外枕ニ江干一浪響松聲日夜寒

内裏は　是より優なる方も侍りきと有まては平家物語宇佐行幸の巻の文段に同じ

木丸殿　新古今に天智天皇の御製　朝倉や木の丸殿に我をれは名のりをしつゝゆくはたが子そ
是は萬葉に出たり神樂朝倉の詠物也木丸殿は筑前上座郡朝倉山にあり橘の廣庭宮といへる是なり奥義抄歌枕共に筑前國と見えたり齊明天皇の御時新羅百濟兵亂に付て本朝の守禦を思召れ天子筑前の地へ臨幸有て刈萱關を建られ往來の非常を改られし行宮の名也梁塵愚案抄に朝倉の社は延喜式神名帳には土佐國土佐郡にありと記せり風土記にも土

佐國朝倉鄉に彼社ありと見えたり然るを古來あやまりて筑紫にありと云り木の丸殿は行宮を云り丸木の黑木にて作れる名なり天智天皇いまた春宮と申侍る時に齊明天皇にしたかひ給ひて朝倉の行宮にとゝまり給へる時此宮へ參る百の司名謁して罷出侍る事をかく詠し給ひし也と一條禪閤の御說也太平記の天正本に悠紀主基の神殿は黑木を以て作れる先規也天智天皇の筑前國朝倉と云處に忍て皇居を建られし是を木丸殿と申ける是を先例として代々の大嘗會に黑木を以て是を造る此材木をは和東山にて取也と有

やうがはりて　樣子の替りたる也須磨卷に所につけたる御住居やうかはりてかゝる折ならずはおかしうもありなまし云々

川もせきあへず　上に謂る淀川を斥り平家物語の文段にては鴨川桂川也

古鄉は既に　是より土木の煩を歎くと侍るまては平家物語の文法も同し萬葉にも志賀の荒都奈良の舊京なと讀る歌多し山家集西行法師

故さとは見し世にもなくあせにけりいづち昔の人行にけん

新都はいまた成す　伊勢物語に奈良の京ははなれ此京は人の家まだ定らざりけると侍るにおなし筆勢なり

浮雲のおもひ　楚辭に浮雲兮容與導レ予兮何之也文選李少卿詩に仰觀ニ浮雲馳ニ奄忽互相踰往生要集にも浮る雲の有に似たりといへ共しはしか內に消てなきかことし云々歌枕に光孝天皇の御製

あさか山朝ゐる雲の風をいたみたゆたふ心我はもたらし

土木のわつらひ　土は地形木は屋梁の材を斥り官者傳論注に土垣木屋なりと有史記佞幸傳に董賢起ニ大第闕下ニ土木之功窮ニ極伎巧ニ云々西京賦羽獵賦なとにも出たる字なり

車に乘へきは　前に馬鞍をのみおもくす牛車を用とする人なしと侍る首尾なりすへて爰の文段平家物語盛衰記に同し合せ考ふへし

衣冠　土御門家の餝抄に衣冠宿德人大辨宰相依レ事着レ之

雲客者修正御幸院尊勝陀羅尼着レ之云々

布衣

狩衣也今の世紋の有を狩衣と云紋なきを布衣と云餝抄に布衣張裏壯年の人用レ之但委例無二過失一高年之人多着レ之生白裏宿老之後用レ之云々

直垂

堂上家の着せらるゝは絹也地下の着するは布なり但直垂は元武家より起れりとそ

都のてふり

體姿と書にや都のふるまひと云事也萬葉の歌に天さかるひなに五とせ住居して都のてふりわすらへにけり

武士

神武帝の御時宇麻志麻治命武功勝れたるにより軍兵を率ひて内裏を警固有し是を物部と云後世武士を呼てものゝふと云事是より起れりとそ職原抄に見えたり

瑞相

中華の書を考れは奇瑞正瑞なとは皆吉事の祥兆につかふへき詞にて侍れ共本朝の俗は善惡の前表いつれにも用來れる也小補勻會に瑞以レ玉爲レ信也又祥瑞也徐鉉曰天以三人君有二德符一將下錫レ之以二曆年一錫レ之以中五福上先出レ之與レ之爲レ信也しるく

揭焉炳然なとゝ書ていちしるくとよめり物の明白なるを云爰の文段は前にさるへき物のさとしかなと侍る首尾なり其時神祇官陰陽寮の勘文世に披露し沙汰有しに日を逐て符合することくになり行との義なり

うき立て

後拾遺に馬内侍「しかすかにかなしき物は世中をうきたつほとの心なりけり

此京に歸り

新都の物侘しく不合期なるに君臣共に苦しみ山門南部及ひ諸寺諸社に至まて歎き訴ける故其年の臘二日もとの平安城へ還されし由平家物語都かへりの卷に詳なり

いにしへの賢き

是より世をたすけ給ふと侍るまで平家物語の文法に同し賢き御代とは唐堯虞舜の聖主仁德延喜など

の賢王の御代を斥れたる也次の文段に見えたり

茅をふきて

史記李斯傳に二世皇帝云吾有レ所レ聞韓子曰堯之有二天下一也堂高三尺采椽不レ刮茅茨不レ剪云々なを尙書六韜始皇本紀などにも見えたり

烟の乏き

仁德天皇即位四年二月民家の飢渴になやみて烟のたえ〴〵なりしを高樓より叡覽有て三年の間國の課役をゆるし內裏の修理を止め官物衣服飲食まて悉く儉約を用ひ給ひ夫より三歲にあたる四月又樓に登りて御覽有しに件の德に乘じて風雨時に順ひ天下豐饒也し其時御製に「高き家に登りて見れは煙たつ民のかまとはにきはひにけり　此御歌新古今に入れりなを日本紀卷十一水鏡卷上に委し

みつき物

租稅調賦貢物など書り年貢物也諸國土地の產物を天子の御もとめに應して献るをいへり尙書注上之所レ取謂二之賦一下之所レ供謂二之貢一

養和

安德天皇御在位の年號なり治承五年辛巳七月十四日養和と改元翌年壬寅五月廿四日壽永とかはれり此比賴朝卿關左を從られ鎌倉に在住木曾義仲信濃より蜂起西南海には緒方河野等平家を叛き畿內擾亂の最中と云々平家物語橫田河原合戰の卷に養和二年四月廿日廿二社へ官幣使を立らる是は飢饉疾疫によりて也と有

飢渴

前漢元帝紀注に穀不レ熟爲レ飢菜不レ熟爲レ饉字彙に渴口乾欲レ飲之義と有涅槃經に餓鬼衆生飢渴所レ逼於二百千歲一未三曾得二聞漿水之名一云々毛詩采薇にも載渴載飢心傷悲

日てり

旱の字也說文に旱不レ雨也洪範五行傳に旱之爲レ言乾也萬物傷而乾而不レ得レ水也云々又旱魃の字をも用ゆ則ひでりのかみと訓す

大水

穀梁傳に高下有二水災一曰二大水一

五穀

稻麻粟麥豆を云穀梁傳の說也周禮注には麻黍稷麥豆と有

春耕し
孟子梁惠王注に農時謂ニ春耕夏耘秋收之時一莊子に
春耕種形足ニ以勞動一秋收斂身足ニ以休息一
冬おさむる
六韜云春道生萬物榮夏道長萬物成秋道斂萬物盈冬
道藏萬物靜
そめき
俗にぞよめくと云詞なり一條禪閤御説に騒の字を
萬葉に書りさはかしき心也と云々沙石集卷九に定
家卿の歌とて「春苗代秋の刈穗のそめきまてくる
しく見ゆる賤のをたまき
堺を出
孟子梁惠王上篇に父母凍餓兄弟妻子離散云々同下
篇に凶年饑歲君之民老弱轉ニ於溝壑一壯者散而之ニ
四方一者幾千人
山にすむ
粮のとほしきになやみて居家を忘れ一向山に住て
木實を拾ひ草根を掘て命を繼との義なり
なへてならぬ
普通に越たるとの義也金葉の歌に「あやめくさ我
身のうきを引かへてなへてならぬにおもひ出なん
みなもとは
皆根本はの義也尙書五之子歌云民惟邦本々固邦寧
千字文注に治レ國之本先レ務ニ於農一種植稼穡則可レ
無レ飢是本業又韓退之原道に民者出ニ粟米麻絲一作
ニ器皿一通ニ貨財一以事ニ其上一也
田舍をこそ
夕顏卷にあはれいと寒しやことしこそなりはひに
も頼む所すくなく田舍のかよひもおもひかけぬ也
いと心ほそけれ云々
みさほもつくり
みさほは操の字也千字文には節義の字を訓す心同
し本心を大切に守り義理を失はさるを云箒木卷に
恨いふへき事をも見しらぬさまにしのびて上はつ
れなくみさほつくり心ひとつにおもひあまる時は
いはん方なく云々花鳥餘情にみさほつくるとはし
らす顏なる心なり松の操と云も雪霜をもしらす常
盤なるを云也後拾遺に大江匡衡
有がうへに又ぬきかくるから衣みさほもいかゞつ
くりあふへき

念じ佗

堪忍しかぬるを云り是も源氏に多き詞也後江相公の題ニ老命婦ノ詩に欲レ宛ニ今日新飢嚢一泣貢ニ先朝舊賜筝一

寶物かたはし

莊子天地篇に藏ニ金於山一藏ニ珠於淵一不レ利ニ貨財一

文選東都賦に損ニ金於山一沈ニ珠於淵一

金を輕くし

文選雜詩に尺燼重ニ尋桂一紅粒貴ニ瑤瓊一云々注に燼薪紅粒米也謂レ有ニ水災一一尺之薪價重ニ一尋之桂一而米亦貴ニ於玉一也

粟

米穀の惣名也爾雅翼に古以下米之有ニ孚殼一者上皆稱レ粟本草綱目卷廿三云古者以レ粟爲ニ黍稷粱秫之總稱一云々

えやみ

疫癘也周禮注に氣不レ和之疾也と有文選關中詩に師旅既加ニ飢饉是因ニ疫癘淫行而荊棘成レ榛云々榮花物語源氏なとに世中さはかしきと侍るは皆疫癘の流行を云也

まさるやうに

大鏡世繼卷一に世の末に成まゝにまさる事のみこそまうてくめれ云々爰の文段は飢渇はますく募りて樣々の御祈なへてならぬ修法なとのしるしは跡かたもなきとの義なり

少水の魚

文珠出曜經卷十八に佛說レ頌曰是日已過命則衰滅如ニ少水魚一斯有ニ何樂一此事往生要集第三にも引れたり

乞ありく

列子說符篇に齊有ニ貧者一常乞ニ於城市一曰天下辱莫レ過ニ於乞一云々

くさき香

禪要呵欲經に身臭如ニ死屍一九孔流ニ不淨一如ニ廁蟲樂レ糞云々止觀卷七に大論云一旦命終假借還レ本頭手分離盈ニ流於外一三五里間逆風聞レ臭惡氣腥臊衝ニ人鼻息一云々又第九卷にも見えたり

世界

四方上下の界畔(さかひ)あるよりいへは世界也隔て分れたる間差よりいへは則世間也首楞嚴經卷四に世爲ニ

遷流ニ界爲ニ方位ニ汝今當レ知東西南北四維上下爲レ界過去現在未來爲レ世と有委は大智度論卷七に見えたり

山かつ

山兒と書り奥義抄に下人の異名と有り樵夫草刈賣炭の翁の類は京家の人の眼には異樣にあやしまるゝ故にあやしと云り

家をこほちて

事類前集卷五に鄭俠上疏云今天下憂苦質レ妻鬻レ女父子不レ保拆レ屋伐レ桑爭ニ貨于市一云々

市に出て

活法に市買賣之所也周易繫辭云 神農氏曰中爲レ市致ニ天下人一聚ニ天下貨一交易而退各得ニ其處一

薪の中に

順和名云火木曰レ薪

丹つき

丹は飾彩の丹粉也 本草綱目卷八に 鉛丹者則今熬レ鉛所レ作黃丹也

すへき方なき

孔子家語卷五に顏回云臣聞レ之鳥窮則啄獸窮則攫人窮則詐云々

續日本紀卷六に和銅七年詔云人足ニ衣食一共知ニ禮節一身苦ニ貧窮一競爲ニ奸詐一

濁惡の世

觀無量壽經疏云濁惡者濁者五濁也一見二煩惱三衆生四命五劫惡十惡也殺盜婬妄語惡口兩舌綺語貪瞋邪見也云とすべて諸經論に多し畢竟末世に成行ほと人心の邪に汚はしき趣を斥るの義なり

我身をは次に

拾遺に右近「わすらるゝ身をはおもはす誓てし人の命のおしくもあるかな

河海の六帖の歌に「いかにかとおもふ心のある時は我身をおきて人そかなしき

乳房に

莊子德充符篇云仲尼曰丘也嘗使ニ於楚一矣適見ニ豚子食ニ於其死母一者上云々

仁和寺

城州葛野郡也此地を大内山と云光孝天皇仁和年中の御造立也宇多法皇延喜元年十二月御庵室を構られ同五年移ひおはしませしより御室の御所と云り

若菜卷に西山なる御寺と有も則是なり

隆曉法印

太皇太后宮權亮源俊隆男にて皇嘉門院別當と云る女歌仙の兄也勝寶院第三世の住職彌勒寺法印と號す大僧正寛曉の灌頂の弟子也東鑑に源頼朝の若君七歳にして此法印の弟子となりて上京入室の由見えたり是は伊達常陸介宗村の女大進局の腹にて後には貞曉法印と申ける也

阿字

毘盧舍那經に出て眞言秘密の肝心とそ八識田中下㆓阿字一刀㆒生死亦斷涅槃亦斷と云るは則密家の常談なり

一條より南

此文段洛陽條里の分際を斥れたるてにをは也拾芥抄京程部に從㆓一條㆒南至㆓于九條㆒幷三十八町從㆓朱雀㆒東至㆓于京極㆒十六町定と有所謂南北は條なり東西は里なり

河原

城州愛宕郡東河原なり

白河

是も愛宕郡なり

西の京

前に記せる長安城右京の地也河原白河と云にて東の方の地をさせり都合東西おしなへての義也

諸國七道

爰にて諸國と斥れたるは五畿内にや七道は東海東山北陸山陰山陽南海西海道也

崇德院

鳥羽院第一皇子御諱は顯仁皇統七十五代御在位十八年事は保元軍記故事談なとに詳なり

長承

崇德院御在位九年壬子長承と改元同三年甲寅諸國大洪水洛中回祿の由舊記に見えたり此比の事にや

元暦二年

八十二代後鳥羽院御在位の年號也是歳乙巳八月十四日文治と改元屋島壇浦の合戰安德天皇御入水平家の氏族滅亡も則今年の儀也東鑑卷四に元暦二年七月九日午刻京都大地震得長壽院蓮花王院最勝光院以下佛閣或顛倒或破損亦閑院御殿棟折釜殿以下屋々少々顛倒占文所ㇾ推其愼不ㇾ輕云々

大なゐふる

地震をなゐふると訓す公羊傳に地震地動也と有史記周本紀云幽王二年西周之川皆震伯陽甫曰周將亡矣陽伏而不能出陰迫而不能升於是有地震夫國必依山川山崩川竭亡國之徵也

山くつれ

爰の文段前後平家物語卷十二地震の卷に見えたり毛詩に百川沸騰山冢崒崩高岸爲谷深谷爲陵云々

塔廟

塔婆は梵語也唐に翻じて支提と云舍利を安置し恭敬するの處也廟は宗廟とて先祖を祭るの處なり崔豹古今注云廟貌也所以彷彿先人容貌庶人則立影堂云々

いかつちに

周易に震爲雷動萬物莫不大哉文選子虛賦に礧石相擊々礚々若雷霆之聲聞乎數百里之外云々

羽なければ

莊子人間世云聞以有翼飛者未聞以無翼飛者云々

龍ならねは

周易云飛龍在天史記老子列傳小孔子曰至於龍吾未能知其乘風雲而上天

つゐち

淮南子に舜作築垣と有是也順和名につゐひぢとも又つゐがきとも訓す

小家を作り

大智度論に小兒聚土爲臺殿城郭閭里宮舍或名米麪守護作戲日暮弃之云々義楚六帖に五百童子江岸聚砂爲佛塔江源瀑長一齊溺死云々

子の悲しみ

後撰に兼輔　人の親の心はやみにあらねとも子をおもふ道にまよひぬるかな

此歌大和物語にも見えたり

餘波

尙書禹貢左傳僖公廿三年にも出たる字也又は大風の後風もなくして波の立をも餘波と云とぞ後拾遺の歌に

わだの原たつ白波のいかなれはなこり久しく見ゆるなるらん

三月はかり
史記本紀に項羽燒二秦宮室一火三月不レ滅又杜牧か詩にも予羽一炬火驪山三月紅なと作れり

四大種
義楚六帖巻三に四大地水火風也亦名二大種一以二形相大一能生二萬物一也云々毘婆娑論云大而是種故名二大種一能減能增能損能益是爲二種義一體相形量遍二諸方域一能成二大事一是爲二大義一云々

害をなせと
水火風の害は三災劫也倶舍論又は輔行記巻五にも見えたり洪範五行傳に凡有レ害者皆名爲レ災

大地に到ては
楞嚴經に一地性麁爲二大地一細爲二微塵一更折二鄰虚一則實空性也二水性不レ定流息無レ恒三火性無レ我寄二於諸緣一四風性無レ體動靜不レ常云々此文の中鄰虚と侍るは細塵の事なり

變を
勻會に因レ形而易謂二之變一離レ形而變謂二之化一云々

齊衡の
五十五代文德天皇御在位四年甲戌改元の年號也

東大寺
聖武帝江州甲賀郡信樂におゐて金銅十六丈の盧舍那の大像を鑄立られ和州添上郡役優婆塞の舊宅の地を轉じて東大寺を建られ件の大像を移されしなり創業の事迹委は續日本紀元亨釋書等に見えたり

みくし落
文德實錄巻七に齊衡二年乙亥五月庚午東大寺奏言ス毘盧舍那大佛頭自落在レ地云々すべて是歳四月庚戌地震してより翌三年の春に到り數個度に及ひ京都幷に城南の家居佛塔破壞の由見えたりなを大佛の御頭墮しは五月廿三日の事なり

いみしき
爰にては忌々敷事を云り

あちきなき
須磨巻に世の中いとあはれにあちきなく物の折でとにと侍るてにはに同し

言の葉にかけて
須磨巻にかばかりにうき世の人ことなれとかけても此かたにいひ出る事なくてやみぬるはかりの云々夫木に　言のはにかけても何かおもひ出る齋(イツキ)の

森のしめの下草　是則長明の歌也鴨の社職を辭して後の詠と見えたり

すへて世の

安元の火災より元暦の地震まで世上の轉變を以て人界の艱苦を知しめ發語三段の心に歸て畢竟身心を修むへき要道を是より謂起したる文段なり

我身と住家と

新古今に柿本人丸歌
あし鴨のさはく入江の水の江の世にすみかたき我身なりけり

權門

文選注に權は勢也と有國家の政務なとつかさとりて威勢あるの家族を云漢書云息躬久交ニ游貴戚ー趨ニ走權門ー爲レ名

聲をあけて

本朝文粹卷十二に慶滋保胤池亭記云近ニ勢家ー容ニ微身ー者有レ樂不レ能ニ大開レ口而笑ー有レ哀不レ能ニ高揚レ聲而哭ー進退有レ懼心神不レ安譬猶ニ鳥雀近ニ鷹鸇ー矣長明爰の筆作前後此記の詞を執用られたり

立居につけ

莊子云役ニ人之役ー適ニ人之適ー而不ニ自適ニ其適ー也

雀の鷹の

孟子離婁章に爲レ叢毆レ爵者鸇云々　左傳に太史克曰見下無ニ禮於其君ー者上誅レ之如ニ鷹鸇逐ニ鳥雀ー云々
又鷹雀の鬪の事文珠出曜經に見えたり

貧しく

禮記正義云無レ財曰レ貧無レ親曰レ窮暫無日レ之云々
荀卿子云貨財粟米之於レ家少者謂ニ之貧ー至テ無者謂ニ之窮ー

富る家の

保胤池亭記に南院貧北院富富者未ニ必有ニ德貧者亦猶ニ有ラ耻云々禮記に富潤レ屋德潤レ身孝經疏に財足曰レ富

僮僕

つかはれもの下部の事也周易に出たり説文云奴曰レ僮匂會云男有レ罪曰レ奴今通謂ニ僕隷ー爲レ奴云々古は罪ある者其咎を宥て人の使令となさしむ是を奴僕又は僮と云り後世の俗は押なへて下部の惣名とするなり

心念々に

天台止觀卷四に富貴縦ㇾ心造ㇾ罪若其貧窮惡念亦廣云々文珠出曜經に心之輕躁速疾一日一夜九百九十九億念々不ㇾ同造ㇾ業亦異也

せはき地に

是も池亭記に高家比ㇾ門連ㇾ堂少屋隔ㇾ壁接ㇾ簷東隣有ニ火災ー西隣不ㇾ免ニ餘炎ー

邊地に

邊陲邊塞などいて國のかたはら片夷中を斥り

貪欲

法界次第に引ニ取順情塵境ー心無ニ厭足ー名爲ニ貪欲ーと有法華經云諸苦所因貪欲爲ㇾ本若滅ニ貪欲ー無ㇾ所ㇾ依ㇾ此云々なを瑜伽論止觀第四なとに詳也

かろしめらる

乙女卷に時うつりさるへき人におくれて世おとろふる末には人にかるめあなづらるゝにより所なき事になん侍り

寶あれは

莊子に堯曰多ニ男子ー則多ㇾ懼富則多ㇾ事壽則多ㇾ辱是三者非ㇾ所ㇾ養ㇾ德也

歎切なり

本朝文粹卷六源順奏狀云年老家貧愁深歎切ナリ云々

人をはこくめは

莊子曰有ㇾ人者累見ㇾ有ニ於人ー者憂

恩愛に

めぐみうつくしむと訓す悲花經云流ニ轉三界中ー恩愛不ㇾ能ㇾ斷云々

狂るに似たり

砂石集卷五に云行基菩薩遺誡の文の中に淨土にあらされは心に叶ふ所なく聖衆にあらされはおもふにしたかふ友なし世にしたかへは望あるに似たり俗にそむけは狂人のことしあなうの世中やいつれの所にか此身をかくさん云々

玉ゆら

日本紀に玲瓏の字をよめり八雲抄に玉ゆらはしばしと云心なりと有堀川院百首に「かきくらし玉ゆらやます降雪のとよめるもしばしもの心なり

祖母の家

爾雅云父之妣爲ニ王母ー順和名云祖母也今案するに長明は父祖累世鴨の禰宜たり家を傳てと侍るは姓氏を繼るにはあらずたゞ宅地を傳へ領せられし成

へし祖母の傳記未レ考二代后多子（をきこ）なとの女房にて侍りしにや作者部類に應保元年中宮叙爵と有其比は長明いまた廿歳の内なるへし是亦件の祖母功勞の賞などにもや

緣かけ

標題に載るごとく社務職を望まれしに叶侍らて退隱せられしとなれば其比を斥て緣かけ身おとろへと書れたる成へし

しのふかたゝゝ

金葉集雜部に家を人にはなちてたつとて柱に書付侍ける周防內侍　住わひて我さへ軒のしのふくさしのぶかたゝゝしげき宿かな　なを此歌の事無名抄續世繼卷十に委し

三十餘にして

今案に高倉院御在位の晚年安元治承の比はひとみえたり

ひとつの庵

杜佑通典云結二草木一爲レ廬皆曰レ庵釋氏要覽云草爲二圓座一曰レ庵西天僧俗修行多居レ庵云々

十分か一

文選西都賦云十分未レ得二其一端一云々

たつきなし

奧義抄卷六にたつきは萬葉に便と書てよめり便なき事をはたつきなしなと云この心也

車やとり

門內の側輿車など藏る所をいふ

河原

鴨の河原を斥り夕顏卷にも十七日の月出てかはらのほとみさきの火もほのかなるに云々

水の難

地藏十輪經譬如二水災起漂蕩壞一大地一

白波のおそれ

袖中抄に云沖つ白波は昔より盜人の事をいへり云々是は後漢靈帝紀に黃巾郭泰なと云者西河の白波谷に起る是を白波賊と云しと侍るよりおこれり爰の文段も水災と盜賊とを兼て書れたりと見えたり

念し過しつゝ

堪忍ひて年を經られたるとの儀也

三十餘年なり

嚮に物の心を知れりしよりと侍る首尾なり廿歳は
かりより五十歳までの間を斥れたり
折々のたがひめ
四序の代謝(たいしや)および前に擧られたる世上の轉變なと
をかねて書れたる文段なり 文粹紀 齊名賦に花以レ
春榮葉以レ秋落感二春秋之遞換一知二盛衰之所一レ託
みじかき運
斑固覧海賦二運之修短不二豫期一也云々性理字訓二運者
流轉運行之謂
五十の春を
後鳥羽院の朝廷久の比ほひと見えたり此時剃髪し
て身心安樂なる境界を左に遁られ侍り論語爲政篇
子曰吾五十而知二天命一淮南子云蘧伯玉五十而知二
四十九年非一云々
家を出
出家抖藪の身となるを云瑜伽論云在家煩擾如レ居二
塵宇一出家閑曠猶レ處二虚空一應下捨二一切於善説一毘
奈耶中正信捨レ家趣中於非家上
世をそむけり
浮世のましはり務をすてむきて退隱する儀也夫木に

後徳大寺殿「世をそむく門出はしたり大原や芹生
の里のくさの庵に
よすか
便因の二字いつれをも用空蟬卷につたへきこゆへ
きよすかもなくと侍るも便なき義也
官祿 匀會祿俸也福也
執をとゝめん
物に親炙してははなれかたき妄心を執といへりなを
卷末に注す
大原山
城州乙訓郡大原野の西也後拾遺藤原國房「おもひ
やる心さへこそ悲しけれ大原山のあきの夕くれ
春秋をかへぬる
文粹奏狀春去秋來之候星霜幾廻云々後拾遺序にお
もひなから年を送る事九かへりの春秋に成にけり
云々なを上卷に注す照し見るへしかへぬるは換の
字なり物換星移などの心なり
六十の露
土御門の朝建永承元の比ほひなるへし五十の春と
置て六十の露と受られたる語勢ありすべてこれよ

り一二行の間筆力おもしろし事文前集古語曰人生百歳七十者稀浣花翁詩にも人生七十古來稀

末葉のやとり

詞花集に增基法師「朝な〳〵鹿のしがらむ萩か枝に末葉の露の有がたの世や

風雅題不知寂然法師

稻妻の光のほとか秋の田のなひく末葉の露のいのちを

一夜の宿

楞嚴經譬如ニ有レ客寄ニ宿旅亭ニ暫止便去終不ニ常住ニ云々

かひこのまゆ

蠶の繭なり俗の諺に日暮の所作といへるごときの譬也保胤池亭記云亦猶下行人之造ニ旅宿ニ老蠶之成中獨繭上矣其住幾時乎云々

百分か一

前に十分か一と侍る辭を受て書れたり

齡は年々

文粹平兼盛奏狀身遂レ年而老家隨レ日而貧

所をおもひ定さる

本より隱遁の身にして一所不住の本意なれは也莊子知北遊篇行不レ知レ所レ行處不レ知レ所レ持云々古今讀人不レ知「世中はいづくかさして分なゝんゆきとまるをぞ宿と定むる

地をしめて

トレ居占レ處なと云全し心なり其攸を相て吉凶を占しめ吉を得て居を定るの義也史記周公旦往營ニ雒邑ニトレ居曰吉也と有又楚辭注にも見えたり

かけかね

順和名に鉤匙と書てかうかぎと訓す則是也

二兩

兩は輛也毛詩巣鵲注一車兩輪故謂ニ之兩ニ後漢吳祐傳注車一乘曰ニ一輛ニ

むくふる外

車二輛を借てつみ運ふか故にたゞ其車力の料を報ずる迄の儀也とそ文選謝靈運詩募レ欲不レ期レ勞即レ事罕ニ人功ニ云々是も家營の事に付て作れる詩なり

用途　用度に作るべき歟續日本紀十五にも用度所レ費などゝあり

日野山

城州宇治郡木幡山の東北にあたれり

日かくし

千字文に陛の字をよめり 注曰天子之階曰レ陛九級上廉遠レ地則堂高諸臣上レ殿於ニ東階一先擧ニ右足一とある歟
有但炭にてはたゝ前面のひさしなとを斥れたるなるべし

すのこ

今の世の竹椽也管子と書り 順和名床上藉レ竹名也とあり

あか棚

閼伽は水の梵語也すべて佛前の香水なとを入る器物を通稱してあかとも云とぞ一切經音義に見えたり

阿彌陀

梵語也唐に翻じて無量壽覺と云西方極樂淨刹の敎主也傳灯錄娃憍尸迦父名月上母名殊勝妙顏と有なを天台觀經疏名義集に見えたり

畵像

後漢の永平七年秦景を西域に使し優塡王彫像の畵樣を以て是を洛陽の城門に圖して供養有しより畵像の制起れりとぞ釋氏要覽に見えたり

落日を受て

釋尊韋提希夫人に說て十六の觀想を示し淨土の因をなさしめらるゝ事は觀經に詳なりその第一に日觀あり此心を夫木に俊賴「いろ〳〵の雲のはたてをかざりにて入日や彌陀の光なるらん

眉間の光

榮花物語十八云丈六の彌陀如來御かうべは綠の色ふかう眉間の光毫は右にめぐりて婉轉せる事五須彌のことし云々觀無量壽經疏云 如來眉間有ニ白毫相一猶如ニ珂雪一長一丈五尺毫有ニ八楞一周圍五寸其毫中空右旋婉轉如ニ琉璃筒一從レ此發レ光照ニ無量國一云々

被帳

帳は斗帳也順和名一名屛幔釋名曰小帳云レ斗形如ニ覆斗一也

普賢

濁世澆季に至り法華經の行者を衛護し惡魔夜叉等の難を攘ひ得道成佛なさしめんとの十種の大行願を立られし聖衆也法華の勸發品華嚴の行願品なと

に委し

不動

三世十方諸佛の祖師四十二地一切菩薩の所尊不生不滅の法身阿字の本躰にして垂跡を廣く濟度も又法界に亘れりとそ大日經巻二に委し

管絃

文選注吹曰レ管撫曰レ絃爰の文段は音樂の書籍を斥れたり朗詠樂府琴操樂章琴譜催馬樂の類名目おほく河海抄に見えたり

往生要集

惠心院僧都源信念佛の業を本として經論の中の要文をあつめ六道の沙汰を記されたる書なり大宋國へも渡されし抄物の由壒囊抄廿に見えたり盛衰記四十八建禮門院大原閑居の篇爰の筆勢を借り用て佛の左には普賢の繪像をかけ御前には八軸の法華經右には善導和尚の御影淨土の御疏九帖往生要集を置れたり北の壁には琴琵琶おの〳〵一張を立られたりと有

箏

今云せうの琴也風俗通神農造レ箏或曰蒙恬所レ造券聲也云々枕双紙にさうのことく侍る是なり絃十三あり一より五までを大絃とし六より十までを中絃十一より十三までを細絃とすその内十一を斗十二を爲十三を巾(きん)と云とそ

琵琶

連歌に是を四の緒と云和歌にはことゝ讀るも例あり三才圖會器用部云推レ手前曰レ琵引レ手却曰レ琶因以爲レ名云々元は胡國の樂器也故に胡琴と號すなを事物紀原事文類聚なとに詳也

一張をたつ

昭明太子陶潜傳ニ蓄二無絃琴一張一白文集四十三廬山草堂記に漆琴一張と有光源氏須磨へ退隱の時もさるべきふみども文集なと入たる箱さては琴ひとつを持しめらると云々

わらひのほとろ

蕨の穂の老たるを云り山家集西行上人「なをざりに燒捨し野の早蕨は折人なくてほどろとやなる

つかなみ

田家にて藁耕(ねこた)といへる席の事也とそ藻鹽第六につかなみとてわらをあみて敷なりと有歌枕廿三に源

俊重「つかなみのうへに夜々かり寐して黒づの里になれにけるかな源俊頼「つかなみの上は黒づになるれとも下のねよさにしく物そなき右二首田上にて問答歌とあり田上の事末に注す黒づは則田上十八鄕の內也

ふづくえ

順和名に書案と書り事文續集詩至哉天下樂終日在ニ書案一

すひつ

地爐と書り今云圍爐裏也無名抄の歌に

火おこさぬ夏のすびつの心地して人もすさめずすさまじの世や

柴折くふる

後拾遺和泉式部「さひしさに煙をだにもたたじとや柴をりくふる冬の山里「たゝしは不レ斷也須磨卷にも煙のいとちかく時々立くるを是やあまの鹽やくならんとおぼしわたるはうしろの山に柴と云ものふすふる也云々

ひめかき

左傳隱公元年注堞城上短墻也と有袖がきこまがきなど皆同ししどけなくゆひなしたる小垣なり女墻揀垷の字をも用一切經の音義墻上小墻名ニ女墻一者下大如レ男上小如レ女と有

藥草を栽

近くは自衛に足り遠は人を濟の理是醫家の本意也長明の用意殊勝にこそ　文粹卷一紀納言山家秋歌云幽栖何事且營々藥圃荒凉手自耕

かけひ

字彙筧以レ竹通レ水也と有活法に連筒と有も同し後拾遺に「おもひやれとふ人もなき山里のかけひの水の心ほそさを

つま木

手して折あつめたる柴なとを云り白氏六帖大臼レ薪小臼レ蒸と有夫木に爲家卿「かげに居て枝を折にもなりぬべし軒端の山をたのむつま木は

外山

日野山の邊今も外山といふ地有則長明方丈の遺趾とて谷あひのおちくぼなる處に徑一丈ばかりの石ありなを標題に委し古今大歌所神あそひの歌に深山にはあられふるらし外山なる正木のかづら色

つきにけり此歌をとりて西行上人
松にはふまさ木のかづら散にけり外山の風は秋すさふらん

まさきのかつら
薜茘（へきれい）の字也古語拾遺には眞辟葛と書り奥義抄第七に神樂するには眞辟の葛にて頭をゆふ也それを山かづらとは云と有本草綱目曰薜茘四時不レ凋厚葉堅强大ニ于絡石一不レ花而實者云々

迹を埋
とひくる人もなき閑居の體なり紀齊名賦辭山遠雲埋ニ行容迹一云々後拾遺經信卿「たひねする宿は深山にとぢられてまさきのかづらくる人もなし
天台止觀卷四曰閑居靜處者好處有レ三一深山遠谷途路難險永絶ニ人蹤一誰相惱亂恣レ意禪觀念々在レ道毀譽不レ起是最勝（ナリ）云

觀念のたより
前に落日を受てと侍る文段に意同し佛の悟の心をふかく念するを觀念と云り傳灯錄云佛爲ニ韋提希一權開ニ十六觀門一令ニ念レ佛生ニ於極樂一故經曰是心是佛是心作レ佛心外無レ佛佛外無レ心云々天台止觀云寂而常照名レ觀念者但念ニ涅槃寂滅一不レ念ニ餘事一云々千載に寄レ月念ニ極樂一と云る心を賴宗公
入る月を見るとや人のおもふらん心をかけて西にむかへは　新古今俊成卿
今そ是入日を見てもおもひこし彌陀の御くにの夕くれの空

藤なみ
藻鹽卷八に波に似たるか故なりとあり

紫雲の
拾遺に　紫の雲かとぞ見る藤の花又　藤の花都の内は紫の雲かとのみぞなど侍るは紫雲を慶雲として祥瑞の方に用たる歌なるへし爰の文段は山家集に寄レ藤述懷を西行上人
西を待心に藤をかけてこそその紫のくもをおもはめと侍るをおもほへて書れたりと見ゆ往生要集卷五に廿五の菩薩百千の比丘衆ともろともに來りたまふや西の空紫雲たなびき云々

かたらふことに
是も山家集に待賢門院の女房堀川の局のもとよりいひをくられける「この世にてかたらひおかん子

返しての山路のしるへともなれ　返し西行上人
郭公なく〳〵こそはかたらはめしでの山路に君し
かゝらば
しての山
死出死天四手いつれをも用ゆ涅槃經廿七十王經な
どに見えたり則時鳥を死出の山の鳥といひならは
せるも十王經より出たる說なり袖中抄にも郭公は
しでの山より來て農を勸る故に四手田長といへり
とあり
耳にみてり
白文集十三に相思夕上二松臺一立去思蟬聲滿レ耳秋
と侍るに本つかれたりひぐらしは寒蟬茅蜩晩蟬な
どゝ書り八九月の夕に到てきはめて氣疎き聲を出
すものなり後撰貫之
日ぐらしの聲もいとなくきこゆるは秋夕ぐれにな
れはなりけり
空蟬乃世
莊子逍遙游篇朝菌不レ知二晦朔一蟪蛄不レ知二春秋一云
々萬葉に家持　空蟬の世は常なしと知るものを
古今に友則
うつ蟬の世ぞ夢には有ける其外先吟等類多し奥義
抄に蟬はもぬけてからを置て去る物也人もしかあ
ればはかなき物にそへて人といはんとて空蟬とい
ふなり
つもり消る
觀普賢經若欲二懺悔一者端座思二實相一衆罪如二霜露一
惠日能消滅云々　夫木に僧都源信
さとり得ておもひとく日にあひぬればほどなく消
ぬつみの泡雪
往生要集にも常に佛を見奉れば無量億劫の業障も
春の泡雪露霜の日に照されて消るが如し云々
念佛讀經
夕霧の卷にたうとき讀經の聲かすかに念佛なとの
聲ばかりして人のけはひいとすくなう云々心地觀
經云稱二佛名一故於二念々中一除二八十億劫生死之罪一
乃至則得二往生極樂世界一云々讀經は看經也天台曰
聲爲二佛事一稱レ之爲レ經
まめ
本朝の俗常にいひならはせる辭なり大かた健なる
心成へし文選靈光殿賦に儼雅をまめだちと訓せり

みつから休

念佛讀經といへども心に得ざる則は無用迷悟は人に在るのみ是法達の六祖に參して此旨を受て大悟せられたり法寶壇經に見えたり

無言を

報恩經云一切衆生禍從ㇾ口生口舌者鑿身之斧也云々又緘ㇾ口愼ㇾ心と云事法苑珠林に見えたり沙石集卷五行基菩薩遺誡の文の中に口の虎身を害し舌の劒命を絶つ口を目鼻のごとくしぬれは死して後も科なし口を守り心を接て身に犯す事なかれかくのごとく行ふもの世わたる事を得る云々

口業

十惡の中口を以てなす罪業也妄語綺語惡口兩舌自讃毀他の類是なり梵網經瑜伽論などに詳也釋氏要覧障染爲ㇾ業と有祖庭事苑菩薩戒以ニ身口心三業ー爲ㇾ體聲聞戒以ニ身口二善業ー爲ㇾ云體々

禁戒

楞嚴經第八云清淨持ニ禁戒ー人心無ニ貪淫ー於ニ外六塵ニ不ニ多流逸ニ云々要覧梵語尸羅此云ニ性善ー又云ㇾ戒以ニ止ㇾ過防ㇾ非爲ㇾ業と有畢竟人の所作惡業を制禁ずるの理なり然れは身心共に清淨を得るの義也なを僧祇律に詳也

境界

眼耳鼻舌心意色聲香味觸法の類六根六識六塵を合て十八境界といふ也

跡の白波

拾遺哀傷部題しらず沙彌滿誓「世中を何にたとへんあさほらけ漕行船のあとの白波

此歌萬葉第三に出たりそれには漕去し舟のとあり角總卷に霧わたれるさま處からのあはれ多くそひて例の柴つむ船のかすかに行かふ跡の白波めなれすもある住居のさま云々枕双紙にもはし船とつけていみしうちいさきに乘て漕ありくつとめてなといとゝあはれ也あとの白波は誠にこそ消もてゆけ云々橫川の僧都源信和歌は狂言綺語にして求法の障なりといひ給ひけるに或人の惠心院より暠がた湖水を眺て件の歌を吟しけるより僧都心にしみて觀念の助緣となりぬべきものは和歌にて有けるものをとそれよりおほくの歌どもよみ給ひしとぞ袋双紙に見えたり

岡の屋

大幡宇治川の東岸に有順和名にも宇治郡に入れり陽明殿の列祖關白兼經公此處に山庄を搆られしゆへ岡屋殿と云り今も近衞殿御傳領の地なりとそ山家集西行上人「伏見過ぬ岡の屋になをとゞまらし日野まて行て駒こゝろ見ん

滿沙彌

美濃尾張守左大辨正五位上笠朝臣麻呂養老五年四月太上皇の不豫を祈んが爲に淸原實家滿誓沙彌と稱す仝八年二月筑紫觀世音寺の別當に補して造營の事を掌る履歷は續日本紀の中處々に見えたり

ぬすみ

竊の字なり長明の謙退して書れたる文段なり史記孔子世家老子曰吾不レ能二富貴一竊二仁人之號一注二王肅云謙言レ竊二仁者之名一又文選潘岳閑居賦序僕少竊二鄉曲之譽一注云譽美稱也竊岳謙辭也

桂の風

文選北山移文秋桂遺レ風春蘿擺レ月云々但爰の文段は白文集十二琵琶引に潯陽江頭夜送レ客楓葉荻花秋瑟々と侍るにもとづかれたり中華にて桂といへるは木犀の事也本朝にては楓の字をかつらともかへでともよめり萬葉卷七に向岳の若かつらきの下枝とよめるも楓の字なり乙女卷にもかつらの下風なつかしきにつけてと有賀茂の祭に用るかつらの木の事也舊事本記に天稚彥門之湯津楓樹と有

潯陽江

大明一統志五十二曰在二九江府城北一源自二甌山一至レ此下流四十里合二彭蠡湖水一東流入レ海云々唐の元和十年白樂天九江郡の司馬に左遷せられ翌年の秋此處にて琵琶引を作られたり夫木に此心を後鳥羽院

四の緒のしらへは波に聞へねど入江の月にむかしをそ思ふ

源都督

桂大納言經信卿を斥り都督は筑紫の管領太宰帥の唐名也職原抄に見えたり彼卿は宇多源氏中納言道方の六男正二位民部卿たり詩歌管絃の宗匠和漢の才に富て故實の有識也大宰少貳資通の弟子にて琵琶の妙手たりしされば此流を桂流と云後鳥羽院琵琶の曲を定輔卿に習はせ給ひけるか入眼の啄木に

到りては桂流也しとぞ堀川院の朝嘉保元年六月太宰權帥に遷されて下向中二年有て承徳元年正月彼國におゐて卒去八十二歳云々次男俊頼其息俊惠法師ならひに和歌の業を傳へて堪能先達也但俊惠は初東大寺に住し大夫公と稱す後に城州久世の福田寺に移り門下の人々を集て月次の歌の會せられし是を歌林宴と云長柄の橋柱の文臺も此僧の所持ありしを後には院中に召置れて御會などにも出されしとぞ勢州穰村の白拍子靜が舞の唱歌も俊惠の作なりと云り則長明も彼四條家の傳へを受て歌曲の兩道をは得られたりと見えたり

流をならふ

經信卿の嫡子中納言基綱是も大宰權帥にて宰府にておはられしなり此家代々郢曲琵琶の術を受繼れたり基綱卿の聟尾張守高階爲遠の女待賢門院の尾張といへる女房後に治部尼と申き良忍上人の弟子にて念佛の行者となり大原に住居ありし隱なき琵琶の達人也盛衰記卷二にも平相國第三の女は世に勝れたる琵琶の上手におはしましき經信大納言より四代の門葉治部の尼上の流を傳へて流泉啄木まてきはめ給へり云々

あまりの興

餘興也物に感しておもしろき意の發するを興といへり保胤池亭記若有二餘興一者與二兒童一乘二少船一叩レ舷鼓レ棹云々

松のひゞき

白文集第三樂府に第一第二絃索々秋風拂レ松疎音落又河原院にて源英明の詩に松高風有二一聲秋一なと其外等類多し後撰壬生忠岑

松の音に風のしらへをまかせては龍田姫こそ秋はひくらし

拾遺紀貫之「松の音は秋のしらへに聞ゆなり高くせめあけて風そひくらし

秋風の樂

盤渉調の樂の名也順和名曰古老傳云弘仁天皇幸二南池院一之日初奏二此曲一

水の音に　後撰貫之「足引の山下水はゆきかよひ琴の音にさへながるへらなり

流泉の曲

流泉啄木の二曲は仁明帝の朝掃部頭貞敏入唐して

傳へ來れる琵琶の祕曲也とそ事は盛衰記十二全卅一に見えたり天暦の御宇木幡山に住し盲僧是を從三位源博雅につたへし事は宇治大納言物語出たり件の盲僧を會坂の蟬丸の樣に謂傳るは孟浪（まんらん）の義也蟬丸は仁明帝の朝の道人也博雅は醍醐の皇子二品兵部卿克明親王の男母は左大臣時平公の女と大系圖に見えたり

あやつる

あやとるも全しとゝつと五音通す操の字也長門賦注操曲也匀會操把持也

ひとり詠して

詠は永レ言也と字訓に侍ることく詠歌謳吟なとゝて聲を永く曳てうたふ事也前漢藝文志云詩ハ言レ志歌永レ言故哀樂之心感而詠歌之聲發云々元は尙書舜典より出たり

心をやしなふ

孟子公孫丑章句吾善養二吾浩然之氣一

齡ことの外

莊子德充符篇曰二其異者一視レハ之肝膽楚越也自二其同者一視レ之萬物皆一也云々慶滋保胤は賀茂忠行の次男にて儒才拔群の人也遁世して東山如意輪寺にておはらる池亭記を書れたるにも餘の興あれは兒童と小船に棹さしてあそひ樂ふと有能因法師も長門守永愷とて文章の博士たり攝州古曾部に退隱年々花の比は上京して大江公資が五條東洞院の家に寄宿せしが勸童丸と云小わらは一人のみ相倶しける由袋双紙に見えたり

つばな

淺茅の花也八雲御抄にはちはなとも有匀會茅苗出レ地曰二茅針一夫木に曾禰好忠「つは那ぬく淺茅か原も老にけり白わたひける家と見るまて

いばなし

荆梨と書にや温暖の氣を受て松林巖石の地に生する草也夏の末葉の下に小き實をむすへり食に堪たり但王城十里四方の地の外は生せさる草なりと云へり

ぬかこ

零餘子と書り本草綱目に薯蕷（ヤマノイモノツル）藤上所レ結子也云々大臣大饗の食料にも用らるゝ由江家次第に見えたり

芹をつむ
萬葉の第廿に葛城王
ますらおとおもへるものを太刀はきてかにはの田井に芹そつみける
此歌の可爾波田井は山城綴喜郡也とそ

すそわの田井
下回と書りくまわと云も全し心也童蒙抄に山のすそめぐりの田の井也と有萬葉の第九に「筑波ねのすそわの田井に秋田かる妹がりやらんもみち手をかた

おちほをひろひ
伊勢物語の歌に「うち侘てをちほひろふときかませは我も田づらにゆかましものを

ほくみ
穂掛と云に全し今案にいにしへは是を稲蘰(かつら)といひしと見えたり萬葉第八坂上大娘かいねかづらを贈れる返しに大伴家持「わきもこか業とつくれる秋の田の早穂のかづら見れとあかぬかも
藻鹽三に田舍に稲のとり初に新しき藁にすりぬかと云物をいれて穂を組合て門にも倉の戸にもかけ神に奉るとて掛るをほがけと云也と有夫木に信實
秋の田のかりほのほぐみいたつらにつみあまるまてにぎはひにけり

嶺によちのほり
攀の字をよつるとよめり物にとりつきてのほるやうなる心也毛詩陟ニ彼岵一兮瞻ニ望父母一兮司馬溫公獨樂園記臨レ高縱レ目逍遙徜徉惟意所レ適

木幡山
萬葉には木旗とも强田とも書り宇治郡高か嶺の北にあたれり土俗は關山と云木幡の關の跡也とそ

休見里
紀伊郡也又菅原の伏見といへるは大和也とそ袋双紙に　木幡山すそのゝあらしさむければ伏見の里もいこそねられね

鳥羽
是も紀伊郡也山家集に西行上人「何となく物かなしくそ見え渡る鳥羽田の面の秋の夕くれ

羽束師
延喜式山城乙訓郡羽束師社(もり)一座高靈產日神云々今の世土俗は趾しらずの杜と云り後撰に

わすられておもふなけきのしけるをや身をはづかしの森といふらん

勝地は主

景氣勝絕の處を示て勝地と云り白文集十三に勝地本來無定主大都山屬愛山人と云々維摩經にも是身無主爲如地なと見えたり

炭山

宇治の御室戶山より東北にあたれり

笠取

宇治郡醍醐山の東にあたれり古今に忠岑「雨ふれば笠どり山のもみちははゆきかふ人の袖さへそてる

岩間

江州志賀郡也笠取田原なと此麓に當れり元正帝の朝越大德泰澄建立正法寺と號す本尊は千手觀音則巡禮卅三所の內也事は壒囊抄草山集卷五に詳也

石山

是も志賀郡也是より前に予か抄出せるあつま路次記首書に粗擧る故に爰には略せりなを元亨釋書廿八に見えたり新古今藤原長能

都にも人や待らん石山の峰にのこれる秋のよのつき

粟津の原

志賀郡也是もあつま路次記の首書に委しく記す照し考へし後拾遺の歌に「あはつのゝ墨黑のすゝきつのくめは冬たちなつむ駒ぞいばゆる

蟬丸翁

是もあつま路次記の首書に出す故爰には略せり長明の無名抄に會坂の關の明神と申はむかしの蟬丸の彼わら屋の跡をうしなはずしてそこに神と成て住たまふ成べし今も打過る便に見れはむかし深草のみかとの御使にて和琴ならひに良峰宗貞良少將とてかよひけん程の事まで俤にうかひていみしくこそ侍れとあり良少將は僧正遍昭の俗名也

田上川

江州栗太郡宇治の川上也舊事紀には谷上と書り土俗は太神の字にて本據侍る義と云り田上大石里なと越て師家に到る帥大納言經信卿爰に山庄を搆て次男左京大夫俊賴其息式部大輔俊重妹新少將ともに三世まて此地に居住有しとぞ夫より時の人此處

を師家と呼來れり拾遺に兼輔
月影の田上川に淸けれは網代に氷魚のよるも見え
けり

猿丸大夫
官姓時代共に分明ならさる人也稱德帝の寵遇有し弓削道鏡の事なりといへり但和歌の家沙汰有事にて口決の義なれば師說を受くへし道鏡の事跡は續日本紀に出たり野州河內郡藥師寺にて謫死也又賀州にも猿丸大夫の廟ありとそ云々なを元政師の草山集卷五隱逸傳などに委し無名抄に或人云たなかみの下にそつかと云處有そこに猿丸大夫か墓有庄のさかひにてそこの券に書載せたればみな人しれりと有

折につけ
四時にかけたる辭也後拾遺の序に花の春月の秋折につけ事にのそみて云々

櫻をかり
定家卿御說に物をもとむるをば紫がり茸がりなど云櫻かりも爰かしこの花を尋て見たる體なり云々與義抄の說も是に同じ

佛に奉り
法華提婆品云採薪及菓蓏隨時恭敬云々

家つと
萬葉に裹の字をつとゝよめり又土產とも書り家々へのみあげもの也但爰にては長明身命を繼の料に充らるゝを斥れたる成べし古今に素性法師
みてのみや人にかたらんさくらはな手ことに折て家つとにせん

故人
禮記檀弓篇に出たる文字也萬葉にはもとつひとゝ訓す舊友の事なりすべて月に對しては往事を何となくおもひかこち顏なる事古今の情にして和漢の詠多し枕双紙にも過にし方戀しきもの月の明き夜と侍り

猿の聲
古樂府に巴東三峽巫峽長猿鳴三聲淚沾衣この外等類多し

槇島
城州久世郡にて宇治川の西にあたれりいにしへ網代を設て魚獵の地也爰にかゝり火と書れたるも

漁火の事也其後興正菩薩叡尊殺生の罪を愁ひ弘安七年正月奏して網代を毀ち漁舟を埋み土人を教誨して布を晒し件の魚獵に代らると云々

篝火

順和名に漁者以レ鐵作レ篝盛レ火照レ水者と有薄雲卷にいと木しけき中よりかゝり火とものやり水のほたるに見えまがふもおかし云々堀川院百首の中に「大井川瀬々にひまなきかゝり火と見ゆるはすだく螢なりけり

木の葉ふく嵐

拾遺に貫之「秋の夜の雨と聞えてふる物は風にしたかふ紅葉なりけり後拾遺に能因法師

神無月ね覺にきけは山里のあらしの聲はこの葉なりけり

ほろ〳〵と鳴

玉葉に山鳥のなくを聞て行基菩薩「山鳥のほろほろとなく聲きけは父かとぞおもふ母かとぞおもふ此歌は梵網經に一切男子是我父一切女人是我母我生々無レ不ニ從レ之受レ生故六道衆生皆是我父母と說れたる心をよまれたりと袋双紙に見えたり

かせぎ

鹿の事也鹿野苑をかせぎのそのと歌にもよめり角の貌桛(かせ)木に似たる故の和名也とぞ花鳥餘情に春日の神詠とて

鹿島よりかせぎにのりて春日なるみかさの山の浮雲の宮

世に遠さかる

山家集に西行上人高野に住侍ける折大原の寂然かもとへ山深みと云五文字を句の首に置て十首よみてつかはしける中に　山ふかみなるゝかせぎのけぢかきに世にとをさかるほとそしらるゝ

寐覺の友

堀川院百首の中に國信

いふ事もなき埋火をおこすかな冬のね覺の友しなければ

梟の聲

是も西行の大原へおくられし件の十首の中に

山ふかみけちかき鳥の音はせてものおそろしさふくろうの聲

夕顏の卷に松の響木ふかく聞えてけしきある鳥の

から聲に鳴たるも梟は是にやと覺ゆ蓬生巻にもう
とましうけどをき木立に梟の聲を朝夕に耳ならし
つゝ云々

山中の景氣

文選鍾山詩即レ事既多レ美臨眺殊奇云々又曰山中咸
可レ悦賞逐二四時一移春光發二隴首一秋風生二桂枝一云
々

大かた

東野州抄物におほかたは大槩（かい）の心也たとへは十の
もの八九なと云心也と有

白地　かりそめの心なり

五とせを經

白文集巻四樂府墻有レ衣兮瓦有レ松吾君在レ位已五
載（とせ）云々

事の便

月清集山家の歌の中に後京極殿「をのつから便に
きけは都には我すむ谷を知人もなし

やことなき

無レ止の字也稱美の辭也花鳥餘情にやんことなき
はきわめて上﨟の品を云と有すべて爰の文段文選
樂府詩親友多零落舊齒皆凋喪市朝互遷易城闕或丘
荒ト侍るに心等し新勅撰に八條院高倉
數々にたゝめのまへの俤のあはれいく世の年のへ
ぬらん

のとけくして

老子經知レ足不レ辱知レ止不レ殆可二以長久一と侍るに
心全し略說戒經にも知レ足臥レ地樂不レ足在レ天苦
知レ足貧亦富不足富レ亦貧云々

一身をやとす

清獻公座右銘良田萬頃食二升大廈千間臥八尺韓子
外傳巻九結レ駟列レ騎所レ安不レ過レ容レ膝食前方丈所
レ甘不レ過二一肉之味一云々

かうな

寄居蟲と書り枕双紙に日比はがうなのやうに人の
家にしりをさし入てなんさふらふ云々本草綱目四
十六云形似二蜘蛛一入二螺殼中一負レ殼而走觸レ之則縮
如レ螺云々

みさご

鶚魚鷹雎鳩など書り鶚の字を用は俗の謬也萬葉第
三に「みさご居る荒礒に生るなのりその　同十一

みさこ居る沖のあら磯による浪のなど其外の古歌に多し爾雅注曰鶚鵰類也好在ニ江邊山中一亦食レ魚者云々なを本草綱目山禽部に詳也

人をおそるゝ

韓文巻廿云鳥俛而啄仰而四顧獸深居而簡出懼物之爲ニ己害一也云々莊子山木篇にも此意得見えたり

ましらはす

陶潜歸去來辭云歸去來兮請息レ交以絶レ游

たゞしづか成を

能斷金剛論に心寂靜身寂靜の辨あり

愁なきを

白居易詩富貴亦有レ苦々在ニ心危憂一貧賤亦有レ樂々在ニ身自由一

住家を作るならひ

是より世間營作の仔細を述られたり天子より士大夫に到るまて主居客居倉廩厩庰の類其分際に應じ設けすしてかなわざる事に侍れど一己の身にかけては畢竟無用の事也との儀なり張蘊古か大寳箴に壯ニ九重於內一所レ居不レ過レ容レ膝侍るの理なり

眷屬

字彙眷親屬也顧念也史記樊噲傳に嫁屬と書るも仝し夕顔巻にくゑんぞくと侍るも眷屬也と孟津抄に見えたりくえの反切けなればなり

朋友

公羊傳同レ門曰レ朋同レ志曰レ友と有義楚六帖同レ黨爲レ朋相知爲レ友云々

師匠

楊氏方言云師敎レ人以レ道之稱又天台云師有ニ匠成之能一云々人の師たる者は敎るに事々其規矩にしたかふ模(いかた)の物を成すがことし故に師匠とは云とぞ

馬牛の爲にさへ

發心集巻五にも我身の起臥す處は一二間に過す其外は皆親しき疎き人の爲もしは野山に住へき牛馬の料をさへ造おくにはあらずやかくよしなき事に身をわづらはし心をくるしめて云々

人の友たる

保胤池亭記云人之爲レ友者以レ勢以レ利不ニ以レ淡交一不レ如レ無レ友

富るをたうとみ

文選廿九感舊詩富貴他人合貧賤親戚離又史記汲鄭

傳一貧一福乃知二交態一一貴一賤交情乃見

糸竹

五經通義絲爲レ絃竹爲レ管と有すべて琴琵琶の類絃を繫る樂器を糸と云笙篳篥(ひちりき)のごとき管を用るを竹といふなり

花月

陶淵明詩皎々雲間月灼々葉中花豈レ無二一時好一古今集序に春の花のあした秋の月の夜毎に云々千載集序に春の花のあした秋の月の夕おもひをのべ心を動かさずと云事なしある時は糸竹の聲しらべをとゝのへ或時はやまともろこしの歌ことばをあらそふ云々

賞罰

五車勻瑞賞尙也尙二其功一也史記云賞中二其功一則有レ忠者進罰當二其罪一則有レ咎者退

忍のあつき

後漢書曰專諸荊卿之感激侯生豫子投レ身心爲レ恩使命依レ義輕云々晉書孔坦上表云士死二知遇恩一令ハレ命輕一

たゆからすしも

ゆるやかならざる心也萬葉に寛の字をたゆたふとよめる此心也

みつからあゆむ

戰國策顏斶曰安步以當レ車蔬食以當レ肉云々

心を動かす

莊子養生主云安レ時而處レ順哀樂不レ能レ入林希逸口義に言レ不レ能レ動二其心一也と有皆是天地自然の理を了知の所以也性理字訓云道明德立無レ所二疑懼一曰レ不レ動レ心なを孟子に委し

養生

孟子盡心上曰存二其心一養二其性一所三以事二天也注云養謂二順而不一レ害也云々千金方曰夫養レ性也者欲レ使習以性成一成自爲レ善不レ習無レ利也性已自善內外百病皆悉不レ生云々

衣食のたぐひ

天台止觀卷四衣以蔽レ形遮二醜陋一食以支レ命愼二彼飢瘡一云々なを衣食上中下の三品右の文段のつゝきに委し照考へし又白文集布衾不レ周レ體藜茹纔充レ腹

藤の衣

藤の皮葛などにて織たる賤者の麁服也萬葉に　鹽

くむあまの藤衣　古今に　山田を守ると藤衣なと
よめる是也東の常綠抄物にも山がつなとの粗相な
る衣也と有

肌をわくし
往生要集卷四に麁服也といへとも肌を隱し寒をふせくに足れり惣して內心の德をたつとぶは則外物をのづから輕くして人の錦繡をもうらやます己が蔽衣も愧る事なし云々僧靈徹詩年老心閑無二外事一麻衣草座亦容レ身

野へのつはな
前に或はつはなをぬきいばなしをとると書れたる首尾也

味を甘くす
史記秦本紀寒者利二短褐一飢者甘二糟糠一沙石集卷九性空上人曰一瓢底空三昧自濃我不レ知レ人無レ恨無レ喜人不レ知レ我無レ譽無レ毀云々なを前後是を略す長明の發心集第五にも此辭を引れたり並に照し見るへし

うらみもなく
論語子曰天不レ怨人不レ尤馬融云孔子不レ用二於世一而不レ怨レ天不レ知レ己亦不レ尤レ人云々夫木に後光明峯寺殿　身をは雲心は水になしつれは人をも世をも恨さりけり

命は天運に
周易上係辭樂レ天知レ命故不レ憂又陶潛歸去來辭聊乘レ化以歸レ盡樂二夫天命一復奚疑云々

身をは浮雲に
維摩經十喩に是身如二浮雲一須臾變滅と有是に本づきて白居易東坡なとおほく用られたる辭也此心を千載に公任卿　定なき身は浮雲によそへつゝはてはそれにそなり果ぬへき

一期の
たとへは晨より晨に到ることく其時節に復るを期と云凡人壽百歲を以て期とす老少是を以て準とする故に惣て一生を一期と云也輔行記卷五云即起即滅名爲二一期一

うたゝね
假寐の字也左傳宣公二年注假寐不レ解二衣冠一而睡

枕の上に
維摩經十喩に是身如レ夢爲二虛妄之見一涅槃經に生

死無常は猶ニ昨夢ニなと見えたり其外圓覺經唯識論等に說れたる趣心同し南華老人の夢に胡蝶となりし寓言齊物論に侍りこれ是非も爭ふべからす死生も却て變なきの理を明せる也源氏五十四帖も夢幻の二字を以て畢竟とすべて人の世に在る盛衰興亡死生變化つらノヽおもすへば皆夢にあらざる事なし長明是を會得して枕の上にきはまるとは書れたるにこそ源意眼を付へし夫木に西行上人

夢のうちにさむるさとりの有ければくるしみなしとときける物を

生涯

在世一期の間を斥り莊子曰吾生也有ㇾ涯而知也無ㇾ涯以ㇾ有ㇾ涯隨ㇾ無ㇾ涯殆已

折々の美景

前に糸竹花月を友とせんにはしかしと侍る首尾なり今案に徒然草に此世のほだしもたらぬ身にたゞ空のなごりのみぞ惜きといひしこそ誠にさも覺ぬへけれと侍るも爰の文意をふまへて筆法を換へたるものなるべしされば何某とかやいひし世捨人のと兼好の書れたるも則長明を斥るにこそ文選謝靈運詩序天下良辰美景賞心樂事四者難ㇾ并云々古今序古天子毎ニ良辰美景ニ詔ㇾ侍臣預ニ宴筵ニ者ㇾ獻ニ和歌ニ云々薄雲卷にも年の內ゆきかはる時々の花もみち空のけしきにつけても心のゆく事もし侍りにしかな云々紀貫之歌に

春秋におもひみだれてわきかねつ時につけつゝうつる心は

三界

祖庭事苑云三界謂ニ欲界色界無色界ニ又謂ニ之三有ニ

たゞ心ひとつ

華嚴經云三界唯一心々外無ニ別法ニ心佛及衆生是三無ニ差別ニ沙石集卷五に華嚴には三界唯一心法華には唯有一乘法起信には一心法界天台には唯一實相毘尼には常爾一心淨土門には一心不亂宗門には一心不生密教には唯一金剛と說と云々夫木に心海上人　すみ濁る流れの末はかはれとも心ひとつの法の水上

心若安からすは

心を安樂に處するは是生を養の本也故に莊子一部の最初にも逍遙遊を述て樂の字を以て之を貫かれ

たる也

宮殿樓閣も

文選弁命論に云瑤臺厦屋不レ能レ悅ニ其神一土室編蓬未レ足レ憂ニ其慮一事文別集文中子云 志意修則驕ニ富貴一矣道義重則輕ニ王公一矣內省則外物輕矣

乞食

持律の僧右に錫杖を提け左に鉢孟を持し道の側を行亡家を局（カキツ）て食を乞是比丘の法也釋氏要覽出家爲ニ成道一行乞レ食破ニ一切憍慢一故也寶雲經云凡乞レ食分爲ニ四分一一分奉ニ梵同行者一一分與ニ窮乞人一一分與ニ諸鬼神一一分自食

俗塵に着する

楚辭安能以ニ皎々之白（イサギヨキ）一蒙ニ世俗之塵埃一乎云々文選陶潛詩閑居三十載遂與ニ塵事一冥（ハルカナリ）詩書敦ニ宿好一林園無ニ世情一云々注曰塵事塵俗之事也冥遠也幽隱之事而無ニ俗塵一也と有

分野

下學集有様之義也と有輔行記卷一に其地分野（アリサマ）云々本朝台家の讀慣し故實と見えたり文選魏都賦列宿分ニ其野一云々天の廿八宿を四方に配し中華の九州に宛て各つかさどる星紀有事は淮南子天文訓に見えたり此義を據としてありさまと訓するなるべし

魚にあらざれは

大戴禮に曾子曰魚游ニ于水一ハ鳥飛ニ于雲一云々莊子秋水篇惠子曰子非レ魚安知ニ魚之樂一

鳥は林を

文選補亡詩魚游ニ清沼一鳥萃ニ平林一濯レ鱗鼓レ翼振々其音陶潛全集卷二羇鳥戀ニ舊林一池魚思ニ故淵一

抑

句會反語之辭又發語之辭と有前に述たる事を抑かへしていひ擧るの義則反語の辭の法度にかなへり

月影かたふき

長明の身老て在世いくはく在べからざるを月の西山に傾むくに譬へられたる也後拾遺に

なかむれは月かたふきぬあはれ我此世の程もかはかりそかし

餘算

餘命也殘生と云も全じ菅雅規尙齒會の詩に眠思ニ餘算一涙先紅續古今正三位知家

我もまた山の端ちかし有明の月をあはれとなかめ

せしまに

三途

四解脱經云地獄名二火塗一餓鬼名二刀塗一畜生名二血塗一云々祖庭事苑云一火途瞋恚也二刀途慳貪三血途愚癡西域記曰儒書春秋有二三途危險之處一借二此名一也塗道也謂二惡道一也

何のわざをか

天台止觀卷四人命無常遭二生老病一尚不レ爲レ急死事不レ奢那得レ不レ怖々心起時如レ履二湯火一五塵六欲不レ暇二貪染一

事にふれて

爰の文段此記の肝心たるべし前後の一貫と見えたり熟讀翫味すべきにこそ

執心

親炙てはなれざる心を云たとへば香を包たる紙帛の其馨散せざるがことし傳灯錄云夫出家之人心不レ附レ物是眞修行云々

用なき樂み

長明方丈の室を設け閑寂に處して糸竹花月を友とすと段々書載られ侍るといへども是又畢竟一大事因緣の爲には悉罪障の因にして無用の儀也と了解し執心を貽されざる志操爰にてよく聞え侍り維摩經方便品凡夫不レ了起二諸煩惱一造二種々業一不レ覺息斷二三事分離一生空過悔無レ所レ及云々

あたら時を

天台止觀卷七を照し考べし又傳灯錄十八云佛法因緣事大莫レ作下等閑相二聚頭一亂說雜話趁講過時光陰難レ得可レ惜云々堀川院百首の中に

はかなさをおもひしらぬはなけれともあらましにのみ日をくらすかな

しつかなる曉

新古今に　式子內親王しつかなる曉ことに見渡せはまだ深き夜の夢そかなしき　此歌は延命地藏經に每日晨朝入二於諸定一と侍る心をよまれたりとそ

心に向て

是より自問自答心地の沙汰也後撰讀人しらず

なき名ぞと人にはいひて有ぬへし心のとはゞいかゝこたへん

是は戀の歌にて侍れ共道を行ふの本理によくかな

へる歌也とそ

山林に

法華方便品一心除レ亂攝ニ念山林ニ云々

心をおさめて

維摩維一心禪寂攝ニ諸亂惡ニ云々涅槃經不レ修レ心者不レ能レ觀レ心

道を行はん

莊子曰虚靜恬淡寂漠無爲者天地之平而道德之至云々

聖に似て

聲聞緣覺菩薩佛の聖衆をひじりと云り但持戒堅固の僧の通稱にこそ維摩方便品に大經曰雖ニ復染ニ衣心猶未レ染者未レ染ニ四教大乘之法ニ此則雖ニ是沙門ニ名爲ニ白衣ニ云々涅槃經にも汝諸比丘身雖ニ出家ニ而未レ曾染ニ大乘之法服ニ云々楞嚴經失ニ我本心ニ雖ニ身出家ニ心不レ入レ道なと見えたり選集抄に
髪おろし衣の色は染ぬるに猶つれなきは我心なり

濁に染めり

名利に染着せる事をいへり第六卷にも佛も中々心きたなしと見たまひつへし濁に染める程よりもなまうかひにてはかへりて惡き道にもたゝよひぬべくぞおほゆると有是も俗にて世の濁りに染るよりも出家の後心のなまうかひなるは却て惡道に迷ぬへき儀也といふ文段也古今に僧正遍昭　はちすはのにごりにしまぬ心もて何かは露を玉とあざむく

淨名居士

維摩詰也標題の中に記す故に爰には略せり又居士の號の事は菩薩行品祖庭事苑なとにも見えたり儒家にても又沙汰あり蝦耕錄卷六に詳也並に照し考べし

周梨槃特

楞嚴經卷五曰周梨槃特迦白レ佛言我闕ニ誦持ニ無ニ多聞性ニ最初値レ佛聞レ法出家憶ニ持如來一句伽陀ニ於ニ一百日ニ得レ前遺レ後得レ後遺レ前佛愍ニ我愚ニ教ニ我安居調ニ出入息ニ我時觀レ息微細窮ニ盡生住異滅諸行刹那ニ其心豁然得ニ大無碍ニ乃至漏盡成ニ阿羅漢ニ云々なを文殊出曜經義楚六帖など合考ふへし

貧賤の報

方便品十如是の中に如是報と說れたるごとく一切の義に前果の報侍る事也因果經爲レ人貧賤者從ニ慳貪中ニ來云々續後拾遺に後京極殿の歌に

過にける世々にや罪をかさねけんむくひかなしき
昨日けふかな
妄心のいたりて
維摩方便品是身無作風力所レ轉者妄念心動ニ身内ニ
依レ風得レ有レ所レ作云々
心さらに答る事なし
發語第二段の首尾にて心地の法問たり以心傳心の
沙汰なるへし予がごとき筆端のおよぶ處にあらす
莊子天下篇にも此意得見えたり好士たらん者爰に
おゐて力を入て了解あらんもの歟千五百番歌合に
後京極殿
うきゑつみこん世はさてもいかにそと心にとひて
こたへかねぬる
不請の念佛
謙退して書止られし文法也筆勢いはん方なく意味
も又深長ならん歟又不請の字は華嚴經第廿に出た
り
建暦の二とせ
八十四代順德院御在位二年壬申にあたれり
彌生
三月也奥義抄卷二に風雨あらたまりて草木いよい
よ生る故にいやおひ月と云をあやまれりとあり
桑門
文選によすてひとゝ訓す通鑑集覽卷九云桑門則沙
門也大灌頂經息レ心達ニ本源ニ故號爲ニ沙門ニ云々な
を法苑珠林釋氏要覽なとに詳也夫木に知家卿
からくして入しは何そ桑の門道のこゝろよそのし
るしあれ
蓮胤
長明の法號也なを標題に是を記す
月影は
此歌新勅撰釋教部に十二光佛の心を讀侍けるに不
斷の光佛をよめる源季廣と有阿彌陀佛に十二光の
別稱侍る事は悲花經楞嚴經なとに見えたり涅槃經
に如來常住無レ有ニ變易ニ一切衆生悉有ニ佛性ニと說
き心地觀經に凡夫所レ觀菩提心相猶ニ清淨圓滿月輪
ニ於ニ胸臆上ニ明朗而住と侍るも皆是唯心の淨土己
身の彌陀と悟知べき敎誨にこそ又件の季廣は木工
權頭季兼の男にて下野守に任し後淸季と改むよめ
る歌千載新古今以下の集に入れり長明同代の人に

て侍れと心地の法問のつゐでに折からおもしろく
おもひ寄られしまゝに記し付られ侍ると見えたり
或は此歌を省たる異本も有といへり世に流布の本
のまゝに用て今臆說をくはへ侍るもの也すべて此
書小序三段より卷末に到て意味深重なる儀段々擧
記することし元隣盤齊のごとき博識の先達釋し漏
されし事遺憾なきにしもあらず予か管見の臆說後
世の胡盧たりといへども長明の志操抄出にあらは
れざる事をいたみてしばらく十喩の義に本づき筆
にまかせ侍るのみ人々見ゆるしたぶへし又夫木に
常住心月輪の心を隆專法師　さとりゆく心の內に
すむ月は出て入べき山のはもなし

方丈記諷説

題集句書題也荀子題辭所ニ以題號一予曰神道儒佛之題號幾千多矣雖レ然約ニ佛經一則不レ過ニ于七種一要知方丈記者大意與喩兼而爲ニ題號一也高僧傳曰舍衞國有ニ維摩故宅一唐顯慶中王玄策因レ向ニ印度一過ニ淨名宅一以レ笏量レ基止有レ笏故號ニ方丈一無レ他長明以ニ菴室一爲ニ方丈一取ニ則毘耶離城維摩室一所ニ以作ニ一丈室一也記誌也事也理也師古曰統ニ理衆事一而係ニ之年月一也言長明作ニ方丈一因緣誌レ之

鴨

鴨者山州愛宕郡也公事根源曰下鴨御祖上賀茂別雷御祖神者號ニ玉依姬一賀茂健角身命之女也或時逍ニ遙瀨見小川邊一自ニ川上一丹塗矢一筋流下玉依姬採ニ彼矢一夾ニ我屋上一頃之無レ程孕生ニ男子一雖レ然不レ知ニ父爲レ誰也或時謀設ニ酒宴一授ニ盃彼兒一教レ可レ與ニ汝父一兒擲ニ其盃虛空一蹈ニ破屋一曰我是天神之子也飛而上レ天是則別雷神也 其丹塗矢者 今松尾大明神是也

長明

蓋題號之下書ニ作名一者曇鸞淨土論註依レ人信レ法故題下安ニ撰號一云々今此方丈記鴨長明所レ作也十訓鈔曰近比鴨社氏人菊太夫長明者和歌管絃道人也不レ叶レ望ニ社司一故恨レ世出家云々 東鑑曰承元五年辛未十月十三日鴨社氏菊太夫長明入道（法名蓮胤）依ニ雅經朝臣之擧一此間下向奉レ謁ニ將軍家一及ニ度々一云々而今日當ニ于幕下將軍御忌月一參ニ彼法花堂一念誦讀經之間懷舊之淚頻相催註ニ一首和歌於堂柱一草茂木茂靡秋霜消而空苔拂山風或曰長明者久壽元年生而春秋經ニ六十四歲一健保四年（丙子）六月八日卒ス

作意

曰源信三界義內大小三災以合ニ長明時代一也且經論釋之語且異朝我朝支和以記ニ無常反易理一而後代世人之遁世遺ニ于龜鑑一耳

ゆく川のなかれは絶すしてしかも本の水にあらす〇行は水のなかれゆく義也　釋文云川下也隨㆑地下而流曰世衆㆑人而爲㆑人々苒々行暮河闊㆑水而爲㆑河水滔々日渡と云文の心を書けるよとおほへて最あはれなりと十訓抄に見えたり

よとみ〇眞字本淀と書り歌枕には不㆑行と也

うたかた〇奥義抄に水のうへにつほみのやうにうきたるあはなり　後選集の歌に思ひ川たえすなかるゝ水のあわのうたかた人にありてきえめや又詞にうたかたと云ことありその詞はわすれぬことを云とこそ古き物には書て侍り歌におちたきつ川瀬になひくうたかたの思はさらめや戀しきものを

かつきえかつむすひ〇且の字也集匀姑の儀也又畧の義也大和物語歌にあひみてはわかるゝことのなかりせはかつ〳〵物はおもはさらまし

世中に有人とすみかと又かくのことし〇上をうけて云へり維摩經方便品云是身如㆓聚沫㆒不㆓撮摩㆒是身如㆑泡不㆑得㆓久立㆒法華經云世皆不㆓牢固㆒如㆓水沫泡焔㆒汝等咸應㆑當㆓疾生遠離心㆒業平の歌にゆく水と過るよはひとちる花といつれまててふことをきくらん異本に是迄を序分にし世中のある人といふより一段にする本ありあしさうなり

玉しきの都のうちに〇天子ましますの地なり萬葉松浦仙歌にたましきのこの川上に家ありと君をやさしめあらはさすなり水無瀬川玉しく庭のむかしにて風のみはらふ苔のうへかな

いらか〇釋名云屋脊曰㆑甍甍蒙也在㆑上覆㆓蒙屋㆒也徐曰所㆓以承㆒瓦故从㆑瓦陳也　左傳慶舍猶援㆓廟桷㆒動㆓於甍㆒

たかきいやしき人のすまゐは〇たかきは高位貴人の義也いやしきは卑下輕賤の人也すまゐは上に家と有にあたりて也

代々をへて〇字彙代者世也　廣匀年代也へては經の字也

是〇助語辭是有㆑所㆑因而發謂因㆑此故義也

むかし〇廿年卅年以往のみを云にあらす大かた過にしは去年は今年のむかし昨日はけふのむかし也　王逸少蘭亭記後之視㆓於今㆒猶如㆓今視㆑昔　源の光行歌に明日もあらはけふをもかくや思ひてんきのふのくれそむかしなりける

あるは去年焼て今年造り○あるはとはあるひはと云義也此義異本にはなし

すむ人も是に同し○徒然草に花やかなりしあたりも人すまぬのらとなりかはらぬすみかは人あらたまりぬ

古今集歌にあれにけりあわれいく世の宿なれやすみけむ人のをとつれもせぬ

いにしへみし人は二三人か中にわつかにひとりふたり也○白氏文集夜深吟罷一長吁先涙證前灑二白髮一二十年前舊詩卷十八酬和九人無造像功德經云或致二於死一我閻二世間一無レ有二一人一　榮花物語にかそへみる人なかりせはおくの山の谷のまつとやとしをつましし

あしたに死夕にうまるゝならひ○周禮疾醫註少曰レ死老曰レ終

水の泡ににたり○金剛經一切有爲法如二夢幻泡影一如レ露亦如レ電應レ作二如是觀一

生れしぬる人いつかたよりきたりていつかたへかさる○解脱云先生先生都生々前來世猶來世全無レ辨二世々終一又云我何處來又去受二何身一　金剛經曰無レ所二從來一亦無レ所レ去故名二如來一

又しらす○かみにしらすと書るによりて爰に又知らすと云り

かりのやとり○眞字本に假宿と書り逆旅とも倚寓とも書也

そのあるしとすみかと無常をあらそひ○白氏文集莫レ嫌地窄林亭小莫レ厭家貧活計微多少朱門鎖二空宅一主人到了不二總歸一

朝かほの露にことならすあるは露落て花のこり○禮記月令仲夏木槿榮今文單作レ蕣　歌にあさかほの昨日の花はのこるとも人の心をいかゝたのまん　定家の歌に露の身のまた消ぬより心こそ花の臺にまつやとりけれ撰集抄ある僧印西と云聖の許により來りけるに聖對面して心のはるけ侍るへき法文一言葉の給はせよと懇にきこえ侍れはそはなかがきに朝顏の花のさけるに露のをきて侍りけるか折節風の吹て露の落侍りけるをみて打涙くみてみるやいかにあたにもさける槿(アサカホ)の花にさきたつ今朝の白露是こそ法文よとて出侍りぬ其後はいつちへかさすらへ行にけんふつと見え給はすとなん此聖のありさまうけ給こそ殊に貴く覺て侍けに有にもあらぬ夢の世にはかなくあた

なる身に思を留て山林にも籠やして名利の心もはれさんめるにひたすらまほろしの世かりの身をもてはなれ德をかくし乞食頭陀の有様を示されけん心の中實にいさぎよくこそ覺え侍る昔の賢跡をみるにも一擧萬里によりて德をかくすと云りされは何なる智者の心を發せるにておはしけるやらん返々ゆかしく侍り歌さへ有難侍るぞや槿花をこそははかなきためしには申めるに花にさきたつ白露落ては更に跡もなく吹過ぬる風又留所も見えず花又日影に隨てしほみ日は虛出にかたふきぬあたなる世の中に白駒も過やすく金烏も留かたしされは何とてしはしか程もいたつらとしてすこせるや額にはすゝろに老の浪をかさね眉には霜のつもれるをも辨へすしてはかなき嬰兒の父母に貪することくにしてむなしくはせ過來世のくるしみを思へは佛語にはあらすやしりかほにしてしらさるは生死の無常に侍るぞかしな哀此乞食の人の心のことくなる思ひが須臾計付かしと覺て侍り此事鄉師の往生傳に註のせ給へりしひてかたさにたくみの詞をいやしけに引なし侍るなり見及さるにはあらす彼記には平の京東山の邊にて往生の素懐を遂ぬと侍るをみるにすゝろになみだおちてはへりき

露なをきえす○曾禰好忠の歌におきて見むと思ひし程にかれにけり露よりけなるあさかほの花

きえすといへとも夕をまつことなし○維摩經得ニ其露ー滅覺道成是までか序分なり序とは盧氏云序者次第之語也又叙也所ニ以叙ニ一書大意ー也

凡○發語詞也又大概の義也異本には予とあり集成云今人鄙人爲ニ凡夫ー輕賤之稱也

物の心をしれりしより○漢書云十五以下謂ニ之童子ー童獨言未レ有ニ室家ー也說文未レ冠也論語十有五而志ニ于學ー十五より以後を物の心しれりといふへきにや

四十あまりの春秋を送る○素門年四十而陰氣自半也起居衰論語子罕篇後生可レ畏焉知ニ來者之不ー如レ今也四十五十而无レ聞焉斯亦不レ足レ畏也

不思議○心にははかりかたき義なり

やゝ○漸字本に良と書り言塵集には漸と書てやうやくの義と云り

安元三年四月廿八日○年代記云安元三年は治承開元の年也大極殿燒亡其後宮なし

かとよ○疑のことはなり

都○萬葉には京師と云り　白虎通曰京師京大也天子所レ居　左傳曰邑有ニ先君廟一曰レ都无曰レ邑

たつみより○東南の角なり即樋口富小路也

火出來りて○清少納言枕草子にちかきほとに火出來ぬといふされたかいとさはかし爰を上三災に當てかきいたせり　三界義曰大三災者一火災二水災三風災也問此三災壞ニ何處一乎答火災能壞ニ欲界五趣幷色界初禪一此中爲ニ火所ニ焚燒一故

いぬゐ○西北の角なり

朱雀門○拾芥鈔云長安南面皇城門是謂ニ朱雀門一又大明宮南面五門正南曰ニ丹鳳門一夫丹鳳朱雀其義一然則以ニ其在ニ南方一故謂ニ之朱雀一乎　伴氏造レ之二階七間戶五間號ニ朱雀門中二階門一

大極殿○拾芥抄云朝堂院正殿名云ニ八省院一是也又謂ニ之最大殿一

大學寮○拾芥抄云二條南壬生西職源抄云大學寮者四道儒士出身之處也和漢最爲ニ重職一紀傳明經明法算道謂ニ之四道一又當寮安ニ置先聖先師九哲一春秋二仲釋奠有ニ東西二曹一菅江二家爲ニ其曹主一諸氏出身之儒訪ニ道於此二家一而已寮頭者儒中之撰也但雖レ非レ儒又有レ例

民部省○拾芥抄改ニ仁部省一宮城內太政官南美福大路西職源抄云周禮地官大司徒之職也邦國土地之圖戶口人民之數此官之所レ知也本朝又如レ此天下之戶口皆掌レ之又有ニ圖帳一國郡勝示載ニ以明白一謂ニ之民部省圖帳一

一夜かほとにちり灰となりにき○吳融廢宅詩不ニ獨淒涼眼前事一咸陽一火便成レ原

樋口○五條なり

やとせるかりや○眞字本に宿假屋と書り火出せる病人の宿はかりにさうそにしたる家と云義なり一說には病人のかりて居たりし宿といふ義なり

ふきまよふ○眞字本には吹紛と書り

ひたすら○眞字本には浸空と書り一向共書なり

映して○字彙映相照也

あまねく○遍と書り

其中の人○炎とふかことくして一二町あひ間を置て越つゝうつりゆく程にあとさきにはさまれし其中の人と云義なり

うつゝ心ならんや○萬葉に現心と書り源語類集にう

つゝ心ならぬとは狂亂のこゝろ也
まくれて〇目くれてとなり
からくしてのかれたれとも資財をとり出るに及はす
〇大智度論曰設滿ニ世界寳ニ无レ有ニ其身命一孟子云豈
有レ他哉避ニ水火一也如ニ水益深一如ニ火益熱一辛苦しての
かれし也
七珍萬法〇七珍は佛教に七種珍寳といふなるへし
佛地論云一金二銀三吠琉璃四頗胝迦五牟呼婆羯洛婆
當ニ硨磲一也六遏濕摩揭婆當ニ瑪瑙一七赤眞珠　无量壽
經云金銀琉璃頗梨珊瑚瑪瑙　萬寳はよろつのたから
を指ていふ
灰燼〇韻會火過爲レ灰　字彙燼者火餘燭餘
公卿〇職原鈔曰攝政關白及三公是公也散一位及三位
已上是卿也參議者雖ニ四位一猶卿也但召名猶稱ニ四位一
也
すへて〇一槩總説のことはなり
邊際をしらす〇かきりをしらすと也
いとなみ〇眞字本に小營の字をかけり
さしもあやうき〇常住ならぬ義なり
家を作るとて寳をついやし〇池亭記云嗟呼聖賢之造
レ家也不レ費レ民不レ勞レ魂以ニ仁義一爲ニ棟梁一以ニ禮法一
爲ニ柱礎一以ニ道德一爲ニ門戸一以ニ慈愛一爲ニ垣墻一以ニ好
儉一爲ニ家事一以ニ積善一爲ニ家居一其中者火不レ能レ燒風
不レ能レ倒妖不レ得レ呈災不レ得レ來ニ鬼神一
あちきなくそ侍るへき〇眞字本には無情と書り日本
紀には無常と書りせんなき義をいふあちきなくつら
き嵐の聲もうしなと夕くれて待ならてけん
又治承四年卯月廿九日〇高倉院御宇也
中御門京極の程より〇詳拾芥抄にあり
大なる辻風〇大三災之内風災にあたる也　三界義風
災能壞ニ三禪已下一此中爲レ風所ニ飄散一　元命包云天
地怒而爲レ風莊子大塊噫氣其名曰レ風　平家物語去程
に同五月十二日の午の刻はかりに京中に飈夥ふきて
大厦おほく顚倒す風は中御門京極殿より起りて坤の
方へ吹て行に棟門平門吹拔て四五町十町はかり吹持
て行桁梁柱なとは虚空に散ことありし檜皮葺板の類
冬の木葉の風に亂るゝことし移敷なりとよむこと彼
地獄の業風なりとも是には過しとそみえし只舍屋の
破損するのみならす命を失なふ者おほし牛馬の類數
をしらす打殺さる是只ことにあらす御占あるへしと

て神祇官にして御占あり今百日の中に祿を重くする大臣の愼別して天下の兵革相續すへしとの神祇官陰陽寮ともにうらなひたてまつる

けたはしら○桁柱と書り

門のうへ○棟等の義なり

垣○牆也徐曰垣有レ院周繞之意早曰レ垣高曰レ墉

冬の木の葉の風に亂るゝかことし○異本には各木の葉のとあり後伏見院の歌山あらしにもろく落行もみちはのとゝまらぬ世はかくこそありけれ

ちりを煙のことく○李約云桑條无レ葉土生レ烟劉禹錫詩北風振レ槁揚二塵埃一

をひたゝしく○眞字本に夥鳴と書り

とよむ○日本紀には動とあり奥義抄には響と書り

彼地獄の業風○往生要集第一地獄亦分爲レ八一等活二黒繩三衆合四叫喚五大叫喚六焦熱七大焦熱八无間又云聞二地獄罪人啼獄之聲一悲愁恐䰟受二无量一如レ是无量百千萬億无數年歲聞二啼哭聲一十位恐䰟心驚怖畏閻羅人呵責之言汝聞二地獄聲一已如レ是何況地獄燒如レ燒二乾一薪火燒非二是燒一惡業乃是燒火燒則可レ滅業燒不レ可レ滅之二焦熱地獄下一見タリ輔行云地獄從レ義謂二地下之獄一也

三界義云問五趣中且何名二地獄一耶答曰梵云二捺洛迦一此云二苦器一造二惡業一人隨二苦器中一受二諸苦一故云二苦器一地下有レ獄故名二地獄一也

ひつしさるの方○西南の方なり

たゝことにあちす○國語辰畜云今其有レ実乎是歲海多天風

さるへきもの丶○變化のもの丶なすわさかと也

さとし○祥と書也

又おなし年の水無月の比にはかに都うつり○平家物語第五治承四年六月三日の日福原へ御幸なるへしと聞此日來都うつりあるへしと聞えしかとも忽に今明の程とは思はさりし物をとて京中の上下騷あへり三日と定られしかとも剩へ一日引上られて二日になりぬ水無月とは奥義抄云農のことゝも見なしつきたるゆへにみなつきといふをあやまれり一説に此月まことにあつうしてことに水泉かれつきたるゆへに水なし月といふをあやまれり

大かた此京の始をきけは嵯峨天皇○桓武天皇の御延暦三年十一月に大和國添上郡平の京をさりて都を山城國乙訓の郡に立て長岡の京と號同十三年十月に又

葛野郡にうつして是を平安城と云此平安城は土地をうらなわせ給ふに四神相應の地とて左靑龍右白虎前朱雀後玄武の四神相應の境地たり桓武天皇即長八尺の鐵の人形をつくり都の四方にうつまれ此平安城のわか日のもとにあらんかきり他所へうつすへからすよく守護神となるへしと祝し給ひけり是を將軍塚と云々

後すてに數百歳たをへり○桓武天皇より安德天皇迄は數百歳をへたると也

とかく○兎角と書り

御門より始たてまつり大臣公卿悉○平家物語に主上は今年三歳未幼座しけれは何心もなふ御輿にめされける少渡(シバラク)せ給ふ時の御同輿には母后こそまいらせ給ふに是は其義なし御乳母師亮殿はかり一とつ御輿には被參けれ中宮一院上皇も御幸なる攝政殿を始奉て太政大臣以下の卿相雲客我も〳〵と供奉せらる平家には太政の入道を始まいらせて一門の人々皆參られける

官位に思ひをかけ主君の影を賴む程の人は○平家物語に明る三日の日福原へ入せおはします入道相國の弟池中納言賴盛卿の山莊皇居なる同四日の日賴盛家の賞とて正二位にし給ふ九條殿の御子左大將良道卿加階越られさせ給ひけり攝祿の臣の御子息は凡人の次男に加階越られさせ給ふ事是始とそ承る

ときをうしなひ○陳鴻長恨歌時移事去樂盡悲來

のきをあらそひし人のすまい日を經つゝ荒行家はこほたれて淀川にうかひ○平家物語にのきをあらそひし人の栖居日を經つゝ荒行家々は加茂川桂川に毀入筏に組うかへ資財雜具舟に積福原へとてはこひけるよと川は山城の內なり續後選に高瀨さす淀の汀の薄氷したにそなけく常ならぬ世を

たゝ馬鞍をのみをもくす牛車を用とする人なし○平家物語に今は辻々を堀切車なとの容易行通こともなく邂逅に行人は小車にのり道を經こそ通けれ

其時おのつから事のたより有て攝津國今の京にいたれり○長明知る人に用ありて攝津國に行たるとなり

其地程せはく條里をわるにたらす○平家物語第五治承四年六月九日に新都の事はしめあるへしとて上卿には德大寺左大將實定御土御門宰相中將通親奉行辨には前左少辨行隆官人をめしくして當國和多の松

原西野をして照して九城の地を破れけるに一條より下五條までは其所ありて其より下はなかりけり萬葉集歌にあらのらに里はあれともおほきみのしきます時はみやことなりぬ

かまびすし○さわかしき義なり

木の丸殿もかくやと○丸木柱にて作りたる殿なり日本紀にては是閣の始なり歌にあさ倉や木のまる殿にわれをれは名のりおしつゝ行はたか子そ　朝倉は筑前と土佐に有

中々やうかはりて優なるかたも侍りき○むかしかるかやの闕に天智天皇のきのまろとのまておかれたるやうにてやさしきかたも侍るそと長明かみたてたるなり

いつくに作れるにかあらん○うたに遠近の人めまれなる山里にいゑゐせんとは君思ひきや

ふるさとは既にあれて新都は未ならすと云しより土木のわつらひあるをなけく○と云迄は平家物語の詞つゝきに同しき也ふるさとは平安城なり新都は福原の京なり萬葉集歌に立かわりふるきみやことなりぬれは道のしは草なかく生けり

ありとし有る人はみな○世にあるほとの人はと云義なり

浮雲のおもひをなせり○詞花に登蓮法師世間の人の心のうき雲にそゝかくれする有明の月

土木のわつらひ○土は土地木は家財木なり

車にのるへきは馬にのり○行儀のかわりたるありさまを云り

都の條里○異本には都の移とあり

たちまちにあらたまりてたゝひなひたる武士にことならす○都人といわれし人も田舍ゑひすにひとしとなり古今集歌に思ひきやひなのわかれにおとろへてあまのなわたきいさりせんとは　萬葉集の歌に咲花の色はかわらすもゝしきの大みや人そたちかわりぬる

瑞相○荀子曰相形不レ如レ論レ心論レ心不レ如レ釋ニ術形ー不レ如レ勝心々不レ勝レ術形相雖レ惡心術善无レ害爲ニ君子ー形相雖レ善而心術惡不レ害爲ニ小人ー

しるく○あらはなる儀也

うきたちて○動立也

同年の十一月二十六日になを此京にかへり給ひにき

○平家物語に今度の都うつりをは君も臣も不レ斜御歎ありけり山奈良を始て諸寺諸社に至る迄不レ可レ然よし申訴けれはさしも横紙を破ることきの入道殿もさらは都還可レ有とて同十二月二十日の日俄に都還有けり異本には同年の冬とあり

こほちわたせりし家共いかになりにけるにか○平家物語に俄に都還ありけれは何の沙汰にも不レ及皆打捨々々上られけり南院六波羅池殿へ御幸なる行幸は五條内裏とそ聞へし各宿所もなけれは八幡加茂嵯峨太秦西山東山の片邊に着て或は堂の廻廊或社の寶殿なとに付て可然人も立宿て座けり

いにしへのかしこき御代といふより世をたすけ給ふによりて　○と云迄は平家物語の詞つゝきに同し六韜云帝堯王二天下一時金銀珠玉不レ飾錦繡文綺不レ衣奇怪珍異不レ視玩好之器不レ寶淫佚之樂不レ聽宮垣屋室不レ堊甍桷椽楹不レ斲茅茨偏庭不レ剪

けふりのともしきをみたもふときはかきりあるみつき物さへゆるされき○聖代の公事政しるされし書に此義見え侍りし歌にたかきやにのほりてみれはけふりたつ民のかまとはにきやひにけり

今の世中○後白河院より順徳院の御代まてを今の世中といふにや是長明か時代なり

又養和の比○安徳天皇の御なり

飢渇○災を小の三災の飢饉災にあてゝ書り三界義曰小三災者一飢饉災二疾病災三刀兵災也年代記云養和元年四五兩月大飢渇

春夏日てり○洪範五行傳旱乾也言萬物傷而不レ得レ水也君持二元陽之節一暴二虐於下一故旱災應

秋冬大風○梁元纂要秋風曰二商風金風素風高風涼風悲風一冬風曰二厲風寒風朔風一書周公居レ東二年天大風禾盡偃大木斯抜邦人大恐王與二大夫一盡辨以啓二金縢之書一乃周公所二自以爲レ功代二武王之説一天乃反レ風禾盡起

春たかやし夏うふる○孝經大義註云天之道春生夏長秋斂冬閉我則以レ春耕以レ夏耘以レ秋收冬藏用二天之道一如レ此則順二時令一矣

うきめはなし○田をかりいねをこきもみをすりなとする時えしれぬ小うたをうたふ義なり

或は地をすて堺をいて○左傳普荐飢乞二糴于秦謂伯里與レ諸對曰天災流二行國家一代有レ救レ災恤二鄰道一道

也秦於レ是輸粟ニ於晉一
さま〳〵の御いのりはしまる○御祈はまつ藏人神泉苑に行むかひ人をあつめ池のほとりを掃地し石に水そゝき扱高聲みな人一同に雨たへ海龍王と云り此こと所見なきよしなれとも近代かくのことくして七日にいたりしるしなきをりは藏人を替らるゝとなん又しるしありて雨ふりぬれは帝藏人を朝餉へめし御衣をたまわる藏人御衣をたまはりてより庭へ下り舞踏す又殿上の口へしりそきて舞踏することもあるなり或陰陽師五龍の祭を奉仕する儀もあり或神祇官御ことのりを蒙りて諸神にいのる儀もあり又七大寺にて請雨經の儀もあるなり或は諸寺諸社にて金剛經般若經をよみし例も有しなり詳禁秘抄にみえたり
なにはに付くも○眞字本に何業付もとあり
田舍をこそたのめるに○源氏夕顔の卷にめさましてあはれいとさむしやことしこそなりはひにもたのむところすくなくゐなかの通ひも思ひかけぬ也いと心ほそけれ
さのみやは○さはかりもやわかとなり
見きほ○眞字本に操と云り百性の體別にかわれる所作をしらねは何をかし世をやすくわたらんともわきまへしらぬなり
寶物かたはしよりすつるかことくすれとも○文選東都賦損ニ金於山一沈ニ珠於淵一　莊子天地篇藏ニ金於山一藏ニ珠於淵一不レ利ニ貨財一
目見たつる人なし○めにかゝる人なきなり
金をかろくし粟を重○張文潛持レ錢糴ニ官粟一日夕擁ニ公門官一價雖レ不レ高官倉常苦貧兼年斛菌糜一粒不ニ肯分一伺待官粟空臘償邀居民坐視既不レ可レ禁之亦紛々擾々田畝中鼓腹幾人哀哉天地間生民苦辛
聲耳に見てり○論語子曰師摯始關雎之亂洋々乎盈レ耳
明る年○壽永元壬寅年也
ゐやみ○疾病災にあてゝ云り晉咸寧中大疫癘袞二兄倶亡次兄毘復危殆癘氣方熾父母諸第皆々出ニ次于外一袞獨留不レ去諸父兄强之乃曰袞性不レ畏レ病遂親自扶持晝夜不レ眠ニ其間一復撫柩哀臨不レ輟如レ是十有餘旬疫勢既歇家人乃返毘病得レ差袞亦無レ恙
日をへつゝきはまり行さま少水の魚のたとへににたり○出曜經曰是日已過命即隨減如ニ小水魚一斯何樂

ひたすら○一向と書り
家ことに乞ありき○列子云齊有二貧者一乞二於城市一乞
兒曰天下辱莫レ過二於是一
ついちのつら○眞字本に築牆邊書りついちとよむ也
ついちすこし特心ありてよむへしついちと云をきら
ふ故なり　實澄の說にひの字をいとよむへし文章の
法に世俗の詞をきらふ故につゐちとよむへきためな
り　毛詩大雅緜篇曰築之登々註鄭玄曰築牆者捊聚二
壤土一盛レ之以レ虆而投二諸板中一云々萬葉集第三土形
娘女とあり
くさき香○往生要集云僧伽吒經說人將死時諸虫怖畏
互相噉食受二苦痛一男女眷屬生二大悲惱一諸虫相食唯
有二二虫一七日鬪諍過二七日一已一虫命盡一虫猶存已上虫蛆
又縱食二上饍衆味一逕レ宿之間皆爲二不淨一譬如二糞穢一
大小倶臭此身亦爾從レ少至レ老唯是不淨傾二海水一洗
不レ可レ令二淨潔一外雖レ施二端嚴相一内唯裹二諸不淨一猶
如三畫瓶而盛二糞穢一取大論止觀等意體
馬車の行ちかふみちたにもなし○死人おほく倒ふし
てありし故に馬車の自由に行へき道もなかりしと也
薪にさへともしく○文選應璩書頃者炎旱沙礫消草木
焦卷處涼臺而有二鬱蒸之煩一浴寒水而有二灼爛之慘一宇
宙雖レ廣無レ陰以憩
市○集成買賣之所レ易曰中爲レ市又買レ物論語市舗
さゝふる○眞字本に支とかけり
丹○都類切赤色也
古寺にいたりて佛をぬすみ○古寺は破損し人もしか
〳〵住ぬゆへに佛をぬすみ堂の物の具をやふりとる
なり杜詩野寺殘僧少山園細路高
濁惡世○觀無量壽經云濁惡所地獄餓鬼畜生乃充レ滿
さりかたき女男なと持たる者は○小學有二三不去一
有レ所レ取無レ所レ歸不レ去與更三年喪不レ去前貧賤後
富貴不レ去
男にもあれ女にもあれいたはしく思ふかたに○異本
に人をいたはしくおもふ故にとあり
父子ある者はさたまりたる事にて親そさき立て死に
ける○經云佛念二衆生一々々不レ念レ佛父母念レ子々々不レ
念二父母一
仁和寺○寬平法皇の御庵室あるにより御室とも書り
隆曉法印○勝寶院代三世又稱二彌勒寺一宰相太皇太后
宮權亮源俊隆子大僧正寬曉灌頂弟子同入室三長者二

月一日卒年齢七十二
阿字○大毘盧舍那經有情及非情阿字第一命新羅國靈妙寺僧不可思議釋云秘密中釋者阿字自說本不生　大師言阿音婀也訓即無也不也非也　大疏云阿字自有ニ三義一謂不生義空義有義也　梵本阿字有ニ本初聲一若有ニ本初一則是因緣之法故名爲レ有又是阿無生之義也若法攬ニ因緣一成即無レ有ニ自性一爲レ空又不生者是一實境界即是中道義云々
一條より南九條より北○拾芥抄云南北一千七百五十三丈一尺北極大路弘十二丈并次四大路廣各十丈次宮城南大路十七丈次六路弘各八丈南極大路弘十二丈羅城門外二丈垣基半三尺
京極より西朱雀より東○拾芥抄云京地東西一千五百七十丈（通計東西兩京）自ニ朱雀一大路中央至レ東極畔七百五十四丈云々朱雀大路半廣十四丈（大行王尺溝弘四尺）次二一區（壬生）大路弘十丈次十丈次一大路弘十二丈次二大路弘各八丈又東極大路弘十丈小路十二弘各四丈（小路加堀川東西邊各二丈）町十六各四十丈
白川○山城國愛宕郡也素性法師歌に血のなみた落てそたきつ白河はきみか代までの名にこそありけれ

西の京○今の大宮通より西を西の京といふ大みや通より西へ八町北南は二條より一條迄十町の間これ大裏の跡也又東の京を洛陽といひ西の京長安と云なり
諸國七道○東海道東山道北陸道山陰道山陽道南海道西海道
崇德院○諱顯仁在居十八年讃岐國へ配流したまふ讃岐にて五部大乘經を書給ひて都八幡鳥羽へをらんとおほしめして大乘經の奧に一首歌をつらね給ふ濱ちとりあとは都へ通ふへとも身は松山に音をのみそなく御製の心ははまちとりあとは都へかよふへともは我章は都へ通ふへともいつか配流の罪をまぬかれ都に歸るへき身を待間の悲の御淚なかるゝを音をのみなくとあそはしける此御製さへ都へ御ゆるしなければ崇德院はおほくの敵にこそと仰られて舌を食きりたまひて血を以袖に御製狀をあそはし給ふ其文曰天魔成レ殺ニ國家大乘鎮守ニ云々而何之願力不レ成哉諸佛證知證議給矣顯敬白と書納給ひ三惡道に投こめ給ふ其は爪をも切せ給はす御髮をも剃給はす御年四十六歲にして讃岐の國にて崩御ならせ給ふ也
長承の比○年代記長承元年東北院燒亡尤レ殘又正月

二十二日南方有レ赤光大車輪　考長承四年安元開元安元元年天下抱瘡はやり人おほく死り疑らくは此義なるへし

又元暦二年の比大なゐふる事侍りき○後鳥羽院の御字也異本には元暦三年とあり年代記には文治元年七月九日大地震とあり疑は此義なるへし　東鑑第四元暦二年七月十九日庚子地震良久京都去九日午尅大地震得長壽院蓮花王院最勝光院以下佛閣或顛倒或破損又閑院御殿棟折釜殿以下登屋々少々顛倒占文之所レ推其愼不レ輕云々而源廷尉六條室町亭云門垣云家屋无ニ聊顛頽ニ云々可レ謂ニ不思議ニ歟　漢書曰杜欽云日食地震陽微陰盛也

山崩て川をうつみ○莊子曰夫川竭而谷虚丘夷而淵實

堂舍塔廟○堂殿也屋也正寢也　舍屋也三十五里爲ニ一舍ニ凡師一宿爲レ舍說文市居曰レ舍又曰宮舍也塔說文西域浮屠也　廟宗廟也

いかつち○集成天上造化神之名　又曰雷之發聲物無レ不レ同ニ時應ニ者故曰レ雷冢海集云風雷在レ天而无レ形故假乾位戌亥背屬以配之是以風白首像レ犬雷公首像レ家　搜神記云雷神廟在ニ廣東雷州府之西南八里ニ昔鄉人黨將ニ麻布ニ造ニ雷鼓雷車ニ置ニ廟中ニ有ニ以魚彘肉同食者ニ立爲ニ霆震ニ國史補ニ雷州ニ春夏多雷秋日則伏ニ地中ニ其狀如レ彘人取而食レ之周易動ニ萬物ニ者莫レ疾ニ乎雷ニ

龍ならねは雲にものほらん事かたし○格物論曰龍水物鱗虫之長有レ鱗曰ニ蛟龍ニ有レ翼曰ニ應龍ニ有レ角虬龍无レ角曰ニ螭龍ニ未レ升曰ニ蟠龍ニ然善變化能幽能明能小能大春分而登レ天秋分而入レ川古有ニ畜レ龍者ニ可レ參而梗

只○起語辭又專辭也

ついちのおほひの下に小家を作りてはかなける跡なし事をしてあそひ侍りしか○ついちのおほひの下に六七はかりの子あそひ居て木のきれはしにて小家のかたちを作りはかなけなる跡なし事をして居たるとなり

跡なし事○皇帝の史官蒼頡といひし者沙地に鳥のおり居て足のあと付しを蒼頡みて文字を作りけれは鳥あしかたをけして立けるを蒼頡あしあとかたなしと云しより此詞は始れりと聖德太子の述作神祇八代目に見えたり

ふたつの目○雨眼の義なり
哀にかなしく見侍りしか○は長明か見たりしとなり
子のかなしみにはたけきものも耻をわすれけり○上
に武士のひとり子といへるにあたりて　也萬葉集思レ
子等歌并序云釋迦如來金口正說等思二衆生一如二羅睺
羅一又說愛无レ過レ子至極大聖尙有二愛レ子之心一況乎世
間蒼生誰不レ愛レ子乎　うかはめはこともおもはゆく
りはめはましてしのはゆいつくよりきたりしものそ
まなかひにもとなかりてやすゐしなさぬ　長明は子
をもたさるゆへにかく書り
四大種○地水火風也
變○災異也　莊子曰已化生又化死生物哀レ之人類悲レ
之　素門大經云夫變化爲レ用也在レ天爲レ玄在レ人爲レ
道在レ地爲レ化
齊衡の比かとよ大地震ふりて東大寺の佛のみくし落
なとし○文德帝御宇也年代記曰齊衡二年乙亥五月五
日大地震大佛頭落　元亨釋書曰東大寺者天平十五年
十月十五帝於二近州信樂京一創レ之鑄二盧舍那佛一銅像
長一十六尺帝制二發願疏一普告二天下一初沙門良辨爲レ
帝重勤レ帝營二像宇一反帝夢良辨前身爲二支那比丘一求レ
法赴二天竺一到二流沙一有二大川一辨无レ錢不レ得レ渡淹留
數月辛時レ爲度子憐二辨末法一不レ言二備賃一乃渡レ之辨
先身發レ誓曰願爾來世必登二王位一因レ此主二日域一覺後
帝創二此像一十六年十一月於二甲賀寺一造二像模一帝親引
二其繩一勅二大常一奏レ樂十七年八月移二和州添上郡一改
有レ寺曰二金熟一優婆塞金熟居馬故名持二一執金剛神
像一以レ繩繫レ捉之念修晝夜不レ休一夜像脛放レ光照レ宮
天皇驚怪勅尋レ光至レ此中使以聞乃召二金熟一問欲レ求二
何事一奏曰求二得度一勅許之四事供給時人號二金熟菩
薩一帝以二此地一爲二勝區一遷之熱金剛像今在二肓索院一
天平勝寶元年十月廿四日大像成經レ年三歲改鑄八度
殿高十五丈六尺東西二十九丈南北十七丈東西兩塔各
高二十三丈十二月丁亥帝及聖武上皇幸レ寺禮レ佛此日
八幡大神入レ寺拜レ像
いみしき○いましく〵き義也
いさゝか○聊と書也
月日かさなり○歌にきみか跡月日かさなり年越て後
はたれいひいつる人なし
後は言の葉にかけていひ出る人たになし○西行法師
の歌にこりもせすうき世のやみにまよふ哉身を思は

ぬは心なりけり
身の程にしたかひて心をなやますことく○老子經吾所下以有二大患一者爲中吾有上身
身叶はすして權門のかたはらに居る者はふかくよろこふことはあれ共大にたのしむことあたはすなけきある時も聲をあけてなくことなし進退やすからす立居につけて恐れをのゝくたとへは雀の鷹の巣ちかつくかことし○池亭記有レ樂不レ能下大開レ口而咲上有レ哀不レ能下高擧レ聲而哭上進レ退有レ懼二心神一不レ安譬鳥雀近二鷹鸇一矣
すゝめの鷹の巣に近つけるかことし○鷹は諸鳥のつかさなり鷹のとりえぬ鳥は何鳥にてもなし然共鷹のかひこは雀かわらすしては鷹はえわらさるにより雀を頼むなりその巣による事若つかまれ殺さるへきかとあやうく思ふ様に主君のそはへは氣つかいをするとなり
まつしくして富る家の隣にをるものは朝夕すほきすかたを恥○池亭記云南院貧北院富々者未二必有一レ德貧者亦猶レ有レ耻
出入妻子僮僕のうらやめるさまをみるにも富る家の人のないかしろなるをきくにも○眞宗皇帝勸學文富家不レ用レ買二良田一書中自有二千鍾粟一安居不レ用レ架二高堂一書中自有二黃金屋一門莫レ恨レ无二人隨一書中車馬多如レ簇
もしせはき地にをれは近く炎上する時其害をのかるる事なしもし邊地にあれは往反わつらひおほく盜賊の難はなれかたし○池亭記曰高家北門連堂少屋隔レ壁援レ簷東隣有二火災一西隣不レ免二除炎一南宅有二盜賊一難レ避二流矢一
往反わつらいおほく○往來のわつらひなり
盜賊の難○盜はたからをぬすむ者なり賊は人をころすものなり集成又取非二其謂一之盜一伺レ間而發謂レ竊絕レ理謂二之亂一毀則謂二之賊一
いきほひあるものは貪欲ふかく○法華經諸苦所レ因貪欲爲レ本若レ滅二貪欲一无レ所レ依レ此　三略柔者德也剛者賊也
ひとり身なるものは○韻學集成老而无レ子曰レ獨孟子鰥寡孤獨　琅耶代醉毋レ虐二煢獨一而高明　大傳作レ無レ侮二鰥寡一而畏二高明一

寶あれは恐おほく○老子經曰不レ貴ニ難レ得之貨一使ニ
レ民不レ爲レ盜
貧しければ歎切也○子曰貧而無レ怨難富而无レ驕易
人をはごくめは心恩愛につかはる○陶淵明與レ子書
曰汝旦夕費自給爲レ難今遣ニ此力一助ニ汝薪水之勞一
亦人子也可ニ善過一之
世にしたかへは身くるし○名利酔心濃以酒
したかはねは狂へるに似たり○論語子曰狂而不レ直
侗而不レ愿悾々而不レ信吾不レ知レ之矣
玉ゆらも○玉の聲なり日本紀には玲瓏とかく八雲抄
に玉ゆらしはしと云心なり定家卿の歌に「玉ゆらも
露も涙もとゝまらすなき人こふる宿の秋風「玉響に
昨日の夕見し物をけふのあしたにこふへきものか
わか身○長明か義なり
彼所○鴨のくもん所なり
其後縁かけ身おとろへて忍ふかたゝしけかりしか
は○歌にすみわひて軒端に生りしのふくさしのふか
たゝしけき宿かな
あととむることを得すして○父方の祖父の家をはな
れしとなり古今集歌に「あすか川淵にもあらぬ我宿
も世にかわりゆく物にそ有ける
さらに我心と一の庵をむすふ○得心して作る庵なり
たゝ○唯の字なり集成專辭也通爲ニ語辭一
やを作るに及はす○屋を作るに及はすとなり
たつきなし○たよりなきなり歌に「古畑のうはの立
木に居る鳩のともよふこゑのすごきゆふくれ
白波のをそれ○ぬす人のことなり歌に「風ふけはを
きつしらなみたつた山夜半にや君かひとりゆくらん
春秋の文法に人をふかく罪して盜人と云り　照公二
十年春秋曰秋盜殺ニ衛侯之兄縶一註杜預曰齊豹作而不
義故書曰レ盜所謂求レ名而不レ得ニ齊豹一衛司冠也公孟
縶衛靈公兄也
みしかき運○集成運謂ニ暦數一也
すなはち五十の春を迎へて家を出世をそむけり○大
原の山へ隱遁するなり論語曰五十而知ニ天命一　毘婆
娑論云家者是煩惱因縁夫出家者爲レ滅ニ垢累一故宜ニ遠
離一新古今に[illegible]「思ふなようき世の中を出はてゝやと
るおくにも宿はありけり式部大史廣範の歌に「今そ
みる五十あまりの春をへてわかれしまゝのふる里の
空是より發說にあてゝかけり

捨かたきよすかもなし○執着するたよりもなきとなり　源氏物語うつせみの巻につたへきこゆへきよすかもなくとあるもたよりなき義なり

官録○孝徳天皇大化五年始置ニ百官八省一

大原山○山城國愛宕郡也　和泉式部歌に世をそむくかたはいつこもありぬへし大はらの山はすみよかりきや

六十の露きえかたに更に末葉のやとりをむすへる事あり○素門大經云六十　陰痿氣大衰九竅不レ利下虚上實涕泣俱出

拾遺集歌にみな人の命を露にたとへるは草むらことに置はなりけり後選集に「すみ侘ぬ今はかきりと山里に身をかくすへき宿もとめてん

狩人の一夜の宿を作り老たるかいこの繭をいとなむかことし○池亭記曰行人之造ニ於宿一老蠶之成ニ獨繭一矣其住幾時矣　禮記月令季春之月后妃齊戒躬桑以勤ニ蠶事一々々既登分レ繭稱ニ效功一以共郊廟之服

住家は折々にせはし○長明か家初は大家なりしか後次第に小家になるとなり

よのつねならす○たてやうのたくみ世間につくるとはちかふたるとなり

わつかに方丈たかさは七尺かうち○祖庭事苑云顯王玄策爲レ使ニ西域一至ニ毘耶離一有ニ維摩居士石室一以ニ手版一縱橫量之得ニ十笏一故名ニ方丈室一　長明是をかたとりてたてり

打おほひ○壁おほひなり

つきめことにかけかねをかけたり○方丈の室をとりをきにしたる義なり

外に移さむかためなり○他所へうつさむかためと也

そのあらため造る時いくはくの煩かある○方丈を作るといへとも心苦をさのみせさるはわつかに道具車に二兩ありしゆへなり

用途○用集成使也庸也器用也貨也途路也朽也林也

日野山○山城國宇治郡醍醐東南なり

あとをかくして○新古今に「よをそむく所とかきくおく山は物おもふにそいるへかりける

すのこ○簀子と書り

閼伽棚○閼伽は水の梵語なり

阿彌陀畫像○唐武侍御喪ニ其配一歛ニ其遺服櫛珥鞶一悅于正月旦十五日出陳之抱レ嬰以泣有ニ浮屠一者諭レ之曰

是豈有レ盆吾師云人死則爲レ鬼々自又爲レ人隨レ所レ積ニ
善惡ニ受レ報環復不レ窮也西方有レ佛其土大樂能圖ニ是
佛ニ而禮レ之往生莫レ不レ如レ意韓愈閃而𡰪レ之曰圖ニ西
方萬道之動一以妄寒悲兮慰ニ新魂一阿彌陀經云從レ是西
方過ニ十萬億佛土ニ有ニ世界一名曰ニ極樂一其土有レ佛號ニ
阿彌陀一
眉間の光○觀無量壽經曰爾時世尊放ニ眉間光一其光金
色偏ニ照十方无量世界一
普賢○普賢漢語也梵號ニ邲輸颰陀一此名謂ニ普賢一德禮
周偏名レ普仁慈惠悟曰レ賢是內依ニ證一眞一外成ニ萬德一
也又普賢乘ニ六牙白象一々表ニ六行六牙一喩ニ六根一白表
ニ純淨玄一矣淨土經現前修ニ習普賢一德若レ不レ爾不レ取ニ
正覺一
不動の像○不動明王於ニ中臺大日會一敎ニ令輪身一也故
手持ニ劍索一相貌忿怒示レ之也經曰南浮衆生者三章重
故可レ念ニ不動一
和歌管絃○和歌管絃の書なり
往生要集○天台首楞嚴院源信の作なり
琴○淮南子云神農之初作レ琴也以歸神及ニ其淫一也反ニ
其天心ニ蔞之初作レ樂也皆合ニ六律一而調ニ五音一以通ニ
八風一及ニ其衰一也以ニ沉湎淫康一不レ顧ニ政治一至ニ於滅
法一白虎通琴禁也禁ニ止淫邪一正ニ人心一琴論云伏羲氏
削レ桐爲レ琴面圓法レ天底方象レ地龍池八寸通ニ八風一鳳
池四寸合ニ四氣一琴長三尺六寸象ニ三百六十日一廣六寸
象ニ六合一前廣後狹象ニ尊卑一也上圓下方法ニ天地一也五
絃象ニ五行一大絃爲レ君小絃爲レ臣加ニ文武二絃一以合ニ
君臣之恩一風俗通云琴七絃法ニ七星一也　三禮圖云琴
第一絃爲レ宮次商角羽徵次少宮次少商
琵琶○集成推レ手爲レ琵引レ手爲レ琶　風俗通云長三尺
五寸象ニ三才五行一四絃象ニ四時一　唐書自レ下逆鼓曰レ
琵自レ上順鼓曰レ琶
つかなみ○東次と書り
東の垣に窓をあけて爰にふつくゑを作り出せり○眞
宗皇帝勸學文男兒欲レ遂ニ平生志一六經勤向ニ牕前一讀
よすか○たよりといふ義なり
ひめ垣○竹なとをわり繩のゆいめもかまわすいかに
もようちなる垣を云なり
園とす則もろ〳〵の藥草をうへたり○法華經藥喩品
曰聲門緣覺處山林住最後身聞レ法得ニ是々一名ニ藥草一
名ニ得增長一釋名園植レ果圃植レ木　說文園樹レ果也圃

樹レ菜也選子内親王歌に「かくはかり人の心にまかせたる佛のたねをもとめける哉

かけひ○山から水とる竹とゐなり歌に「おもひやれかけひの水のたえ／＼になりゆくほとの心ほそさを

岩をたゝみて○詩吟春撮外疎簾靜疊石山邊小徑斜名を外山といふ正木のかつら跡をうつめり○新勅選に「外山にはあられふるらし谷しけき正木のかつらあとをうつめり

觀念のたよりなきにしもあらす○續千載集權僧正知辨の歌に「觀念の心しめすは山風も常樂我淨とこそはきこゆれ

春は藤波を見る紫雲のことくして西の方に匂ふ○新古今慈圓の歌に「をしなへてむなしき空と思ひしに藤咲ぬれはむらさきのいろ

夏は時鳥をきくかたらふことにしての山路をちきる○格物論杜鵑一名杜宇一名子規三四月間夜啼達旦其聲哀而吻有レ血淸ニ草木一初聞則有ニ離別之苦一惟田舍侯ニ其鳴一與ニ農事一或以爲啼苦則懸ニ於樹一自謝夠思レ歸樂ニ其不如歸一去　十王經曰一切衆生臨ニ命終時一閻魔法王遣ニ閻魔卒一一名ニ奪魂鬼一二名ニ縛魄鬼一卽縛三魂至ニ門關樹下一樹有ニ荊棘一宛如ニ鋒刄一二鳥栖掌一ニ名无常鳥ニ二名ニ拔目鳥一我汝舊里化成レ鵾鵴示ニ怪語一鳴ニ別都頓宜壽一我汝舊里化成レ鳥々示ニ怪語一鳴ニ阿和薩加一爾時知否七人答曰都不レ覺レ知爾時二鳥忿怒熾成呵ニ七人一曰汝在ニ人間一不レ恐ニ罪業一我爲レ懲レ惡心不レ飮歠レ腦汝在ニ人間一不レ恐ニ罪業一我爲レ懲レ惡心不レ食拔ニ汝眼一拾遺集歌に「しての山越てきつらんほとゝきすこひしき人のうへかたらなん

秋は日くらしの聲耳にみてり空蟬の世をかなしむと聞ゆ○格物論蟬兩翼喙長在ニ腋下一或以爲レ无レ口以レ脇鳴者其蟬有ニ數種一蟪蛄寒螿蛁蟟蝭母蜩范並蟬也蟪蛄小蟬紫色四五月鳴寒螿黑而傴僂九十日鳴甚悽急蛁蟟色靑七月鳴蝭母似ニ螢虫一而小二月鳴蜩范形大而黑亦五月鳴蜀中又一種其脫殼頭上有ニ頭如ニ花冠一謂ニ之蟬花一或謂ニ之蠐螬一所ニ轉丸一久而化或某殼蛻日くらしは夕くれになくなりうつせみはかならすぬけたるからはかりいふにあらす後選集には音をなきくらすうつせみともよめり

冬は雪をあはれむ○古今集歌に「君か思雪とつもらはたのまれす春より後はあらしとおもへは春秋云陰

陽凝爲レ雪大戴禮云天地積陰温則爲レ雨寒則爲レ雪
若念佛ものうく讀經まめならさる時はみつからや
すみ身つからをこたるにさまたくる人もなし又恥へ
き友もなし殊更に無言をせされともひとりをれは口
業をおさめつへしかならす禁戒を守るとしもなけれ
共境界なけれは何に付てかやぶらん○當麻中將姬の
山居の十句に此義あり又緣起に「ひとりのみ深山の
奧そすみよけれ草木か人のうへをいわねは
禁戒○智度論云梵語尸羅秦言ニ性善ニ古師云尸羅此云
レ戒以ニ止レ過防レ非爲レ義ニ　優婆塞戒經云戒者名レ制能
制ニ一切不善法ニ故
若跡のしら波に身をよする朝には岡のやに行かふ舟
をなかめて滿沙彌か風情をぬすみ○拾遺集歌に「世
中を何にたとへん朝ぼらけこき行舟の跡の白なみ長
明道の記にあけほのゝ空になりて勢田の長橋うちわ
たす程にみつ海のはるかにあはれてしかの滿誓沙彌
かひえい山にてこのうみをのそみつゝよめりけんお
もひ出られてこきゆくふねの跡の白波まことにはか
なく心ほそし滿誓此歌僧都の心に叶り惠心僧都俗
姓卜部氏大和國葛木郡人也父政親母淸原氏也

○沙彌　釋氏要覽云此始落髮後之稱謂也梵音訛也此
譯爲ニ息慈ニ謂安息在ニ慈悲之地ニ故又此人息ニ世染之
情ニ以レ慈濟ニ群生ニ故又曰初入ニ佛法ニ多存ニ俗情ニ故
須ニ息レ惡行レ慈也
潯陽の江をおもひやりて○江州郡名琵琶行潯陽江頭
夜送レ客主人下レ馬客在レ船擧レ酒欲レ飮無ニ管絃ニ醉不
レ成レ歡慘將レ別々時茫々浸レ月忽聞ニ水上琵琶ニ主人忘
レ歸客不レ發尋レ聲暗問彈者誰琵琶聲停欲レ語遲
源都督のながれ○管絃の名人なり
秋風の樂○琴の曲なり
水の音に流泉の曲をあやつる○呂氏春秋伯牙鼓レ琴
志在ニ高山ニ鐘子期曰巍々乎志在ニ流水ニ鐘子期曰洋々
乎子期死伯牙絕レ絃破レ琴終レ身不ニ復鼓レ之
藝は是つたなけれは人の耳を悅はしめむとにもあら
す○子曰由之瑟奚爲ニ於丘之門ニ
柴の菴あり○釋事要覽草爲ニ圓屋ニ曰レ菴
小童あり時々來て相とふらふ○池亭記云與レ童乘ニ小
船ニ叩レ舟鼓レ棹　孔子曰結交莫レ結ニ輕薄兒ニ古人結交
惟結レ心今人結交惟結面　孟子大人者不レ失ニ其赤子
之心ニ者也

つれ〳〵○さひしき儀なり大和物語業平の歌に「つれ〳〵といとゝ心のわひしきにけふはとはすしてくらしてんとや「しるへしてまた木のもとにさそひしやおなし山路のちきりなるなん
ぬかこをもり○零餘子と書り花かたと云籠にむしりいるゝ儀なり
すそは○縁輪と書り
○落穂をひろひてほゝくみつくる○伊勢物語に「うちわひておちほひろふときかませは我も田つらにゆかまし物を田井にいつるをほくみつくるといふなり底意は天台三大部に逢レ秋而涅槃之拾ニ落穂ヲ一と云にもとつけり云心は五知の上蒲と云て非法無佛と見て後世を悟すき五知法花經を不レ聞人あり是は佛果の落穂をこほしてゆくなり其跡よりひろゐて成佛の種をもとむるをほくみつくるとは云なり
日うらゝか○長閑なる儀なり
峯によちのほりてはるかにふるさとの空をのそみ○柳文阿東吾士之家世遷徙莫ニ能就ヲ緒其間有ニ大河條山ノ氣蓋闊左吾曉窓哀[illegible]ニ故都ヲ一
木幡山○山城國宇治郡也拾遺集歌に「遠からぬ伏見の里の關守は木幡の峯に君そすへける
鳥羽○山城國なり後拾遺集歌に「霞すは春ともえやは白鳥のとは山松に雪はふりつゝ
羽束師○山城國にあり俊成の歌にもらしても袖やしほれんかすならぬ身をはつかしのもりの雫は
すみ山○山城國なり
笠取○山城國なり頼基の歌に笠とりの山をたのみしかひもなく時雨に袖をぬらしてそゆく
岩間にまうて
石山をおかむ○良辨法師藏王告因赴ニ近州湖西勢多縣ニ一時比良明神辨告曰此地觀音之靈區言已不レ見辨就ニ其石ニ結レ廬安ニ如意輪像ヲ一持誦其後刻ニ丈六大悲像ヲ一藏ニ先像於中ニ一亦造ニ金剛藏王執金剛神ヲ一安ニ左右ニ一其像各八尺當レ夷ニ基趾ヲ一地中得ニ五尺寶鐸ヲ一益爲ニ靈地ト一詳元亨釋書見
粟津か原を分て蟬丸翁か跡をとふらひ○江州に蟬丸の跡あり　無名抄會坂に關の明神と申はむかしのせみ丸の跡をうしなはすしてそこに神となりてすみ給ふなるへしいまもうちすくるたよりにみれはむかしふかくさのみかとの御代にて和琴ならひに良峯宗貞

良少將とてかよひけんほとの事までをもかけにうかひていみしくこそ侍れ　道の記にある人のいはく蟬丸は延喜第四の宮にてましますゆへに此關のあたりを四の宮と名つけたりといへり或說には仁明の時の道人なり常髮そらす世人翁といひ或は仙人といへり三光院御說に人盲目と云は誤れり後選集此歌の詞書に相坂の關にて往來の人をみてと云々

田上川○近江國なり後拾遺集に「夜もすから山あらし吹て衣手のたなかみ川にこほる月かけ

猿丸大夫か墓○無名抄に或人のいはくたなかみ川の下にそつといふ所ありそこに猿丸大夫か墓あり庄のさかひにてそこの卷にかきのせたれはみな人しれり

或系圖

用明天皇聖德太子山背大兄王號猿丸大夫　弓削王

このみをひろひて○寂然法師の歌に「なにとなくなみたの玉やこほれけむ嶺のこのみをひろふ袂に

家つとにす○家のみやけにすると也古今集歌にみてのみや人にかたらんさくら花手ことに折て家つとにせん

窓の月に古人をしのひ○竹林窓寂閑詩書王鑑光前思ニ古人ニ白居易詩三五夜中新月色二千里外故人心信實朝臣の歌に窓「あけて山のはみゆる閨の中に枕そはたて月をまつかな

猿の聲○北山移文山去兮曉猿驚堀川院百首の歌に「朝またきならのかれはをそよ〳〵と外山に出てましらなくなり大進歌に「さらぬたに老ては物のかなしきに夕の猿よ聲なきかせそ

草むらのほたるは遠く眞木の島のかゝり火にまかひ○眞木の島は山城國宇治郡なり玉葉集歌に「木の間よりみゆるは谷のほたるかはいさり火あまのうみへ行かも新古今歌に「はるゝ夜の星か河邊のほたるかもわかすむかたのあまのたく火か

山鳥のほろ〳〵と鳴をきゝて父か母かとうたかひ○玉葉集の歌に「ほろ〳〵と啼山鳥のこゑきけは父かとおもふ母かとおもふ

峯のかせき○峯の鹿なり春日大明神の歌にかせきにのりて白雲のとよませ給ふあり天竺鹿野苑より來朝ありし時のことはなり長明か詞の心は鹿と云ものは人のあたりにいぬものなるか奥山なれは鹿の寄るに付ても都の人家へ程遠きかる事をしるとなり

埋火をかきをこし○續千載集歌に「うつみ火の消ぬはかりをたのめとも猶霜さゆるゆかのさむしろ

ふくろうのこゑ○源氏物語夕かほのまきに風やゝあら〳〵しう吹たるはまして松のひびきふかくきこえて氣色ある鳥のからこゑに啼たるもふくろうこれにやとおほゆ

あからさま○眞字本に白地と書り暫の字をも書りかりそめの儀なり

かりの庵もやゝふる屋となりて軒にはくちはふかく○傳燈鐵石頭和尚歌草菴新破後還將茅草盖

をのつからことの便り○求得ぬたよりにといふ儀なり

やんことなき○源氏きりつほの巻にやんことなきに人あらぬかとあり花鳥餘情にやんことなきとはきはめて上臈の品をいふとあり無止とかけり

其數ならぬたくひ○名も無者の儀なり

たゝかりの庵のみのとけくして○世中は物さはかしきよしなれとも長明かすむかりの庵は物しつかなるとなり北史黄大圜心安閑常言知レ足知レ止蕭然无レ累

よるふす床あり晝居る座あり一身をやとすに不足なし○維摩文殊問疾品爾時長者維摩詰心念今文殊師利與二大衆一倶來即以二神力一空其室內除二去所一有レ及二諸侍者一唯置二一牀一以疾而臥釋氏要覽云方丈寺院之正寢也

かうなはちいさきかいを○蝌蠡小貝と書り伊勢國より來るしゝかひの事なり

みさこは荒磯にゐる則人をおそるゝによりてなり○詩關々雎鳩在二河之洲一

只しつかなるを望とし○心學家見云山者吾心之靜也故仁者樂レ之

愁なきをたのしみとす○韓退之送二李原一序與三其樂二於身一孰若レ無レ憂二於其心一

妻子眷屬の爲につくり○孟子云女子生而願二爲レ之有一レ家　詩小雅宜二爾室家一樂二爾妻奴一　詩學大成李勣疾召二弟弼一宴飲列二子孫于下一謂レ弼曰我見二房杜一皆辛苦立二門戶一亦望レ貽レ後悉爲二不肖子一敗レ之我子孫今以付レ汝有レ不レ加二言行交一非類者𢫨殺以聞毋レ令二後世笑一レ吾猶三吾笑二房杜一也

今の世のならひ此身のありさまともなふへき人もなくたのむへきやつこもなし○世はさはかしく人は雜

亂する折ふしに長明は閑なるすまひにて日を送るゆへに心にかのふ友もなく心にしたかふやつこもなしと云り　蘇子由詩生平事業石葱々未レ信ニ浮名一底空何用ニ槖駝一胡塞外試聽ニ篠軸一語ニ場中

それ人の友たる○論語益者三友損者三友友レ直友レ諒友ニ多聞一益矣友ニ便辟一友ニ善柔一友ニ便佞一損矣

糸竹○糸は琴琵琶の類い竹は笙ひちりき笛等の義なり

賞罰○賜レ有レ功曰レ賞罰説文罰レ之小者從レ刀從レ詈未レ以レ刀有レ賊但持レ刀罵詈則應レ罰會意也司馬法曰賞不レ踰レ時欲下民速得上爲ニ善之利一罰不レ遷レ列欲下民速視上爲ニ不善之害一

只我身をやつことするにはしかす○歸去來辭以レ心爲ニ形役一上には世中の人の家に住わふる儀を云たて是より我身の行なひをいふなり

たゆからすしもあらねと○たやすからすしもあらぬと也

人をしたかへ○人をつかふ義なり

今一身を分て二の用をなす手のやつこ足の乘もの○釋名手須也事業之所レ須也足續也言續レ脛也淮南子曰末世之御雖レ有ニ輕車良馬勁策利鍛一不レ能ニ與之爭先一是故大丈夫恬然無レ思澹然無レ慮以レ天爲レ蓋以レ地爲輿四時爲レ馬陰陽爲レ御乘レ雲陵レ霄與ニ造化一者俱縱レ志舒レ節以馳ニ大區一可ニ以步一而步可ニ以驟一而驟令レ雨師灑レ道使ニ風伯一掃レ塵電以爲ニ鞭策一雷以爲ニ車輪一上游ニ于霄雿之野一下出ニ于無垠之門一劉覽偏照復守ニ以全一經ニ營四隅一還ニ反於樞一故以爲レ蓋則無レ不レ覆也以レ地爲レ輿則無レ不レ載也四時爲レ馬則無レ不レ使也陰陽爲レ御則無レ不レ備也是故疾而不レ搖遠而不レ勞四支不レ動聰明不レ損而知ニ八紘九野之形埒一者何也執ニ道要之柄一而游ニ無窮之地一是故天下之事不レ可レ爲也

常にありきつねに動は養性なるへし○佛説醫經久座病縁　素問内經上古聖人之敎レ下也皆謂レ之虛邪賊風避レ之有レ時恬憺虛無眞氣從レ之精神内平病安從來

藤の衣麻のふすま○六韜曰鹿裘禦レ寒布衣掩レ形徐曰上曰レ衣下曰レ裳世本云胡曹作レ衣白虎通衣者隱也淮南子云凡人之所ニ以生一者衣與レ食也今因レ之冥室之中雖レ養レ之以ニ芻豢一衣之以ニ綺繡一不レ能レ樂也以レ目之無レ見耳之無レ聞穿隙穴見ニ雨零一則快然而嘆レ之況開レ戸發レ牖從ニ冥々一見ニ炤々一乎見ニ炤々一猶ニ尙肆然

而責二又況出室坐堂見二日月光一乎曠然而樂又況登二大山一履二后封一以望二八荒一視レ天都若レ蓋河若レ帶又況萬物在二其間一者乎其爲レ樂豈不レ大哉

かくともしければをろそかなれとも猶味をあまくす○往生要集云當觀二美味一如二毒藥一以レ智惠二水灑一令二淨爲二存二此身一雖レ聽レ食勿レ貪二色味一長二憍慢一　論語賢哉回也一簞食一瓢飮在二陋巷一人不レ堪二其憂一回也不レ改二其樂一

命は天運にまかせておします○池亭記云壽夭付二乾坤一漢高祖疾甚呂后迎二良醫一々入見上問曰疾可レ治醫曰可レ治上慢罵之曰吾命在レ天雖二扁鵲一何益遂不レ使レ治レ病

身をは浮雲に准へて頼ます○白樂天詩身似二浮雲一

一期のたのしひはうたゝねの枕の上○論語曲レ肱而枕レ之在二樂其中一

生涯ののぞみは折々の美景に殘れり○四季のうつりかわる美景を見て忘れぬと也

三界はたゝ心一つなり○華嚴經三界唯一心々外無二別法一心佛及衆生是三無二差別一

心もし安からずは牛馬七珍もよしなく○往生要集云信戒施聞レ惠二慙愧一不レ放レ逸如レ此七法名二聖財一眞實无レ比矣尼說超二越世間一衆珍寶知レ足雖レ貧可レ名レ富有レ財多欲是名レ貧若三豐財業增二諸苦一如二龍多首益瞋レ毒

さびしき住ゐ一間の庵○定家の歌に「さびしさは思ひしまゝの宿なから猶きゝわふる軒のまつかせ

乞食○大論云比丘名二乞食一清淨活命故淨名疏曰或言有レ翻或言無レ翻言有レ翻者翻云二除饉一衆生薄福在レ因无法自資得レ報多所二饉乏一出家戒行是良福田能生レ物善除二因果之饉一

俗塵に着する事をあはれふ○出家せぬ事を憐ふ也

魚は水にあかす魚にあらされは其心をしらす○長明發心集仁和寺西尾上人依二我執一燒身し書をしるして扱其末句に惣して人の心の中たやすく餘所にはかりかたき物なりされは魚にあらされは水の樂をしらすと云も此心なるへし

抑○字彙云反語辭又亦然之辭也又謹密貌

三途○三界の迷闇也餓鬼修羅畜生是を三途と云經云一切之惡業三途之因

佛の人を敎たまふおこりは○四十二章經佛言出家沙

門者斷レ欲去レ愛識自心源達ニ佛理一悟ニ無爲一法內无レ
所レ得レ外所レ求レ心不レ繫レ道亦不レ結レ業无念无作非修
非木歷ニ諸位一而自崇最名之爲レ道
草の庵を愛するも科とす〇初學記佛以ニ慈悲一爲レ室
閑寂に着するも障なるへし〇止觀云觀レ法雖レ正着レ
心同レ邪
いかゝ用なきたのしみをのへてむなしくあたらん時
を過さむ〇濁世のたのしみをのへて正理をもしらす
にむなしくあたら時を過さん事をとなり淮南子ニ曰
聖人不レ貴ニ尺之璧一而重ニ寸之陰時一難レ得而易レ失也
みつから心にとひていはく〇民部卿顯賴歌に「ひと
りのみ尋いるさの山ふかみまことの道をこゝろにそ
とふ
世をのかれて山林にましはるは心をおさめ道をゑん
ためなり〇小陰々レ山大陰陰レ市
汝か姿は聖に似て心はにこりにしめり〇姿は沙門に
似て心は五濁にそむとなり
住家は淨名居士の跡をけかせりといへとも〇舍衞國
有ニ維摩故宅一飜譯名義集付曰秦言ニ淨名一乘裕記云淨
即眞身名即應身眞即所證之理應即所現之身生曰此
云ニ无垢一稱ニ其晦迹一五欲超然无レ染淸名遐布故致レ斯
周利槃特〇袾宏曰此云ニ繼道一一云ニ大路邊一僅特ニ半
偈一得悟證果鈔繼道者其母孕時還レ家於ニ中路一誕レ子
繼ニ續於途路之間一故云ニ繼道一大路者母生ニ二子一皆於
ニ路邊一言レ大以別レ小也半偈者出家愚暗久無レ所レ解兄
先入レ道怪ニ其無知一遣レ人歸レ俗倚ニ佛寺門一嗟嘆流涕
佛憐而錄レ之使レ誦ニ掃箒一每日誦レ之記レ一忘レ一久之
忽悟垢淨惑除得ニ阿羅漢一
貧賤の報のみつから惱ます〇因果經佛告ニ阿難一如ニ
汝所ニ問受レ報不レ同者由ニ先世用レ心不レ等是以所レ受
千差萬別今身端改者從ニ忍辱中一來爲レ人醜隨者從ニ瞋
恚中一來爲レ人貧窮者從ニ慳貪中一來
後京極の歌に過きにける世々にや罪をかさねけむむ
くひかなしききのふけふかな
心さらに盡ることなし〇大僧正慈鎭の歌に「何處に
もわか法ならぬのりやあると空吹風にとへと答へぬ
念佛〇唐宣宗問ニ弘辨禪師一令ニ人念佛一如何對曰如來
出世爲ニ天人一隨ニ根器一而說法爲ニ上根者一開ニ最上乘
頓悟一至ニ理中下者一未レ能ニ頓曉一是以爲ニ韋提希一權ニ
開十六觀門一令ニ念レ佛生ニ於極樂一佛藏經念佛品曰見

无所有名爲ニ念佛ト見ニ諸法實相ト名爲ニ念佛ト无レ有ニ分別ト无レ取无レ捨是眞念佛也

建暦二年○順德院御宇也

蓮胤○長明か法名也

月かけは入山の端もつらかりき絶ぬひかりをみるよしもかな○世塵のはなれぬ心にて月影をみる時はさやけしといへと山の端にかゝりぬれはくらし又如來心にしてみる時は法性不生不滅にして娑婆即寂光土なれは豈西方極樂世界超日月光佛の光を別にせんや是はこれ理の說なり彼蓮胤は惠心院沙門源信のなかれにもとつきぬれは只南無阿彌陀佛の功德にて此國の月影にかわりし彼國の彌陀のひかりをみるよしもかなとなり阿彌陀經義疏曰極樂國光明常照旣無ニ日月ト則無ニ晝夜ト須ニ此方機ト且言六時准大本中彼以ニ蓮開鳥鳴ト爲レ曉蓮合鳥棲爲レ夜

室松岩雄
保持照次
井上頼教　校

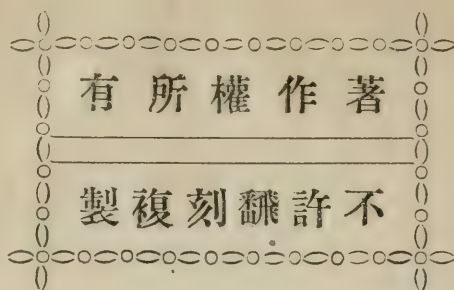
明治四十二年八月二十日印刷
明治四十二年八月廿三日發行

定價金參圓

編輯者　室松岩雄
東京市麴町區飯田町五丁目八番地

發行者　三里半七
東京市神田區三崎町三丁目一番地

印刷者　小西幸吉
東京市神田區三崎町三丁目一番地

印刷所　日本印刷株式會社
電話本局千八百四十番

東京市麴町區飯田町五丁目八番地
發行所　國學院大學出版部
電話番町五百五十八番